

九州横断自動車道関係(9)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 碑 石 遺 跡

1989年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書 第91集  
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)

# 礫 石 遺 跡

つぶて いし A 遺 跡  
**礫 石 A 遺 跡**

つぶて いし B 遺 跡  
**礫 石 B 遺 跡**

く ち い  
久 池 井 C 遺 跡  
**久池井 C 遺 跡**

く ち い いっぽんまつ  
久 池 井 一 本 松 遺 跡  
**久池井一本松遺跡**

1989年3月

佐賀県教育委員会



山麓部一帯は佐賀平野古代文化の活躍

### 砾石A・B遺跡

佐賀平野北部山麓には弥生～古墳時代の遺跡が濃密に分布する。

砾石遺跡などがある大和町には古墳時代に有力な前方後円墳が多く造られ、奈良時代に肥前國府が置かれる。



A遺跡の弥生前期墓地



B遺跡の支石墓群

砾石A・B遺跡では縄文時代晚期～弥生時代前期の支石墓系統の埋葬が40基以上検出され、支石墓の系譜、墓地形成、集団の規模、土器編年等の問題に重要な資料を提供した。



礫石A・B両遺跡とも一定の墓域の中  
で小児墓と成人墓が群を別にする。

小児墓の下部構造は大型壺に煤の付い  
た甕を被せた壺棺、一方成人墓の下部構

造は石蓋土壙で、その上に支石・上石を載  
せる。石蓋と上石との空間には土器等を  
副葬する。殆どが上部構造を破壊されて  
いるが、いずれも支石墓系統とみられる。





礪石A・B遺跡の支石墓壺棺



B遺跡支石墓供獻土器



壺棺にみられる丹塗の発色の違い

礪石A・B遺跡の支石墓系統埋葬から出土した小児用壺棺はすべて夜白式系で、計30基分をこえる。

礪石A・B遺跡では、その他に弥生時代の石棺墓・甕棺墓群や古墳14基、奈良～平安時代を中心とする土墳墓・木棺墓21基などを検出した。

B遺跡S T04古墳では古墳設計溝と、祭祀を伴う築造の実態が知られる。



B遺跡古墳群。甕棺墓群



B遺跡S T04古墳設計溝



久池井C遺跡



久池井C遺跡S BM墓穴

礫石A遺跡の東側にあり、弥生前期の貯蔵堅穴のほか、後期の石棺墓・豪棺墓・土壙墓などを検出した。



久池井一本松遺跡・櫻石遺跡(手前)全景

久池井一本松遺跡

古墳9基、土壙墓・木棺墓27基ほかを検出した。

とくに土壙墓・木棺墓群は櫻石A遺跡とともに、古墳時代から奈良・平安時代への墓制の変遷と集団の動向を窺ううえで重要である。



S PIEK遺跡の土器断面



S PIEK古墳墳丘断面



S PIEK墓

## 序

この報告書は佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託により、昭和56・57年度に実施した佐賀郡大和町礫石遺跡・久池井C遺跡・久池井一本松遺跡の発掘調査報告であります。

佐賀平野山麓部一帯は原始・古代以来きわめて多くの遺跡が密集し、ことに大和町周辺は大型前方後円墳や肥前國府跡の出現にみられるように、早くから文化的あるいは政治的中心として重要な役割を担った地域にあたります。その中にあって、今回報告するこれらの遺跡は主に弥生時代から平安時代にかかるもので、単に一地域の問題にとどまらない重要な内容を多く含むものであり、本書が今後の関連する調査・研究に大いに活用されることを願う次第であります。

発刊にあたり、長期にわたる多難な発掘調査を通じて多大な御協力をいただいた地元の方々並びに日本道路公団に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成元年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長 志岐常文

## 例　　言

1. 本書は九州横断自動車道建設に伴い、昭和56・57年度に実施した佐賀郡大和町大字久池井所在の疊石A遺跡・疊石B遺跡・久池井C遺跡並びに久池井一本松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受け、佐賀県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては発掘作業その他全般にわたり地元の方々の御助力、御便宜を得た。記して感謝する次第である。
4. 出土遺物に関し、疊石A遺跡出土土師器のヘラ描き文字については原秀三郎氏（静岡大学教授）、倉住靖彦氏（福岡県立九州歴史資料館）、疊石A・B遺跡の壺棺等の丹および青銅器の成分分析については白井一郎氏（佐賀県工業試験場）から貴重な御教示をいただいた。
5. 本書の執筆分担は次のとおりである。
  - 疊石A遺跡III-1 旧石器・縄文時代石器、疊石B遺跡III-1 縄文時代石器、III-2 弛生時代石器、久池井一本松遺跡III-1 旧石器・縄文時代石器……藤井伸幸（現県立致遠館高校教諭）
  - 疊石B遺跡III-1 縄文時代早・前期土器……多々良友博（現県立佐賀北高校教諭）
  - その他 田平徳栄

なお、本書の執筆・作成にあたっては高島忠平・東中川忠美・森田孝志・徳永貞紹ら各氏をはじめ多くの方々から助言・協力を得た。
6. 報告書作成にあたっての整理作業分担は次のとおりである。
  - 遺物復元整理……江口友惠・室岡勝代・大家リュウ子・田中ハルミ・中村三千代・藤瀬静香・前田敬子・古賀尚子
  - 遺物実測……松永節子・青木瑞枝・野口百合子・山口成子・武藤直子・鹿子知美・岩井祥子・内村江梨子・友田美和子・末吉由紀子・吉田雅子・百田さつき・浜野里美・藤田由紀・兵動美紀
  - 整図……橋渡みづえ・岩井祥子・兵動美紀・門司弘美・大塚利香子・野田典子・馬場理知
  - 遺物写真撮影……松尾直子
  - 写真現象焼付……古賀栄子
7. 本書で扱った遺構・遺物図面および写真等の調査記録類、並びに出土遺物は佐賀県教育委員会が保管する。
8. 本書の編集は田平徳栄が担当し、百崎正子が協力した。

## 凡例

1. 遺跡の略号は次のとおりである。

礫石A遺跡 T U B-A 矶石B遺跡 T U B-B  
久池井C遺跡 K T T-C 久池井一本松遺跡 K I P

2. 遺構の分類記号は既刊の九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書に従い、次のとおり標記する。

S B : 建物跡・住居跡・竪穴 S A : 支石墓 S J : 壱棺墓・壹棺墓  
S C : 石棺墓 S P : 土壙墓・木棺墓 S K : 土壙

3. 各遺構番号は発掘調査時の番号をそのまま用いた。本書の中で必要があって各遺跡ごとに遺構を略記する場合は、混乱をさけるため次のとおりとする。

A : 矶石A遺跡 B : 矶石B遺跡 C : 久池井C遺跡  
(例) B36……磧石B遺跡 S A 36支石墓

4. 遺構図に用いた方位は全て磁北である。

5. 遺物図番号は各遺跡ごとに、土器や石器等の種別に関係なく一連番号とし、また図版の遺物番号に共通する。

6. 遺構図中で、出土状況が明らかな遺物については、できるかぎり遺物図番号を付記した。

7. 現在、佐賀県教育委員会が保管する当該遺物および実測図等の検索・照合に便を期し、図示した各遺物には、一部を除き、7桁または8桁数字の遺物登録番号(遺物実測番号)を表あるいは図に付記した。

8. 須恵器・土師器の時期比定は、原則として須恵器については田辺昭三「須恵器大成」(角川1981)、奈良時代以降の土師器については福岡県大宰府周辺調査の編年に依り、あわせて蒲原宏行編「金立開拓遺跡」を参考にした。

9. 古墳の石室の編年および年代については蒲原宏行編「金立開拓遺跡」(佐賀県教育委員会1984)を参考にした。

10. 時代区分に關し、本書では夜臼式土器の段階の遺構・遺物を便宜上、弥生前期に含めて説明し、その位置付けについては総括で述べる。また、古墳時代の終わりを8世紀初とし、以降を奈良時代に続ける。

11. 各遺構の計測方法は次のとおりである。

- ・石棺・横穴式石室の法量は床面で、また竪穴住居跡・土壙墓・土壙等は検出面で、原則として縦横それぞれ中央で測る。
- ・墳丘径は検出面での周溝内側で測る。また墳丘高は旧地表あるいは周溝検出面から測る。

# 目 次

第1章 調査の概要 .....	1
1. 調査の経過.....	2
2. 調査組織.....	6
第2章 地理的・歴史的環境.....	7
第3章 遺跡各説.....	15
<b>礎石A 遺跡</b>	
I. 遺跡の概要.....	18
II. 遗構	
1. 弥生時代         (1) 壺棺墓・甕棺墓.....	28
(2) 土壙墓.....	40
2. 古墳時代         (1) 古墳.....	46
(2) 土壙墓.....	60
(3) 土壙.....	62
3. 奈良・平安時代 (1) 土壙墓・木棺墓.....	63
III. 遺物	
1. 旧石器・縄文時代 (1) 石器.....	74
2. 弥生時代         (1) 土器         a) 壺棺・甕棺.....	77
b) 供獻土器.....	93
c) その他の土器.....	94
(2) 玉類.....	102
3. 古墳時代         (1) 須恵器.....	104
(2) 土師器.....	110
(3) 墳輪.....	114
(4) 玉類.....	114
(5) 鉄器類および青銅製品.....	116
4. 奈良・平安時代 (1) 土師器.....	119
(2) 刀子・釘.....	121

碧石咀遺跡

I. 遺跡の概要		124
II. 遺構		
1. 弥生時代	(1) 支石墓	a) 壈棺を下部構造とするもの..... 128 b) 土壙を下部構造とするもの..... 141
	(2) 壈棺墓..... 150	
	(3) 石棺墓..... 152	
	(4) 土壙..... 166	
2. 古墳時代	(1) 古墳..... 168	
	(2) 土壙墓..... 181	
III. 遺物		
1. 繩文時代	(1) 早・前期の土器..... 182	
	(2) 石器..... 215	
2. 弥生時代	(1) 前期の土器	a) 埋葬に用いられた土器..... 218 b) 供獻土器..... 234 c) S K21土壤出土土器..... 239 d) その他の土器..... 240
	(2) 中・後期の土器	a) 壈棺..... 246 b) その他の土器..... 246
	(3) 石器..... 250	
	(4) 鏡..... 251	
	(5) 鉄器..... 251	
	(6) 玉類..... 251	
	(7) 紡錘車..... 253	
3. 古墳時代	(1) 須恵器..... 253	
	(2) 土師器..... 263	
	(3) 鉄器..... 266	

久池井C遺跡

I. 遺跡の概要	268
II. 遺構	
1. 弥生時代	
(1) 墓穴	272
(2) 穂積墓	275

1. 弥生時代	(3) 石棺墓.....	276
	(4) 土壙墓.....	278
	(5) 土壙.....	284
2. 平安時代.....		284
III. 遺物		
1. 弥生時代	(1) 土器.....	285
	(2) 鉄器.....	294
2. 平安時代.....		294

#### 久池井一本松遺跡

I. 遺跡の概要.....		298
II. 遺構		
1. 古墳時代	(1) 古墳.....	302
	(2) 土壙墓.....	317
2. 奈良・平安時代	(1) 土壙墓・木棺墓.....	317
	(2) 土壙および竪穴.....	332
III. 遺物		
1. 旧石器・縄文時代	(1) 石器.....	334
2. 弥生時代	(1) 縄文晩期～弥生前期の土器.....	337
3. 古墳時代	(1) 須恵器.....	342
	(2) 土師器.....	345
	(3) 墓輪.....	346
	(4) 鉄器.....	348
4. 奈良・平安時代	(1) 土師器.....	349
	(2) 鉄器.....	355
	(3) 紡錘車.....	357
	(4) 玉類.....	357

#### 第4章 総 括

1. まとめ.....		360
2. 磚石遺跡の弥生前期土器.....		362
3. 磚石遺跡における弥生前期墓地の形成と支石墓の特徴.....		391
4. 古墳群から土壙墓・木棺墓群への変容.....		403

## 挿 図 目 次

調査の概要	Fig. 1 九州横断道路線図(佐賀大和インター付近) .....	2
	〃 2 各遺跡発掘区位置図.....	4
地理的・歴史的環境	Fig. 3 遺跡位置図.....	8
	〃 4 佐賀平野地形図.....	9
	〃 5 周辺遺跡分布図.....	12
螺石A遺跡	Fig. 6 I・II・III区遺構配置図.....	20
	〃 7 IV・V区遺構配置図.....	24
	〃 8 IV区埋葬遺構配置図.....	27
	〃 9 S J 27壺棺墓.....	29
	〃 10 S J 28・S J 30・S J 32壺棺墓, S J 31壺棺墓.....	31
	〃 11 S J 34・S J 35・S J 36・S J 40壺棺墓.....	33
	〃 12 S J 33・S J 41壺棺墓.....	35
	〃 13 S J 42・S J 43・S J 44壺棺墓, S J 45壺棺墓.....	37
	〃 14 S P 37・S P 38・S P 48土壤墓.....	39
	〃 15 S P 46土壤墓.....	41
	〃 16 S P 51・S P 52・S P 53・S P 54土壤墓.....	43
	〃 17 S P 55・S P 56・S P 57土壤墓.....	45
	〃 18 S T 01古墳石室.....	47
	〃 19 S T 02古墳石室閉塞状況.....	48
	〃 20 S T 02古墳石室.....	49
	〃 21 S T 03古墳石室閉塞状況.....	50
	〃 22 S T 03古墳石室.....	51
	〃 23 S T 04古墳石室閉塞状況.....	52
	〃 24 S T 04古墳石室.....	53
	〃 25 S T 05古墳石室.....	54
	〃 26 S T 06古墳石室.....	56
	〃 27 S T 07古墳石室.....	57
	〃 28 S T 50古墳石室.....	59
	〃 29 S P 10・S P 12・S P 14土壤墓.....	61
	〃 30 S P 09・S P 11・S P 13土壤墓.....	65
	〃 31 S P 15木棺墓・S P 16土壤墓.....	66
	〃 32 S P 17・S P 18・S P 19土壤墓.....	68
	〃 33 S P 20・S P 21・S P 22土壤墓.....	69
	〃 34 S P 23・S P 24・S P 25土壤墓.....	71
	〃 35 S P 26・S P 39・S P 59土壤墓.....	73

裸石 A 遺跡 Fig.36	石器 (1) .....	75
// 37	石器 (2) .....	75
// 38	石器 (3) .....	76
// 39	S J 27壺棺.....	78
// 40	S J 28・S J 29・S J 30壺棺.....	79
// 41	S J 31・S J 33壺棺.....	81
// 42	S J 32・S J 34壺棺.....	83
// 43	S J 35・S J 36壺棺.....	85
// 44	S J 40・S J 41壺棺.....	87
// 45	S J 42・S J 43壺棺.....	89
// 46	S J 44壺棺・S J 45壺棺.....	91
// 47	その他の壺棺.....	92
// 48	IV区埋葬供獻土器.....	94
// 49	縄文晩期～弥生前期土器 (1) .....	95
// 50	縄文晩期～弥生前期土器 (2) .....	96
// 51	縄文晩期～弥生前期土器 (3) .....	97
// 52	IV区埋葬遺構出土玉類.....	103
// 53	古墳出土須恵器 (1) .....	108
// 54	古墳出土須恵器 (2) .....	109
// 55	土壤墓出土須恵器.....	110
// 56	古墳出土土師器.....	111
// 57	古墳出土埴輪.....	115
// 58	古墳出土玉類.....	116
// 59	古墳・土壤墓出土鉄器および青銅製品.....	117
// 60	古墳・土壤墓出土棺釘.....	118
// 61	土壤墓・木棺墓出土土師器.....	121
裸石 B 遺跡 Fig.62	遺構配置図.....	125
// 63	S T 04古墳下支石基配置図.....	127
// 64	S A22・S A23・S A24支石基.....	131
// 65	S A25・S A27支石基.....	133
// 66	S A30・S A35支石基.....	135
// 67	S A36・S A38支石基.....	137
// 68	S A37支石基.....	139
// 69	S A41・S A42支石基.....	140
// 70	S A26支石基.....	142
// 71	S A29支石基.....	143
// 72	S A31支石基.....	145
// 73	S A32・S A34・S A43支石基.....	147
// 74	S A33支石基.....	149
// 75	S A44・S A45支石基.....	150

釋 石 B 遺 跡 Fig. 76 S J13・S J14變棺墓.....	151
// 77 S C05石棺墓.....	153
// 78 S C06石棺墓.....	155
// 79 S C07石棺墓.....	156
// 80 S C08石棺墓.....	158
// 81 S C09石棺墓.....	159
// 82 S C10石棺墓.....	161
// 83 S C11石棺墓.....	163
// 84 S C12石棺墓.....	164
// 85 S C19石棺墓.....	165
// 86 S K21土壤.....	166
// 87 S K16土壤.....	167
// 88 S T02古墳石室閉塞狀況.....	169
// 89 S T02古墳石室.....	170
// 90 S T03古墳石室.....	171
// 91 S T03古墳石室閉塞狀況.....	172
// 92 S T04古墳墳丘.....	173
// 93 S T04古墳墳丘斷面圖.....	174
// 94 S T04古墳石室.....	175
// 95 S T04古墳石室閉塞狀況.....	176
// 96 S T04古墳墳丘下土器出土狀況.....	177
// 97 S T04古墳設計復元圖.....	179
// 98 S T18古墳石室.....	180
// 99 S P17土壤墓.....	181
// 100 繩文早・前期土器（1）.....	205
// 101 繩文早・前期土器（2）.....	206
// 102 繩文早・前期土器（3）.....	207
// 103 繩文早・前期土器（4）.....	208
// 104 繩文早・前期土器（5）.....	209
// 105 繩文早・前期土器（6）.....	210
// 106 繩文早・前期土器（7）.....	211
// 107 繩文早・前期土器（8）.....	212
// 108 繩文早・前期土器（9）.....	213
// 109 繩文早・前期土器（10）.....	214
// 110 繩文時代石器（1）.....	216
// 111 繩文時代石器（2）.....	217
// 112 S A22・S A23支石墓出土壺棺.....	220
// 113 S A24・S A25支石墓出土壺棺.....	222
// 114 S A27・S A35支石墓出土壺棺.....	225
// 115 S A36・S A37支石墓出土壺棺.....	227

磯石 B 遺跡 Fig. 116	S A38・S A41支石墓出土壺棺	229
// 117	S A30・S A42支石墓出土壺棺	230
// 118	S A39・S A40支石墓出土壺棺	231
// 119	S T04古墳墳丘内出土壺棺（1）	232
// 120	S T04古墳墳丘内出土壺棺（2）	234
// 121	支石墓供獻土器（1）	237
// 122	支石墓供獻土器（2）	238
// 123	S K21土壤出土土器	240
// 124	繩文晚期～弥生前期土器（1）	244
// 125	繩文晚期～弥生前期土器（2）	245
// 126	S J13・S J14壺棺	247
// 127	S T04墳丘内・S C05・S K16出土土器	249
// 128	弥生時代石器	250
// 129	鏡及び鉄器類	252
// 130	玉類及び表採訪鍵車	253
// 131	古墳・土壤墓出土須恵器（1）	259
// 132	古墳・土壤墓出土須恵器（2）	260
// 133	S T04古墳墳丘下出土土器	261
// 134	南外区古墳付近表採土器	262
// 135	古墳出土土師器	265
// 136	古墳出土鐵器	266
久池井 C 遺跡 Fig. 137	I 区遺構配置図	269
// 138	II 区遺構配置図	270
// 139	III 区遺構配置図	271
// 140	S B01竪穴	273
// 141	S B14竪穴	274
// 142	S J03壺棺墓	275
// 143	S C04石棺墓	276
// 144	S C09石棺墓	277
// 145	S C11石棺墓	279
// 146	S C12石棺墓	280
// 147	S P05・S P07・S P10土壤墓	281
// 148	S P06土壤墓	282
// 149	S P02土壤墓・S K15・S K16土壤	283
// 150	S B13住居跡	284
// 151	S B01竪穴出土土器（1）	289
// 152	S B01竪穴出土土器（2）	290
// 153	S B14竪穴出土土器（1）	291
// 154	S B14竪穴出土土器（2）	292
// 155	S J03壺棺	293

久池井C遺跡	Fig. 156	S P07土壤墓出土鉄劍.....	294
	// 157	S B13住居跡出土土器.....	295
久池井一本松遺跡	Fig. 158	遺構配置図.....	299
	// 159	S T01古墳壇丘.....	303
	// 160	S T01古墳壇丘断面図.....	304
	// 161	S T01古墳石室.....	305
	// 162	S T02古墳石室.....	307
	// 163	S T03古墳石室.....	309
	// 164	S T34古墳石室.....	310
	// 165	S T35古墳.....	311
	// 166	S T41古墳石室.....	312
	// 167	S T42古墳石室.....	313
	// 168	S T44古墳石室.....	315
	// 169	S T45古墳石室.....	316
	// 170	S P38土壤墓.....	317
	// 171	S P06土壤墓・S B16竪穴.....	319
	// 172	S P07・S P08・S P09・S P12土壤墓.....	321
	// 173	S P13・S P14・S P17・S P18土壤墓.....	323
	// 174	S P15・S P25土壤墓.....	324
	// 175	S P19・S P21・S P23・S P24土壤墓.....	326
	// 176	S P20土壤墓.....	327
	// 177	S P26・S P27・S P28・S P29土壤墓.....	328
	// 178	S P30土壤墓.....	329
	// 179	S P33・S P36・S P37土壤墓.....	330
	// 180	S P43木棺墓.....	331
	// 181	S K10・S K11土壤.....	333
	// 182	縄文時代石器（1）.....	335
	// 183	縄文時代石器（2）.....	336
	// 184	縄文晩期～弥生前期土器.....	341
	// 185	古墳・土壤墓出土須恵器.....	344
	// 186	古墳出土土師器.....	346
	// 187	S T01古墳出土埴輪.....	347
	// 188	古墳出土鉄器.....	348
	// 189	S T01古墳出土鉄刀.....	349
	// 190	土壤墓・木棺墓出土土師器（1）.....	353
	// 191	土壤墓・木棺墓出土土師器（2）.....	354
	// 192	土壤・竪穴出土土師器.....	355
	// 193	土壤墓・木棺墓出土鉄器および紡錘車.....	356
	// 194	S P33土壤墓出土垂飾.....	357
總括	Fig. 155	礎石A・B遺跡大型壙（I期～IV期）縦年図.....	365

括 Fig. 196 碑石A・B遺跡墳（I期～IV期）編年図	373
// 197 碑石B遺跡・久池井C遺跡出土土器（V期）分類図	379
// 198 碑石A遺跡塚棺（VI期）編年図	381
// 199 碑石A・B遺跡出土供獻小壺等編年図	383
// 200 碑石A遺跡IV区墓地の形成過程	393
// 201 碑石B遺跡支石墓群の形成過程	395
// 202 I期～IV期埋葬遺構の頸位および塚棺埋置角度	396
// 203 久保泉丸山遺跡支石墓群	398
// 204 碑石B遺跡支石墓（成人人土壙）法量図	399
// 205 土壙墓・木棺墓頭位	403
// 206 碑石A遺跡および久池井一本松遺跡の土壙墓・木棺墓法量図	404
// 207 碑石A遺跡の土壙墓・木棺墓群構成	407
// 208 久池井一本松遺跡の土壙墓・木棺墓群構成	409
// 209 金立開拓遺跡遺構分布	411

## 表 目 次

砾石 A 遺跡	Tab. 1	IV区埋葬遺構一覧表.....	28
	〃 2	古墳一覧表.....	46
	〃 3	土壤墓・木棺墓一覧表.....	63
	〃 4	IV区埋葬供獻土器一覧表.....	93
	〃 5	繩文晚期～弥生前期土器一覧表.....	98
	〃 6	古墳・土壤墓出土須恵器一覧表.....	104
	〃 7	古墳出土土師器一覧表.....	112
	〃 8	土壤墓・木棺墓出土土師器一覧表.....	119
砾石 B 遺跡	Tab. 9	支石墓一覧表.....	129
	〃 10	石棺墓一覧表.....	165
	〃 11	古墳一覧表.....	168
	〃 12	繩文早・前期土器一覧表.....	187
	〃 13	支石墓供獻土器一覧表.....	235
	〃 14	S K21土壤出土土器一覧表.....	239
	〃 15	繩文晚期～弥生前期土器一覧表.....	241
	〃 16	弥生中・後期土器一覧表.....	248
	〃 17	古墳および土壤墓出土須恵器一覧表.....	254
	〃 18	S T04古墳丘下出土土器一覧表.....	257
	〃 19	南外区古墳付近表採土器一覧表.....	258
	〃 20	古墳出土土師器一覧表.....	263
久池井 C 遺跡	Tab. 21	遺構一覧表.....	272
	〃 22	S B01・S B14竪穴出土土器一覧表.....	286
	〃 23	S B13住居跡出土土器一覧表.....	296
久池井一本松遺跡	Tab. 24	古墳一覧表.....	302
	〃 25	土壤墓・木棺墓一覧表.....	317
	〃 26	繩文晚期～弥生前期土器一覧表.....	338
	〃 27	古墳および土壤墓出土須恵器一覧表.....	342
	〃 28	古墳出土土師器一覧表.....	345
	〃 29	土壤墓・木棺墓出土土師器一覧表.....	350
總括	Tab. 30	砾石 A・B 遺跡の大型壺（I期～IV期）計測表.....	368
	〃 31	砾石 A・B 遺跡の大型壺計測指數表.....	370
	〃 32	砾石 A・B 遺跡の壺（I期～IV期）計測表.....	374
	〃 33	砾石 A 遺跡 IV区の埋葬遺構時期区分.....	392
	〃 34	砾石 B 遺跡の支石墓時期区分.....	394
	〃 35	古墳・土壤墓・木棺墓編年表.....	406

## 図版目次

- 砾石 A 遺跡 PL. 1 砾石遺跡周辺航空写真  
II 2 I・II・III区全景  
II 3 IV・V区全景  
II 4 I・II区, II区, III区  
II 5 IV区弥生埋葬遺構群  
II 6 IV区弥生埋葬遺構群北側, IV区土壤墓群西側  
II 7 S J 27壺棺墓, S J 28壺棺墓, S J 30壺棺墓  
II 8 S J 31壺棺墓, S J 32壺棺墓, S J 33壺棺墓, S J 34壺棺墓  
II 9 S J 35壺棺墓, S J 36壺棺墓, S J 40壺棺墓  
II 10 S J 41壺棺墓, S J 42壺棺墓, S J 43・S J 44壺棺墓, S J 45壺棺墓  
II 11 S P 46石蓋土壤墓  
II 12 S P 48石蓋土壤墓  
II 13 S P 37土壤墓, S P 38土壤墓, S P 51土壤墓, S P 52土壤墓  
II 14 S P 53土壤墓, S P 54土壤墓, S P 55土壤墓, S P 56土壤墓  
II 15 S T 01古墳石室, S T 02古墳石室  
II 16 S T 03古墳石室, S T 04古墳石室  
II 17 S T 05古墳石室, S T 07古墳石室  
II 18 S T 06古墳石室, 玄室遺物出土状況  
II 19 S T 49古墳全景, 同古墳周溝北東部, 同古墳周溝南西部砾群  
II 20 S T 50古墳石室, 同古墳周溝北部  
II 21 S P 09土壤墓, S P 10土壤墓, S P 11土壤墓, S P 12土壤墓  
II 22 S P 13土壤墓, S P 14土壤墓, S P 16土壤墓  
II 23 S P 15土壤墓  
II 24 S P 17土壤墓, S P 18土壤墓, S P 19土壤墓, S P 20土壤墓  
II 25 S P 21土壤墓, S P 23土壤墓, S P 24土壤墓, S P 25土壤墓  
II 26 S P 26土壤墓, S P 39土壤墓, S P 59土壤墓  
II 27 繩文時代石器  
II 28 S J 28壺棺, S J 29壺棺, S J 30壺棺  
II 29 S J 32壺棺, S J 34壺棺, S J 36壺棺  
II 30 S J 35壺棺, S J 43壺棺  
II 31 S J 42壺棺, S J 44壺棺, S J 49周溝埋土出土壺棺  
II 32 S J 27壺棺, S J 33壺棺  
II 33 S J 31壺棺, S J 40壺棺, S J 41壺棺, S J 45壺棺  
II 34 繩文晩期～弥生前期土器（1）  
II 35 繩文晩期～弥生前期土器（2）

- 縄石 A 遺跡 PL. 36 縄文晩期～弥生前期土器（3）  
〃 37 縄文晩期～弥生前期土器（4）  
〃 38 IV区埋葬遺構出土供獻土器，同勾玉・管玉  
〃 39 S T 49古墳出土埴輪，古墳出土玉類  
〃 40 古墳出土須恵器（1）  
〃 41 古墳出土須恵器（2）  
〃 42 古墳出土須恵器（3）  
〃 43 古墳出土土師器  
〃 44 土壙墓出土土師器  
〃 45 土壙墓出土土師器，古墳および土壙墓出土鐵器・青銅器  
〃 46 古墳および木棺墓出土棺釘
- 縄石 B 遺跡 PL. 47 遺跡原景，遺跡全景  
〃 48 S T 04古墳下支石墓群  
〃 49 S A 22支石墓，S A 23支石墓上石，同支石墓下部  
〃 50 S A 24支石墓，S A 25支石墓，S A 27支石墓  
〃 51 S A 30支石墓，S A 35支石墓，S A 36支石墓  
〃 52 S A 37支石墓石蓋，同支石墓下部，S A 38支石墓  
〃 53 S A 41支石墓，S A 42支石墓石蓋，S A 42支石墓下部  
〃 54 S A 26支石墓上石，同支石墓下部  
〃 55 S A 26支石墓石蓋，同支石墓下部  
〃 56 S A 29支石墓上石  
〃 57 S A 29支石墓石蓋，同支石墓下部  
〃 58 S A 31支石墓上石  
〃 59 S A 31支石墓石蓋，同支石墓下部  
〃 60 S A 33支石墓上石  
〃 61 S A 32支石墓石蓋，同支石墓下部  
〃 62 S A 33支石墓石蓋，同支石墓下部  
〃 63 S A 34支石墓上石，同支石墓下部  
〃 64 S A 43支石墓石蓋，同支石墓石蓋上土器出土狀況，同支石墓下部  
〃 65 S A 44支石墓下部，S A 45支石墓下部  
〃 66 南東部石棺群，S K 15土壤，S J 13・S J 14要棺墓およびS K 15土壤  
〃 67 S C 05石棺墓の壺副葬状況，同石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 68 S C 06石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 69 S C 07石棺墓一上石，同石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 70 S C 08石棺墓一蓋石，同石棺墓一身，S C 09石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 71 S C 10石棺墓一蓋石，同石棺墓一身，S C 11石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 72 S C 12石棺墓一蓋石，同石棺墓一身  
〃 73 S K 21土壤，S K 22・S K 23土壤  
〃 74 S K 16土壤，同遺構遺物出土狀況，S P 17土壤墓  
〃 75 S T 01・S T 02・S T 03古墳，S T 02古墳石室

- 蝶石B遺跡 PL. 76 S T02古墳石室、同古墳閉塞状況、同古墳玄室内遺物出土状況  
〃 77 S T03古墳石室閉塞状況、同古墳石室  
〃 78 S T18古墳石室  
〃 79 S T04古墳原景、同古墳全景、同古墳石室  
〃 80 S T04古墳閉塞状況、同古墳石室奥壁、同古墳石室羨道部  
〃 81 S T04古墳南北两侧盛土状況、同古墳東側盛土状況  
〃 82 S T04古墳西北区盛土下遺物出土状況、同古墳盛土下支石墓  
〃 83 S T04古墳石室奥壁裏側、石室東南側壁裏側、石室北西側壁裏側  
〃 84 繩文時代石器（1）  
〃 85 繩文時代石器（2）、弥生時代石器  
〃 86 繩文早・前期土器（1）  
〃 87 繩文早・前期土器（2）  
〃 88 繩文早・前期土器（3）  
〃 89 繩文早・前期土器（4）  
〃 90 繩文早・前期土器（5）  
〃 91 繩文早・前期土器（6）  
〃 92 繩文早・前期土器（7）  
〃 93 繩文早・前期土器（8）  
〃 94 S A22・S A23・S A24支石墓壺棺  
〃 95 S A25・S A27支石墓壺棺  
〃 96 S A30・S A35支石墓壺棺  
〃 97 S A36・S A37支石墓壺棺  
〃 98 S A38・S A39・S A41支石墓壺棺  
〃 99 S A40・S A42支石墓壺棺、S T04古墳埴丘内出土壺棺  
〃 100 S T04古墳埴丘内出土壺棺、支石墓および石棺墓出土玉類  
〃 101 支石墓供獻土器（1）  
〃 102 支石墓供獻土器（2）  
〃 103 支石墓供獻土器（3）  
〃 104 繩文晚期～弥生前期土器（1）  
〃 105 繩文晚期～弥生前期土器（2）  
〃 106 S C05石棺墓・SK16土壤ほか出土弥生土器  
〃 107 S J13壺棺、SJ14壺棺  
〃 108 S J14壺棺墓出土小型内行花文鏡、SK16土壤および古墳出土鐵器  
〃 109 古墳出土須恵器（1）  
〃 110 古墳出土須恵品（2）  
〃 111 古墳出土須恵器（3）、古墳出土土師器（1）  
〃 112 古墳出土土師器（2）、SP17土壤墓出土須恵器  
〃 113 S T04古墳埴丘下出土祭祀土器  
〃 114 南外区古墳表採土器
- 久池井C遺跡 PL. 115 I区全景、II区全景

- 久池井C遺跡 PL.II6 久池井C遺跡と北向かいの春日遺跡、S B13住居跡  
II 117 S B01竪穴、S B14竪穴  
II 118 S J03甕棺墓、S P02土壙墓  
II 119 S P05土壙墓、S P07土壙墓、S P10土壙墓  
II 120 S C04石棺墓一蓋、同石棺墓一身、S C09石棺墓  
II 121 S C11石棺墓一粘土被覆状況、同石棺墓一蓋、同石棺墓一身  
II 122 S C12石棺墓一蓋、同石棺墓一身、S K15土壙  
II 123 S B01竪穴出土土器（1）  
II 124 S B01竪穴出土土器（2）  
II 125 S B14竪穴出土土器  
II 126 S J03甕棺、S P07土壙墓出土鐵劍、S B13住居跡出土土器
- 久池井一本松遺跡 PL.II7 遺跡全景航空写真  
II 127 II区全景  
II 128 S T01古墳全景、同古墳盛土  
II 129 S T01古墳石室、同古墳石室内鐵劍出土狀況  
II 130 S T02古墳石室、S T03古墳石室  
II 132 S T34古墳全景、同古墳石室  
II 133 S T35古墳全景、同古墳石室  
II 134 S T41古墳石室、S T42古墳石室  
II 135 S T44古墳石室、S T45古墳石室  
II 136 S P43木棺墓、同木棺墓副葬品出土狀況  
II 137 S P06土壙墓・S B16竪穴、S P07～S P09土壙墓  
II 138 S P12土壙墓、S P13土壙墓、S P14土壙墓、S P15土壙墓  
II 139 S P17土壙墓、S K20土壙、S K19土壙、S K21土壙  
II 140 S K23土壙、S K24土壙、S P25土壙墓、S P26土壙墓  
II 141 S P27土壙墓、S P28土壙墓、S P29土壙墓、S P30土壙墓  
II 142 S P36土壙墓、S P37土壙墓、S P38土壙墓  
II 143 繩文晚期～弥生前期土器  
II 144 繩文時代石器  
II 145 古墳出土須恵器（1）  
II 146 古墳出土須恵器（2）、S P38土壙墓出土須恵器  
II 147 古墳出土土師器  
II 148 S T01古墳出土埴輪  
II 149 S P06土壙墓およびS B16竪穴出土遺物、S K31土壙出土土師器  
II 150 S P15木棺墓出土土師器、S P33土壙墓出土垂飾  
II 151 S P25土壙墓・S P30土壙墓・S P43木棺墓出土土師器  
II 152 古墳および土壙墓・木棺墓出土鐵器（1）  
II 153 古墳および土壙墓・木棺墓出土鐵器（2）

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う文化財調査は、まず昭和44年6月に九州地方建設局の委託を受け、鳥栖一武雄間53kmについての第1回目の遺跡分布調査から始まり、45年度・48年度さらに一部踏査を補足した。

発掘調査は52年1月、そのうちの佐賀地区から開始された。また鳥栖一佐賀間の工事計画最終決定に合わせ、その年度に同区間の詳細遺跡分布調査を実施した結果、鳥栖一佐賀間26kmのうち97ヶ所、計563,300m<sup>2</sup>の遺跡の存在を確認した。詳細分布調査はその後52年度に佐賀一武雄間27kmについて行い、98ヶ所、計537,000m<sup>2</sup>の遺跡を確認。さらに58年度までのうちに、残る基山地区0.2kmで1ヶ所14,000m<sup>2</sup>、嬉野地区4.4kmで1ヶ所12,000m<sup>2</sup>がこれに加わった。その結果、佐賀県を横断する基山一嬉野全区間で最終的に調査対象となった遺跡は計197ヶ所、1,286,460m<sup>2</sup>である。

51年度から始まった発掘調査は工事と並行して進められ、鳥栖一武雄間供用開始前の59年10月までにこの区間を終了。その後、63年3月供用開始となった多久一武雄間についても事前に無事調査を終了している。そして発掘調査開始から14年目、今年度で鳥栖地区の一部を最後に、当時の全調査計画が完了した。

九州横断自動車道建設に伴う文化財調査はその規模において、佐賀県教育委員会がかつて経験した全ての調査をはるかにこえるものであり、その為、調査体制の再編、他の調査事業とのかねあい、13市町村にまたがる広域調査としての調整等、困難で新たな問題にたえず直面してきた。それだけに14年間の節目は実に感慨ぶかいものがある。



Fig. 1 九州横断自動車道路線図（佐賀大和インター付近）

この間の調査で得られた成果には多大なものがあり、とりわけ佐賀平野の原始・古代史像はかなりの部分明らかになった。だが一方、路線が遺跡密集地帯にあたる山麓部を通過する距離の長いこともあって、消滅した遺跡は面積にして120万m<sup>2</sup>をこえており、その損失は少くない。これら遺跡の調査結果は57年度までのうちに逐次報告されてゆく予定であるが、その損失を考えると改めて残された責任の重大さを痛感する次第である。

さて、今回報告する疊石A・B遺跡及び久池井C遺跡は51年度の詳細分布調査で路線にかかる調査面積が決定したものであるが、疊石遺跡の名は以前から縄文時代早・前期および晩期の遺跡として知られていた(Fig. 2)。

発掘調査は、疊石A遺跡(11,000m<sup>2</sup>)を56年6月～57年3月にかけて実施し、東側I区から順次西側のV区に移動した。疊石B遺跡(4,100m<sup>2</sup>)は56年9月～56年12月にかけ、A遺跡と並行して調査を行い、さらに57年3月に一部追加調査を実施した。久池井C遺跡(5,600m<sup>2</sup>)は57年2月にI区、57年5月～57年7月にII区からIII区に向かい調査を進めた。また久池井一本松遺跡(4,300m<sup>2</sup>)は56年10月～57年1月に西側I区、57年8月～58年10月にII区、同年3月にI区東を分けて調査した。

調査の手順としては、本調査に先行してパワーショベルによる試掘を行った。試掘は分布調査で知られた対象範囲全域に、幅3mの試掘溝を原則として5本、約50m幅の計画路線内にこれと平行設定して遺構・遺物の検出および旧微地形の推定を試み、本調査の必要な範囲は面的に拡げた。したがって、例えば疊石A地区のIII-IV地区のように、当初の調査対象地区の中にあっても試掘で遺構が認められないなど、面的に拡げる必要がないと判断した場合は主に試掘時の遺物採集で終わった地区もある。ただし疊石A遺跡I・II区および疊石B遺跡は踏査でも古墳群の存在が確認できたので、はじめから全面を表土除去した。

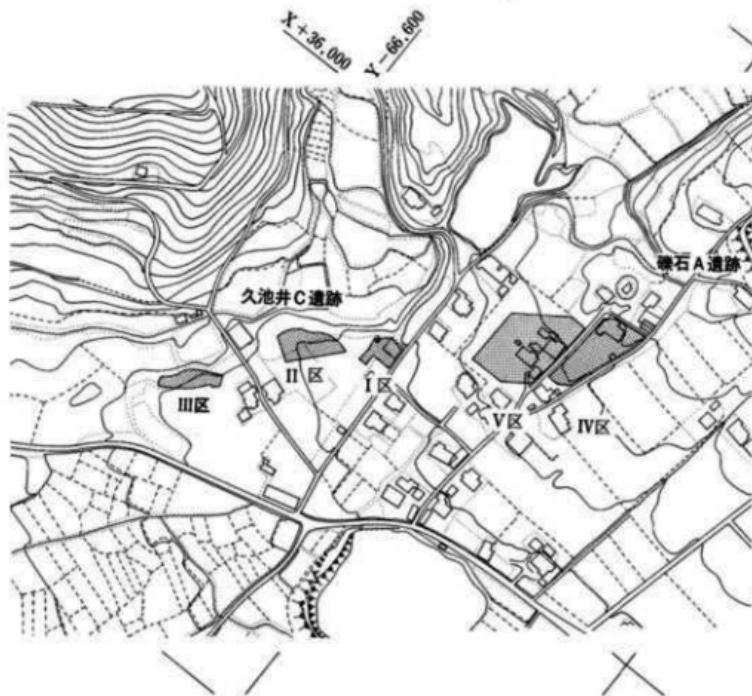
丁度、疊石A・B遺跡の調査があった56年度は、これより東方約2.5kmの久保泉丸山遺跡で古墳等の移設に伴い100基をこえる支石墓の調査がなされており、縄文晩期～弥生前期の支石墓多数を含む墓地という類似した性格をもつ点で両者の比較が注目をあつめていた頃であった。



表土除去作業



発掘作業



**久池井C遺跡 (KTT-C)**

所在地 佐賀郡大和町久池井字野口  
遺跡面積 5,600m<sup>2</sup>(計画路線内)  
調査期間 昭和56年2月～57年7月

調査担当者 田平徳栄  
藤井伸幸  
松尾法博

調査遺構 弥生期 突穴2基  
甕棺墓1基  
石棺墓4基  
土壙墓6基  
土 壤1基  
平安期 住居跡1基  
掘立柱建物跡1基

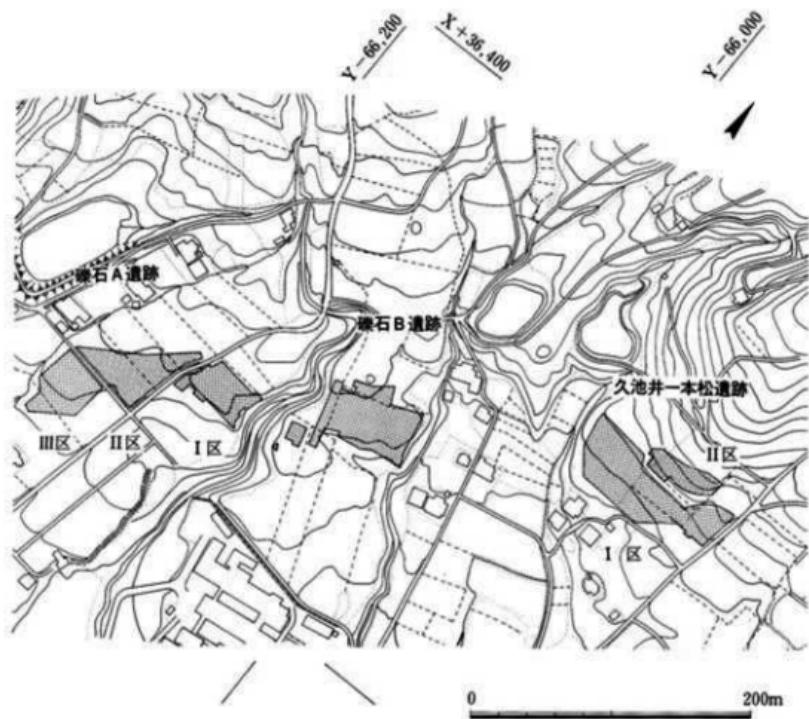
**礫石A遺跡 (TUB-A)**

所在地 佐賀郡大和町久池井字野口  
遺跡面積 11,000 m<sup>2</sup>(計画路線内)  
調査期間 昭和56年6月～57年3月

調査担当者 田平徳栄  
藤井伸幸  
松尾法博

調査遺構 弥生期 突棺・甕棺17基  
土壙墓11基  
古墳期 古 墳9基  
土壙墓3基  
土 壤1基  
奈良・平安期 土壙墓・木棺墓17基

Fig. 2 各遺跡発掘区位置図 (Y<sub>6000</sub>)

**礫石B遺跡 (TUB-B)**

所在地 佐賀郡大和町久池井字野口  
遺跡面積 4,100 m<sup>2</sup>(計画路線内)  
調査期間 昭和 56 年 9 月～56 年 12 月  
調査担当者 田平徳栄  
藤井伸幸  
調査遺構 弥生期 支石墓 23基  
變棺墓 2基  
石棺墓 9基  
土 墓 4基  
古 墓 5基  
土壤墓 1基

**久池井一本松遺跡 (KIP)**

所在地 佐賀郡大和町久池井字野口  
遺跡面積 4,300 m<sup>2</sup>(計画路線内)  
調査期間 昭和 56 年 10 月～58 年 10 月  
調査担当者 田平徳栄  
藤井伸幸  
松尾法博  
調査遺構 古墳期 古 墓 9基  
土壤墓 1基  
奈良・平安期 土壤墓・木棺墓  
26基, 土壤 3基・竖穴 1基

## 2. 調査組織

礫石A・B遺跡、久池井C遺跡、久池井一本松遺跡の発掘調査は佐賀県教育委員会の直営事業として実施した。発掘調査組織は下記のとおりである（56年度・57年度）。

総括教育長	古藤 浩
教育次長	宇田川勝之（56年度） 村岡 昭（56年度） 大塚正道（57年度） 高橋一之（57年度）
文化課課長	藤山 巍
文化課課長補佐	川久保松広（56年度） 山田陸三（57年度） 高島忠平
発掘調査文化課調査第一係長	橋渡敏璋
○礫石A・B遺跡	田平徳栄（文化財保護主事） 藤井伸幸（文化課指導主事） 松尾法博（文化課嘱託）
○久池井C遺跡	田平徳栄（文化財保護主事） 松尾法博（文化課嘱託） 藤井伸幸（文化課指導主事）
○久池井一本松遺跡	田平徳栄（文化財保護主事） 藤井伸幸（文化課指導主事） 松尾法博（文化課嘱託）
調査補助	鶴田和彦 野田美恵子 嬉野みつ代 増田庸子 渡島隆章 永瀬真也 山口 裕 狹川真一 江頭信哉
整理文化財保護主事	西田和己（56年度）
文化課指導主事	蒲原宏行（57年度）
文化課嘱託	原口 定 本田京子 高瀬久美子（56年度） 矢野佳代子（57年度） 友貞菜穂子（57年度）
庶務文化課庶務係長	中野安正
文化課主事	山口 勝 野口茂実（56年度） 森由紀子（56年度） 山下 行夫（57年度） 大串裕子（57年度）
発掘調査参加者	（大和町） 太田鉄藏・内山ヒロエ・石井和子・大田アサエ・大坪エイ・大坪八重子・北村博子・猪村美津子・指山千春・執行カツヨ・上流清子・城政子・西恵美子・西久保ハルエ・西原和子・野田せき子・野田美智子・原京子・東島良子・広重さなえ・百武アサ子・深町俊子・藤井千枝子・納富みさお （佐賀市） 生田美代子・生田ヨシエ・大野ミチエ・後藤美智江・小柳ヨシエ・武富ヨシノ・原ミチエ・廣瀬幸子・廣瀬八重子・横田ナト

## 第2章 地理的・歴史的環境

# 1. 地理的環境

佐賀平野は脊振山地南面に広がる洪積段丘と扇状地さらにその南の広大な三角州に分けられる。

洪積段丘は佐賀市東方の神崎町を流れる城原川以東に広く発達しており、海拔高度20~80m、長さ4km程の細長い丘陵が多くみられる。一方、城原川以西の佐賀市北部から大和町にかけては海拔30~100m、南北1km程の段丘が所々分布しているが、その発達は東部ほど顕著ではなく、また扇状地があり緩やかなことともあって山地からいきなり平野部が広がっているかのような観を与える。

扇状地の発達はとくに城原川以西で顕著である。

嘉瀬川とその東西中小河川によって形成された複合扇状地で、山地から下って東西に長く広がる。多くの場合すでに開析されて扇状地としての原形は失われており、勾配は例えば嘉瀬川の頂点にあたる川上官人橋付近から扇端の尼寺付近まで平均 $1/50$ と比較的緩やかであるため、一見扇状地形と氣付かないほどである。

扇状地は現標高約5mラインでおわり、氾濫平野を経て広大な三角州地形に移る。有明海の潮位干満差は全国一で最大6mにも達する。佐賀平野の三角州はこの激しい潮汐作用を受けて河川の運んだ土砂が海岸部に堆積し、形成されたもので、青灰色粘土の還元土壌が発達し、海退の結果生じた元々の瀬筋の名残をとどめる堀（クリーク）が複雑にはりめぐらされて水郷佐賀平野特有の農村景観をみせている。また、この、三角州地形では中心河川の流域に自然堤防の微高地が分散的にみられる。とくに筑後川水系に属す城原川流域、寒水川流域など東部に多く、低地部の遺跡の立地に重要な役割を果たす。

このような特色ある佐賀平野の地形の中で、とくに縄文・弥生時代以降、山麓部から段丘を中心圧倒的な密度で遺跡の分布がみられる。その様相は佐賀平野を巨視的にみれば、丘陵裾を東端から西端までベルト状に幅約2,3kmの遺跡分布帯が続き、さらに東部ではそれから南に細長く伸びた多くの洪積段丘上に遺跡の分布が顕著である。低地部の場合、河川沿いの一部自然堤防上が弥生時代以降に生活の場となるが、広範な開発はおそらく中世に下ると思われる。

礫石A・B遺跡、久池井C遺跡、久池井一本松遺跡は嘉瀬川が平野部に流れ出る丁度谷口の東岸、脊振山地南麓の標高約30~40mの段丘上に位置し、微地形としてみれば、段丘とはいってもその中に南北に小さな流路あるいは旧河道が多く、複雑な起伏に富んでいる。また段丘周辺の地質は洪積世の砂礫堆積層を主体とし、黒ボクとよばれる火山灰土壌が広く地表を覆ってい



Fig. 3 遺跡位置図

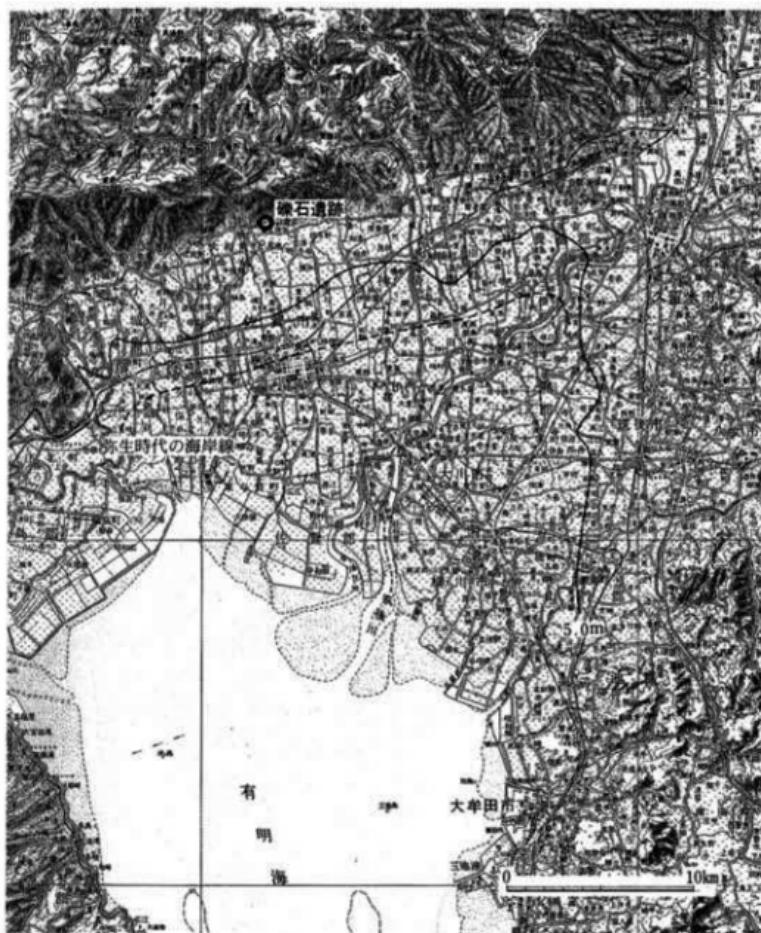


Fig. 4 佐賀平野地形図

る。砾石という地名は畑耕作に元々向きなこの砂疊層の特色を示すものであろう。

現在の土地利用状況は、平野部はほとんどが水田化され、それが山麓までせまっている。段丘部では果樹、とくに蜜柑栽培がさかんであり、戦後の奨励の際、丘陵部に向かって大規模な造成が行われ、それが為に古墳群等多くの遺跡が壊滅的な打撃を被る結果をまねいた。今回の調査区一帯も段丘上を利用して蜜柑・柿園等が拓かれた地域にあたる。

## 2. 歴史的環境

周辺の歴史的環境については久保泉丸山遺跡の報告書に詳しいので<sup>10)</sup>、ここでは概略にとどめる。

佐賀平野における遺跡分布はおおまかにみて山麓部に圧倒的に集中し、ことに標高約10~30mの中位・低位段丘にあたる台地上は東西殆ど遺跡で埋めつくされるといつても過言ではない(Fig. 5)。佐賀平野の遺跡分布のもう一つの特色は低地部であって、ここでは弥生前期以降、点在する自然堤防の微高地上に集落・墓地等が形成され、中世になると自然のクリークを利用した城館が多く出現する。低地部における弥生時代の海岸線は貝塚を目安にしておよそ現標高4mラインである。

旧石器時代の遺跡は佐賀平野全体としても調査例が乏しく、様相は明らかでない。しかも大方は後世の遺構・遺物に混在して石器が少量出土するといった現状にある。周辺でも同様であって、大門遺跡の尖頭器<sup>11)</sup>・藤付E遺跡<sup>12)</sup>の台形石器および細石刃、久池井一本松遺跡および惣座遺跡<sup>13)</sup>のナイフ形石器などが山麓沿いにまばらに知られる程度である。嘉瀬川の西方約4km、三日月町老松山および岡本山はサヌカイトの石材産地である関係上、旧石器時代以来、サヌカイト製品あるいは剝片の出土例は他の地域に比べて卓越しているが、それでも生活および生産面等で旧石器人の活動の痕跡は極めてかすかである。

縄文時代では疎石遺跡の近辺には大和町で尼寺四本杉遺跡(早・前期)がある。東方約1.2kmには佐賀市に入って大門遺跡<sup>14)</sup>(前期、後・晚期)、大門西遺跡(後期)、さらに東方約2kmには久保泉丸山遺跡(早期~晚期)とその周辺に金立開拓遺跡<sup>15)</sup>(早・前期、後期)、西原遺跡<sup>16)</sup>(晚期)、鈴熊遺跡<sup>17)</sup>(晚期)、藤付A遺跡<sup>18)</sup>(後期)、六本黒木遺跡<sup>19)</sup>(前期、後・晚期)などが分布する。総じてみると、久保泉丸山遺跡以外、中期の遺跡が稀薄であり、また遺跡ごとに連続性が乏しい。後・晚期になっていきおい遺跡の分布が広がる傾向を示しており、弥生時代に向けて山麓部の胎動が始まることを感じさせる。

遺構は久保泉丸山遺跡の100基をこえる支石墓を別として、性格の明らかな例は限られ、またその数も少ない。住居跡が金立開拓遺跡で2基(後期)、その他に後・晚期の甕棺墓が數基と早期~晚期の土壙がやや多く知られる程度である。

弥生時代に入ると、墓地を中心とする遺跡の存在が急に広がりをみせる。縄文晩期から継続する久保泉丸山遺跡のほか、前期に七ヶ瀬遺跡<sup>20)</sup>、大門西遺跡の壺棺、南小路支石墓<sup>21)</sup>、村徳永支石墓<sup>22)</sup>などがあり、さらに東山田一本杉遺跡<sup>23)</sup>、七ヶ瀬遺跡、三本黒木遺跡<sup>24)</sup>などでは前期末から甕棺墓地の形成が始まる。一方、集落跡を中心にみると、前期では本書で扱う久池井C遺跡の竪穴2基以外知られていない。中期以降、近くでは環濠をもつ惣座遺跡<sup>25)</sup>、東山田一本杉遺跡、やや離れて琵琶原遺跡<sup>26)</sup>など拠点的集落が生まれるが、盛期はいずれも後期であつ

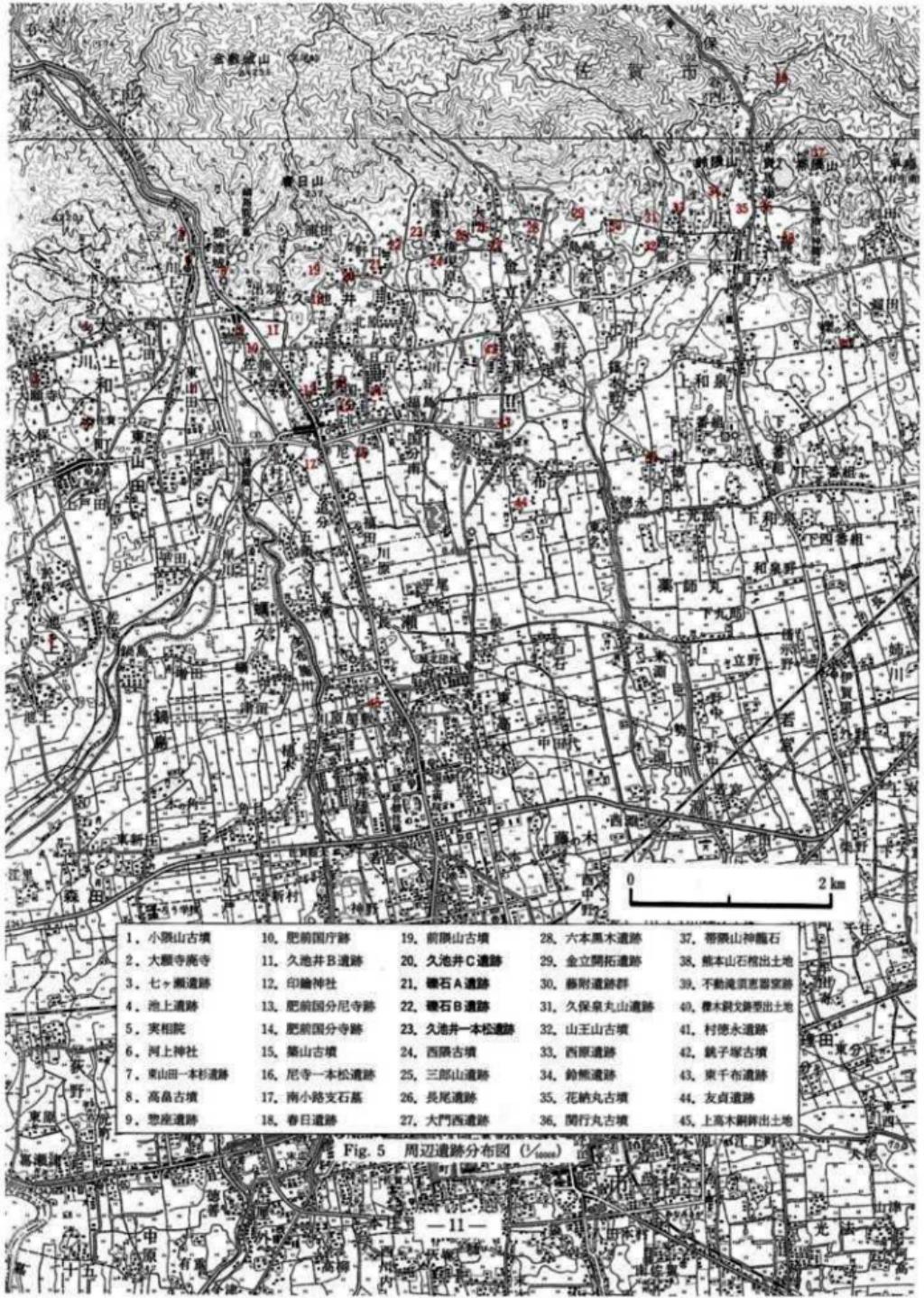


Fig. 5 周辺遺跡分布図 ( $1/40000$ )

て、中期の豪奢墓地の発展とは必ずしも対応しない現状にある。

その他この地域の特色を示すものに青銅器がある。嘉瀬川流域は以前から佐賀平野でも青銅器出土例の目立った地域で、後漢鏡の採集品ほか大和町尼寺の銅戈2本<sup>(18)</sup>、佐賀市高木の銅鉢1本<sup>(19)</sup>などが知られていたが、近年の調査で東山田一本杉遺跡の前期末豪奢<sup>(20)</sup>から銅劍先、西山田二本松遺跡A<sup>(21)</sup>から銅鉢2点、惣座遺跡<sup>(22)</sup>からは後漢鏡片、小形彷彿鏡、中期前半に遡るであろう銅劍と銅鉢を同時に刻んだ鉄型1点など新資料が多い。惣座遺跡の後期と思われる土壙墓の1つからは約7,000個のガラス小玉と共に楽浪漢墓にみられるような銀製指輪が3点出土している。

古墳時代になると佐賀平野の中でもこの地域の優位性は際立ったものとなる。4世紀代には墳丘に穿孔壺を置く銚子塚古墳<sup>(23)</sup>(98m)が整美な前方後円墳として登場し、5世紀代には未定形の舟形石棺を出土した熊本山古墳<sup>(24)</sup>、竪穴式石室の山王山古墳<sup>(25)</sup>、装飾家形石棺内蔵の横穴式石室をもつ西原古墳<sup>(26)</sup>(前方後円墳)と西限古墳<sup>(27)</sup>(円墳)、竪穴式石室から船形石棺や古式横穴式石室などバラエティーに富む久保泉丸山古墳群、剝抜石棺片採集の前隈山古墳<sup>(28)</sup>(前方後円墳か)などが嘉瀬川東岸の山麓部一帯を占める。嘉瀬川西岸山麓には5世紀前半、県下最大の船塚前方後円墳<sup>(29)</sup>(119m)が盾形周濠と陪塚をもって出現し、同じ5世紀代にやや南へ下った大和町地ノ上の低位段丘まで拡がって風楽寺前方後円墳<sup>(30)</sup>等が造られる。しかし6世紀代に入ると鳥栖市袖比古墳群<sup>(31)</sup>、三田川町・上峰村の目達原古墳群<sup>(32)</sup>など佐賀平野東部に大型古墳群の主体が移り、近辺で目ぼしい古墳は小隈山前方後円墳と築山前方後円墳<sup>(33)</sup>くらいのものとなってしまう。この間の変化は北部九州全体をまき込んだ527年の磐井の乱が大きな契機となったと考えられ、それ以前では例えば凝灰岩剝抜石棺を内蔵する西原古墳、西限古墳、久保泉丸山3号墳、熊本山古墳、前隈山古墳がいずれもこの地域に集中し、また最近西原古墳出土と伝えられる凝灰岩の器材形石製品(盾か)が見つかったことなどからも、この地域が元々筑後川東岸の八女地方を中心とする政治勢力と密接な関係にあった地域であることが窺われる。なお、周辺の後期群集墳は5世紀中頃から主に6・7世紀にかけ山麓部一帯を埋め、8世紀代になってもなお追葬が盛んである。ただ、古墳時代の集落跡については惣座遺跡や琵琶原遺跡といった拠点的集落で弥生後期から継続性は認められるが、全般に遺構の数も少なく、今のところまだ集落全体の様相を知りうるような良好な調査に恵まれていない。

奈良時代になって大和町久池井に国府が置かれるとこの地域が佐賀平野のみならず肥前國の中で最も主要な政治史の表舞台となる。肥前國府全体の範囲はまだ未確定ながら、およそ出現期8世紀から10世紀頃の国府跡は調査により判明しており<sup>(34)</sup>、さらにその周辺に大型掘立柱建物跡、倉庫群跡、築地跡などの遺構が拡がっている。国府跡は104.5×77.2mの築地と溝に囲まれ、内部の建物配置は基本的に南門から前殿・正殿・後殿と並び、正殿は東西両脇から回廊が出て築地にぶつかりその前面に両脇殿を置く形式で、大宰府正庁跡との類似性が認められる。

また、この国跡北側に接する惣座遺跡では整然たる配置の大型倉庫群跡が調査され、正倉跡の可能性が考えられている。その他、国跡東側の久池井B遺跡<sup>(35)</sup>では何らかの行政機関あるいは居館と考えられる計画的配置の大型建物群の一画があり、同様な例は嘉瀬川をこえて西岸の東山田一本杉遺跡でもみつかっている。また、国府の出現に合わせ、国分寺<sup>(36)</sup>および国分尼寺<sup>(37)</sup>が正跡の東南方1kmに造られ、さらに嘉瀬川の西方1.5kmに奈良時代の大願寺廃寺<sup>(38)</sup>が存在する。

以上のように、この地域はとくに弥生時代の開始以降、佐賀平野の中でもとりわけ文化的先進性を保持してきた地域として重要視する必要がある。古墳時代になっていち早く政治的優位を確立するのは、弥生時代に培われた伝統的基盤に立つ在地勢力の存在と無縁ではないであろうし、さらに肥前國府の出現もそのような伝統的勢力が新たな国家体制に組み込まれてゆく大きな歴史的変動を意味するものといえよう。文献資料のうえでは「佐嘉君」の勢力地が佐賀市から大和町にかけての山麓一帯と推定され、また「肥前風土記」で畿内政権に討たれた土蜘蛛として登場する「山田」は、嘉瀬川西岸の山麓部にあたる大和町大字東山田・西山田に地名を残している。

本書で報告する4遺跡のうち、礎石A・B遺跡では縄文晩期に統く弥生前期の遺構・遺物を多数検出し、久池井C遺跡と合わせて、この地域の弥生社会黎明期の一様相を明らかにするものであり、とくに支石墓系統の埋葬がまとまって調査された意義は大きい。また、礎石A・B遺跡および久池井一本松遺跡における古墳から土壤墓あるいは木棺墓への変容の実態は、近接して肥前國府が出現する時期であるだけに、その背景が問題になるところである。そのほかにも重要な問題は多いが、いずれにせよ、これら4遺跡は主に縄文晩期から平安時代にかかるもので、周辺遺跡の状況からみて、まさに佐賀平野の古代史の主要舞台に位置する点において重要な意味をもつものであるといえよう。

### 註

- 1 東中川忠美他「久保泉丸山遺跡」佐賀県教育委員会 1986
- 2 高瀬哲郎他「大門西遺跡」佐賀県教育委員会 1980
- 3 2に同じ
- 4 立石泰久他「肥前國府跡Ⅰ」佐賀県教育委員会 1978
- 5 木下之治編「大門遺跡」佐賀市教育委員会 1972
- 6 蒲原宏行他「金立開拓遺跡」佐賀県教育委員会 1984
- 7 東中川忠美他「西原遺跡」佐賀県教育委員会 1983
- 8 蒲原宏行「鈴熊遺跡」(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報」第5集) 佐賀県教育委員会 1978
- 9 高瀬哲郎他「香田遺跡」佐賀県教育委員会 1981
- 10 2に同じ
- 11 七田忠昭「七ヶ瀬遺跡」大和町教育委員会 1981
- 12 木下之治「脊振山脈南麓で初めて発見された大和町南小路支石墓」(「新郷土301号」) 新郷土刊行

- 会 1974
- 13 1に同じ
- 14 本田秀樹「東山田一本杉遺跡」(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第7集佐賀県教育委員会 1984)
- 15 昭和54年佐賀県教育委員会調査
- 16 本田秀樹「慈座遺跡」(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第7集』佐賀県教育委員会 1984)
- 17 福田義彦「琵琶原遺跡」佐賀市教育委員会 1981
- 18 松尾楨作「春日村尼寺のクリス型銅劍出土地に就て」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5輯) 1936
- 19 松尾楨作「高木瀬村上高木の銅鉢出土地に就て」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第5輯』) 1936
- 20 14に同じ
- 21 天本洋一他「西山田三本松遺跡」(『九州横断道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第10集) 1988
- 22 立石泰久「慈座遺跡」大和町教育委員会 1986, 註4, 註16
- 23 木下之治編「跳子塚」佐賀県教育委員会 1976
- 24 木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」(『帝釈山神龍石とその周辺』)佐賀県教育委員会 1967
- 25 奥村弘他「王山古墳」佐賀大学考古学研究会 1968
- 26 松尾楨作「埴輪円筒を繞らせる西原古墳」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5輯) 1936
- 27 佐賀市教育委員会編「西原古墳」 1975
- 28 松尾楨作「佐賀県考古大観」祐徳博物館 1959
- 29・30 28に同じ
- 31 志佐彌彦編「庚申堂塚調査報告書」佐賀県立博物館 1978
- 32 松尾楨作「目連原古墳群調査報告」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第9輯) 1950
- 33 28に同じ
- 34 七田忠昭他「肥前国府跡III」佐賀県教育委員会 1985
- 35 松尾法博「久池井B遺跡」(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』第6集) 佐賀県教育委員会 1983
- 36 高島忠平他「肥前国分寺跡」大和町教育委員会 1976
- 37 昭和59年大和町教育委員会調査
- 38 松尾楨作「大願寺魔寺趾」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第7輯) 1940

## 第3章 遺 跡 各 說



つぶて いし A 遺 跡

遺跡名：礫石A遺跡（略号TUB-A）  
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字野口

# 礫 石 A 遺 跡

## I. 遺跡の概要

遺跡は標高約30~40mの段丘上に位置する。調査は幅約50mの計画路線に沿って東西に長く、延長約400mの範囲を5区に分けて実施した (Fig. 2, PL. 1~4)。

微地形でみると、礫石B遺跡との間には現在黒川が流れているが、本来の河道は礫石B遺跡東側の谷を流れていたことが容易に推測できる。近年の改修も加わって現在二つの遺跡は完全に分断された形になっているが、おそらく弥生・古墳時代では二つの遺跡は地形上は同一のものであったと思われる。ただしここでは調査時の遺跡区分に依り、敢えて分けて扱うこととする。

遺跡は全体として西南方向に緩やかに傾斜し、I区の中を南北に1条、埋没した旧河道があり、段丘を区切っている (Fig. 6・7)。この旧河道は埋土中の土器からみて弥生時代前期のうちには埋没してしまっていたとみられ、古墳が造られる頃には現在と殆どかわらない地形となっていたであろう。II区の水路は最近の掘削である。またIII区西側には現在も小水路が流れ、さらに西側のIV区は小水路を挟んでこれより約1m低くなり、V区に向かって緩やかに傾斜する。

遺跡の地質は黑色表土（耕作土）が約30~50cm、その下の遺構検出面は茶褐色砂質土を主体とするが、I区・II区では花崗岩礫を多く含む。全体として削平が進んでいる。

遺構の分布は弥生時代墓地はIV区に限られ (Fig. 8)、古墳および奈良時代の土壙墓・木棺墓はそれぞれI~III区とIV・V区のおよそ2群に大別される。III区とIV区の間約60mは厚い砂層が堆積し、確認調査の結果、遺構の分布は認められなかった。なおV区は調査時に久池井D遺跡としていたが、調査結果からみればその広さにもかかわらず土壙墓1基が検出されたにすぎず、むしろ礫石A遺跡の西側のおわりを示すとみるのが適当と判断し、改めて礫石A遺跡に含めた。

検出した遺構の種別・数は、縄文晩期~弥生前期ではIV区北側の埋葬群で壺棺墓11基・甕棺墓6基・石蓋をもつものを含め土壙墓11基の計28基。古墳時代の遺構はI区~III区で古墳7基・土壙墓3基・土壙1基、IV区で古墳2基である。奈良~平安時代の遺構はいずれも土壙墓あるいは木棺墓で、II区およびIII区15基・IV区およびV区2基の計17基を数える。

IV区の埋葬遺構群 (Fig. 8, PL. 5・6) の場合、夜臼式期から始まり弥生前期後半までの時間幅があり、甕棺墓群は墓地形成の後半期にあたる。

配置をグループ分けすれば、その前半期においては基本的に成人用にあたるとみられる土壙墓のうち、S P37・S P38・S P51~S P56の8基と、小児用の壺棺墓S J 28~S J 30・S J 32・S J 34~S J 36・S J 42~S J 44・S J 58の11基がそれぞれまとまりある群をなす。すなわち成人墓域と小児墓域が、近接しながらも墓域を別にしている。壺棺墓の中ではS J 36壺棺

墓のみ土塙墓群の東端に含まれているようにみえるが、実は古墳時代になって両墓域の間にS T 49古墳の周溝が掘り込まれており、その際に破壊された壺棺墓がなお数基あったと考えれば、壺棺墓群の西側への拡がりを示すものとして、本来その西端の1基であったとみてよいであろう。実際、S T 49古墳周溝埋土中などから先の11基以外の壺棺片が数個体分出土している。

前半期の埋葬群の方位は、判明する限りでは基本的に東西方向である。その点でいうと先の11基の土塙墓群から離れて壺棺墓群の中にあるS P 46・S P 48のうち、S P 46石蓋土塙墓も東西頭位であり、この時期の可能性がつよい。法量は十分成人を容れるに足る容積をもつ。なお、西側の土塙墓群11基の中ではS P 57土塙墓のみ他から若干離れ、かつ方位を違えており、次の後半期に含められるかと考える。

このように前半期においては、若干の混在は示すが、基本的に成人と小児が墓域を別に葬られている。同様な例は躰石B遺跡でもみられるところである。墓地の形成過程については時期のわかる壺棺墓群の場合、3期に分かれ、はじめ東側で南北方向に形成されたのち、おわり頃にはその南端から東西方向に拡がって西側では土塙墓群と接するようになるが、この点は躰石B遺跡とも合わせ、総括の項で詳しく述べることにする。

また構造については、壺棺墓・土塙墓・石蓋土塙墓のいずれも上面をかなり削平されており、その点を勘案すれば本来、これらの遺構は躰石B遺跡と同様な上部構造をもつ支石墓であった可能性が十分ある。むしろ基本的には同じとみた方がよいであろう。しかし現状では支石あるいは上石に相当する遺構の特徴を残すものが認められないので、壺棺等の名称で呼んでおくことにする。

現状でみるとそれぞれの遺構の特徴は、壺棺墓の場合、大型壺を本体とし、蓋には煮沸に実際に使用された壺をかぶせるのが基本である。壺・甕とも夜臼系で、壺は口縁部打ち欠きが一般的である。ただS J 43壺棺墓のみ口縁部だけでなく底部も打ち欠いて壺で塞いでいる。埋置は墓壙底に直接壺棺を横たえ、配石等の特別の施設はもない。

土塙墓および石蓋土塙墓の掘形は長方形または隅丸長方形で、11基のうち5基は壙底に敷石または小口あるいは側辺に立石を置く。S P 46石蓋土塙墓の場合、やはり壙底に敷石をもちながら、他の土塙墓と比べてより矩形にちかく深い。ただし石蓋および深さの点は、他の土塙墓の場合、上面をかなり削平されていると推測されるのであくまで現状での比較、区別であることはことわっておく。

副葬品は小児用壺棺墓には全くみられず、土塙墓・石蓋土塙墓の前半期9基中6基から碧玉製管玉、石製および土製勾玉が出土した。率的には高いが、個々の遺構でみれば点数は少なく、概して貧弱である。小壺等の土器の供献が少ないのは削平によるためであろう。

この弥生前期の埋葬遺構群は、その墓地形成後半期になると、前半期の小児墓域すなわち壺棺墓群と重なる形で壺棺墓S J 27・S J 31・S J 33・S J 40・S J 41・S J 45の6基がつくられる。これら壺棺墓は北または南を頭位とし、また先の壺棺墓のうちS J 44壺棺墓をS J 45壺

砾石A遺跡

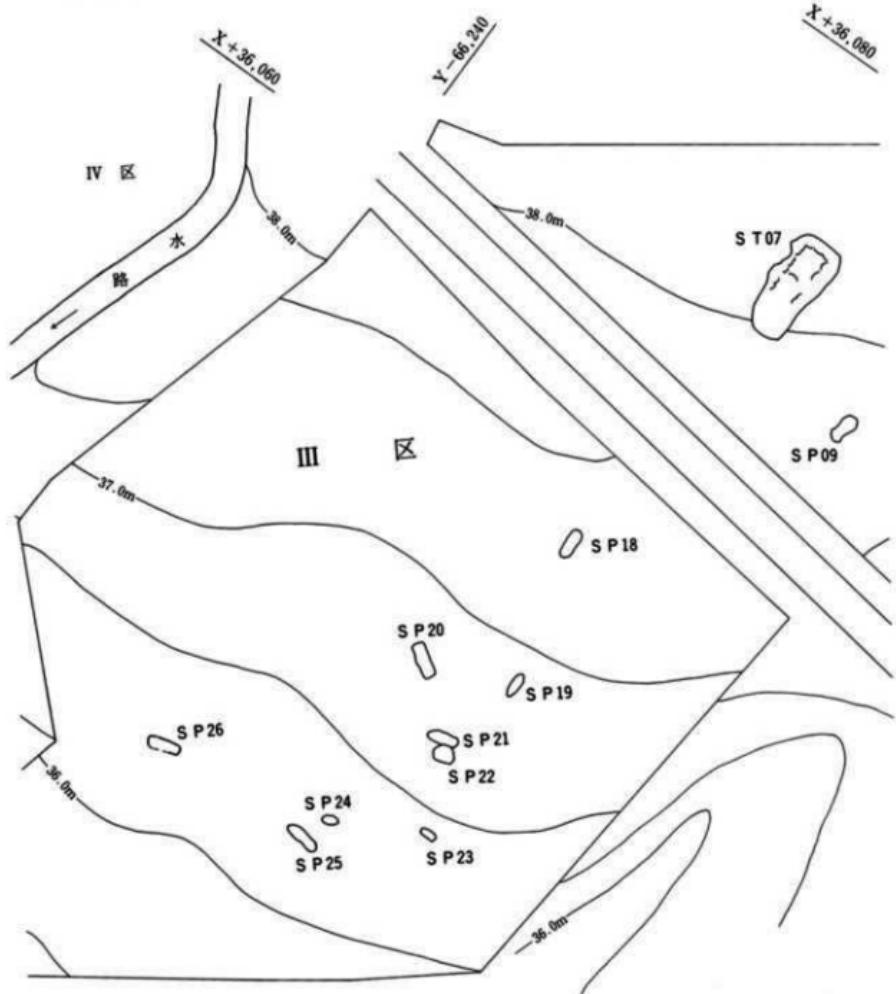
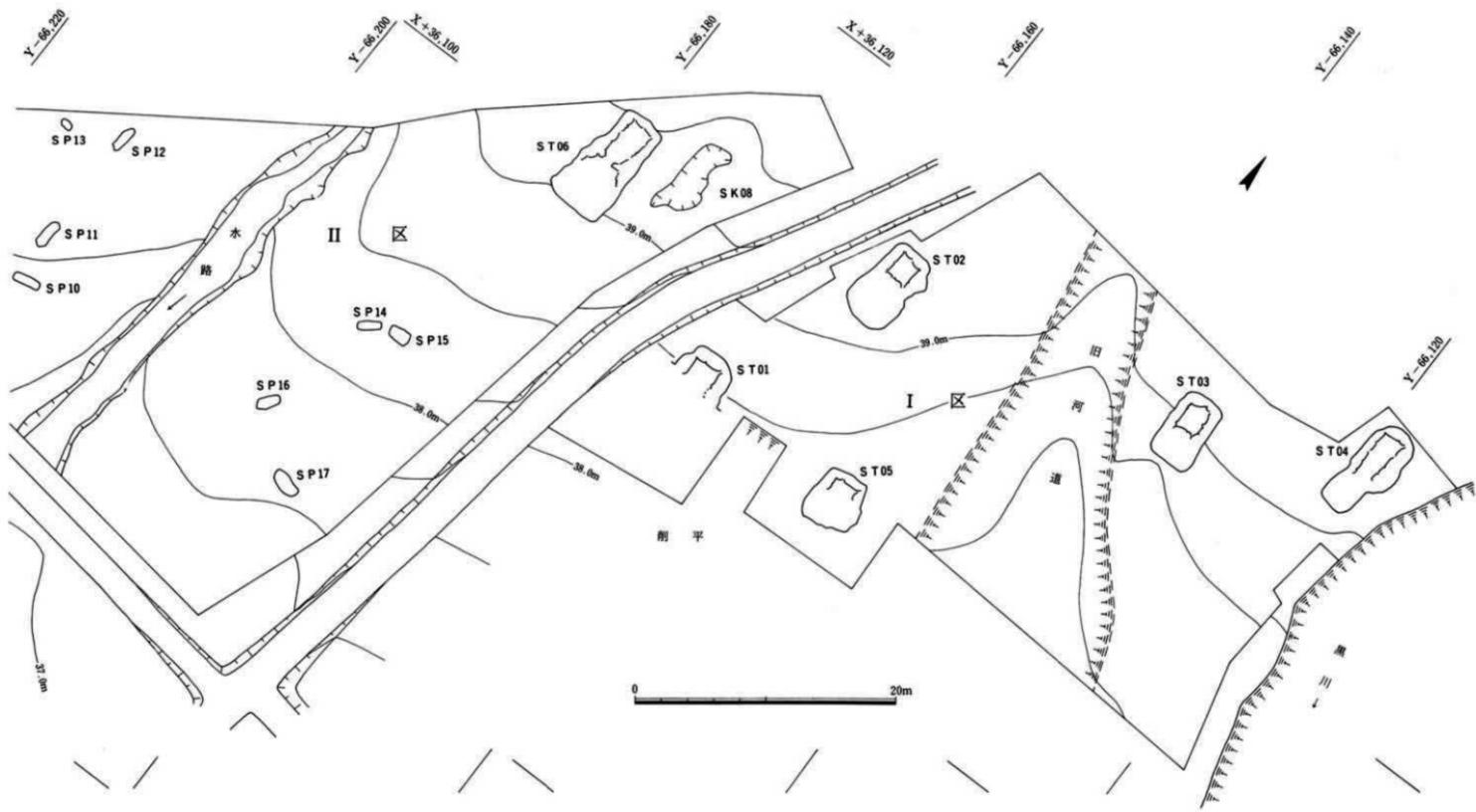


Fig. 6 I + II + III区遺構配置図 (Y<sub>360</sub>)



棺墓が切っているなど、墓地造営集団の系譜という点でいえば前半期からの継続性に乏しい觀があり、一時期空白をおくようである。甕棺はS J 27の1基のみ大型甕2個を接口、S J 33は小型甕の口縁部を打ち欠いてやや大型の甕で覆口、他は鉢を被せるか単棺である。甕の形態は大型品でも甕の名残りをいまだとめており、専用棺として未成熟な段階にある。棺としての容量からみて成人用と小児用とがあるが、前半期のように墓域を分けることはもはや行なってはいない。

その他S P 48石蓋土塚墓およびS P 57土塚墓も北頭位で、しかも前者はS J 42・S J 43を切つており、甕棺墓とおよそ並行する時期と推定する。

副葬品はS J 40甕棺の碧玉管玉1点、S P 48石蓋土塚墓の小壺1点などと少ない。

以上の弥生時代墓地の範囲は、その東側は道路に切られるが、すぐに水路をおいて約1m一段高くなっている。また建物のあった西北隅は試掘で遺構の拡がりは認められず、南側だけではなく、北側も遺構群の縁辺部にちかい様相を示す。したがって、道路や水路および古墳周溝によって一部破壊されてはいるが、これを一応完結にちかい墓地の一群と把えてよいであろう。

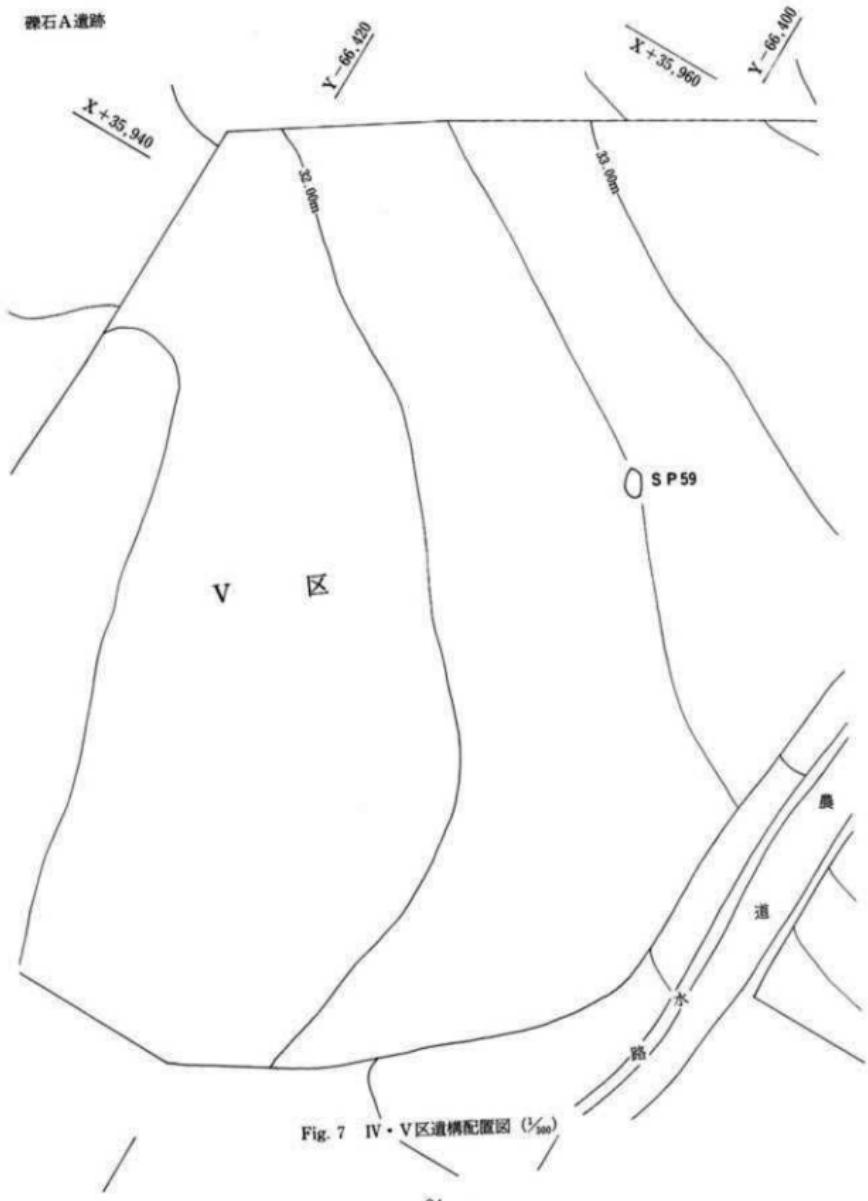
次に、古墳時代ではI区・II区の古墳7基は横穴式石室で、周溝をもたないものも含め全て円墳と思われるが、いずれも盛土は削平され、石室も殆ど腰石のみあるいは奥壁のみといった遺存状況である。築造時期は7世紀代で、追葬は一部8世紀まで続く。破壊が進んでいるため遺物はあまり残していないが、S T 04古墳からは文字ヘラ書きの土師器が1点出土しており注目される。

IV区の古墳2基は共に6世紀前半に遡る可能性のある比較的大型の円墳で、S T 49古墳は周溝のみ残して石室は完全に削平されている。S T 50古墳は内面を赤彩し、基部に板石を用いた横穴式石室をもつ。

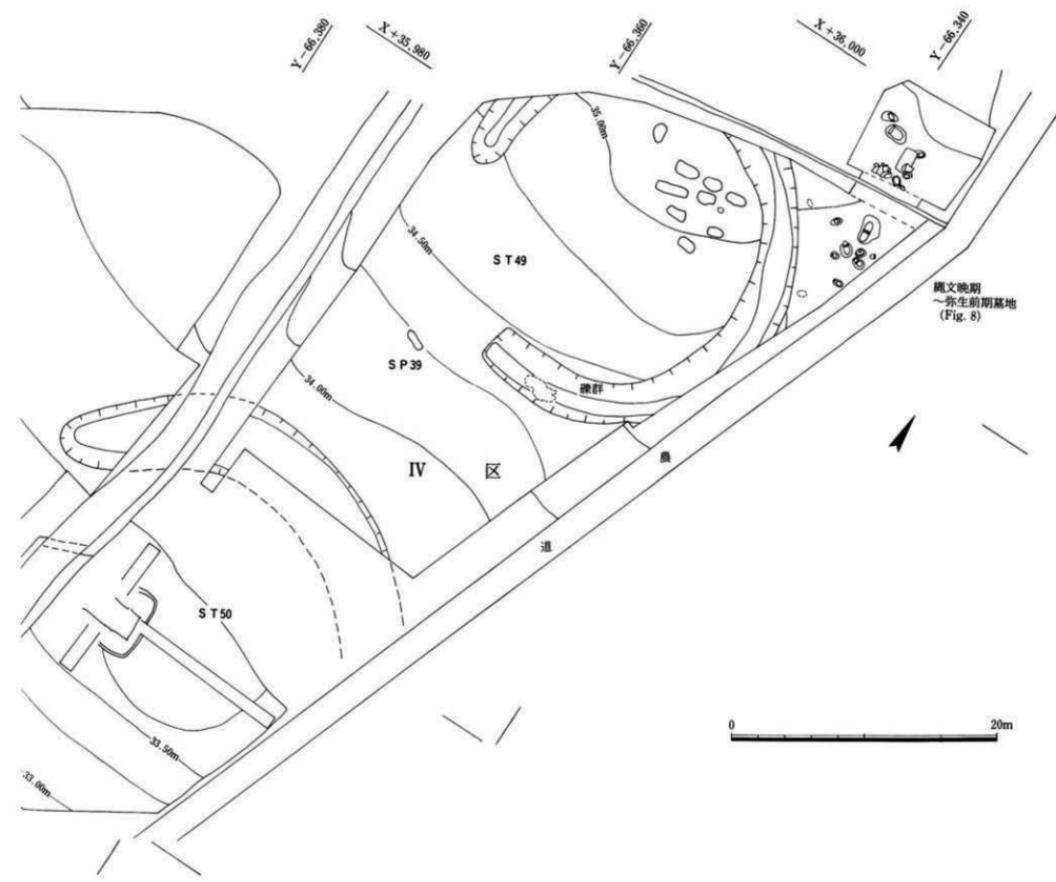
調査区以外を含めた古墳群全体としては、IV区北方に円墳1基、I区・II区北方にも楕円形の中に円墳らしいわずかな高まりがあり、おそらく段丘上方の北に向かってなお5・6基程度は存在するであろう。

その他土塚墓はS P 10・S P 12・S P 14が7世紀後半にII区・III区で出現し、奈良時代以降に多く造られる土塚墓群の先駆けをなす。形態は長方形または隅丸長方形で、須恵器をわずかに副葬する。7世紀後半といえば、一方でまだ古墳が造営されていたとみられ、また、その後もしばらく追葬が続いている。古墳から土塚墓・木棺墓への移行期にあたるこの間の両者の時間的・系譜的関係およびその歴史的背景が問題となる。同様に古墳との関係が問題になる土塚墓・木棺墓群の例は久池井一本松遺跡でも見つかっている。

最後に、奈良・平安時代の土塚墓・木棺墓17基は古墳時代の土塚墓3基に統くもので、方位は一定しないながらも群としてみた場合、II区で水路を挟んで東側3基(S P 15・S P 16・S P 17)、西側3基(S P 09・S P 11・S P 13)、III区で9基(S P 18~S P 26)の3群を示す。



周文晚期  
～弥生前期墓地  
(Fig. 8)



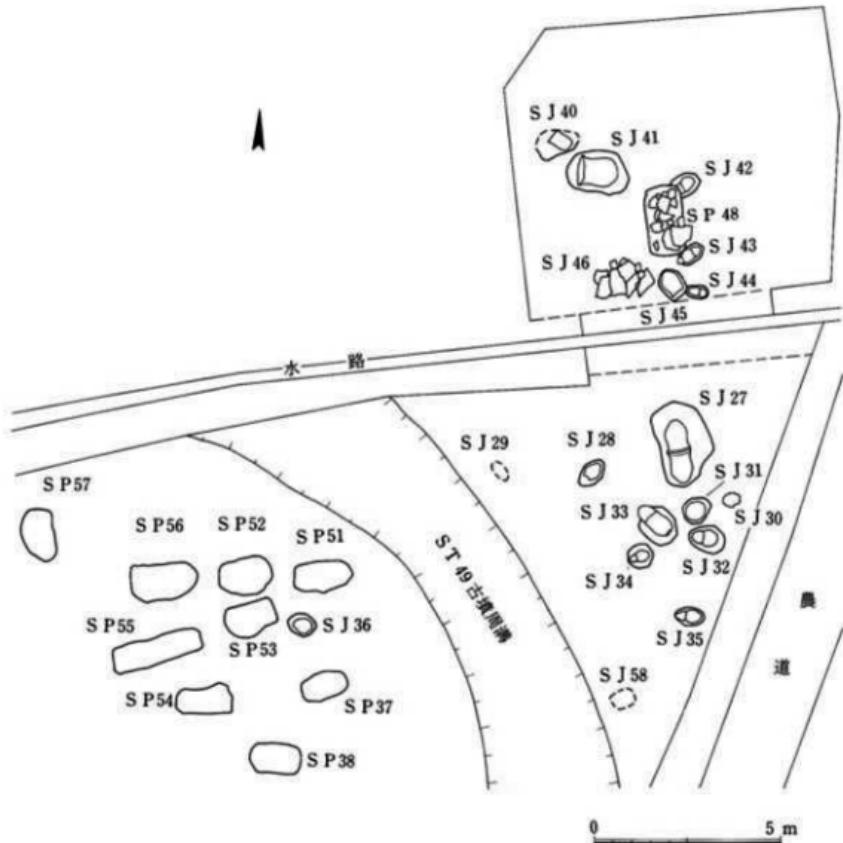


Fig. 8 IV区埋葬遺構配置図 (1/50)

さらにIV区とV区で各1基が単独で存在する。S P15木棺墓のみ棺釘の出土等から木棺であることは確かであるが、大部分は直葬と思われる。形態はS P24土壙墓が梢円形を呈す以外は基本的に長方形あるいは隅丸長方形である。17基中、時期がわかる4基は8世紀末～10世紀初にあたる。なお、時期が確定できない土壙墓については7世紀まで遡るものも含む可能性も否定できないが、ここでは一応奈良・平安時代に含めて扱っておく。

副葬品は4基から土師器が出土したが、概して貧弱である。

その他旧石器・縄文時代については遺構は確認できず、遺物のみ若干採集した。

## II. 遺構

## 1. 弥生時代

夜臼式の段階を弥生前期と合わせて説明する。

IV区北隅で壺棺墓11基・甕棺墓6基・石蓋土塚墓2基・土塚墓9基の計28基検出した。櫻石B遺跡の例からみて支石墓の可能性のあるものを多く含むが、削平のため上部構造は不明であり、本体の構造により壺棺墓・甕棺墓と土塚墓・石蓋土塚墓とに分ける。

Tab. 1 IV区埋葬遺構一覧表

遺構番号	種別	形態	墓壙(長・幅・深)cm	方位	埋置角	副葬・供献品	備考
S J 27	甕棺	甕+甕	223×130×50	N 8°W	13°		敷石2
S J 28	壺棺	壺+甕	78×53×α	S 47°W	21°		
S J 29	〃	〃		N 47°W			
S J 30	〃	〃		N 81°E	25°		
S J 31	甕棺	甕+甕	66×80×70	N 19°W	55°		
S J 32	壺棺	壺+甕	100×70×α	N 73°W	27°		
S J 33	甕棺	甕+甕	110×90×80	S 56°E	51°		上面に櫻石か
S J 34	壺棺	壺+甕	68×56×30	S 73°W	29°		
S J 35	〃	甕+甕	84×47×60	S 87°W	35°		
S J 36	〃	〃	68×58×40	N 78°W	46°		
S J 37	土 墓	楕丸長方形	128×70×20	S 76°W			
S P 38	〃	〃	137×81×41	N 84°W		碧玉管玉3	
S J 40	甕棺	甕+鉢	115×65×50	S 83°W	14°	碧玉管玉1	
S J 41	〃	甕单棺	165×107×40	N 85°W	22°		配石2
S J 42	壺棺	壺+甕	85×60×α	S 55°W	7°		壺の口・底を壺で塞ぐ
S J 43	〃	壺+甕2	75×48×α	S 58°W	26°		
S J 44	〃	壺+甕	54×36×40	N 73°W	31°		
S J 45	甕棺	甕单棺		S 29°E	15°		
S P 46	石蓋土塚	楕丸長方形	105×75×65	S 87°W		勾玉2	石蓋6, 敷石4
S P 48	〃	長方形	189×97×63	N 6°W		小壺1	南北両小口と西側壁に立石
S P 51	土 墓	楕丸長方形	153×78×20	S 83°W		碧玉管玉3	
S P 52	〃	〃	152×92×31	S 85°W		碧玉管玉4	東西小口に立石各1
S P 53	〃	〃	141×74×37	S 74°W			西小口に敷石1
S P 54	〃	〃	153×75×42	S 86°E		土製勾玉1	
S P 55	〃	長方形	244×75×30	S 75°W			敷石を東小口2, 西小口1
S P 56	〃	楕丸長方形	171×93×29	S 85°W		碧玉管玉1	
S P 57	〃	〃	143×83×20	N 20°W			
S J 58	壺棺	壺+(甕)					無平著しい

## (1) 壺棺墓・壺棺墓

S J 27壺棺墓 (Fig. 9, PL. 7)

合口式壺棺墓である。棺内にある程度黒色土が流入したあと漬れているが、壺棺そのものは削平を被っていない。上下壺棺それぞれの上面を破壊して径30~40cm大の花崗岩礫が1個ずつ乗っているが、標石等の上部構造にあたるかどうかは不明である。むしろ壺棺が漬れたあとの窪みに投げ込まれたと考えるのが適当であろう。

壺棺本体はまだ壺の名残りをとどめる大型壺2個の口を合わせて使用している。下壺胴部下

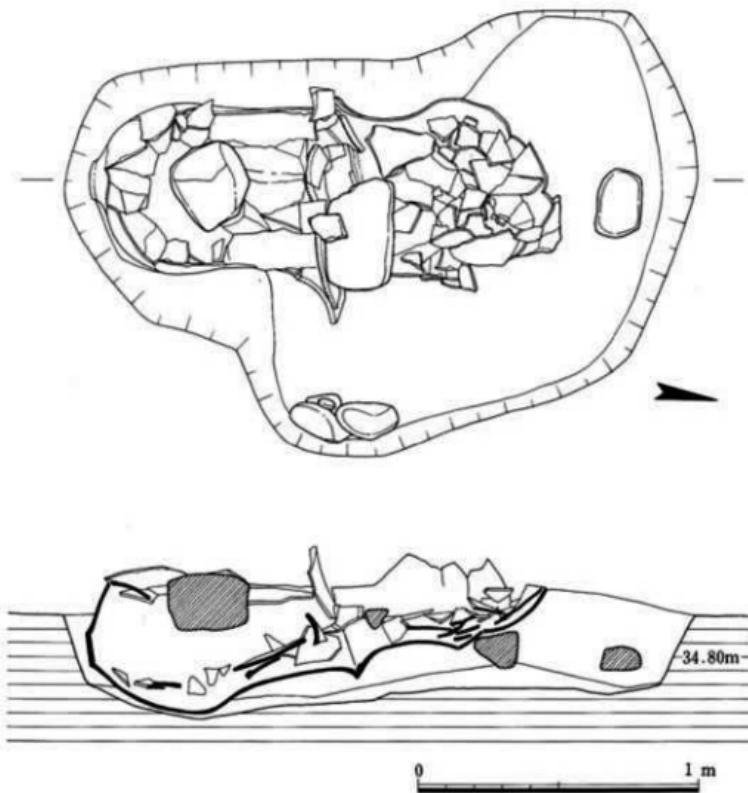


Fig. 9 S J 27 壺棺墓 (3/2)

### 森石A遺跡

位に穿孔がある。頭位方向N 8°W, 埋置角度13°で、比較的水平にちかい。上蓋の下にはこれを支持する花崗岩壺を1個置いている。ただし他の壙底東側および北側にみえる小壺は地山の壺と思われる。

墓壙は橢円形で、検出面での長さ2.23m, 幅1.3m, 深さ0.5m。北側と東側の張り出しある。墓壙が黒色土を掘り込んでおり地山との境が不明瞭なため、調査の際に掘りすぎた感がつよい。

#### S J 28壺棺墓 (Fig. 10, PL. 7)

壺を身とし、蓋を蓋に使用する。ただし上面はかなり削平され、壺の約 $\frac{1}{3}$ しか原位置を保っていない。

埋置は壺を壙底より約10cm浮いた状態で横に寝かせている。頭位S 47°W。

墓壙は検出面で橢円形を呈し、長径0.78m, 短径0.53m。壙底は頭位にあたる西南側がやや高くなる。

使用された壺は丹塗磨研の大型壺で、胴部下位に穿孔を施している。蓋は胴部上位で屈曲するが、屈曲部および口縁部とも刻目をもたない特殊な形式である。

#### S J 29壺棺墓 (Fig. 10)

削平により、身に用いた壺の胴部のみ一部原位置をとどめる。蓋の壺は付近に破片が散らばっていた。蓋は胴部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すスヌが付着する。

墓壙の形状、頭位、埋葬角度等は不明である。

#### S J 30壺棺墓 (Fig. 10, PL. 7)

壺を身とし、蓋を蓋に使用する。上面削平のため、壺・蓋とも一部のみ原位置を保つ。ただし、いずれも器形全体の復元は可能である。

埋置は壺を横置きにし、壺肩位まで壺を被せている。穿孔の有無は不明である。頭位N 81°E。

墓壙は掘り込みが浅く、地山上層の黒色土で終わっており、プランは検出できなかった。

使用された壺は頸部が比較的短く立ち、他に比べやや小型の壺で、口頸部打ち欠きの有無は不明である。蓋は胴部が屈曲せずに立ち上がり、口縁部に刻目突帯をめぐらし、転用を示すスヌが付着する。

#### S J 31壺棺墓 (Fig. 10, PL. 8)

壺棺の部類に入れておくが実際には大型の壺を身とし、鉢にちかい大型蓋を蓋とする。保存良好で、棺内には殆ど流入土がなく、壺底部に小量の骨粉が残っていた。

埋置は比較的挟い墓壙に口頸部を完全に打ち欠いた壺を据え、胴部下位に穿孔を施す。蓋壺

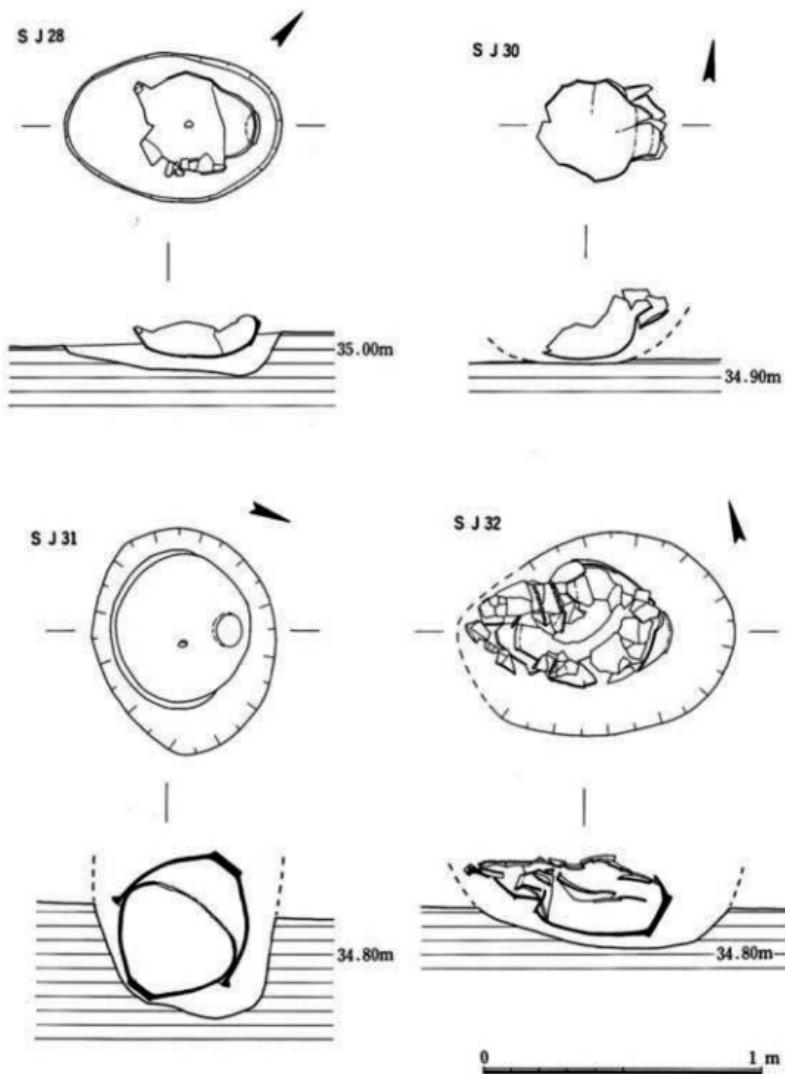


Fig. 10 S J 28 • S J 30 • S J 32 壺棺墓 • S J 31 壺棺墓 (32)

### 標石A遺跡

は口縁部に断面三角形の突帯をめぐらせる。なお蓋窓は埋土上面にあたる体部下位に穿孔がみられるが、機能上はとくに意味のない位置の穿孔であり、もともと身に使用される予定ではなかったかと推測する。頭位N19°W、埋置角度55°はこの一群の弥生埋葬の中で最も急である。

墓壙は不整円形を呈し、検出面で径0.66～0.80m、深さ0.7m。平面形のわりには深い。

### S J 32壺棺墓 (Fig. 10, PL. 8)

壺を身とし、壺を蓋に使用する。上面が潰れているが、身・蓋とも保存良好である。

埋置は壺を横置きにして口頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その肩位まで壺を被せている。穿孔はない。頭位N73°W。

墓壙は椭円形であるが、黒色土を掘り込んでいたため形状がはっきりせず、地山まで下げてようやく検出した。壙底は頭位側に向かって若干上がる。検出面で長さ1.0m、幅0.7m。

使用された壺は丹塗磨研の大型壺で、頭部はやや急に立ち上がり、胸部は肩が張り平底。壺は胸部上位が屈曲して刻目突帯文をめぐらせ、転用を示すスヌが付着する。

### S J 33壺棺墓 (Fig. 12, PL. 8)

覆口式の壺棺墓である。上壺が割れて埋土が詰まっていたが、全体に保存良好である。

壺棺中央の合わせ部上面には長さ37cm、厚さ15cmの花崗岩蹠が立った状態で壺棺一部を破壊していた。いわゆる地上標識にあたるかどうか確認できないが、当初の立石とすれば壺棺の陥没に伴い20～30cm落下したとして、仮に上壺覆土厚20cmの場合に地上露出高は20～30cmとなり、標石としての用はなしえよう。

壺棺のうち下壺は比較的小型で、口縁部を完全に打ち欠き、胸部下位に穿孔を施す。上壺はやや大型で、下壺に深く被せている。容量としては完全に成人を葬るに足る程ではない。頭位S56°E、埋置角度は51°と急である。

上・下壺とも胸部は緩やかなS字形を描き、壺の名残りをとどめており、上壺は口縁下に2条沈線をめぐらせる。下壺は口縁部を欠くが、これと同様であろう。

墓壙は2段掘りで、上段は椭円形に東西側を広く掘ったのち、下段を円形に垂直にちかく掘り下げている。検出面で上段は長径1.1m、短径0.9m、下段は径約0.7m、深さ0.8m。

### S J 34壺棺墓 (Fig. 11, PL. 8)

壺を身とし、壺を蓋に使用する。上面削平のため壺は約 $\frac{1}{2}$ 、壺は約 $\frac{1}{5}$ 程度しか残存していない。

埋置は壺の口頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その面を上にして横置きにし、肩位まで壺を被せる。穿孔はない。頭位S73°W。

壺は丹塗磨研で比較的小型、頭部が短く立ち、底部は丸底気味で薄い。壺は胸部が屈曲せず

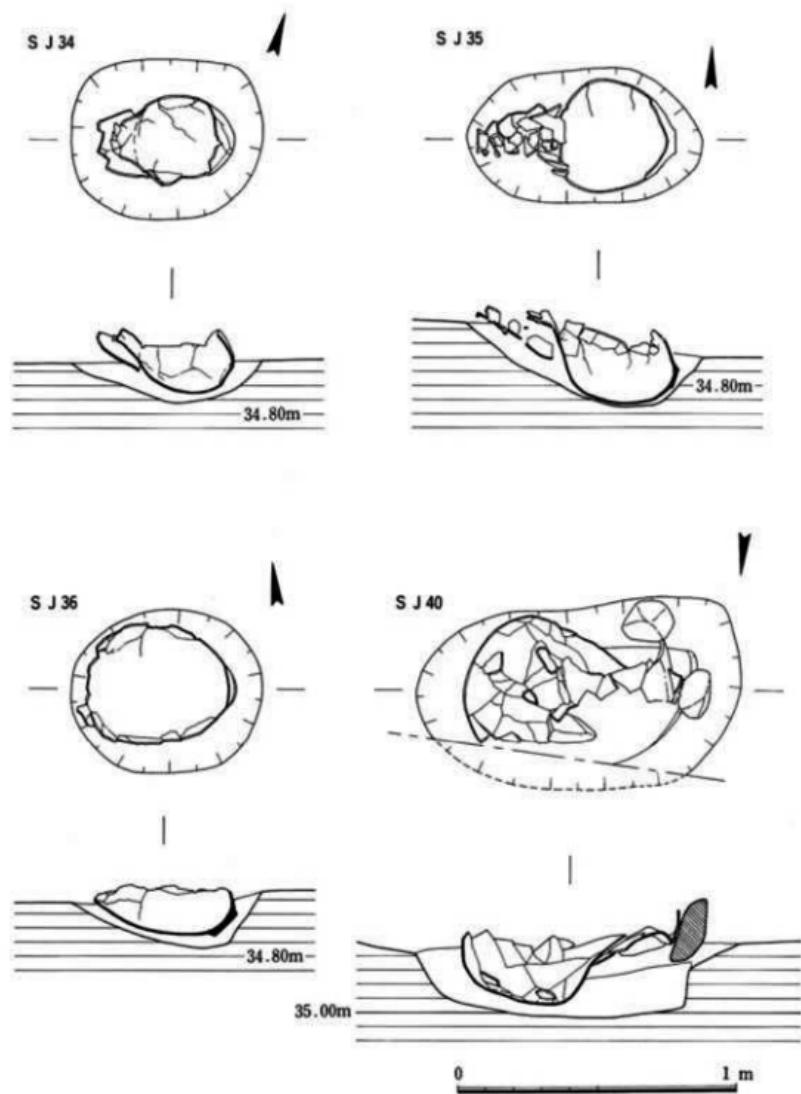


Fig. 11 S J 34 • S J 35 • S J 36 • S J 40 壺棺基 ( $\frac{1}{20}$ )

### 標石A遺跡

に立ち上がり、口縁部は板付式壺に特徴的な如意形の原型を思わせるかのように若干外反する。ススが付着しており、転用であることを示す。

墓壙は梢円形で、壙底は頭位に向かって上がる。検出面で長径0.68m、短径0.56m、深さ0.3m。

#### S J 35壺棺墓 (Fig. 11, PL. 9)

壺を身とし、蓋を蓋に使用している。削平のため、身蓋とも上面を破壊されている。

埋置は壺を壙底に直接横置きし、肩位まで壺を被せる。口頸部は打ち欠きと推定する。穿孔はない。頭位S 87°W。

壺はやや大型ながら、口頸部は短く立って古式をとどめる。壺は胴部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すススが付着している。

墓壙は梢円形を呈し、検出面で長さ0.84m、幅0.47m、深さ0.6m。壙底は頭位に向かって上がる。

#### S J 36壺棺墓 (Fig. 11, PL. 9)

本例1基のみ、西側の成人用土壙墓群中に位置する。壺を身とし、蓋を蓋に使用する。上面削平のため、壺は口縁部を欠失し胴部 $\frac{1}{3}$ 程度しか原位置を保たず、壺は口縁部の破片が付近に散らばっていた。

埋置状態の詳細は不明であるが、壺は壙底に直接横置きされており、これに壺が被っていたであろう。穿孔はない。頭位N 78°W。

壺は頸胴部が発達しやや肥大化した丹塗磨研の大型壺、壺は胴部上位が屈曲して刻目突帯文をめぐらせ、転用を示すススが付着する。

墓壙は梢円形と考えられ、壙底は頭位に向かって上がる。検出面で長さ0.68m、幅0.58m、深さ0.4m。

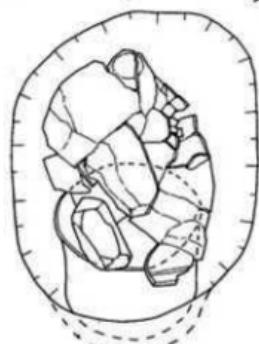
#### S J 40壺棺墓 (Fig. 11, PL. 9)

大型の壺を身とし、蓋に鉢を被せる。一群中最も北に位置する。上面は削平が著しく、さらに遺構の北側約 $\frac{1}{5}$ は家屋の基礎によって切られており、そのため壺は $\frac{1}{2}$ 程度、鉢は口縁の一部しか残っていない。

埋置は壺を壙底に直接据えて胴部下位に穿孔を施し、鉢を被せる際に鉢の下端を花崗岩蹠で押えている。壺の口縁部南側にも花崗岩蹠はあるが、支えにはなっていない。ただし、壺の口径に比べて鉢の口径が小さいことからすれば、鉢は壺の口内に落し込むように蓋をしてあった可能性がつよい。頭位S 83°W、埋置角度は14°で横置きにちかい。

壺は未だ壺の名残りをとどめ、完全に成人を葬るに足るほどの容量はないが、専用棺といえ

S A 33



S A 41

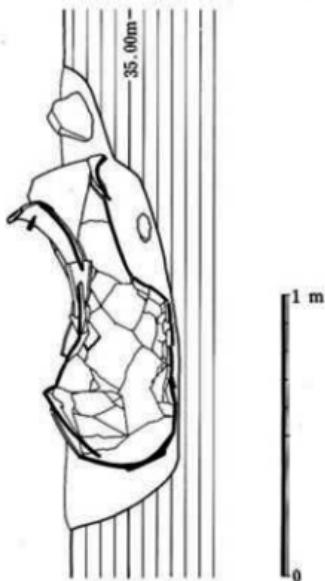
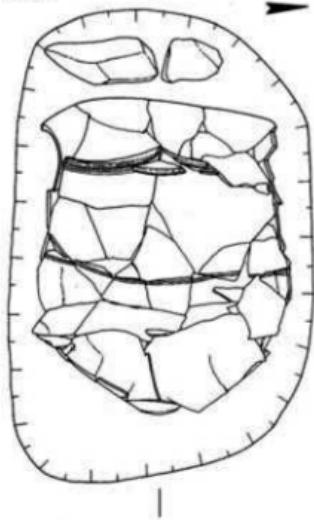


Fig. 12 S J 33 · S J 41 製 構 基 ( $\frac{1}{20}$ )

### 石A遺跡

る程度には十分大型化している。また、鉢は口縁部と体部上位に未発達な三角突帯をめぐらす。

墓壙は二段掘りで、上段は頭位側を斜めに広く掘り込み、さらに壺を埋め込む分を深く掘り下げている。検出面で長径1.15m、短径（復元）0.65m、深さ0.5m。

出土品は壙底中央やや東寄りで壺棺下から碧玉製管玉1個が出土した。埋め土に混入した可能性はあるが、一応本遺構に伴うものとしておく。

#### S J 41壺棺墓 (Fig. 12, PL. 10)

単式壺棺墓である。上面が潰れているが、保存は良好である。

壺は未だ壺の名残りをとどめる大型壺を墓壙底に横置きする。頭位N85°W。埋置角度22°。胸部下位に穿孔を施す。

墓壙は二段掘りにちかい隅丸長方形で、検出面で長さ1.64m、幅1.07m、最深0.4mをはかり、頭位側に向かって壙底がやや上がる。墓壙上段にあたる西側には花崗岩蹠を2個並べているが、これは木蓋等を押さえるための処置であったかと推定する。

#### S J 42壺棺墓 (Fig. 13, PL. 10)

壺を身とし、壺を蓋に使用する。上面の削平とSP48石蓋土壤基の掘形により、壺は胸部下半を欠失する。

埋置は壺の口頭部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠き、その面を上にして直接壙底に横置きし、胸部西北側と口縁部東南側に花崗岩小蹠を各1個置いて支えとする。壺は壺肩位まで深く被せる。頭位S 55°W。

壺は口頭部が立つ丸底気味の丹塗磨研、壺は胸部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すスヌが付着する。

墓壙は梢円形で、検出面で長径（復元）0.85m、短径0.60m。

#### S J 43壺棺墓 (Fig. 13, PL. 10)

S P48石蓋土壤基に墓壙北側、一部切られるが、壺棺を破壊するまでは達していない。底部を欠いた壺を身とし、壺2個を用いてその口縁部と底部をそれぞれ塞ぐ。

埋置はまず壺を壙底に直接横置きし、壺は口縁部を下にして斜めにこれを差し込み、さらに壺底部の欠損部を別の壺で蓋をしている。通例の壺口頭部の打ち欠きはなく、胸部穿孔も施さない。頭位S 58°W。

壺は胸頭の境がはっきりしない丸底気味の丹塗磨研、壺は2個とも胸部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すスヌが付着する。

墓壙は梢円形で、黒色土面での検出が困難なため深く掘り下げた。検出面で長径0.75m、短径0.48m。壙底はほぼ水平にし、壁は頭位側を斜め約45°に削り上げている。

II. 造 構

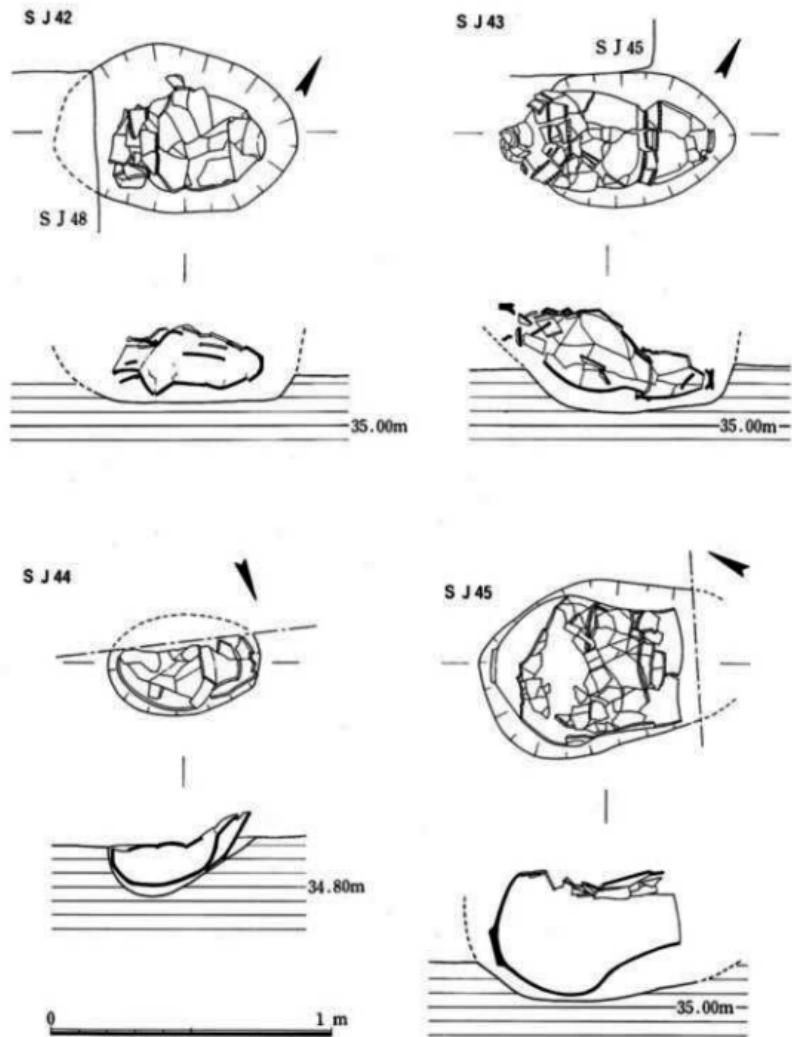


Fig. 13 S J 42 • S J 43 • S J 44 壺棺墓 • S J 45 壺棺墓 ( $\frac{1}{20}$ )

### 礫石A遺跡

壺と甕が計3個体連結された例は一群中本例しかなく、意味は不明である。単に屍体の身長との関係であるとしても、底甕から蓋甕までの間隔が75cmであるのに対し、壺口径はわずか16.4cmで、しかも口頸部の打ち欠きを行わぬことからすれば、それも疑問である。むしろ壺底部は何かの理由ではじめから破損していたと考えた方がよいかもしれない。同様に壺底部を別の壺底部で塞いだ例は礫石B遺跡のS A22支石墓にみられるが、ただしそれでは通常どおり壺に甕を被せている。

#### S J 44壺棺墓 (Fig. 13, PL. 10)

壺を身とし、甕を蓋に使用する。南側を水路掘削によって切られ、壺・甕とも約 $\frac{1}{3}$ を欠失する。埋置は壺の口頸部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その面を上にして直接墳底に横置きし、肩位まで甕を被せる。穿孔は無い。頭位N73°W。

壺は頸部が立つ丸底気味の丹塗磨研、甕は胴部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すスグが付着する。

墓壙は梢円形を呈し、壺棺をようやく収める程度の狭い掘り込みである。検出面で長径0.54m、短径（復元）0.36m、深さ0.4m。

#### S J 45壺棺墓 (Fig. 13, PL. 10)

単式の甕棺である。棺内に埋土流入後やや潰れ、削平により胴部上面を多少欠失するが、ほぼ完形である。また墓壙は東南側を水路掘削によって破壊され、南側ではS J 44壺棺墓の墓壙を少し切る。

墓壙はほとんど墳底ちかくまで掘り下げてようやく検出できた。墳底は平坦をなさず、頭位に向かって少し上がる。棺は墳底に直接横置きし胴部下位に穿孔を施す。頭位N29°E。蓋は別の甕あるいは板石が用いられた形跡はなく、木蓋等有機質の蓋であった可能性がつよい。

棺に使用された甕は胴頸間と口縁下に沈線をめぐらせ、壺にちかい形態を残すが、容量は専用棺といえるまで大型化している。

#### S J 58壺棺墓 (Fig. 8)

墓域の南端に位置する。上面は殆ど削平され、丹塗磨研壺の胴部がわずかに残存するにすぎない。壺を身とし、甕蓋が被っていたと推定される。

II. 遺構

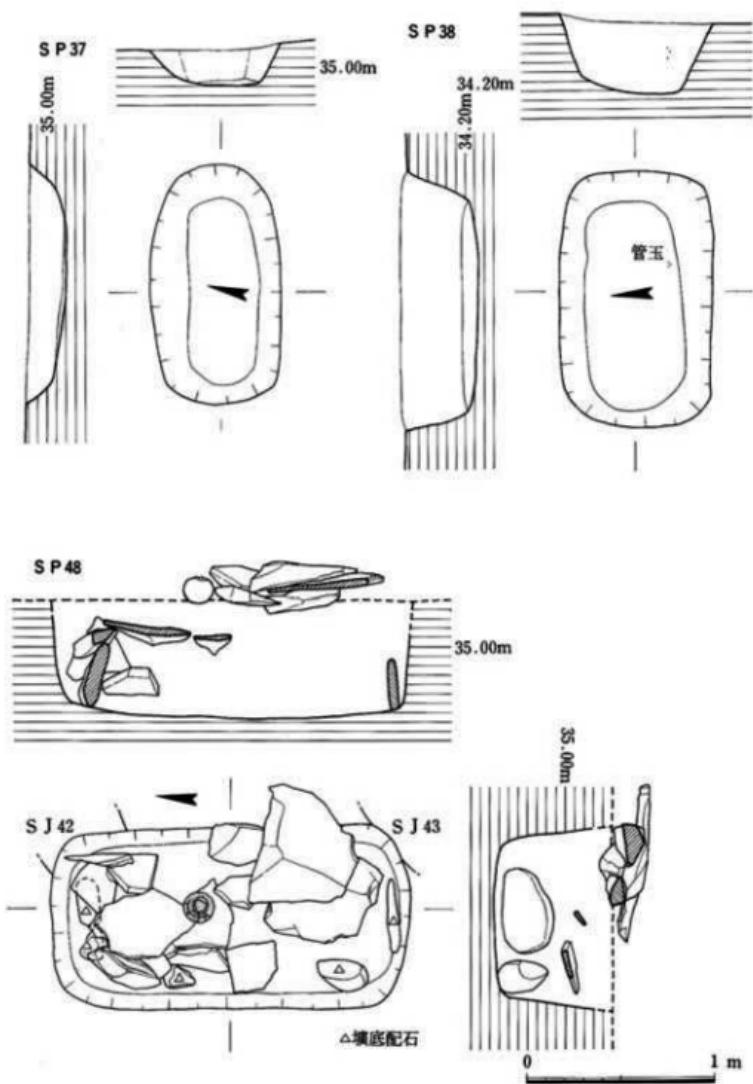


Fig. 14 SP 37・SP 38・SP 48土壤墓 ( $\lambda_{20}$ )

(2) 土壙墓

S P 37土壙墓 (Fig. 14, PL. 13)

上部を削平されて残りが浅い。検出面でみると東側は楕円形を呈するが、西側の形状からみて基本的に隅丸長方形と考えられる。検出面で長さ1.28m、幅0.70m、深さ0.2m。頭位N76°W。四壁とも斜めに掘り込まれ壙底ですばり、壙底はほぼ平坦ながら、頭位とみられる西側に向かってやや上がる。

S P 38土壙墓 (Fig. 14, PL. 13)

隅丸長方形の土壙墓である。四壁はやや斜めに掘り込まれ壙底ですばり、壙底はほぼ平坦である。長さ1.37m、幅0.81m、深さ0.41m。頭位は明確でないが、隣接する他の土壙墓と同じとすれば西とみてN84°W。

副葬品として、中心からやや東寄りの壁際で碧玉製管玉3個が、壙底より約20cm浮いた状態でまとまって出土した。

S P 46土壙墓 (Fig. 15, PL. 11)

壺棺小児墓域の中に位置する石蓋土壙墓である。周辺の削平状態からすれば、さらにその上に上部構造が乗っていた支石墓の可能性も否定できないが、ただし現状では上石・支石等は痕跡すら認められないので単に石蓋土壙墓としておく。

石蓋は平石4枚を主軸に沿って中央から東西両端の順に並べ、その他北西隅と北辺中央を平石各1枚で塞ぎ、さらに小砾を若干補足している。石材は緑泥片岩小砾1個以外は全て花崗岩である。

土壙は隅丸長方形で、一群中唯一、平面形が矩形に比較的ちかく、また保存良好なこともあって堀形が深い。長さ1.05m、幅0.75m、深さ0.65m。頭位は明確でないが、他の土壙墓および壺棺墓に多い西とみればS87°W。四壁はほぼ垂直に掘られ、壙底は平坦である。また壙底には花崗岩小砾4個と緑泥片岩小砾1個を置いている。ただし4個は正しく四隅に配置されているわけではなく、全体として西南隅に寄った観があり、また西南隅の1個が斜めであるなどのためレベルが一定しない。

副葬品として孔雀石製勾玉2個が壙底から約10cm浮いた状態でやや離れて出土した。

このような検出状況から、本遺構の場合、木棺の存在の有無が問題になろう。しかしながら、もし本棺が使用されたとすると、その腐朽後の陥没を考えれば完全に墓壙内側に入っている中央の石蓋2個はもっと沈下したはずと思われるが、実際は埋土のしまりに伴う程度しか落ち込んでいない。また壙底の平石は正しく四隅になく、かつその高低も一定しないため木棺を乗せ

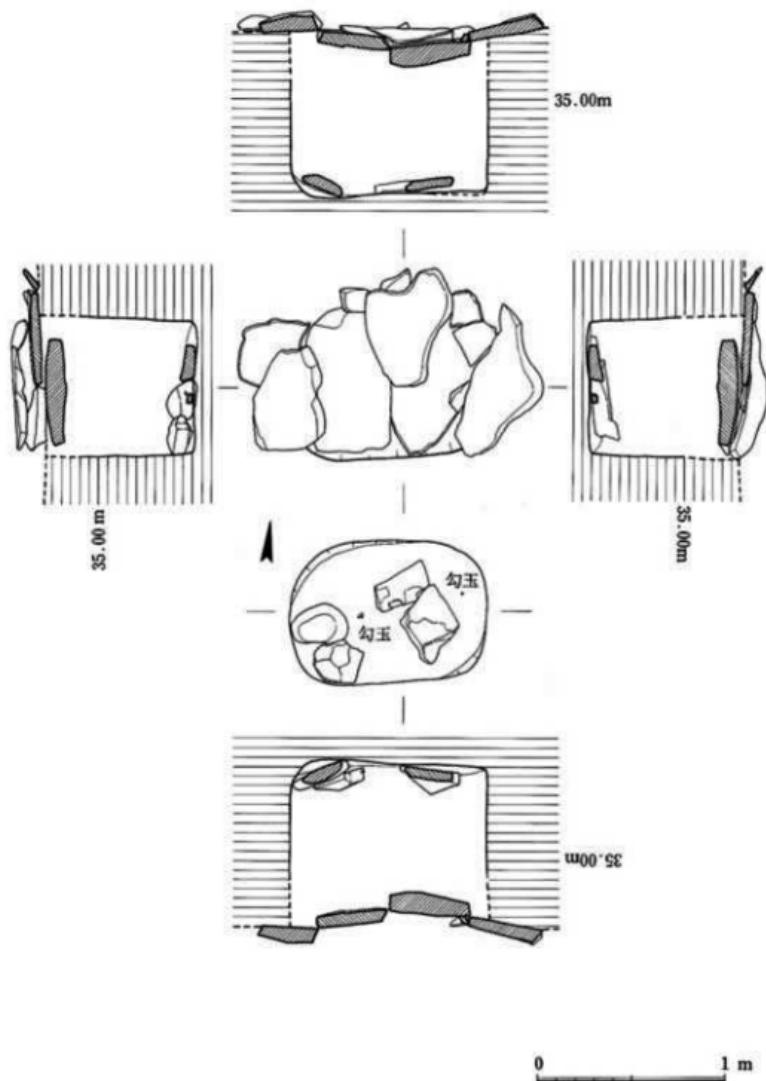


Fig. 15 S P 46土壤基 ( $\frac{1}{20}$ )

### 礫石A遺跡

るにも、あるいは縁を押えるにも不向きである。したがって、屍体を葬る何らかの施設はあったとしても容量の大きな箱形木棺等は考えにくく、あるいは単に底板を置くなど簡便な方法がとられたと考えた方が合理的かもしない。

### S P 48土壤墓 (Fig. 14, PL. 12)

隅丸長方形の墓壙を板石で覆った石蓋土壤墓である。S J 42壹棺墓の蓋壺を一部壊し、S J 43壹棺墓の墓壙を切る。

石蓋は東南側に大小5個の板石が重なりながらかたまっており、必ずしも全てが原位置を保つものではない。上面削平により、大半の石は取り去られたと思われる。石材は全て安山岩系の扁平な板石で、同質の石材は礫石B遺跡のS A 38支石墓の土壤石蓋でも使用されている。

土壙は長さ1.89m、幅0.97m、深さ0.63m、四壁はほぼ垂直にちかく掘られ、壙底は中央がやや下がり気味ながらほぼ平坦である。土壙内には花崗岩の平石が埋没しており、当初、蓋石の落下かと思われたが、その配置状況およびレベル等からみて、木棺等を覆い埋うための石材と推定するに至った。これら平石はまず壙底で北側に2個、南側に1個、西側に2個を置いて棺の基部を固定し、次いで東北隅に壙底から10~15cm浮いた位置に平石を立てて側面から棺を抑え、さらに棺の上面を土壙中央から北半にかけて8個の平石で覆う。これから推定される木棺は長さ1.55m、幅0.5m、高さ0.4m程度の箱形構造である。

頭位は棺を覆う石材の手篤い処置からみて北、N6°Wと考えられる。一群の土壙墓の中で北頭位は他にS P 57土壤墓だけである。

副葬品は土壙中央からやや北寄りの石蓋レベルで頸胸間に突帯をもつ小型壹点が出土した。上面が荒らされているので混入の可能性がないわけではないが、近辺に同時期の遺構はなく、またその出土状況からみて本遺構に伴う供獻品としてよいと考える。

### S P 51土壤墓 (Fig. 16, PL. 13)

東小口側は検出面で梢円形を呈するが、西小口側の形状からみて、基本的に隅丸長方形である。上面はかなり削平され、残りが浅い。四壁は斜めに掘り込まれ、壙底は東半が小口に向かってやや上がり気味ながらほぼ平坦である。検出面で長さ1.53m、幅0.78m、深さ0.2m。頭位は掘形の丁寧さからみて西、S 83°Wと考えられる。

副葬品は北側壙底から碧玉製管玉1個、南側で壙底から約15cm浮いて同管玉2個がまとまって出土した。

### S P 52土壤墓 (Fig. 16, PL. 13)

全体に不整形ながら隅丸長方形の土壤墓である。上位はかなり削平されていると思われる。

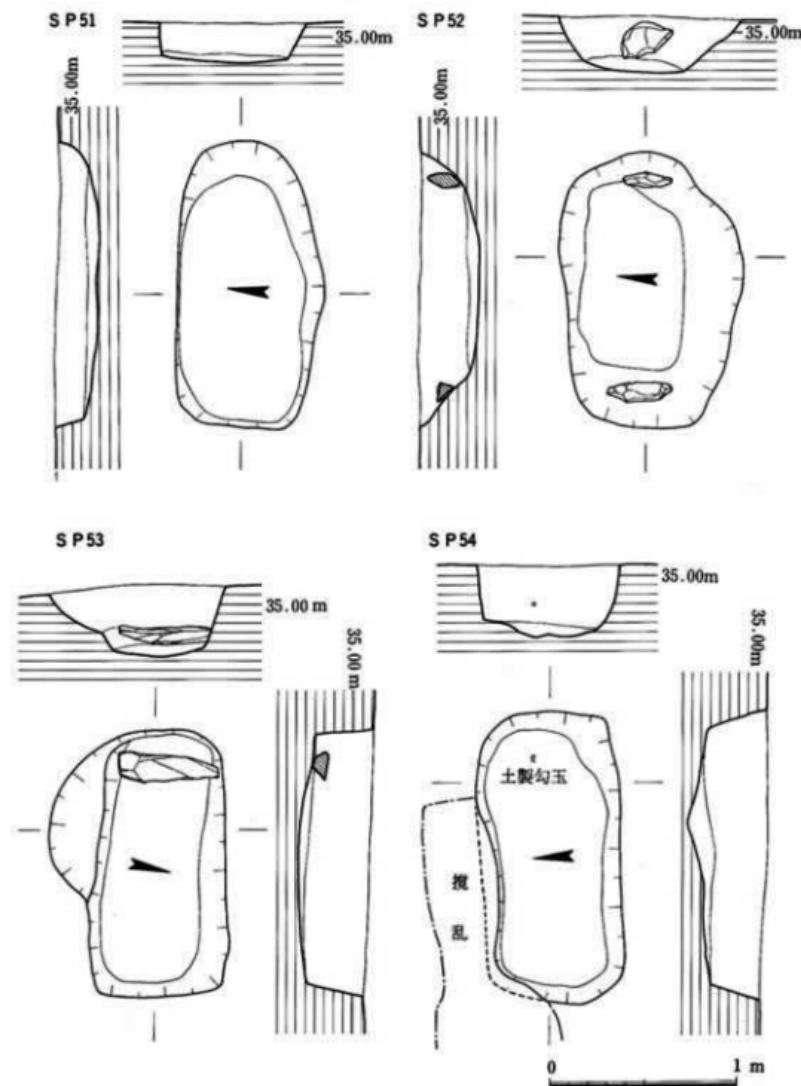


Fig. 16 S P51・S P52・S P53・S P54土壤基 (Y<sub>20</sub>)

### 標石A遺跡

四壁は下位で斜めに掘り込まれており、墳底は上面の広さのわりに狭く、東小口に向かって船底状に広がる。また東西両小口壁際には花崗岩の配石があり、東側では平石を立てる一方、西側では横長の石を主軸に直交させて置く。共に墳底最深部から10~15cm上にあり、木棺等の何らかの棺の固定を意図するものであろう。土壤の規模は検出面で長さ1.52m、幅0.92m、深さ0.31m。墳底配石の東西間隔は1.04mである。頭位は西側配石の長さおよび撮影の丁寧さから西を優位とみてS 85°Wと推定する。

副葬品は排土中検出の1個を含め碧玉製管玉4個が、東半部で墳底から約5~15cm浮いて出土した。

### S P 53土壤墓 (Fig. 16, PL. 14)

隅丸長方形の土壤墓である。南壁が上面で外側に広くなっているが、黒色砂質土での検出のため判別しにくく、掘りすぎかと思われる。検出面で長さ1.41m、幅0.74m、深さ0.37m。

四壁はほぼ直に掘り込み、墳底は西側に向かってやや上がり気味ながらほぼ平坦である。墳底西壁際には長さ53mの花崗岩が主軸に対し横置きされており、おそらく木棺等の棺西小口基部を固定するものではなかったかと測定する。この配石と東壁との間隔は1.08mである。頭位は墳底の上がり方と配石から西とみてS 74°Wと推定する。

### S P 54土壤墓 (Fig. 16, PL. 14)

隅丸長方形の土壤墓である。北壁から西壁にかけ攢乱により上面を破壊されている。検出面で長さ1.53m、幅0.75m、深さ0.42m。

四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底は中央からやや東寄りで約8cmほど窪み、西側に向かってかすかに上がり気味である。頭位は墳底が上がる西とみてN 86°Wと推定する。

出土遺物は東壁際で墳底から約10cm浮いた状態で土製勾玉1点が出土した。丸山遺跡でもS A036支石墓から土製管玉が出土したほか、土製勾玉3点が表探されており、本遺構の場合も副葬品とみてよいであろう。

### S P 55土壤墓 (Fig. 17, PL. 14)

一群中、唯一2段掘りの長方形土壤墓である。上段は全体の東側のみ、検出面で長さ0.74m、幅0.62m、深さ0.18mと浅く掘り込んでいる。下段は長さ1.70m、幅0.75m、深さ0.3m。したがって総長は2.44mと異例に長く、また、幅は上段掘りのある東側に向かってやや狭まっている。

墳底は平坦で、おそらく木棺等の棺の小口基部を固定したと考えられる花崗岩蹠を、東側に2個、西側に1個、主軸に対し横長に置く。両配石間の間隔は0.84mで、棺の長さもこれにちかいと推定できる。頭位は土壤幅の広い西側とみてS 75°W。

II. 造構

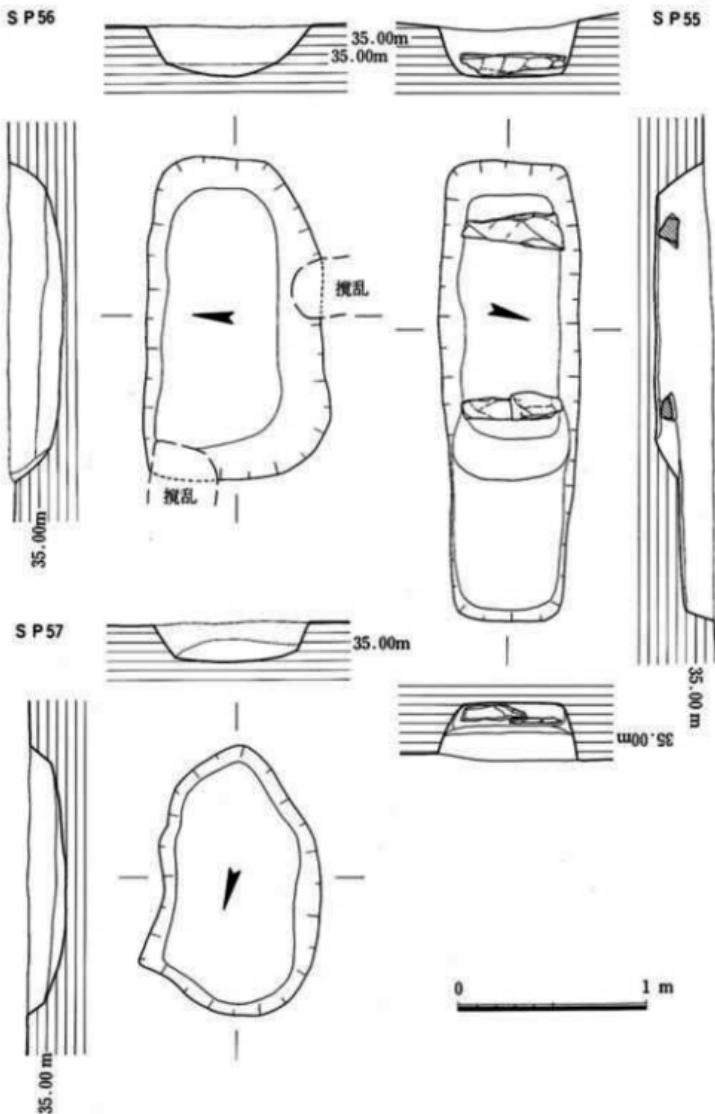


Fig.17 S P55・S P56・S P57土壤基 (1/50)

### 標石A遺跡

上段掘形の意図は不明だが、埋土断面の観察では上下段とも一気に埋められたようである。

#### S P 56 土壙墓 (Fig. 17, PL. 14)

隅丸長方形の土壙墓である。上面はかなり削平されているらしい。検出面で長さ1.71m、幅は中央部0.93mで、西側に向かって広くなる。壁は下位で斜めに掘り込まれており、残存深0.3m。検出面での広さのわりに墳底は狭い。墳底は中央がやや下がり気味ながらほぼ平坦である。頭位は幅の広い西側とみてN85°W。

副葬品は足方とみられる東壁寄りで墳底から約10cm浮いて碧玉製管玉1点が出土した。

#### S P 57 土壙墓 (Fig. 17)

一群中の最西端に位置する。上面は削平されて残りが浅い。全体に不整形で梢円形にちかいが、基本的に隅丸長方形の部類に含められる。検出面で長さ1.43m、幅0.83m、深さ0.7m。

四壁は下部で斜めに掘り込まれ、墳底は中央がやや下がり気味である。頭位は幅のやや広い北とみてN20°W。

土壙墓群の中では唯一北頭位であり、他の土壙墓とは時期を異にし、S P 48石蓋土壙墓および甕棺墓の時期に含められる可能性がつよい。

## 2. 古墳時代

古墳9基、土壙墓3基、土壙1基を調査した。古墳はいずれも盛大を欠失し、主体部は横穴式石室であるが、せいぜい基部しか残っていない。遺構一覧表Tab. 2

Tab. 2 古墳一覧表

( ) は推定

遺構番号	墳 丘 形 態	規 模m	外部施設	内 部 主 体			出 土 遺 物	備 考
				形 態	方 位	石室全長m 玄室周縁(奥-幅)m		
S T01	(円墳)	不 明		横穴式石室	NS'E	3.3+α	α×2.08 刀子、鏡、釘	玄室内残存
S T02	( )	//		//	NS'E	2.57	1.79×1.71 須恵器、土師器、青磁、釘	閉塞一部既存
S T03	( )	//		//	N1°W	2.52	2.20×1.73 須恵器、土師器、白磁、刀子、刷子	閉塞残存
S T04	( )	//		//	N6°E	4.05	2.55×1.62 須恵器、土師器	
S T05	( )	//		//	N2°W	2.5+α	α×1.80 めのう玉	玄室内残存
S T06	( )	//		//	NNNE	4.90	3.25×1.77 須恵器、土師器、玉、釘	
S T07	( )	//		//	N3°E	3.20	1.66×1.30 須恵器、土師器	
S T49	円 墳	21.5	周溝、埴輪 (横穴式石室)	NS'E				周溝のみ
S T50	( )	27	周溝	横穴式石室	SSE	3.4+α	α×1.98 須恵器	玄室内未彩

## (1) 古墳

## S T01古墳 (Fig. 18, PL. 15)

削平により盛土を完全に失い、主体部は横穴式石室の玄室奥壁側半分、それも基段しか残存していない。

玄室は長さ2.5m以上、幅2.08m。主軸方位N 5°E。奥壁には大小2個の石材を立て、側壁は東側2個、西側1個のみ残存する。おそらく東側壁でもう1個、西側壁でもう2個の石材を基部に並べていたであろう。石材は全て花崗岩で、横長に立てて使用することを原則とする。また、床面には花崗岩礫を敷いているが、原状を保つのは奥壁際と玄室前半部のみで、全体に破壊が著しい。

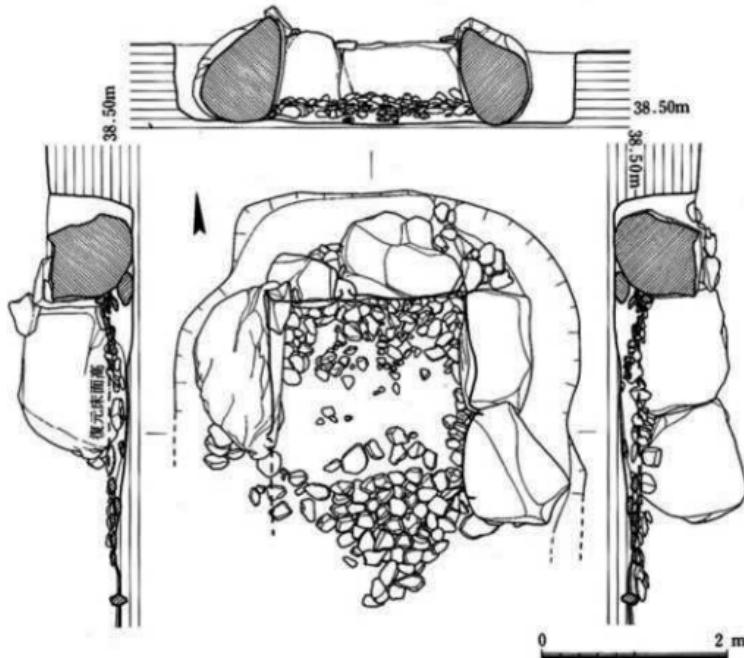


Fig. 18 S T01古墳石室 (1/6)

### 礫石A遺跡

石室構築は、まず石室を造るに足るギリギリ広さで墓壙を掘り込み、西側では石材の寸法に合わせて一部拡張している。壁体基段の石材は壙底に直接並べ、裏込めは殆ど土のみで行う。玄室内は約15cm厚さで土を入れたあと礫床をつくっている。

副葬品は原位置を保つものだが、石室残存部の床面ちかくから耳環1・ガラス小玉49・簪片1・鉄鎌片1・刀子片1・須恵器片・土師器片数点および青磁片1点のほか、木棺の使用を示す鉄釘が数点出土した。

出土した須恵器の時期は遅って7世紀中頃であるが、石室の構造から築造は7世紀前半に遡ると推定する。

### S T02古墳 (Fig. 19-20, PL. 15)

主体部は全体に雑な造りの小形横穴式石室である。削平により盛土は完全に失われ、石室も壁体は2段までしか残っていない。石材は全て花崗岩である。

石室は玄室のみで、羨道をもたない。玄室規模は長さ1.79m、幅1.71m。ほぼ正方形ながら、奥壁が主軸に対し若干斜めになっている。主軸方位はN 5°Eである。

壁体構造は基段で奥壁および両側壁とも墓壙底に直接石材2個を横長に立て、2段目では東側壁で縦長に平置きしている。裏込めは小礫で壁体を押えながら、主に土を入れて固めている。玄門部はその西側で玄室壁に統けて1個だけ、袖石状に石材を立てている。しかし、これに向かう東側玄門の石材は平置きで、すぐ上に2段目の石が載っており、袖石らしい特徴をなさない。玄門床上に並ぶ3個の石材のうち東側の1個を袖石にみて片袖式と考えるにしても、立石でないのでそれも困難である。したがって形式にはやや疑問が残るが、一応、玄門幅がそのまま玄門に統いて開口する

と考えておく。また、玄門内床は小礫を敷いているが、埋没前にかなり荒らされていた。ただし、比較的残りの良い東南隅をみるとかぎりでは、元々雑な敷き方であったと思われる。

玄門部には閉塞石が若干残存していた。床上に並べられた3個の礫は閉塞時の基部を兼ねるが、

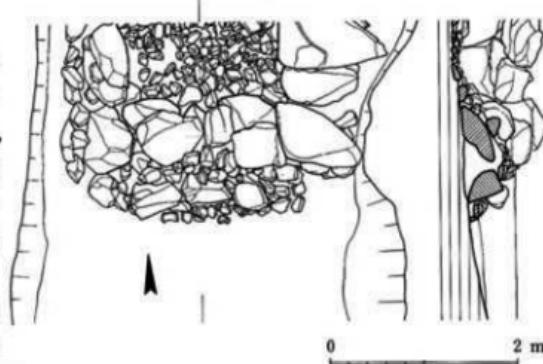


Fig.19 S T02古墳石室閉塞状況

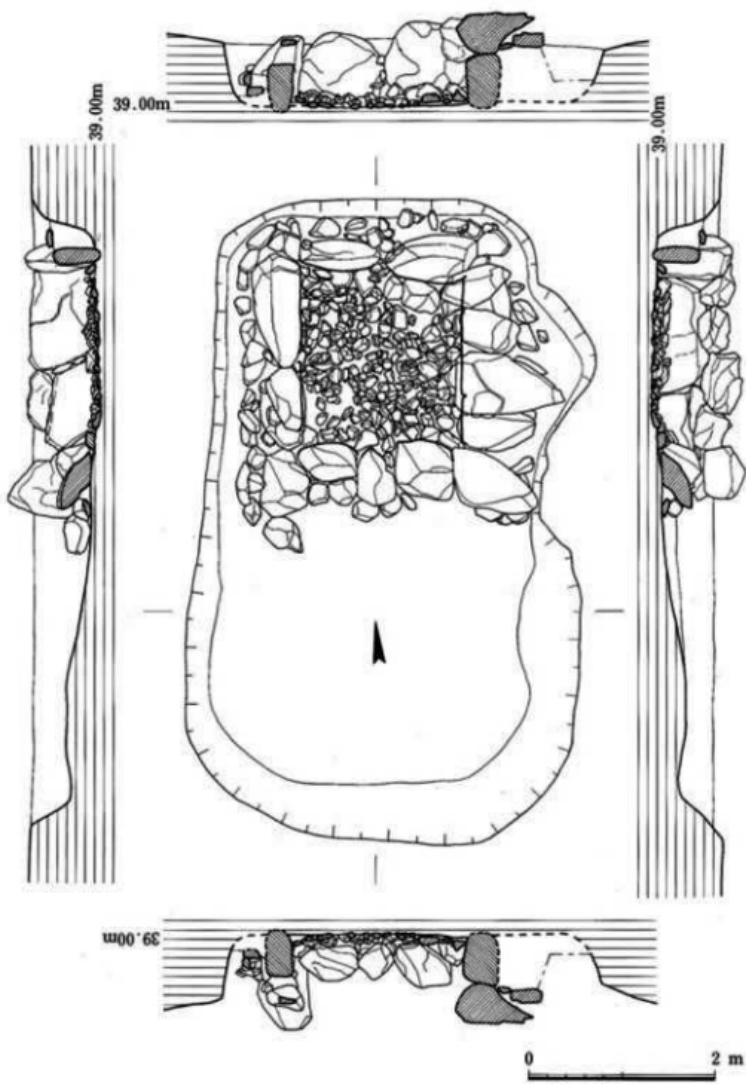


Fig. 20 S T02古墳石室 (古)

### 標石A遺跡

礫床がその下まで続いておらず、石室構築当初から置かれていたとみるのが適当であろう。閉塞は玄室に向けて礫の小口を揃え、土盛りを混ぜながら積み上げている。

墓壙は石室掘形と前庭部とが一体化した隅丸長方形で長さ6.8m、幅3.8mと大型である。石室はその北半分に収まっており、石室前面にあたる南半分約10m<sup>2</sup>はそのまま空閑地となっている。これは埋葬に伴う閉塞作業や儀礼の為のいわゆる前庭部にあたり、元々埋められることなく利用されたと推測され、したがって墳丘は石室をようやく覆う程度の小規模なものか、あるいは全体に石室北側にずれていたと考えざるをえない。

副葬品は玄室床面が荒らされているため残りが良くない。玄室内では東南隅で須恵器平瓶1点、他は玄室および前庭埋土中から須恵器片・土師器片が若干と青磁片で2点のほか、木棺の使用を示す鉄釘が数点出土した。築造時期は7世紀前半である。

#### S T03古墳 (Fig. 21-22, PL. 16)

主体部は横穴式石室で、羨道をもたず玄室のみの構造である。削平により盛土を完全に失い、石室も殆ど基段しか残っていない。石材は全て花崗岩である。

玄室は長さ2.20m、幅1.73m。主軸方位N 1°W。平面形でみると、奥壁および東側壁の並びが不整形、かつ石材が大小不揃いで積み方に一完性を欠くなど、全体の造りは雑である。壁体基段は奥壁に2個、西側壁に2個の石材を立置く。ただし東側壁は奥壁寄りに1個を横長に、もう1個は縦長に立てており変則的である。各石材は墓壙底に直接並べ、壁体の隙間は比較的大念に小礫で埋め、また基部を小礫と土で固めている。玄室内床面には礫が敷かれている。

玄門部は玄室幅でそのまま開口し、西側には縦長の袖石を立てている。一方、東側でこれに対応する用材は半分、玄室側壁を兼用している。また玄門床面には2個の礫を平置きし、玄室と外とを区切っている。

この2個は上面は平坦でないが、框石と閉塞基部を兼ねるものであろう。  
閉塞は若干残っており、玄室側に小口を揃えながら小礫を積み上げている。

墓壙は石室掘形と前庭部とが一体化した隅丸長方形で、石室はその北側約 $\frac{2}{3}$ を占め、南側には約

7 m<sup>2</sup>の空閑地をもつ。

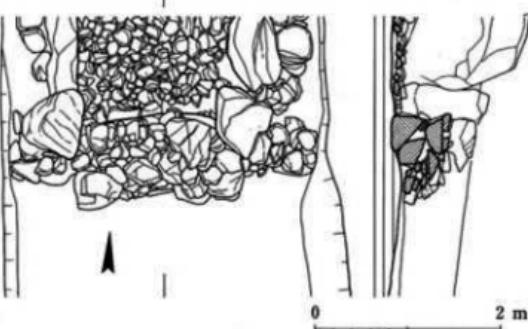


Fig.21 S T03古墳石室閉塞状況

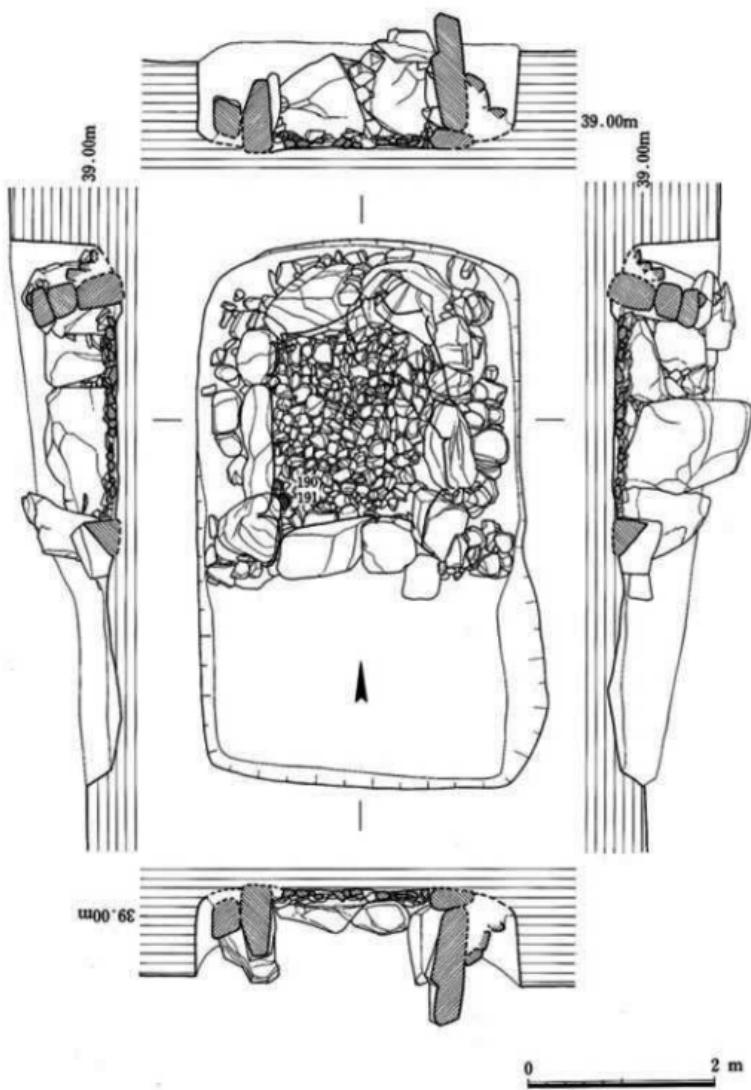


Fig. 22 S T03古墳石室 (V<sub>46</sub>)

### 櫛石A遺跡

S T02古墳同様、閉塞作業と儀礼を兼ねた機能スペースと考えられ、盛土は玄門部より後方北側にあったと推測する。そのことは袖石両外側に小疊が積まれて墓壇内の前後を仕切っていることからもいえることであって、おそらく石室開口部墳裾の土止め処理であろう。

石室は埋没前に荒らされ、遺物の残存は少ない。原位置を保つ副葬品は玄室西南隅で土師器坏3点が重なったまま、他に玄室床面ちかくから刀子1点と管状青銅器片1点、玄室および前庭埋土中から土師器片・須恵器片と白磁片1点が若干出土した。

須恵器に6世紀後半のものを1点含むが、何らかの混入であろう。他は遅って7世紀中頃であり、石室の構造からみても7世紀中頃と推定する。

### S T04古墳 (Fig. 23-24, PL. 16)

主体部は玄室と短い狭道とが一体化した構造の横穴式石室である。削平により盛土は無く、石室も基段と一部2段目までしか残っていない。

玄室は奥壁が主軸に対し斜めで、また狭道は玄室側壁がそのまま伸びながら、西側壁で開口部に向けて次第に狭まっている。石室全長4.05m。途中を樋石で区切った場合、玄室は長さ2.55m、幅1.62m、狭道は長さ1.50m、幅は開口部で1.25m。主軸方位はN 6°Eである。

石室の構築は雑である。用材は全て花崗岩を使用する。基段でみると、玄室は奥壁2個、東西側壁は玄室から狭道まで各4個の石材を横長に立て並べたのち、開口部のみ両側とも縦長に1個ずつ立てている。ただし西側壁の場合は奥から2番目の石材は間隔がとれないため、下に疊を置いて20cmほど上げている。残存する2段目の石積みは縦長の平置きである。また構築にあたっては、基段石材

は墳底を若干掘り窪めて据え付け、裏込めは疊ではなく主に土で固めている。なお玄室内床面は疊敷きである。

玄門部はとくに袖石にあたる立石はみられず、床上に3個の疊を並べて玄室を区切っているが、ただし上面は樋石と呼べるような平坦に描かれたものでなく、これも閉塞の基部を兼

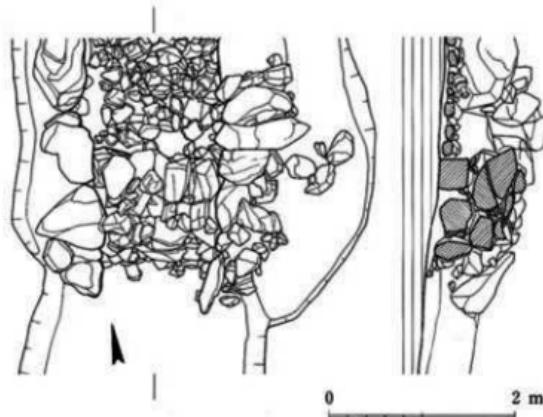


Fig. 23 S T04古墳石室閉塞状況

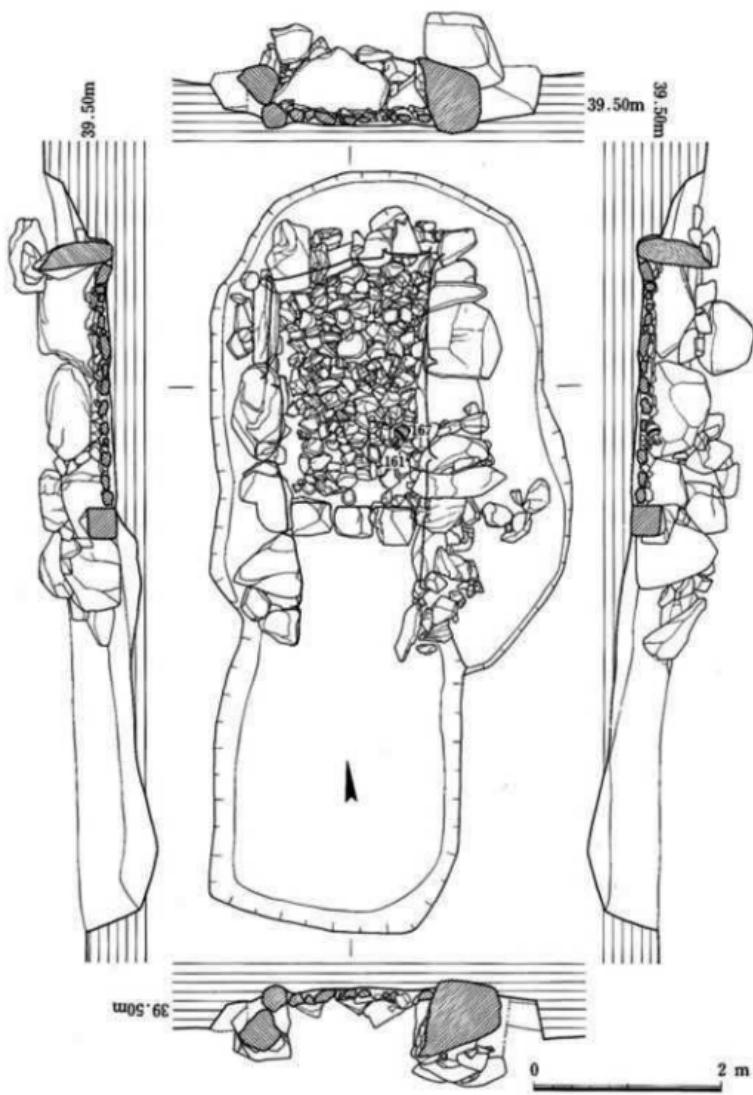


Fig. 24 S T04古墳石室 ( $\frac{1}{40}$ )

### 礎石A遺跡

ねたものであろう。閉塞は玄門部に比較的よく残存しており、玄室側に小口を描えながら小礎を積み上げ、羨道部の殆どを埋めていた。

基壇はまず石室部を楕円形に掘り下げ、さらにその前面南側に、それより幅を狭め舌状に伸びた隅丸長方形の掘り込みが連結する。全長8.1m、前面の基壇だけでみれば長さ3.1m、幅2.6mで、約7m<sup>2</sup>の広さをもっており、これも前庭部としての機能が考えられる。当然、墳丘も石室開口部より北側後方にずれていたであろう。

副葬品は玄室東南隅付近の床上で須恵器長頸壺および小型高杯が各1点、他に玄室および前庭部埋土中から須恵器片・土師器片が若干出土している。

築造時期は7世紀前半である。

### S T05古墳 (Fig. 25, PL. 17)

主体部は羨道をもたず玄室だけの横穴式石室である。削平のため盛土ではなく、石室も大半は破壊され、玄室の北半一部しか残っていない。

石室は基段の奥壁2個と東西側壁各1個のみ残存する。玄室の長さ1.2m以上、幅1.80m。主軸方位N2°W。奥壁の場合、東側の1個は横長に、西側のもう1個は縦長に立てる。また残存する側壁石も縦長あるいは横長と据え方に一定性がなく、用材の形状に合わせたやや雑なつくりである。基段の据え付けは墳底を掘り窪め、裏込めに若干の小礎を使用する。玄室床面は砾敷きである。なお、使用石材は全て花崗岩である。

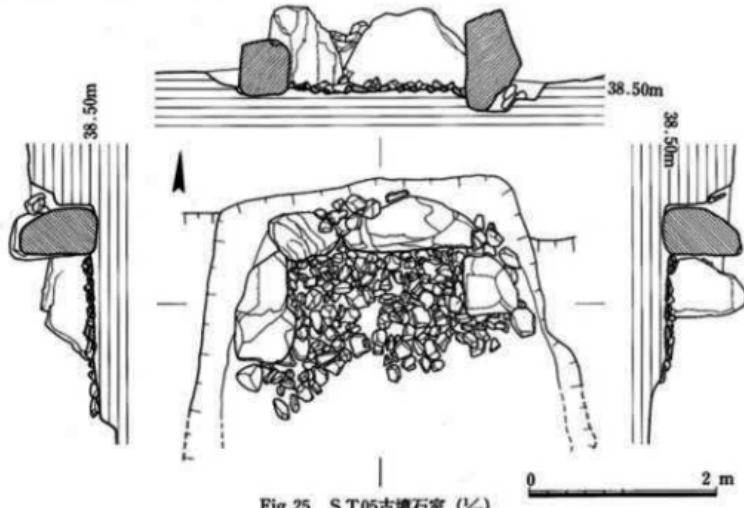


Fig. 25 S T05古墳石室 (Jō)

墓壙は玄室奥壁付近でみると南側に向かって開き気味である。他と同様、石室前面に前庭掘込みをもつものであったと推定する。

副葬品は石室およびその前面破壊部分の埋土中からめのう製丸玉2点・ガラス小玉3点・須恵器片・土師器片が若干出土した。

須恵器の時期は遅って7世紀後半であるが、石室の構造から築造は7世紀中頃と推定する。

#### S T06古墳 (Fig. 26, PL. 18)

主体部は羨道がなく玄室のみの横穴式石室である。削平により盛土を失い、石室も基段しか残っていない。

玄室は長方形両袖式で、前面開口部石積みが「ハ」字形に開く。石材は全て花崗岩である。玄室規模は長さ3.25m、幅は東壁側が多少外に膨らみ、中央で1.77m。主軸方位はN10°E。床面は疊敷きである。

石室基段は奥壁2個、東西側壁は各4個を全て縦長に立てている。したがって基段の配石としては強度に問題があるわけであるが、その分、基段石材は墳底を若干掘り込んで据え付け、また裏込めには小砾を比較的丹念につめて固定をはかっている。

玄門部両袖石は玄室側壁からやや斜めに鈍く曲がり、しかも他の側壁石とかわらない用材を1個ずつ立てている。したがって上石を架すにもなお2、3段の石積みが必要であり、袖石というよりは玄室袖石の続きとしての造りである。玄門としての幅は0.75mである。また玄門部床上には砾を2個置いて玄室と外とを区切っている。ただしその位置は袖石より北側玄室内に入っており、樋石と閉塞基部を兼ねた簡単な造りにすぎない。その他、開口部には東側3個、西側2個の石材を縦長に立て、「ハ」字形に並べている。

墓壙は前面側が拡がる台形で長さ9m、幅は北辺3.5m、南辺4.8m。石室はその北側に寄せて造り、南側には約18m<sup>2</sup>の広い前部ができる。石室前面の「ハ」字形石積みはこの前庭への土砂流入を防ぎ開口部を保護するための措置で、墳丘はこれより北側に位置していたことになる。

副葬品は玄室南半の両隅に比較的多く残っていた。西南隅では須恵器壺・蓋のセットが並べて置かれ、東南隅では、土師器壺1点と須恵器身2点・壺蓋1点が重ねられた状態で横転し、それと平瓶1点が一群をなしていた。時期的には西南隅の2点は東南隅の一群より新しく、追葬に伴うものである。その他、石室および前部埋土中から蛇紋岩製小玉1点・須恵器片・土師器片が若干出土してたほか、木棺の使用を示す鉄釘が6点以上ある。

須恵器の時期は7世紀中頃以降であるが、石室の構造から築造は7世紀前半と推定する。

#### S T07古墳 (Fig. 27, PL. 17)

羨道と玄室が一体化した構造の小型横穴式石室である。削平により盛土を完全に失い、石室

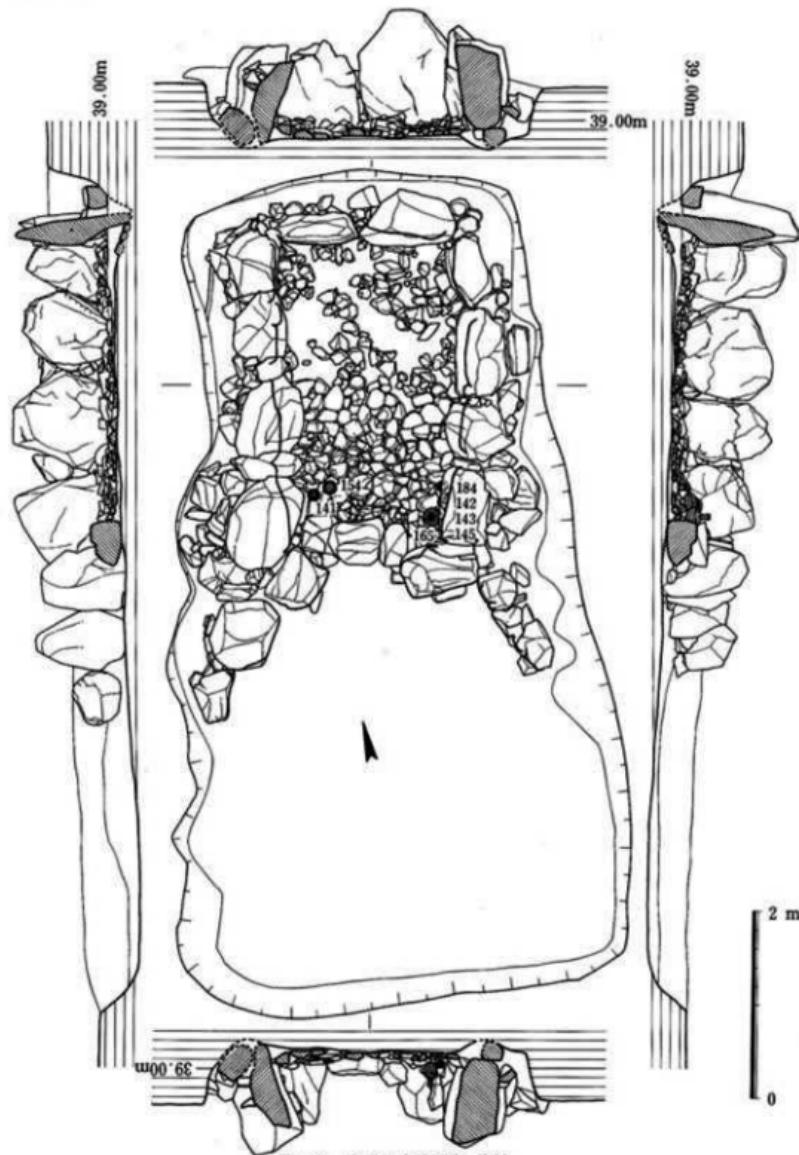


Fig. 26 S T06 古墳石室 (Y)

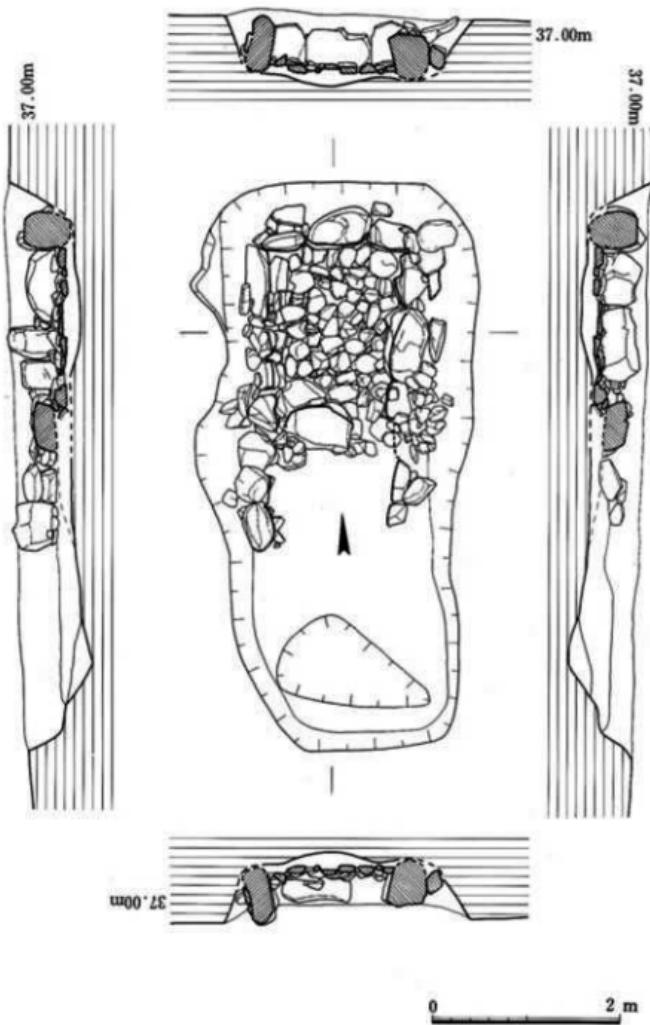


Fig. 27 S T07古墳石室 (V<sub>6</sub>)

## 礫石A遺跡

も基段のみ残存する。

石室は玄室が長方形で、さらにその前面に玄室とほぼ同じ幅で石積みが続く。一見狭道状であるが、これに天井石を架すほどの壁体構造とは思えない。したがって特に狭道という意識ではなく、単に途中の開口位置に框石を置くことで玄室のみ外と明分したと考えるのが適当であろう。全長3.20m、框石までを玄室とすれば、玄室の長さ1.66m、幅1.30m。主軸方位N 3°Eである。

石材は全て花崗岩である。構築は玄室基段で奥壁3個、西側壁4個、東側壁では2個抜き取られて3個が残存し、さらに玄室側側壁から続いて石室前面に東西2、3個ずつ隣が並ぶ。これら基段の石材は玄室西壁で一部縦長に立てた個所もあるが、基本的には横長にして、墳底に据えている。基段石材にしては全体に小さめで、かつ造りが難であり、裏込めも簡単である。

玄室床面には比較的大きめの躓を敷く。また框石は平石1個が西壁寄りにあり、もともと東側にもう1個あったと推定される。ただし礫床の南端上に乗っていることからみて、石室構築当初からあったというよりは閉塞時にその基部を兼ねて置かれた可能性がつよい。

墓壙は長方形で長さ6.1m、幅は玄室位置で2.65m、南辺では1.6mに狭まる。石室は墓壙の北側いっぱいに寄せて造られ、南半は約4m<sup>2</sup>の前庭部となっている。

副葬品は原位置を保つものではなく、石室および前庭部埋土中から須恵器片・土師器片が数点出土した程度である。

築造は石室の構造から7世紀前半と推定する。

## ST49古墳 (Fig. 7, PL. 19)

周溝をもつ比類的大型の円墳である。IV区の北側に位置し、周溝は弥生前期の埋葬区の中を通る。また、西北一部は調査区外にあたり、東南一部は道に切られている。削平により墳丘は完全に失い、石室は墓壙の痕跡さえなく、調査は周溝のみに限られた。

墳丘は径21.5m。周溝は西南部が幅15mにわたって切れており、横穴式石室と推定される主体部に至る通路にあたるものと考えられる。周溝は検出面で幅約3.5m。従って周溝外側で測れば、墳径は約28mと大型になる。深さは南側で約0.8m、傾斜上方にあたる北側で約1.6mと深くなる。断面U字形の大規模な掘形で、とくに周溝の切れた箇所の東端部は垂直に掘り込んでいる。南辺では溝底に花崗岩躓群が集中していたが、築造当時のものか、あるいは後世、葺石や石室用材等が捨てられたものであるかは不明である。

出土品は周溝埋土中から円筒埴輪片が多く出土しており、本古墳が埴輪を樹立した有力墳であったことを示している。他に周溝が弥生墓地を切り込んだ際に破壊された壺棺の破片、および本墳に伴う可能性のつよい若干の須恵器片・土師器片がある。

これら遺物の時期は6世紀前半から7世紀であり、築造は6世紀前半と推定する。

ST50古墳 (Fig. 5・28, PL. 20)

赤彩装飾のある横穴式石室を主体部とする大型の円墳である。削平により盛土は殆どなく、石室も基段一部しか残っていない。周溝は東側と西側が道で切られ、南側は調査区外にある。

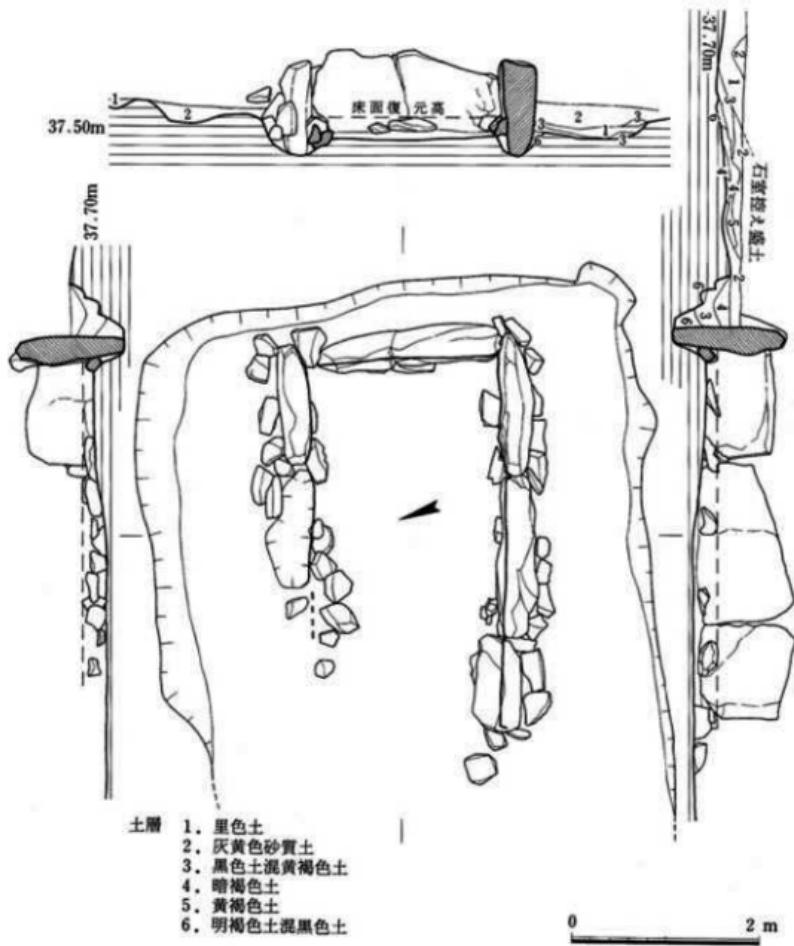


Fig. 28 ST50古墳石室 (少)

### 標石A遺跡

また北側は水道管理設のため調査は一部にとどめた。

墳丘は推定径27m。周溝は幅5.5m、最深部0.4mと大型であり、周溝外側で測ると墳径37mとなる。また、この周溝も石室開口部にあたる西側が切れており、推定幅約15mの通路が設けられていたと推定される。

石室は墳丘中心より西側にずれて位置する。玄室は長方形で、残存長3.4m、幅1.98m。主軸方位S 72° E。羨道は不明ながら、付設されていたとしても、石室位置からみて短いものであったと考えられる。あるいは玄室がかなり長い点からみて、南壁は片袖式の羨道部まで一部含んでいる可能性もあるが、一応これを玄室としておく。

石室基段は扁平な花崗岩板石を横長にして使用する。奥壁1個で、南壁3個、北壁は抜き跡を含めて2個分まで確認できる。構築にあたっては基段石材は基部を掘り込んで埋め、花崗岩小礫を根占めに用いながら控え積みを行う。控え積みの土盛りは奥壁側と東壁側にかろうじて薄く残っており、断面では奥壁の場合、後方約3mまで基段の控え積みとみられる土層が観察される。壁体2段目以上は墳丘盛土作業と合わせ、礫を小口積みで積み上げていったと推定する。

石室内面には赤色顔料を塗布した痕跡が認められ、もともと赤彩されたいわゆる装飾石室であったことが知られる。石室内は床面が荒らされているが、この赤彩が施されている壁面の高さからみて、本来は調査面から約20cm上まで床土で埋められていたことがわかる。

墓壙は長方形で旧表土面から約20cm掘り下げる。石室との関係では主軸に対しやや南に振れている。長さ6m以上、幅5.3m。

出土遺物は石室内埋土および周溝埋土から須恵器片が数点出土したにすぎない。

築造時期は明確でないが、石室の構造およびS T 49古墳との関係から6世紀前半と推定する。

## (2) 土壙墓

### S P 10土壙墓 (Fig. 29, PL. 21)

やや細長い長方形土壙墓である。上面はやや削平されているとみられる。検出面で長さ2.13m、幅0.62m、深さ0.27m。頭位は壙底の状況から東とみてN 79° E。

掘形は四壁を下位でやや斜めに掘り込んでおり、上位では直にちかく立ち上がると思われる。壙底は東側でわずかに上がるが、ほぼ平坦である。

出土遺物は東壁ちかくで壙底から約15cm浮いて副葬された土師器壺2点が破碎した状態で出土した。

時期は7世紀後半である。

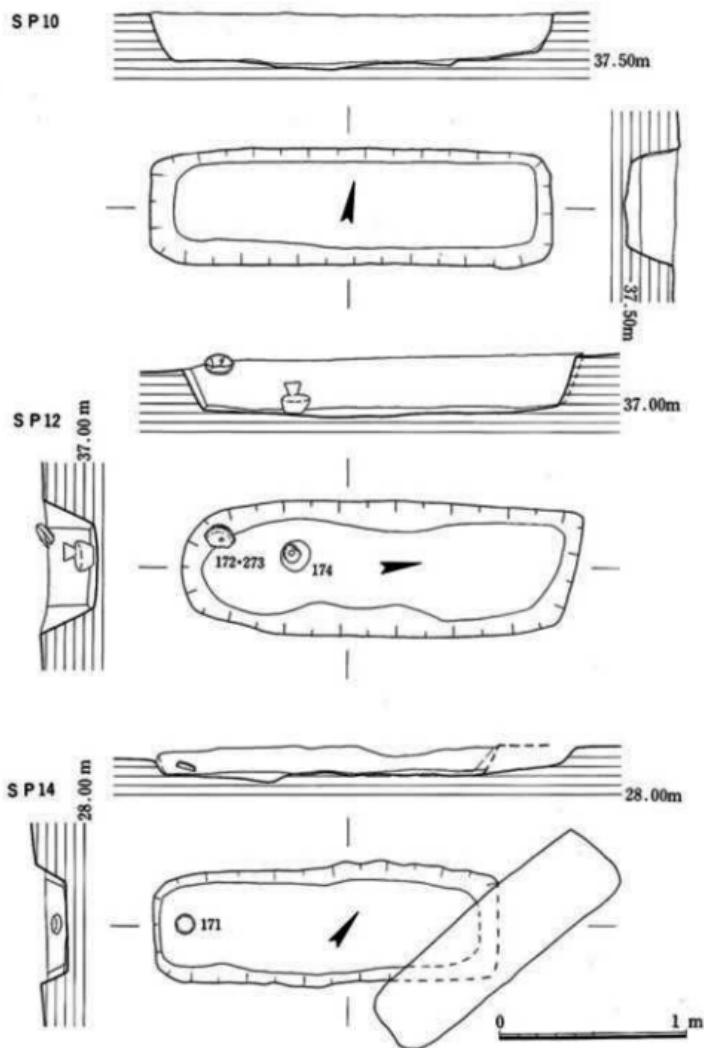


Fig. 29 S P 10 • S P 12 • S P 14 土壇墓 ( $\text{O}_{\text{M}}$ )

### 礫石A遺跡

#### S P 12土壙墓 (Fig. 29, PL. 21)

南辺は橢円形状で、北辺は主軸に対し斜めになっているが、基本的には隅丸長方形とみなしうる。検出面で主軸長2.09m、幅0.71m、深さ0.31m。方位は傾斜上方にあたる北とみてN 8°E。掘形は四壁をやや斜めに掘り下げ、墳底は中央でやや低くなるがほぼ平坦である。

出土遺物は足方にあたる南側墳底で須恵器壺1点、南壁際では須恵器壺が墳底から約20cm浮いて身と蓋が合わさったまま、上面削平時に蓋の約 $\frac{1}{3}$ を欠損し斜めに傾いた状態で出土した。壺については墳底の壺とは別に、墓壙上面に供獻されたものと推定される。

時期は7世紀後半である。

#### S P 14土壙墓 (Fig. 29, PL. 22)

長方形土壙墓である。上面はかなり削平されて残りが浅く、また東隅は最近の掘り込みに切られている。検出面で復元長1.82m、幅0.63m、深さ0.15m。頭位は傾斜上方にちかい東北側とみてN 53°E。

掘形は墳底ほぼ平坦である。

出土品は足方にあたる西南壁寄りで須恵器壺身1点が、墳底から約5cm浮いて伏せた状態で出土した。とくに荒らされた形跡はなく、副葬品と考えてよいであろう。

時期は7世紀後半である。

### (3) 土壙

#### S K 08土壙 (Fig. 6)

S T 06古墳の東脇に位置する南北に長い不整形土壙である。壁および墳底の掘形も整ったものではない。長さ6.7m、幅約2m、深さ約1m。S T 06古墳の主軸方位に並行しており、あるいは同時期の関連遺構かと考える。遺物は黒色埋土中から須恵器片・土師器片が数点出土した。

## 3. 奈良・平安時代

土壙墓1基と木棺墓16基の計17基を検出した。そのうち15基はII区とIII区に集中してほぼ完結する一定範囲の墓地を形成する。IV区とV区ではあわせて2基が検出されたにすぎない。II区・III区の15基は全体を1群としてみれば先の古墳時代の3基に後続するもので、合わせて同地区の終末期の古墳被葬者と系譜的に密接な関係をもつものであろう。それらをさらに、あえて小グループに分ければ、古墳時代の3基も含めてS P14～S P17の4基、S P09～S P13の5基、S P18～S P26の9基のおよそ3群に分けることも可能である。土壙墓・木棺墓群と古墳群との関係については、久池井一本松遺跡等と合わせ、総括の項で再び述べる。

各遺構は長方形または隅丸長方形を基本とする。法量の点では成人墓とするに十分なものが多い中で、まれに小児墓が混じる。殆どは土壙墓とみられるが、S P15のみ棺釘の使用から明らかに木棺墓とわかる。17基中4基から副葬あるいは供獻品（土師器・刀子）が出土した。

Tab. 3 土壙墓・木棺墓一覧表

遺構番号	種別	土壙形態	規模(長・幅・深)cm	方位	出土遺物	備考
S P09	土壙墓	長方形	165×65×48	N11°E		
S P10	〃	〃	213×62×27	N7°E	土師器(环2)	古墳時代
S P11	〃	〃	223×75×42	N7°E		
S P12	〃	隅丸長方形	209×71×31	N8°E	須恵器(壺1、环身1、环蓋1)	古墳時代
S P13	〃	〃	90×51×8	N7°E		小児用
S P14	〃	長方形	182×63×15	N53°E	須恵器(环身1)	古墳時代
S P15	木棺墓	〃	172×100×49	N8°E	土師器(环12)、棺釘15	木棺法量(推定)105×60×40cm
S P16	土壙墓	隅丸長方形	180×86×41	N36°E		
S P17	〃	〃	232×107×81	S78°E		
S P18	〃	長方形	165×65×33	N7°W	土師器(环5)	
S P19	〃	隅丸長方形	148×47×15	N2°E		
S P20	〃	長方形	206×79×48	N55°W		
S P21	〃	隅丸長方形	174×58×42	N76°E		
S P22	〃	長方形	115×80×50	S75°W		
S P23	〃	〃	98×42×24	S86°E		小児用
S P24	〃	横円形	87×52×28	N60°E		鍋底状底部
S P25	〃	隅丸長方形	202×56×48	S83°E		
S P26	〃	長方形	182×62×43	S75°W	土師器(环3)	
S P29	〃	〃	160×50×19	S65°E		
S P59	〃	隅丸長方形	164×85×15	N16°W	土師器(环2)、刀子1	

## 石A遺跡

### (1) 土塙墓・木棺墓

#### S P 09土塙墓 (Fig. 30, PL. 21)

長方形土塙墓である。検出面で長さ1.65m, 幅0.65m, 深さ0.48m。頭位は傾斜上方の北とみてN11°E。

掘形は四壁をほぼ直に掘り下げる、墳底は北側がわずかに上がり気味ながらほぼ平坦である。

#### S P 11土塙墓 (Fig. 30, PL. 21)

北半部がやや不整形であるが、基本的に長方形土塙墓に含まれられる。検出面で長さ2.23m, 幅0.73m, 深さ0.42m。頭位は傾斜上方の北とみてN 7°E。

掘形は四壁がやや斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦ながら北側壁寄りでいくぶん急に上がる。

#### S P 13土塙墓 (Fig. 30, PL. 22)

小型の隅丸長方形土塙墓である。上面削平のため残りが浅い。

掘形は検出面で長さ0.90m, 幅0.51m, 深さ0.08m。頭位は不明であるが、仮にちかくのS P 10土塙墓等と同じく東とみればN77°Eとなる。小児用であろう。

#### S P 15木棺墓 (Fig. 31, PL. 23)

長方形の墓壙をもつ木棺墓である。

墓壙は検出面で主軸長1.72m, 幅は中央で1.00m, 深さ0.49mで、頭位とみられる東辺が西辺よりやや広い。頭位N89°E。四壁はほぼ垂直に掘られ、墳底はほぼ平坦ながら西隅でやや上がる。

木棺は棺材そのものは残っていないが、釘および副葬品の出土位置から復元して、およそ長さ1.05m, 幅0.6m。高さは不明確ながら0.3~0.4m程度の比較的低いものではなかったかと推定する。したがって、この法量では成人を収めるのは無理であろう。木棺の構造は組合式の箱形が考えられる。ただし木組みには釘は使用せず、出土した釘はその位置からみて、屍体を収めたのち蓋を上から打ちつけるのに用いられたと考えるのが適当である。すなわち、釘は各四隅以外にも木組に必要のない長辺および短辺のそれぞれ中央に、計6ヶ所で1~3本ずつ検出され、しかも大部分は墳底から約20cm高い位置にあり、木棺腐朽後に10~20cm程度落ち込んだものと推定できるからである。なお、釘に残る木質板目痕からみて、棺蓋の厚さは約2.5cmである。

副葬品は土師器壺12点が全て棺外にあたる位置から出土した。頭位にあたる東辺には口縁部を棺に押し当てるようにして埋土中位から1点、北辺では壁際の墳底で口縁を棺に向けて1点、南辺では埋土上位から破片1点、といった配置で、木棺埋納時に投げ込んだ状態に等しい。しかし大多数の9点は足方の西辺部に集中しており、西北隅墳底から正置あるいは伏せた状態で

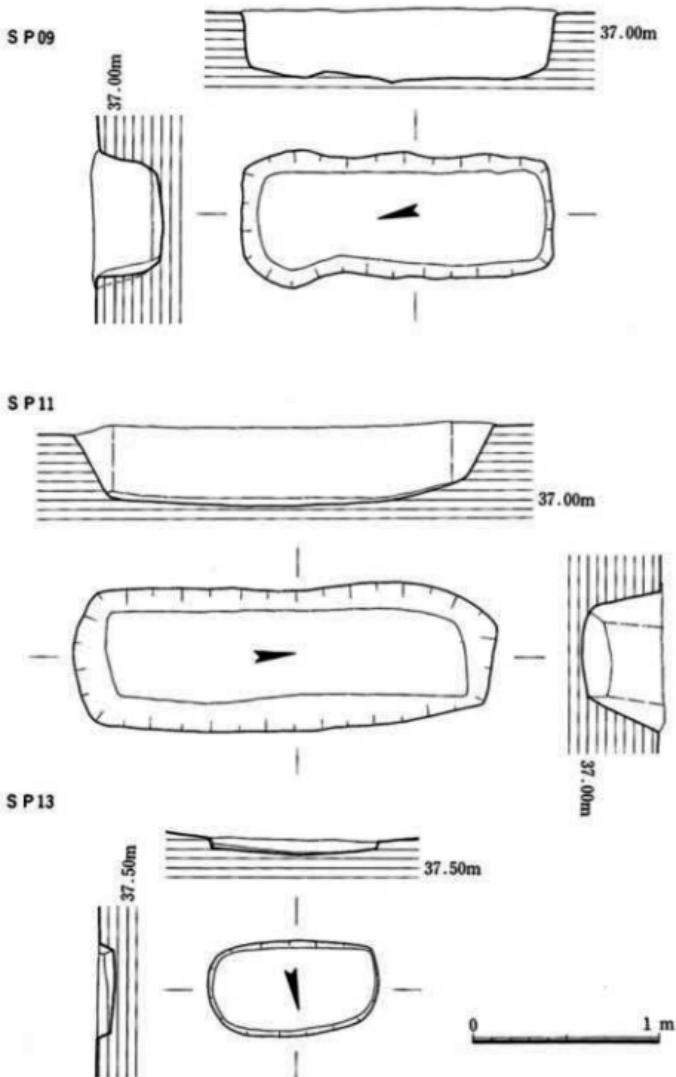


Fig. 30 SP09 · SP11 · SP13 土 墓 (1/20)

裸石A遺跡

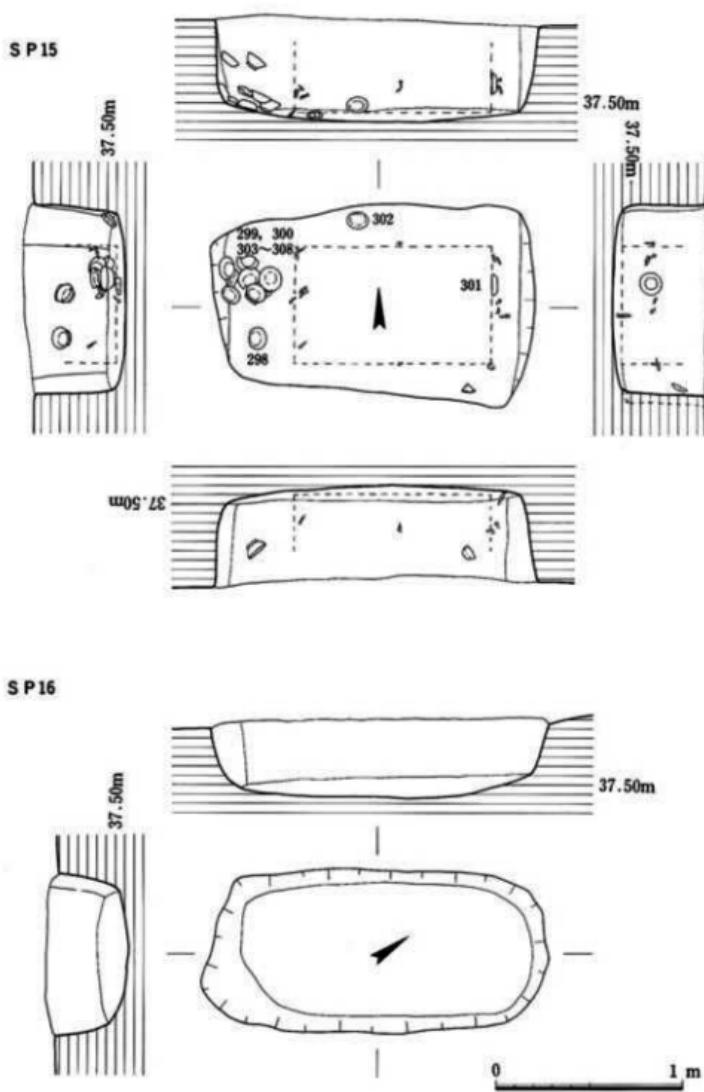


Fig. 31 S P 15木棺墓・S P 16土壤墓 (Y<sub>30</sub>)

7点、さらに埋土上位から2点が出土した。とくに西北隅墳底の7点が置かれたスペースは、棺との位置関係からみると、はじめから副葬のための空間としてあけてあったことは明らかである。

時期は9世紀末～10世紀初である。

#### S P 16土壙墓 (Fig. 31, PL. 22)

短辺がやや丸味をもつが、基本的に隅丸長方形の土壙墓である。検出面で長さ1.80m、幅0.86m、深さ0.41m。頭位は傾斜上方にあたる北東とみてN 36°E。四壁はほぼ直にちかく掘られ、墳底はほぼ平坦ながら頭位にあたる東壁際で少し上がる。

#### S P 17土壙墓 (Fig. 32, PL. 24)

今回調査の土壙墓では最も大型で、やや不整形ながら基本的に隅丸長方形である。長さ2.32m、幅は中央で1.07m、深さ0.81m。西側に北へ東側の幅がやや狭い。頭位は幅の広い西とみてS 78°E。

掘形は西壁と北壁で直にちかいが、東辺および南辺はやや斜めに掘り込んでいる。そのため上面の広さのわりに、墳底は狭い。墳底は東側がやや上がるが、ほぼ平坦である。

#### S P 18土壙墓 (Fig. 32, PL. 24)

長方形土壙である。上面はある程度削平されていると思われる。検出面で長さ1.65m、幅0.65m、深さ0.33m。頭位は傾斜上方にあたるとみてN 7°W。

掘形は南北壁がやや斜めながら、他はほぼ垂直にちかく掘込まれている。墳底は南北両端に向かって少々上がる。

副葬品は足方にあたる北壁寄りで土師器坏5点が出土した。そのうち3点はほぼ墳底から、他2点は墳底から約15cm浮いた状態で検出された。

時期は8世紀末～9世紀前半である。

#### S P 19土壙墓 (Fig. 32, PL. 24)

南北両辺は橢円形にちかいが、基本的に小型の隅丸長方形に属するものとしておく。上面がかなり削平されて残りが浅い。検出面で長さ1.48m、幅0.47m、深さ0.15m。頭位は傾斜上方の北とみてN 2°E。

掘形は四壁が下位でやや斜めに掘り込まれ、墳底は北側で少し上がるがほぼ平坦にちかい。

礫石A遺跡

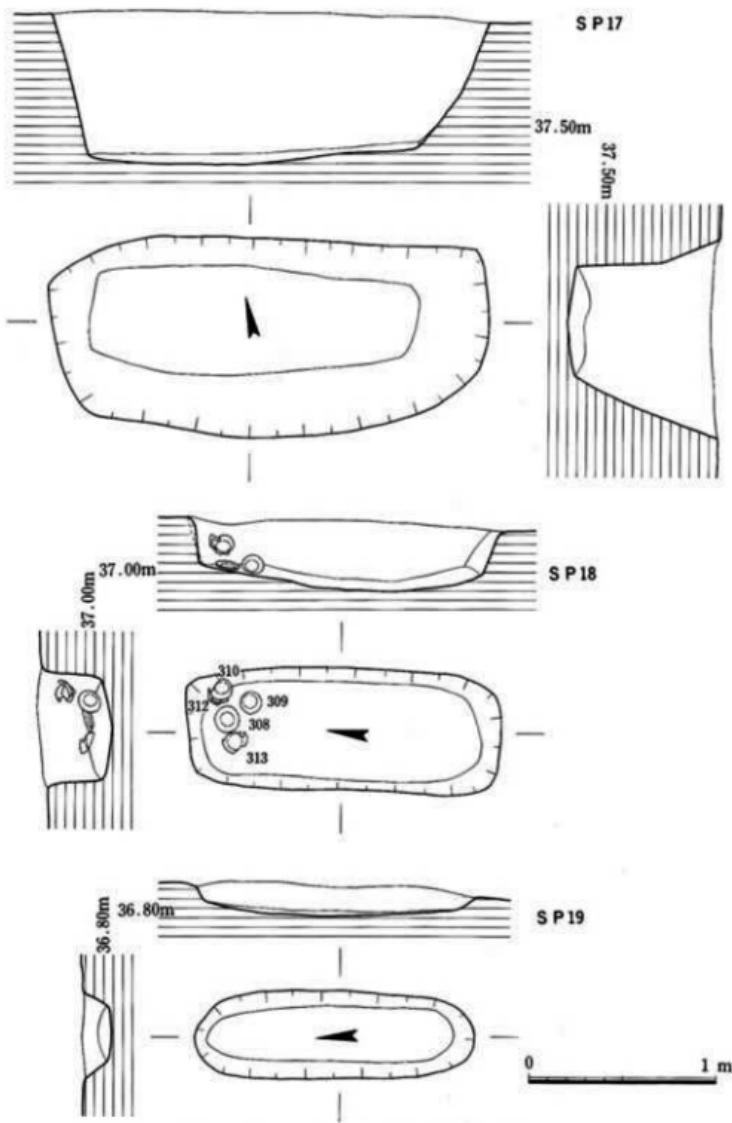


Fig. 32 SP 17 · SP 18 · SP 19 土壙墓 ( $\text{J}_\text{sh}$ )

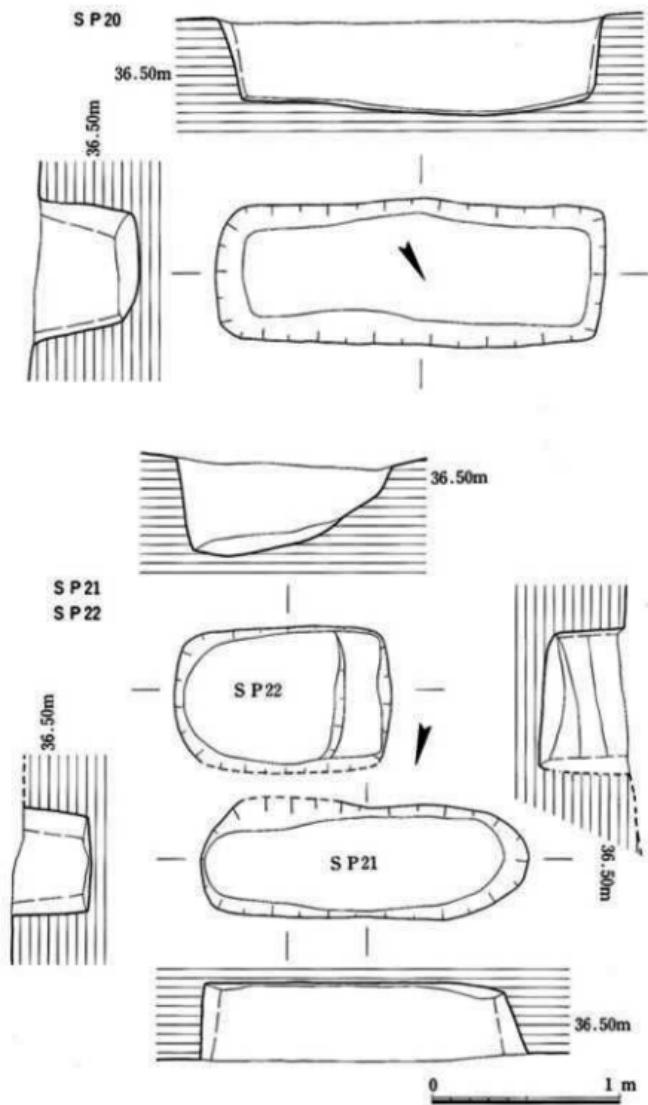


Fig. 33 S P20 · S P21 · S P22 土 墓 (U<sub>50</sub>)

### 礫石A遺跡

#### S P 20土壙墓 (Fig. 33, PL. 24)

長方形の土壙墓である。長さ2.06m, 幅0.79m, 深さ0.48m。頭位は傾斜上方に当たる東北方とみてN55°W。

掘形は四壁ともほぼ垂直に掘り込まれ、墳底はほぼ平坦ながら東北側に向かって少し上がる。

#### S P 21土壙墓 (Fig. 33, PL. 25)

西辺は楕円形状を呈すが、基本的に隅丸長方形の土壙墓である。長さ1.74m, 幅0.58m, 深さ0.42m。頭位は傾斜上方にちかい東北側とみてN76°E。

掘形は西壁でやや斜めながら他は垂直に掘り込まれ、墳底は平坦である。

#### S P 22土壙墓 (Fig. 33, PL. 25)

矩形にちかい長方形土壙墓である。北辺は不明瞭であるが、おそらくS P 21土壙墓と切り合わずに並行するものと思われる。掘形は西辺以外は直に掘り込まれ、墳底は西に向かって斜めに上がる。検出面で長さ1.15m, 幅0.8m, 最深0.5m。頭位は西とみてS 75°W。

#### S P 23土壙墓 (Fig. 34, PL. 25)

小型の隅丸長方形土壙墓である。上面はある程度削平されているらしい。検出面で長さ0.98m, 幅0.42m, 深さ0.24m。頭位は明確でないが、仮に東とみればS 86°Eとなる。容積からみて小児墓であろう。

掘形は四壁ともやや斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦である。

#### S P 24土壙墓 (Fig. 34, PL. 25)

小型の楕円形土壙墓である。掘形が他と違った鍋底状であるが、黒色土がつまっており、土壙墓に含めておく。検出面で長径0.87m, 短径0.52m, 深さ0.28m。頭位は傾斜上方の東北側とすればN 60°Eとなる。

#### S P 25土壙墓 (Fig. 34, PL. 25)

細長い隅丸長方形土壙墓である。長さ2.02m, 幅0.56, 深さ0.48m。頭位は墳底がやや高まる西とみてN 83°W。

掘形は四壁ともほぼ垂直に掘り込まれ、墳底はほぼ平坦ながら西側に向かって少し上がる。

#### S P 26土壙墓 (Fig. 35, PL. 26)

長方形土壙墓である。長さ1.82m, 幅0.62m, 深さ0.43m。東辺に比べ西辺が少々広い。頭位

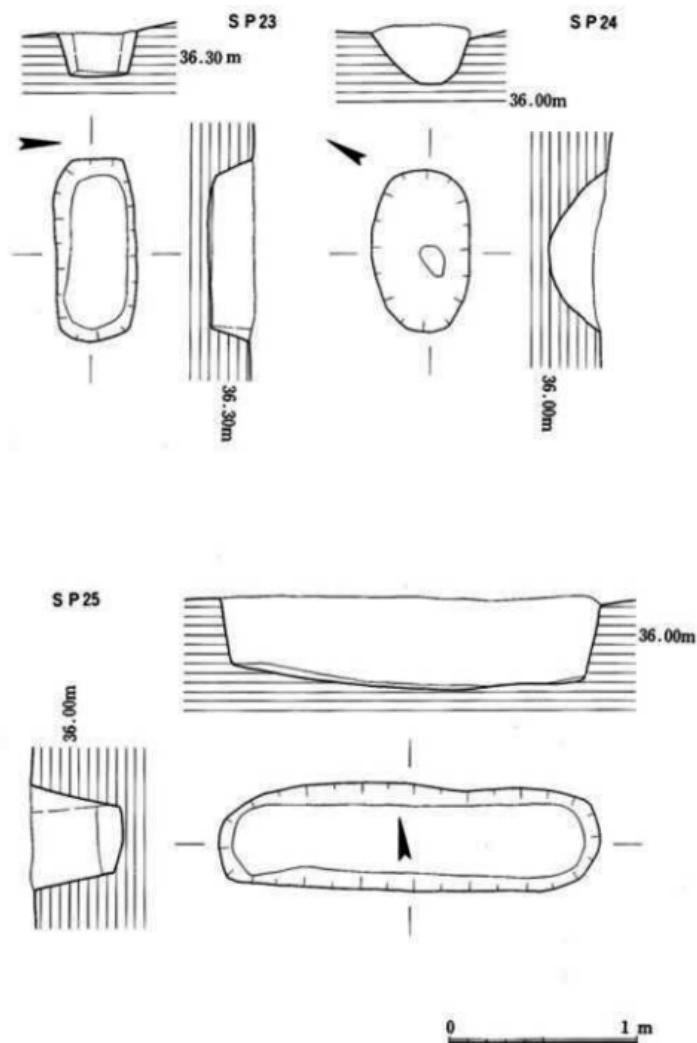


Fig. 34 S P 23 • S P 24 • S P 25 土壌基 ( $V_{10}$ )

### 礫石A遺跡

は西辺とみて S 75°W。

掘形は四壁とも垂直に掘り込まれ、墳底は東半でわずかに 1 段低くなるが、全体として平坦である。

出土遺物として土師器壺 3 点がある。東辺の 1 点は墳底に正置、中央北辺の 1 点は伏せてあつた。また南辺のもう 1 点は墳底から約 30cm 浮いた状態で出土した。木棺の可能性もある。

時期は 9 世紀末～10 世紀初である。

### S P 39 土壙墓 (Fig. 35, PL. 26)

西北辺は丸味をもつが、基本的に長方形の土壙墓である。上面は削平されて残りが浅い。検出面で長さ 1.60m、幅 0.5m、深さ 0.19m。頭位は掘形の整っている東南側とみて S 65°E。

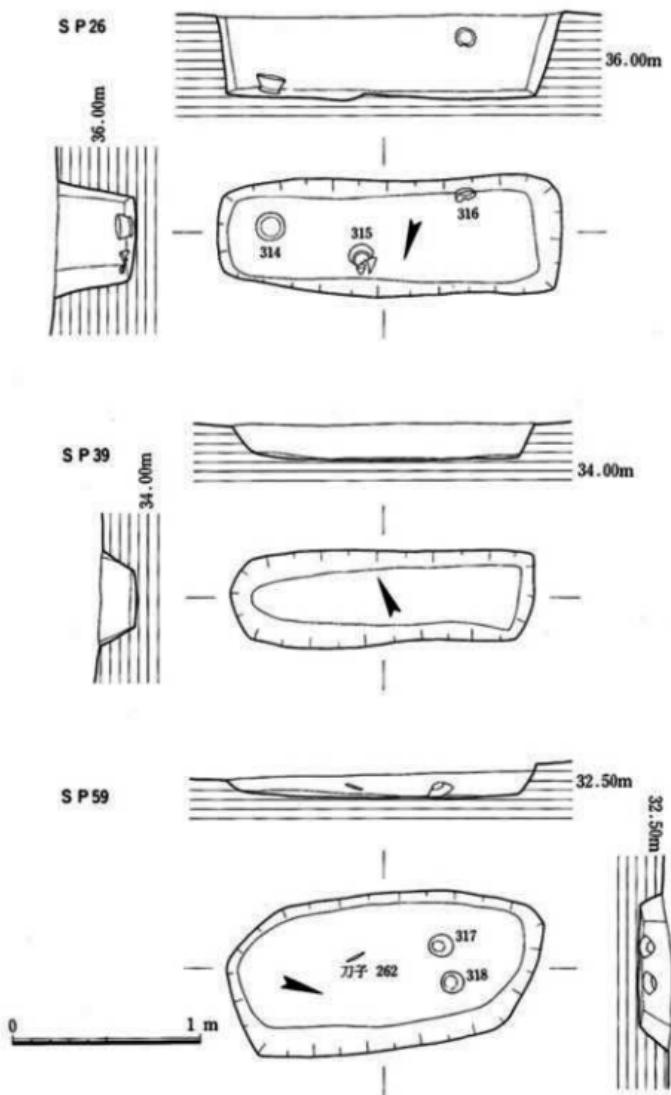
掘形はやや斜めに掘り込んでおり、西北側では墳底で狭まる。墳底はほぼ平坦である。

### S P 59 土壙墓 (Fig. 35, PL. 26)

梢円形にちかいが、東西両辺は直線的であり、基本的に隅丸長方形に含めるべき土壙墓である。上面はかなり削平されて残りが浅い。検出面で長さ 1.64m、幅 0.85m、深さ 0.15m。頭位は頸斜上方の北とみて N 16°W。墳底はほぼ平坦である。

副葬品は頭位にあたる北半部の墳底に土師器壺 2 点を伏せ並べられ、若干浮いて出土、また中央やや南で刀子 1 点が墳底から約 6 cm 浮き、刀先を南に向けて出土した。

時期は 8 世紀末～9 世紀前半である。

Fig. 35 S P 26 · S P 39 · S P 59 土墳墓 ( $\frac{1}{20}$ )

### III. 遺 物

旧石器時代から平安時代まで各時期の遺物が出土している。そのうち弥生時代の遺物が主体を占める。

旧石器時代では石器1点のみ。縄文時代では早・前期および晩期の土器と石器が数点ある。ただし縄文早・前期の土器は点数が少なく、縄石B遺跡で良好な資料があるので本項では省略し、また縄文晩期の土器は弥生前期土器との関連で扱うのが適当と思われる所以、弥生時代の項で一括して扱う。

縄文晩期～弥生時代ではVI区の埋葬関係土器が殆どで、他に副葬玉類若干がある。

古墳時代では古墳から須恵器・土師器・埴輪・玉類・鉄器等が出土しているほか、土塙墓から須恵器が出土した。数は少ない。

奈良・平安時代の遺物は土塙墓・木棺墓からの出土品に限られ、土師器・鉄器がある。

#### 1. 旧石器・縄文時代

石器についてのみ述べる。台形様石器1点のみ旧石器時代、他は縄文時代である。縄文早・前期の土器は2、3点にすぎないので縄石B遺跡での説明に替え、また晩期土器は次項で弥生前期土器とあわせて扱う。

##### (1) 石器 (Fig. 36~38, PL. 27)

台形様石器 1は安山岩系の石材（灰褐色）を利用している。主要剝離面は図右側、打面は基部側にあるが除去されている。両面ともに左右側縁から剝離を施し成形している。刃部には微細な使用痕が観察される。基部（図左）には自然面を残している。S T 49古墳周溝埋土出土。

石鎌 2・3・5は黒曜石、4は安山岩系の石材を利用している。2は左右側縁から細かい剝離を両面に施し成形している。先端部を折損している。S P 17土塙墓出土。3は半透明、黒色の微粒子を含む石材を利用している。両面とも比較的大きな剝離で成形している。基部を折損している。表採。4は図右側が主要剝離面である。先端部にはわずかに自然面を残しており、打面部分と考えられる。左右側縁から剝離を施し成形しているが、先端部、基部には未調整の部分があり製作途中と考えられる。II区出土。5は白濁した不純物を含む石材を利用している。左右側縁から細かい剝離を施し成形しているが両面に縱長剝片の剝離面を残している。なお左図中央の稜には磨滅した痕跡があり、使用痕とも考えられる、S P 56土塙墓埋土出土。

III. 遺物

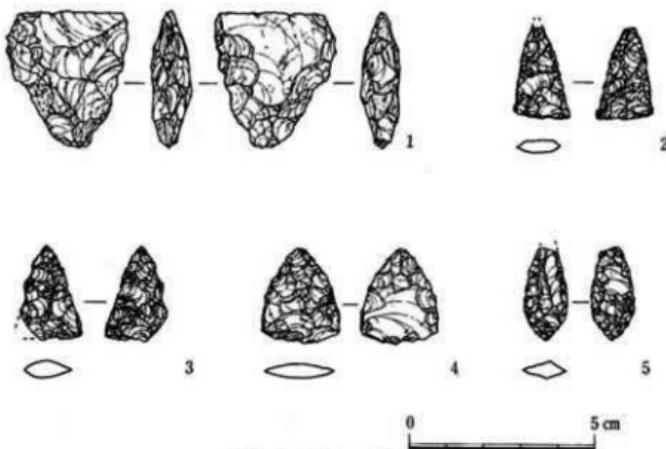


Fig. 36 石器 1 (3/4)

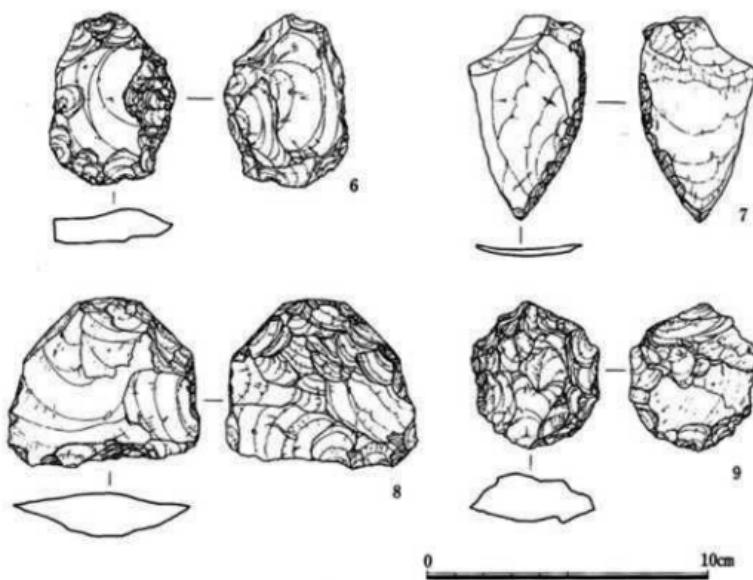


Fig. 37 石器 2 (1/2)

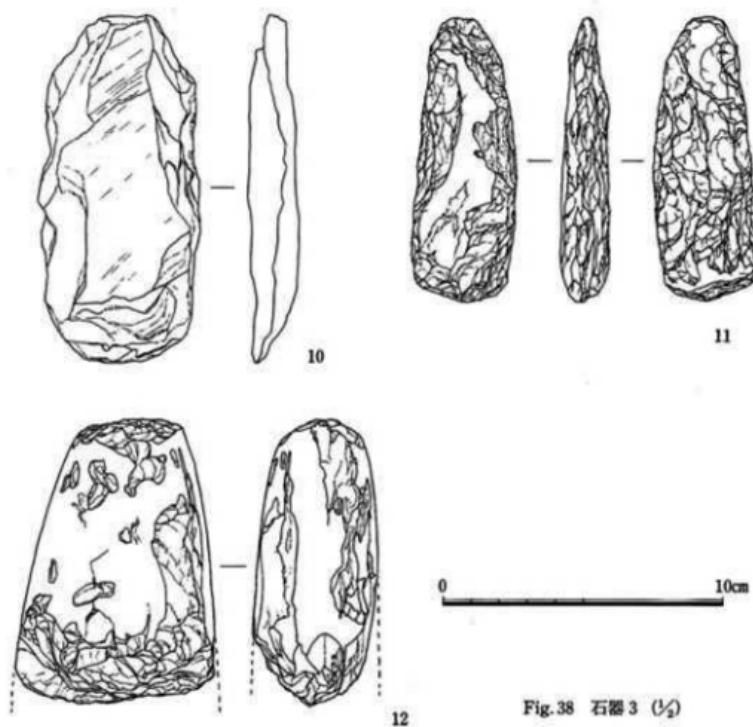


Fig. 38 石器 3 (3/2)

**削器** 6はサヌカイトの石核から連続して剥離された剝片の一つを利用している。主要剝離面は図左側であり、打面及び打瘤は刃部形成の際除去されている。細かい剝離は刃部片面のみに集中し、他の部分は比較的大きな剝離におわっている。S P48石蓋土壤墓埋土出土。7はサヌカイトの薄い剝片を利用している。図右側が主要剝離面で、打瘤は除去されている。上部を中心に繰り返し剝離が施されているが、下部は大きな剝離にとどまっている。製作途中と考えられる。I区旧河道出土。8はサヌカイト製、I区旧河道出土。

**搔器** 9はサヌカイトを利用した円形搔器である。図左側では、円周に沿って角度の大きい剝離面を形成している。裏面の上部・下部は剝離面になっているが、他の部分は平坦な自然面である。S T49古墳周溝埋土出土。

**扁平打製石斧** 10は片岩系の石材を利用している。周縁から粗い剝離を施し成形している。遺構検出中の出土。他に同類のものが1点出土している。

**局部磨製石斧** 11は緑色片岩製。両側縁からの剝離で成形した後、細部調整をしている。体部中央、刃部、側縁の一部に研磨面がみられる。刃部先端は欠損したものと考えられる。最大長10.2cm、最大幅3.6cm。

**磨製石斧** 12は片岩系の石材を利用している。基端面を除き丹念に研磨を施している。体部下半は折損している。II区出土。

## 2. 弥生時代

埋葬関係の土器および玉類と磨製石斧片2点がある。大部分を占める土器については便宜上、(a) 壺棺・甕棺、(b) 供獻土器、それと遺構に伴わない主に小破片を(c) その他の土器、として順に縄文晚期土器をあわせて述べる。各土器の時期および編年関係等については、のちに統括でまとめる。

### (1) 土器

#### a) 壺棺・甕棺

縄文晚期～弥生前期の壺棺11基と甕棺6基がある。壺棺は基本的に壺を身とし煤の付いた転用甕を蓋に被せ、いずれも小児棺である。甕棺は单棺や合口式のほか、蓋に鉢を使用するなど様々であり、成人棺が主体とはいえ甕棺としては未発達な段階のものである。以下、遺構号順にそれぞれ身と蓋をセットで説明する。図中の8桁数字は遺物登録番号、法量はcm単位。

#### S J 27甕棺 (Fig. 39, PL. 32)

13の上甕は未だ壺の名残りをとどめる。胴部は中位で張り、ヘラ描き沈線1条をおいて上位がくびれる。口縁部は胴部上位からつづいて外反し、端部は内面に粘土帯を貼って肥厚させる。内外面ともナデ仕上げであるが、胴部上位内面で部分的にハケ目を残す。全体に淡褐色で、口縁部内面と胴部内外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

14の下甕も口縁下に2条、胴部中位に1条のヘラ描き沈線を廻らせ、胴部上位がくびれるなど、未だ壺の名残りをとどめているが大型化し、13よりはるかに甕棺らしくなっている。胴

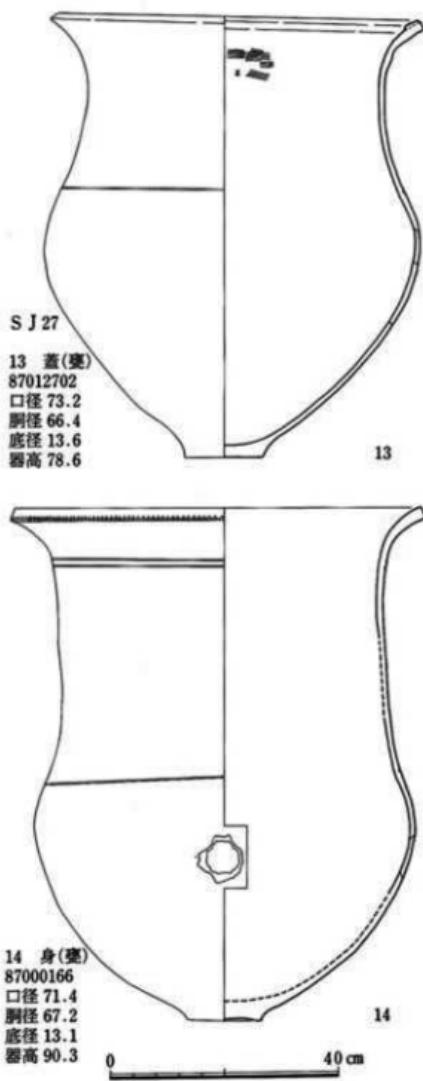


Fig. 39 S J 27壺棺 (1/10)

部は下ぶくらみ気味で上位が直線的に長く立ち上がり、不安定な感を与える。口縁部は端部にむかって自然に肥厚しながら外反し、口唇部外端へラによる刻目を施す。淡褐色で口縁部外面と胸部中位に黒斑がある。砂粒を含む。胸部下位には穿孔がみられる。

#### S J 28壺棺 (Fig. 40, PL. 28)

15の蓋は16の付近から出土した破片で、蓋に使用されていたと考えられる。本遺跡の壺棺基の蓋裏としては唯一刻目がなく、胸上位屈曲部の接合が外付けであるなど、特異である。破片からの復元では口縁部が外に開き気味であり、その端部を丸くおさめている。屈曲部から口縁部にかけては内外面ともヨコ方向へラミガキ。胎土は暗赤褐色で、砂粒を少し含む。

16は丹塗磨研の蓋。胸部上位から口頭部を欠失する。底部は内面側を指で押えた薄い平底で、胸部は長脣気味にゆるく内湾して立ち上がる。胸部下位に穿孔がある。ヘラミガキは胸部下位でタテ方向、胸部内面と外底部はナデている。胎土は黄褐色で胸部下位外面に黒斑がみられる。丹塗の色調は明るい赤褐色である。やや粗い砂粒を含む。

III. 遺物

S J 28

15 蓋(蓋) 口徑 26.0 扁曲部徑 25.6

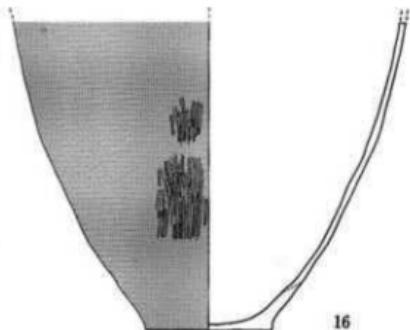
85005240

16 身(蓋) 底徑 13.7 殘高 33.0

85001979



15



16

S J 29

17 蓋(蓋)

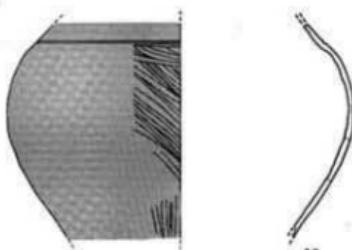
87005240

18 身(蓋) 頸徑 31.0 胸徑 37.4

85001677 殘高 23.2



17



18

S J 30

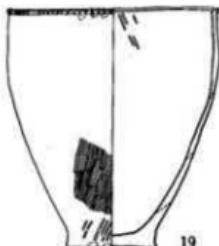
19 蓋(蓋) 口徑 23.1 底徑 9.6

85001989 器高 25.9

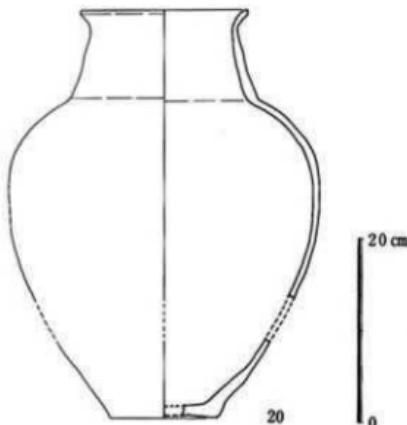
20 身(蓋) 口徑 18.0 頸徑 20.2

85001988 胸徑 33.5 底徑 11.5

頭高 9.8 器高 44.2



19



20

20 cm

Fig. 40 S J 28 • S J 29 • S J 30壺棺 (Ⅵ)

### 標石A遺跡

#### S J 29壺棺 (Fig. 40, PL. 28)

17の蓋裏は胴部一部のみ残存する。胴部は上位で屈曲し、先の鋭いヘラによる細かな刻目を施した突帯を廻らす。調整は外面右下がりの板小口ナデ、内面はヨコ方向の板ナデである。茶褐色で、砂粒を含む。外面に転用を示すススが付着している。

18の壺は口頸部と底部を欠失する。胴部は最大径が上位にあり、下位がやや急にすぼますことを思わせる。頸部は胴部に内付けし、ヘラミガキ後、その接合部にヘラ描き沈線を1条廻らす。外面は頸部をヨコヘラミガキ、また胴部上半にナナメ方向、下半にタテ方向のヘラミガキを施す。内面は頸部から胴部上半をヨコ方向の板ナデ、下半を指でナデている。赤褐色で胴部外面に一部黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

#### S J 30壺棺 (Fig. 40, PL. 28)

19の蓋裏は胴部が上位で内湾するが、屈曲せずに立ち上がる。口縁部には先の鋭いヘラによる刻目を施した突帯を廻らせ、口唇部上面はナデて内側に傾く。調整は外面底部付近と内面口縁部付近に条痕を残すが、他は内外面ともタテ方向の板小口ナデで、外面一部ではそれが細かなハケ目状にみえる。また、口縁部突帯付近と底部に指オサエ痕が残る。色調は暗褐色。胴部外面全体に転用を示すススが付着し、さらにその内面下半に一部有機物が付着している。胎土に砂粒を含む。

20は比較的小型の壺である。頸部は未発達で短く直接的に内傾し、一見古式の型態を思わせるが、口縁部は発達し、薄く伸びて外に開く。胴部は長胴氣味とはいえやや丸味をもち、頸部との境に明瞭な段をつくる。底部は平底である。内外とも器面が荒れているため、丹塗りの有無および調整は不明である。外面赤褐色、内面暗褐色で砂粒を多く含む。

#### S J 31壺棺 (Fig. 41, PL. 33)

21の壺は蓋に使用されたもの。平底で、体部は全体にふっくらとして立ち上がり、口縁部に断面三角形の突帯を廻らす。蓋であるにもかかわらず、体部下位に穿孔を施している。調整は内外面ともナデ。色調は外面黄褐色、内面は褐色で部分的に有機物が付着する。内外面とも口縁部付近に黒斑がみられる。胎土に砂粒を含む。

22は身に使用されていた。遺構の区分として壺棺と呼ぶが、形態そのものは大型の壺である。口頸部を完全に打ち欠き、胴部下位に穿孔を施す。胴部はつよく外に張り出し重心が低く、比較的小さな平底をつくる。頸部は口縁部に向かって急にすぼまると思われる。調整は内外面ともナデ。赤褐色で外面胴部上位に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

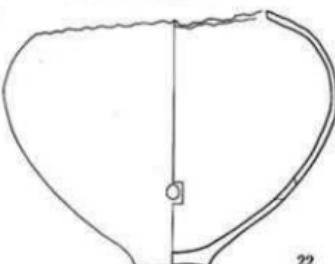
S J 31

21 蓋(鉢) 口径 49.6 底径 10.8  
87000965 器高 36.1



21

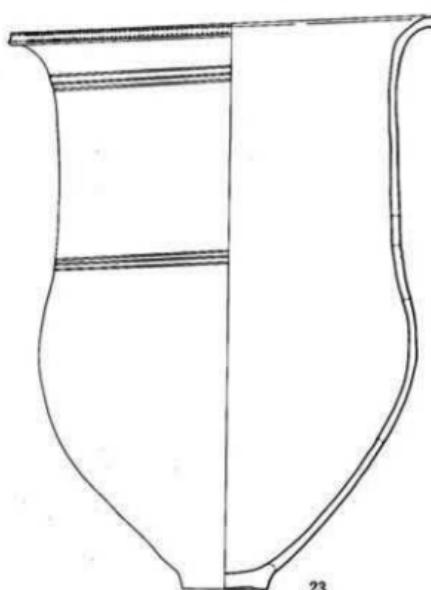
22 身(壺) 胸径 47.6 底径 10.6  
86004254 残高 35.0



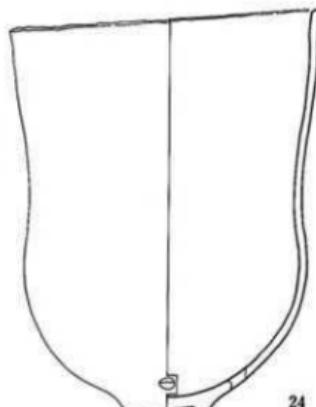
22

S J 33

23 蓋(甕) 口径 60.1 胸徑 53.8  
86004253 底徑 12.1 器高 80.2  
24 身(甕) 底徑 12.0 残高 55.8  
86004252



23



24

0 40cm

Fig. 41 S J 31 · S J 33 甕棺 (上)

### 標石A遺跡

#### S J32壺棺 (Fig. 42, PL. 29)

25の蓋甕は胴部上位が屈曲し、口縁部高と胴屈曲部に先の鈍いヘラによる刻目突帯を廻らせている。胴部下位は直線的にすぼまり、底部は上げ気味で脚状に外につよく張り出す。調整は外面にヨコ方向の条痕を施し、突帯貼付のあとその接合部と底部をヨコナデ。内面は上半をヘラによるヨコナデ、下半を指ナデで仕上げている。色調は外面暗橙褐色、内面暗黄褐色で、胎土に砂粒を多く含む。また外面には胴部中位から口縁部までススが付着し、内面の底部付近には炭化した有機物の付着が認められる。

26は丹塗磨研の壺。口頭部は約 $\frac{1}{3}$ 周打ち欠いている。胴部は肩が張り、頸部は比較的急に立ち、口縁部が短く外反する。頸胴間にハラミガキのあと沈線を廻らすが、明瞭な段をつくるほどではない。底部は平底である。調整のヘラミガキは口縁部内外ともヨコ方向、頸部外面タテ方向、胴部外面は肩位ヨコ方向で下位に向かってナナメ方向からタテ方向に変わっていく。外面底部付近は指でおさえている。内面は頸部にヨコ方向ハケ目、胴部肩位を指でおさえ、その他胴底部をナデで仕上げる。色調は外面にうすくかかった丹が暗赤褐色に発色、胎土そのものは暗黄褐色で外面一部に黒斑がみられ、砂粒を多く含む。

#### S J33壺棺 (Fig. 41, PL. 32)

23の壺は蓋。胴部は上半がすぼまり、口縁下と胴部中位に3条の沈線を廻らせており、壺の名残りをとどめている。口縁部は大きく外反し、口唇部は指ナデでくぼませ、上下角にヘラ刻目を施す。大型品で全体に器壁が厚く重量感がある。調整は内外面ともナデ。褐色で、外面上半と内面下位に黒斑がみられる。胎土に砂粒を含む。

24の壺は身に使用されていた。胴部上位が開き気味で、中位がややくびれ、下位はわずかに丸味をもって壺の名残りをとどめる。底部は平底である。口縁部は大きく外反すると思われるが全周を打ち欠き、胴部下位に穿孔を施す。調整は内外面ともナデ。赤褐色で内外両面に黒斑がみられる。胎土砂粒を含む。

#### S J34壺棺 (Fig. 42, PL. 29)

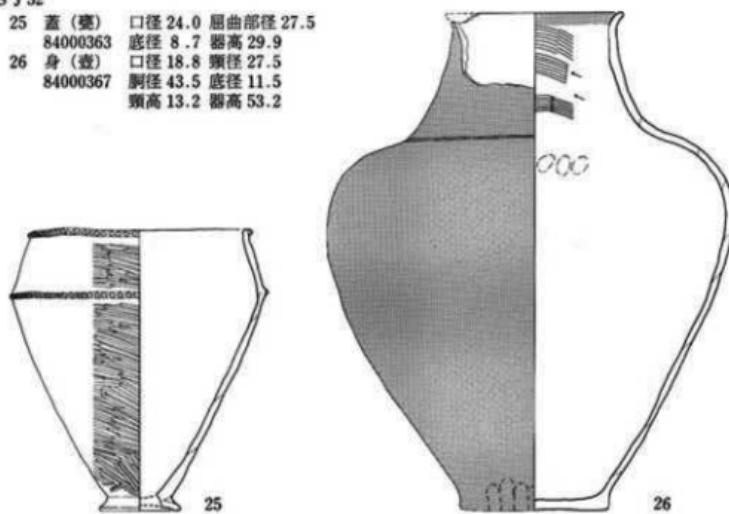
27の蓋甕は体部が上位で屈曲することなく立ち上がり、口縁部がかすかに外反して如意形を思わせ、その口唇部外角に先の鋭いヘラで刻目を施す。調整は外面タテ方向ハケ目、内面はヨコ方向ハケ目のあと底部付近をナデ。とくに内面ハケ目は口縁部でヨコ方向に一周し、外反を意識している。なお、外面のハケ目は上半で口縁下から下に向け、逆に下半で底部付近から上に向けて行っている。色調は暗赤褐色で、胎土は砂粒を多く含む。外面で口縁下約 $\frac{3}{5}$ にススが付着している。

28は丹塗磨研の壺。口頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠く。底部は丸底気味の平底で、胴部はあまり肩が

III. 遺物

S J 32

- 25 蓋(甕) 口徑 24.0 扁曲部徑 27.5  
84000363 底徑 8.7 器高 29.9
- 26 身(甕) 口徑 18.8 頸徑 27.5  
84000367 腹徑 43.5 底徑 11.5  
頸高 13.2 器高 53.2



S J 34

- 27 蓋(甕) 口徑 25.2 底徑 9.2  
85001627 器高 25.1
- 28 身(甕) 口徑 15.6 頸徑 20.4  
85001628 腹徑 31.7 底徑 11.8  
頸高 8.8 器高 40.4



Fig. 42 S J 32 · S J 34 盖棺 (上)

## 標石A遺跡

張らず、頸部は胴部とかすかに段をなして直線的に内傾して伸び、口縁部は短かく外反して端部を丸くおさめる。調整のヘラミガキは口縁部内外面ヨコ方向、頸部外面タテ方向、胴部外面は肩位ヨコ方向で下位に向かってナメ方向からタテ方向に変わっていく。内面は頸部ヨコ方向へラミガキ、胴部は下半は器面が荒れて不明瞭ながら、上半はヨコ方向へラナデである。色調は頸部内面約 $\frac{2}{3}$ と外底部を含む外面全体に円が塗られて赤褐色を呈す。胎土そのものは暗赤褐色で外面一部に黒斑がみられ、砂粒を多く含む。

### S J 35壺棺 (Fig. 43, PL. 30)

29の蓋甕は胴部上位がかるく屈曲してわずかに内傾気味に立ち上がり、口縁高と屈曲部に先の鈍いヘラによる刻目突帯を廻らす。胴部屈曲下は直線的にすぼまり、底部はつよく外に張り出す。調整は胴部外面をヨコ方向条痕のあと下半をナデ、外底部にも不定方向の条痕を施す。内面はナデ。突帯は条痕のあと貼付しており、また胴屈曲部内面と底部付近に指でおさえ痕を残す。色調は赤褐色で胴部外面に黒斑がみられる。外面の胴部突帯下約 $\frac{1}{2}$ にはススが付着し、内面では底部から胴部約 $\frac{1}{3}$ にかけて有機物の付着炭化が認められる。胎土に砂粒を多く含む。

30の壺は胴部はあまり肩が張らずに丸味をもち、頸部は胴部と明瞭な段をなして内傾しながら伸び、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。全体的に胴部に比べ頸部が小さい印象を与える。調整は内外とも器面が荒れて不明瞭であるが、口縁部は内外ともヨコ方向へラミガキ、胴部外面は上半ヨコ方向、下半タテ方向へラミガキ。頸部内面および外底部はナデ。さらに外面底部付近を指でおさえている。色調は赤褐色で、胴部下位外面に黒斑がみられる。丹は部分的にうすくかかるが器面全体ではなく、十分に発色していない。胎土に砂粒を多く含む。

### S J 36壺棺 (Fig. 43, PL. 29)

31の蓋甕は口縁部から胴部上位のみ残る。胴部上位は屈曲し、比較的短くつよく内傾する。口唇部はナデて面を内側に傾け、口縁高と胴屈曲部に刻目突帯を廻らす。刻目は先の鋭いヘラを切りつけるように使用したもので、勢いあまって突帯周囲にまで傷をつけている。調整は内外ともナデ仕上げで、内面口縁部付近を指でおさえている。色調は褐色で、外面胴部突帯下にススが付着する。胎土に砂粒を多く含む。

32の壺はやや大型の丹焼磨研。口頸部を欠失する。胴部は肩が張ると思われる。調整は胴部外面で肩位をヨコ方向へラミガキから中位で斜め方向へラミガキに変わる。下位は器面が荒れて不明、底部付近を指でおさえる。胴部内面はナデ。外底部に木葉痕を残す。丹は胴部外面にうすくかかり暗赤褐色を呈すが、胎土そのものは黄褐色で外面一部に黒斑がみられ、砂粒を含む。

S J 35

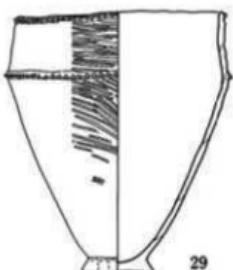
29 蓋(蓋) 口径 22.8 扁曲部徑 24.4

85001666 底徑 7.7 器高 27.9

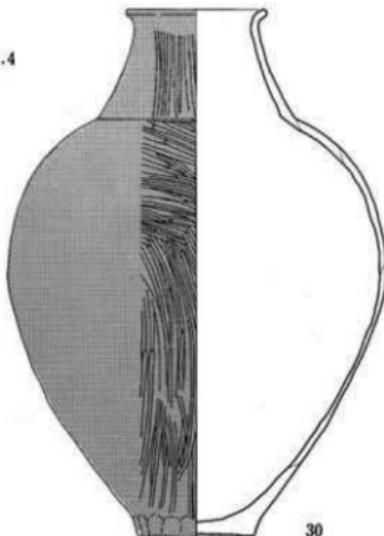
30 身(蓋) 口徑 15.0 扁曲部徑 21.5

85001665 胸徑 40.3 底徑 12.5

頸高 11.8 器高 56.8



29



30

S J 36

31 蓋(蓋) 口徑 31.7

85001660 扁曲部徑 34.0

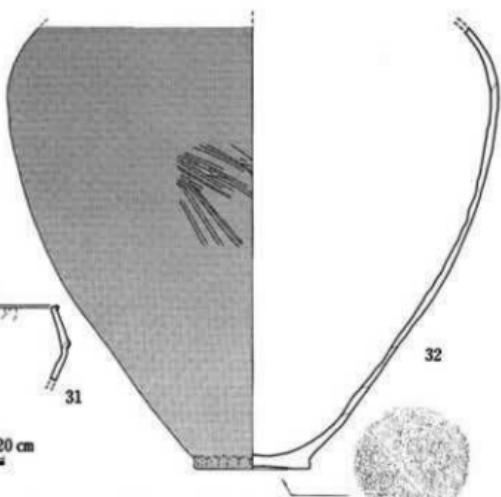
32 身(蓋) 胸徑 52.3

85001661 底徑 12.3

殘高 47.5



31



32

0 20 cm

Fig. 43 S J 35 • S J 36壺棺 (3/4)

### 標石A遺跡

#### S J 40壺棺 (Fig. 44, PL. 33)

33は蓋に用いられた鉢。体部は内湾しながら開き、口縁部と体部上位に浅い刻目を施した断面三角形の突帯を廻らす。調整は体部および口縁部は内外面ともヨコ方向ヘラミガキ、底部付近は内面不定方向ヘラミガキ、外面ナデ。色調は白褐色で外面一部に黒斑がみられる。胎土に砂粒を多く含む。

34の壺は胸部下半が膨らみ、その中位と口縁下に各3条の沈線を廻らすなど、末だ壺の名残りを色濃くとどめる。口縁部は大きく外反して開き、口唇部はやや肥厚させたうえ中央をナデて窪ませ、両角に刻目を施す。胸部下位に穿孔がある。調整は内外面ともナデ。黄褐色で外面胸部中位に黒斑があり、胎土に砂粒を含む。

#### S J 41壺棺 (Fig. 44, PL. 31)

35は蓋をもたない単式の壺棺である。胸部下半は膨らみをなし、その中位に4条、口縁部に3条の沈線を廻らすなど、壺の名残りをよくとどめる。口縁部は外反して開き、口唇部はやや肥厚させたうえ中央をナデて窪ませ、両角に刻目を施す。大型でとくに上半の器壁が厚く、全体に重量感がある。胸部下端には穿孔を施す。調整は内外面ともナデ仕上げ。黄褐色で内外面とも黒斑が多い。胎土に砂粒を含む。

#### S J 42壺棺 (Fig. 45, PL. 31)

36の蓋甕は胸部下半を欠失する。胸部上位はつよく屈曲し、外反しながらやや長く内傾して伸び、口縁部やや下と胸屈曲部に先の鋭いヘラによる刻目突帯を廻らす。調整は口縁部がナデにより波打っている。胸部は外面と内面上位部にヨコ方向条痕のあと、内外面とも板状工具によるナデ仕上げである。色調は暗褐色で、外面胸部突帯下にススが付着する。胎土に砂粒を含む。

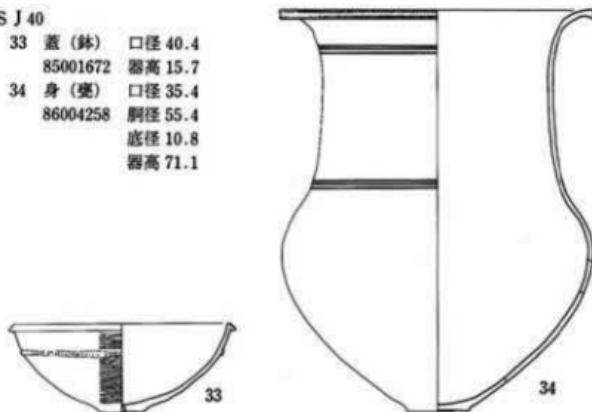
37の壺は丹塗磨研。口頭部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠いている。底部は丸底気味の平底で、胸部は長く立ち上がって肩が張る。頭部は胸部と段をなしてやや外底気味に内傾して伸び、口縁部は頭部端をナデてやや外にめくれさせ、小さな玉縁状につくる。調整は外面で頭部から胸部肩位にかけヨコ方向ヘラミガキ、胸部下半ナナメ方向ヘラミガキ。内面は頭部上半ヨコ方向ヘラミガキ、頭部下半から胸部を抜板状工具によるヨコ方向ナデ、底部は内外面ともナデで仕上げる。丹は内面頭部上半から外面に塗られて赤褐色を呈す。ただし胎土自体は黄灰色で外面に大きな黒斑がみられる。胎土に砂粒を含む。

#### S J 43壺棺 (Fig. 45, PL. 30)

38は蓋に用いられていた甕。胸部は上位で屈曲し、やや外反気味ながら直にちかく立ち上がり、口縁部やや下と胸屈曲部に先の鋭いヘラによる刻目突帯を廻らす。底部は厚く上げ底状で

S J 40

- 33 蓋(鉢) 口径 40.4  
85001672 器高 15.7  
34 身(甕) 口径 35.4  
86004258 胸徑 55.4  
底徑 10.8  
器高 71.1



S J 41

- 35 身(甕)  
87012701  
口径 76.0  
胸徑 77.6  
底徑 15.0  
器高 100.0

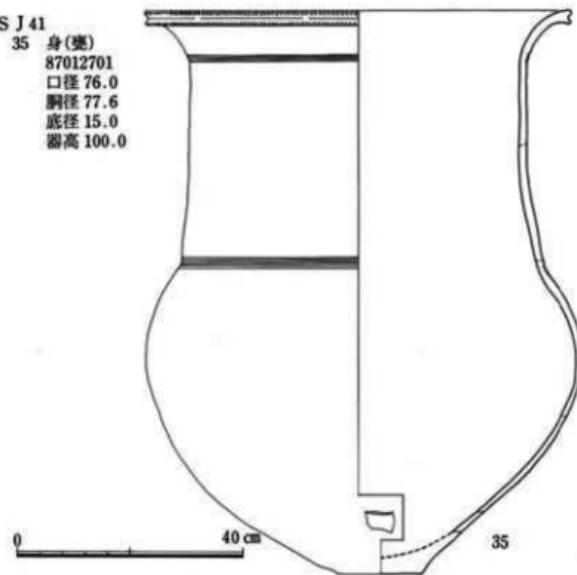


Fig. 44 S J 40 • S J 41 甕棺 (3/16)

### 標石A遺跡

つよく外に張り出す。全体に整形が雑なため、口縁部や突帯が波打っている。調整は胴部外面は屈曲部上をヨコ方向に、屈曲部下をタテ方向に板状工具ナデ。口縁部および胴部内面、底部内外面をナデて仕上げる。色調は外面黄褐色、内面褐色。外面には胴部下位約 $\frac{1}{4}$ を除いて口縁部までススが付着し、内面には炭化した有機物痕がわずかに残る。胎土に砂粒を含む。

39は壺棺の底蓋に用いられていた壺。胴部は全体にふくらとし、上位でつよく屈曲内傾して直線的にやや短く伸びる。口縁部と胴屈曲部には先の鋭いヘラによる刻目突帯を廻らせ、口唇部はナデにより上面が内側に傾く。底部は安定感のある平底で、外につよく張り出し、外底面に木葉痕が残る。全体に整形がやや雑なため、口縁部や突帯が波打っている。調整は胴部外面で胴屈曲部上をヨコ方向ナデ、下半を指ナデ。色調は黄褐色。外面胴部突帯下には底部付近を除いてススが付着し、内面胴部下半には炭化有機物が付着する。胎土に砂粒を含む。

40の壺は丹塗磨研で、打ち欠きは口縁部ではなく、底部を打ち欠いている。胴部は長く伸びて肩が張らず、頸部は胴部からそのままつづくかのように不明瞭な段をつくり直線的に内傾して伸び、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。底部は丸底気味の平底と推定する。全体に整形が雑で器面が波打ち、内面に粘土接合痕を明瞭に残す。調整のヘラミガキは口縁部ヨコ方向、頸部は外面はヨコまたはナナメ方向、胴部外面は肩位ナナメ方向から下半でタテ方向に変わり、さらに底部付近をヨコ方向に施している。内部は頸胴部ともヨコ方向ナデ。色調は口縁部内面から頸胴部外面に丹が塗られて赤褐色を呈す。ただし胎土自体は褐色で胴部外面に黒斑がみられる。胎土に砂粒を多く含む。

### S J 44壺棺 (Fig. 46, PL. 31)

41の蓋壺は胴部が上位で屈曲して直線的に内傾し、下半も直線的にすぼまり、やや外に張り出した上げ底状の底部をつくる。口縁高と胴屈曲部にはヘラによる刻目を施した突帯を廻らす。調整は内外面とも板状工具ナデで、外面は胴部上位から中位をヨコ方向、下位を底部付近から上に向けタテ方向に、また内面でヨコ方向に当てている。色調は暗橙褐色。外面では胴部突帯下約 $\frac{1}{2}$ にススが付着し、内面では底部から胴部下位約 $\frac{1}{3}$ にかけ炭化した有機物の付着が認められる。胎土に砂粒を多く含む。

42は丹塗磨研の壺。口頸頭を約 $\frac{1}{3}$ 周打ち欠く。底部は丸底気味の平底で、胴部はあまり肩が張らずに立ち上がる。頸部は胴部と段をなして外反気味に立ち上がり、そのまま外に開いて口縁部を丸くおさめる。調整は内面頸部上半から口縁部および外面全体をヨコ方向ヘラミガキ、内面は頸部下半ナデ、胴部肩位ヨコ方向ヘラナデ、胴部下位はナデと思われるが器面が荒れており明らかでない。丹は頸部内面上半から外面全体に塗られ赤褐色を呈す。ただし胎土そのものの色調は黄褐色で、胴部外面一部に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

S J 42

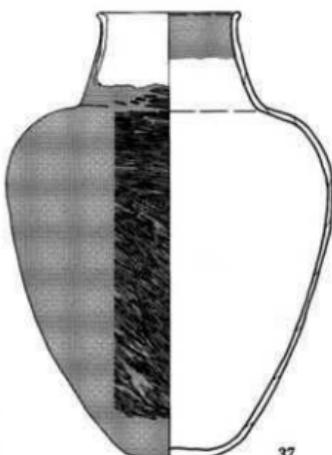
36 蓋(蓋) 口徑 22.4 扁曲部徑 27.2  
85001669

37 身(蓋) 口徑 15.3 頸徑 20.5  
85001978

腹徑 35.1 底徑 7.9  
頸高 10.8 器高 48.3



36



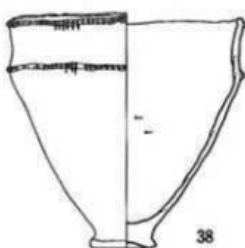
37

S J 43

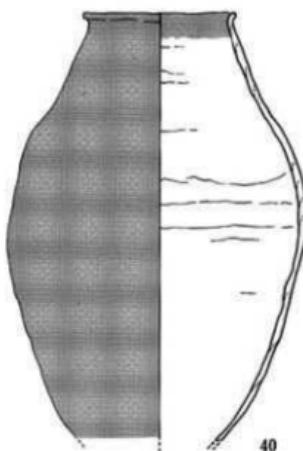
38 上蓋(蓋) 口徑 25.7 扁曲部徑 25.6  
85001657

39 底蓋(蓋) 口徑 19.3 扁曲部徑 24.2  
85001656

底徑 8.4 器高 25.1

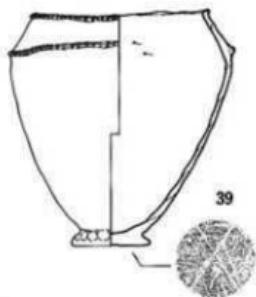


38



40

40 身(蓋) 口徑 16.4 頸徑 23.1  
85001655 腹徑 31.6 頸高 11.0  
器高 48.0



39



Fig. 45 S J 42 · S J 43 蓋棺 (上)

### 標石A遺跡

#### S J 45壺棺墓 (Fig. 45, PL. 33)

43は一群の壺棺の中で最も壺にちかい形態の小型壺棺である。口縁部は完全に打ち欠き胴部下位に穿孔がある。胴部は低くつぶれ、不明瞭な段をなして頭部が直線的に内傾して伸び、口縁部はゆるやかに外反すると思われる。口頸間と頸胸間には各3条の沈線を廻らし、各部位を明瞭に区分している。調整は内外面ともナデ、黄褐色で砂粒を含む。

#### S J 58壺棺

丹塗磨研壺の胴部のみわずかに残存する。形態は不明である。

#### その他の壺棺 (Fig. 47, PL. 31)

遺構に伴うものを一括する。多くはIV区から出土しており、S T49古墳の周溝掘削等により、なお4基以上の壺棺墓が破壊されたことが知られる。

44は大型壺の口縁部破片。頭部は内傾して伸び、口縁部は短く外に開いて端部を丸くおさめる。口縁部から頭頭外面ヨコ方向ヘラミガキ、頭頭内面ナデ。黄褐色で砂粒を含む。S T49古墳周溝埋土出土。

45は口縁部破片で、外に大きく外反して開く。内外面ともヨコ方向ヘラミガキ。明茶褐色で砂粒を含む。S T49古墳周溝内出土。

46の口縁部破片は頭部からそのままゆるやかに外反して開き、端部で薄く仕上げている。内外面ともヨコ方向ヘラミガキ。明茶褐色で砂粒を含む。表土採集品。

47は頭部が外反して立ち上がり、口縁部がそのまま外に開く。全体に器壁が厚い。調整は頭部・口縁部とも内外面ナデ。丹塗の痕跡が認められる。淡褐色で砂粒を多く含む。S T01古墳西側出土。

48は底部と頭部付近の破片からみて同一個体に復元した。底部は平底、胴部はやや肩が張るのみられる。頭部は発達しているが、胴部との境にはヘラミガキの際に浅い沈線を廻らせ、かすかに段をつけている。調整は頭部外面タテ方向ヘラミガキ、内面および外底部はナデ。赤褐色で砂粒を多く含む。復元胴最大径37.4cm。S T49古墳周溝埋土出土。

49は丹塗磨研壺。頭胴部約 $\frac{1}{4}$ が残存する。胴部は肩がつよく張り、頭部は未発達ながら、胴部との間に明瞭な段をなさるに立ち上がる。調整は頭胴部外面をヨコ方向ヘラミガキ、内面を板状工具ヨコ方向ナデ。外面は丹が塗られて赤褐色を呈すが、胎土そのものは黄褐色で、外面に黒斑がみられる。胎土に砂粒を多く含む。復元胴最大径43.2cm。S J 41壺棺基西側出土。

50は頭胴部の一部のみ残存する。胴部は肩位がやや丸味をもつ。頭部は発達しているが、胴部との境はヘラミガキの際にヘラで意図的にかすかな段をつけている。調整は頭部外面肩位ヨコ方向ヘラミガキ、下半はタテ方向ヘラミガキと思われる。内面は板状工具タテ方向ナデのあ

III. 遺物

S J 44

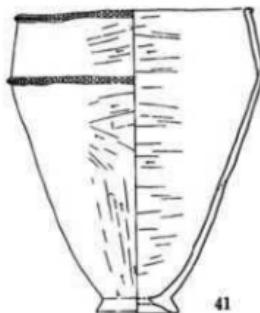
41 蓋(甕) 口徑 25.8 扁曲部徑 28.1

84000362 底徑 8.8 器高 32.8

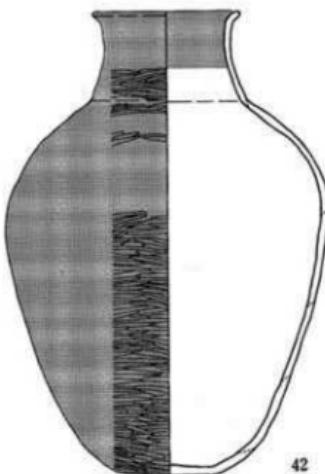
42 身(甕) 口徑 15.8 頸徑 16.8

84000364 胸徑 34.5 底徑 10.2

頭高 9.8 器高 50.4



41

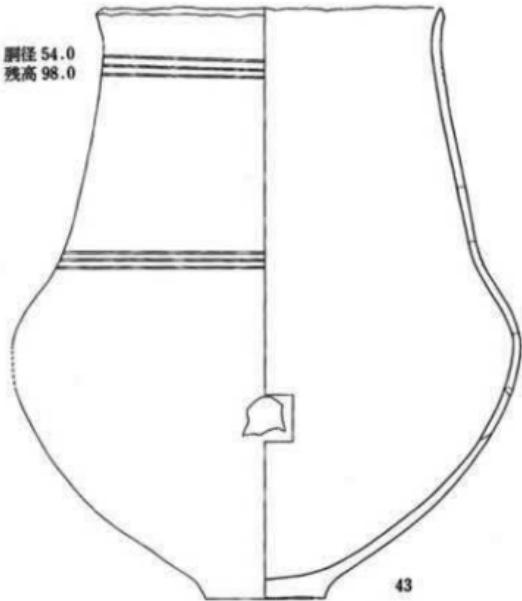


42

S J 45

43 甕 胸徑 54.0

86004257 殘高 98.0



20 cm

0

Fig. 46 S J 44蓋棺・S J 45甕棺 (1/4)

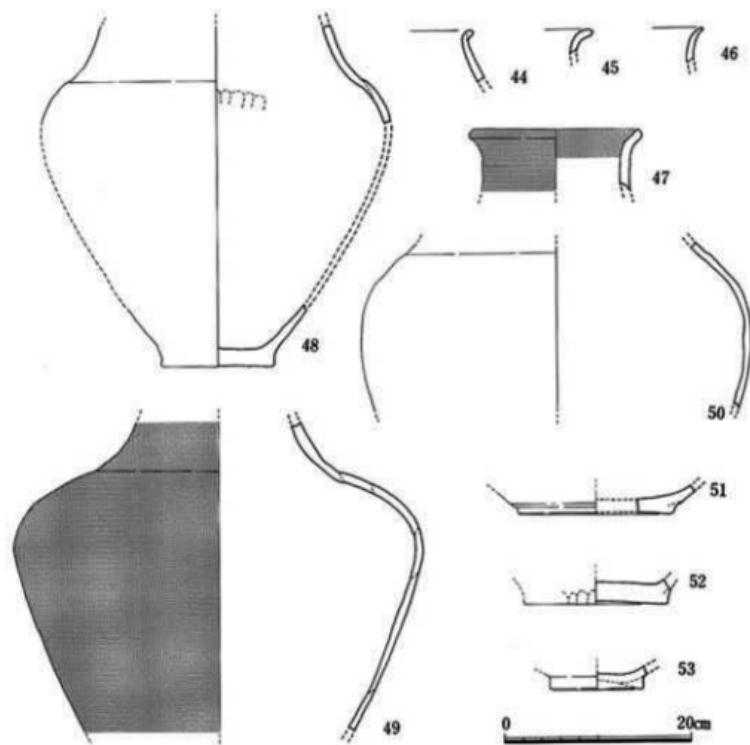


Fig. 47 その他の壺棺 (少)

と指でかるくナデている。黄褐色で砂粒を多く含む。復元胴最大径41.6cm。S T 49古墳周溝埋土出土。

51は底部付近の破片。胴底部内外面ともヨコ方向へラミガキを施し、つくりは丁寧である。外面褐色、内面明黄褐色で微砂粒を少し含む。底径16.6cm。S K 22土壤埋土中出土。

52は底部のみ残存。胴部との接合部は内面をヘラでおさえ、外面からは指でおさえている。明褐色で砂粒を多く含む。底径15.3cm。S T 49古墳周溝。

53は小型の壺底部で、厚く立ち上がってみえるが円板貼付けではない。内外面ともナデ。内面灰色、外面明褐色で砂粒を含む。底径10.0cm。S J 41墓壙埋土中出土。

## b) 供獻土器 (Fig. 48, PL. 38)

いずれもIV区弥生前期埋葬群およびその付近から出土した。点数は少なく、壺と高坏に限られる。出土状況の明らかなものはS P48石蓋土壤基上面から出土した60と、S P53土壤基出土の54の2点で、他は55がS J41壺棺墓、56・58はS J27壺棺墓のそれぞれ埋土上位から出土しており、遺構上面が破壊された際に落ち込んだ可能性があるので、本来の供獻品かどうかは確かでない。

54が底部に丸底の名残りをとどめており弥生前期前半に位置する以外、他は前期後半～前期末で、同墓地の壺棺の時期に重なるようである。遺物一覧表 Tab. 4

Tab. 4 IV区埋葬供獻土器一覧表

Fig. 図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
48-54 8712230	S P53 埋土上面	壺	胴径 14.7 底径 5.5 器高 9.5	胴部は高く立ち上がり、肩が張る。	胴部は外面ヨコヘラミガキ、内面ナダ。外底部ヘラミガキ。外面暗赤褐色。内面黒色で砂粒を含む。
—55 8516680	S J41 埋土中	壺	胴径 22.2 底径 6.6 器高 15.4	胴部は丸みをもって張り、最大径を上位におく。 頸部は沈線2条をおいて胴部からかすかに屈曲し、強く内傾して伸びる。	胴頂位に丹波模を残す。元々丹波磨研。 胴部外面ヨコヘラミガキ、内面ナダ。外底部ヘラミガキ。黄褐色で胴部外面に黒斑。砂粒を含む。
—56 8712227	S J27 埋土中	壺	口径 4.6 胴径 8.7 器高 6.6	胴部は球状。頸部は弧を描いて立ち、口縁部が大きく外反。頸胸間に沈線1条をおき、胴部肩に羽状文を描く。	口縁部及び内面ナダ。外面は頸部タテヘラミガキ、頸部ヨコヘラミガキのあと沈線と羽状文をヘラ描き。 外面黄褐色、内面暗褐色で砂粒を含む。
—57 8708774	S T45周溝 埋土中	壺		頸部はやや内傾して立ち上がり、口縁部で短く外反。	口縁部ヨコヘラミガキ。頸部外面タテヘラミガキ、内面ナダか。明茶褐色で砂粒を含む。
—58 8712218	S J27 埋土中	壺	底径 7.2 残高 2.2	底部は外周に粘土帯をまわして上げ底にしているが、一見、高台状。	底部内外面ともナダ。暗褐色で砂粒を含む。
—59 8705287	S T45周溝 埋土中	高坏	突唇部径 4.5 残高 5.3	脚部は大きく張り開く。筒部は短く、中間に割目がない突唇をめぐらす。	脚部内面及び筒部外面ナダ。 黄褐色で砂粒を含む。
—60 8609639	S P48 石蓋上	壺	胴径 15.9 底径 4.0 残高 13.1	胴部はややつぶれた球状で丸底に近い。 頸部はやや内傾しながら細く長く伸び、脚部との境に断面三角形の突唇を1条めぐらす。	外面は荒れているが、脚部中位にヨコヘラミガキ痕。内面ナダ。外面黄褐色、内面暗灰褐色で砂粒を含む。

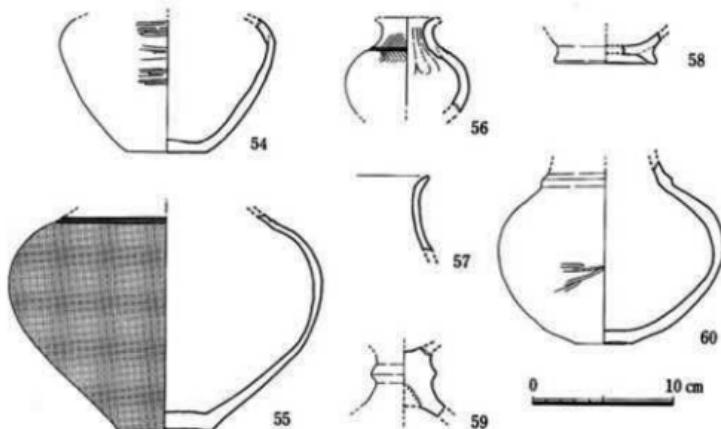


Fig. 48 IV区埋葬供獻土器 (1/4)

## c) その他の土器 (Fig. 49~51, PL. 34~37)

遺構に伴わない縄文晚期から弥生前期の土器片を一括する。

I 区旧河道埋土中からの出土が大部分で、他に S T 49古墳周溝埋土中や検出面からの出土品が若干ある。とくに I 区旧河道からの出土品中には縄文晚期前半のものが多く含まれている。また S T 49古墳周溝出土のものの多くは周溝削で破壊された壺棺の蓋壺等であろう。

縄文晚期前半(黒川式期)では深鉢61~69と浅鉢70~79がある(Fig. 49)。深鉢は体部上位の屈曲部がよわくなり、口縁部の装飾も退化していく方向にある。調整の条痕をそのまま残すものは少なく、ヘラナデあるいは指ナデを多用する。浅鉢は体部の屈曲や口縁部の装飾等により形態は多彩であるが、点数が限られるので敢て分類しない。ただ75~79はよくヘラミガキが施され精良につくられている。

縄文晚期後半(山ノ寺式、夜白式期)から弥生前期の土器は壺80~100(Fig. 50), 高坏101(Fig. 50)と鉢113~115(Fig. 51)とがある。

まず壺は、80~82は胴部上位で屈曲するが刻目および突帯をもたない。

83~85・88・91・92はやはり胴部上位で屈曲するが未だ刻目突帯として定形化されておらず、口唇部角あるいは屈曲部に直接刻目を施したり、突帯だけのものなどがみられる。91は細い刻目突帯をもつが、口縁部を山形につくり変則的である。

III. 遺物

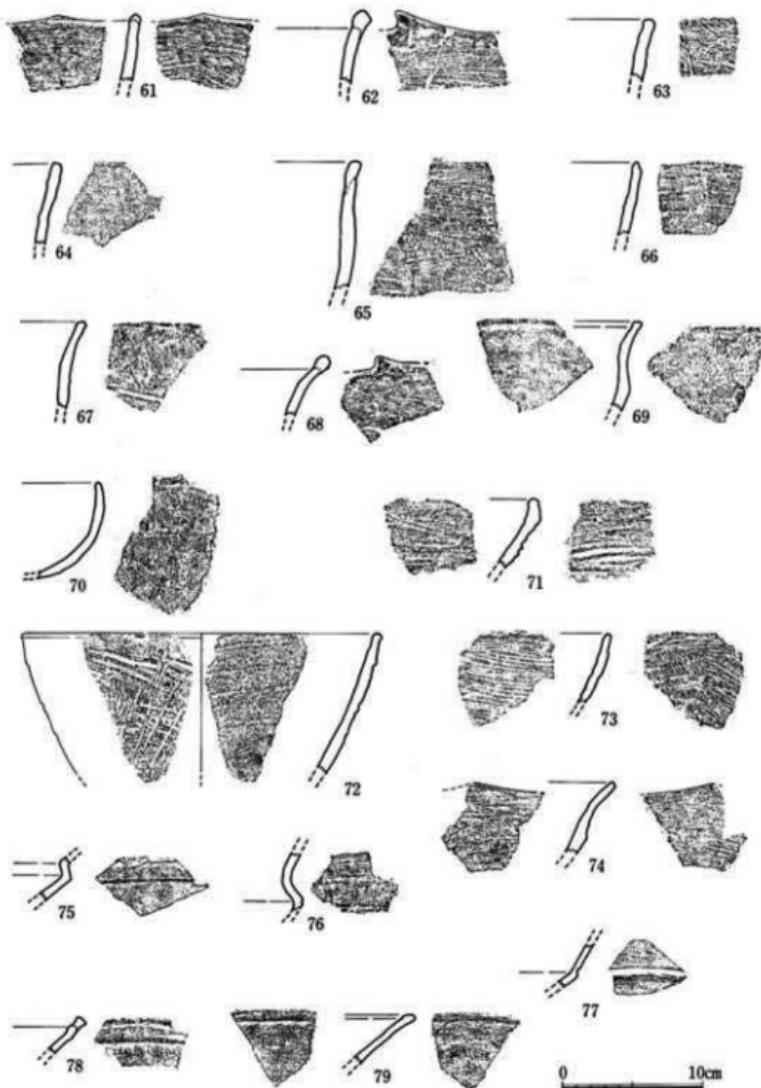


Fig. 49 繩文晚期～弥生前期土器 1 (3/4)

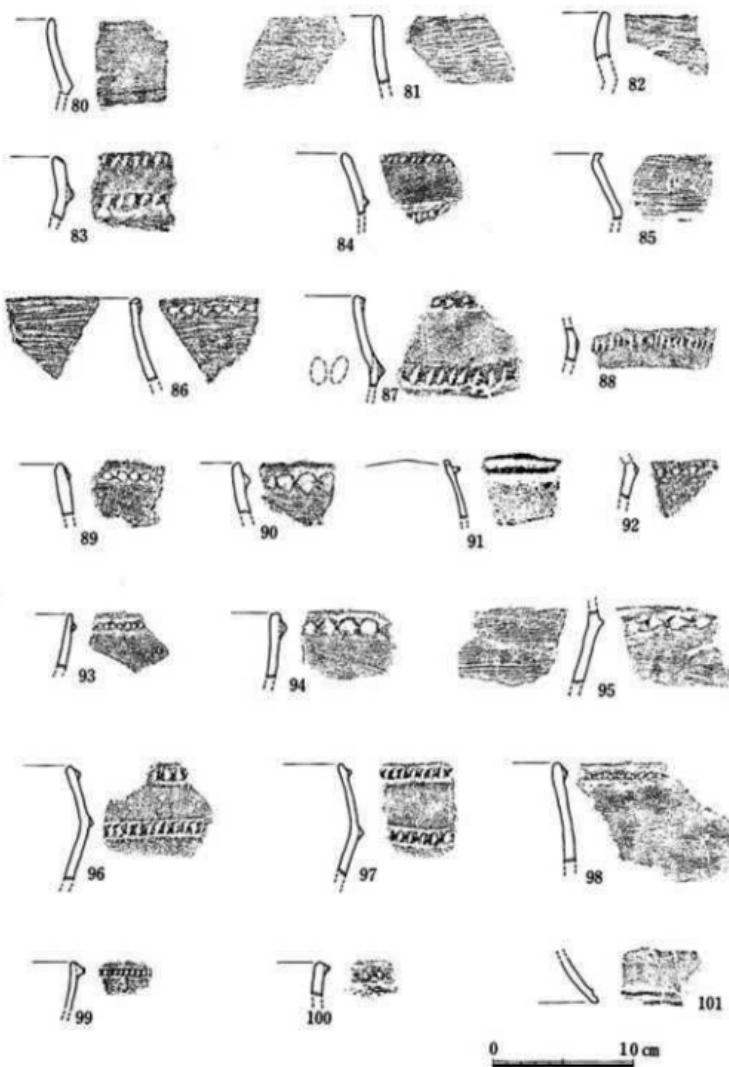


Fig. 50 繩文晚期～弥生前期土器 2 (1/4)

### III. 遺物

86・87・89・90・95は胸部上位が屈曲し、口縁部や下と屈曲部に刻目突帯を廻らせ定形化する方向にある。その一方、93・94は口縁部下に刻目突帯をもつが胸部上位は屈曲しない。

以上は刻目突帯文系甕の中でも古い様相を示すもので、刻目は太い竹管状工具をあてて丁寧につくる場合が多く、調整に条痕をそのままのこす傾向がつよい。

96～100は刻目突帯文系甕の中では新しい段階のもので、胸部上位が屈曲する96～98と屈曲しない99・100とがある。口縁部突帯は口縁高にちかく、刻目はヘラで細かく刻み、器面調整はナデ仕上げが目立つ。

高环101は板付I式並行期であろう。

鉢113～115は夜臼式期～板付I式期に属す。

その他102～112は甕底部で、102～104は外面に粗い条痕を残し厚底であるなど縄文晩期前半の特徴を示す。遺物一覧表 Tab. 5

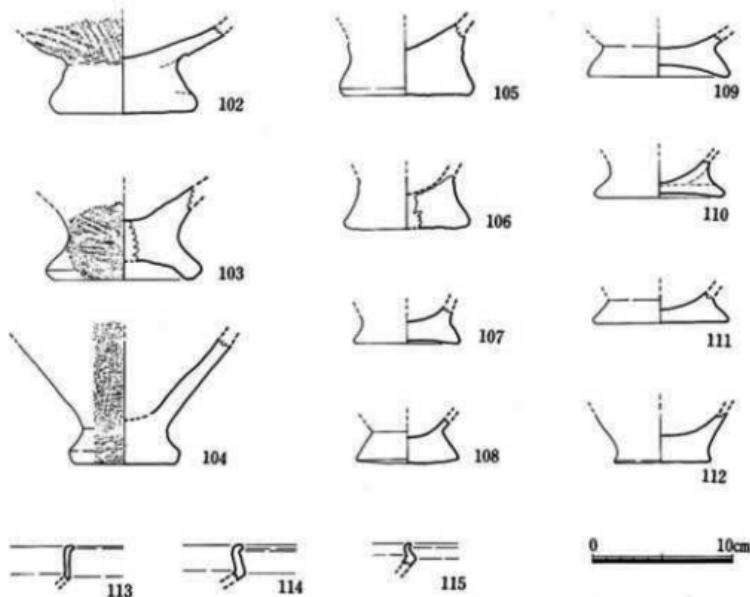


Fig. 51 縄文晩期～弥生前期土器 3 (3)

## 標石A遺跡

Tab. 5 鑄文晚期～弥生前期土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
49-61 8712208	I区旧河道 埋土中	深鉢		波状口縁。	内面ヨコ条痕のあとナデ。外面ヨコ条痕。
—62 8705268	II区水路 埋土中	深鉢		口縁部はリボン状突起で飾り、やや外反。	内面ナデ、外面ヨコ条痕。黄褐色で砂粒を含む。
—63 8705262	II区水路 埋土中	深鉢		口縁部は外に向いて直線的に伸びる。	内面ナデ、外面ヨコ条痕。明褐色で砂粒を含む。
—64 8712207	I区旧河道 埋土中	深鉢		口縁部はかすかに外反気味。	内外面ともナデ。赤褐色で微砂粒を多く含む。
—65 8705291	I区旧河道 埋土中	深鉢		胸部は内溝気味に立ち上がって口縁部かすかに外反。	内面条痕のあと口縁部近くをナデ。外 面ヨコ条痕のあと下部タテ条痕。茶褐色 で砂粒を含む。
—66 8705260	II区水路 埋土中	深鉢		口縁部は直線的に開いて伸びる。	内外面ともヘラ状工具ヨコナデ。赤褐色 で砂粒を含む。
—67 8705261	II区水路 埋土中	深鉢		口縁部ゆるやかに外反。	内面ヘラ状工具ナデ、外面不定方向条 痕。明褐色で砂粒を含む。
—68 8712209	I区旧河道 埋土中	鉢		口縁部はリボン状突起で飾り、大きく 外反。	内外面ともヘラ状工具ナデ。明褐色で 砂粒を含む。
—69 8712204	I区旧河道 埋土中	深鉢		胸部は軽く屈曲し、口縁部は外反して 口唇部に丸味をもつ。	内外面ヨコ条痕のあとナデ。黄褐色で 砂粒を含む。やや軟質
—70 8705293	I区旧河道 埋土中	鉢		体部は内溝。	内面ナデ。外面上半ヨコナデ、下半ヘ ラ状工具による不定方向ナデ。内面明 褐色。外表面暗褐色で砂粒を含む。
—71 8705200	I区旧河道 埋土中	鉢		口縁部は屈曲して短くやや内傾。	内外面ヨコ条痕。明褐色で砂粒を多く 含む。
—72 8708383	S T04 盛土中	鉢	口径 25.6 底高 10.0	体部はかすかに内溝気味。	内面ヘラ状工具ヨコナデ、外表面不定方 向条痕。明褐色で砂粒を多く含む。

## III. 遺物

Fig. 図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
49-73 8705289	I区旧河道 埋土中	鉢		体部はかすかに内湾気味。	内面ヨコ条痕。外面は口縁部ヨコ条痕のあと体部ナナメ条痕。 茶褐色で砂粒を含む。
—74 8712212	I区旧河道 埋土中	鉢		波状口縁。口縁部は明瞭な屈曲をなさず外反。	内外面ともヨコ条痕。黄褐色で砂粒を含む。
—75 8705296	I区旧河道 埋土中	浅鉢		口縁部は二段屈曲し、外反。	内外面ともヨコヘラミガキ。内面明茶灰色。外面明黄褐色で砂粒を殆ど含まない。
—76 8705267	II区旧河道 埋土中	浅鉢		体部は屈曲部に沈線をめぐらし、口縁部はゆるやかに外反。	内面ナデ。外面ヨコヘラミガキ。黄褐色で微砂粒を少し含む。
—77 8712203	I区旧河道 埋土中	浅鉢		口縁部は体部との間に沈線をおいて屈曲。	内外面ともナデ。黄褐色で微砂粒を少し含む。
—78 8705266	II区水路 埋土中	浅鉢		口縁部にリボン状突起。	内外面ともヨコヘラミガキ。茶褐色で砂粒を含む。
—79 8712206	I区旧河道 埋土中	浅鉢		体部は直線的に開いて伸び、口唇部に丸味をもつ。	内外面ともヨコヘラミガキ。内面灰褐色。外面茶褐色で砂粒を少し含む。
50-80 8712202	I区旧河道 埋土中	甕		口縁部は屈曲してやや外反気味に内傾。	内面ナデ。外面ヘラ状工具ヨコナデ。暗褐色で砂粒を含む。
—81 8705264	II区水路 埋土中	甕		口縁部は屈曲してやや外反気味に内傾か。	内外面ともヨコ条痕。暗褐色で砂粒を含む。
—82 8705299	I区旧河道 埋土中	甕		口縁部は屈曲して外反気味に内傾か。	内面ナデ。外面ヨコ条痕。内面暗褐色。外面赤褐色で砂粒を含む。
—83 8705276	IV区北側	甕		口縁部はわずかに屈曲して内傾。口唇部に刻目、胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともヨコナデ。茶褐色で砂粒を含む。
—84 8708775	S T49周溝 埋土中	甕		口縁部は明瞭な屈曲をなさず内傾し、胴部に刻目突帯。	内外面ともナデ。茶褐色で砂粒を少し含む。
—85 8708750	表塚	甕		口縁部は屈曲して内傾。口唇部はナダて外にめくれる。	内面ヘラ状工具ヨコナデ、外面ヨコ条痕。明茶褐色で砂粒を含む。

## 櫻石A遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
50-86 8705294	I区旧河道 埋土中	甕		口縁部やや外反気味で刻目突帯。	内外面ともヨコ条痕。内面黒褐色。外面褐色で砂粒を含む。
—87 8708766	S T49周溝 埋土中	甕		口縁部は屈曲して外反しながら内傾。口縁部外角に刻目。胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともナデ。黄褐色で砂粒を含む。
—88 8705274	II区水路 埋土中	甕		口縁部は屈曲して内傾。胴屈曲部は突帯を付けずに直接刻目。	内外面ともナデ。赤褐色で砂粒を多く含む。
—89 8705258	II区旧河道 埋土中	甕		口縁部は直線的に開き、口縁下に低い刻目突帯。	内外面ともナデ。暗赤褐色で砂粒を含む。
—90 8705285	検出面	甕		口縁部は内傾し、口縁下に刻目突帯。	内外面ともナデ。内面明褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。
—91 8705273	II区水路 埋土中	甕		波状口縁。口縁部は内傾し、口縁下に刻目突帯。器壁は薄い。	内外面ともナデ。明茶褐色で砂粒を多く含む。
—92 8705259	II区水路 埋土中	甕		口縁部は屈曲して内傾。胴屈曲部は突帯を付けずに直接刻目状刻突文。	内外面ともヘラ状工具ナデ。内面暗褐色。外面明褐色で砂粒を含む。
—93 8712234	S P53 埋土中	甕		口縁部は直線的に開き、口縁下に刻目突帯。	内面ナデ。外面ヨコ条痕のあとナデ。赤褐色で微砂粒を少し含む。
—94 8708762	S T02 石室埋土中	甕		口縁部はかすかに内湾気味に立ち上がり。口縁下に刻目突帯。	内外面ともヘラ状工具ヨコナデ。暗灰色で砂粒を少し含む。
—95 8705257	II区水路 埋土中	甕		口縁部は屈曲して内傾。胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともヘラ状工具ヨコナデ。外面胴屈曲部下にスス付着。暗褐色で砂粒を含む。
—96 8708705	S T49周溝 埋土中	甕		口縁部は屈曲して強く内傾。口縁下と胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともヘラ状工具ヨコナデ。茶褐色で砂粒を含む。
—97 8708768	S T49周溝 埋土中	甕		口縁部は屈曲してやや内湾気味に内傾。口縁下と胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともナデ。内面明茶褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。
—98 8705275	IV区北側	甕		口縁部はやや内傾。口縁下に刻目突帯。	内外面ともヨコナデ。内面暗褐色。外面茶褐色で微砂粒を多く含む。

## III. 造物

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴その他	
50-99 8708753	表探	甕		口縁部は内薄気味で口縁高にていねいな刻目突帯。	内外面ともナゲ。茶褐色で砂粒を含む。	
-100 8702860	ST49周溝 埋土中	甕		口縁部はやや外反気味で、口縁高に刻目突帯。	内外面ともナゲ。明赤褐色で砂粒を含む。	
-101 8705295	I区田河通 埋土中	甕		口縁部は粗曲して、やや外反気味に内傾。 口縁下に刻目の無い突帯をめぐらす。	内外面ともナゲ。黄褐色でやや軟質。砂粒を含む。	
51-102 8708382	ST045室 埋土中	甕	底径 残高	9.6 6.2	底部は厚く、小さく、外に張り出す。	胴部下半内面ナゲ、外面クテ条痕。底部ナゲ。茶褐色で砂粒を含む。
-103 8712213	I区田河通 埋土中	甕	底径 残高	9.5 6.6	底部は脚状に外に張り出す。	胴部は内外面とも条痕。底部は内面へラ状工具ナゲ、外面ナゲ。赤褐色で砂粒を含む。
-104 8705279	表探	甕	底径 残高	7.1 6.0	胴部は直線的に開いて伸び、底部は厚く、小さく、やや外に張り出す。	内面ナゲ、外面は胴底部とも条痕のあとナゲ。赤褐色で砂粒を含む。
-105 8705269	II区水路 埋土中	甕	底径 残高	8.9 5.0	底部は小さく、厚い。	胴部内面ともナゲ、外底部へラ状工具による不定方向ナゲ。明褐色で粗い砂粒を多く含む。
-106 8705270	II区水路 埋土中	甕	底径 残高	8.6 3.7	底部は厚く、外に張り出す。	胴底部外面ナゲ。赤褐色で粗い砂粒を多く含む。
-107 8712231	検出面	甕	底径 残高	7.5 2.5	底部は外に張り出す。	胴部内外面ともナゲ、外底部へラ状工具ナゲ。褐色で砂粒を含む。
-108 8712233	検出面	甕	底径 残高	7.3 3.0	底部は厚く、外に張り出す。	内面へラ状工具ナゲ、胴底部外面ナゲ。内面黒褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。
-109 8708769	ST49周溝 埋土中	甕	底径 残高	9.8 3.1	底部は強く、外に張り出す。	胴底部とも内外面ナゲ。茶褐色で砂粒を含む。
-110 8708747	ST49周溝 埋土中	甕	底径 残高	8.8 2.7	底部は強く、外に張り出す。	胴底部とも内外面ナゲ。明褐色で砂粒を多く含む。
-111 8708755	ST50周溝 埋土中	甕	底径 残高	9.6 2.2	底部は強く、外に張り出す。	胴底部とも内外面へラ状工具ナゲ。茶褐色で砂粒を含む。

## 漆石A遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
51-112 87087710	S T49周溝	甕	底径 6.5 残高 3.5	底部はあまり外に張らず、やや厚い。	底部内外面ともナデ、外底部へラ状工具ナゲ。茶褐色で砂粒を多く含む。
-113 8712221	検出面	浅鉢		口縁部は屈曲して直立し、口唇部はナデで外にめくれる。	内外面ともヘラ状工具ヨコナデのあと軽くナゲ。褐色で砂粒を含む。
-114 8712235	S P53 埋土中	浅鉢		口縁部は屈曲して内傾、口唇部はナデで外にめくれる。	内面ナデ、口縁部から体部外面ヨコヘラミガキ。茶褐色で砂粒を含む。
-115 8712222	S J 27 埋土中	浅鉢		口縁部は屈曲して短く内傾、口唇部はナデで外にめくれる。	内外面ナデまたはヘラミガキ。暗褐色で微砂粒を含む。

## (2) 玉類 (Fig. 52, PL. 38)

IV区埋葬群の壺棺墓・土壤墓から出土した管玉と勾玉がある。いずれも副葬品あるいは着装品と考えられる。全体に寸法が不揃いで、二次的加工を含む破損品の多い点が注意される。

116～118、3点はS P38土壤墓出土のいずれにも淡緑色の碧玉製管玉。116は長さ10.5mm、径8mm、孔径3～4mm。一方の端部に割れ口が若干残っており、割れて短くなつたものを再研磨して使用したと思われる。117は長さ15mm、径6mm、孔径2.5mm。孔は一方から穿けている。118は長さ15mm、径5.5mm、孔径1.5～2.5mm。孔は二方向から穿けている。

119はS J 40壺棺墓から1点のみ出土した。ただし、出土位置は壺棺下の土壤填底上にあたり、埋葬時の混入の可能性もないわけではないが、一応S J 40壺棺墓に帰属させておく。緑色の碧玉製管玉で、片面を大きく欠失している。孔は一方から穿ける。長さ14mm、径7mm、孔径3.5mm。

120～122の3点はS P51土壤墓出土の碧玉製管玉。120は長さ12mm、径4mm、孔径2mm、121は長さ10mm、径4mm、孔径2mm。122は長さ9mm、径4mm。いずれも淡緑色で、孔は一方から穿けている。

123～126、4点はS P52土壤墓出土の碧玉製管玉。123は片面を欠失する。緑白色で孔は一方から穿けている。長さ20.5mm、径6mm、孔径2.5mm。124も片面を欠失する。孔は2方向から穿けている。緑灰色で長さ17mm、径5mm、孔径2.5mm。125は割れて短くなつたものの一端を再研磨して使用しており、割り口をかなり残す。緑白色で長さ7mm、径6mm、孔径2.8～3.5mm。

126は長さ10mm、径4.5mm、孔径2.5mm。暗緑色で孔は一方から穿けている。

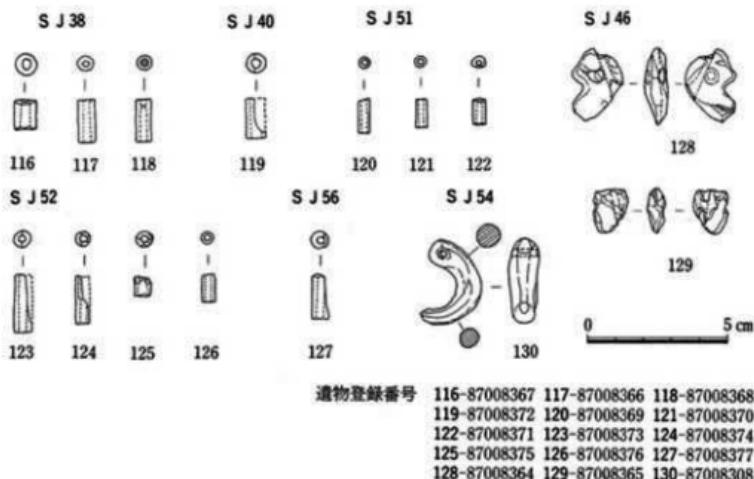


Fig. 52 IV区埋葬遺構出土玉類 (1/2)

127はS P 56土壤墓から1点のみ出土した。碧玉製管玉。片面の大きな欠損部に二次的研磨を加えて使用している。孔は一方から穿いている。緑白色で長さ16mm, 径6mm, 孔径3mm。

128と129はS P 46土壤墓出土。材質は軟かい孔雀石製で、一見、腐蝕した青銅製品を思わせる白濁の薄緑色である。128は勾玉として作られている。磨滅のため、原形はかなり損なわれていると思われる。ただし孔は、通常の位置には双方から途中まで穿いているが貫通しておらず、頭部をタテ方向にしかもナナメに穿けており変則的である。最大長さ27mm, 厚さ8mm, 孔径3mm。129の破片も同様な勾玉の可能性がつよいが、全体は明らかでない。孔は一つは貫通しているが、もう一つは途中で止まっている。これら2点と類似した石材の管玉は久保泉丸山遺跡の支石墓からも出土している。

128を電子アナライザーで分析した結果ではCu, Fe, K, Al, Caなどを含有し、中でもCuの値がもっとも高かった。孔雀石そのものが銅鉱床に産出する鉱物であることからいえば当然であろうが、類例の少ない素材であるだけに、その産地と入手ルートについては別途検討が必要である。

130はS P 54土壤墓出土の土製勾玉。全体に半円形で、頭部はとくに強調せず尾部に向かって自然に細くなる。断面円形で簡単にナデて仕上げている。明褐色で砂粒を含む。最大長さ30mm。土製勾玉は久保泉丸山遺跡でも支石墓の副葬品と考えられる表採品1点がある。

### 3. 古墳時代

古墳出土の須恵器・土師器・埴輪・玉類・鉄器類、それと土壌墓出土の須恵器とがある。概して量は少ないが、そのうちS T04・S T06古墳から比較的多く出土した。

時期は7世紀代を中心にして6世紀後半～8世紀前半までみられるが、ここでは古墳出土品については8世紀代まで含めて説明する。

#### (1) 須恵器 (Fig. 53～55, PL. 40～42)

古墳からは131～168が出土した (Fig. 53・54)。器種は壺が主体を占め、他に高壺・平瓶・壺・鉢等がある。

壺類のうち蓋131～143はいずれも宝珠をつまみが付き、131～132ではつまみが小さく高い。

Tab. 6 古墳・土壌墓出土須恵器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
53-131 8600610	S T04 狭道東側	壺蓋	口径 10.4 器高 1.9	宝珠つまみで、天井部はやや丸味をもち、短いかえりが付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。暗灰色で砂粒を含む。
—132 8600321	S T04 狭道西側	壺蓋	口径 10.2 器高 2.0	宝珠つまみで、天井部は丸味をもち、短いかえりが付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。やや酸化して暗灰色。砂粒を含む。
—133 8600613	S T04 狭道西側	壺蓋	口径 11.6 器高 2.6	宝珠つまみで、天井部から縁端部にかけてかすかに屈曲し、短いかえりが内に付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。外表面明灰色。内面暗灰色。砂粒を含む。
—134 8504077	S T08 玄室床面	壺蓋	口径 13.0 器高 2.4	宝珠つまみで、天井部は丸味をもち、短いかえりが内に付く。	天井部ヘラケズリ約1分他ナデ。黄灰色で砂粒を含む。
—135 860322	S T04 狭道西側	壺蓋	口径 13.4 器高 3.3	平坦な宝珠つまみで、天井部は丸味をもち、短いかえりが内に付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。やや酸化して灰褐色。砂粒を含む。
—136 8600612	S T04 狭道西側	壺蓋	口径 12.2 器高 2.3	宝珠つまみで、天井部はやや丸味をもち、短いかえりが内に付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。酸化して内面紫灰色。外表面暗灰色。やや粗い砂粒を含む。
—137 8504651	S T06 前庭	壺蓋	口径 12.0 器高 1.7	宝珠つまみで全体に低くつぶれ、かえりが短く脱く立つ。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒を含む。全体に焼け歪みが大きい。天井部にヘラ記号。
—138 8504079	S T02 前庭	壺蓋	口径 12.0 器高 2.1	ややつぶれた宝珠つまみ。天井部は丸味をもちらがら低く、鋭利なかえりが付く。	天井部約1分ヘラケズリ、他ナデ。黄灰色で砂粒を含む。天井部にヘラ記号。

## III. 遺物

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
53-139 8600343	S K08 石室	坏蓋	口径 13.4 器高 2.0	ややつぶれた宝珠つまみ。縁部は外に反ね。かえりは短く立つ。	天井部約1/4ヘラケズリ。他ナデ。灰白色で砂粒を含む。
-140 8600339	S K08 前庭	坏蓋	口径 12.3 器高 2.4	ややつぶれた宝珠つまみ。縁部は外に反ね。かえりは短く立つ。	天井部約1/4ヘラケズリ。他ナデ。やや酸化して灰褐色の砂粒を含む。
-141 8600336	S T06 玄室	坏蓋	口径 14.2 器高 2.4	平坦な宝珠つまみ。天井部はなだらかに下がり、口縁部は短く折れる。	天井部約1/4ヘラケズリ。他ナデ。明灰色で砂粒を含む。クロロ回転右。
-142 8504657	S T06 玄室	坏蓋	口径 15.4 器高 1.8	宝珠つまみで、天井部は平坦にちかく、口縁部は短く折れる。	天井部約1/4ヘラケズリ。他ナデ。黄灰色で微砂粒を多く含む。全体に焼け歪みが大きい。
-143 8504688	S T03 前庭	坏蓋	口径 15.8 器高 0.9	宝珠つまみで天井部は偏平、断面三角形の口縁部をもつ。	天井部約1/4ヘラケズリ。他ナデ。明灰色で砂粒を含む。
-144 8600344	S K08 石室	坏身	口径 15.2 器高 5.5	体部は底部とあまり明確な境をなさず直線的に伸び、高台は内に入って裾広がり。	外底部にヘラケズリ痕。他ナデ。灰白色で焼成不良。砂粒を含む。
-145 8600338	S T06 前庭	坏身	口径 13.6 器高 4.1	体部はやや内湾気味に伸び、高台が内に入る。	内外ともナデ仕上げ。灰白色焼成不良。砂粒を多く含む。
-146 8504676	S T01 玄室床	坏身	口径 14.2 器高 4.1	体部は薄く外反気味に伸び、高台は内に入って裾広がり。	内外ともナデ仕上げ。暗灰色で砂粒をわずかに含む。
-147 8504686	S T03 玄室	坏身	口径 14.5 器高 5.3	体部は深くやや内湾気味で、高台は裾広がり。	内外ともナデ仕上げ。明灰色でやや粗い砂粒を含む。
-148 8600614	S T04 後東側	坏身	口径 12.0 器高 5.4	体部は深く直線的に伸び、高台は裾広がり。	外底部にヘラ切痕。他ナデ。外面明灰色。内面暗灰色で砂粒を含む。クロロ回転右。
-149 8600611	S T04 後東側	坏身	口径 12.8 器高 4.9	体部は深く、口縁部やや外反する。高台は直に立つ。	内外ともナデ仕上げ。酸化して暗赤褐色だが堅い。砂粒を含む。外側に煤付着。
-150 8504678	S T02 前庭	坏身	口径 13.6 器高 4.6	体部はやや内湾気味に伸び、口唇部がく外にめくれる。高台付き。	内外ともナデ仕上げ。灰白色で軟らかく焼成不良。砂粒を含む。
-151 8504647	S T06 前庭東側	坏身	口径 13.4 器高 4.6	体部は内湾気味に伸び、口縁部でやや外反。高台付き。	内外ともナデ仕上げ。明灰色で微砂粒を多く含む。

## 標石A遺跡

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
53-152 8504658	S T06 石室	环身	口径 13.0 器高 4.3	体部は内湾気味で高台付き。	外底部にヘラ切痕。他ナデ。黄灰色で微砂粒を多く含む。
-135 8600627	S T06 玄室	环身	口径 14.4 器高 4.9	体部は底部と明瞭な屈曲をもって外反気味に立ち上がる。高台付き。	内外ともナデ仕上げ。黄灰色。微砂粒を多く含む。
-154 8504646	S T06 玄室	环身	口径 13.0 器高 4.4	体部は底部と明瞭な屈曲をもって外反気味に立ち上がる。低い高台付き。	内外ともナデ仕上げ。外面明灰色。内面深灰色で砂粒を含む。
-155 8600616	S T06 玄室	环身	口径 14.5 器高 5.5	体部は底部と明瞭な屈曲をもって直線的に伸び深い。高台付き。	内外ともナデ仕上げ。黄灰色で微砂粒を多く含む。
-156 8500645	S T04 供道	环身	口径 12.8 器高 4.7	体部は薄く外反気味に伸びて深い。全体に歪み外側大きい。	内外ともナデ仕上げ。暗灰色で砂粒を多く含む。
-157 8504645	S T06 前庭東側	环身	口径 13.0 器高 3.9	体部は外反気味に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。黄灰色で焼成不良のため軟質。砂粒を多く含む。外底部にヘラ記号。
-158 8504644	S T06 前庭	环身	口径 13.0 器高 3.8	体部は外反気味に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。黄灰色で焼成不良のためやや軟質。砂粒を多く含む。外底部にヘラ記号。
-159 8504638	S T06 前庭	环身	口径 13.0 器高 3.8	体部はやや内湾気味に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。黄灰色で焼成不良のため軟質。砂粒を多く含む。外底部にヘラ記号。
54-160 8600345	S T06 石室	鉢	口径 24.4 器高 9.5	平底で体部は深く。やや内湾気味に伸びる。 外体部の下位一部に櫛目文様あり。	底部から外体部約4分にかけヘラケズリ。他ナデ。底部に板目痕。灰色で砂粒を含む。
-161 8600327	S T04 玄室	高环	口径 10.2 器高 8.3	环体部は直線的に立ち上がり、脚部は幅広がり。	全面ナデ仕上げ。灰白色で焼成不良のため軟質。砂粒を含む。
-162 8600342	S K08 石室	高环	残高 4.0	环部は体部内湾気味か。脚部は四方スカシ。	环部外周にヘラケズリ痕を残し。他ナデ。灰白色で砂粒を含む。
-163 8504089	S T04 玄室	高环	残高 7.0	幅広がりの脚部残欠。中位に沈線2条をめぐらす。	脚部内外ともナデ。灰白色で砂粒を含む。
-164 8600609	S T04 玄室	平底	口径 6.8 体径 15.0 器高 12.2	体部はいくぶん丸味を残し、環部は直線的に開いて、口縁部が少しだけくれる。	底部から体部下位を不定方向ヘラケズリ。体部上面から肩部へラケズリあとナデ。明灰色で砂粒を含む。

## III. 遺物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
54-165 8600346	S T06 前庭	平瓶	口径 9.6 体径 16.1 器高 16.7	体部はやや肩が張り高く、口縁部が直線的に開いて伸びる。	体部下端にヘラケズリ痕。他ナデ。焼成不良のため軟質で土師器質な明灰褐色。砂粒を含む。
-166 8504081	S T02 石室	平瓶	口径 4.9 体径 10.1 器高 7.6	体部は全体に低く肩が張り、口縁部が大きく開く。小型品。	底部へラケズリ。他ナデ。黄灰色でやや粗い砂粒を少し含む。ロクロ回転石。
-167 8600617	S T04 玄室	長頸壺	口径 8.2 体径 17.0 器高 23.1	頸部は外反して細長く、口縁部が外に開く。体部は肩が張り肩上に横筋列点文帯。高台は幅広がり。	体部下半へラケズリ。他ナデ。頸部にしづら痕を残す。焼成不良のため灰白色で軟室。砂粒を含む。
-168 8600247	S T06 前庭	長頸壺	口径 7.7 体径 19.2 器高 22.6	口縁部はやや外反気味に細長く伸び。体部は最大径を上におきながら、全体的にふくらしている。	体部肩位から口縁部カキ目。他ナデ。体部下半の自然輪は横置焼成で斜め下から垂れる。暗灰色。
55-169 8600638	S P10	环 (環底器)	口径 14.4 器高 3.5	体部は直線的に伸び、口縁端部やや外にめくれる。	口縁部から体部ナデ。明灰色で、砂粒を含む。
-170 8600635	S P10	环 (環底器)	口径 15.6 器高 4.3	体部は直線的に開いて伸び、口縁端部やや外にめくれる。高台は幅広がり。	内外ともナデ仕上げ。暗灰色で砂粒を含む。
-171 8701026	S P12	环底 (環底器)	口径 11.8 器高 2.5	宝珠つまみで、天井部は上面平坦。縁端部に向かってなだらかな下がる。内に鈍いかえりが付く。	天井部約1/2へラケズリ。他ナデ。明灰色で焼成不良のため軟質。砂粒を少し含む。天井部にヘラ記号。
-172 8701027	S P12	环身 (環底器)	口径 13.7 器高 4.1	体部は底部と明瞭な屈曲をなさずに内湾して伸び、口縁部でやや外反。脚部は底内側に入っている。	体部下端へラケズリ。他ナデ仕上げ。焼成不良で軟質灰色。砂粒を少し含む。外底部にヘラ記号。
-173 8601630	S P12	平瓶 (環底器)	口径 8.8 器高 15.4	脚部はあまりつぶれず、ややふくらっとし、口縁部は直線的に大きく開く。	脚部下端を不定方向へラケズリ。他ナデ仕上げ。酸化して暗褐色だが硬い。砂粒をやや多く含む。
-174 8600638	S P14	环底 (環底器)	口径 9.8 器高 3.1	体部は天井部から強く屈曲して伸びる。	天井部外側へラケズリ。内面不定方向ナデ。体部ナデ。暗灰色で砂粒を含む。

141～143では内側のかえりを失って端部を短く曲げ、全体に平坦化してゆく。時期は131・132が7世紀前半、133・134は7世紀中頃、135～140は7世紀後半、141・142は7世紀末、143は8世紀前半である。

环身144～159のうち144～155は高台が付く。144は高台が内側に入って低く外に開き7世紀前半、145～148は7世紀中頃、149～152は7世紀後半、153～155は8世紀初である。高台をもたない环156～159は7世紀中頃～7世紀後半である。157～159は外底部に×印のヘラ記号がみえる。

鉢160は8世紀か。高环161～163のうち163は脚が開いて途中に沈線を廻らせ6世紀後半、

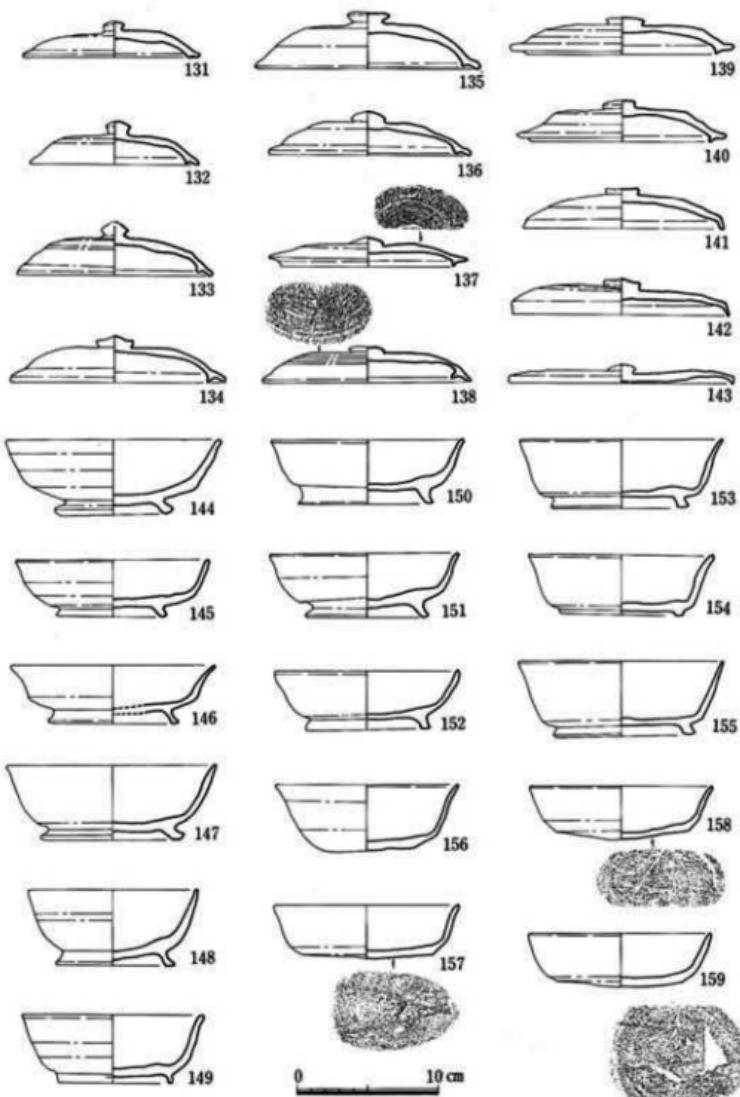


Fig. 53 古墳出土須恵器 1 (1/4)

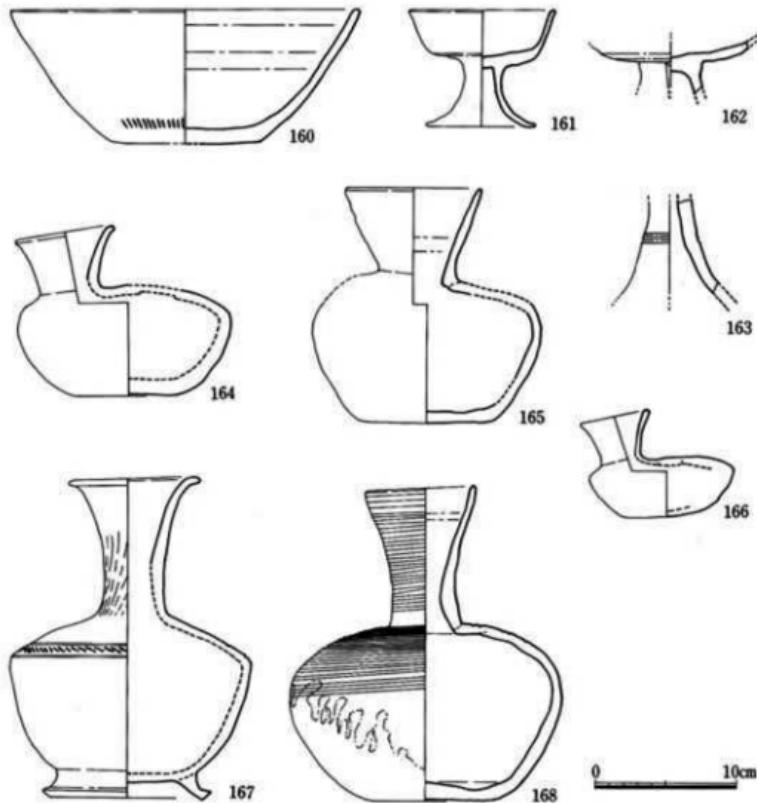


Fig. 54 古墳出土須恵器 2 (少)

161・162は7世紀前半～中頃である。

平瓶は165が7世紀中半、164は7世紀後半、166はややつぶれて8世紀初に下る。壺167・168は長頸で、168は7世紀中頃、167は胴部肩が張って高台をもち7世紀後半。

土壤墓からは壺169～172・平瓶173・蓋174が出土した。時期はいずれも7世紀後半である。S P10・S P14の3点はもともとの副葬・供獻品の一部であろうが、S P12の3点は壺蓋171と壺身172、それに平瓶173が本来のセットを保つものである。各説明はTab. 6によられたい。

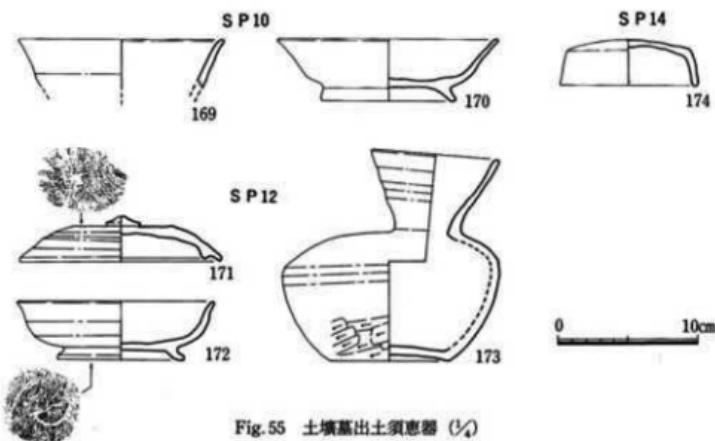


Fig. 55 土壙墓出土須恵器 (上)

## (2) 土師器 (Fig. 56, PL. 43)

175～196はいずれも古墳から出土した。ただしこのうち7世紀に入るものは少なく、むしろ8世紀～12世紀の奈良・平安時代に下るものが多くを占め、奈良時代以降もしばらく古墳への追葬が続いたことを示している。極端には坏188・189のように14世紀に下るものもみられるが、これは追葬というよりも古墳が後世、埋葬に再利用されたことを示すものであろう。S T01・S T02・S T03古墳からは中世の輸入陶磁器片も出土しており、同様な例は周辺の古墳でもしばしばみられるところである。

器種は坏類が主体を占め、他に高坏と壺がある。坏蓋175は1点のみ、須恵器を模したもので7世紀中頃。坏176～180は内面に暗文をヘラ描きし、10世紀後半～11世紀にかかる。その他の坏は182・183が7世紀前半～中頃、184～186は8世紀、187は9世紀末～10世紀前半、190～193は12世紀に下る。壺は194の小型精良品1点のみ出土した。高坏は195・196の2点がある。坏部は丸味をもって立ち上がり、脚部は据がゆるやかに大きく開く。7世紀前半頃に位置しよう。

なお、196には坏部外底ちかくに文字のいわゆるヘラ描きが認められる。これは焼成後に丹塗の上から先の鋸いヘラで刻んだもので、「平作」と描かれている。「作」は奈良時代の異体字にみられる「作」であることはまちがいないが、問題は「平」であって、はたしてこれが「甲」と読めるとすれば、「甲作」を意味することになり、被葬者の集団の性格にも関わる何らかの呼称として興味深い。高坏は形式からみて7世紀前半頃である。

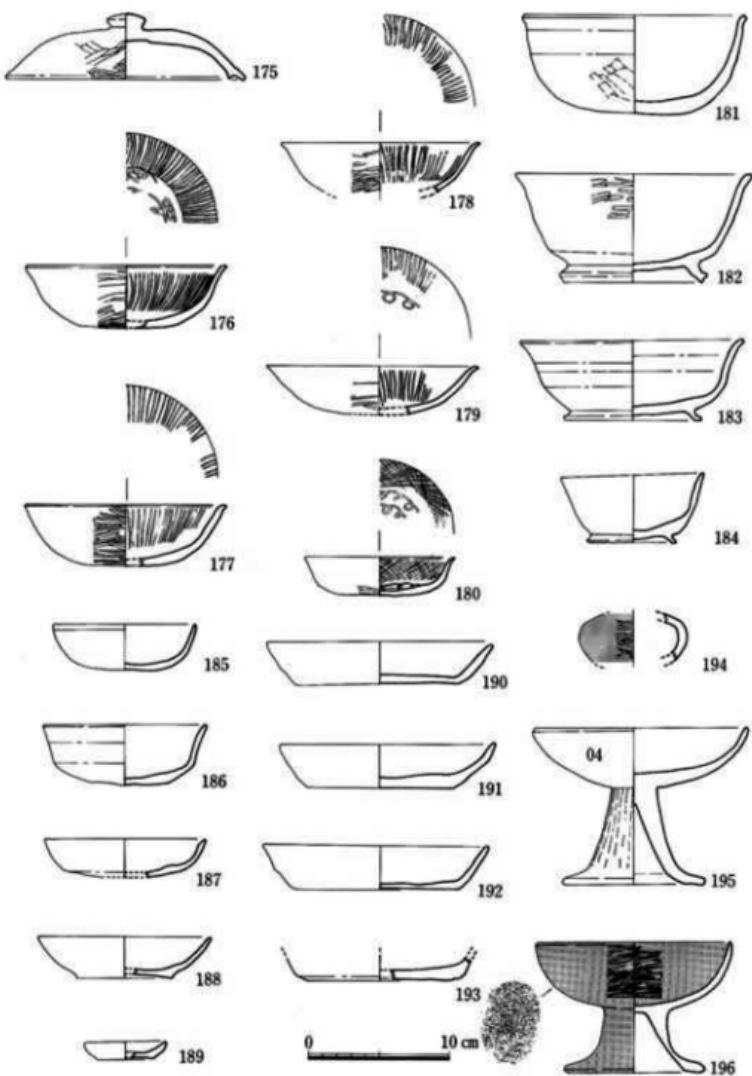


Fig. 56 古墳出土土器 (1/4)

## 砾石A遺跡

Tab. 7 古墳出土土器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
56-175 8504082	S T02 前庭	环	口径 12.2 器高 4.6	宝珠つまみで、体部は全体に丸味をもち、短いかえりが付く。須恵器模倣。	体部外面は不定方向へラケズリ、他ナデ。器壁が厚く、赤褐色でやや粗い砂粒を少し含む。
-176 8600330	S T05 石室	环	口径 14.2 器高 4.5	体部は底部と明瞭な境をなさずに伸び、口縁部でやや外反する。内面に暗文。	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデのあとへラ描き暗文。明褐色で砂粒を少し含む。
-177 8600333	S T05 石室	环	口径 14.2 器高 4.4	体部は底部と明瞭な境をなさず直線的に伸びる。内面に暗文。	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデのあとへラ描き暗文。明褐色で砂粒を少し含む。
-178 8600334	S T05 石室	环	口径 14.0 器高 3.6	体部は内湾気味に伸び、口縁部で短く外反する。内面に暗文。	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデのあとへラ描き暗文。明褐色で砂粒を少し含む。
-179 8600335	S T05 石室	环	口径 15.0 器高 3.5	丸底気味で、体部はやや浅く内湾気味に伸び、口縁部で短く外反する。内面に暗文。	外体部ヨコヘラミガキ、外底部不定方向へラミガキ。内面ナデのあとへラ描き暗文。明褐色で砂粒を含む。
-180 8600336	S T05 石室	环	口径 10.6 器高 2.7	体部は底部と明瞭な境をなさず比較的急に立ち、口縁部で短く外反する。内面に暗文。	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデのあとへラ描き暗文。明褐色で砂粒を少し含む。
-181 8600334	S T04 横道	环	口径 15.8 器高 7.1	体部は深く、底部から続いて内湾しながら立ち上がり、口縁端部でやや外に広められる。	外体部下半から外底部を不定方向へラケズリ。他ナデ。褐色で砂粒を含む。
-182 8504083	S T02 前庭	环	口径 16.7 器高 7.8	体部は深く、直線的に伸び、口縁部でやや外反する。高台は幅広がり。	外底縁部にヘラケズリ痕。外体部ヨコヘラミガキ、他ナデ仕上げ。褐色で砂粒を少し含む。
-183 8600333	S T04 横道	环	口径 15.9 器高 5.8	体部は外反。高台は低く幅広がり。	外底縁部にヘラケズリ痕。他ナデ仕上げ。高台接合部回転ハケ目。褐色で砂粒を含む。
-184 854637	S T06 玄室	环	口径 10.1 器高 4.9	体部は深く、直線的に立ち上がる。高台は幅広がり。小型品。	内外ともナデ仕上げ。明茶褐色で微砂粒を多く含む。
-185 8600336	S T04 横道中央	环	口径 10.1 器高 3.3	丸底気味で体部は内湾して立ち上がり、口縁部に沈線を1条めぐらす。	外底部不定方向へラケズリ、他ナデ。褐色で砂粒を含む。口縁部に黒斑。

## III. 造物

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
56-186 8606325	S T04 石室	环	口径 11.5 器高 4.3	不安定な底部から体部が深く外反気味に立ち上がる。	外底部不定方向ナデ。他ナデ仕上げ。内面白褐色、外面褐色で微砂粒を含む。
—187 8604641	S T06 横道中央	环	口径 11.4 器高 2.8	底部は不安定で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。	内外面ともナデ仕上げ。黄褐色で微砂粒を含む。
—188 8504085	S T03 石室	环	口径 12.2 器高 2.9	体部は内湾して聞く。	底部余切り離し。他ナデ。赤褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—189 8600331	S T05 石室	皿	口径 5.8 器高 1.1	体部は短く内湾気味。小型品。	底部余切り離し。他ナデ。明褐色で砂粒を含む。
—190 8504092	S T03 玄室	环	口径 15.8 器高 3.0	体部は浅く、直線的に伸びる。	底部余切り離しで彫み物底。他ナデ。黄褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—191 8504093	S T03 玄室	环	口径 15.1 器高 3.5	体部は直線的に聞く。全体にひずみが大きい。	底部余切り離し。他ナデ。黄褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—192 8504091	S T03 玄室	环	口径 15.9 器高 3.1	体部は直線的に伸び、口縁部でやや内湾する。全体に歪む。	底部余切り離しで彫み物底。他ナデ。黄褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—193 8606317	S T49 周溝埋土	环	底径 11.5 残高 1.8	体部は平坦な底部から急に立ち上がる。	余切り底で板目底あり。内面および外体部ナデ。明褐色で砂粒を含む。
—194 860332	S T05 石室	皿	胴径 7.7 残高 3.5	全体に丸味のあるややつぶれた胴部。	外面ヨコヘラミガキ。内面ナデ。褐色で砂粒を含む。
—195 8606329	S T04 横道中央	高环	口径 15.2 器高 11.1	环部は内湾、脚部は裾がかすかに段をなして広がる。环部から脚外面丹塗り。	环部は口縁付近ナデ。他は外面不定方向ヘラケズリ。内面ハケ目のあとナデ。脚部は筒ヘラケズリ、裾ナデ。褐色で砂粒を含む。
—196 8606328	S T04 横道中央	高环	口径 13.9 器高 9.3	环部は内湾、脚部は明瞭な段をなさずには裾広がり。环部から脚外面丹塗り。	环部から脚外面ヘラミガキ。脚内面ヘラケズリ。裾ハケ目及びナデ。环部外面に焼成後ヘラ描き「甲作」か。

## (3) 塗輪 (Fig. 57, PL. 39)

主にS T49古墳から出土した。他の古墳石室内等からも数点出土しているが帰属は不確実。197～203はS T49古墳の周溝内およびその周辺から出土した。197のみ下半がある程度残っているが、他は破片である。これらから全体を復元すると、タガは3段で2段目と3段目の間に径6cm前後の円形透しを1対あける。径は中位付近で20cm前後、高さ45cm程度で、比較的小型と思われ、中には200や201のように径17cm程度のものも存在する。器形は基底部から上方に向かってやや開き気味であり、口縁部でやや外反することを予想させるが、中位まではさほど目立った開き方ではない。203のみ基底部で極端にすぼまっているが、あくまで特殊である。タガは断面台形で比較的高い。調整は外面がタテ方向ハケ目のあとタガを巻いて接合部をナデ。内面はタテ方向ハケ目を残すものは少なく、指でナデツケで消す場合が多い。基底部は基本的にヨコ方向ナデで済ませているが、一部では接地面にヨコ方向ハケ目を施すもの、あるいは端部を指で押えるものなどがみられる。透しはタガを卷いたあとヘラで一気に切っている。色調は黄褐色または赤褐色で、黒斑はみられない。胎土に粗い砂粒を多く含む。

204はS T03古墳石室内埋土中から出土。やや薄手で断面低台形のタガを巻く。外面タテ方向ハケ目、内面はヨコ方向ハケ目をそのまま残す。全体につくりは丁寧である。赤褐色で粗い砂粒を多く含む。

205はS T04古墳石室内埋土中から出土。204に似るが、内面はナデで仕上げている。黄褐色で砂粒を含む。

川西宏幸氏の編年に依ればいずれもV期に含められる（川西宏幸「円筒埴輪總論」考古学推誌64—2、1978）。

## (4) 玉類 (Fig. 58, PL. 39)

S T01・S T05等から出土している。ガラス小玉が主で、他にめのう丸玉等の石製器が数点ある。206～254はS T01古墳出土のガラス小玉で、そのうち206～252は外径2～3mm、孔径1～2mmのものが多く、206～251、46点は青色、206は紫色である。253と254はやや粒が大きく、前者は外径5mmで緑色、後者は外径8mmで紺色である。

255～259はS T05古墳出土。そのうち255は外径15mm、256は外径12mmのいずれも赤黄色の瑪瑙製丸玉で、孔は一方からのみ穿いている。157は緑色のガラス丸玉で外径12mm。258と259はやや大粒の緑色ガラス小玉で、前者は外径7.5mm。いずれも孔径が大きい。

260はS T06古墳の北側で表探した。蛇紋岩製の緑色小玉である。外径9mm、孔径1.3mm。風化がすんでいる。

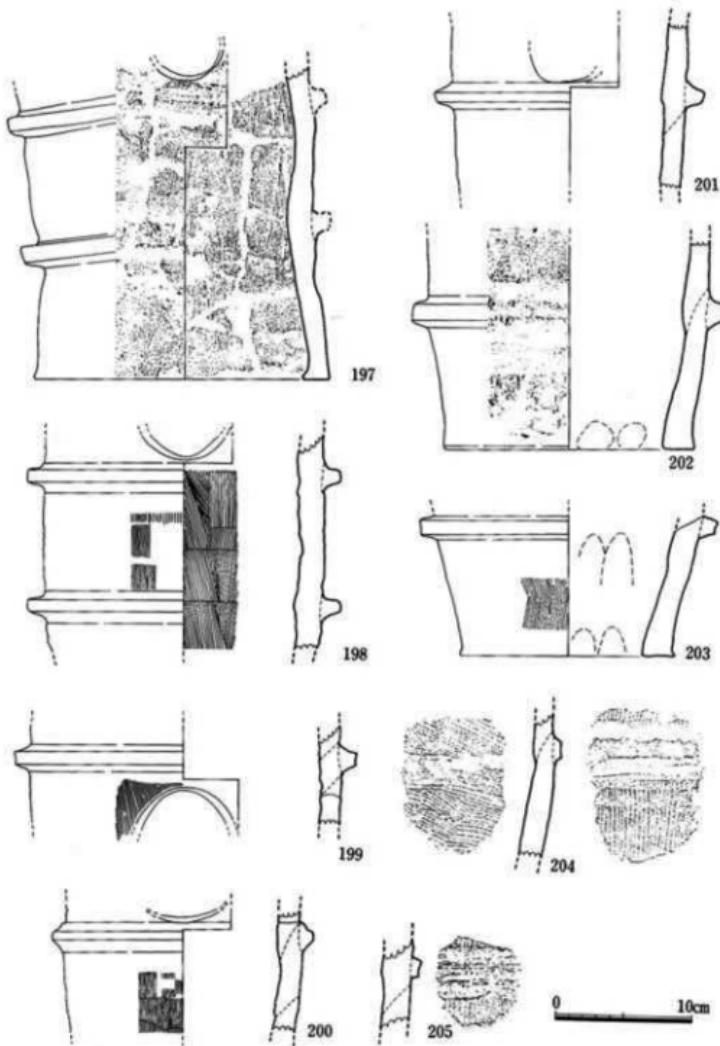
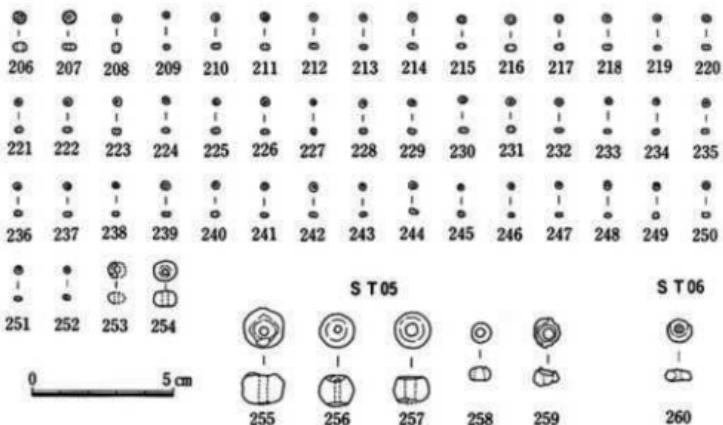


Fig. 57 古墳出土埴輪 (3)

S T 01



S T 01 206~251は青色ガラス、252は紫色ガラス

253は緑色ガラス、254は紺色ガラス

S T 05 255~256はめのう、257~259は緑色ガラス

S T 06 260は蛇紋岩

Fig. 58 古墳出土玉類 (J2)

## (5) 鉄器類および青銅製品 (Fig. 59・60, PL. 45・46)

刀子・鉄鎌・轡金具・釘がある。石室が破壊・盗掘をうけているため、いずれも元位置を保つものではなく、また点数も少ない。

刀子261はS T 03古墳の玄室床面出土。2片に折れている。両刃式にちかく、身は研ぎ減りにより幅が狭くなっている。茎には柄の木質が残る。復元すれば、身の長さ8.3cm、茎長4.4cm、全長12.7cmである。

刀子262はS P 58土壤墓からの出土であるが、あわせて図示した。

刀子263は先端部のみ残存する。残存長4.8cm。S T 01古墳の石室床面出土。

鉄鎌264はS T 01古墳の玄室床面から出土した。長頭式で、茎と頭の基部にあたる。基部には籠被があり、茎には樹皮が巻かれて残存する。残存長4.7cm。鉄鎌は他の古墳からも数点出土しているが、細片で器形の知られるものはない。

馬具は轡金具256が1点のみ、S T 01古墳の玄室床面から出土した。鉄環を二重に折り曲げて連結した通例のつくりで、4連まで残存が確認できる。1単位の長さ約9cmで、おそらく引手まで入れて4連であろう。

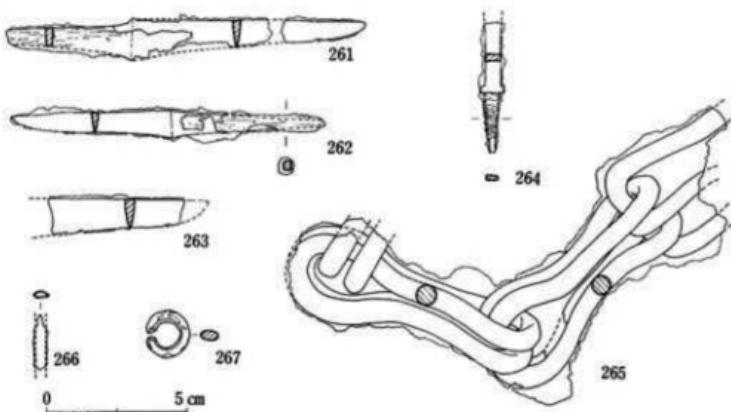


Fig. 59 古墳・土壤墓出土鉄器および青銅製品 (少)

鉄釘は S T01・S T02・S T03 の各古墳から出土したもので、木棺に使用された釘とみてよいであろう。点数が少ないのは石室内が荒されたためである。あわせて図示した S P15 木棺基の釘は平安時代に下るが、ここでは 12 点以上が使用されている。

268～274は S T01 古墳石室内出土。長さ 6 cm 前後と 10 cm ちかい 2 種類がある。身の断面は四角形で頭は平らに打ち曲げてつくる。

275～279は S T02 古墳石室内出土。本来身は断面四角形で、頭は平らに打ち曲げてつくっているが、実際の使用は途中で折れ曲げられており、おそらく二次的に再利用されたものであろう。

208～285は S T06 古墳石室内出土。身は断面四角形で、頭は平らに打ち曲げてつくっている。長さは約 5 cm。

青銅製品は 2 点しか出土していない。

266は S T03 古墳の玄室埋土中から出土した。性格は不明で管状銅製品とでも呼んでおく。径 3.5 mm、残存長 2.0 cm、厚さ 0.5 mm 程度の薄いつくりで、現在ややつぶれている。銹化して淡緑色を呈す。

267の耳環は S T01 古墳の玄室床面出土。外径 1.7 cm の小型品で、金銅製品であるが、鍍金の剥落が著しい。

鐵石 A 遺跡

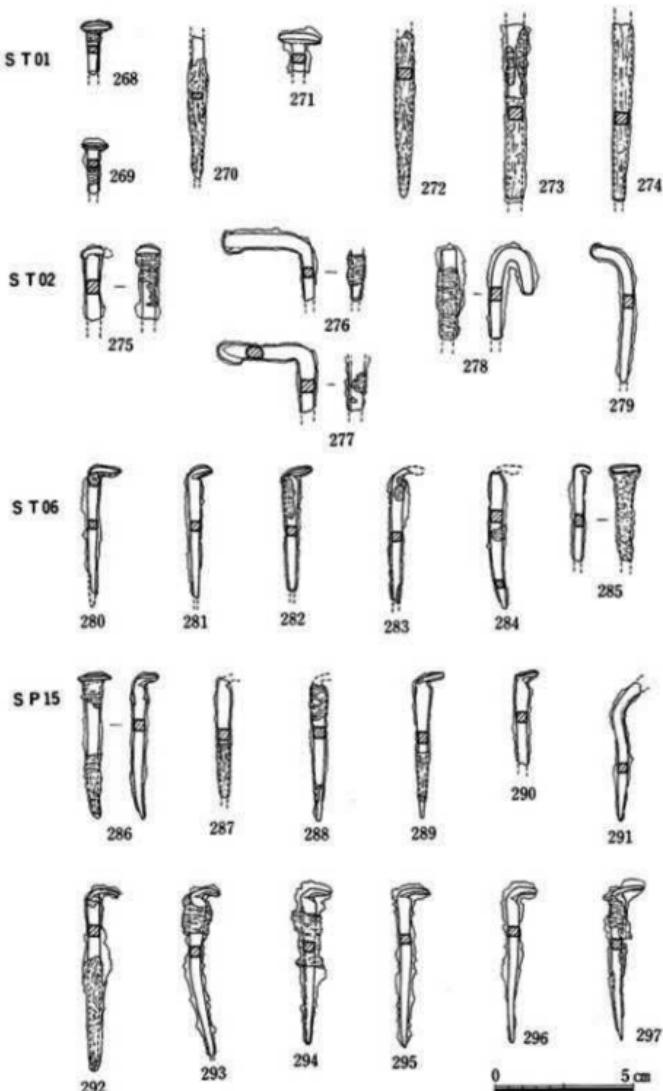


Fig. 60 古墳・土壤墓出土鉗釘 (3/2)

## 4. 奈良・平安時代

土壙墓および木棺墓出土の土師器・刀子・釘がある。そのうちではSP15木棺墓から土師器・釘が比較的多くまとまって出土し、SP59土壙墓では土師器に刀子が伴っていた。

## (1) 土師器 (Fig. 61, PL. 44)

いずれも壺類である。SP15木棺墓から最も多く11点出土しているが、これは棺外供献埋納品を多く含むためである。組み合わせは無高台壺を主体として、高台壺あるいは浅い壺が混じる。時期はSP18・SP59が8世紀末～9世紀前半、SP15・SP26が9世紀末～10世紀初と推定する。遺物一覧表 Tab. 8

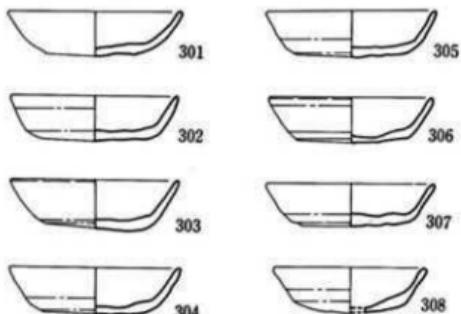
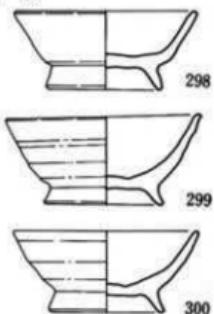
Tab. 8 土壙墓・木棺墓出土土師器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
61-298 8600303	SP15	壺	口径 12.8 器高 5.6	体部は直線的に伸び、高台はわずかに底内側に入りて高く開く。	内外ともナデ仕上げ。褐色で微砂粒を少し含む。外底部のみ焼成時黒変。
-299 8600304	SP15	壺	口径 13.7 器高 6.3	体部は深く、高台接合部からやや内湾気味に伸びる。高台は高く開く。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-300 8600305	SP15	壺	口径 13.0 器高 5.8	体部は深く、高台接合部からやや内湾気味に伸びる。高台は高く開く。	内外ともナデ仕上げ。灰褐色で砂粒を少し含む。
-301 8600301	SP15	壺	口径 12.2 器高 3.1	体部は底部と明瞭な境をなさず、やや内湾気味。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を少し含む。
-302 8600302	SP15	壺	口径 11.7 器高 3.2	体部は底部から軽く屈曲し、直線に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-303 8600306	SP15	壺	口径 11.8 器高 3.6	体部は底部から軽く屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。灰褐色で砂粒を含む。
-304 8600309	SP15	壺	口径 12.0 器高 3.4	体部は底部から軽く屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。
-305 8600308	SP15	壺	口径 11.9 器高 3.3	体部は底部から軽く屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。

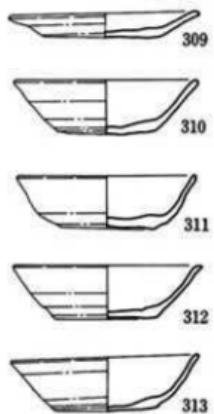
## 標石A遺跡

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴 その他
61-306 8600310	S P15	环	口径 11.5 器高 3.2	体部は底部からやや急に屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。明褐色で砂粒を少し含む。口縁部に黒斑。ロクロ回転右。
-307 8600307	S P15	环	口径 11.8 器高 3.1	体部は底部からやや急に屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。外底部にわずかにヘラ切り痕残す。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転石。
-308 8600311	S P15	环	口径 10.8 器高 3.2	不安定な底部から軽く屈曲して体部が伸びる。共伴出土品の中で、他よりも一回り小さい。	外底部へラケズリか。他ナデ仕上げ。灰褐色で微砂粒を含む。ロクロ回転右。
-309 8600313	S P18	皿	口径 13.4 器高 1.8	体部はやや長く、わずかに外反気味に開く。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。底部に黒斑。
-310 8600314	S P18	环	口径 13.0 器高 3.9	体部は底部と体をなして屈曲し、直線的に開いてやや深い。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-311 8600315	S P18	环	口径 12.6 器高 3.8	体部は底部と軽い稜をなして屈曲し、やや内湾気味に立ち上がり口縁部でやや開く。	内外ともナデ仕上げ。明褐色で砂粒を含む。
-312 8600316	S P18	环	口径 13.3 器高 3.9	体部は底部と稜をなして屈曲し、直線的に開いてやや深い。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-313 8600312	S P18	环	口径 13.3 器高 3.9	体部は底部と稜をなして内湾気味に立ち上がり。口縁部でやや開く。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。灰褐色で砂粒を含む。
-314 8600318	S P26	环	口径 14.6 器高 7.0	体部は底部から軽く屈曲して、直線的に立ち上がり。深い。高台は高く直立気味。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。外底部に黒斑。ロクロ回転右。
-315 8600320	S P26	环	口径 11.3 器高 3.3	体部は底部から軽く屈曲し、内湾気味に立ち上がる。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-316 8600319	S P26	环	口径 12.6 器高 3.3	体部は底部から軽く屈曲し、直線的に伸びる。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-317 8701028	S P59	环	口径 12.4 器高 3.5	体部は底部と稜をなして屈曲し、直線的に開く。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。
-318 8701029	S P59	环	口径 12.6 器高 3.7	体部は底部と稜をなして屈曲し、直線的に開く。	内外ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で砂粒を含む。

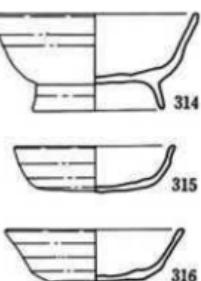
S P 15



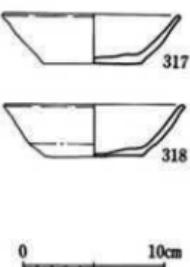
S P 18



S P 26



S P 59



0 10cm

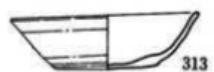


Fig. 61 土塙墓・木棺墓出土土師器 (1/4)

## (2) 刀子・釘 (Fig. 59・60, PL. 45・46)

土塙墓副葬の刀子 1 点と木棺墓出土の釘約40点がある。

262刀子は S P 58 土塙墓の副葬品 (Fig. 59)。本来両刃式にちかいものではなかったと思われるが、これも研ぎ減りにより刃幅が狭くなっている。刀部長に比べて茎が異常に長く、また柄の木質が残る。全長11.1cm。刃部長5.6cm。

286～297は S P 15 土塙墓出土の棺釘 (Fig. 60) で、全部で12点以上を数える。身は断面四角形で、頭は平らに打ち曲げてつくっている。長さ5.5～6.4cm。木質残存部からみて、蓋板の厚さは2.3cm前後である。



つぶて いし B 遺 跡

遺跡名：礫石B遺跡（略号T U B—B）  
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字野口

## 礫石B遺跡

### I. 遺跡の概要

現在、黒川によって礫石A遺跡と分かれているが、もともと同一遺跡で、大局的にはA遺跡の東端にあたると表現した方が適切である(Fig. 2, PL. 47)。ただし、ここでは調査時の区分に従いB遺跡として扱う。地形は全体に東南に向かって緩やかに傾斜し、S T04古墳の南には幅の狭い台地が舌状に伸びる。東側は約3mの落差をもつて幅約80mの浅い谷があり、これを挟んで東に久池井一本松遺跡と向かいあう。またS T04古墳の西側には浅い旧小河道があり、S T04古墳の南側に回りこんでわずかな凹地を残している。したがってS T04古墳とその南側の小さな舌状台地とはこの凹地によって幾分切り離されたような観がある。地質は黒色表土(耕作土)約0.3m、遺構検出面は茶褐色砂質土で、とくに西側旧河道付近は花崗岩礫を多く含む。

検出された遺構の種別・数は、繩文晩期～弥生前期では支石墓23基・土壙3基、弥生後期では石棺墓9基・甕棺墓2基・土壙1基。古墳時代では古墳5基、土壙墓1基である(Fig. 62)。なおSK15は埋土の状況等からみて近世以降の土壙墓かと思われる。

まず繩文晩期～弥生時代の遺構のうち、支石墓は全てS T04古墳下で検出された(Fig. 63, PL. 48)。丁度古墳下に在ったことによって盛土に守られ遺存したことは幸運といふべきであろう。23基のうち、下部構造が甕棺墓の14基は小児用とみられ、基本的に口縁部打ち欠きの丹塗磨研壺を本体とし、煮沸に使用された甕を転用して蓋とする。また下部構造が隅丸長方形土壙の9基は基本的に成人用と考えられる。礫石A遺跡同様、成人墓と小児墓はここでも墓域を別にする意図が認められ、前者は西北部に、後者は東南部に分布する傾向を示す。ただ小児墓域の中でSA43のみ下部構造が土壙であるが、他の成人墓に比べるとやや小さめで小児用にちかいともいえる。また、SA25・SA27・SA30は成人墓域の南端と重なって分布するが、3基は少なくとも、墓地形成最初期のものではなく、むしろ墓地形成過程の途中から墓域区分が混乱する傾向をみせ始めたものと解すべきであろう。また、ここではA遺跡弥生墓地の甕棺期にあたる時期の埋葬は無く、切り合は1例としてみあたらないので、成人と小児の墓域区分の状況は一層明瞭である。

上部構造については問題が多い。支石あるいは上石の一部を残し何がしか支石墓の特徴を示しているのは成人墓のSA26・SA29・SA31・SA33、小児墓のSA35・SA36の6基で、他は上部構造をもたないか、あるいは在っても墓壙石蓋を残すのみである。ここでは古墳造営期に大部分の上部構造が破壊されたと推測し、墓地全体の状況や久保泉丸山遺跡等の例から、これら23基を本来支石墓であったものとして扱う。例えば、支石墓通例の巨大な上石を残すも

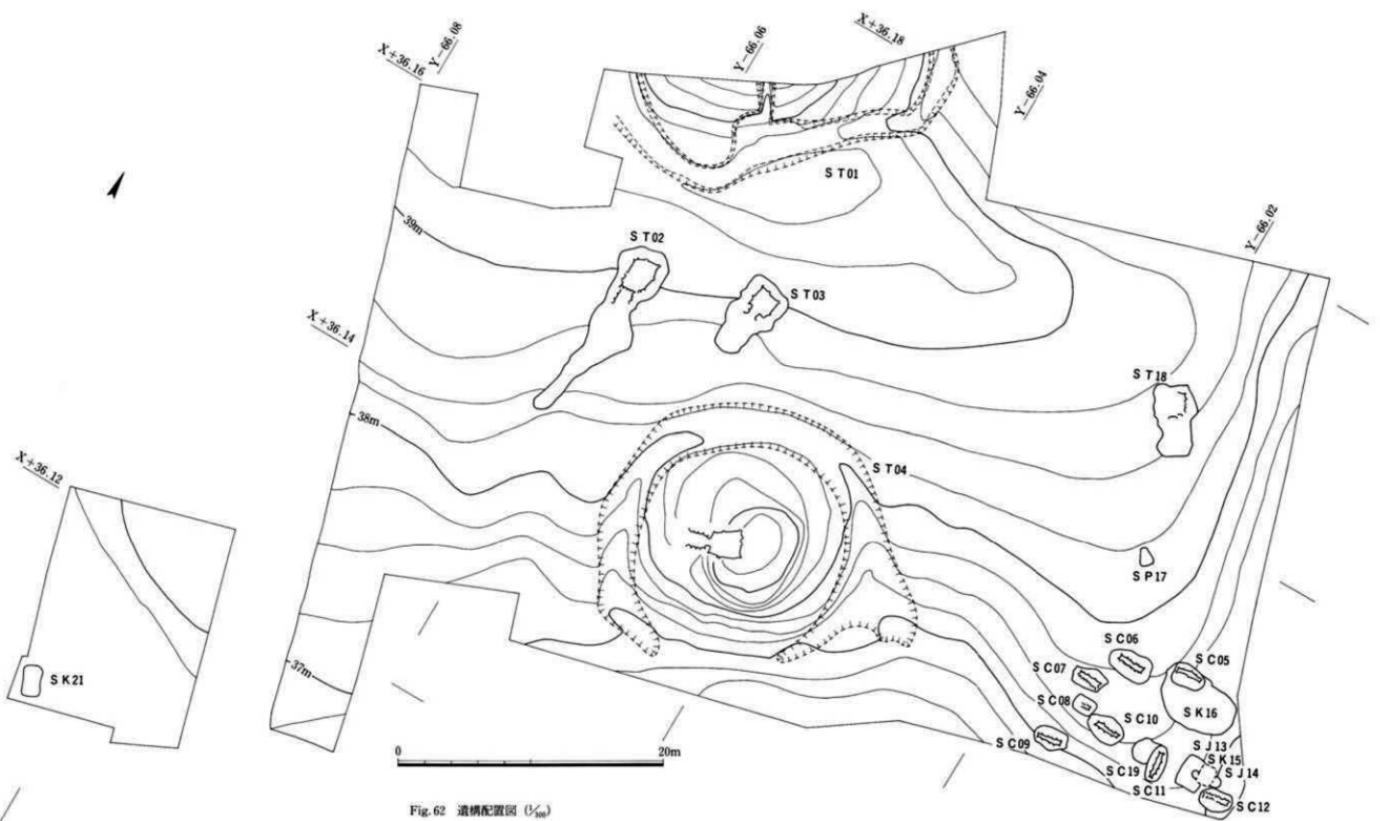


Fig. 62 遺構配置図 ( $V'_{fro}$ )

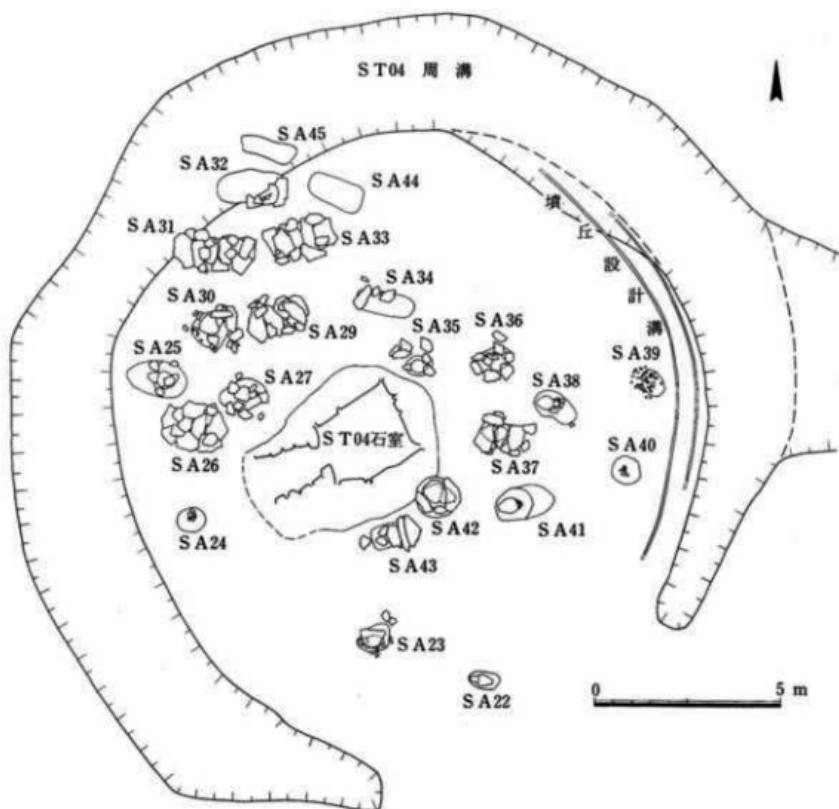


Fig. 63 ST04古墳下支石墓配置図 (1/10)

のは無いがST04古墳の石室奥壁に使用されている石材の1つは片側が窪んだ亀甲形を呈し、まさに支石墓の上石にうってつけで、おそらく転用されたものであろう。

副葬品は鉢が1点、他約30個体分は全て小型壺である。原位置をとどめるものでは成人墓からの出土が5遺構8点と多く、小児墓からの出土が明らかな例は2遺構2点にすぎない。他の多くはST04古墳盛土中から破片で出土した。

埋葬全体の数については、石室構築および周溝掘削よってなお数基が破壊されている可能性がつよく、実際ST04古墳の盛土中から7個体分以上の壺棺片が出土しているが、墓域の拡が

りとしては現在みる分布状況が一応完結にちかい様相を示すものと考える。

その他前期には西南隅に貯蔵穴状の土壙3基がある。

弥生中期になると、ST04古墳盛土中などから遺物のみ出土しているが、遺構は認められなかった。後期には東南隅の極めて狭い範囲に、まず甕棺墓2基が造られ、石棺墓9基がこれに続く。石棺墓は箱式で、蓋石上に礫を積み上げた特異なものもみられる。また、これらに囲まれるようにして、貯蔵用竪穴の可能性のあるSK16大型土壙1基が掘り込まれている。

副葬品はSJ13甕棺墓に帰属すると思われる小型内行花文鏡1面のほか、SC05石棺墓から壺および鉄錠が各1点出土した。

古墳時代の円墳5基は比較的密集して造られている。ST01・ST04古墳は盛土を残すが、他は削平されていた。ST02・ST03古墳の場合は、その立地からみて、盛土はわずかなものであったであろう。ST01古墳は一部の調査のため主体部不明、他はいずれも後期横穴式石室である。築造時期はST01・ST04古墳が6世紀初頭～前半、他3基は7世紀代である。注目されるのはST04古墳で、先述のとおり盛土下から多数の弥生支石墓を検出したほか、古墳築造に関わる設計区画溝がみつかっており、また石室構築途中の祭祀に関わるであろう土器群が、盛土下の旧表土面から出土しているなど、ともかく様々な重要な資料を提供してくれた。

古墳群全体の拡がりとしては、今回の調査区の南方へ舌状に伸びた同一台地上になお3基以上の古墳が存在する。そのうちの1基からは、土師器を伴い、本書に収録した佐賀平野でも最古期の須恵器を採集しており、盛土の低さなどからみて竪穴式石室系統の主体部と推定される。したがって周囲を含めた全体でみると、群集墳としては形成時期の早いものといえる。

土壙墓はSP17が1基のみで、近接するST18古墳との系譜的・時間的関係が問題になる。

なお、縄文時代については早・前期および晩期の遺物を採集した。そのうちST04古墳東側では包含層から礫に混じって早・前期の土器片が集中的に出土しており、集石遺構に伴っていた可能性が考えられるが、遺構そのものは明確に検出できなかった。

## II. 遺構

### 1. 弥生時代

夜臼式期の段階を弥生前期と合わせて説明する。

支石墓23基・甕棺墓2基・石棺墓9基・土壙4基があり、以下この順に遺構番号を追って述べる。ただし支石墓は下部構造の別により甕棺と土壙とに分ける。遺構一覧表Tab.9。

また甕棺墓と石棺墓は調査区の東南端にかたまって検出された後期の墓地で、先の支石墓の一群とは大きな時間的隔たりがある。遺構一覧表はTab.10による。

Tab. 9 支石墓一覧表

( ) は推定

遺構番号	下部構造				上部構造	副葬・供品	備考
	種別	形態	墓壙(長・幅・深)cm	方位			
S A22	盃 棚	盃 + 壁	0.88×0.44×0.2	N77°W	15°		敷石3
S A23	盃棺+石蓋	#	0.82×0.56×0.33 (0.9×0.6×0.4)	S88°W	31°	支石2	石蓋1
S A24	#	盃+(壁)	0.76×0.66×0.15				
S A25	#	盃 + 鋸	1.6 × 0.94 × 0.36 (1.6 × 1.0 × 0.5)	N73°W	48°	支石3	
S A26	石 蓋 土 壇	隅丸長方形	153×58×48 (156×59×53)	S78°E	—	支石4	小盃1 管玉1
S A27	盃 棚	盃 + 壁	0.96×0.72×0.50 (1.26×0.80×0.55)	N89°E	31°	支石9	小盃1
S A29	石 蓋 土 壇	隅丸長方形	124×47×22 (145×60×55)	S74°W	—	支石6 上石1	小盃2
S A30	盃 棚	盃 + 壁	103×103×30 (115×115×47)	N75°E	24°	支石4	小盃1
S A31	石 蓋 土 壇	隅丸長方形	158×55×20 (175×70×50)	N84°W	—	支石5	
S A32	#	#	186×85×27 (200×100×50)	N89°E	—		小盃1 石蓋一部残存
S A33	#	#	170×82×26 (180×100×90)	N76°E	—	支石4 上石2	小盃4 鋸1
S A34	#	#	151×61×16 (160×63×27)	N60°W	—		石蓋一部残存
S A35	盃 棚	盃 + 壁	0.70×0.56×0.26	S86°W	28°	支石7	
S A36	#	#	0.75×0.85×0.38 (0.75×0.85×0.38)	N76°W	33°	支石8	
S A37	#	#	1.30×0.96×0.42 (1.40×1.10×0.45)	S86°E	19°	支石4	石蓋3, 敷石5
S A38	#	#	1.16×0.71×0.35	S88°E	32°	支石1	敷石4
S A39	#	盃+(壁)					上面削平
S A40	#	#					#
S A41	#	盃 + 壁	1.60×0.91×0.37	N80°E	25°		
S A42	#	#	1.04×1.17×0.4 (1.04×1.17×0.4)	S76°E	32°		石蓋7
S A43	石 蓋 土 壇	長 方 形	111×62×28 (120×65×44)	N76°E	—	支石3	盃1 石蓋一部残存
S A44	土 壇	隅丸長方形	152×72×38	S78°E	—		上面削平
S A45	#	#	151×46×12	S72°E	—		#

## (1) 支石墓

## a) 壺棺を下部構造とするもの

## S A22支石墓 (Fig. 64, PL. 49)

一群中もっとも南に位置する。S T04古墳南側の窪地傾斜部にかかり、上部構造を欠失する。下部構造は壺棺で、壺を身とし、蓋を蓋に使用する。保存は良好である。

壺棺は壺の口頭部約 $\frac{1}{2}$ 周と底部を打ち欠いたうえ胴部下位に穿孔を施し、口頭打ち欠き部を上にして墳底に横置きする。また、壺底部は別個体の壺底部で塞ぎ、さらにその底部側と胴部下位北側に花崗岩蹠を置いて棺の固定をはかっている。蓋裏は壺肩位まで深く被せる。頭位はN77°Wである。

墓壙は黒色土を掘り込んでいるため不明瞭で、墳底ちかくまで下げてようやく検出した。梢円形を呈し、検出面で長径0.8m、短径0.44m。墳底は船底状で、頭位西側が少し上がる。

使用された壺は底部が丸底気味の平底で、丹塗磨研。蓋は胴部上位が屈曲せずに立ち上がり刻目突帯を廻らし、転用を示すススが付着する。

なお、壺底部が別個体の壺底部破片で塞がれていることについては、それにより収容容積が大きくなつたわけではなく、A遺跡のS J 43の場合とは意味が違う。したがつて正確には敢えて打ち欠いたかどうか不明であり、あるいは単なる破損部の補充ということもありうる。

## S A23支石墓 (Fig. 64, PL. 49)

下部構造は壺棺で、墓壙上面に石蓋を1枚被せる。石蓋は台形状の花崗岩平石で最大長66cm、厚さ約13cm。壺棺のほぼ直上に載せてある。支石を省いた支石墓上石の可能性もあるが、S A 37・S A 42の例からみて下部構造の石蓋にあたるものと考えるのが適当であろう。その場合、墓壙の長さからすると、なお両端に2枚程度の石蓋を考えてよい。東北側にやや離れて花崗岩蹠2個があり、支石が動いたものかと推定する。

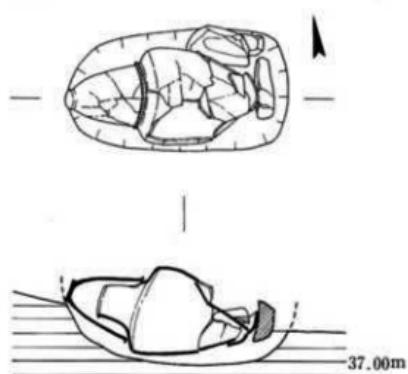
壺棺は壺の口頭部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上にして墳底約5cm上に横置きし、胴部中位に穿孔を施す。蓋は壺を壺の肩位まで深く被せる。埋置状態で上石との間隔は殆どない。頭位はS 88°Wである。

使用された壺は丹塗磨研で平底、蓋は胴部上位が屈曲して刻目突帯文を廻らし、転用を示すススが付着する。

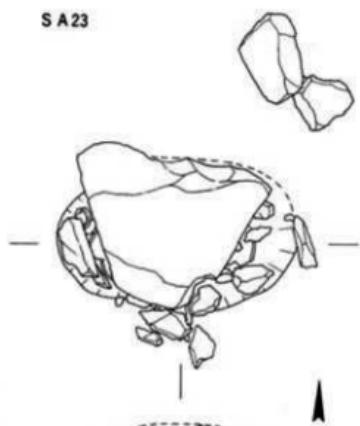
墓壙は梢円形で長径0.82m、短径0.56m、深さ0.33m。壁は足方東側を直に、頭位西側を斜めに掘り込む。墳底はほぼ平坦である。

II. 造構

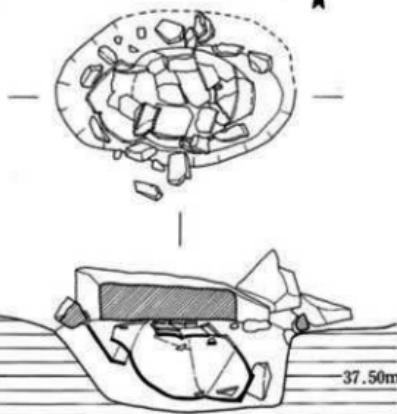
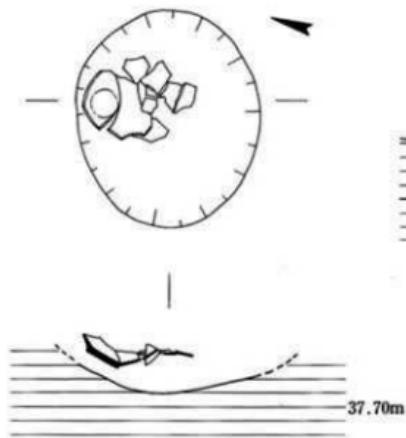
S A22



S A23



S A24



0 1 m

Fig. 64 S A22 • S A23 • S A24 支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

## 縁石B遺跡

### S A24支石墓 (Fig. 64, PL. 50)

削平により上部構造は不明、下部構造は壺棺の壺のみわずかに残っていた。ただし壺は頭部まで復元することができた。墓壙も鍋底状の壙底ちかくをかろうじて検出したが、全体の形状は不明である。検出面で $0.78m \times 0.66m$ 。

使用された壺は丹塗磨研で平底、蓋は刻目突蒂文壺と推定される。

### S A25支石墓 (Fig. 65, PL. 50)

上部構造は上石を欠失し、支石のみ残る。下部構造は壺棺である。

まず支石は4個の花崗岩礫を壺棺の周囲上に置く。ただし西側の1個は内側に倒れたものと思われ、その際に壺棺が潰れている。

壺棺は頭胸部の発達した丹塗磨研の平底で、口縁部と頭部 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、拡底に約10cm土を入れたのち打ち欠き部を上に向けて横置きし、胴部下位に穿孔を施す。蓋には鉢を用い、身肩位まで深く被せている。ただしこの鉢は壺の製作途中ともいえるもので、はじめから口頭部を作っていない。頭位はN73°Wである。なお、これに支石を置いて上石を載せた場合、壺棺を土で覆うためには支石は少なくとも中位まで埋められるため、上石と壺棺との間隔は殆どない。

墓壙は2段掘りであり、上段は浅い楕円形で長径1.6m、短径0.94m、下段は径約0.9m、深さ0.36mの不整円形で、足方東側は直に、また頭位西側はやや斜めに掘り込んでいる。壙底は平坦である。なお、壙内埋土中には花崗岩小礫が2個含まれているが、壺棺を支持するものではなく、単に混じり込んだものであろう。

### S A27支石墓 (Fig. 65, PL. 50)

上部構造は上石を欠失し、支石のみ残る。下部構造は壺棺である。

支石は壺棺の周囲上に大小9個の花崗岩礫が西側の3個以外は原位置から動いていると思われる。

壺棺は胴頭部がやや発達した丹塗磨研平底で、口縁部と頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上に向けて壙底に横置きし、胴部下位に穿孔を施す。蓋に使用された壺は胴部上位が屈曲して転用を示すススが付着しこれを壺の肩位まで深く被せている。また埋置の際には、壺は壙底に約15cm土を入れた上に据え、蓋壺の底部に小花崗岩礫を置いて棺を固定している。頭位はN89°Eである。なおこれを土で覆い支石を置き上石を載せた場合、支石は大部分埋まり、壺棺と上石との間隔は殆どなくなる。

墓壙は2段掘りで、上段が頭位側に約0.3m浅く拡がる。下段はほぼ楕円形で長径0.96m、短径0.72m、深さ0.50m。頭位側は比較的直に足方は斜めに掘り下げ、壙底は足方の西側で斜めに上がっている。

II. 透構

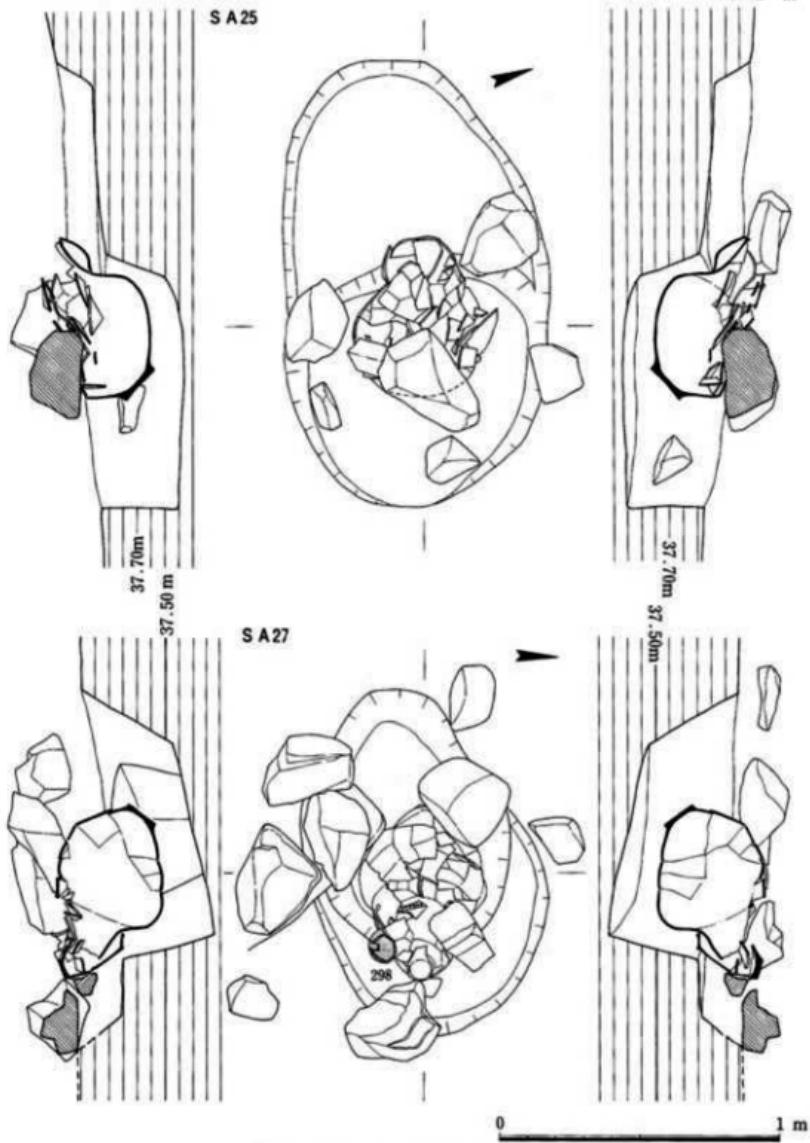


Fig. 65 SA 25 • SA 27 支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

## 鍍石B遺跡

出土遺物は小壺が1点、蓋甕の底部南側上位から倒立した状態で出土した。供獻品と考えられる。

### S A30支石墓 (Fig. 66・PL. 51)

上部構造は上石を欠失し、支石4個が残存する。下部構造は壺棺である。

支石は頭位にあたる東側の墓壙縁上面で横長に1個、それより一段高く北側に1個、南側に2個の花崗岩礫を置く。さらにその他大小の礫が周辺に多く散布しており、西側にもなお1、2個あったと推定される。

壺棺は壺を身とし、別の壺頭底部を蓋に使用し、壺肩位まで被せている。身の壺は頭部が発達して全体に大型化した平底壺で、頭部口縁部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上にして壙底に直接横置きしている。頭位N75°E。

墓壙は不整円形である。壁は比較的斜めに掘り込まれ、壙底は足方西側がやや上がっている。検出面で径1.03m、深さ0.3m。

壙内埋土中に小礫が含まれているが、単に混じったものであろう。

出土遺物として胸部下半を欠失した小壺1点が、南側支石の間にあたる墓壙上面の高さから倒立した状態で出土した。本遺構に伴う供獻土器と考えてよいであろう。

なお、かかる検出状況からみて、壺棺はその上面土を被せてあったとしても薄く、またその場合、支石はほぼ中位まで埋められていたことになる。壺棺と上石との間隔はせいぜい15cm程度しかないが、この間が小壺等の供獻空間に利用されていたと推定される。

### S A35支石墓 (Fig. 66, PL. 51)

上部構造は上石を欠失し、支石7個が残る。下部構造は壺棺で、上面はつぶれているが保存良好であった。

支石7個はそのうち2個が壺棺足方東側に並んで原位置を保つが、北側の大小5個は上石を載せるにはやや遠く、動いているかと思われる。石材は全て花崗岩である。

壺棺は壺の口縁部頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上に向け、底部をやや上げた状態で壙底に直接横置きする。蓋甕は底部を墓壙西壁にもたせかけながら壺肩位まで深く被せている。頭位S 86°W。この埋置状況では壺棺の上面覆土は薄く、支石はある程度埋められ、壺棺と上石との間隔は15cm程度しかなかったと推定される。

使用された壺は丹塗磨研で、胸頭部がやや発達した平底壺、甕は胸部上位が屈曲して刻目突帯文を廻らせ、転用を示すスヌが付着する。

墓壙は橢円形で、壁は斜めに掘り下げ、壙底はほぼ平坦にちかい。検出面で長径0.70m、短径0.56m、深さ0.26m。

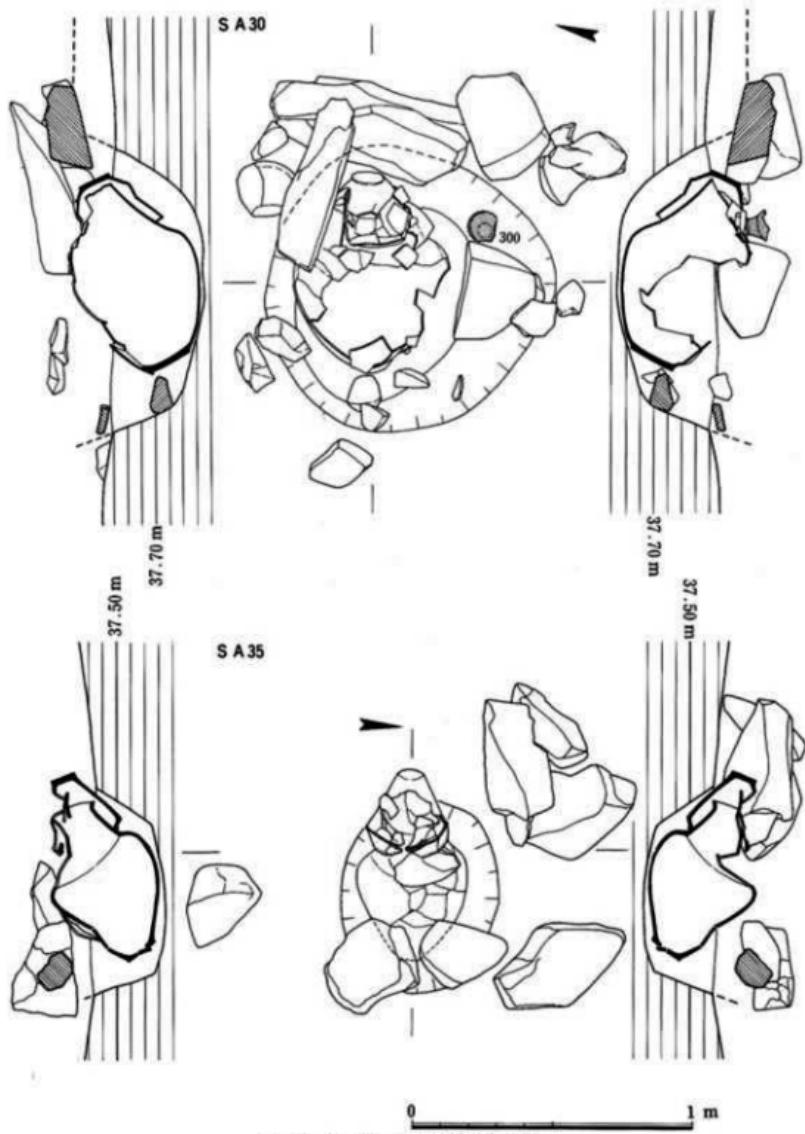


Fig. 66 SA30・SA35支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

## 標石B遺跡

### S A36支石墓 (Fig. 67, PL. 51)

上部構造は上石を欠失するが、支石8個がほぼ原状どおりよく残っていた。下部構造は壺棺で、上面は割れているが保存良好であった。

支石8個は1個のみ内側に入りすぎており、動いていると思われ、また北はずれの1個は本来関係がない可能性があるが、他の6個は原状のまま規則的に墓壙周縁上に並んで壺棺を囲む。石材は全て花崗岩である。

壺棺は壺の口頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上にして壙底に直接横置きし、壺を壺肩位まで深く被せる。頭位N76°W。この埋置状況では壺棺上面の覆土は薄く、支石はほぼ中位まで埋められていたと推定され、その場合、壺棺と上石との間隔はせいぜい15cm程度となる。

使用された壺は頭胸部の発達した平底で丹塗磨研、蓋甕は胸部上位が屈曲して刻目突帯文を廻らせ、転用を示すスヌが付着する。

墓壙は不整円形を呈し、検出面で径0.7~0.85m、深さ0.38m。頭位側をとくにゆるく斜めに掘り込み、壙底は壺棺の法量に合わせている。

### S A37支石墓 (Fig. 68, PL. 52)

上部構造は上石を欠失しているものと思われ、支石のみ一部残る。下部構造は壺棺で、墓壙を石蓋で覆っている。壺棺は土圧で上面が割れているが完存する。

支石は墓壙周縁上に花崗岩礫4個が並ぶが、南側と西側で数個欠失していると考えられ、石蓋よりは5~10cm高くとび出している。上石は墓壙の長さからみて複数であった可能性もある。

石蓋は平石3個を主軸と直交させて並べているが、西側にはもう1個平石を置いてあったと推定され、他の中小礫が隙間を塞ぐように敷かれている。石材は全て花崗岩である。

壺棺は壺の口頭部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠き、その打ち欠き部を上に向けて壙底に約8cm土を入れた上に横置きし、胸部下位に穿孔を施す。蓋甕は壺肩位まで深く被せ、大小の花崗岩礫5個を下に当ててこれを支持している。頭位はS86°Eである。

使用された壺は頭胸部がやや発達した丹塗磨研の平底壺、甕は胸部上位が屈曲して刻目突帯を廻らせ、転用を示すスヌが付着する。

墓壙は梢円形で長径1.30m、短径0.96m、深さ0.42m。壁は斜めに掘り込まれ、壙底は頭位東側が上がっている。

### S A38支石墓 (Fig. 67, PL. 52)

上部構造は上石を欠失し、支石と考えられる花崗岩礫が1コのみ東南辺に残存する。下部構造は壺棺である。

壺棺の壺の口縁部と頭部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、その面を上にして壙底に直接横置きする。穿孔

II. 造 構

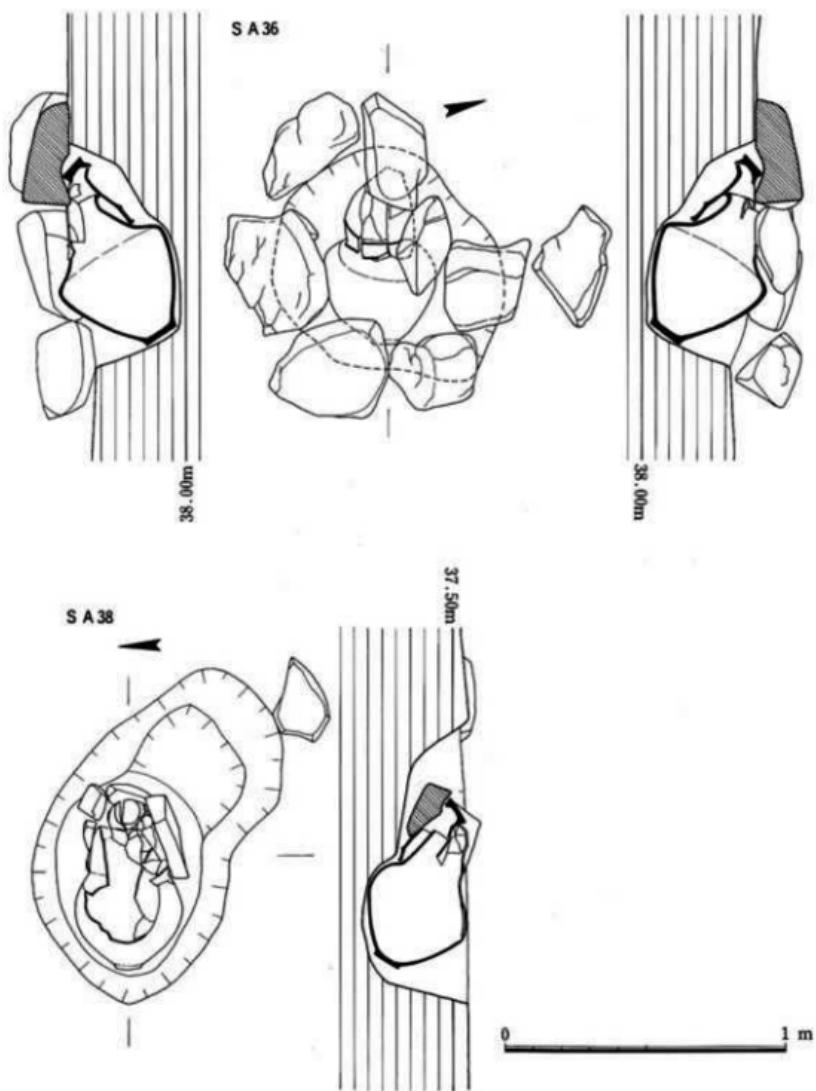


Fig. 67 S A36 • S A38 支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

### 櫻石B遺跡

は無い。蓋は壺肩位まで被せ、花崗岩礫4コをコ字形に置いてこれを支持する。頭位S 88°E。壺は頸胴部のやや発達した磨研平底壺、壺は胴部上位が屈曲した刻目突帯文で転用を示すススが付着する。

墓壙は2段掘りで、基本的に橢円形である。検出面で最大長1.16m、最大幅0.71m、最深部0.35m。上段は壺棺の主軸と異なり東南側に拡がる。下段は壺棺の埋置形態に合わせ、胴底部が收まる部分をさらに深くするなど、効率的に比較的狭く掘り込まれている。

### S A39支石墓 (Fig. 63)

墓域の東端に位置する。削平が著しく、下部構造の壺棺も原位置を保たず、壺の胴底部の破片が周辺に散らばっていた。ただし原位置を保つものはない。

墓壙は黒色土上にあってはっきりしない。頭位等は不明である。

壺はやや大型の丹塗磨研平底壺で、これに壺等の蓋が被せてあったと推定する。

### S A40支石墓 (Fig. 63)

上面を削平され、壺棺も壺の底部しか残存しておらず、また原位置を保つものではない。壺はやや大型化した磨研平底壺で、これに壺等の蓋が被せてあったと推定する。

### S A41支石墓 (Fig. 69, PL. 53)

上部構造は削平により不明、下部構造は壺棺で、蓋壺の一部を欠失する。

壺棺は壺の口頸部約 $\frac{2}{3}$ 周を打ち欠き、その面を上にして壙底に直接横置きし、壺の頸中位まで壺を被せる。穿孔は無い。頭位N 80°E。

壺は頸部が発達した平底で、磨研を施す。壺は胴部上位が屈曲する刻目突帯文で、転用を示すススが付着する。

墓壙は広目の橢円形で、壺棺の收まる部分を鏡底状に掘り込み、さらに頭位にあたる東側を浅く掘り下げている。検出面で長さ1.60m、幅0.91m、深さ0.37m。

### S A42支石墓 (Fig. 69, PL. 53)

下部構造は壺棺で、墓壙上面を石蓋で覆う。さらにその上に支石および上石が乗っていた可能性が考えられるが、明証はない。壺棺は上面が割れているものの、石蓋に保護されて保存良好である。

石蓋は中央の大きめの1個を中心に花崗岩の平石4個を墓壙上面に敷き並べ、さらに中小3個の花崗岩礫で隙間を塞ぐ。石蓋は全てがほぼ墓壙の内側に入り、しかも殆ど直接壺棺に乗っている為、重圧によって壺棺上面を割り、そのさい約15cm沈んでいる。

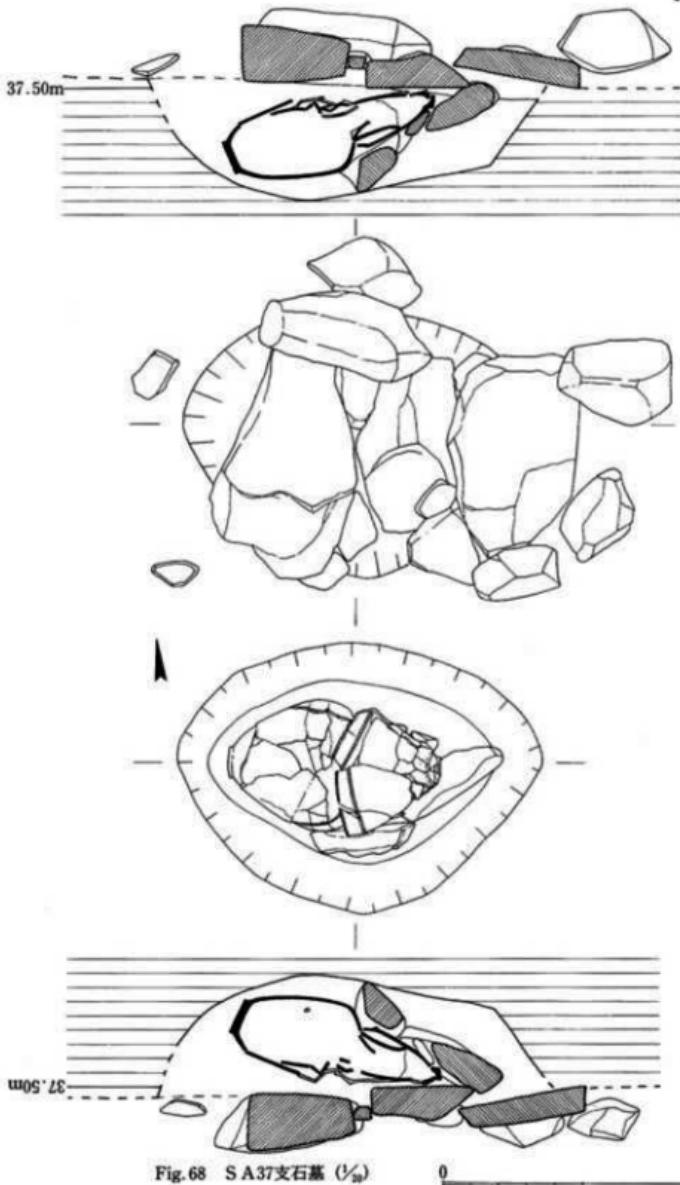


Fig. 68 S A37支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

0 1 m

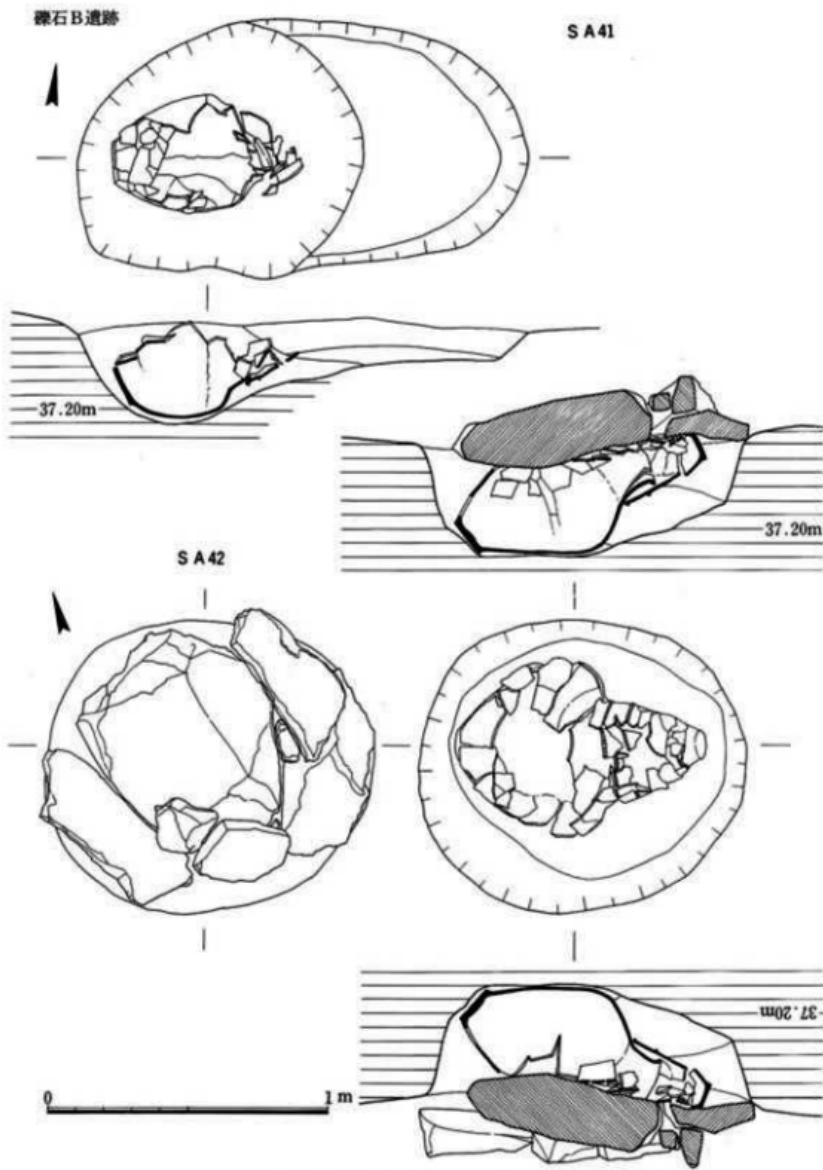


Fig. 69 S A41 • S A42 支石墓 ( $\frac{1}{20}$ )

壺棺は壺を直接墳底に横置きし、その肩位まで蓋を被せる。頭位 S 76°E。

使用された壺は頸胸部が発達し、一群中では最も法量が大きい。丹塗りはなく磨研で仕上げている。打ち欠きは口縁部約 $\frac{1}{4}$ 周程度と、形式的でごくわずかである。穿孔はない。また壺も口縁部と肩部上位に刻目突帯文をもちながら、通例の屈曲がないなど特殊である。ただし外面には転用を示すスヌが付着する。

墓壇は基本的に円形であるが、主軸方向にやや長い。径1.04~1.17m、深さ0.4m。墳底は頭位の東側に向かって上がっている。

#### b) 土壙を下部構造とするもの

##### S A26支石墓 (Fig. 70, PL. 55)

上石を消失するが、支石と下部構造の石蓋土壙はよく残っていた。

支石は石蓋上の四隅に石蓋より約25cm高く人頭大の礫4個を置く。

下部構造のうち、石蓋は平石4個を主軸方向に沿って横長に並べたのち、その南北側端を押えるように北側2個、南側3個の平石を主軸に対し基本的に縦長に並べて乗せ、さらに全体の周縁および隙間を小礫で塞ぐ。中央が約15cm沈んでいる。石材は全て花崗岩である。

墓壇は隅丸長方形で、東西両小口部だけをみれば梢円形にちかい。東側は地山の花崗岩巨石につきあたっており、東端の石蓋はこの自然石に敢えて片側に乗せている。壁はほぼ直に掘り込まれている。墳底は凹凸を示すが、掘りすぎとすれば、もともと平坦であったと推測する。規模は西端の石蓋が乗っている高さを元の地表とみた場合、長さ1.56m、幅0.59m、深さ0.53m。頭位は石蓋が自然石に乗って反ね上がっている東を優位とみて S 78°E としておく。

出土品は完形の供獻小壺1点、中心部や南側の石蓋上に約5cm浮いた状態で横転していた。もともと上石と石蓋との副葬空間に置かれたものと考えられる。それと碧玉製管玉が1点、墓壙埋土中から出土した。

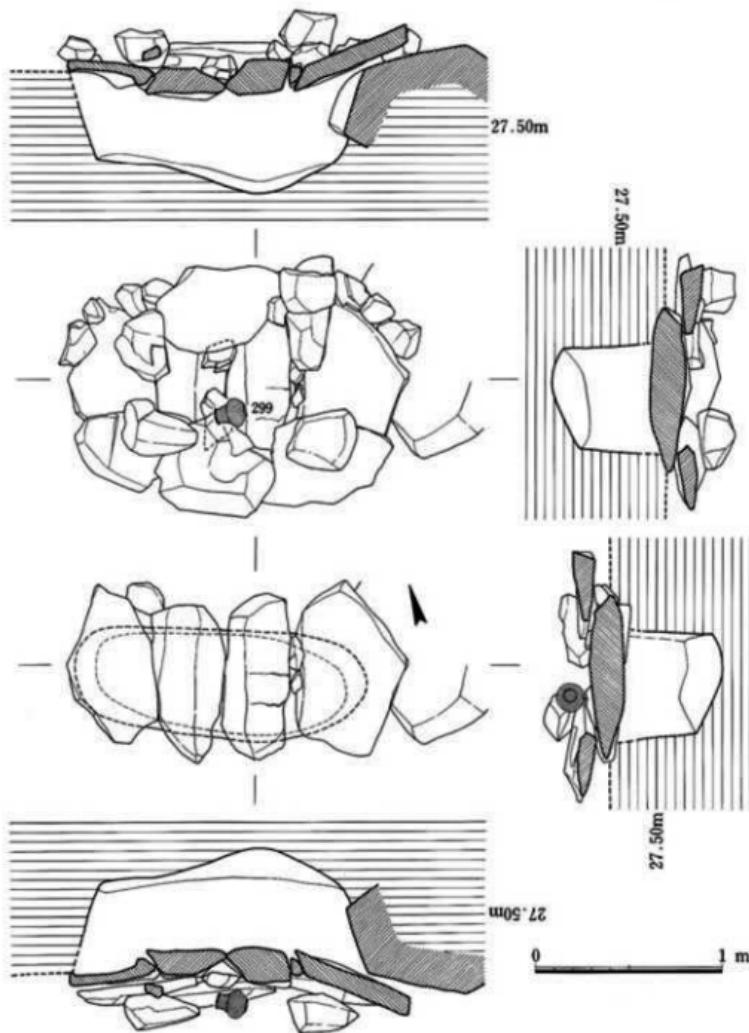
##### S A29支石墓 (Fig. 71, PL. 57)

上部構造は上石と支石の一部残存する。下部構造の石蓋土壙はよく残っていた。

上石は東端上で主軸に対し横長に架けられ平石1個がこれに当たる。偏平な石材であり、1個の大石が割れた残片とは思われないことからすれば、なお3~4個程度が石蓋状に並べられていたが、あるいは補助石を必要とする上石であったか、いずれにせよ支石墓としては特殊な上石を構成していたことになる。支石はこの上石を支えて20~40cm大の礫が4個と、他に南北各1個ずつの礫が石蓋の周縁上に残っていた。

下部構造の場合、まず石蓋は基本的に平石4個を主軸に対し横長に並べる。そのうち西から2番目は2つに割れ、また3番目は長さが不足していた為、別に大小3個の平石を重ね足して

砾石B遺跡



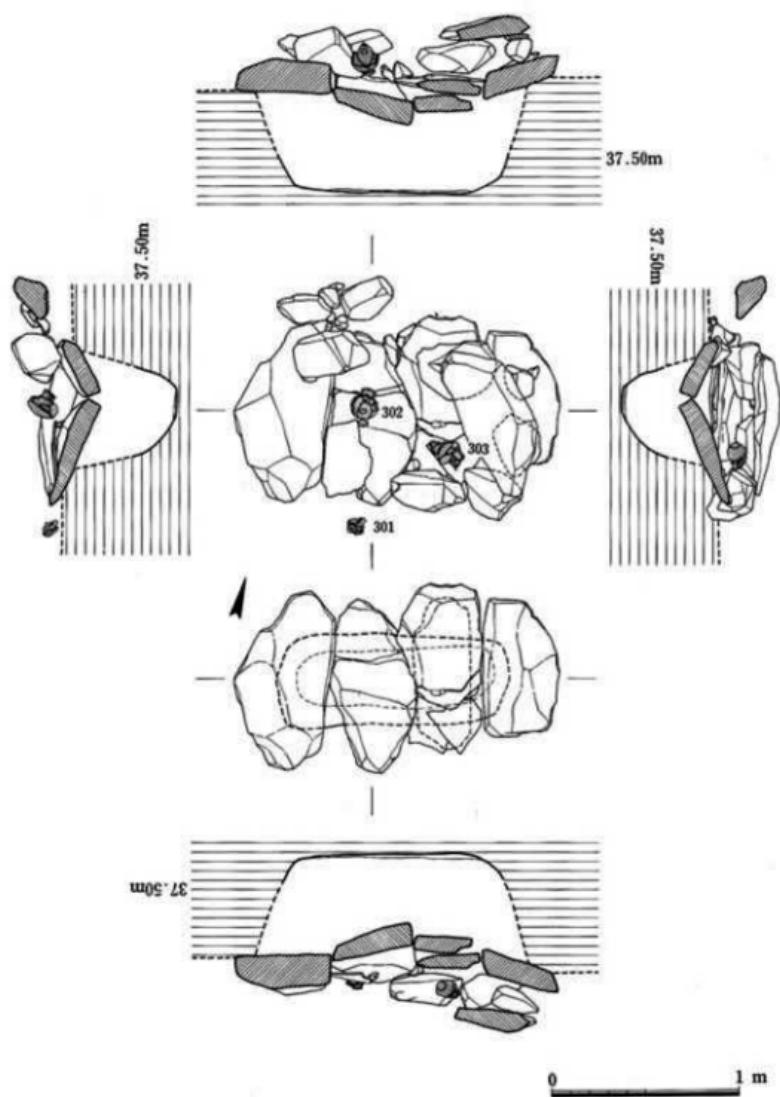


Fig. 71 S A29支石基 ( $\frac{1}{20}$ )

### 標石B遺跡

横長にみせている。西から2番目、3番目とも墓壙内埋土の陥没に伴い15cm程度沈んでいる。なお、西北隅にも2個人頭大蹠がみられるが支石の転落したものかと考えられる。なお、上石・支石・石蓋は全て花崗岩である。

墓壙は隅丸長方形である。黒色土を掘り込んでいるためプランが不明瞭で、敢えて約25cm下げてようやく検出した。四壁は比較的斜めに掘り込まれ、壙底はとくに幅が狭く平坦である。規模は検出面で長さ1.24m、幅0.47m、深さ0.22m。西端の石蓋が乗る面を旧地表とみて復元すれば、本来、長さ1.45m、幅0.6m、深さ0.55m程度となる。頭位は石蓋の大きさから西を優位とみてS74°Wとしておく。

出土品は小壺が石蓋上の中央付近に2点、石蓋南外に1点、その他本遺構付近の覆土中からも2点出土した。そのうち石蓋上の2点は5~10cmほど浮いた状態で出土したが、もともと石蓋と上石との間の供獻空間に置かれてあったものとして、本遺構に伴うことは確かである。南側のもう1点は、後述するように形式的には他の2点より新しく、出土位置とも合わせ、本遺構とは直接関係ないものと考える。

#### S A31支石墓 (Fig. 72, PL. 58・59)

上部構造は上石を欠失し、支石のみ残る。下部構造は石蓋土壙である。比較的保存は良い。

支石は石蓋上にあって、西側に3個、東側に2個人頭大蹠が並ぶ。現状では東側の支石は西側のそれより約10cm低いが、これは石蓋の沈下に伴った結果と思われる。

石蓋はまず6枚の平石を主軸に直交させて並べ、さらにその周縁および隙間に平石あるいは小蹠で塞いでいる。東側の場合、主軸上の平石1個はそのレベルからみて支石と考えられなくもないが、位置および石材の重ね方からすれば、石蓋に含めるべきであろう。本例では石蓋下の墓壙周縁にまで蹠を置いている点が1つの特徴である。全体に約15cmほど沈んでいる。石材は全て花崗岩である。

墓壙は黄褐色質土まで下げてようやく検出した。楕円形を呈し、壁は下位でやや斜めに掘り込まれ、壙底は平坦である。検出面で長さ1.58m、幅0.55m。石蓋の乗っている面を旧地表高とみて復元すれば、長さ1.75m、幅0.70m、深さ0.50m程度となろう。頭位は石蓋の大きさから西優位とみてN84°W。

出土品は石蓋上からら小壺の破片3片と石蹠1点が出土した。ただし他に繩文土器片も混じっており、元々本遺構に伴うものであるかどうか確かではない。

#### S A32支石墓 (Fig. 73, PL. 61)

上部構造は不明。下部構造は石蓋土壙であるが、削平およびS T04古墳周溝掘削により石蓋も大半は破壊されており、残りがわるい。

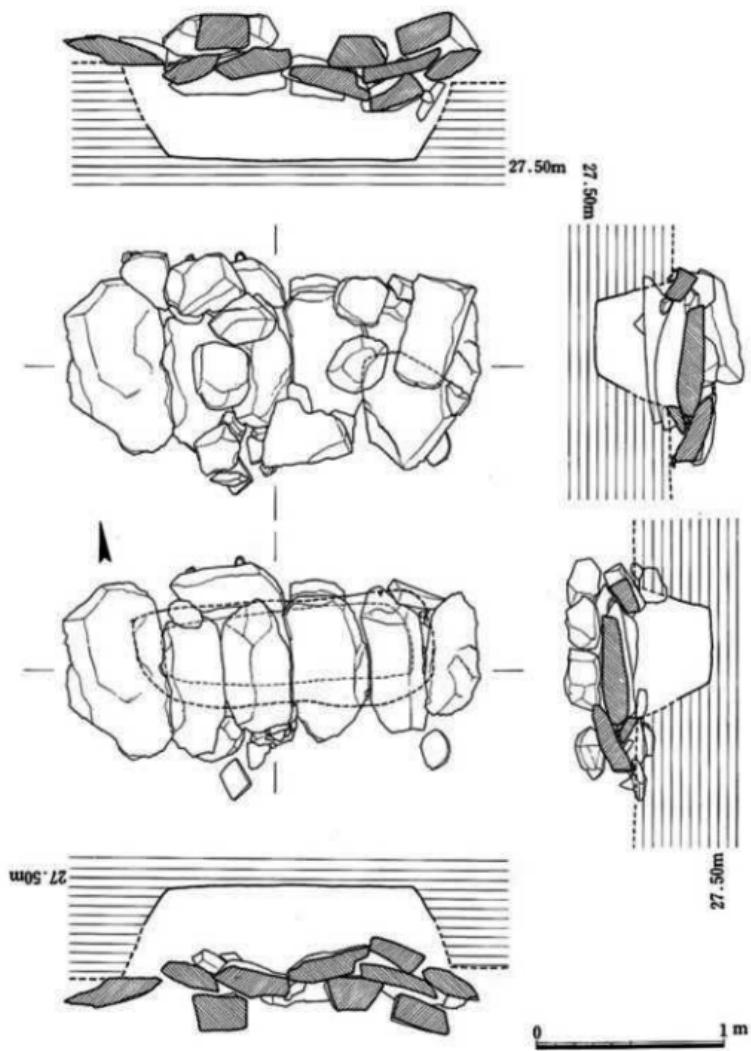


Fig. 72 SA31支石墓 (3/6)

## 礫石B遺跡

石蓋は西北隅のみ一部残る。本例のみ節理性がつよく薄く割れた偏平な安山岩を使用している。同質の石材はS T01古墳の石室床面にも一部みられ、転用されたことが知られる。1個だけ原状を保つ西端の石蓋からみて、横長の板石を主軸に沿って並べてあったと推定される。なお墓壙外の西北隅に花崗岩礫1個があるが、これは地山中の礫である。

墓壙は黄褐色砂色質土まで下げて検出した。梢円形を呈し、壁は下位で斜めに掘り込み、壙底は東側に向かってやや上がりながらほぼ平坦である。検出面での長さ1.86m、幅0.85m。石蓋高を旧表土面とみて復元すれば長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.5m程度となろう。頭位は壙底が少し上がる東側とみてN89°E。

出土遺物は胸部下半を欠く小壺が1点、墓壙埋土上面から出土した。本遺構に伴う供獻品の可能性がつよい。

## S A33支石墓 (Fig. 74, PL. 60)

上部構造は上石の一部と支石が残る。下部構造は石蓋土壤墓である。全体に保存は良い。上石の一部とみられる平石は2個、西側と南側にそれぞれ残存しており、その在り方はS A29支石墓に似る。もしこれがほぼ原位置を保つものであれば、2個は本来中央にあったはずの上石の裾を塞ぐべく補助的な意味をもつであろうし、あるいは動いているとすれば、3~4個の平石を石蓋状に並べた特殊な構造をもつことになるが、この点は支石の配置とも関係するであろう。支石として確実なのは南側2個と北側2個、石蓋上に置かれた計4個の礫である。南西隅にも礫1個があるが、石蓋上ではなく、しかも厚味がないので支石には数えない。4個は中央寄りにはば原位置を保っており、しかも東西両端の状況からすれば、それ以上の数の支石が存在した可能性はうすく、この点はS A29支石墓と若干違う。したがって支石の配置からみると、上石に数個の平石を用いたとしても石蓋の東西長を完全に覆うのは困難であり、斜めにもたせかけるように載せている西側上石がもともとの状況を保つものと推定する。とすれば、これらはあくまで補助的であって、もともと中央には別により大きめの上石1枚が存在していた可能性がつよいことになる。

石蓋は横長の石材5個を主軸に沿って西側から順に並べ、さらに周囲および隙間を小礫で塞いでいる。墓壙の陥没に伴い10~20cm沈下し、中央ほどそれが著しい。なお、上石・支石・石蓋とも石材は全て花崗岩である。

墓壙は黄褐色砂質土まで下げてようやく検出できた。隅丸長方形を呈し、横出面で長さ1.70m、幅0.82m、深さ0.26m。石蓋が載る面を旧表土面として復元すれば長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.9mとなる。壁は下位でやや斜めに掘り込まれているが、上位は急に立ち上がるであろう。壙底は平坦である。頭位は石蓋用材の大きさから東を優位とみてN76°Eと推定する。

出土品は小壺2点と鉢1点が、石蓋上で4個の支石に囲まれるように供獻されてあった。そ

II. 造構

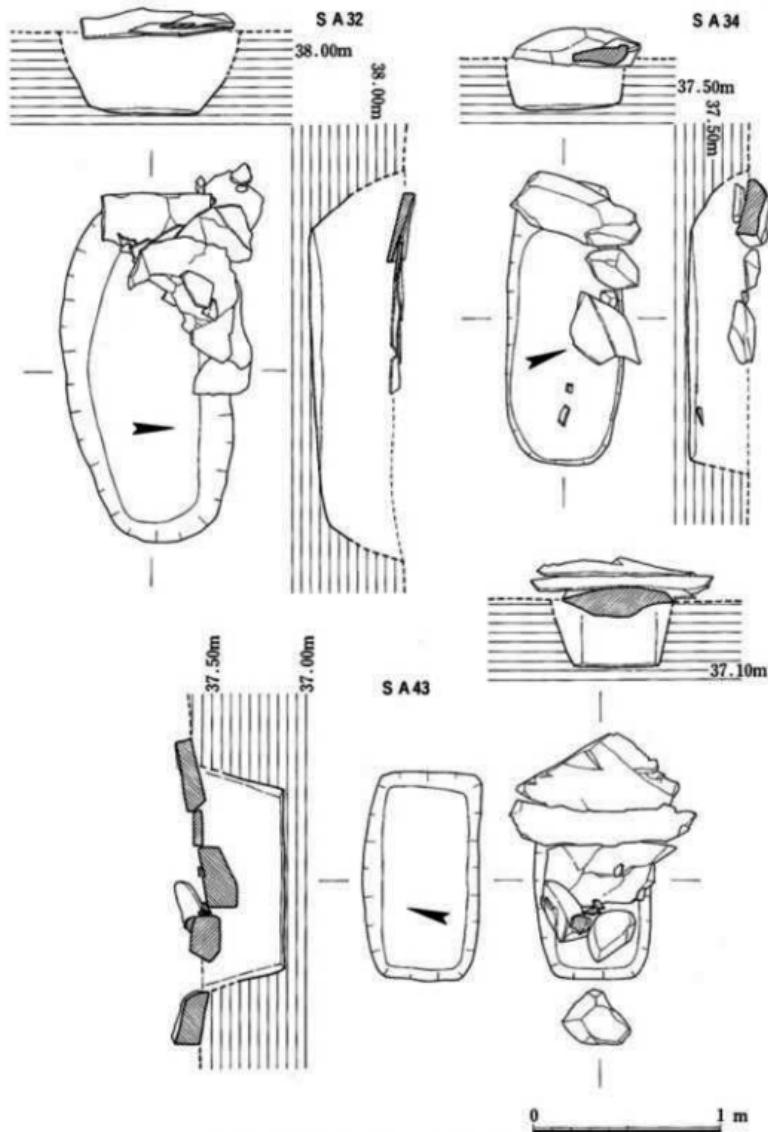


Fig. 73 S A32・S A34・S A43支石基 (1/10)

### 標石B遺跡

のうち南側の小壺1点は横転し割れていたが、他2点は正置のままであり、おそらく3点ともほぼ原位置を保つと考えてよいであろう。石蓋と支石上面との間隔は約20cmであり、その空間が土器等の供獻に利用されたことを示している。

#### S A34支石墓 (Fig. 73, PL. 63)

上部構造は不明、下部構造は石蓋土壤基である。ただし石蓋も大部分は破壊されている。

石蓋は中央から西半に大小5個の花崗岩蹠が残るが、動いている。横長の石材を主軸に沿って並べたものと推定する。

墓壙は黄褐色砂質土層まで下げて検出できた。隅丸長方形を呈し、検出面で長さ1.51m、幅0.61m、深さ0.16m。石蓋の載る高さを旧表土面として復元すれば、長さ1.6m、幅0.65m、深さ0.3m程度になろう。したがって比較的浅い。壁は西側で斜めに掘り込まれている。壙底は平坦である。頭位は明らかでないが、壁体が斜めに立ち上がる西側とみればN60°Wとなる。

なお、墓壙東側の埋土中下位から夜臼式の丹塗磨研壺の破片2点が出土しており、この時期すでに一部の壺棺が破壊されていた可能性が考えられる。

#### S A43支石墓 (Fig. 73, PL. 64)

上部構造は支石に上石を載せていたと推定されるが、詳細不明。下部構造は石蓋土壤基である。ただし石蓋は一部破壊されている。

石蓋は東側3個が原位置を保つが、南側では1~2個抜き取られている。残存する3個は横長の花崗岩平石で、主軸に沿って並べられており、墓壙埋土の陥没に伴って中央の石が沈む。また南側には3個人頭大花崗岩蹠が転がっており、本遺構に伴うものとすれば、支石であった可能性がつよい。

墓壙は長方形で黄褐色砂質土層まで下げて検出できた。壁はやや斜めに掘り込まれ、壙底は平坦である。検出面で長さ1.11m、幅0.62m、深さ0.28m。石蓋の載る高さを旧表土面として復元すれば、長さ1.2m、幅0.65m、深さ0.45m程になる。従って一群の土壤墓の中では格別小型であり、成人を葬るに足る容積といえるかどうか疑問である。頭位は石蓋の大きさから東側を優位とみてN76°E。

西南隅石蓋上からは供獻小壺1点が割れた状態で出土した。もともと石蓋上に直接、正置してあったものであろう。

#### S A44支石墓 (Fig. 75, PL. 65)

上部構造は不明、下部構造の土壤も上面がかなり削平され、とくに東側が浅く残る。

墓壙は隅丸長方形を呈し、壙底は東側がわずかに上がり気味ながら、ほぼ平坦である。検出

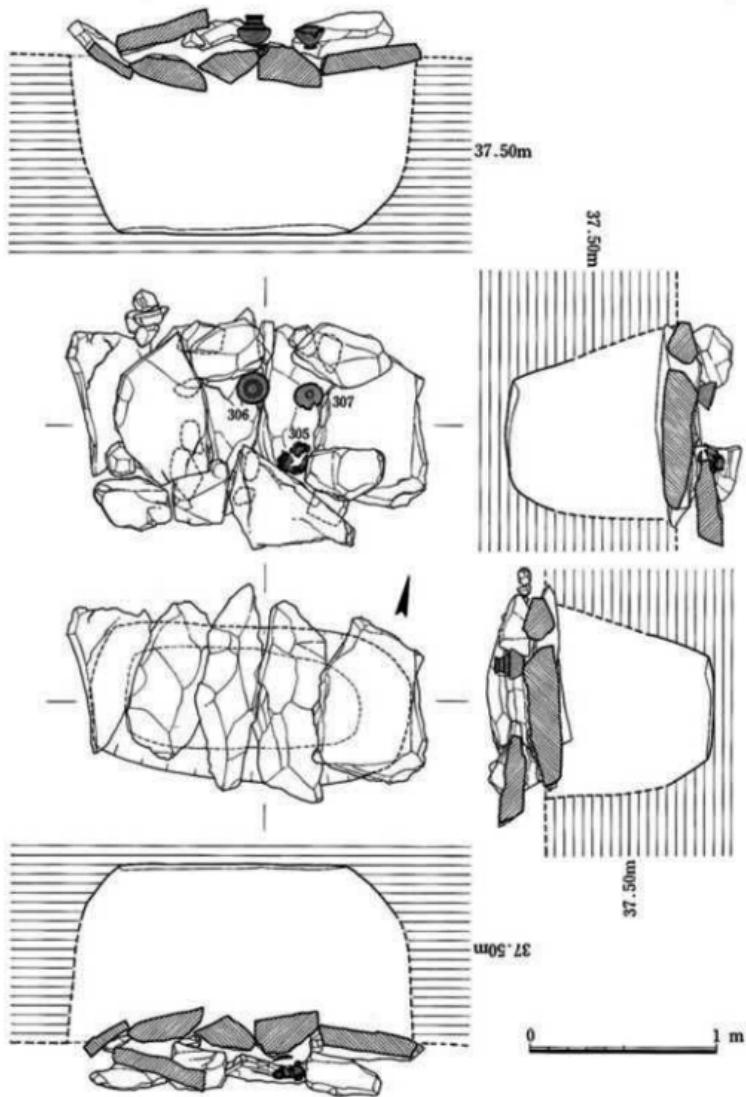


Fig. 74 SA33支石基 (1/20)

礫石B遺跡

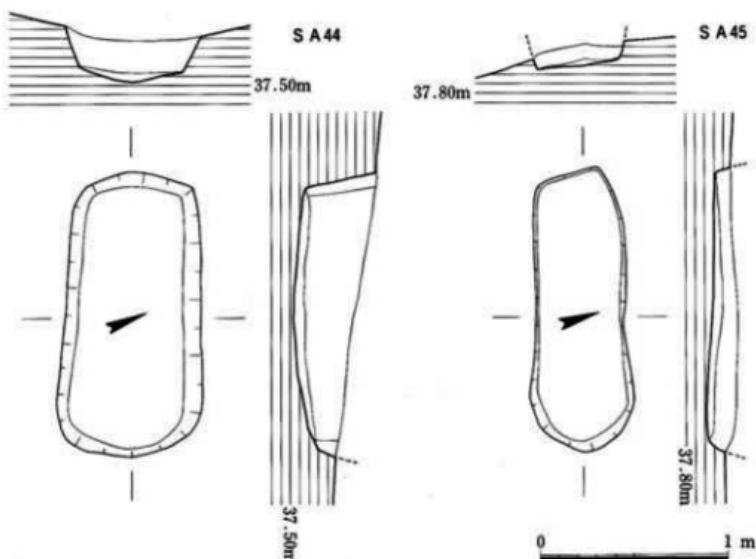


Fig. 75 S A44・S A45支石墓 (1/50)

面で長さ1.52m、幅0.72m、深さは西側の最深部で0.38m。頭位は墳底のやや上がり幅の広い東側とみてS78°Eと推定する。

S A45支石墓 (Fig. 75, PL. 65)

上部構造は不明。下部構造の土壤は黄褐色砂質土層まで下げて検出したこともあるが、もともと削平により残りは浅い。やや不整形ながら、基本的には隅丸長方形である。検出面で長さ1.51m、幅0.46m、深さ0.12m。頭位はやや幅の広い東側を優位とみてS72°Eと推定する。

(2) 瓢棺墓

S J13瓢棺墓 (Fig. 76, PL. 66)

接口式の瓢棺墓である。瓢棺1基を埋めるにしては、墓壙が異様に大きい。東側は近世以降のおそらく土壤墓と推定されるSK15土壤に切られ、さらに上面を削平されるなど上・下妻ともかなり破壊されている。

墓壙は2段掘りで、まず上段は主軸に対し横長の長方形で1.90×2.42m、検出面からの深さ

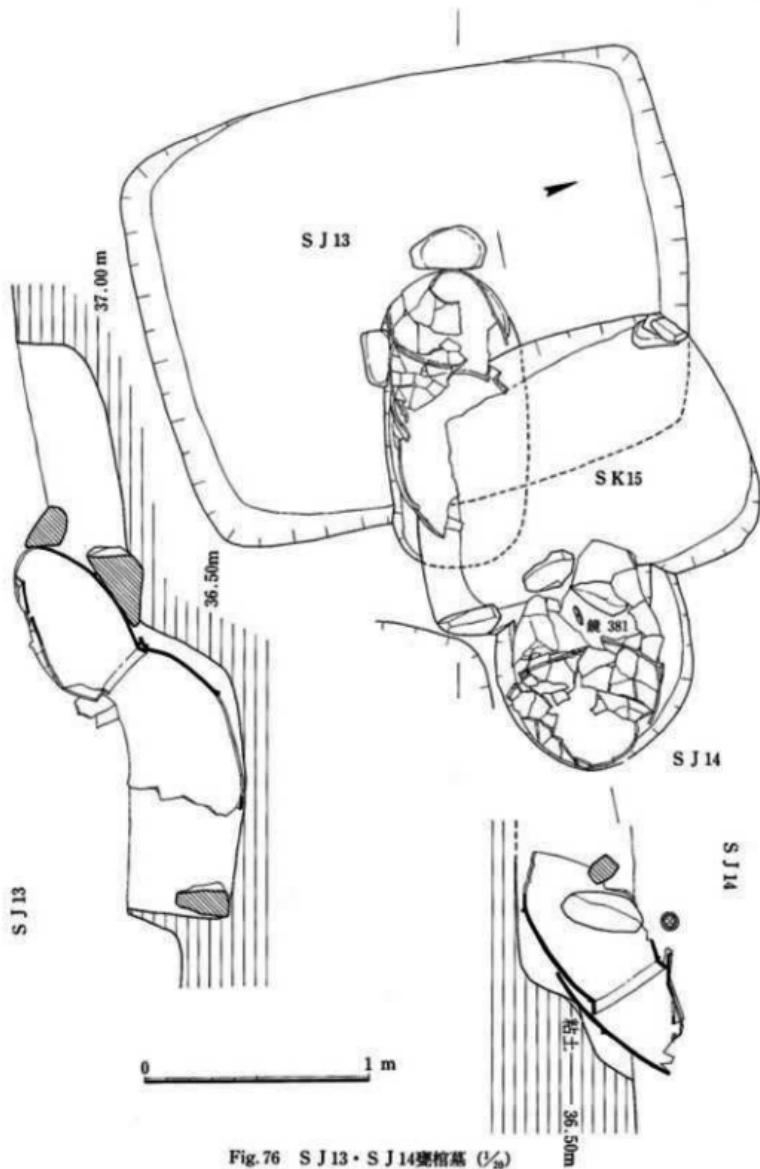


Fig. 76 S J 13 • S J 14 墓構基 ( $\frac{1}{20}$ )

## 礫石B遺跡

0.33mに掘る。下段はその東側を横穴状に、下妻を収めるに足るだけの狭い楕円形土壙を穿つ。復元すれば長径0.9m、短径0.6m、上段壙底からの深さ0.35mである。

甕棺は下妻を下段墓壙に直接斜めに入れ、それよりやや口径の小さい上妻を若干さし込むようにして蓋に用いている。またその際、上妻の下と周囲に花崗岩蹠を計3個置いて棺の固定をはかっている。頭位はN70°W、埋置角度は45°。時期は弥生後期前半の三津式に属す。

### S J 14甕棺墓 (Fig. 76, PL. 66)

覆口式の甕棺墓である。下妻は西側をSK15土壙に切られた際に胸部下半を欠失し、また上妻も削平により底部付近を欠く。下妻内に花崗岩蹠2個が落ち込んでいるがSK15土壙の掘削に伴うものであろう。

墓壙は2段掘り楕円形で、復元すれば上段で長径約1.1m、短径0.85mとなろう。下段は下妻を収めるに足るだけの狭い掘形で壙底は平坦である。

甕棺は上妻を壙底に直接斜めに置き、口縁部を打ち欠いた上妻をやや深く被せる。またその際、下段掘形の上縁に赤黄色粘土を置いて棺の安定性をはかっている。頭位はN73°W、埋置角度30°である。

出土品は副葬品とみられる仿製小形内行花文鏡が1面、甕棺の約10cm上から出土した。本来の帰属についてはSK15土壙は近世以降の土壙墓かと思われ、またSJ13甕棺基が破壊された際にとび出した可能性もありうるが、出土位置からみて本遺構に伴う副葬品と考えるのが最も適当であろう。最近の耕作等で歛等の刃先が当たった為か鏡面がやや曲がっている。甕棺の時期は弥生後期前半の三津式である。

### (3) 石棺墓

#### S C 05石棺墓 (Fig. 77, PL. 67)

SK16土壙の埋没後、その上に造られた箱式石棺墓である。

墓壙はSK16土壙埋土内に掘り込んでいるため、形状等は不確実であるが、隅丸長方形とみられる。一部推定し、検出面で長さ2.65m、復元幅1.6m、深さ0.8m。

石棺は墓壙の北側に寄って位置する。内法で長さ1.91m、中央幅約0.35m、深さ約0.36m。頭位S84°W。頭位にあたる西側で幅がやや広く、かつ高い。石材は全て花崗岩である。身は東西小口各1個、北側石4個、南側石2個の大小板石を横長に立てて用い、各石材の基部は壙底を若干掘り込んで据え付ける。SK16土壙埋土の沈下に伴い、中央部が下がっている。

蓋石は5個の平石を用い、身と同様、頭位側に大き目の石材を載せている。一部、西小口あるいは側石の石材巻ぎ目部では蓋石との間に小蹠を置き、隙間を塞ぎながら身の高さを調整し

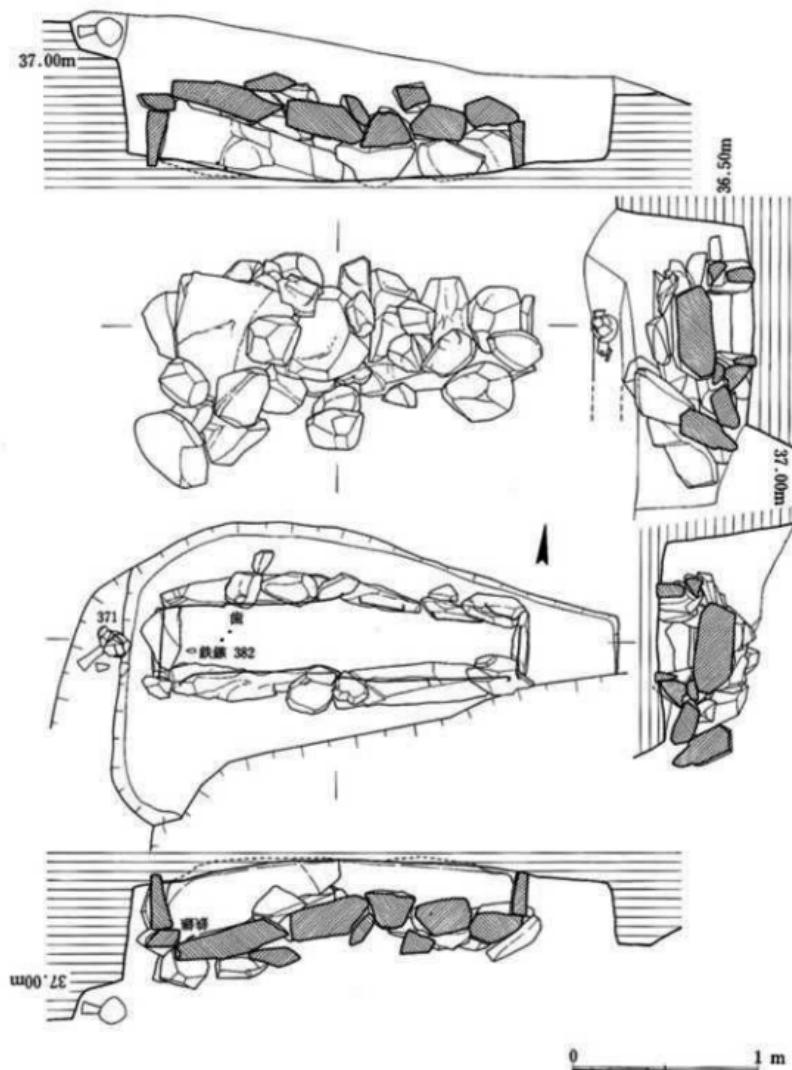


Fig. 77 S C 05石棺基 (1/20)

## 蓋石B遺跡

ている。また、蓋石上および特にその南側には石棺を覆うように多数の礫を載せている。

出土品は棺内床面上の頭位部分で齒2個が遺存し、その付近のみ朱の散布が認められた。またそのちかく西南隅では鐵鏃1点が鋒を西に向けて出土した。棺外では長頸壺が1点西小口側で蓋石よりかなり高い位置から横転した状態で出土しており、もともと、石棺を埋めたのち、その頭位上に置いた副葬品であったと推定する。時期は後期終末である。

### S C 06石棺墓 (Fig. 78, PL. 68)

比較的大型の箱式石棺墓である。

墓墳はやや不整形ながら、基本的に隅丸長方形の2段掘りとみられる。上段は検出面で長さ3.30m、幅は中央付近で1.94m、深さ約0.4m。下段は長さ2.82m、幅1.35m、深さ0.35mである。

石棺は下段掘形に悠々取まる。内法で長さ1.82m、中央約0.32m、深さ約0.35m。頭位は西でN86°W。石材は身の北側石西端の1個が緑泥片岩である以外は全て花崗岩である。身は蓋石の大きさに比べると全体に小さく貧弱で、東西両小口に各1個、北側石7個南側石10個の平石を、北側石西端の2個が横長である以外は基本的に縦長に立てて使用している。側石南側ではさらに3個の礫をその上に平置きしているが、高さ調整の為であろう。これら身に用いられた石材は棺の内面にあたる部分から外面上半まで朱が塗られ、さらに南側の平置きの礫上面まで及んでいる。塗布の状況からみると、おそらくそれは裏込めまで含め、棺身が出来上がった段階での処置であったと推定できる。なお、棺内には約8cm厚で黄褐色砂質土を埋め、床をつくっている。

蓋石は5個の平石を用い、足方から頭位に向かって順次被せていったようである。石材は頭位西側により大きな石材を用いている。また、蓋石上には多量の礫をまるで積石塚のように載せていた。実測図では蓋石周囲だけのようにみえるが、これは調査当初にある程度取り除いた為であって、もともと中央部にも土に混じって礫がかなり積み上げられて石棺を覆っていた。

出土遺物として頭位にあたる西小口寄りの床面で齒6片を検出した。副葬品は埋土中より青色ガラス小玉2点が出土した。

### S C 07石棺墓 (Fig. 79, PL. 69)

蓋石上に礫積みをもつ、特徴ある箱式石棺である。

墓墳は隅丸長方形の2段掘りである。上段は検出面で長さ2.53m、幅は中央で1.65m、深さ0.60m。頭位にあたる東側でやや幅が広くなる。下段は棺身が収まる広さで、上段墳底より0.13mほど浅く掘り込んでいる。

石棺に使用された石材は全て花崗岩である。身の内法で長さ1.73m、中央幅約0.33m、深さ約

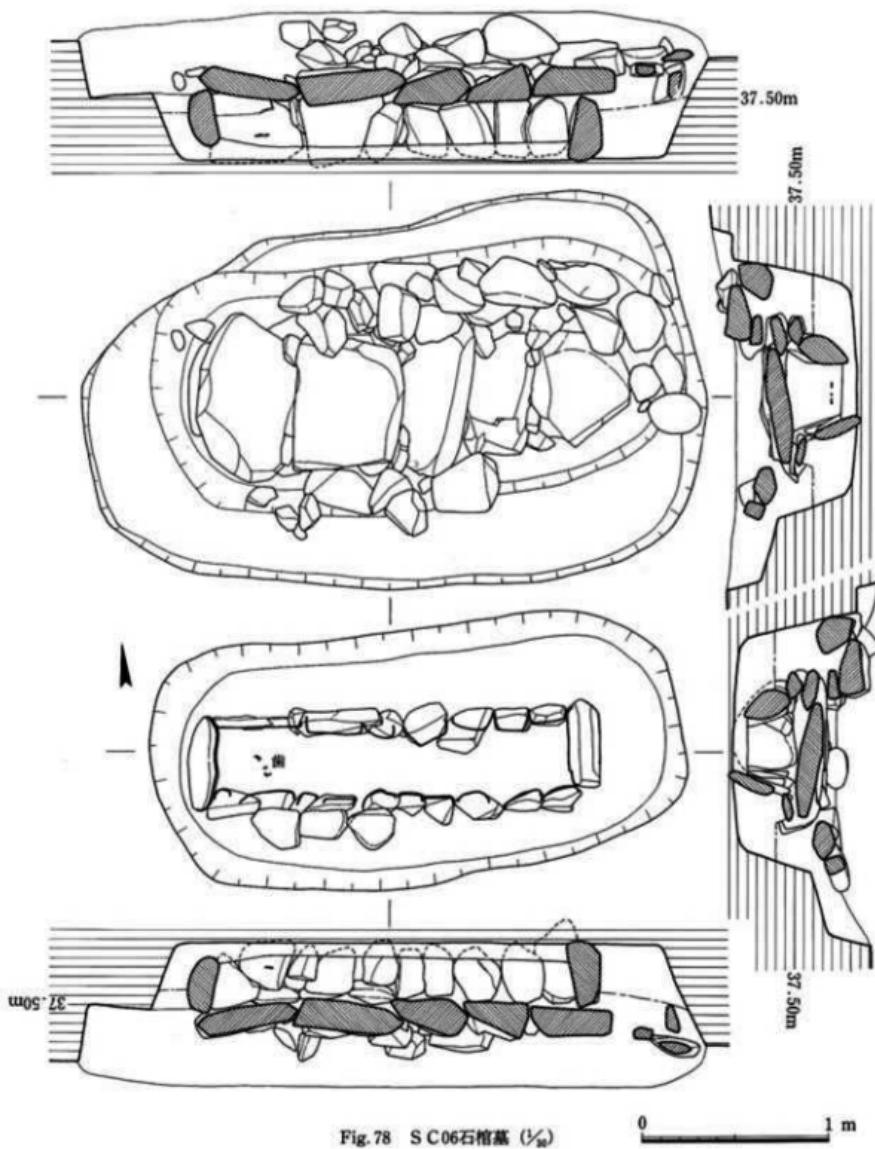


Fig. 78 SC 06石棺墓 ( $\frac{1}{20}$ )

砾石B遺跡

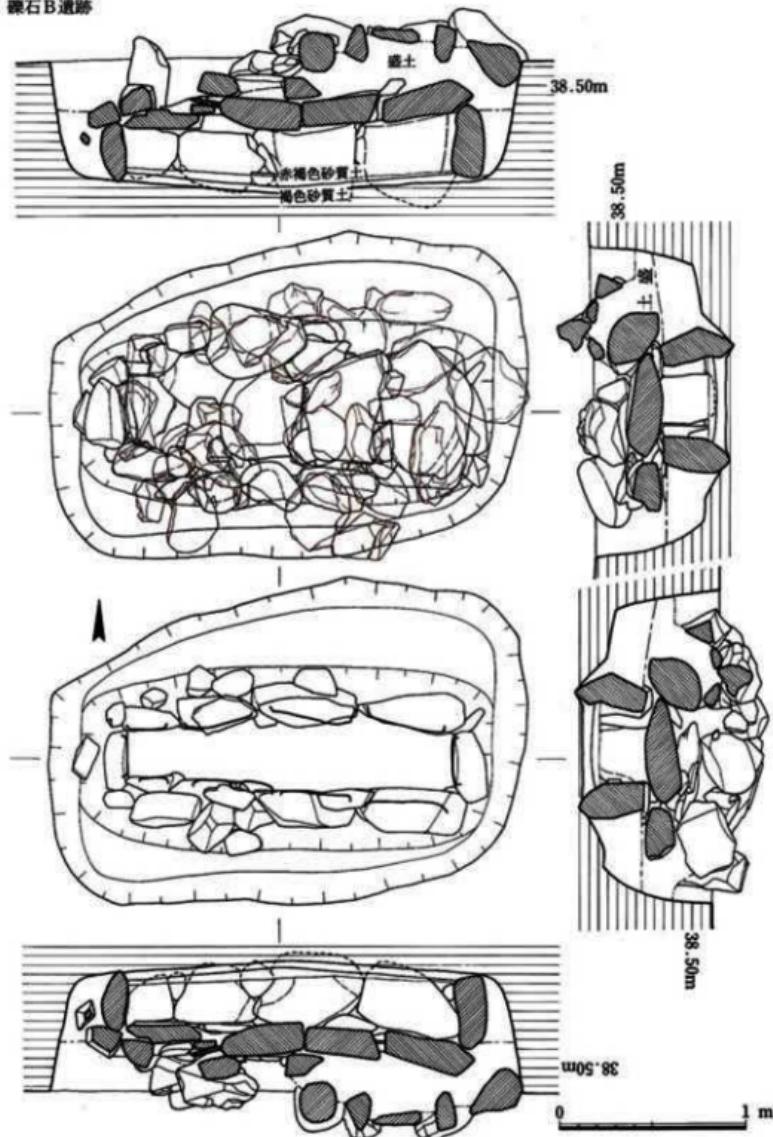


Fig. 79 S C 07 石棺墓 ( $\frac{1}{50}$ )

0.3m。頭位は東でN86°E。身は東西両小口に各1個の平石を縦長に立て、南北側壁には各4個の平石を横長に立ててさらに隙間を小礫で塞ぎ、あわせて高さ調整を行っている。側石の各石材基部は壇底を若干掘り込んで据え付け、棺内に約7cm厚の褐色砂質土を入れて床をつくる。また身がおそらく出来上がって屍体を葬る段階であろう。その各石材内面には朱を塗布し、さらに朱は床全面にもふりかけられて褐色砂質土を赤く染めていた。

蓋石は基本的に4個の平石を用いて頭位側により大き目の石材を配し、さらに西側および蓋石周縁部を中心に大小礫で丹念に隙間を塞いでいる。4個の平石には身と同様、その内面に手篤く朱が塗られている。

蓋石上には多量の礫が載っている。ただしそれは直接ではなく、まず茶褐色で厚く蓋石を覆ったのち、頭位にあたる東側を中心にして葺石状に盛り上げたものである。旧地表が現在と極端にかわらないものであったとすれば、地上標式として意図された可能性がつよい。同じことは、他の同様な礫積みのSC05・SC06石棺墓についてもいえよう。

#### SC08石棺墓 (Fig. 80, PL. 70)

簡略な構造の小児用箱式石棺である。

墓壙は2段掘りの隅丸長方形で、上段は長さ1.66m、幅1.21m、深さ約0.4m。

石棺は下段の掘形そのものを棺に利用している。身としての石材は頭位の東小口に1個、南北側壁に各4個の平石を縦長に立てているが、いずれも蓋石を載せるのには弱く、ごく形式的な省略されたものである。石材は南側壁の板石3個と北壁のうち棺内に倒れていた板石1個が緑泥片、他の花崗岩礫である。なお、東小口の1個ははじめから斜めに置かれていた。法量は掘形上縁で長さ1.07m、幅0.43m、深さ0.19m。頭位は東でN90°Eである。

蓋石は基本的に4個の花崗岩平石を下段土壙の上縁にもたせかけて並べ、さらに若干の緑泥片岩を混じながら主として花崗岩礫で隙間を塞いでいる。蓋石は頭位にあたる東側でより大きめの石材を用いている。

#### SC09石棺墓 (Fig. 81)

比較的、丹念な造りの組合式石棺である。

墓壙は梢円形にちかいが、基本的には隅丸長方形である。2段掘りで、下段は石棺の身部が収まるだけの掘り込みである。上段で主軸長2.65m、幅は中央で1.61m、深さ0.45m以上、下段はさらに0.16m深く掘り込んでいる。

石棺は身の内法は長さ1.81m、幅は中央で約0.30m、深さ0.3m。頭位N82°E。頭位東側でやや幅が広い。石材は花崗岩と緑泥片岩を併用している。身は東西両小口に各1個平石を縦長に立て、北側壁に5個、南側壁に4個の平石を縦長または横長に立て、小礫で隙間を塞ぐ。各石

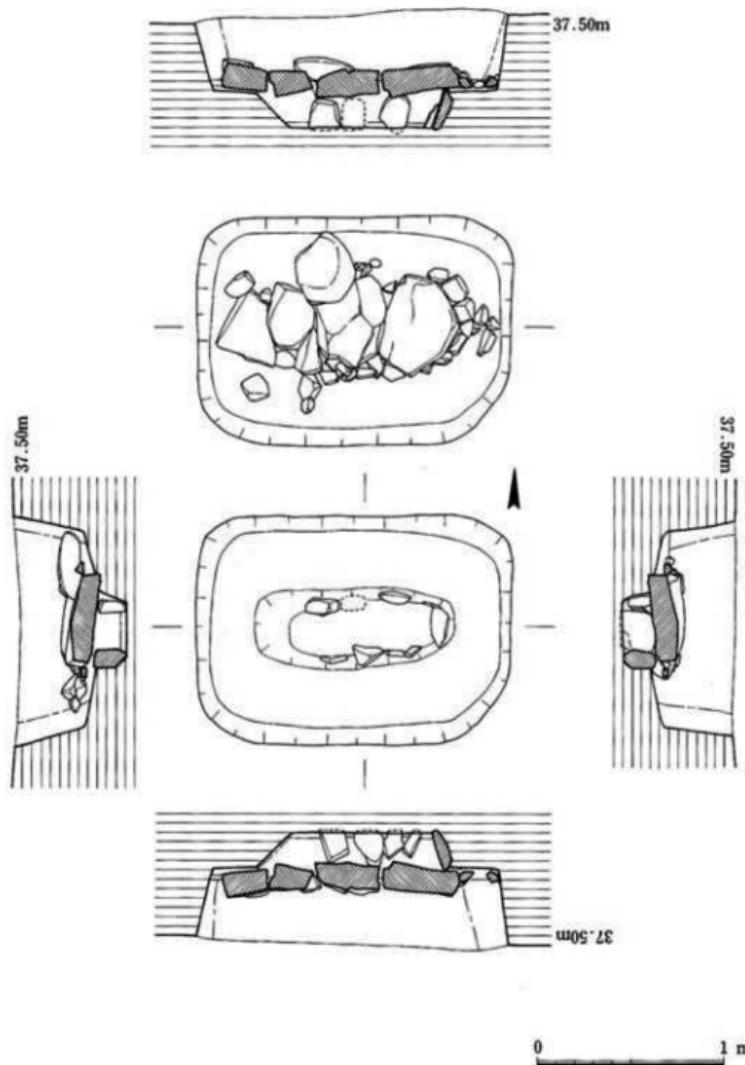


Fig. 80 SC 08石棺墓 (1/2)

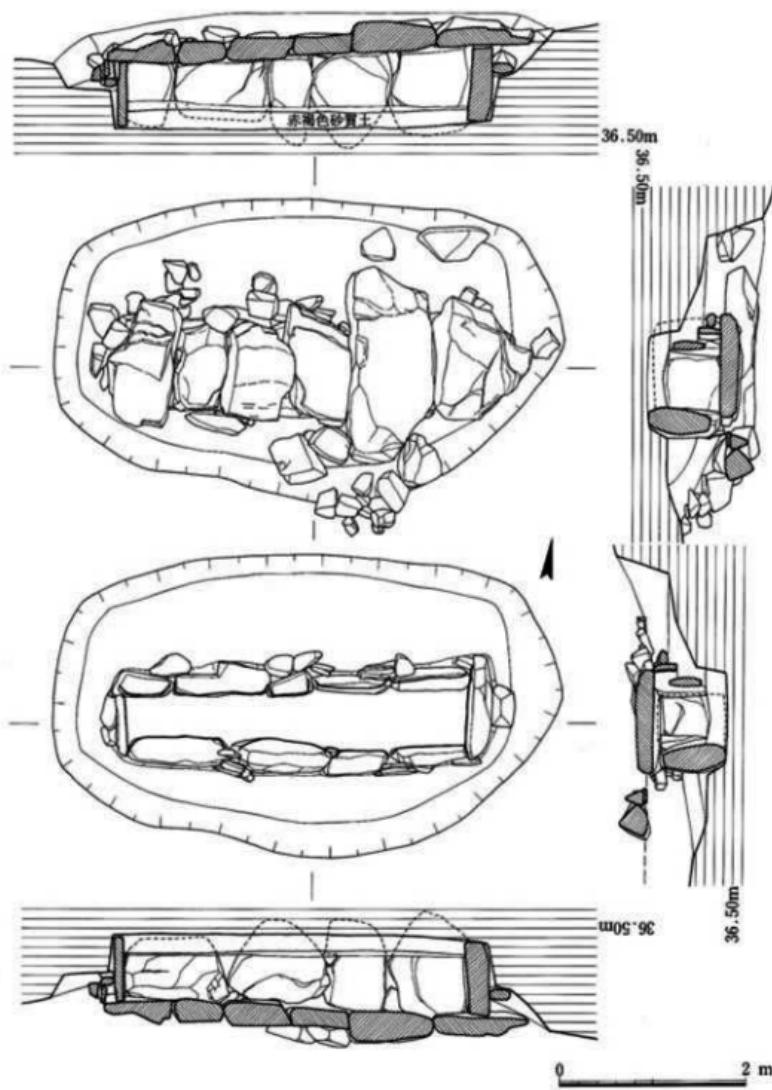


Fig. 81 S C 09石棺基 (1/20)

## 砾石B遺跡

材のうち両小口と側壁の横長使用のものは直接壙底に据えているが、側壁の縦長使用の場合は基部を掘り込んで埋め、さらに棺内に約10cm厚の褐色砂質土を入れて床をつくり、内側から押えている。また両小口および一部側面では、その裏側上位に小礫を当てた補強がみられる。なお、身の内面には薄く朱が塗られ、さらに屍体によりかけたであろう朱が床土全面を厚く赤く染めていた。朱の塗布は蓋石内面にも施されている。

蓋石は頭位側に大き目の石材を配しながら基本的に6枚を被せ、さらに小礫で多少の隙間を塞ぐ。その他、石棺東半部で墓壙周縁に若干の礫積みがみられるが、これはSC07石棺のような積石一部に当たるものではなく、削平に伴う蓋石上面の破壊によるものであろう。

### SC10石棺墓 (Fig. 82, PL. 71)

比較的、丹念なつくりの箱式石棺である。

墓壙は2段掘りで、上段は横円形、下段は棺身に入る分だけ長方形に掘り込んでいる。上段で長径2.95m、短径1.90m、深さ0.45m。下段はさらに0.15m深い。

石棺は身の内法で長さ1.86m、中央幅約0.3m、深さ約0.21m。頭位は西N89°W。石材は全て花崗岩である。身は東西両小口に各1個平石を縦長に立て、側石は北側5個、南側4個の平石を横長に立てて小礫で隙間を塞ぐ。各石材は壙底に直接置き、西小口では外から礫を当てて補強し、棺内には褐色砂質土を厚さ約15cm入れて床をつくると同時に基部を固めている。

蓋石は頭位により大き目の石材を配しながら、大小6個の平石を被せていたと推測されるが、西端の1個は抜き取られている。またその周縁および石材間の隙間は小礫で塞ぎ、一部黄褐色粘土で目張りを行っている。北側に1個、蓋石より高い位置に横長の礫があるが、とくに意味は認められない。

### SC11石棺墓 (Fig. 38, PL. 71)

やや雑な造りの箱式石棺である。

墓壙は上面横円形で、棺身部のみさらに浅く掘り込んでおり、一応2段掘りである。南側は上面がかなり削平されている。長径は2.85m、短径は中央部で1.37m、深さは北側で上段0.42m、下段はさらに約10cm掘り下げる。

石棺は内法で長さ1.85m、幅は中央で約0.4m、深さ0.3m。北側に比べ、南側小口幅が極端に狭い。頭位は真北に向く。石材は全て花崗岩である。身は南北両小口に平石各1個を縦または横長に立てて、東西側石は各4個を並べているが、西辺の頭位側2個が棺内に小口を向けて平置きされている一方、他は横長に立てており、また頭と足位で石材の大きさが極端に違うなど、石材の選定からして雑である。各石材は下段壙底に直接置き、北小口では外から簡単な礫で押え、棺内には約8cmの厚さで黄褐色砂質土を入れて基部を固めている。また身の内面には朱が

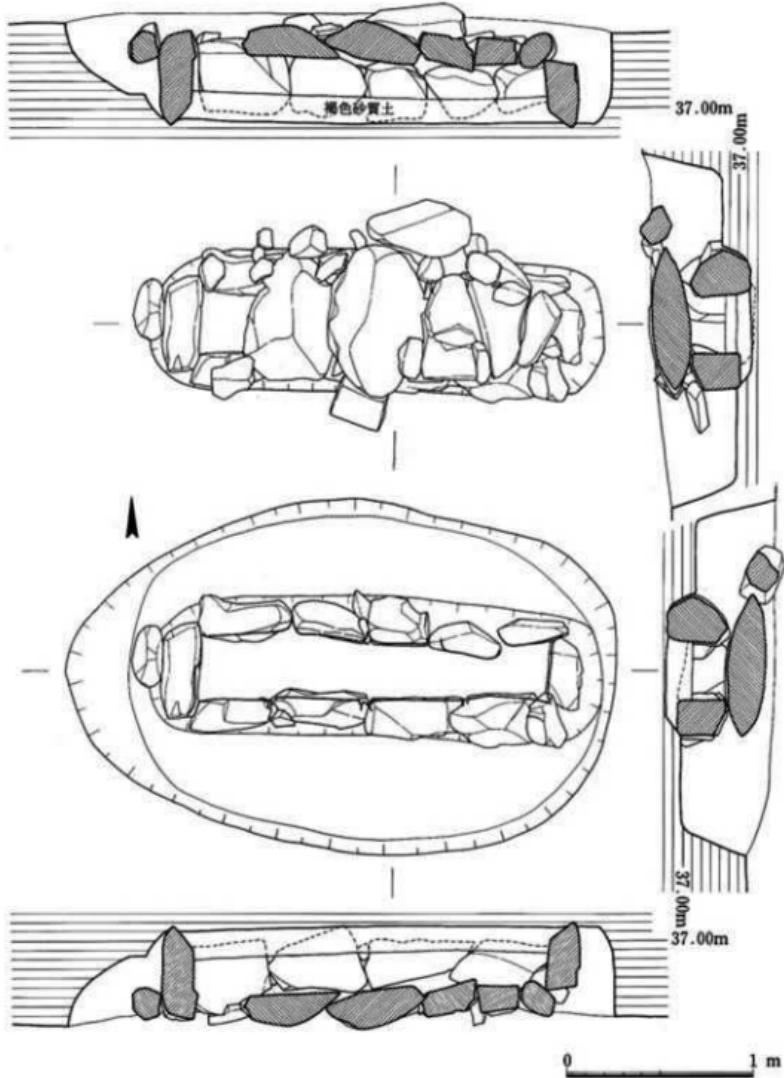


Fig. 82 SC10石棺墓 ( $\frac{1}{50}$ )

## 漆石B遺跡

塗布され、さらに床面にも朱が散布されたらしくうすく赤変していた。

蓋石は7個の平石を被せ、さらに隙間を大小の礫で塞ぎ、一部黄褐色粘土で目張りを行う。

### S C 12石棺墓 (Fig. 84, PL. 74)

やや簡略な造りの箱式石棺である。上面、とくに東側がかなり削平されている。

墓壙陥丸長方形で、長さ2.42m、幅1.60m、深さは西側で約0.3mまで残る。他の石棺のように棺身を収める下段の掘り込みは設けず、身の石材基部のみ浅く掘る程度である。

石棺は内法で長さ1.81m、幅は南側石中央が倒れかけているが、復元して約0.36m、深さ約0.22m。頭位は東N82°E。石材は身の北壁中央の1個が緑泥片岩である以外は全て花崗岩である。石材は全体に小さい。身は東西両小口に各1個、北側石5個、南側石6個の平石を横長に立て、さらに隙間を小礫で塞ぐ。棺内は墓壙底をそのまま床面に使用しているようである。

蓋石は頭位側に比較的大きめの石材を配しながら、横長の平石8個を被せ、さらに隙間を小礫で塞いでいる。

### S C 19石棺墓 (Fig. 85)

殆ど破壊された石棺の残欠と考えられるが、黒色埋土がつまり、最近荒らされた形跡もない。木棺墓等の可能性も残る。南半部に花崗岩礫が若干残っており、木棺墓とすれば棺墓部の止め石にあたる。削平により残りが浅く、墓壙の東側はS C 11石棺墓に切られている。

墓壙は梢円形を呈し、検出面で長径1.90m、幅は推定1.7m、深さは北側で0.35m。棺は長さ1.2m前後、幅0.4m弱、頭位はN10°Wと推定する。

以上9基の箱式石棺墓のうち、S C 11・S C 19石棺墓を除く7基は頭位を東西方向におく点で比較的近接した時期の一群とみられる。またS J 13・S J 14壺棺も同じく東西頭位であり、壺棺が石棺に先行して造られたという観点でいえば、東西頭位石棺墓が南北東位より早く造られたと推定できる。ただし切り合いで殆どないことからみて、さほど時間差はないであろう。全体としては壺棺墓のあとに始まりS C 05石棺墓の供獻土器の時期までとして、弥生後期後半～終末と推定する。

現在みる分布は台地端のわずかな範囲にあるが、これは東側と南側が近年削平されたためであって、もともとは東側および南側にいくぶん続いていたであろう斜面にまだ相当数が存在していたと推定する。

注目されるのはS C 05・S C 06・S C 07にみられた棺上疊積みである。3基は一群の中で最も北に在って、棺自体の造りも丁寧で、S C 05からは鉄鏃と長頭壹が出土した。棺上疊積をもつ箱式石棺墓は他に殆ど例を聞かないが、これが地上標式にあたるものであるとすれば、時期

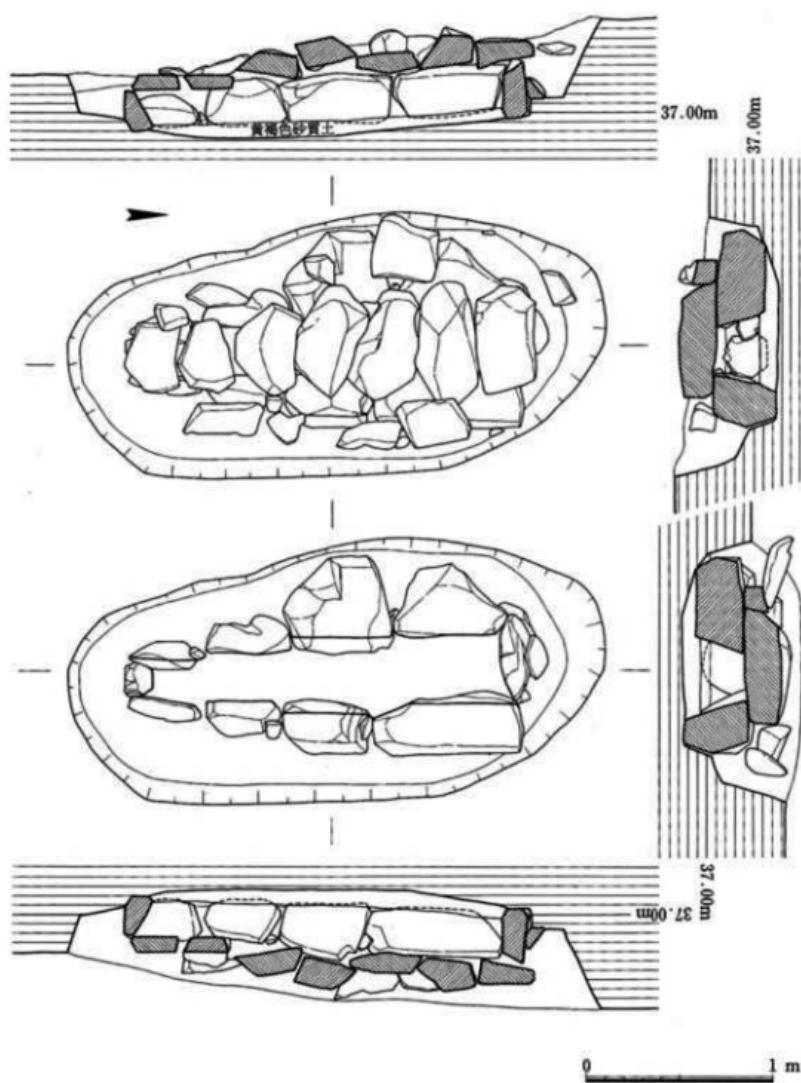


Fig. 83 SC11石棺墓 ( $\frac{1}{20}$ )

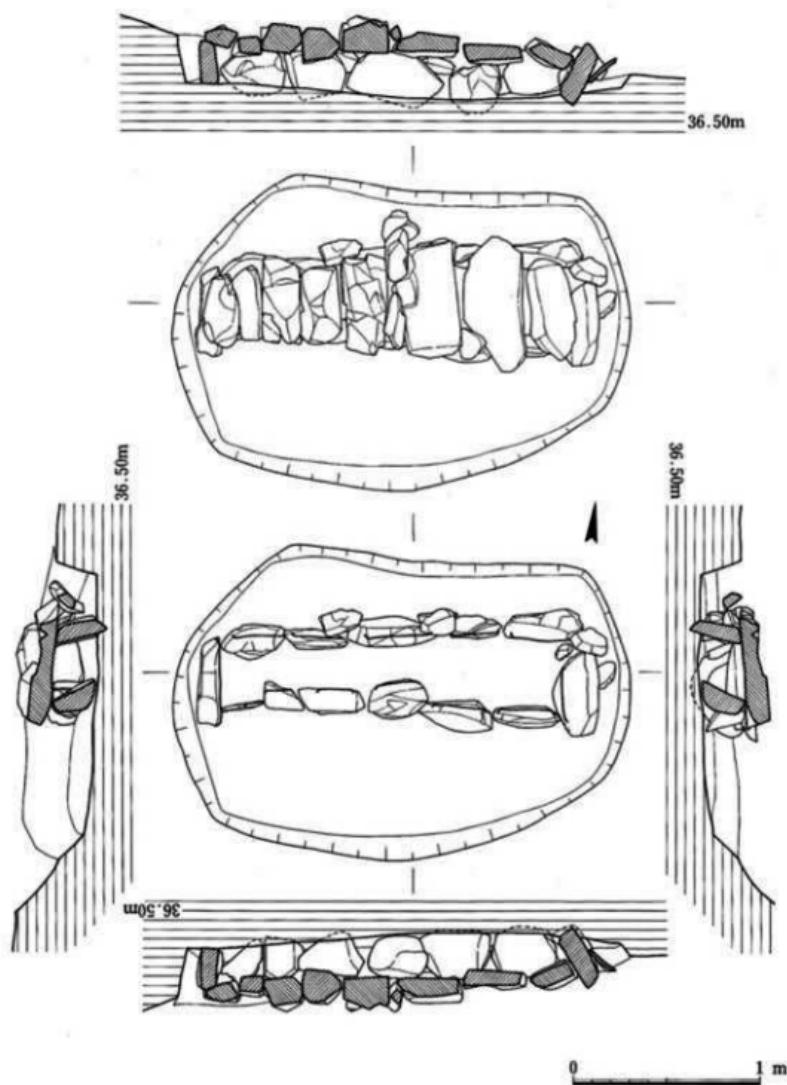


Fig. 84 S C12石棺墓 ( $\frac{1}{20}$ )

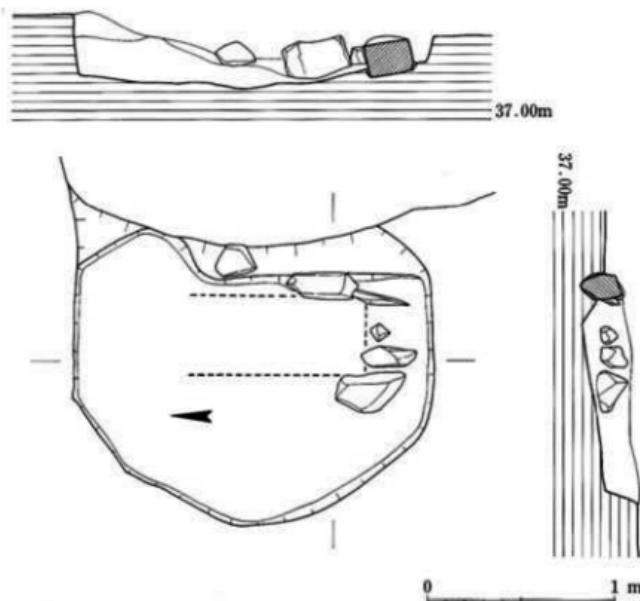


Fig. 85 SC 19 石棺墓 (少)

が弥生後期末であるだけに、個々の埋葬が墓域を明示し、さらには若干の高まりをもつ点において、墓制上問題ある資料といえる。

Tab. 10 石棺墓一覧表

遺構番号	形態	内法(長・幅・深)cm	方位	赤彩部分	上石状況	副葬品	備考
S C 05	箱式石棺	191×35×36	S 84°W	床	蓋石上に櫛模	長頸壺 1 鉄錠 1	人骨(歯)。二段掘 SK 16より新しい。
S C 06	〃	182×32×35	N 84°W	側石内外面 蓋内面	蓋石上に櫛模	ガラス小玉 2	人骨(歯)。二段掘
S C 07	〃	173×33×32	S 86°E	床、側石内外面 蓋内面	蓋石上に櫛模		
S C 08	〃	71×26×19	N 90°W				小児棺。二段掘 側石簡略化
S C 09	〃	181×30×30	N 82°E	床、側石内面 蓋内面			二段掘
S C 10	〃	186×30×21	N 89°W	床、側石内面			一部粘土目張。二段掘
S C 11	〃	185×40×30	N 0°E	床、側石内面			一部粘土目張
S C 12	〃	181×36×22	N 82°E				
S C 19	〃		N 10°W				木棺墓の可能性もある。SC 11より古い。

## (4) 土壙

## SK21土壙 (Fig. 86, PL. 73)

川にちかい調査区の西端に位置する。長方形の土壙で、長さ2.30m、幅約1.3m、深さ約0.6m。境内には黒色土がつまり、比較的下位から花崗岩礫と縄文晩期～弥生時代前期後半の土器片が投げ込まれた状態で検出された。埋土の状況から土壙墓とは考えにくく、いわゆる貯蔵穴にあたるものかと推定する。

時期は弥生前期中頃で、ST04古墳下の支石墓の一群よりはやや後出する。同じ時期でこれにちかい遺構は久池井C遺跡で、長方形竪穴が2基検出されている。

## SK22・SK23土壙 (Fig. 59)

遺跡西南限を掘削機で追確認調査した際に検出した。いずれも不整形な梢円形状の土壙で、最大幅はSK22が1.9m、SK23が推定2.5m。深さは0.5m前後である。黒色土がつまり、縄文晩期～弥生前期中頃の土器片が若干出土した。SK21土壙と同じ時期の遺構とみられるが、性格は不明である。

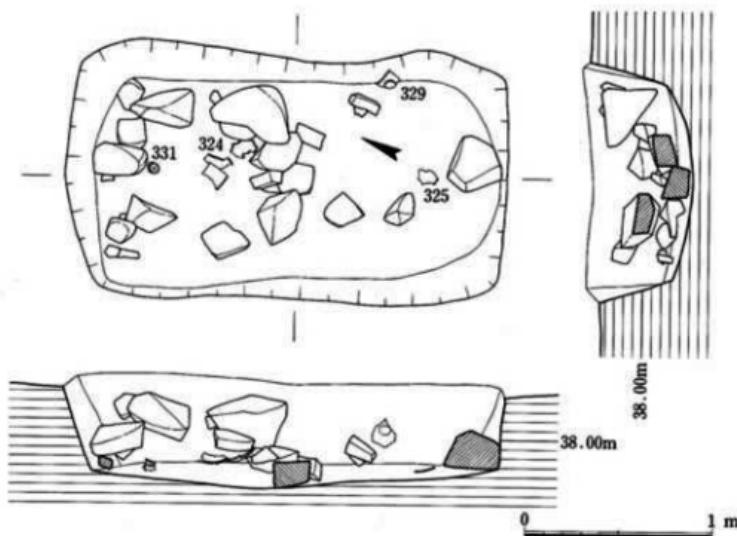


Fig. 86 SK21土壙 (上)

## SK16土壤 (Fig. 87, PL. 74)

遺跡の東南隅石棺群の北側に位置し、埋没後、その上にSC05石棺墓が造られている。大型の橢円形土壙で、西半分が一段深く、かつ広く掘り込まれている。壁は斜めに下がり、壙底は全体的に丸味をもつ。規模は検出面で長径5.9m、短径は中央付近で3.7m、深さは西側最深部で1.15mをはかる。

埋土の状況を土層断面でみるとレンズ状の自然堆積を示しており、一気に埋められたものではない。傾斜上方の西側から先に砂質土が流入し、その上を厚く黒色粘土質土が覆っている。遺物は東側を中心、壙底にちかい黒色土層下位から弥生中期末～後期終末の甕・壺の破片、さらに中央寄りで鉄鎌1点・鉄斧2点が投棄されたような状態でまとまって出土した。鉄器3点は完形品で、まだ十分実用にたえるものである。

土壤の時期は弥生後期終末と推定する。性格は埋葬区の一画にあることからすれば祭祀に関係するものとみられないこともないが、規模等からみていわゆる貯蔵穴にあたるものと考える。

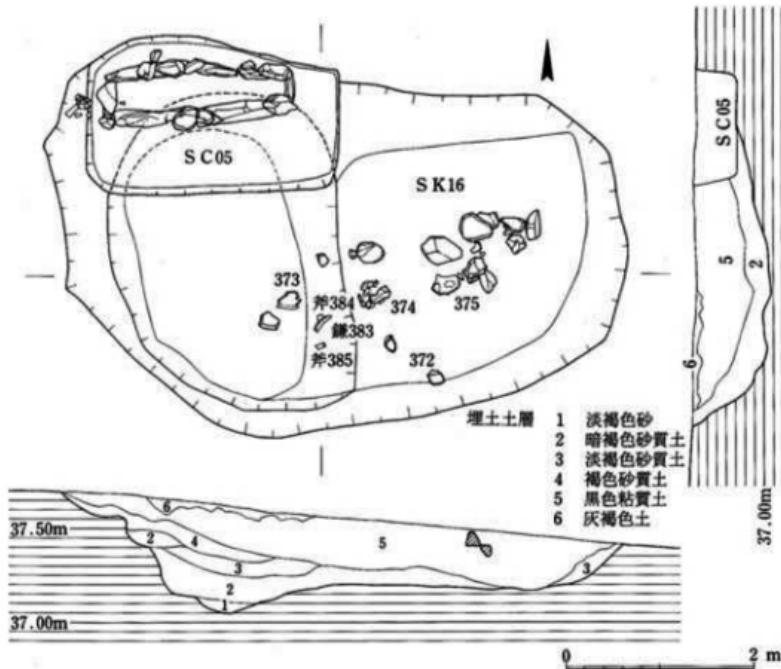


Fig. 87 SK16土壤 (Jg)

## 2. 古墳時代

古墳5基と土壙墓1基がある。そのうちS T01古墳は主体部が調査区外にあたり、墳丘一部のみ調査した。また、土壙墓はS T35古墳に近接する1基のみで、奈良時代以降に続く形跡もない。遺構一覧表Tab. 11

Tab. 11 古墳一覧表

( ) は推定

遺構番号	墳丘		外部施設	内部主体			出土遺物	備考
	形態	規模m		形態	方位	石室規格m		
S T01	円墳	22	周溝	(横穴式石室)			須恵器・土師器	墳丘一部調査
S T02	(円墳)			横穴式石室	N3°E	4.70	2.50×1.78	須恵器・土師器 刀子1
S T03	( )			〃	N14°E	2.36	1.68×1.56	須恵器・土師器
S T04	円墳	15.6	周溝	〃	N62°E	3.98	2.21×2.0	須恵器・土師器 鏡4
S T18	(円墳)			〃	N29°W	2.6	1.64×1.58	須恵器・土師器

## (1) 古墳

## S T01古墳 (Fig. 62, PL. 75)

調査区の北端に墳丘と周溝の一部がかかる。調査は主に周溝と墓道一部に限られ、石室は調査区外にあって保存された。

墳丘は径約12mの円墳である。主体部は比較的古式の横穴式石室と推定され、墳頂部に天井石の一部とみられる花崗岩礫が露出している。

周溝は黒色土を掘り込んでいる為、検出が困難で、南側が直線的になるかと思われるが確かではない。幅約2m、深さ約0.3m。墓道は周溝と直接繋がるようである。

出土品は周溝埋土中から須恵器片、土師器片が比較的多く出土した。

築造時期は6世紀初頭である。

## S T02古墳 (Fig. 88・89, PL. 76)

S T03古墳と共に、S T01とS T04古墳に挟まれた位置にある。盛土を完全に失い、長い墓道をもつ横穴式石室の殆ど基部だけが残存する。周溝はなく、位置からみて、墳丘はせいぜい径8m程度の小円墳であったと推定する。

石室は玄室とその前面の狭道状側壁からなる。石材は全て花崗岩である。石室は奥壁が主軸に対し斜めで、東側壁がやや外に膨らむなど、基本的に長方形とはいえ変則的である。長さ2.50

m、幅は中央部で1.78m。主軸方位N 3°E。

壁体基段は奥壁2個、東西側壁各3個の石材を横長または縦長に立て、裏側基部を小礫で根固めする。2段目は奥壁側で1個のみ小口積みで残っている。玄室内には約5cm厚の砂質土を入れてから小礫を敷いている。玄門部には袖石はとくに立てず、床面に閉塞基部を兼ねた小礫5個を並べて玄室と外とを区切っている。玄門幅は1.15mである。

玄門部前面の両側には玄門と

同じ幅で築道状の側壁が西側で約0.7m伸びている。構造からみて天井石を載せるものではなく、開口部を保護するための墓道側壁にあたる。この部分には閉塞が残り、小礫が玄室側に小口を擴え積み上げられていた。

さらにこの墓道側壁から南には、前庭部と細長い墓道が9.8m伸びる。ただし前庭部と墓道は明確に区別できるものではなく、幅約3.4mの不整形な前庭に続いて幅約1mの墓道がある。墓道は石室の排水溝を兼ねるものであったかもしれない。

出土遺物は玄室西南隅で須恵器壺4点と土師器壺1点が原位置のまま検出されたほか、石室および前庭埋土中から須恵器片・土師器片が、玄室床上ちかくから刀子1点が若干出土した。築造時期は7世紀前半である。

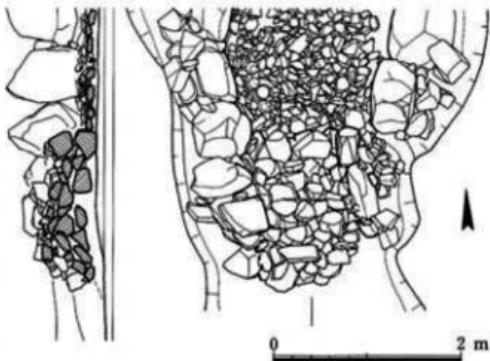


Fig. 88 ST02古墳石室閉塞状況 (%)

#### S T 03古墳 (Fig. 90・91, PL. 77)

S T 02古墳に近接する。主体部は小型の横穴式石室である。削平により盛土を完全に失い、石室も基段しか残っていない。周溝はなく、位置からみて、墳丘はせいぜい径8m程度の小墳であったと推定する。

石室は方形の玄室のみである。長さ1.68m、幅1.56m。主軸方位N 14°E。石材は全て花崗岩である。

壁体基段は奥壁2個、両側壁各2個で、奥壁1個を横長に立てている以外は縦長に立てて使用している。また西北隅には一部2段目の石積みが残る。玄門部は両側に袖石状の石を立てているが、いずれも石材は小さく、その上に2段目以上を積んで上石を架するほどのものではない。

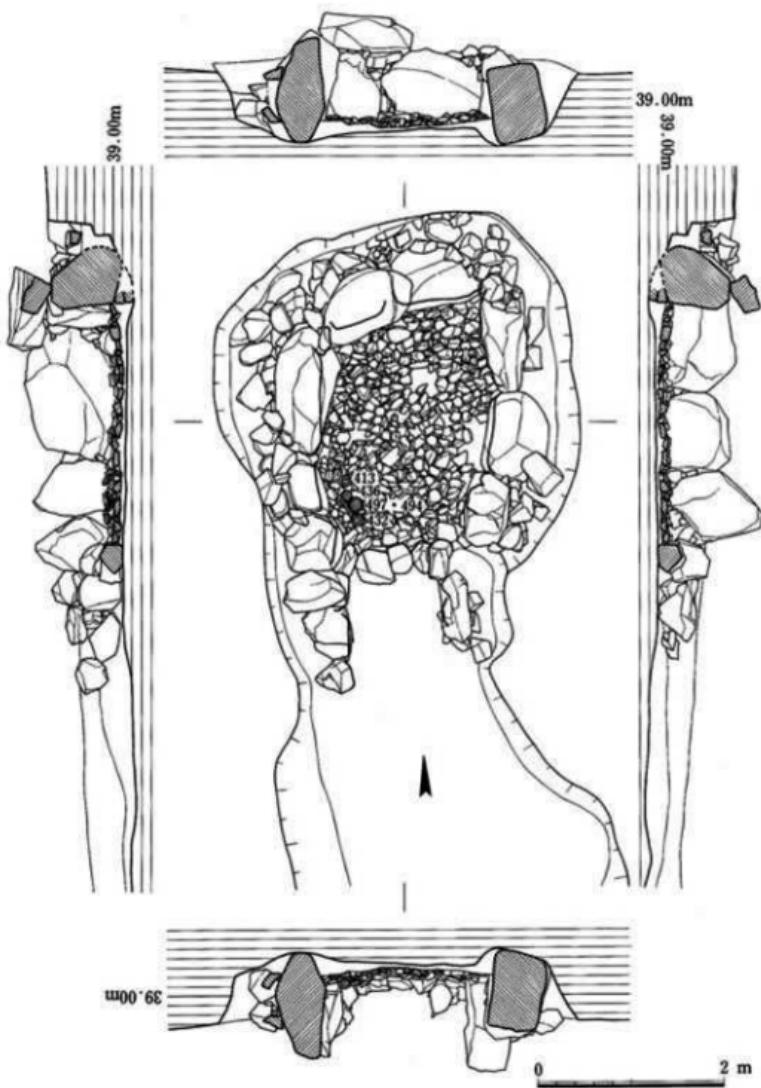


Fig. 89 S T02古墳石室 (上)

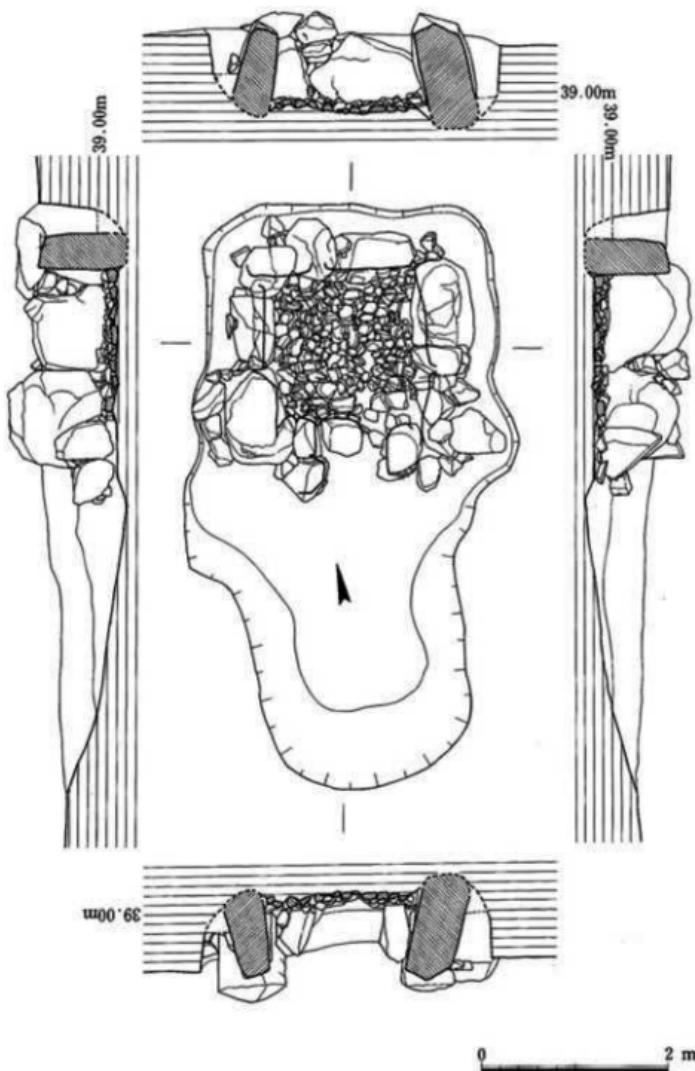


Fig. 90 S T03古墳石室 (39)

## 礫石B遺跡

い。実質的には閉塞の用をなす程度であろう。玄門床上には礫を1個置いて玄室と外とを区切っている。玄室内は礫床である。なお、各基段石材は基部を掘り込んで据え付け、多少の礫を根占めに用いながら、主に土で埋込めをしている。

閉塞は玄門部に若干残っていた。下部に土を置き、その上に小礫を積み上げている。

基壇は全体として羽子板形を呈し、石室前面のわずかな閉塞空間から続いて舌状の掘り込みが約2.2m伸びる。壇底は南側にゆるやかに上がっており、墓道としての機能をもつものであろう。

出土遺物で原位置を保つものはなく、玄室および墓道埋土から土師器片・須恵器片が数点出土した。

須恵器は8世紀前半、土師器は10世紀～14世紀の再利用期のものであるが、築造時期は7世紀後半と推定する。

## S T 04古墳 (Fig. 92～97, PL. 79～83)

礫石A・B両遺跡の古墳の調査で唯一、墳丘が残っていた。横穴式石室を主体部とし、周溝をもつ円墳である。

墳丘は石室主軸上で径15.6m、周溝外側で測れば21.5mとなる (Fig. 92)。周溝は幅約3m、深さ約0.3mで、元々浅いため、南側は表土流失に伴い切れてしまっている。これらの数値については石室を含めた古墳の全体設計に関わるので、後でもう一度検討する。なお、周溝東側では同溝と接続して浅い溝が約4m伸びているが、いかなる機能をもつかは不明である。埋土は周溝同様に黒色土がつまっていた。

墳丘は残りのよい東側で外見は段築状を呈すが、全体の盛土段面を見る限りでは、とくにそのような形跡はない。盛土は大きく分けて、石室構築に伴う控え積みとその他の墳丘盛土とに分けられる (Fig. 93)。前者はいわゆる第1次マウンドとも呼ぶべきもので、石室の壁体石積み

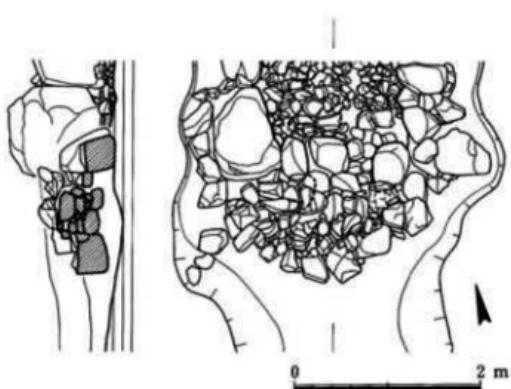
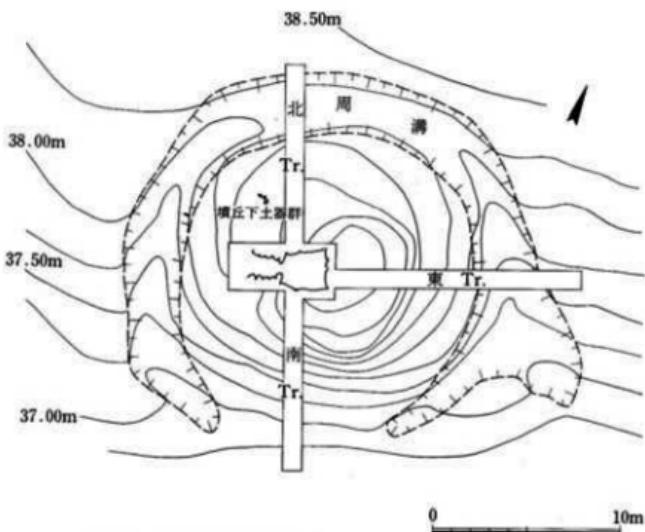


Fig. 91 S T 03古墳石室閉塞状況

Fig. 92 ST 04古墳埴丘 ( $\gamma_{\text{soil}}$ )

と併行して作業を進め、天井石が載る頃には石室を覆うだけの小マウンドの観を呈していたと思われる。土質は地山の黄褐色砂質土系が多用されているが、これは壁体石積のための裏込めという目的から腐植土を避け、しまりのよい砂質土を選んだということであろう。また後者の埴丘盛土は黄褐色砂質土系を混じえながらも暗褐色砂質土系と黒色土系が主体である。土層は、1回の盛土作業単位を示す断面レンズ状の縞文様が前者以上にはっきりしている。盛土流失の南側は別とし、埴端部にも黄褐色砂質土系がみられるが、これは盛土の流失を防ぐために裾部を固める意味があったかと考えられる。あるいは元々、埴丘表面をより清浄な黄褐色砂質土系で覆っていたとすれば、その残存にあたるものかもしれない。

なお、埴丘下の支石基を断面でみると、このST 04古墳が造られる頃には、多くはまだ地表に露出していたと思われる。したがってそれらは古墳の石室構築の際に殆どが転用された可能性が強い。もっとも、それ以前にも遺跡東南部の弥生時代石棺の用材に一部使われたものがあったと推測する。

石室は玄室と羨道からなり、全長3.98m (Fig. 94)。玄室は奥壁幅がやや広い台形で主軸長2.21m。幅は中央で1.95m、奥壁で2.08m。羨道は主軸に対し北に曲がって開口部でやや開き、長さ約1.4m、中央幅約1.1m、高さ約1.2m。主軸方位N62°E。石材は玄室床面の敷石が安山岩板石である以外は全て花崗岩である。

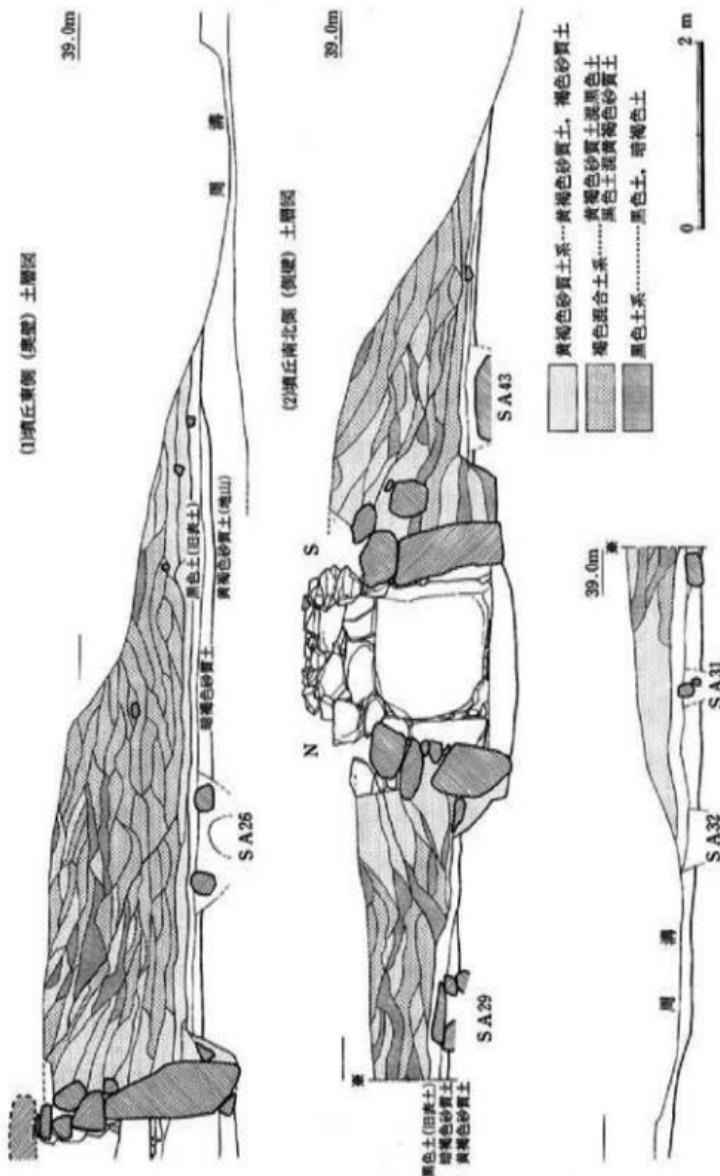


Fig. 93 ST04古墓丘断面图

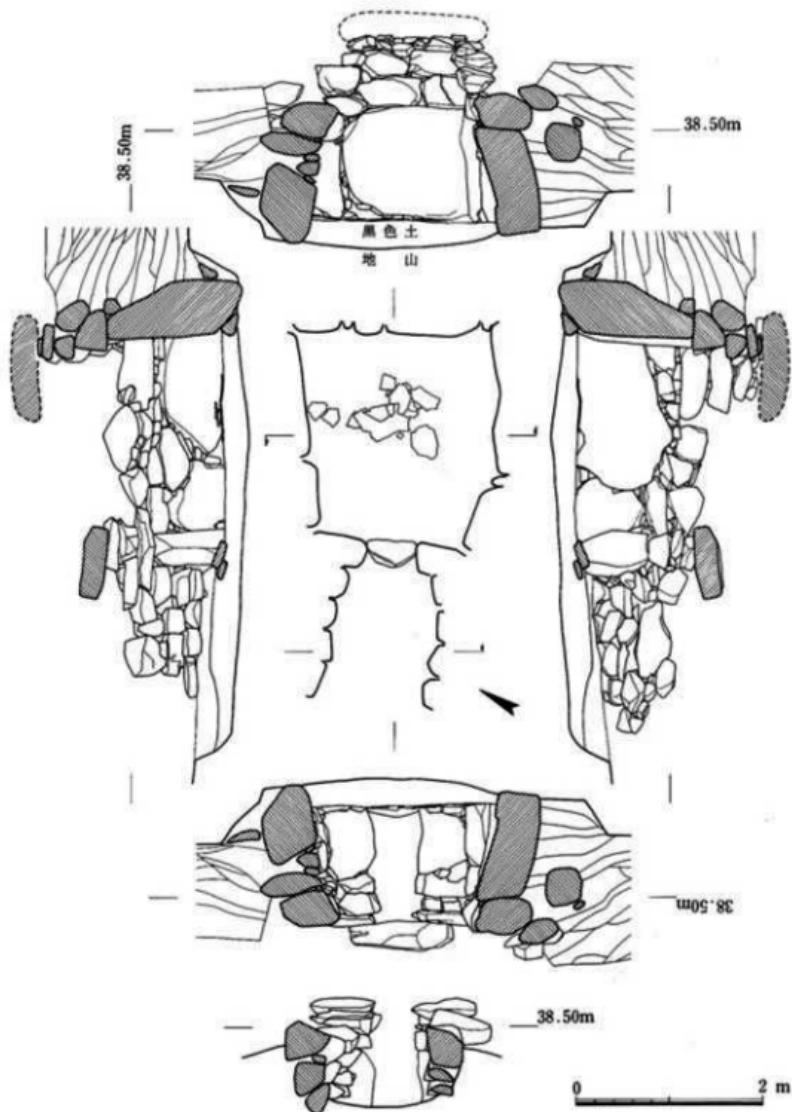


Fig. 94 ST04古墳石室 (3/6)

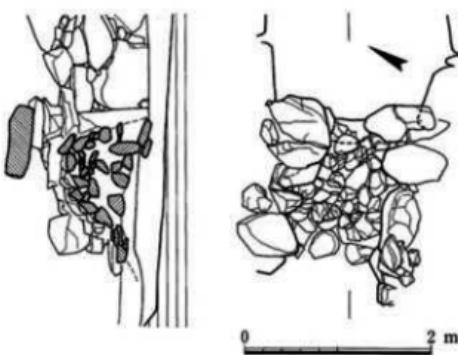


Fig. 95 S T04古墳石室閉塞状況

たらしく、中央付近に一部残っていた。この石材は実はS A32支石墓の土壤石蓋と同じもので、おそらく石室構築の際に転用されたものであろう。

玄門部は両側に袖石を立て、さらに礫を3段平積みし、樋石を架ける。幅は狭く約0.5m、高さ1.24m。床面には薄い平石を2個重ねて簡単な樋石としている。

後道は両壁ともやや雑な造りで、玄室基段より約0.4m高い位置から小礫を積み重ねている。各石材間は隙間が多い。

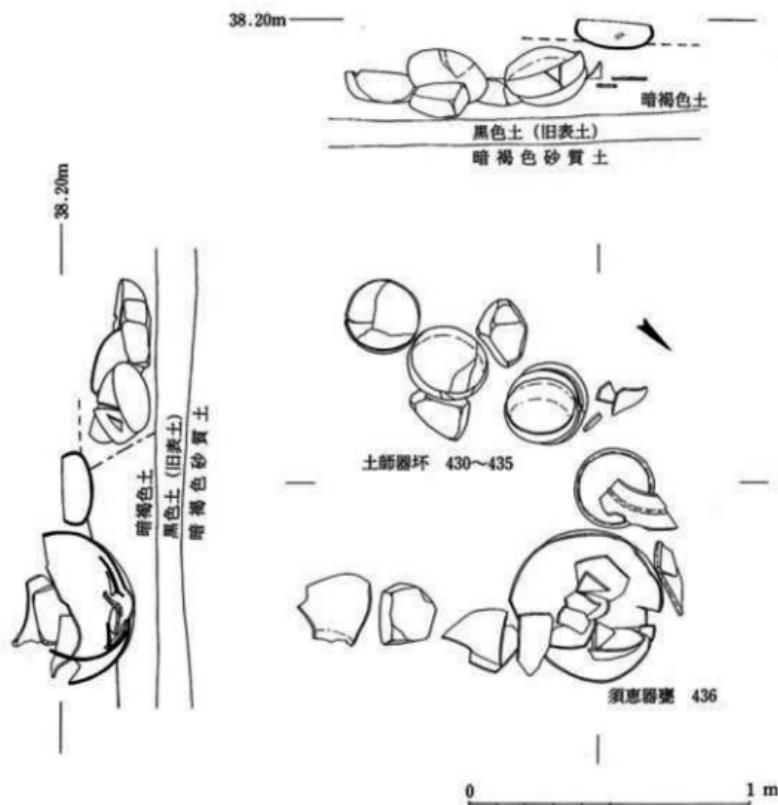
なお、基段各石材は墓壙底に直接据え付け、石室内に黒色土を約0.2m盛って床面をつくっている。裏込めは殆ど礫を使わず、主に土だけで、石材を押えている。墓壙は西側ではっきりせず、全体に不整形であるが、基本的には隅丸長方形の掘形とみるべきであろう。

閉塞は後道を埋めつくしながら、比較的よく残っていた(Fig. 95)。玄室側に倒れていた石材から推定すると、玄門部に板石を数枚立てながら開口部側に小礫と土を積み上げていったようである。最終的な追葬は玄門部で行われたことを示している。

出土遺物については、石室内では埋土中から若干の須恵器片・土師器片と鐵鏃残欠4点が出土したにすぎない。注意されるのは石室開口部の北側で明らかに盛土下に埋め込まれた一群の須恵器と土師器である(Fig. 96)。須恵器甕1点を東北端に置いて土師器壺6点が並べられ、うち3点は重ねられた状態であった。甕は割れて検出されたが、ほぼ完全に復元できたので、元々完形のまま置かれ、土盛りの際に破損したと考えてよかろう。壺1点をのぞいて、他は旧表土上から若干浮いたレベルにある。

このような出土状況からみて、この一群の土器は古墳築造に関わる儀礼であることは明らかで、とくに石室構築に直接関係するものであろう。おそらく石室がほぼ完成した時点で、石室開口部北脇の第1次マウンド裾を廻るように並べられたものと考える。儀礼の内容を推測する

壁体は玄室の場合、まず基段で奥壁に巨石1個ともう1個を補助的に立て、両側壁は大きめの石材を各2個ずつ横長に立てている。2段目以上は比較的小さめの石材を用い、3~4段小口積みにする。各石材間には小礫をつめ、作業は丁寧である。天井石はおそらく2個と推測する。1個は奥壁側に遺存していたが、落下の危険があるため、調査前に取り外した。床面には安山岩系の板石が敷かれてい

Fig. 96 ST04古墳墳丘下土器出土状況 (J<sub>20</sub>)

のは困難であるが、死者の靈が鎮まるべき石室が一定程度完成し、あとは盛土によって封じ込められ、この世と隔絶した死者の奥津城へと変わっていくとなれば、その奥津城に対する一種の畏怖の念から、石室の完工にあわせてとり行われた儀礼があったとしてもさほど突飛な行為とは思わない。そして重要なことは、古墳の築造工程そのものが、一連の埋葬儀礼の中に含められていたということである。ただしこれらの土器が供獻と呼ぶにふさわしいかどうかとなると、むしろ否定的である。壺1個に碗6個というセットから憶測すれば、濁酒等の飲料の入った壺を囲む6名程の儀礼参加者の姿も想像でき、供獻というよりは、一種の飲食儀礼の執行に使用された容器の事後処置という感をつよく受けるからである。

## 櫻石B遺跡

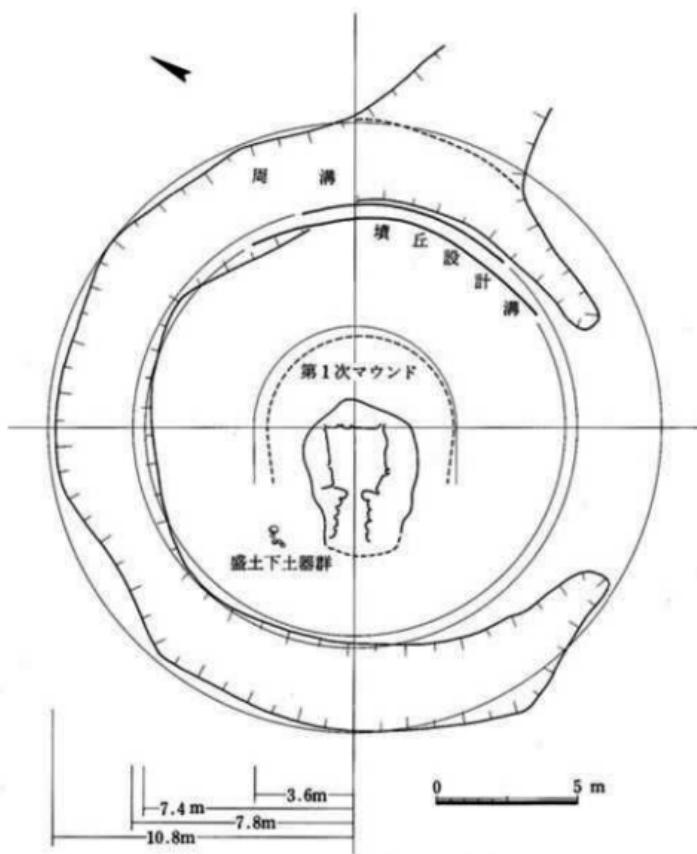
類似する例は九州では北九州市東官ノ尾第5号墳、福岡県犀川町山賀古墳、同須恵町乙植木2号墳等のほか、ちかくは佐賀市金立開拓ST024古墳や丸山ST004古墳などがあり、いずれも横穴式石室の導入期にあたっている。その点からも堅穴式石室から横穴式石室へ移行するこの時期、石室を封じめることに対する特別な意識がまだ一部に残存していたとみることができる。

その他、本墳の築造について重要な事実が一つある。墳裾部西側で検出した墳丘設計溝の存在である(Fig. 63)。これは古墳盛土を取り除き、旧表土面を削りながら支石墓の墓壙検出作業を行っていた際に気付いたものである。黒色土中に掘り込まれた幅・深さとも5cm前後の小溝で、かすかに色別できる暗褐色土がつまっていた。この小溝は約40cm間隔で2重に墳裾東側を約 $\frac{1}{4}$ 周し、墳丘中心からその両端は周溝内に消えてしまい、西側でも検出できなかった。東側残存部に関する限りでは周溝の内側に入り、盛土によって覆い被された溝である。おそらくこの2重溝は元々幅約50cmの1本の溝で、両側から鋤先で切り込みながら1周させていたものと推測する。検出時に上面がある程度削平された結果、鋤の刃先があたって若干深く掘られた両縁だけが、たまたま東側で残ったのではないだろうか。いずれにせよ、本墳が一定の基本設計に基づいて築造されたことは明らかである。

この設計溝と周溝および石室の位置関係から、古墳築造の全体的な基本設計を以下のとおり推定する。(Fig. 97)。まず、墳丘の中心は石室奥壁の中心点にあり、この点を中心に石室の位置、墳丘範囲、周溝外線が全てきめられる。唯一、石室墓壙だけが不定式にみえる。先の設計溝は墳丘盛土と周溝掘削に先立って、墳丘範囲を明示するものであったことになる。奥壁側で測って、この中心点から設計溝外側まで7.8m(内側まで7.4m)、周溝外側まで10.8mの円を描く。周溝幅は3.0mである。したがって全体の比率でいうと、設計溝外側で測った墳丘径は周溝幅の2.6倍、削平を考慮すると周溝幅は外側にかなり広くなり、墳丘径の2分の1にちかくなるが、しかしこれからはとくに明確な意味は認めがたい。明らかなことは石室奥壁中心点が墳丘設計の基準点になっていることである。また仮に、これに尺の使用を想定した場合、東魏大尺(1尺=36.0cm)をもって、20尺あるいは30尺にちかいいわば完数が得られるかのようにみえる。さらに石室玄室でみると長さ2.21m、奥壁幅2.08mは東魏尺の6尺(2.16m)にかなりちかい。しかしながら、東魏尺自体が6世紀末の一部の横穴式石室構築に使用された可能性がつよく指摘されているといえ、未だ定説をみず、まして本墳のように6世紀初頭に遡る古墳にそのまま当てはまるかどうかは問題があるので、ここではあくまで比較値として挙げておく。

設計溝の類例は最近、千葉県市原市人形塚前方後円墳でも知られている。

なお墳丘設計とは直接関係ないが、石室構築に伴う第1次マウンドは墳丘径のほぼ半分を占め、盛土下出土土器群はこの第1次マウンドの裾部に置かれていたことが平面図の位置関係からよくわかる(Fig. 97)。

Fig. 97 S T 04古墳設計復元図 (J<sub>20</sub>)

## S T 18古墳 (Fig. 98, PL. 78)

横穴式石室を内部主体とする。削平により盛土を完全に失い、石室も基段一部までしか残っていない。

石室は玄室のみの構造で、小型かつ全体に造りが雑である。石材は全て花崗岩である。玄室は平面台形にちかく、長さ1.64m、幅は中央で復元1.58m。主軸方位N29°W。壁体基段は主に東側壁しか残っていないが、抜き跡から奥壁3個、東側壁5個まで確認できる。各石材は基部

礎石B遺跡

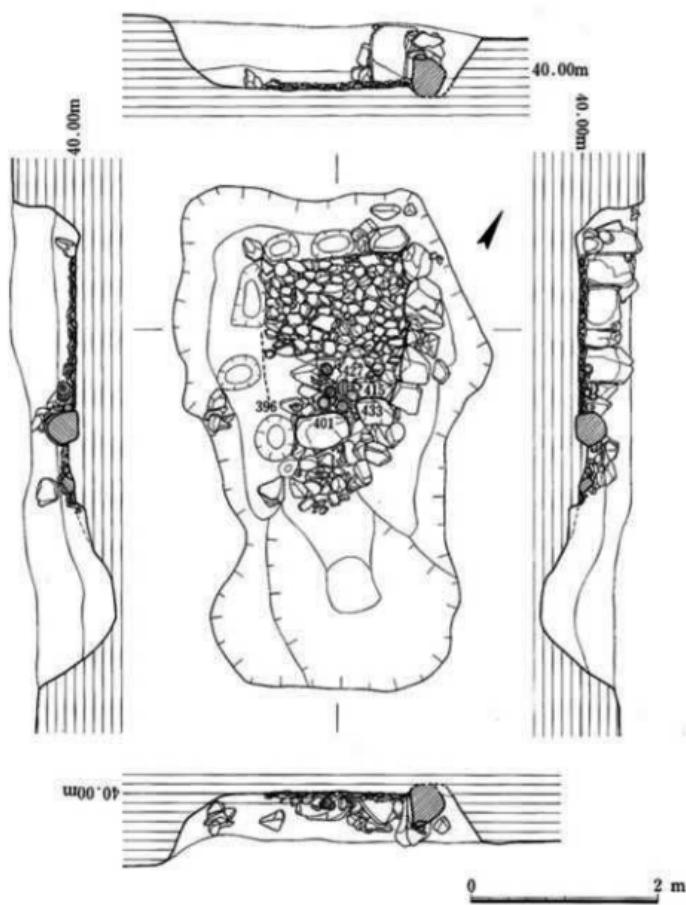


Fig. 98 S T18古墳石室 (3/6)

を若干掘り込んで据え付け、基段にしては小さめの石材を縦長に立てて使用している。玄門部では両側に袖石にあたる小さな石材を立て、樋石を挟む。玄室内床面は躙敷きである。玄門部前面には閉塞の小砾が若干残っていた。

墓壇は基本的に羽子板形を意図して掘られたと思われるが、全体に不整形である。石室前面の前庭部は鍋底状に深くなっている。

出土遺物は玄室入口部の床上に須恵器平瓶2点・壺蓋2点・壺身1点、土師器壺蓋1点・壺身1点がかたまっていたほか、石室および前底部埋土中から数点の須恵器片・土師器が出土した。

築造時期は7世紀前半である。

## (2) 土塼墓

### S P17土塼墓 (Fig. 96, PL. 74)

S T18古墳から南へ約7m離れ、単独で位置する。S T18との密接な関係が推測される。上面はやや削平されている。

墓塼は隅丸三角形とでもいべき形態で、検出面での長さ1.34m、最大幅1.03m、深さ0.33m。塼底は平坦でなく、全体に西北側に向って上がる。頭位は傾斜上方の西北側とみればS 45°Wである。埋土中に花崗岩礫が数個含まれていたが、用途は不明である。

出土遺物は中央やや東南寄りで塼底から10~20cm浮いて、須恵器壺蓋・身がセットで出土した。ただし蓋は身から離れて反転しており、必ずしも原状を保つとは言いかたい。

時期は7世紀中頃である。

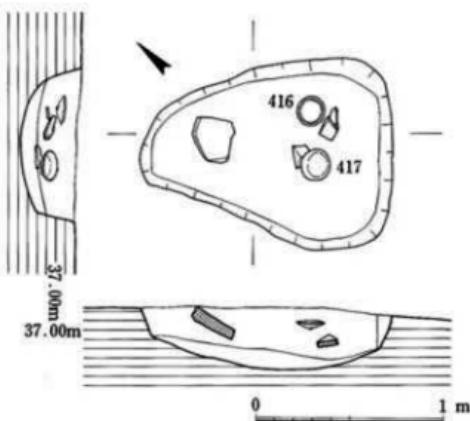


Fig. 99 S P17土塼墓 (V<sub>2</sub>)

### III. 遺 物

S T04古墳下の支石墓から出土した弥生土器が主体を占める。他に古墳および土壤墓、甕棺墓、石棺墓、土壤出土の遺物が若干ある。時期は縄文時代から奈良時代にわたる。

縄文時代では早・前期の土器片がS T18古墳西側付近から比較的多く、また晩期の土器片が調査区の西側付近等から出土したほか、若干の石器がある。ただし縄文晩期の土器については弥生前期土器との関係で扱うのが適当と考え、弥生時代の項であわせて述べることにする。

縄文晩期～弥生前期では支石墓関係の壺棺23基と供獻および副葬の土器・玉類、土壤出土および表探の土器等がある。弥生後期には甕棺2基とその副葬鏡、石棺墓出土の鉄鐵・土器、および土壤出土の土器・鉄器等がある。中期の土器もみられるが、点数は少ない。

古墳時代では須恵器・土師器と若干の鉄器がある。時期はS T01・S T04古墳出土品に6世紀初頭まで遡るものと含むが、全体に7世紀代が多く、一部、追葬期の奈良時代に入るものが共存する。

#### 1. 縄文時代

早・前期の土器と若干の石器について述べる。晩期の土器は弥生前期の土器とあわせて後述する。

##### (1) 早・前期の土器 (Fig. 100~109, PL. 86~93)

縄文時代早・前期の土器はB地区からまとまって出土した。A地区では2・3点の出土であり本報告では提示していない。集石出土の土器群を除けばほとんどが表土・古墳盛土・周溝埋土などからの出土であり、オリジナルな包含層といったものは調査時に把握されていない。出土土器のうち文様・時期の判別できるものが300点近く出土しており、うち264点を実測した。

時期的には押型文土器を中心とする一群と曾畠式系土器を中心とする一群に大別される。条痕文土器はそれぞれこのいずれかに伴うものである。この中で集石出土の土器は出土状況に不明な点はあるものの前期の様相の一端をうかがう資料として貴重である。

今回の報告では出土土器を文様構成を中心に以下のように大きく7つに分類し、さらに文様・施文・調整等によってさらに細分して説明を加えた。遺物一覧表 Tab. 12

第I群土器	押型文土器	第III群土器	燃糸文土器
第II群土器	無文土器	第IV群土器	陸帶文土器
第V群土器	沈線・刺突文土器	第VII群土器	貝殻帶状列点文土器

## 第VI群土器 条痕文土器

## 第I群土器 (Fig. 100~103—1~94)

第I群土器とした押型文土器はST04古墳周辺からまとまって出土している。明確な包含層は特定されていない。ST04古墳周辺で検出された黒色砂層がオリジナルな包含層だった可能性がある。出土点数は約100点あり、このうち94点を図化した。外面に横円文をもつものが89点、山形文をもつものが5点と圧倒的に横円文をもつものが多数を占める。ここでは口頸部・胴部に分けて分類した。口頸部は資料が限られるため内面の文様によって分類し、胴部は文様帶の施文方向によって分類した。

## &lt;口頸部a類&gt;

口頸部内面無文のもの (1~3)。

## &lt;口頸部b類&gt;

口頸部内面に横位の帯状施文を行うもの (4~10)。

## &lt;口頸部c類&gt;

口唇部内面から口頸部内面にかけて「原体条痕」を施す。「原体条痕」の方向によって2つに分類。さらに「原体条痕」を1段施すものと2段にわたって施すものにも分類する (11~36)。

1. 垂直に「原体条痕」を施す。1段のもの (11~19)。2段のもの (20~28)。

2. 斜位に「原体条痕」を施す。全て2段である (29~36)。

## &lt;口頸部d類&gt;

口唇部内面から口頸部内面にかけて「原体条痕」をほぼ垂直に施し、その下位に横位の帯状施文を行うもの (37~39)。

## &lt;胸部e類&gt;

横位の密接帯状施文を行うもの (40~46)。

## &lt;胸部f類&gt;

縦位の密接帯状施文を行うもの (47~51)。

## &lt;胸部g類&gt;

斜位の密接帯状施文を行うもの (52~69)。

## &lt;胸部h類&gt;

規則的な施文方向をもたないもの (70~94)。

## 第II群土器 (Fig. 103~95~100)

無文部をもつ土器の破片ではなく、無文土器と判断できるものは13点出土した。外面はナデ仕上げであるが条痕の残っているものもある。他の土器と比べて全体に器壁が厚ぼったい点が

最大の特徴である。器形は直口し第I群土器に伴うものと考えられる。

#### 第III群土器 (Fig. 104—101~103)

口頸部が3点出土した。器形は口頸部がゆるやかに内湾気味に外反する深鉢である。口頸部内面に第I群c類1と同様の「原体条痕」を施している。外面は撫糸文を施文する。撫りがゆるくはっきりしない。

#### 第IV群土器 (Fig. 104—104~110)

8点出土した。全て貼付隆帯文を頸部外面に数条めぐらせる土器である。105・211は頸部以下にも縦位に貼付隆帯文をもつ。器形はゆるやかに外反するビーカー状のものであろう。隆帯は105・211以外太目で丸く断面カマボコ状である。隆帯の数や刺突文・沈線文等といった他の文様をもつかは全体の把握できる資料が出土していないため不明である。内面の横位の条痕を残し、外面はナデ仕上げ。105・211は胎土・焼成とも他と異なり搬入品の可能性がある。

#### 第V群土器 (Fig. 104~106—111~166, Fig. 109—212・213・229・230)

沈線文を主文様とする。量的には第I群土器に次いで多いが小破片が多く73点を図化したにとどまった。バリエーションが豊富でありながら大部分が小破片で器形や文様構成を十分考慮して分類することができなかった。そのため本来同一土器でありながら別々のものとして分類した場合もあると思われる。ただし沈線文は幅2mm以下の細沈線と幅3mm前後の沈線に分けることができる。前者はa・b類に後者はc～j類に多用されている。器形の知れるものは154の1点であるが恐らく基本的には同一のものであろう。

##### 〈a類〉

口頸部外面に弧線文・曲線文をもつもの (111~114)。

##### 〈b類〉

口頸部外面に数本の並行する横位の沈線をめぐらし、頸部以下に斜位の沈線を施すもので条痕が残る (115~118・213)。

##### 〈c類〉

口頸部のいわゆる第I文様帶に短沈線状の列点文が綾杉状に施文され、内面にも三列の平行短沈線をもつ。頸部以下の文様は次のd類の可能性が高い。ただしこのc類には滑石は混入されていない (119・120)。

##### 〈d類〉

胎土に滑石を含むものが多い。全て頸部以下の資料である。横位・斜位・縦位の沈線文を組み合わせて単位文様とし横位に展開するものである。内面には条痕が残る (121~132・229・

230)。

〈e類〉

全て胴部資料である。長い沈線文で綾杉状の文様を構成する。内外面ともに横位の条痕が残っている (133~135)。

〈f類〉

全て胴部資料である。縦位・斜位・横位の長い沈線文をもつもので明確な幾何文様を構成しないものである。内外面ともに横位の条痕が残る (136~146)。

〈g類〉

全て胴部資料である。長い沈線文で格子状の文様を構成している。147・148と149~151ではまた文様のニュアンスが異なるかもしれない。内外面とも横位の条痕が残る (147~151)。

〈h類〉

主に横位の沈線文によって構成される。いわゆる第1文様帯をもっていない。胎土に滑台を含み、内外面ともナデ (152~154)。

〈i類〉

口頭部は横走する沈線と刺突文、胴部は地文化した縦位・斜位の沈線文で構成されるものでいわゆる「曾晳(新)式」に該当するものである。157~159は同一個体である。内面に条痕が残り、胎土には滑石を含まない (155~166)。

〈j類〉

外面を主に横走する沈線文によって構成され、口頭部内面に複線弧文をもつ。内面ナデで外面に縦位の条痕を残す。いわゆる「轟C・D式」に該当するものである (212)。

### 第VI群土器 (Fig. 106~108—167~209)

主に条痕文によって文様を構成する土器群である。大きく第I群土器に伴うか後続するもの (a~d) と第V群土器に伴うもの (e) に分類できる。

〈a類〉

いわゆる円筒型条痕文土器の口頭部である。口頭部が直口し、器壁が厚ぼったい。内面横位のヘラ状ナデ (167)。

〈b類〉

口頭部外面に条痕文が横走するもの。口頭部がゆるやかに外反する。内面に横位の条痕を残す (168~171)。

口唇部のキザミの有無によって2つに分かれる。

1. キザミを持たないもの (168)。

2. 口唇部外面にキザミをもつもの (169~171)。

## 礫石B遺跡

### 〈c類〉

口唇部にキザミをもつ。口頸部外面を条痕文が横走し、頸部以下に綾杉状(?)に斜走する。口頸部はゆるやかに外反し、内面に横位の条痕を残す(172~174)。

### 〈d類〉

全て胴部の資料であり、器形ははっきりしない。内面は横位の条痕を残し、外面は波状・格子状の条痕文を施文するものである。175~180・181~186は同一個体である(175~180)。

### 〈e類〉

荒い条痕文を口頸部外面では横位に施す。頸部以下は不規則な条痕文によって文様を構成している。胎土・焼成・色調とも異なる。口頸部がゆるやかに外反するものと内湾気味に外反するものがあり、底部は平底に終るものである(190~209)。

## 第VII群土器 (Fig. 108~210, Fig. 109~227・228・234)

4点出土した。器面の内外面にアナグラ属などの貝殻縁を連続押圧することによって施文された帶状列点文によって文様を構成するものである。口頸部は直口かやや内湾気味である。

### 〈a類〉

隆帯をもたないもの(210・227・228)。

### 〈b類〉

隆帯をもつもの(234)。

## 集石出土土器 (Fig. 109)

S T04古墳の西側と東側で集石が各一基ずつ検出された。出土土器は集石出土で一括して取り上げられており、その出土状況は必ずしも明らかではないがバラエティに富んでいる。礫石遺跡における前期の様相を知る手掛りの1つになるのではないか。

## 西側集石出土土器

第IV群土器(211)・第V群土器j類(212)・第V群土器b類(213)・第V群土器i類(214~220)・第V群土器f類(221~222)・第VI群土器e類(223~226)・第VII群土器a類(227~228)

## 東側集石出土土器

第V群土器d類(229~230)・第V群土器f類(231~232)・第V群土器i類(233)・第VII群土器b類(234)

Tab. 12 繩文早・前期土器一覧表

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
100-1 86000382	直線的に開く口頭部をもつ深鉢の口頭部	淡褐色。内面ヨコナデ。口唇部上面に山形押型文。外面やや不定方向の山形押型文。山形文の1波長6mm。波幅3mm。
—2 86000351	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部	暗灰色。内面・口唇部ヨコナデ。横円押型文を縦位施文。復原径8.0mmの縦刻原体。1回転2粒。
—3 86000367	ゆるやかに外反し、口縁部さらに外へ折れる。深鉢の口頭部。	灰褐色。頭部内面ナデ。口縁部内外ともナデている。施文方向不明。横円文12×15mm。
—4 86000394	ゆるやかに外反する深鉢の頭部。	灰白色。内面に復原口径6.5mmの横刻複合菱形文を横走。原体長19mm(?)。外面に復原口径5.4mmの縦刻原体を横走。1回転2粒。胎土・焼成とともに他の押型文土器と異なる。南九州的。
—5 86000378	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	黄灰。頭部内面ナデ。内外面・口唇部ともに同一原体使用。内面横走。外面横走。外面に復原口径7.3mm原体長22mmの縦刻原体。6~7mm×10mmの横円文。1回転2粒。
—6 86000500	頭部がややふくらみ、口頭部がやや外反する深鉢。頭部。	灰褐色。頭部内面ナデ。内外面ともに同一原体を使用している。内面横走。外面左上よりの斜走。復原口径8.3mmの縦刻原体。横円文6mm前後×10mm前後。1回転3粒。
—7 86000388	直口気味の深鉢の頭部。	黄褐色。頭部内面ナデ。内外面ともに同一原体と思われる。内外面ともに横走。復原口径5.7mmの原体。6×6mmの横円文。1回転2粒。
—8 86000365	直口気味にやや外反する深鉢の口頭部。	茶褐色。頭部内面ナデ。内面は、復原口径5mmの縦刻原体の連珠文。外面は完全に重複施文されており詳細不明。
—9 86000361	円筒状の器形をもつ深鉢の口頭部。	赤褐色。頭部～胴部内面ナデ。口頭部内面には縦刻原体の平行文。外面はほぼ横走する縦刻原体の横円文。
—10 86000364	円筒状の器形をもつ深鉢の口頭部。	9と同一個体か同種の土器である。
—11 86000393	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	淡褐色。内面縦位の「原体条痕」。長さ22mm、幅2mm。外面横円文だが詳細不明。口唇部ナデ。
—12 86000374	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	黄褐色。頭部内面ナデ。内面縦位の「原体条痕」。長さ12mm、幅5mm前後。口唇部ナデ。外面は復原口径8.3mmの縦刻原体を斜走。6×9mmの横円文。1回転2粒。
—13 86000379	ゆるやかに外反する深鉢の頭部。	赤褐色一部褐色。頭部内面ナデ。内面縦位の「原体条痕」。長さ32mm、幅6mm。外面は復原口径9.9mmの斜刻原体を左上り斜走。7×10mmの横円文。1回転3粒。

## 標石B遺跡

Fig-回番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
100-14 86000368	ゆるやかに外反する深鉢の頭部。	灰色。内面縦位の「原体条痕」。外面は復原口径7.3mmの縦刻原体を横走。3×8mm前後の横円文。1回転2粒。
—15 86000353	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	赤褐色。内面縦位の「原体条痕」。外面は横円文を横走。5×8mm前後の横円文。
—16 86005799	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	赤褐色。内面縦位の「原体条痕」。外面は横円文。5~6×11mmの横円文。
—17 86000366	ゆるやかに外反する口頭部。口唇部断面三角形。	灰褐色。頭部内面ナデ。内面縦位の「原体条痕」。長さ32mm前後、幅3~5mmの外面は復原口径8.3mmの斜刻原体を左上に斜走。8×11mmの横円文。1回転3粒。
—18 86000358	脣部がやや内湾しながら外反し、口頭部がさらに外反する。	灰褐色。内面ナデで縦位の「原体条痕」。外面は復原口径7.3mmの縦刻原体を横走する。原体長は39mm、4×6mmの横円文。1回転3粒。
—19 86005751	脣部がやや張り、口頭部が外反する深鉢。	灰色。内面ナデ。内面縦位に幅4mmの「原体条痕」。外面は復原口径7.0mmの縦刻原体が縦・横位に走る。原体長は22mm、7×10mmの横円文。1回転2粒。
101-20 86000395	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	淡茶褐色。内面16mm前後の「原体条痕」を縦位に2段施文。外面無文。
—21 86000375	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	茶褐色。内面19~22mm前後の「原体条痕」を縦位に2段施文。外面は復原口径6mmの斜刻原体を左上に斜走。5~8mmの横円文。1回転2粒。
—22 86000377	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	褐色。内面縦位の「原体条痕」を2段施文。外面は縦刻原体を横走。6~8mmの横円文。
—23 86000381	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	黄褐色。内面22~24mm、幅3mm前後の「原体条痕」を2段施文。外面は縦刻原体を横走する。4.5×8.5mmの横円文。
—24 86000354	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	灰褐色。内面22mm前後、幅3.5mmの「原体条痕」を2段(3段)施文。口唇部ヨコナデ。外面は復原口径7.3mmの縦刻原体を横走。4×8mm前後の横円文。1回転2粒。
—25 86000376	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	淡褐色。内面長さ22mm前後、幅4~5mmの「原体条痕」を2段施文。口唇部ヨコナデ。外面は復原口径9.0mmの縦刻原体を横走。8×12mm前後の横円文。1回転2粒。
—26 86000359	復原口径21.9cm。深鉢の口頭～脣部。底部不明。	褐色。脣部内面へラケ茲状。長さ22~23mm前後の「原体条痕」を2段施文。外面は口縁部が横走、頭部以下が左上に斜走。原体は復元口径7.7mm、長さ31.2mmの縦刻原体である。5×6mmの横円文。1回転3粒。

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
101-27 86000352	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	赤褐色。縦位に幅3mmの「原体条痕」を施文。外面は復原口徑6.8mmの縱刻原体を縱走。7~10×10~12mmの横円文。1回転2粒。原体端部をカット。
—28 86000385	ゆるやかに外反する深鉢の頸部。	淡茶褐色。内面縦位の「原体条痕」。4~6×9mmの横円文。施文方向・原体径不詳。
—29 86000396	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	黄灰色。内面6mm前後の「原体条痕」を右上り斜位。外面は口縁部横走。頭部左上り斜走。原体は復原口徑6.8mm、波長10.7mm、波幅8mm。1回転2波長。
—30 86000369	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	淡褐色。内面幅4mm前後の「原体条痕」を右上り斜位。外面は復原口徑7.7mmの斜刻原体を左上り斜走。5~6×10mmの横円文。1回転3粒。
—31 86000389	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	褐色。内面左上り斜位の「原体条痕」。外面横円文。
—32 86000363	ゆるやかに外反する深鉢の頸部。	黄灰色。内面浅い左上り斜位の「原体条痕」。外面は復原口徑8mmの縱刻原体をやや左上りに横走。4.5×10mm前後の横円文。1回転2粒。
—33 86000357	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。口唇部断面三角形。	褐色。外面カーボン付着。内面左上り斜位の「原体条痕」。口唇部ヨコナデ。外面復原口徑8.1mmの縱刻原体を左上りに斜走。6×10mmの横円文。1回転3粒。
—34 86000379	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。口唇部断面方形。	褐色。内面左上り斜位の「原体条痕」。口唇部ヨコナデ。外面横円文。
—35 86000384	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢の頸部。	淡褐色。頭部内面ナデ。内面浅い左上り斜位の「原体条痕」。外面は復原口徑7mm、長さ33(+α)mmの縱刻原体を横走。一部縱走あり。5×9mmの横円文。1回転2粒。原体端部カット。
—36 86000355	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。	茶褐色。内面左上り斜位の「原体条痕」を2段施文。外面は復原口徑7.3mmの縱刻原体を左上り斜走。1回転2粒。
—37 86000366	大きく外反する口頭部をもつ深鉢。	淡茶褐色。頭部内面ナデ。口縁部内面左上り斜位の「原体条痕」。下に復原口徑8.0mm、長さ24mmの原体を横走。1波長12.5mm、波幅7mmの山形文。1回転で2波。外面は2種類の原体を不規則な施文。外面原体①は復原口徑6.4mmの斜刻原体。5×10mmの横円文。1回転3粒。②は復原口徑7.0mmの斜刻原体。4×8mmの横円文。1回転3粒。
—38 86000390	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢の頸部。	茶褐色。内面縦位の「原体条痕」と横走する縦刻の横円文。外面は縦刻の原体を施文。8×10mmの横円文。
—39 86000380	ゆるやかに外反する口頭部をもつ深鉢。口唇部断面三角。	茶褐色。内面2段の縦位「原体条痕」と横走する平行文。外面は復原口徑8.3mmの斜刻原体を左上り斜走。7.5×10mmの横円文。1回転3粒。

Fig-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
102-40 86000392	深鉢の胴部。	黄褐色。内面調整不明。外面は原体復原口径7.0mmの山形文を横走。1波長11mm、波幅2~3mm、1回転2波。
—41 86000391	深鉢の胴部。	淡茶褐色。内面ナデ。外面一部剥離。外面は原体復原口径7.3mmの山形文を横走。1波長11.5mm、波幅1.5~2mm。
—42 86000371	深鉢の胴下部。底部(?)。	黄灰色。内面ユビオサエ。外面原体復原口径6.0mmの山形文を横走。1波長9.5mm、波幅4.8mm。
—43 86005783	深鉢の胴部。	褐色。内面ナデ。外面は復原口径8.0mmの線刻原体を横走。8×10mmの横円文。1回転2粒。原体端部斜位にカット。
—44 86005721	深鉢の胴部。	黄褐色。内面調整不明。線刻原体を横走。5×10mmの横円文。
—45 86000398	深鉢の胴部。	淡黄褐色。内面ナデ。外面は復原口径7.6mmの線刻原体を横走。原体長は34mm前後であろう。6×10mmの横円文。1回転2粒。
—46 86005794	深鉢の胴下部。平底(?)。	淡茶褐色。内面ナデ。外面は復原口径7.3mmの線刻原体を横走。6.5×9mm前後の横円文。1回転2粒。
—47 86005790	深鉢の胴部。	内面ナデ。外面は復原口径6.9mmの斜刻(左上り)原体を左上り斜走。4~5×10mmの横円文。1回転3粒。
—48 86005792	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面復原口径6.0mmの線刻原体を横走。4×8~10mmの横円文。1回転2粒。
—49 86005716	深鉢の胴部。	灰褐色。内面ナデ。外面一部ナデ消し。外面は復原口径8.0mmの線刻原体を横走。6×9~10mmの横円文。1回転2粒。
—50 86005783	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面線刻原体を横走。
—51 86000399	深鉢の胴部。	灰褐色。内面ナデ。外面は復原口径8.0mmの線刻原体を横走。6×10mm前後の横円文。1回転2粒。
—52 86005786	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ヨコナデ。外面は線刻原体を左上り斜走。8×12mmの横円文。1回転2粒(?)。

## III. 遺物

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
102-53 86005711	深鉢の肩部。	淡茶褐色。内面ヨコナデ。外面は復原口径7.6mmの縦刻原体を右上り斜走。6×9mmの横円文。1回転2粒。
—54 86005777	深鉢の肩部。	黄灰色。内面ナデ。外面は復原口径5.8mmの斜刻原体を右上り斜走。8×10mmの菱形に近い横円文。1回転2粒。
—55 86005713	深鉢の肩部。	灰褐色。内面ナデ(?)。外面は復原口径7.3mmの縦刻原体を左上り斜走。6×9mmの横円文。1回転2粒。
—56 86005752	深鉢の肩部。	灰褐色。内面ナデ。外面は長さ22mm、径5.7mmの縦刻原体を左上り斜走。原体には4×7mm前後の横円文が5列刻まれ、1回転2粒。端部はカット。
—57 86005795	深鉢の底部付近。	灰褐色。内面ナデ。外面は復原口径5.9mmの縦刻原体を右上り斜走。5~6×7~8mmの横円文。1回転2粒。原体端部カット。胎土に角閃石混入。
—58 86005776	深鉢の肩部。	淡褐色。内面ナデ。外面横円文。
—59 86005782	深鉢の肩下部。	黄灰色。内面ナデ。外面は復原口径6.4mmの縦刻原体を左上り斜走。7×9~10mmの横円文。1回転2粒。
—60 86005720	深鉢の肩部。	茶褐色。内面ナデ。外面縦刻原体を左上り斜走。4~5×8~10mmの横円文。
—61 86005707	深鉢の肩部。	黒灰色。内面ナデ。外面斜刻原体を左上り斜走。復原口径7.6mmか。5×10mm前後の横円文。
—62 86000387	深鉢の肩部。	茶褐色。内面ナデ。外面横円文を左上り斜走。
—63 86005796	深鉢の肩部。	黄褐色。内面ナデ。外面横円文を斜走。4~5×7~8mmの横円文。
—64 86005715	深鉢の肩部。	灰褐色。内面ナデ。外面縦刻原体を右上り斜走。6×10mmの横円文。
—65 86005717	深鉢の肩部。	灰褐色。内面ナデ。外面は縦刻原体を左上り斜走。一単位5×7mm前後の連珠文。

Fig. 図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
102—66 86005718	深鉢の胴部。	褐色。内面ナデ(?)。外面は縦刻原体を右上り斜走。4×8~9mmの横円文。
—67 86005702	深鉢の胴部。	灰褐色。内面ナデ。外面は復原口径7.6mmの縦刻原体を左上り斜走。7×10mmの横円文。1回転2粒。胎土に角閃石を含む。
—68 86005787	深鉢の胴部。	褐色。内面ナデ。外面は復長さ2.5mm、復原口径6.7mmの縦刻原体を左上り斜走。連珠文。原体端部は切り落とし。
—69 86005714	深鉢の胴下部。	淡赤褐色。内面ナデ。外面は横円文。4×6~7mmの横円文。
—70 86005719	深鉢の胴部。	淡茶褐色。内面ナデ。外面は横円文。4×6~7mmの横円文。69と同一個体か。
—71 86005780	深鉢の胴部。	外面淡褐色内面灰色。内面ナデ。外面は復原口径7.3mmの縦刻原体を不定方向に施文。5~6×9~10mmの横円文。1回転2粒。
—72 86005798	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ナデ。外面は縦刻原体の横円文を不定方向。4×7~8mmの横円文。
—73 86005710	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面5×11mmの横円文。
103—74 86005797	深鉢の胴部。	淡赤褐色。内面ヨコナデ。外面4×5mmの横円文。
—75 86005788	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面は横刻(?)原体を不定方向。5×10mm前後の横円文。左上隅には幅2.5mmの沈線が右上りに走る。
—76 86005397	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面は横円文。6×10mmの横円文。胎土に角閃石。
—77 86005785	深鉢の頭部。	黄灰~黒灰色。内面ヨコナデ。外面は横円文。4~5×10mmの横円文。
—78 86005781	深鉢の頭部。	赤褐色。内面ナデ。外面は横円文を不規則施文。4.5×6.5mm前後の横円文。

## III. 遺 物

Fig. 図番号 登録番号	形 細 の 特 徴	色 調 お よ び 技 法 の 特 徴
103—79 86005778	深鉢の胴部。	淡褐色。内面ナデ。外面は縦刻原体を不定方向。5×9mm前後の横円文。
—80 86005779	深鉢の胴部。	淡茶褐色。内面ナデ。外面横円文。
—81 86005780	深鉢の胴部。	灰褐色。内面ナデ。外面横円文。6×11mm前後の横円文。
—82 86005794	深鉢の胴下部。	淡赤褐色。内面ナデ。外面横円文。
—83 86000490	深鉢の胴部。	外褐褐色内面暗灰色。内面ナデ。外面は縦刻原体を不定方向。5.5×8.5mmの横円文。
—84 86005791	深鉢の胴下部。	黄褐色。内面ナデ。外面は横円文。8×10~11mmの横円文。外面は一部ナデ消し。
—85 86005790	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面は横円文。外部一部ナデ消し。
—86 86005789	深鉢の胴部。	褐色。内面ナデ。外面は横円文。2回重複施文。
—87 86005793	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面は横円文。一部ナデ消し。
—88 86005749	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ナデ。外面は横円文。一部ナデ消し。
—89 86005706	深鉢の胴部。	黒灰色。内面ヨコナデ。外面は縦刻原体を不定方向。6×10~12mmの横円文。
—90 86005701	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面横円文。重複施文。
—91 86005705	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ナデ。外面は縦刻原体を左上り重複斜走。10×12~13mmの横円文。原体径9.5mm。1回転2粒。

## 標石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
103-92 86005708	深鉢の副部。	褐色。内面ナデ。91と同一個体か。
—93 86005709	深鉢の副部。	黄褐色。内面ナデ。外面は縦刻原体を重複施文。4×8mmの横円文。
—94 86005712	深鉢の副部。	褐色。内面ナデ。外面は縦刻原体を重複施文。6×9mmの横円文。
—95	直口気味の深鉢の口頭部。	黄灰色。内外面ともナデ。
—96	深鉢の副部。	黄灰色。内外面ともナデ。
—97	深鉢の副部。	黄灰色。内面ナデ。
—98	深鉢の副部。	黄灰色。内外面ともナデ。
—99	深鉢の副部。	黄灰色。内外面ともナデ。
—100	深鉢の副部。	黄灰色。内面ナデ。外面条痕後ナデ。
104-101 86000372	ゆるやかに外反し、口頭部がさらに外反する。	褐色。内面に継位の「原体条痕」を2段施文する。外面は燃糸文を左上り斜走する。R(?)の燃糸。角閃石混入。
—102 86000373	ゆるやかに外反し、口頭部がさらに外反する。	茶褐色。内面に幅4.3mmの「原体条痕」を継位に2段施文。外面は燃糸文を左上り斜走する。Lの燃糸。
—103 86000393	ゆるやかに外反する口頭部。	茶褐色。内面に継位の「原体条痕」を2段施文する。外面は燃糸文を継走。Rの燃糸。角閃石混入。全体に磨滅している。
—104 860005722	直線的に開く口頭部。	外面暗赤褐色。内面淡赤褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。口頭部ナデ。外面に貼付隕帯文が平行に3条。外面ナデ。隕帯は幅6~7mmで丸味をもつ。

## III. 造 物

Fig-図番号 登録番号	形 態 の 特 徴	色 調 お よ び 技 法 の 特 徴
104-105 87000961	深鉢の頭部。	黄褐色。内面ナデ。外面には幅4~5mmの貼付縫合文を5条横走。頭部以下にも4条(?)継走。
—106 86005725	深鉢の頭部。	黄褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面に幅6~7mmの横走する貼付縫合文が3条巡る。
—107 86005723	深鉢の頭部。	淡赤褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面に幅7mm前後の横走する貼付縫合文が2条巡る。
—108 86005724	深鉢の頭部。	褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面に幅8~9mm前後の横走する貼付縫合文が2条巡る。
—109 87000980	深鉢の頭部。	茶褐色。内面ヨコ条痕。外面に幅6mm前後の横走する貼付縫合文が2条巡る。胎土に金雲母。
—110 87000978	深鉢の頭部。	赤褐色。内面ヨコ条痕。外面に幅7mmの横走する貼付縫合文が1条巡る。胎土に金雲母。
—111 87000959	深鉢の頭部。	暗褐色。内面調整不明。外面に幅1.5mm前後の沈線文を横位のゆるやかな波条に施文している。
—112 87010122	深鉢の頭部。	外面淡褐色。内面茶褐色。内面ナデ。外面ヨコ条痕後ナデ調整。弧線文をもつ。
—113 87000998	深鉢の頭部。	茶褐色。内面ヨコケズリ後ナデ。外面に2mmの弧線文と平行沈線を組み合わせている。胎土に滑石を含んでいる。
—114 87010117	深鉢の頭部。	外面褐色。内面茶褐色。内面ナデ。外面条痕後ナデ。調整横走沈線と弧線文を組み合わせている。沈線幅1~1.5mm。
—115 87000943	深鉢の口頭部。	暗茶褐色。内面ナデ。外面条痕後ナデ調整。口縁下の横走沈線と斜沈線の組み合わせ。沈線幅2mm。
—116 87000949	深鉢の頭部。	褐色。内面ナデ。外面ナデ調整後。横走沈線と斜沈線の組み合わせによって文様を構成。
—117 87000949	深鉢の頭部。	外面黒褐色。内面褐色。内面ナデ。外面幅1mmの斜沈線。

## 礫石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
104-118 87009495	深鉢の胴上部。	茶褐色。内面ヨコ条痕後ていねいなナデ。外面ヨコ条痕後ナデ。斜沈線文。外面にカーボン付着。
—119 87009999	深鉢の口頭部。	淡褐色。内面条痕後ナデ。横位の短沈線。外面ナデ。幅2mmの短沈線による列点文。胎土に金雲母をもつ。
—120 87009951	ゆるやかに外反する口頭部。	淡茶褐色。内面条痕後ナデ。3例の横位短沈線。外面ナデ。短沈線による列点文の綾衫。胎土に金雲母をもつ。
—121 87009911	深鉢の胴上部。	暗赤褐色。内面条痕後(?)ナデ。横位の沈線下に斜沈線によって文様を構成している。胎土に滑石混入。
—122 87009910	深鉢の頭部。	赤褐色。内面ナデ。外面は横位の沈線間に斜沈線によって文様を構成している。胎土に滑石混入。
—123 87009909	深鉢の頭部。	褐色。内面ナデ。外面は横位の沈線下に斜沈線によって文様を構成している。胎土に滑石混入。
—124 87009903	深鉢の頭部。	明褐色。内面ナデ。外面は横位の沈線下に斜沈線によって文様を構成している。胎土に滑石混入。
—125 87009907	深鉢の胴下部。	赤褐色。内面条痕後ナデ。外面沈線。胎土に滑石混入。
—126 87009912	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ナデ。横位の沈線の上・下に斜沈線によって文様を構成している。胎土に滑石混入。
—127 87009906	深鉢の胴部。	明褐色。内面ヨコケズリ(?)後ナデ。外面幅3mm前後の斜沈線。胎土に滑石混入。
—128 87009905	深鉢の胴部。	明褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面横位の沈線下に幅3mm前後の斜沈線。胎土に滑石混入。
—129 87009946	深鉢の胴部。	黄灰褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面斜沈線を組み合わせて文様構成。幅2mm前後。角閃石混入。
—130 87010116	深鉢の胴部。	外面黒褐色。内面褐色。内面条痕後ナデ。浅い沈線は縱走する。外面幅4mmの横位の沈線下に斜沈線。

## III. 造 物

Fig.-図番号 登録番号	形 細 の 特 徴	色 調 お よ び 技 法 の 特 徴
104-131 8700947	深鉢の肩部。	黄灰色。内面ヨコ条痕。外面幅3mm前後の斜沈線によって文様を構成。
—132 8700948	深鉢の肩部。	赤褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面一部条痕後ナデ調整幅2~3mmの斜沈線を組み合わせ。角閃石混入。
105-133 87010153	深鉢の肩部。	赤褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕後長い沈線によって文様構成。胎土に角閃石。
—134 87009500	深鉢の肩部。	茶褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面条痕後ナデ。長い沈線によって文様構成。
—135 87009499	深鉢の肩下部。	茶褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面ヨコ条痕後ナデ。幅2mmの長い斜沈線によって文様構成。外面カーボン付着。
—136 8700953	深鉢の肩下部。	灰褐色。内面条痕。外面幅3mmの条痕後沈線。
—137 87009490	深鉢の肩部。	黄灰色。内面ナデ。外面ヨコ条痕後斜沈線。金雲母を含む。
—138 87009567	深鉢の肩部。	淡褐色。内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕後幅2mmの沈線。
—139 87009561	深鉢の肩部。	褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕後幅3mmの沈線。
—140 87009495	深鉢の肩部。	暗灰色。内面条痕後ナデ。外面条痕後ナデ。角閃石・金雲母混入。
—141 8700953	深鉢の肩部。	灰褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕後ナデ。幅1.5mmの斜沈線。
—142 87010120	深鉢の肩部。	茶褐色。内面条痕。一部ナデ。外面条痕後ナデ。継沈線。
—143 87009497	深鉢の肩部。	茶褐色。内面条痕後ナデ。外面条痕後ナデ。継沈線。

## 標石B遺跡

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
105-144 87010136	深鉢の胴下部。	黄褐色。内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕後ナデ。縦位の幅1.5~2mmの沈線。金雲母混入。
—145 87010155	深鉢の胴下部。	灰褐色。内面ナデ。角閃石混入。
—146 87010152	深鉢の胴下部。	外面淡灰褐色。内面黒褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面カーボン付着。
—147 87000956	深鉢の胴上部。	黄灰色。内面条痕。外面横沈線下に格子状沈線。
—148 87000960	深鉢の胴部。	赤褐色。内面強いヨコナデ。外面ヨコ条痕後格子状沈線。
—149 87010119	深鉢の胴部。	淡褐色。内面条痕後ナデ。外面ヨコ条痕後ナデ。幅2~3mmの格子状沈線。
—150 87010121	深鉢の胴部。	暗褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面ヨコ条痕後ナデ。幅2~3mmの格子状沈線。
—151 87010118	深鉢の胴部。	明褐色。内面ケズリ(?)。外面ナデ後格子状沈線。金雲母混入。
—152 87000962	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	褐色。内面ナデ後2列の刺突文。外面ナデ後横位の沈線文。口部キザミ。胎土に滑石混入。
—153 87000902	深鉢の胴部。	明褐色。内面ナデ。外面横走する沈線と斜沈線と斜沈線によって文様構成。滑石混入。
—154 87000914	深鉢。口頭部はゆるやかに外反し、胴部はあまり張らず底部は丸平底。	復原口径17.8cm、推定高20.8cm、暗褐色。内面ナデ。口頭部内側に横3列の短沈線をめぐらせる。外面ナデ後全面横走する沈線文が施文され、2段の連続するX字文がめぐる。外面にカーボン付着。滑石混入。
106-155 87000944	深鉢の胴上部。	外面暗褐色。内面褐色。内面ヨコ条痕。外面横走する2列の連続刺突文の上には「ハの字」状の短沈線が下にはやや左斜沈線が施文されている。
—156 87000942	深鉢の胴上部。	外面暗茶褐色。内面茶褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面に横走する沈線に縦位の短沈線を交差させ、下には斜短沈線を施文している。

## III. 遺物

Fig.図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
106-157 87000996	深鉢の頸部。	褐色。内面条痕後ナデ。頸部外面に横走る沈線と刺突文を施し、下には地文化した短沈線を施す。157-159は同一個体。
—158 87000997	深鉢の胴部。	褐色。内面ナデ。外面地文化した短沈線。
—159 87000998	深鉢の胴部。	褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面地文化した短沈線。
—160 87000999	深鉢の胴下部。	黄灰色。内面ヨコ条痕後一部ナデ。外面縦位の地文化した短沈線。
—161 87000954	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面地文化した短沈線。
—162 87000937	深鉢の胴部。	赤褐色。内面上半はヘラケズリ、下半はヨコ条痕後ナデ。外面地文化した短沈線。
—163 87000971	深鉢の胴部。	茶褐色。内面条痕。外面地文化した沈線。
—164 87000949	深鉢の胴部。	黄灰色。内面条痕。外面地文化した沈線。
—165 87000972	深鉢の胴部。	外面暗灰色。内面灰色の内面条痕後ナデ。外面ナデ後縦位の沈線。表面にカーボン付着。
—166 87010137	深鉢の胴部。	外面茶褐色。内面赤灰色。内面条痕。外面短沈線。
—167 87000934	深鉢の胴部。	茶褐色。内面ヨコミガキ(10~13mm幅)。外面横位条痕。口唇部ナデ。
—168 87010137	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	黄褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面ヨコ条痕。
—169 87000938	深鉢の口頭部。	暗褐色。内面ヨコ条痕。口唇部外面に7mmのキザミ。外面ヨコ条痕。

## 標石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
106-170 87000936	直口気味に聞く深鉢の口頭部。	淡茶褐色。内面ヨコ条痕。口唇部外面に9mmのキザミ。外面ヨコ条痕。全體母を含む。
—171 87000939	ゆるやかに聞く深鉢の口頭部。	灰色。内面ナデ。口唇部キザミ。外面ヨコ条痕。
—172 87000965	ゆるやかに聞く深鉢の口頭部。	灰褐色。内面ヨコ条痕。口唇部外面キザミ。外面は口縁下ヨコ条痕。頭部以下斜条痕。
—173 87000964	直口気味に聞く深鉢の口頭部。	褐色。内面ヨコ条痕。口唇部外面キザミ。外面は口縁下ヨコ条痕。頭部以下斜条痕。
—174 87000963	直口気味に聞く深鉢の口頭部。	灰褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。口唇部外面キザミ。外面ヨコ条痕。頭部以下斜条痕。
107-175 87000921	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ヨコ条痕。外面波状の条痕。175-180は同一個体。
—176 87000924	深鉢の胴部。	淡赤褐色。内面ヨコ条痕。外面波状の条痕。
—177 87000923	深鉢の胴部。	茶褐色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—178 87000922	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—179 87000920	深鉢の胴部。	淡赤褐色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—180 87000926	深鉢の胴部。	赤褐色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—181 87000933	深鉢の胴部。	暗灰色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。中央に径6mmの焼成後穿孔。181-186は同一個体。
—182 87000929	深鉢の胴部。	外面暗褐色。内面褐色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。

## III. 造 物

Fig. 図番号 登録番号	形 態 の 特 徴	色 調 お よ び 技 法 の 特 徴
187—183 87000931	深鉢の胴部。	外面淡褐色。内面黒褐色。内面ヨコ条痕。外面格子状条痕。
—184 87000932	深鉢の胴部。	灰色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—185 87000927	深鉢の胴部。	暗灰色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面波状条痕後ナデ。
—186 87000930	深鉢の胴下部。	灰色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。外面一部カーボン付着。
—187 87000928	深鉢の胴部。	暗灰色。内面ヨコ条痕。外面波状条痕。
—188 87000925	深鉢の胴部。	外面暗灰褐色。内面灰褐色。内面ヨコ条痕。外面格子状条痕。金雲母混入。
—189 87010142	深鉢の胴部。	外面黒灰色。内面褐色。内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕。外面一部カーボン付着。
—190 87001000	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	赤褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。口唇部ナデ。外面ヨコ条痕。
—191 87009490	直口気味に聞く深鉢の口頭部。	灰色。内面ヨコ条痕後ナデ。口唇部ナデ。外面浅い条痕(?)。
—192 87009493	内湾気味に聞く深鉢の口頭部。	外面茶褐色。内面褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。口唇部ナデ。外面ヨコケズリ(?)。
—193 87009491	ゆるやかに外反する深鉢の口頭部。	黒褐色。内面ヨコ条痕。口唇部ナデ。外面ヨコ条痕。継位の浅い弧線を施す。
—194 87009492	直口気味に聞く深鉢の口頭部。	黒褐色。内面ヨコケズリ後ヨコ条痕。口唇部ナデ。外面条痕後ナデ。
—195 87010125	深鉢の胴下部。	黄褐色。内面ナデ。外面ヨコ条痕。角閃石混入。

## 鍍石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
108—196 87010134	深鉢の胴下部。	茶褐色。内面ヨコナデ。外面ヨコ条痕。
—197 87010154	深鉢の胴部。	外面明赤褐色。内面黒褐色。内面ナデ。外面ヨコ条痕後、強くヨコナデ。
—198 87010150	深鉢の胴部。	暗赤褐色。内面ヨコ条痕。外面浅い条痕後一部ナデ。
—199 87009494	深鉢の胴部。	外面茶褐色。内面暗褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕。角閃石混入。
—200 87010151	深鉢の胴部。	暗黄褐色。内面ヨコ条痕。外面浅い条痕。
—201 87010133	深鉢の胴部。	黄褐色。内面条痕後ナデ。外面ナデ調整の後斜条痕。
—202 87010135	深鉢の胴部。	茶褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕。外面カーボン付着。金雲母混入。
—203 87010124	深鉢の胴部。	褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面条痕。角閃石混入。
—204 87010143	深鉢の胴部。	外面茶褐色。内面暗褐色。内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕後にタテのサブ痕(?)。
—205 87010141	深鉢の胴部。	灰褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕。金雲母混入。
—206 87010138	深鉢の胴部。	褐色。ヨコ条痕。外面左上り斜条痕後ナデ。
—207 87010149	深鉢の胴部。	茶褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕。外面幅1mmの沈線が5本斜比線。
—208 87009985	深鉢の底部。	茶褐色。内面条痕。外面条痕。

## III. 遺物

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
108-209 87000984	深鉢の平底底部。	外面赤褐色。内面暗褐色。内面条痕。外面条痕。
—210 87000975	深鉢の肩部。	外面黒褐色。内面褐色。内面ナデ。外面ナデ。幅17mmの貝殻縁による帯状列点文が横走。胎土に角閃石混入。
109-211 87000913	深鉢の頸部。	外面明褐色。内面赤暗褐色。内面いねいなナデ。外面幅2mmの複数の部位の貼付隆帯。角閃石混入。
—212 87000935	内湾気味に外反する深鉢の口頸部。	外面黒灰色。内面褐色。内面ナデ。口縁下に2本単位の弧線文を施文。口唇部上面キザミ。外面タテ彫条痕後幅3mmのヨコ沈線が横走。角閃石混入。
—213 87000950	直口気味に開く深鉢の口頸部。	黄灰色。内面条痕。外面条痕による器面調整。口縁下に3本の平行沈線が横走し、頸部以下斜沈線。
—214 87000991	深鉢の肩部。	外面黒灰色。内面茶褐色。内面いねいなナデ。外面彫沈線。
—215 87000989	深鉢の肩部。	明褐色。内面条痕後ナデ。外面ナデ後幅3mm前後の斜沈線。
—216 87000986	深鉢の肩部。	黄灰色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面条痕後ナデ。地文化した沈線。
—217 87000983	深鉢の肩部。	明褐色。内面ナデ、一部条痕。外面地文化した沈線。金雲母混入。
—218 87000992	深鉢の肩部。	外面茶褐色。内面黄褐色。内面条痕。外面地文化した沈線。
—219 87000987	深鉢の肩部。	茶褐色。内面ナデ。外面地文化した沈線。
—220 87000990	深鉢の肩部。	黄灰色。内面条痕後ナデ。外面地文化した沈線。
—221 87000974	深鉢の肩部。	明褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面ヨコ条痕後ナデ。斜沈線施文。金雲母混入。

## 器石B遺跡

Fig.-図番号 登録番号	形態の特徴	色調および技法の特徴
109-222 87010148	深鉢の胴部。	外面褐色、内面暗灰色。内面条痕後ナデ。外面条痕後ナデ。一部沈線(?)
—223 87000988	深鉢の胴部。	明褐色。内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕。
—224 87010144	深鉢の胴部。	淡褐色。内面ヨコ条痕。外面条痕。
—225 87010146	深鉢の胴下部。	淡黄褐色。内面条痕。外面条痕。
—226 87010145	深鉢の胴部。	灰褐色。内面条痕。外面条痕。外面カーボン付着。
—227 87000979	直口気味の深鉢の口部。	茶褐色。内外ともナデによる器面調整後。口縁下に貝殻縁による帯状列点文が横走。列点文は内面6mm幅、外面12mm幅。角閃石混入。
—228 87000976	内湾気味に外反する深鉢の口部。	外面黒褐色。内面茶褐色。内外ともナデによる器面調整。内外とも口縁下に貝殻縁による帯状列点文が横走し、外面にはさらに垂直に縱走する。角閃石混入。
—229 87000955	深鉢の胴部。	赤褐色。内面条痕後ナデ。外面幅2~3mmの斜沈線を組み合わせて文様構成。
—230 87000941	深鉢の胴部。	黒褐色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面幅3mm前後のヨコ沈線下に斜沈線を施す。
—231 87010140	深鉢の胴部。	褐色。内面条痕。外面条痕後ナデ。タテ沈線。外面カーボン付着。角閃石混入。
—232 87010139	深鉢の胴部。	外面黄褐色。内面淡褐色。内面ヨコ条痕。内面ヨコ条痕後ナデ。タテ沈線。
—233 87000994	深鉢の胴部。	黄灰色。内面ヨコ条痕後ナデ。外面地文化した沈線。
—234 87000979	深鉢の胴部。残っている器形から復原すると胴径6.8cmのカップ状深鉢。	茶褐色。内面ナデ。外面ナデによる器面調整後貝殻縁による帯状列点文が横走。外面に縦・×字に組み合わせた貼付籠帯文。

III. 遺物

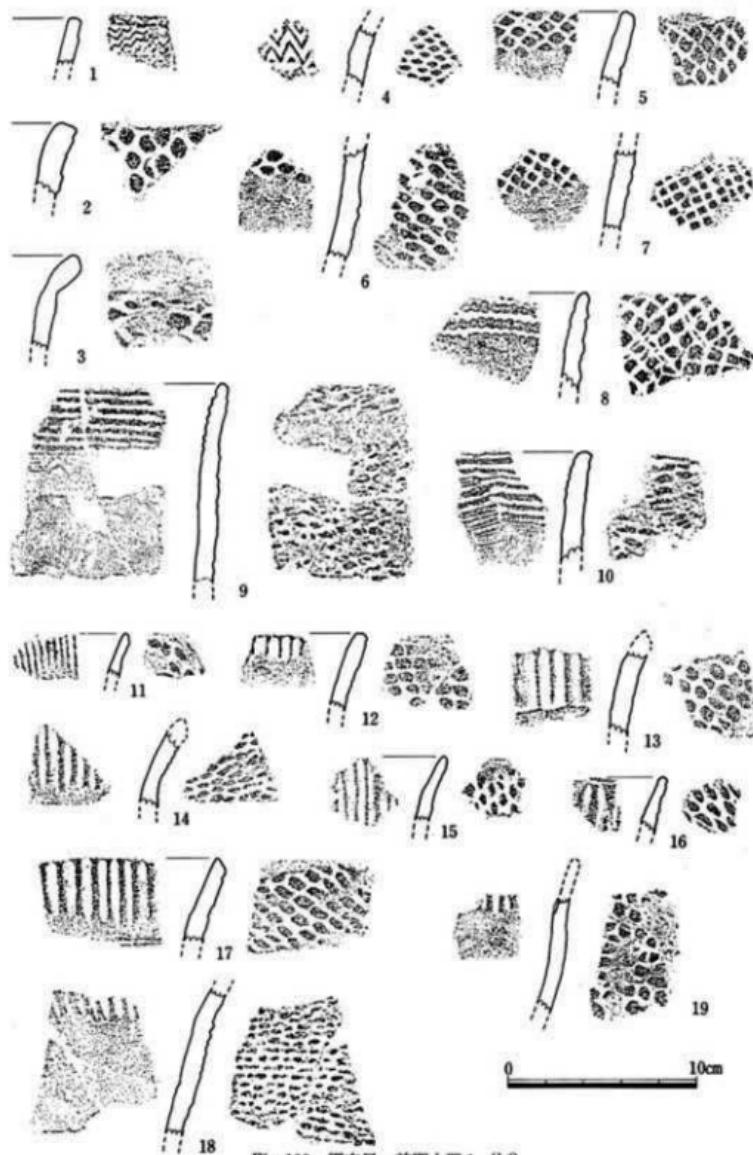


Fig. 100 繩文早・前期土器 1 (3)

鹿石B遺跡

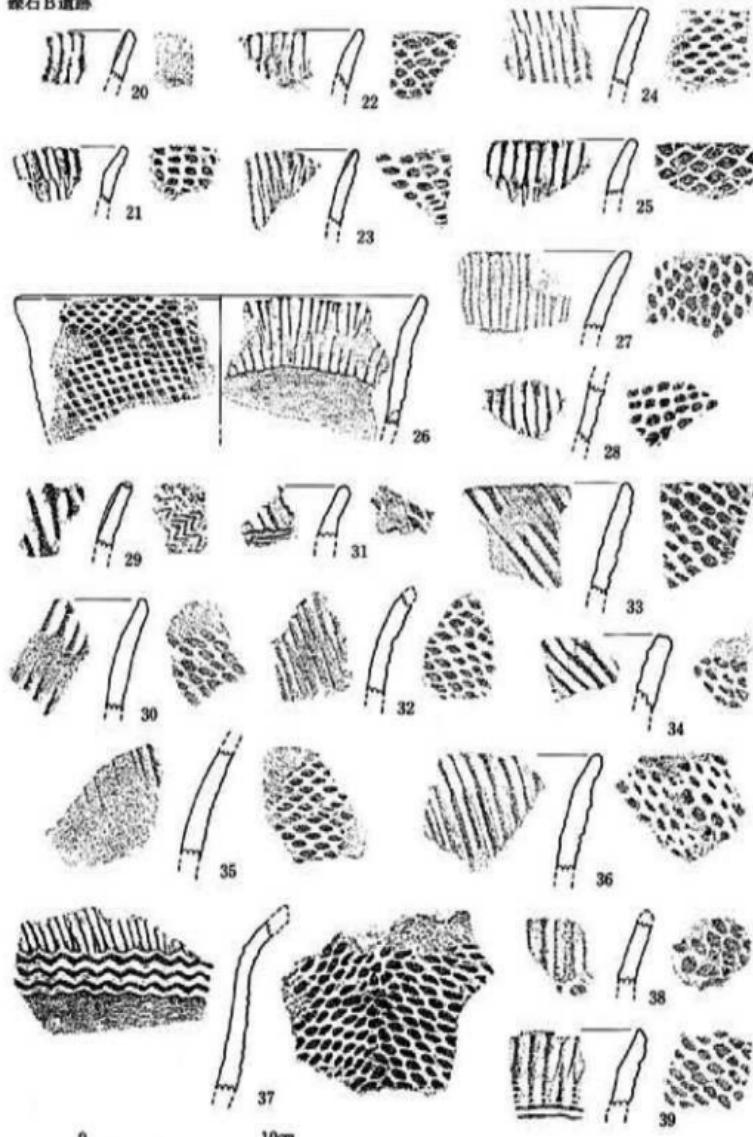


Fig. 101 繩文早・前期土器 2 (G)

III. 遺物

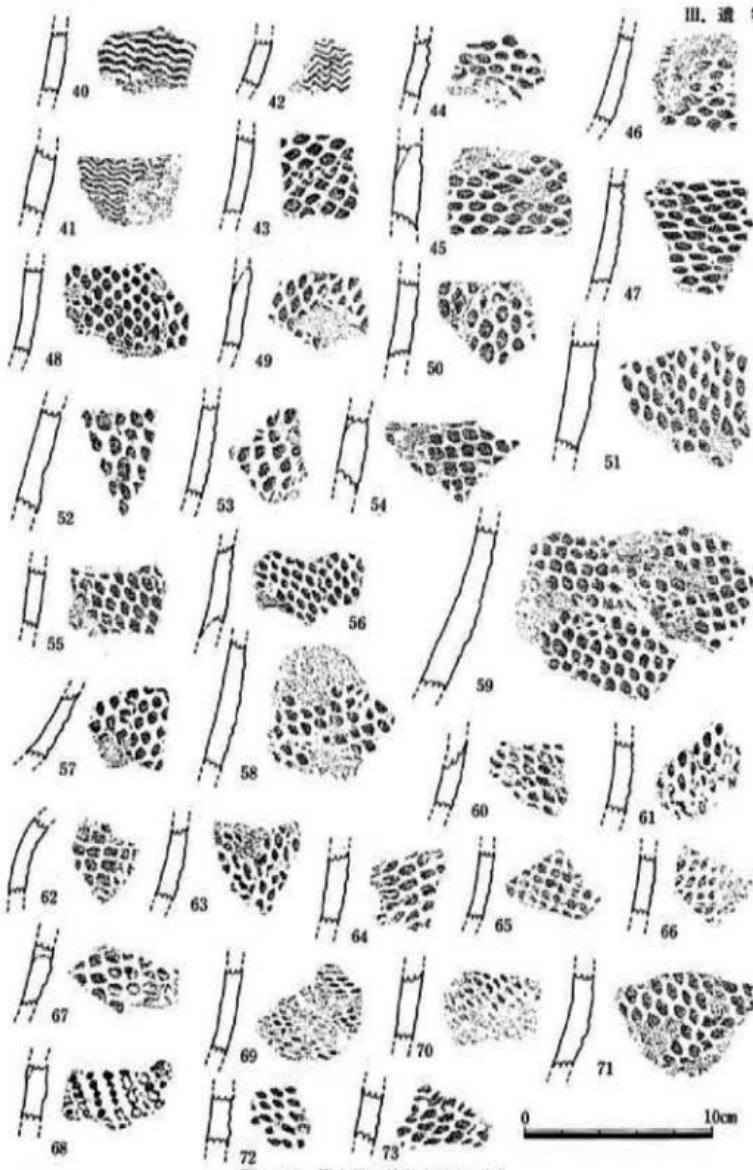


Fig. 102 繩文早・前期土器 3 (1/6)

砾石B遺跡

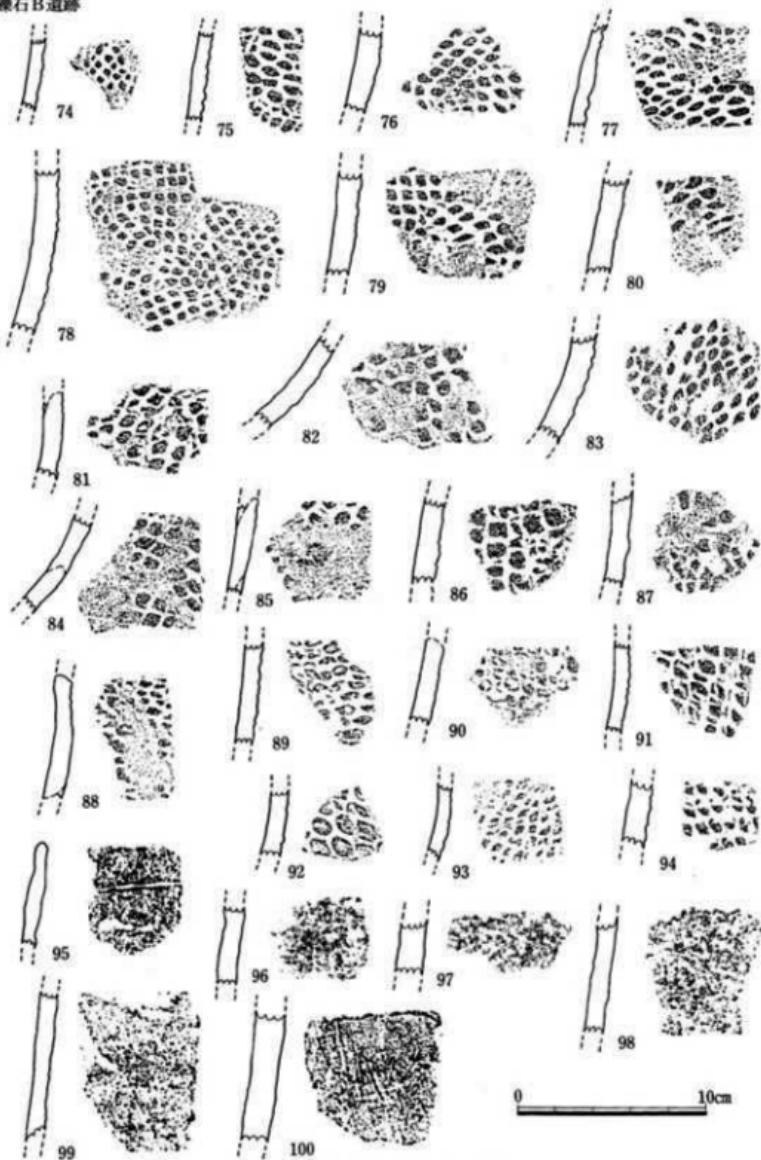


Fig. 103 繩文早・前期土器 4 ( $\frac{1}{2}$ )

III. 遺物

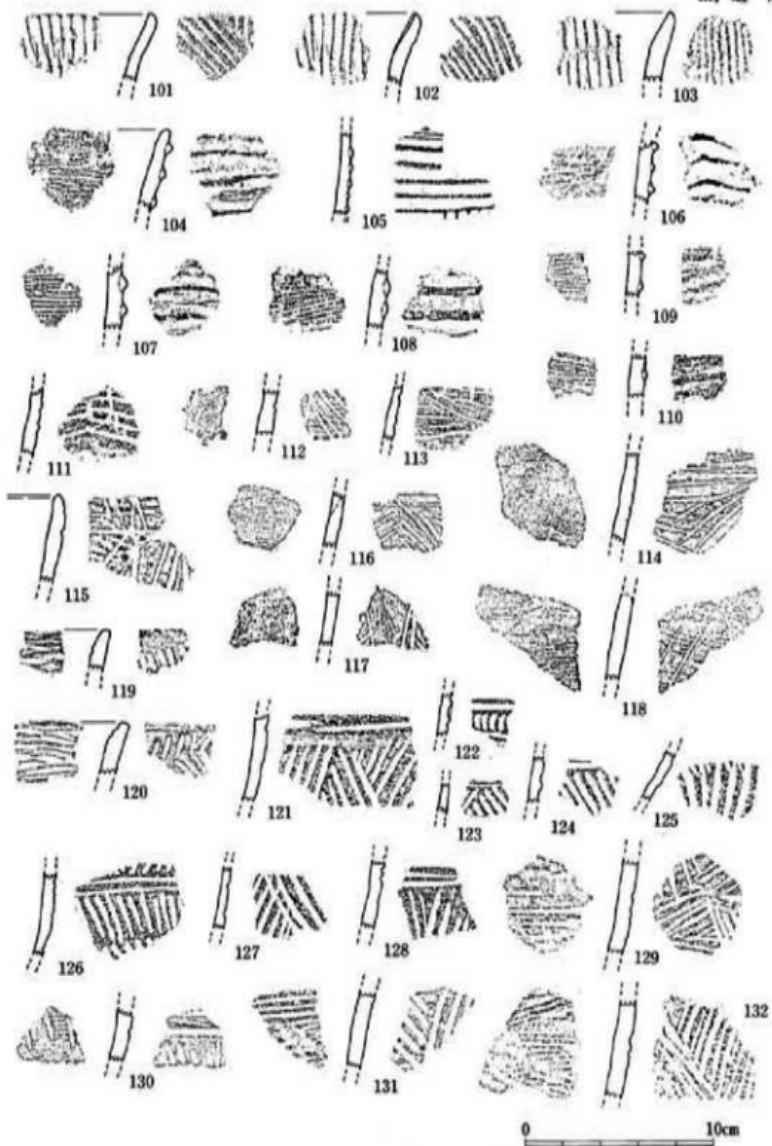


Fig. 104 繩文早・前期土器 5 (上)

砾石B遺跡

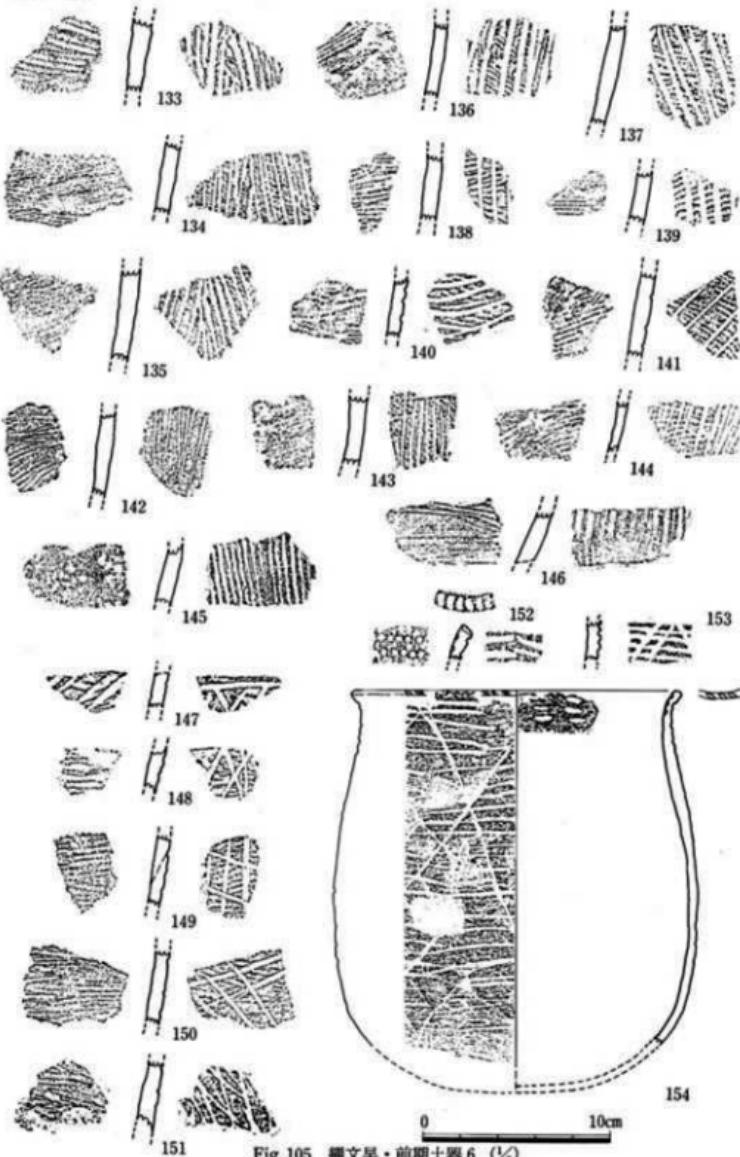


Fig. 105 繩文早・前期土器 6 (上)

III. 遺物

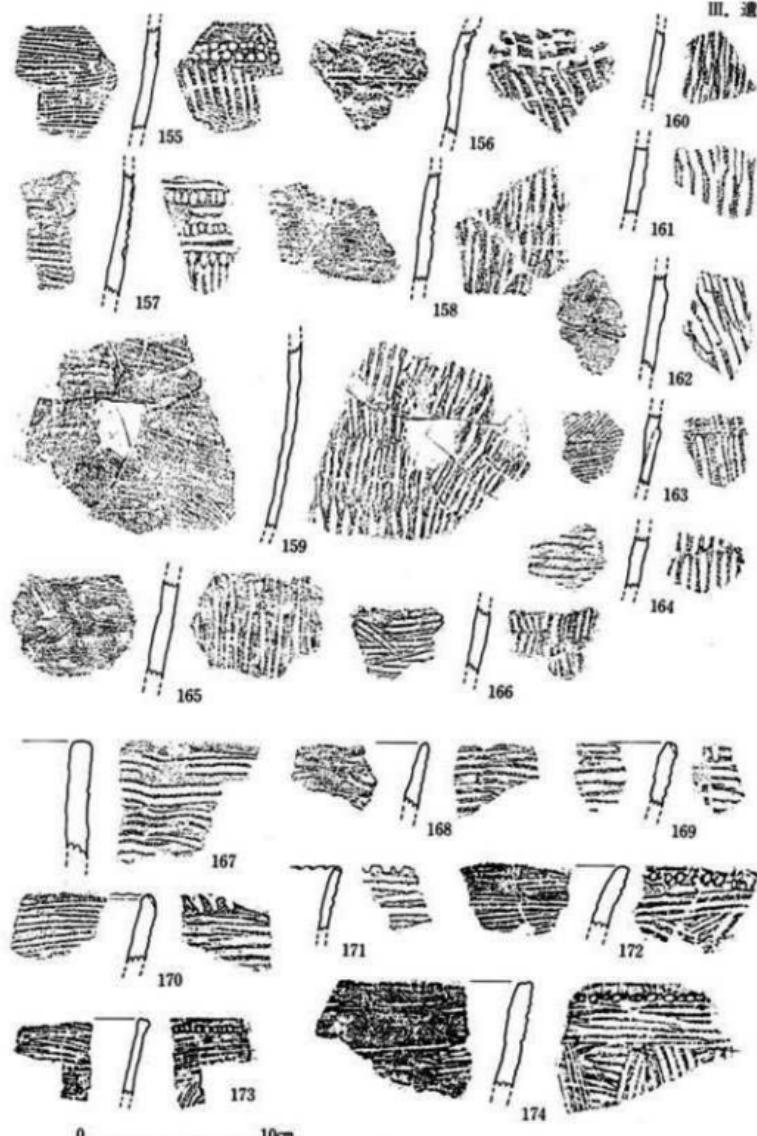


Fig. 106 繩文早・前期土器 7 (3/5)

砾石B遗物

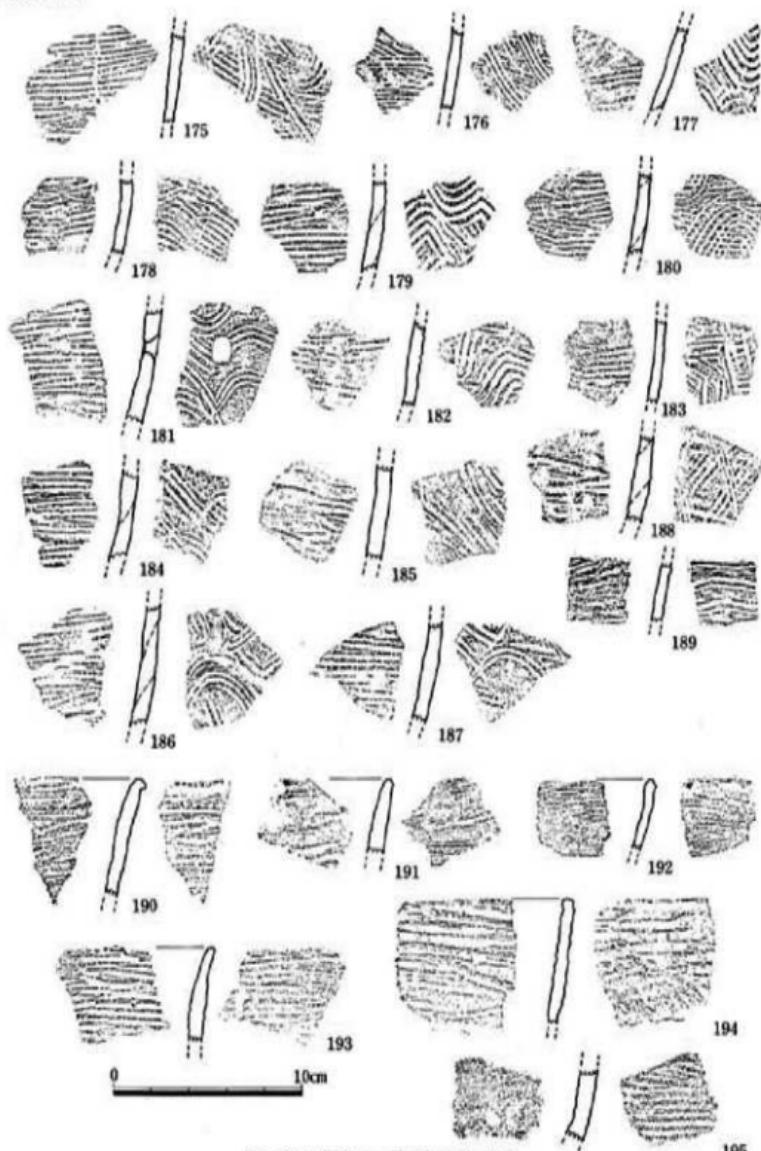


Fig. 107 犁文早・前期土器 8 (上)

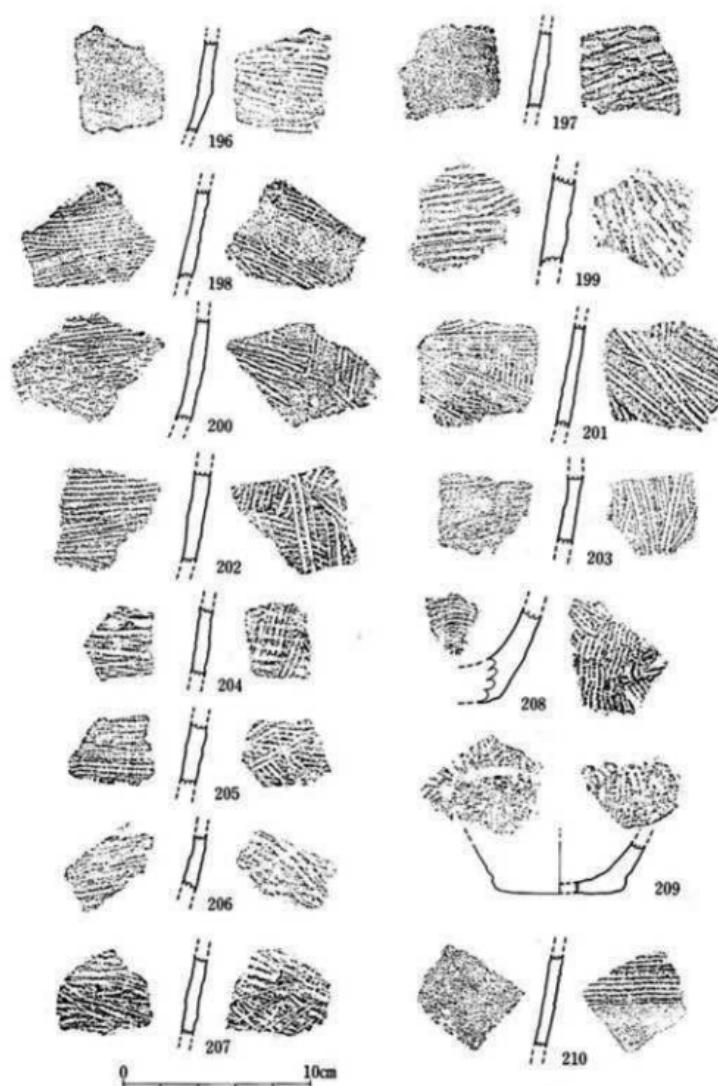


Fig. 108 繪文早・前期土器 9 (少)

裸石B遺跡

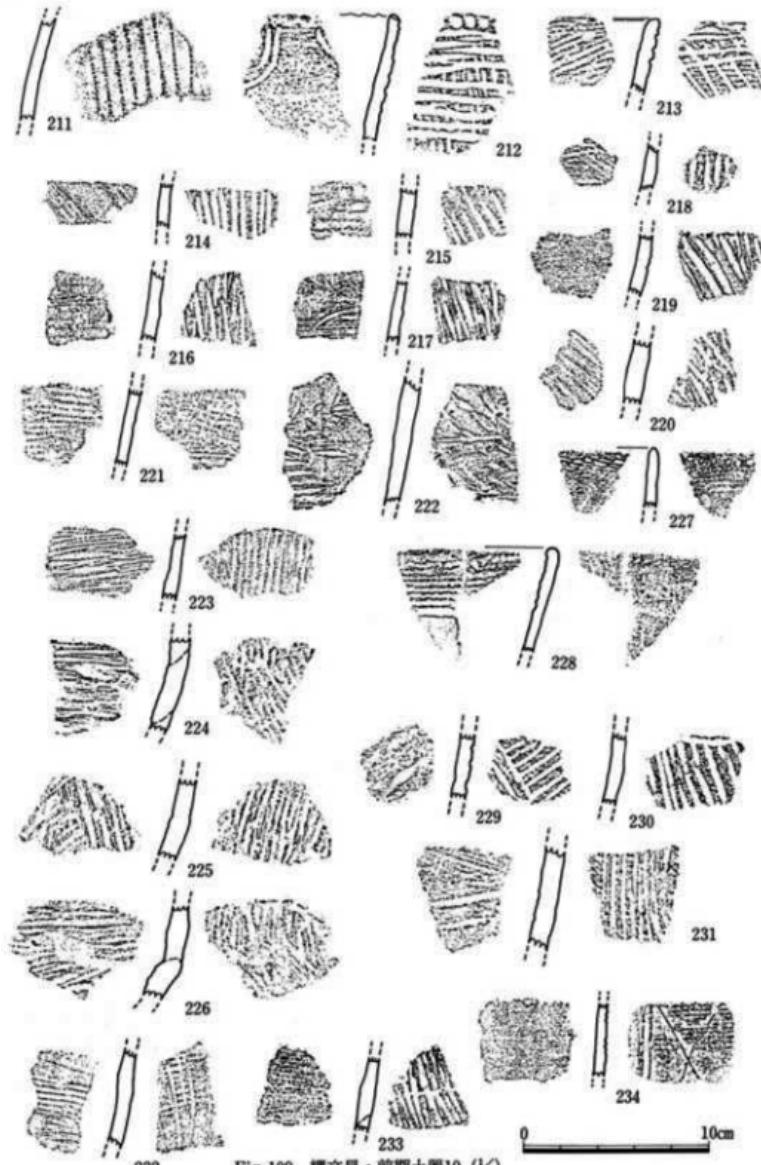


Fig. 109 繩文早・前期土器10 (2)

## (2) 石器 (Fig. 110・111・128, PL. 84・85)

石鏃 磬石B遺跡で出土したものは19点である。サヌカイト製 (235~239・241・242・247・248・253) が10点、黒曜石製 (240・243~246・249~252) が9点である。しかし該当時期の遺構に伴うものはほとんどない。基部形態によって平基をA、凹基をB、その他として以下説明をする。

A：基部に脚をもたないものである。基部が直線的で抉りがないもの (235・236)、基部に浅く弓状に抉りが入るもの (237~240) の2種類がある。いずれも両側縁からの細かい剝離によって成形している。236・239は主要剝離面を残し、打点はいずれも基部方向である。236・238・239は先端部を欠損している。

B：基部の抉りが深く、明確に脚部を有するものである。短い脚をもつもの (241~246)、長い脚をもち、それが湾曲しているもの (251・252) の3種類がある。いずれも両側縁からの細かい剝離によって成形している。243は主要剝離面を残し、打点は先端部方向である。245は両側縁が鋸歯状を呈している。252は先端部を錐状に成形しているとともに、両側縁に磨滅した痕跡が観察されるため、石鏃とは異なった用途も考えられる。241・242・245・248・250・252は脚部を、247・248・251は先端部を欠損している。なお245・249・250は半透明の黒曜石を利用し、245は黒色の微粒子を含んでいる。

その他253は石鏃としておいたが、左右対称でなく一端を欠失しているため全体像がつかめない。両面に細かい剝離が施されているが、中央部に自然面を残している。

石鏃の時期については明確なことは言えないが、237~239は晩期に、249~252は早期に多く見られる形態である。それ以外のものは縄文前期~弥生時代に広く見られる。なお、235~238・240・242・245・247・249・253はIII区黒色土、239・243・244・251・252は、S T104古墳墳丘内、241はS A31支石墓、246はS C19石棺墓、248はS P44土壙墓、250はS T03古墳石室内埋土からの出土である。

削器 254はいわゆる縦型の石匙である。つまみ部分は両面に細かい剝離を施し成形している。両側縁は交互に剝離を施し片刃状になっている。つまみに自然面を残し、体部下位をわずかに欠損している。255は右側縁のみに剝離を施し刃部を形成している。256は薄い剝片を利用し、左側縁及び下端に刃部を形成している。257は縦長の剝片を利用し、両側縁に剝離を施し刃部を形成している。裏面は自然面である。258は右側縁のみに剝離を施し刃部をしている。上面、左側面は自然面である。259は横型の石匙と考えられる。図左側が主要剝離面で、打点はつまみ附近にある。つまみ部分は両面に細かい剝離を施し成形している。刃部を欠失している。260は横型の石匙である。主要剝離面は図右側で、横長の剝片を利用している。刃部は細かい剝

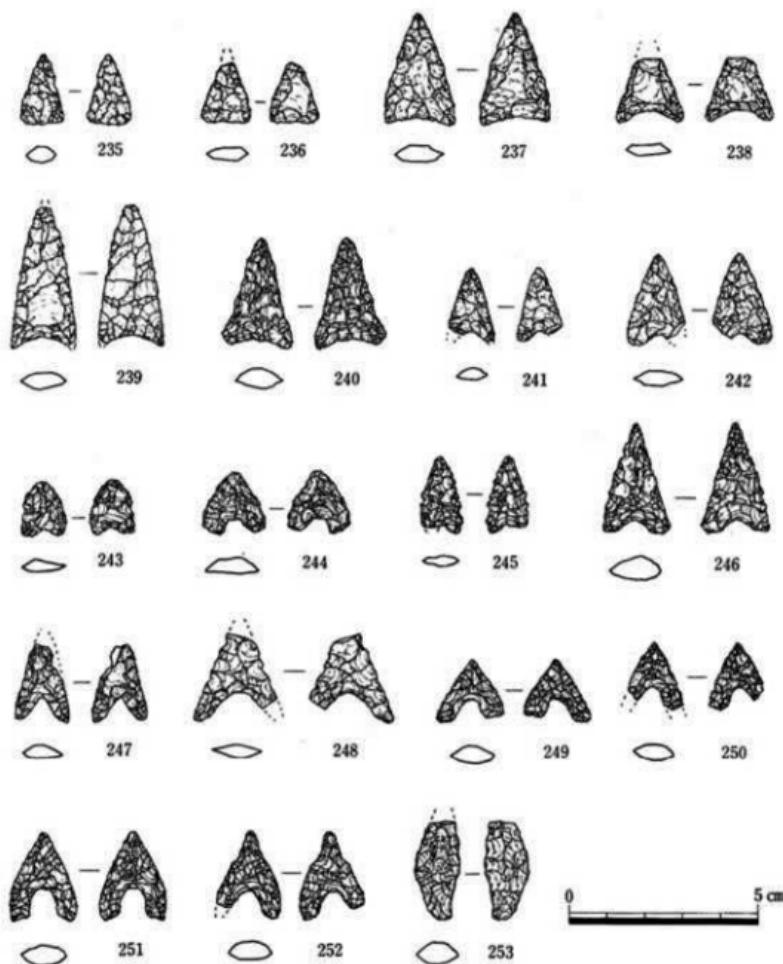


Fig. 110 縄文時代石器 1 (3)

離で、肩部は比較的大きな剝離で成形している。261は下端を弧状に、262は下端を直線的に剝離し刃部としている。263は上下から粗い剝離で成形し、両側面からの剝離も数ヶ所にみられる。また尖頭器の両端を折損したようにもみえ、旧石器時代の所産とも考えられる。

III. 遺物

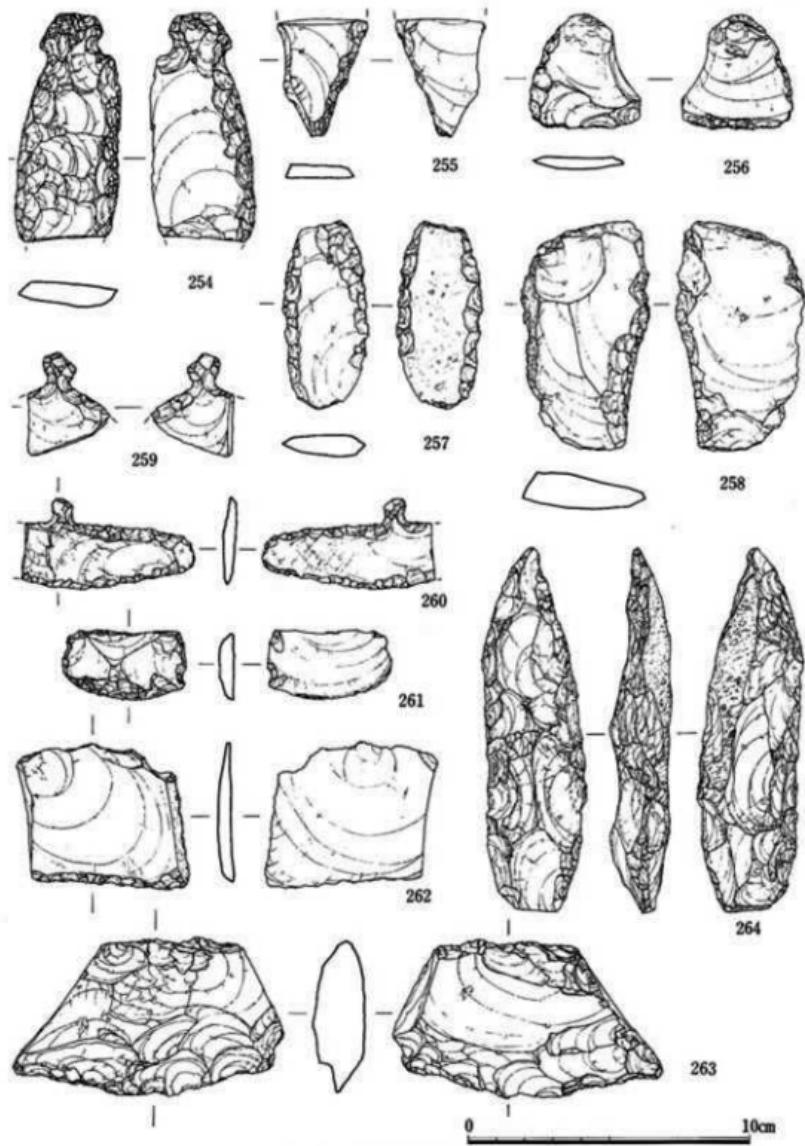


Fig. 111 繩文時代石器 2 (1/2)

## 鍬石B遺跡

削器はすべてサヌカイト製であり、254・258～260はST04古墳墳丘内、255はIII区黒色土、256はST02古墳、257はSK21土壤、261はST04古墳周溝、262・263はST01古墳墳丘からの出土である。

石槍 264は両側縁から粗い剝離を施した後、細かい剝離調整を行っている。基部には平坦面が残り、体部には自然面を残している。弥生時代の所産とも考えられる。最大長13.0cm、最大幅3.5cm。遺構検出時の出土。

磨製石斧 1点のみある。弥生時代の石器と合わせて図示した(Fig. 128)。376は玄武岩製である。右側面、基部から剝離による成形の後、研磨を施している。しかし風化のため、研磨面は右側面と左側面の上部に残っているのみである。刃部は折損している。ST01古墳周溝内出土。

## 2. 弥生時代

繩文晩期～弥生前期の支石墓と弥生後期の壺棺墓・石棺墓に伴う埋葬関係遺物が主体で、他に前・後期の土壤出土遺物等がある。種別は壺棺・壺棺・供獻土器等のほか、鏡1点、玉類・鉄器類・石器が数点ある。

土器については、支石墓を中心とする繩文晩期～弥生前期の土器の様相を明確にするため、弥生中・後期の土器と分け、さらに前者を(a)埋葬に用いられた土器、(b)供獻土器、(c)土壤出土の土器、(d)その他の土器、に分ける。なお、(d)は古墳盛土中や表採の破片が主で、便宜上、繩文晩期土器をあわせて扱う。これらの編年上の位置づけ等については、のちに総括でまとめる。また中・後期土器は、(a)壺棺、(b)その他の土器、とに分ける。

なお、図中の7桁数字は遺物登録番号、法量はcm単位である。

### (1) 前期の土器

#### a) 埋葬に用いられた土器

ST04古墳盛土下の支石墓のうち、小児墓23基は下部構造に壺棺が用いられていた。時期は繩文晩期～弥生前期前半に限られ、A遺跡のように前期後半になって再度墓地に使用された形跡はない。これら壺棺は基本的に壺を身とし、ススの付いた転用壺を蓋に被せているが、蓋は時期が下るにしたがい壺の底部を割って使用するものなどが現れる。遺跡の東南隅には壺棺2基が存在するが、時期は弥生後期前半で、支石墓とは直接的な系譜関係はない。以下、時代・器種にこだわらず、遺構番号順にそれぞれ身・蓋をセットとして説明する。

## S A 22 支石墓 (Fig. 112, PL. 94)

265の蓋壺は胸部が屈曲せずに立ち上がり、口縁高に先の鋭いヘラによる刻目突帯を廻らす。底部は厚く、外観は高台風に立ち上がってみえる。調整は口縁部をヨコ方向ナデ。胸部外面はタテ方向条痕のあと中位をヨコ方向にかるく条痕を施し、さらに板状工具で不定方向にナデて仕上げる。胸部内面はヨコ方向条痕がそのまま残る。底部は内面ナデ、外面は板状工具ナデ。色調は赤褐色。外面で口縁下の胸部約 $\frac{2}{3}$ にススが付着し、内面では胸部下半に炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を少し含む。

267は丹塗磨研の長胸壺。口頸部約 $\frac{1}{2}$ 周と底部を打ち欠き、胸部下位に穿孔を施している。底部は丸底の名残りを残す薄い平底で、胸部は長く立ち上がってやや肩が張る。頸部は胸部と明瞭な段をなし、わずかに内傾して伸び、口縁部は短く外に折れて端部を丸くおさめる。調整は頸部内面上半および口縁部をヨコ方向へラミガキ、さらに頸部をタテ方向、胸部は肩位ヨコ方向から中位ナメ、下位をタテ方向にヘラで磨いている。内面は頸部下半から胸部をナデ。なお頸部内面には粘土接合痕、胸頸接合部内面には指ナデツケ痕が明瞭に残る。また、外面頸胸間と口頸間の段はヘラミガキによって一層明瞭になるよう意図されている。丹は頸部内面上半から外面全体に厚く塗られ、赤褐色に発色している。ただし胎土そのものは暗黄褐色で胸部外面に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

266は底蓋に用いられていたもので、267とは別個体の壺底部である。粘土接合部でほぼ水平に割られ、接合部が擬口縁を呈す。底部は薄い平底で267に類するが、胸部は内湾気味に立ち上がっている。調整は胸部外面ナメ方向へラミガキ、胸部内面および底部内外面ナデ。黄褐色で砂粒を含む。

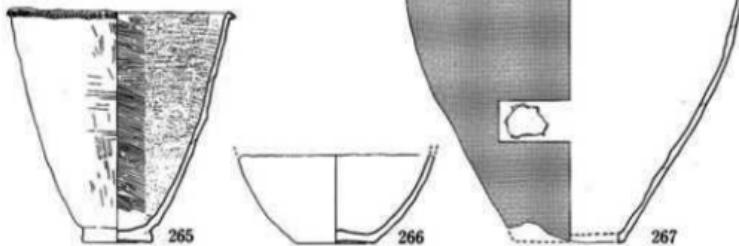
## S A 23 支石墓 (Fig. 112, PL. 94)

268の蓋壺は胸部上位がつよく屈曲して直線的に内傾し、下位は直線的にすばんで比較的浅い。口縁部と胸屈曲部には刻目突帯を廻らす。口縁部のそれは上面が平坦である。刻目は先の鋭いヘラを切りつけるようにして施し、その際の傷が胸上位に一部みられる。底部は裾を欠失するが、脚状に開き、胸部との間に刻目がない突帯を廻らす。調整は胸部外面で胸屈曲部から上をヨコ方向に、下をタテ方向に板状工具ナデ、胸部内面および底部内外面はナデて仕上げる。色調は赤褐色で、底部を除く外面全体にススが付着し、また内面には胸屈曲部以下に炭化した有機物が付着している。胎土に微砂粒を含む。

269は丹塗磨研の長胸壺。口頸部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠き、胸部上位に穿孔を施している。底部は薄い平底で、胸部は長く立ち上がってあまり肩が張らず、頸部は胸部と明瞭な段をなしてやや内傾しながら伸びる。口縁部は頸部からつづいて自然に外反し、端部を丸くおさめる。調整は口縁部および頸胸部外面をヨコ方向へラミガキ、頸胸部内面は板状工具による荒いヨコ方向ナデ、

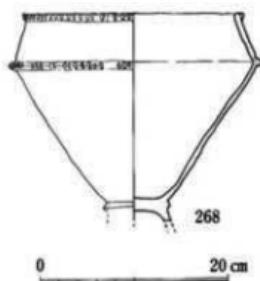
S A22

- |           |   |
|-----------|---|
| 265 上蓋（壺） | 口径 24.3 底徑 7.5<br>84000376 器高 24.6                    |
| 266 底蓋（壺） | 底徑 8.3 殘高 9.3<br>84000375                             |
| 267 身（壺）  | 口徑 17.0 頸徑 20.3<br>胸徑 36.0 底徑 11.0<br>頸高 14.5 器高 53.8 |



S A23

- |           |   |
|-----------|---|
| 268 上蓋（壺） | 口徑 23.6 扁曲部徑 27.0<br>850001977 底徑 6.5 器高 22.4                   |
| 269 身（壺）  | 口徑 16.4 頸徑 18.2<br>850001976 胸徑 32.8 底徑 11.3<br>頸高 10.0 器高 52.5 |



0 20 cm

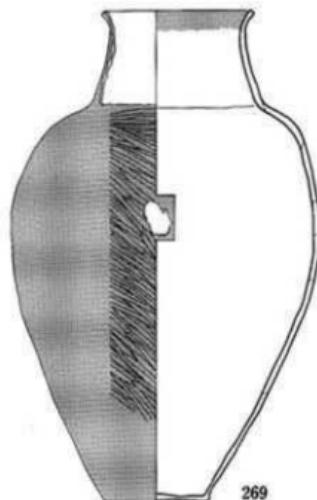


Fig. 112 S A22 • S A23 支石墓出土壺棺 (1/6)

底部は内外面ともナデている。丹は口縁部内外面から頸胸部外面にうすく塗られ赤褐色を呈す。ただし胎土自体は黄褐色で外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

#### S A24支石墓 (Fig. 113, PL. 94)

蓋は壺が使用されていたと推定されるが、身の壺のみ残存する。ただし270の壺も上半はS T 04古墳西南区盛土中からの出土であり、確証はないが、器形・胎土・色調等から同一個体とみて扱う。やや大型化した丹塗りの平底壺で、胴部はいくぶん肩が張る。頸部は発達して胸部と一体化する方向にあり、つよく内傾して伸びてから口縁部に向かって立ち上がりをみせる。頭・胸の区分は内面でははっきりしないが、外面ではヘラミガキによって段状にみせ、境を明瞭にしている。調整は外面で頸部をタテ方向へラミガキ、胸部は肩位ヨコ方向、下半をナナメからタテ方向へラミガキを施す。内面は頸部から胸部肩位を板状工具によるヨコ方向ナデのあと指ナデ、胸部下半ナデ。底部は内外面ともナデである。色調は丹がうすい暗赤褐色で胎土そのものは淡黄褐色。胸部肩位外面に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

#### S A25支石墓 (Fig. 113, PL. 95)

271は蓋に使用されていた鉢。機能的には鉢とすべきものであるが、形態的な特徴は口縁部を欠いた壺の胴底部そのもので、壺の製作途中と思われる。底部は平底で、胸部は重心が低く肩が張り、上位で内傾して口縁部をつくる。調整は口縁部および外底部ナデ、胸部は外面ヨコ方向へラミガキ、内面はタテ方向のあと粗くヨコ方向のヘラミガキを施している。色調は褐色で外面に大きな黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

272は頸胸部が発達したやや大型の壺である。口縁部と頸部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、胸部下位に穿孔を施す。底部は法量のわりには薄く、胸部は低くつぶれて強く肩が張る。頸部は胸部と一体化する方向にあり、つよく内傾して伸びてから口縁部に向かって立ち上がる。頸部接合部は内面でかすかに段をなすが、外面ではヘラミガキのあと別にヘラで段をつけ、頭・胸を区別している。口縁部は欠失するが、大きく外反すると推定される。全体のプロポーションは胸部高と口縁部がほぼ等しく、重心が低いわりには不安定な感じを与える。また整形はやや雑で、頸部間の段が波打ち、さらに上からみると胸部が正円をなさず三角形状にゆがんでいる。調整は頸部外面をヨコ方向へラミガキ、底部付近を指でおさえる。頸部内面および底部内外面ナデ。色調は褐色で外面に黒斑があり、砂粒を多く含む。

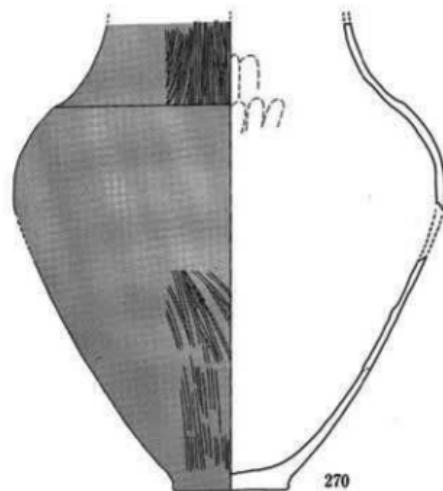
#### S A27支石墓 (Fig. 114, PL. 95)

273の蓋は胸部上位がつよく屈曲し、比較的短かく直線的に伸びる。胸部下位はやや丸味をなしてすぼまり比較的浅く、平底をつくる。口縁部高と胸屈曲部には先の鋭いヘラによる刻目

禮石B遺跡

S A24

270 身(壺) 頭徑 39.4  
85001667 腹徑 47.4  
底徑 12.1 殘高 51.1

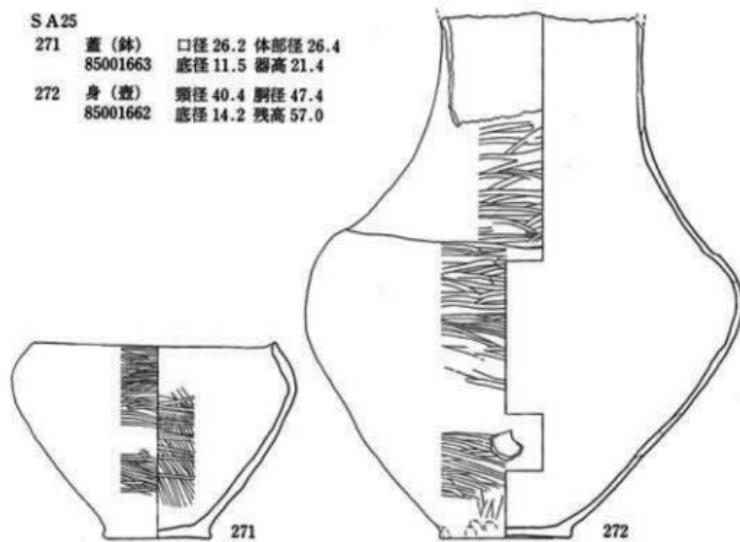


270

S A25

271 盖(鉢) 口徑 26.2 体部徑 26.4  
85001663 底徑 11.5 器高 21.4

272 身(壺) 頭徑 40.4 腹徑 47.4  
85001662 底徑 14.2 殘高 57.0



0 20cm

Fig. 113 S A24 • S A25支石墓出土壺棺 8 (1/6)

を施した突帯を廻らし、口縁部では突帯端が本来の口縁高より高く反ね上がっている。調整は内外面ともナデ仕上げで、そのうち胴部外面では屈曲部より上をヨコ方向、下をタテ方向に施している。色調は赤褐色または一部黄灰色で、外面には底部付近を除いて口縁部までススが付着、内面には全面に炭化した有機物の付着が認められる。胎土に砂粒を含む。

274は胴頭部の発達した丹塗磨研の壺。口縁部と頸部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、胸部下位に穿孔を施す。平底で、胴部は比較的低くつぶれて肩がよく張る。頭部は胴部と段をなし、さらに沈線で区分を明瞭にしたうえ、つよく内傾して伸びる。口縁部は不明であるが、外反して開くであろう。調整は外面ヘラミガキで頭部タテ方向、胴部は肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向に変わってゆく。頭部内面および底部内外面はナデで、外面底部付近は指でおさえる。丹は頭部外面に塗られて暗赤褐色を呈す。ただし胎土そのものは赤褐色および一部黄褐色で、外面に大きな黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

#### S A 30支石墓 (Fig. 114, PL. 96)

287は蓋に使用されていた土器で、壺胴部下半を打ち欠いたもの。平底で、胴部の立ち上がり方がからみて肩がかなり張ると思われる。調整は胴部下位で外面がナナメからタテ方向へラミガキ、内面および外底部ナデ。色調は黄褐色で外面に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

288の壺は丹塗磨研。口縁部と頸部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠き、胸部下位に穿孔を施す。とくに大型で頭部が発達し、薄い平底から胴部は丸味をもって立ち上がり、やや肩が張る。頭部は胴部と一体化する方向にあるが、ヘラミガキの際に意図的に段をつけ、つよく内傾して伸びる。口縁部は頭部からそのまま外反する。全体のプロポーションでは重心が低い感を与え、胴最大径が器高のほぼ中位にある。調整は外面ヘラミガキで、頭部タテ方向、胴部は肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向に施している。頭部内面および底部内外面はナデ、さらに頭部内面と底部付近外面を指でおさえまたはナデツケている。色調は胎土が外面橙褐色、内面暗黄褐色で、丹は口縁部内面と外面全体にうすくかかり暗赤褐色を呈す。外面頭部に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

#### S A 35支石墓 (Fig. 114, PL. 96)

275の蓋裏は胴部上位がつよく屈曲してやや内湾気味に短く伸び、下位は直線的にすばんでそのまま平底をつくる。口縁部は口唇部をナデる際に端部を外側上方につまみ上げるようにして突帯をつくり、胴部屈曲突帯とともに先の鋭いヘラによる刻目を施す。調整は胴部外面で屈曲、下にタテ方向条痕を部分的に残しながら屈曲部を含む上位をヨコ方向に板状工具ナデ、下位には底部付近から上に向かってナデた際の板状工具痕が残る。内面は胴部上位にヨコ方向ハケ目痕を残しながらナデ、底部も内外面をナデて仕上げる。また胴屈曲部と外面底部付近は指でお

### 標石B遺跡

きえている。色調は外面黄褐色、内面赤褐色で、ススの付着は認められない。胎土に砂粒を含む。

276の壺は丹塗磨研で、口縁部がやや発達している。口縁部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠く。薄い平底で、胸部は比較的長く立ち上がってやや肩が張る。頸部は胸部と段をなし、さらにヘラミガキの際に区分を明瞭にしたうえ、つよく内傾して伸びる。口縁部は器壁がやや薄くなつて外反する。調整は口縁部ヨコ方向ナデ、頸部はタテ方向ヘラミガキ、胸部は肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向ヘラミガキに変わる。頸胸部内面および底部内外面はナデ、内面の胸頸接合部と外面底部付近を指でおさえている。色調は丹が外面にうすくかかり暗赤褐色を呈し、内面褐色。胎土に砂粒を含む。

### S A 36支石墓 (Fig. 115, PL. 97)

277蓋壺は胸部が上位で屈曲し、やや内傾して立ち上がる。下位は直線にすばまり、やや外に張り出した上げ底気味の平底をつくる。口縁高と胸屈曲部にはかなり突出した突帯を廻らし、先の鋭いヘラによる刻目を施す。口縁部上面はナデで平坦である。調整は外面で胸屈曲部以上をヨコ方向ナデ、以下をヨコからナナメ方向に板状工具ナデ、さらに下位は底部付近から上に向かって板状工具でナデしており、底部付近にその際の工具痕が残る。胸部内面と底部内外面はナデ、また底部周囲は指でおさえている。色調は暗橙褐色。外面の胸部突帯下約 $\frac{1}{2}$ にススが付着し、内面では底部から胸部約 $\frac{1}{3}$ の高さまで炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を多く含む。

278の壺は丹塗磨研。口頸部は約 $\frac{1}{3}$ を打ち欠いている。頸胸部が発達し、底部は平底、胸部はつよく肩が張る。頸部は胸部と一体化する方向を示し段をもたないが、ヘラミガキのあと沈線を一周させて胸部との区分を明瞭にし、つよく内傾して伸びる。口縁部は頸部から短かく折れて外反する。調整は口縁部ヨコナデ、頸部外面はタテ方向ヘラミガキ、胸部外面は肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向ヘラミガキに変わる。内面は頸部をヘラミガキのあとヨコ方向ナデ、胸部もナデ。底部周囲および頸部内面に指おさえ痕が残る。丹は口縁部内外面と頸胸部外面にうすくかかり暗赤褐色を呈し、頸部から胸部にかけて外面に黒斑がある。内面でみると胎土そのものは黄褐色である。砂粒を多く含む。

### S A 37支石墓 (Fig. 115, PL. 97)

279の蓋壺は胸部が上位で屈曲し、内傾しながら伸び、口唇部はナデで面を内側に傾ける。胸部下位は直線的にすばまり、やや外に張り出した平底をつくる。口縁部高と胸屈曲部には突帯を廻らせ、先の鋭いヘラで切りつけるようにして刻目を施す。口縁部上面はナデで平坦であり、また屈曲部の突帯は低く、外観上は単に胸部が屈曲しているだけのようにみえる。全体に器高のわりには口径が大きい。調整は胸屈曲部以上を内外面ヨコ方向ナデ、以下を内外面タテ方向

III. 遺物

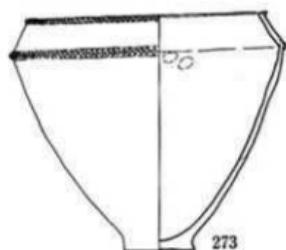
S A27

273 蓋(座) 口径 26.1 扁曲部徑 30.2

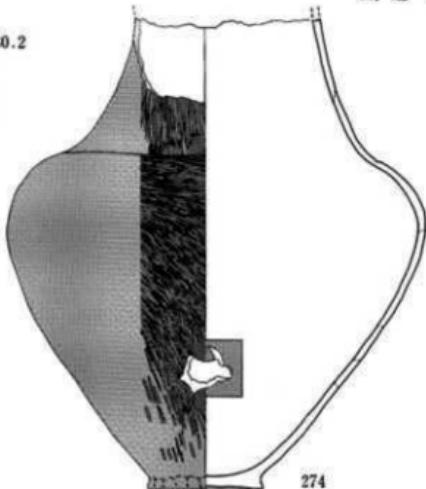
85001981 底徑 7.6 器高 25.5

274 身(蓋) 頸徑 33.7 腹徑 45.3

85001980 底徑 12.5 殘高 50.1



273



274

S A35

275 蓋(蓋) 口徑 23.2 扁曲部徑 28.0

85001991 底徑 8.8 器高 25.6

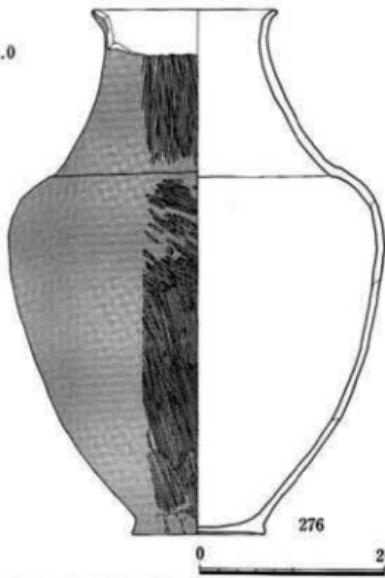
276 身(蓋) 口徑 20.0 頸徑 30.8

85001990 腹徑 40.7 底徑 14.2

頸高 17.5 器高 56.6



275



276

20 cm

Fig. 114 S A27 • S A35 支石墓出土蓋棺 (1/4)

### 裸石B遺跡

ナデ。底部も内外面ともナデている。色調は赤褐色で、外面では胴位約 $\frac{1}{3}$ から上の口縁部までススが付着、内面には胴部下半に炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を含む。

280はやや大型化した丹塗磨研の壺で口頸部約 $\frac{1}{2}$ 周を打ち欠く。底部は平底、肩部はあまり肩が張らず立ち上がる。頸部は胴部と一体化する方向にありながらもヘラミガキ後の沈線で胴部との区分を明瞭にし、やや内傾して立ち上がり、そのままわずかに外反して口縁部をつくる。調整は頸部内面と口縁部をヨコ方向へラミガキ、頸部外面タテ方向へラミガキ。胴部外面は肩位ヨコ方向かつ下位に向かってナナメ→タテ方向、さらに下端を再びヨコ方向にヘラミガキを施す。胴部内面はナデか。底部は内外面ともナデ、周囲を指でおさえている。丹は外面にうすくかかって暗赤褐色、胎土そのものの色調は赤褐色で胴部外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

### S A 38支石墓 (Fig. 116, PL. 98)

281の蓋壺は胴部上位が屈曲して内傾し、下位は直線的にすぼまって平底をつくる。口縁部と胴屈曲部には突堤を廻らして先の鋭いヘラで切りつけるように刻目を施し、口縁部下ではその際の勢いあまたのヘラ傷が胴部上位に残る。口縁部突堤は低く、上面は平坦にナデ、これに対し胴部突堤はうすく、突出の度合が大きい。調整は胴屈曲部以上を内外面ヨコ方向ナデ、以下は一部に条痕を残しながらもナデで仕上げられている。底部は内外面ともナデ。色調は赤褐色で、口縁部まで胴部の外面全体にススが付着、同じく口縁部まで内面全体に炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を含む。

282は頸胴部がやや発達した壺で、口縁部と頸部約 $\frac{1}{3}$ 周を打ち欠いている。底部は薄い平底、胴部はややつぶれて最大径が器高のほぼ中位にあり、肩はあまり張らない。頸部は胴部と一体化する方向にあるが、ヘラミガキの際に難ながら一応の区分を設けて立ち上がる。口縁部は頸部からそのまま外反すると思われる。調整は外面で頸部タテ方向へラミガキ、胴部は肩位ヨコ方向、下位タテ方向に粗いヘラミガキを施している。頸胴部内面と底部内外面はナデ、さらに底部周囲を指でおさえる。色調は赤褐色または一部黄褐色で頸部外面に黒斑があり、胎土に砂粒を含む。

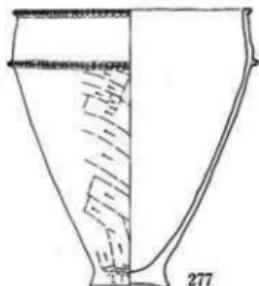
### S A 39支石墓 (Fig. 118, PL. 98)

285は身に用いられたであろう丹塗磨研壺底部のみ残存する。平底で胴部は外に開いて立ち上がり、肩がつよく張ることを思わせる。調整は胴部下位が外面タテ方向へラミガキ、内面ナデ。底部は内外面ともナデ、周囲を指でおさえている。色調は外面褐色、内面白褐色で、胎土に砂粒を多く含む。

S A36

277 蓋(蓋) 口径 25.8 扁曲部径 27.2  
84000261 底径 8.5 器高 30.0

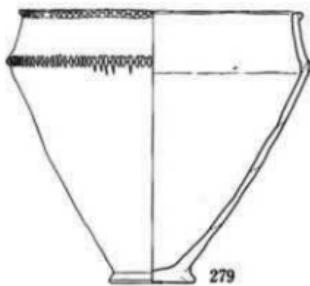
278 身(蓋) 口径 18.8 頸徑 35.0  
84000365 腹徑 43.9 底徑 11.4  
頸高 18.6 器高 54.8



S A37

279 蓋(蓋) 口径 30.6 扁曲部徑 33.0  
85001983 底徑 9.1 器高 29.5

280 身(蓋) 口徑 19.1 頸徑 31.6  
85001982 腹徑 42.6 底徑 11.4  
頸高 18.1 器高 59.8



0 20cm

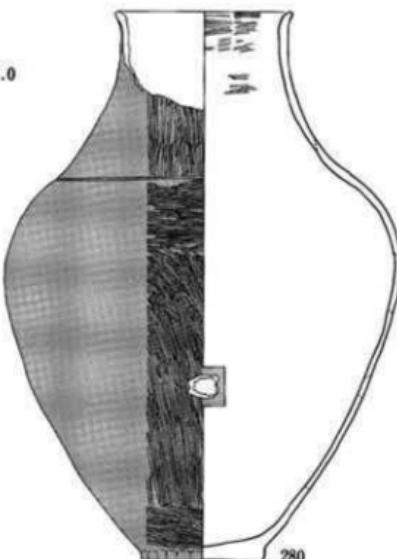
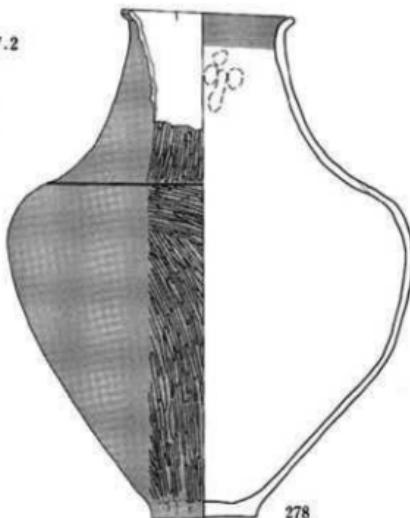


Fig. 115 S A36 • S A37 支石墓出土壺棺 (S)

## S A40支石墓 (Fig. 118, PL. 99)

286も身に用いられたであろう壺の底部のみ残存する。平底で胴部はある程度肩が張るかと思われる。調整は胴部下位が外面タテ方向へラナデのあと指でナデ、胴部内面および底部内外面をナデ。色調は褐色で、胎土に砂粒を多く含む。

## S A41支石墓 (Fig. 116, PL. 98)

283の蓋壺は底部不明。胴部は上位が屈曲したのち直線的に内傾し、さらに口縁部ちかくで端部がわずかに外反する気配をみせる点に特徴がある。下位は直線的にそぼまる。口縁高と胴屈曲部には突帯を廻らし、先の鋭いヘラで切りつけるように深い刻目を施す。口縁部突帯の上面はナデで平坦にし、ヘラ刻みの際につぶれて雑な感じを与える。調整は胴屈曲部以上を内外面ヨコ方向ハケ目のあと内面ナデ、以下は内外面ともナデで仕上げる。また内面の屈曲部と口縁部を指でおさえている。色調は黄褐色で、外面の胴部突帯下にススが付着、内面の胴部下位約 $\frac{1}{3}$ に炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を多く含む。

284は口頸部が発達した壺。口頸部を約 $\frac{2}{3}$ 周打ち欠いている。平底で胴部はあまり肩が張らずに立ち上がる。頸部は胴部から反転するように屈曲して立ち上がり、端部がやや折れ気味に短かく外反して口縁部をつくる。頸胴間には部分的に沈線が残るが、大部分はヘラミガキの際に消されている。調整は口縁部ヨコ方向へラミガキ。頸部は外面タテ方向へラミガキ、胴部は肩位ヨコ方向から下位タテ方向へラミガキ。頸部および胴部内面はナデ。底部は内外面ともナデ、周囲を指でおさえている。色調は明褐色で部分的に黄灰色を呈し、内面胴部に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

## S A42支石墓 (Fig. 117, PL. 99)

289の蓋壺は胴部上位が屈曲せず、平底から直線的に開いて立ち上がり、口縁高と胴部上位に刻目突帯を廻らす。刻目は先の鋭いヘラを切りつけるように用いており、その際の傷が器面に残っている。調整は胴部外面が板状工具によるタテ方向ナデ、胴部内面および底部内外面をナデ。色調は褐色。胴部外面で口縁下約 $\frac{2}{3}$ までススが付着し、内面では底部から胴部約 $\frac{1}{3}$ の高さまで炭化した有機物が付着する。胎土に砂粒を多く含む。

290は大型の壺。口縁部約 $\frac{1}{4}$ 周をわずかに打ち欠く。底部はやや厚めの平底で、胴部は直線的に開いて立ち上がりつよく肩が張る。頸部は胴部と一体化する方向にあり、かすかな段をなすが、とくに沈線等で区分することはなくつよく内傾して伸びる。口縁部は頸部からかるく折れて外反する。調整は口縁部ナデ、頸部外面はタテ方向のあと粗くナナメ方向へラミガキ、胴部外面は肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向へラミガキに変わる。内面は頸部ヨコ方向へラミガキのあと頸部および胴部内面を板状工具によりナデており、頸部の一部に板小

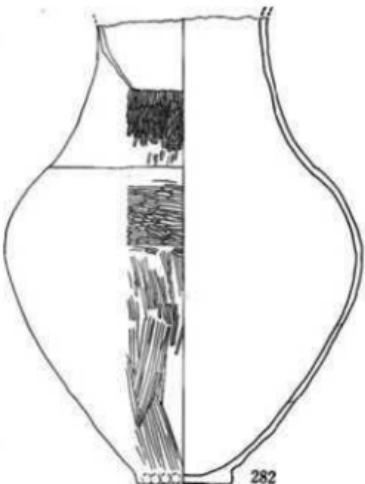
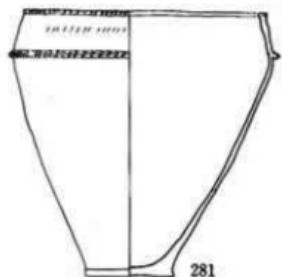
S A38

281 蓋(蓋) 口徑 26.0 扁曲部徑 28.8

85001985 底徑 9.5 器高 28.6

282 身(蓋) 頸徑 28.4 腹徑 38.0

85001984 底徑 10.1 殘高 50.2



S A41

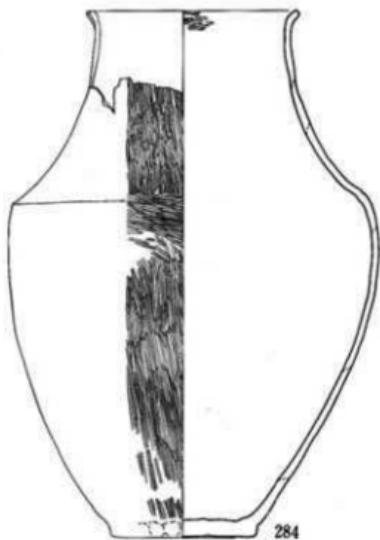
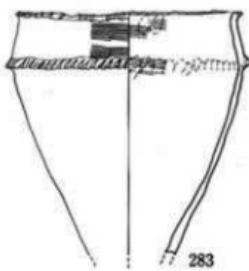
283 蓋(蓋) 口徑 24.3 扁曲部徑 26.3

85001987 殘高 26.1

284 身(蓋) 口徑 22.8 頸徑 37.5

85001986 腹徑 39.7 底徑 15.4

頸高 20.2 器高 56.5



0 20cm

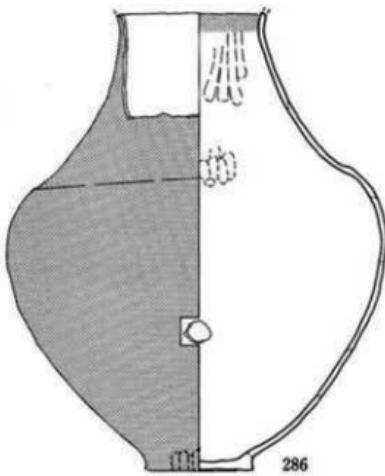
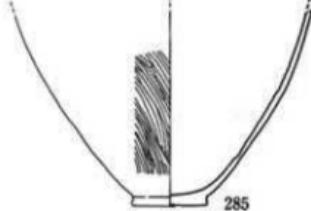
Fig. 116 S A38 · S A41 支石墓出土壺棺 (3)

砾石B遺跡

S A30

285 蓋(蓋) 底径 10.9 残高 23.1  
85001664

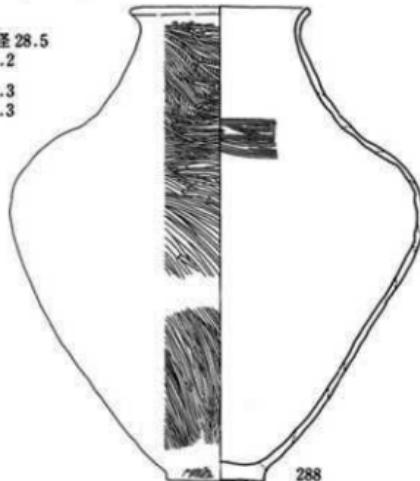
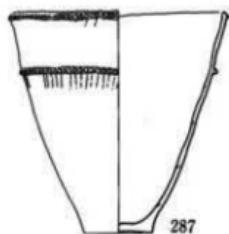
286 身(蓋) 頸徑 45.8 腹徑 54.6  
84000366 底徑 15.5 残高 66.1



S A42

287 蓋(蓋) 口徑 31.8 腹突帶徑 28.5  
85001658 底徑 9.8 器高 32.2

288 身(蓋) 口徑 25.9 頸徑 39.3  
85001659 腹徑 59.8 底徑 14.3  
頸高 18.2  
器高 68.5



0 20cm

Fig. 117 S A30・S A42支石墓出土壺棺 (1/4)

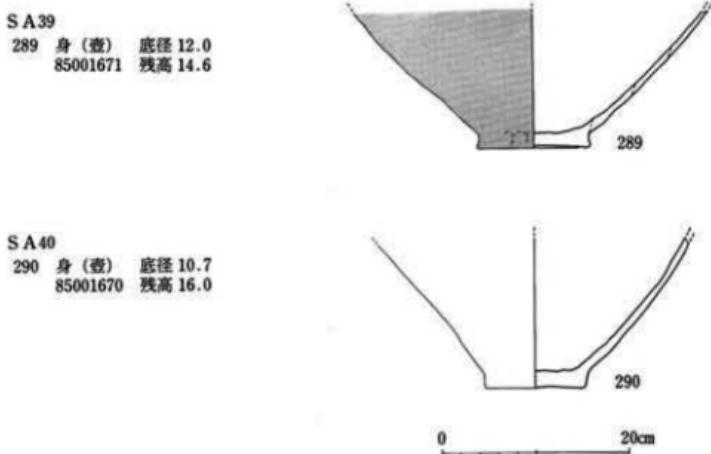


Fig. 118 S A39・S A40支石墓出土壺棺 (1/2)

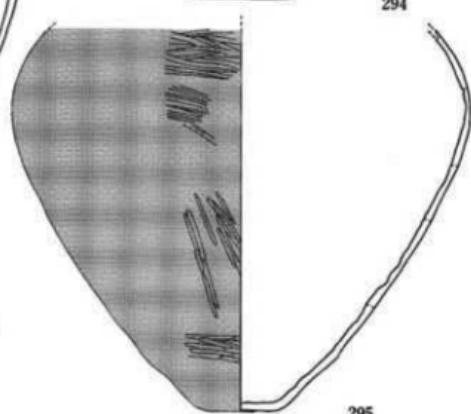
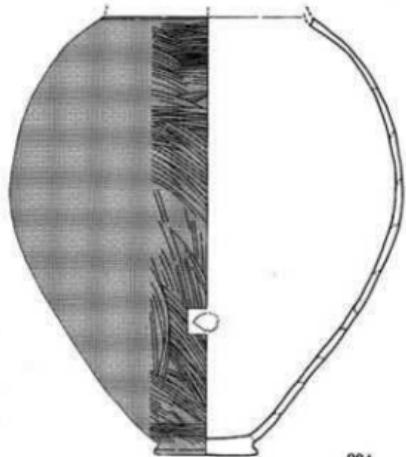
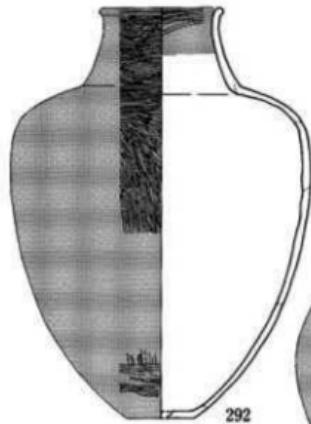
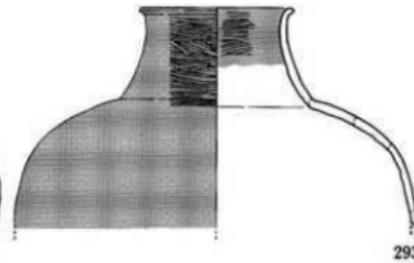
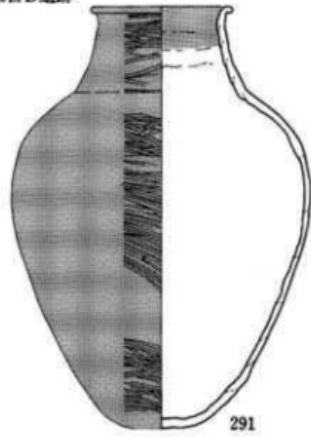
口縁がハケ目状に残る。底部は内外面ともナデ。色調は外面黄褐色、内面白褐色で、外面胴部に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含む。

#### その他壺棺に用いられた土器 (Fig. 119・120, PL. 99・100)

いずれもS T04古墳盛土中からの出土である。古墳築造の際に破壊されて盛土中に混じったもので、復元により全形のわかるものは含むが完形品はない。291は丹塗磨研の長胴壺。同一個体とみられる破片からの復元である。底部は丸底気味の平底、胴部はあまり肩が張らずに長く立ち上がる。頸部は胴部と明瞭な段をなして立ち上がり、端部が外にめくれて玉縁状の口縁部をつくる。調整は口縁部および頸胴底部外側全体にヨコ方向へラミガキを施し、頸胴間にはかるく沈線を残すがほとんどヘラミガキでつぶされている。内面はナデ。丹は頸部内面上半から外側全体に塗られ、赤褐色を呈す。ただし胎土自体は白褐色で、砂粒を多く含む。

292は丹塗磨研の長胴壺。やはり同一個体とみられる破片からの復元である。底部は薄い平底で未だ丸底の名残りをとどめる。胴部は長く立ち上がってつよく肩が張る。頸部は小さめで胴部とはっきり段をなして立ち上がり、そのまま端部をまるめて口縁部をつくる。調整は頸部内面上半から口縁部および頸部外側ヨコ方向へラミガキ。胴部外側は肩位ヨコ方向から下位に向かってタテ方向へラミガキに変わり、さらに底部付近で再びヨコ方向にミガキを施す。内面は頸部下半から胴底部を板状工具によるナデ。丹は頸部内面上半から口縁部および頸部外側ヨコ方向へラミガキ。

裸石B遺跡



0 20cm

Fig. 119 S T04古墳墳丘内出土壺棺1 (1/6)

る外面全体に塗られ、赤褐色を呈す。ただし胎土自体は褐色で外面胴部に黒斑があり、砂粒を含む。

293は胴部下半については不明である。胸部はやや肩が張り、径が大きい。頸部は胸部とはっきり段をなして立ち上がり、端部がそのまま短かく外にめくれて口縁部をつくる。調整は頸部内面上半から口縁部および頸部外面をヨコ方向ヘラミガキ、胴部外面は肩位ヨコ方向から中位ナナメ方向ヘラミガキ。内面は頸部下半から胴部を板状工具によるナデ。丹は頸部内面上半から口縁部および頸部外面にかけて赤褐色に塗られている。胎土自体は褐色で、砂粒を多く含む。

294は口頸部については不明である。胴部下半に穿孔が認められる。底部は外に張り出して厚く、胴部はあまり肩が張らずに立ち上がって最大径を中位や上におく。頸部は胸部と明瞭な段をなして立ち上がると思われ、さらに沈線を廻らせ区分している。調整は胴部外面で肩位ヨコ方向から下位に向かってナナメ→タテ方向にヘラミガキを施し、さらに底部付近を若干ヨコ方向にヘラミガキを行っている。胴部内面は上半が板状工具ナデ、胴部下半および底部内外面はナデで仕上げている。丹は胴部外面を赤褐色に薄く塗る。ただし胎土自体は褐色で胴部外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。

295も口頸部が不明である。底部は小さな平底ながら薄く、胸部との境にはっきりした稜をもたず、未だ丸底の名残りをとどめる。胸部はかなり外に開きながら立ち上がり、つよく肩が張る。頸部は胸部と明瞭な段をなすと推定する。調整は胴部外面で肩位ヨコ方向から下半でナナメ方向ヘラミガキに変わり、さらに下半および外底部に再びヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は胸部肩位を板具ナデ、中位以下底部までナデ。丹は胴底部外面全体に赤褐色に塗られている。ただし胎土自体は白褐色で、砂粒を多く含む。

296は胴部肩位から頸部のみ一部残存する。頸部が発達した比較的大型の壺である。胸部はつよく肩が張る。頸部は胸部と一体化する方向にありながらもヘラでかすかな段をつけて区分し、つよく内傾して伸びる。口縁部は頸部からそのまま外反して開くようである。調整は頸部内面上半をヨコ方向ヘラミガキ、頸部外面はタテ方向、胴部外面は肩位ヨコ方向にヘラミガキを施す。内面は頸部下半から胴部にかけてナデ。色調は外面が褐色または一部黄褐色で頸部に黒斑があり、内面は黄褐色である。胎土に砂粒を多く含む。

297は頸胴部が発達した丹塗磨研の壺。頸部上半から口縁部にかけて不明である。同一個体と思われる頸部と底部付近の破片から復元した。底部はやや薄い平底、胸部は直線的に外に開いて立ち上がり、つよく肩が張る。頸部は胸部と一体化する方向にあるが、ヘラミガキの際にかかるく段をつけて区分を明瞭にし、つよく内傾して伸びる。調整は頸部外面がタテ方向ヘラミガキ、胴部外面は肩位ヨコ方向で、以下もヘラミガキと思われるが器面が荒れて不明である。頸部内面および底部内外面はナデ。丹は外面にうすくかかり褐色または一部暗褐色、内面は白褐色。胎土に砂粒を多く含む。

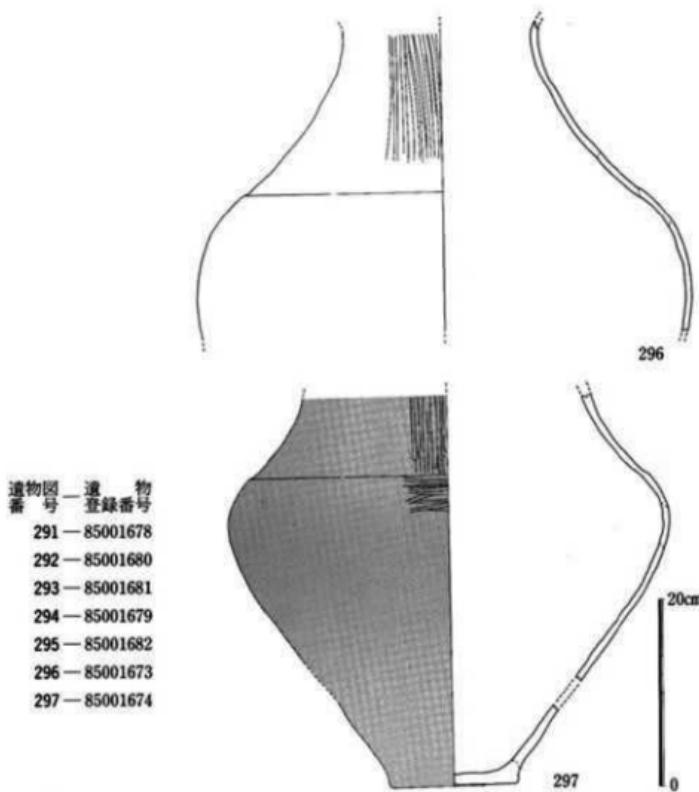


Fig. 120 S T04古墳内出土壺棺2 (左)

## b) 供獻土器 (Fig. 121・122, PL. 101~103)

支石基に伴って出土し供献品であることが明らかなものは小壺9点・小鉢1点 (Fig. 121) である。その他の多くはS T04古墳盛土中から出土しており、S T04古墳の築造によって破壊された支石基の供献品と考えられる。ある程度器形の知られる16点を図示した (Fig. 122)。

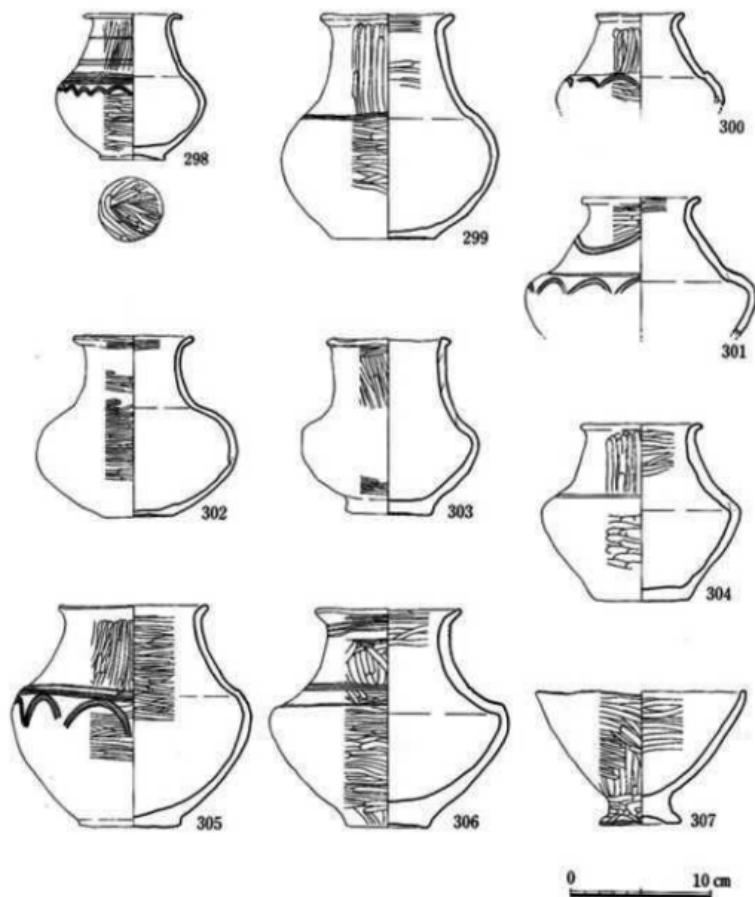
小壺は夜白式あるいは夜白式系統のもので、少なくとも礫石A遺跡のように前期末まで下るものはみられない。302・303・308~311のように玉縁状口縁部、直立気味頸部、丸底気味底部をもつ数例に古い要素が認められ、逆に時期が下ると沈線文様が加わり、口頸部が発達する傾向を示す。ここでは個々の物徴のみ述べ、編年等については後に総括でまとめる。

Tab. 13 支石墓供獻土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他	
121-298 8501647	S A27	壺	外口径 胴径 器高	7.0 10.6 10.5	頸部扁平は不明瞭で直線的に内傾。口縁部は水平に外に開く。胴最大径は中位やや上で、底部少し立ち上がる。頸部に沈線3条、胴部肩に二重連弧文24個。	口縁部外面ヨコヘラミガキ、頸部外面タテヘラミガキ。頸肩間に胴窓及び底部の外側ヨコヘラミガキ。頸部内面はていねいなナデ。褐色で胴部外面に黒斑、砂粒を含む。
—299 8501643	S A26	壺	口径 胴径 器高	9.2 15.2 16.1	口縁部は短く折れ気味に開き、頸肩間に複数2条沈線をめぐらす。胴部は丸味をもち、最大径は中位よりやや上。	外表面は口縁部と胴部ヨコヘラミガキ、頸部タテヘラミガキ。内面は口縁部ヨコヘラミガキ、胴部はていねいなナデ。褐色で砂粒を含む。
—300 8501639	S A30	壺	口径 胴径 器高	6.8 11.9 6.9	胴部は肩が強く張り出す。頸部は段をなしてきつく内傾し、口縁部が短く外反する。胴文肩位に二重連弧文。	口縁部ヨコヘラミガキ。外表面は頸部タテ。胴部ヨコ方向のヘラミガキ。頸肩部内面ナデ。暗褐色で砂粒を含む。
—301 8501644	S A32	壺	口径 胴径 器高	8.1 16.4 9.8	胴部は肩が強く張る。頸部は屈曲して直線的にきつく内傾して伸び、口縁部が大きく外反。頸肩間に沈線2条、二重連弧文を頂部5個、胴部肩12個前後。	外表面及び口縁部内面ヨコヘラミガキ、頸部内面ナデ。褐色で砂粒を含む。
—302 8501639	S A29	壺	口径 胴径 器高	8.5 14.3 12.9	口縁部はヘラミガキの擦やや段をつけて肥厚外反。頸部は明瞭な屈曲をなさず直線的に立ち上がる。底部は丸味をもちながらつぶれ、底部は薄く丸底にちかい。	口縁部と頸肩部外側ヨコヘラミガキ、内面及び外底部ナデ。褐色で砂粒を含む。
—303 8501630	S A29	壺	外口径 胴径 器高	8.7 12.5 12.6	頸部はほぼ直立し、口縁部はやや波うちながら口部をなでて玉縁状に丸くおさめる。胴部はつぶれて肩が張り、底部は円板状に立ち上がる。	口縁部付近ヨコヘラミガキ、外表面は頸部タテ。頸部ヨコ方向へラミガキ。頸肩部内面及び外底部ナデ。黄褐色で砂粒を含む。
—304 8501645	S A43	壺	口径 胴径 器高	8.3 14.1 12.6	頸部は内傾し、口縁部は短く外反して口縁部を丸くおさめる。頸肩間に沈線1条は完全に1周しない。胴部は強く肩が張り、直線的にすばまる。	口縁部ヨコヘラミガキ。頸部外側タテ、頸肩部内面ヨコヘラミガキ。内面は頸部上辺ヨコヘラミガキ、以下胴部までナデ。底部内面ともナデ。褐色で砂粒を含む。
—305 8501634	S A33	壺	口径 胴径 器高	10.2 17.0 15.9	頸部は内傾し、口縁部で短く外反する。頸肩間に沈線を引き、さらに胴部肩に沈線3条と三重連弧文12個。胴部はやや肩が張る。	黒磨研。口縁部ヨコナデ。頸部は外側タテ、内面ヨコヘラミガキ。胴部は外側と内面に上半ヨコヘラミガキ。胴部下半と外底部ナデ。外表面黒褐色。内面褐色で砂粒を含む。
—306 8501636	S A33	壺	口径 胴径 器高	10.4 16.9 15.4	頸部は強く内傾しながら外反して口縁部につづく。口縁下3条、頸途中2条の沈線。頸肩間に沈線2条を引き。胴部は肩が強く張る。底部は分厚い。	口縁部と胴部外側ヨコヘラミガキ。頸部と胴底部付近タテヘラミガキ。頸肩部内面及び外底部ナデ。明褐色で胴肩に丹塗痕があり外表面大きな黒斑。砂粒を含む。
—307 8501635	S A33	鉢	口径 底径 器高	14.8 5.7 9.6	底部は脚台状に外に開き、体部はやや内湾気味に開いて立ち上がる。	体部は外表面下半タテヘラミガキのあと上半ヨコヘラミガキ、内面ヨコヘラミガキ。底部は横面ヨコヘラミガキ、裏面ヘラケズリ。褐色で砂粒を含む。
122-308 87009433	S A34付近	壺	口径	9.2	頸部は直立し、口縁部は外反して肩部を玉縁状に丸める。	口縁部および頸部外表面は丹塗のあとヨコヘラミガキ。明赤褐色で砂粒を少し含む。
—309 87009423	S T04石室 埋土中	壺	口径 底径	6.0 5.6	頸部は直立氣味で、口縁部は短く外反する。胴部は頸部と明瞭な段をなさず、やや肩が張る。頸肩間に沈線5条めぐる。	口縁部および外表面丹塗。口縁部と胴部外側ヨコヘラミガキ。頸部外側タテヘラミガキ。頸肩部内面ナデ。朱褐色で砂粒を含む。296と同一個体の可能性あり。
—310 8501646	S A25付近	壺	胴径 底径 器高	11.7 5.6 5.5	胴部は球状。底部はやや丸底氣味。	頸部外側ヘラミガキ。内面ていねいなナデ。黒磨研か。黒褐色で砂粒を含む。

## 標石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他	
122-311 8501632	S A29付近	壺	口径 胴径 器高	9.6 13.9 13.8	頸胸間は段をなしてその上に沈線をめぐらせる。頸部は強く内傾。口縁部は大きく外反して端部を丸くおさめる。肩部は球状で平底。	口縁部ヨコヘラミガキ。外面は頸部タテ。胴部ヨコヘラミガキ。頸胸内面及び外底部ナデ。褐色で砂粒を含む。
—312 8501641	S T04東北 埴丘中	壺	口径 胴径 器高	6.9 11.9 11.3	頸部は内傾し、口縁部でゆるく外反。頸胸間に沈線1条をめぐらせ、肩部は丸味をもちらがらせ最大径を中位やや上におく。底部はやや厚い。	口縁部ヨコヘラミガキ。頸部外面タテ。胴部外面ヨコヘラミガキ。外底部ヨコヘラミガキ。頸胸部内面ナデ。外面褐色または部分的に黒褐色。内面暗褐色。砂粒を含む。
—313 8501633	S A29付近	壺	口径 胴径 器高	8.6 16.0 14.5	頸部は強く内傾して伸び、口縁部が短く外に開く。頸胸間に3条(以上)の沈線をおき、肩部は丸味をもちらがらせ最大径を中位やや上におく。底部立ち上がる。	口縁部及び頸胸部外面ヨコヘラミガキ。外底部と頸胸部内面ナデ。外面褐色。内面黄褐色で砂粒を含む。
—314 87009428	S A41付近	壺	口径 器高(復)	6.8 13.3	口縁部と底部を同一個体として復元。肩部はつよく内傾し、口縁部はやや肥厚して短く外反し、肩部を丸くおさめる。底部は薄いので、肩部はつぶれて外につよく張る。	口縁部ヨコヘラミガキ。頸部は外面タテヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。暗黃褐色で砂粒を多く含む。
—315 8501648	S T 04 石室塗 埴土中	壺	口径 胴径 器高	6.6 11.9 10.6	頸部は強く内傾。口縁部はやや肥厚してゆるく外反。頸胸間は段をつけて、沈線3条をめぐらす。肩部はつぶれて強く肩が張る。	口縁部から頸胸部外面にかけヘラミガキか。頸胸部内面ナデ。器面荒れて調整不明瞭。暗褐色で砂粒を含む。
—316 8501637	S A24付近	壺	胴径 残高	12.0 10.1	頸部はかすかな段をつくり、内傾して長く伸び、肩部が強く張る。肩部3条、頸胸間2条の沈線と肩部間に三重連弧文を描く。	外面ヨコヘラミガキ。内面はナデか。頸胸間の段は頸部ヨコヘラミガキの隙間につける。褐色で砂粒を含む。
—317 8501642	S A28付近	壺	口径 胴径 残高	9.7 15.3 13.8	肩部はあまり張らず、頸部は不明瞭な縦屈曲をなして直線的に内傾し、口縁部で短く外反する。	口縁部内面から外面全体にかけてヘラミガキ。ただし摩耗。頸胸部内面ナデ。黄褐色で砂粒を含む。
—318 8501649	S T04西南 埴丘中	壺	口径 胴径 器高	10.2 17.6 10.6	頸部は肩部とかかる段をなし内傾して長く伸びる。口縁部はゆるく外反して端部を丸く巻き込む。肩部は肩が張る。	口縁部ヨコヘラミガキ。頸部外面タテ。肩部外面ヨコヘラミガキ。頸胸部内面ナデ。黄褐色で頸胸部外面に黒斑。砂粒を含む。
—319 8501638	S J24付近	壺	口径 残高	6.6 8.5	肩部はあまり肩が張らず、不明瞭な境をなして頸部が内傾して長く伸び、口縁部が短く外反する。	器面が荒れており調整不明瞭。褐色で砂粒を多く含む。
—320 8501650	S T 04 埴丘中	壺	口径 残高	10.8 10.9	頸部はやや内傾し、口縁部は短くゆるく外反。頸胸間は段をつけて、沈線2条をめぐらす。肩部はあまり張らずに丸味をもたらす。肩部に二重連弧文。	口縁部から頸胸部外面へラミガキ。頸胸部内面ナデ。器面荒れている。黄褐色で砂粒を含む。
—321 8501631	S A29付近	壺	胴径 底径 器高	10.4 4.5 12.0	頸部が明顯に屈曲し、やや内傾して長く伸びる。頸胸間に沈線2条をおき、肩部は肩が張り肩位に二重連弧文。底部はやや厚く立ち上がる。全体に薄手で小型。	頸胸部外面ヨコヘラミガキのあと沈線へラミガキ。内面ナデ。外底部ナデ。外底部ナデ。外面褐色。内面黄褐色で砂粒を含む。
—322 8501652	S T04北側 埴丘中	壺	胴径 残高	15.5 9.6	頸胸間に沈線2条をおき、頸部は強く内傾するか。肩部は肩が張り肩位に二重連弧文。底部はやや厚く立ち上がる。	肩部外面ヨコヘラミガキ。内面ナデ。外底部ナデ。外底部ナデ。外面褐色。内面黄褐色で砂粒を含む。
—323 8501640	S A30付近	壺	胴径 残高	14.9 4.2	肩部はつぶれて肩が強く張り出す。頸胸間4条。胴径最大部に2条の沈線を2さき、その間に三重連弧文をヘラ描き。	肩部は外面ヨコヘラミガキのあとヘラ描き、内面ナデ。白褐色で砂粒を含む。



- |                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| S A 26支石墓.....299     | S A 32支石墓.....301         |
| S A 27支石墓.....298     | S A 33支石墓.....305・306・307 |
| S A 29支石墓.....302・303 | S A 43支石墓.....304         |
| S A 30支石墓.....300     |                           |

Fig. 121 支石墓供獻土器 1 (1/2)

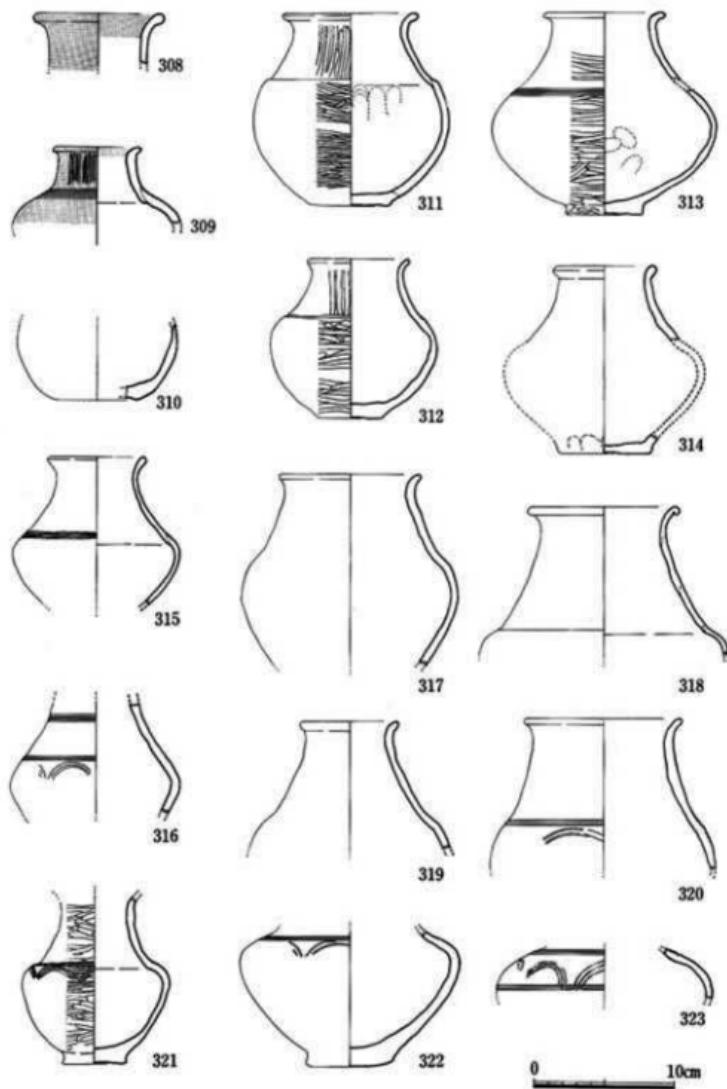


Fig. 122 支石墓供獻土器 2 (3/4)

## C) SK21土壤出土土器 (Fig. 123, PL. 105)

刻目突帯文様土器の新しい様相を示す一群で、比較的まとまっているので一括してとりあげる。他に縄文晚期前半の土器も数点あるが混入とみて、次の「その他の土器」で扱う。

器種は壺が主で、他に壺・高環・鉢がみられる。

Tab. 14 SK21土壤出土土器一覧表

Fig. 回番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
123-324 860633	SK21	壺	口径 残高	22.6 24.3	口縁部高と胴部上位に刻目突帯。胴部は屈曲せず、内湾して立ち上がる。
—325 870838	〃	壺	口径 残高	22.4 9.5	口縁部高と胴部上位に刻目突帯。胴部上位は屈曲せず、内湾気味に立ち上がる。
—326 870838	〃	壺	口径 残高	22.4 2.5	口縁部は強く内湾し、口縁部に上面平坦な刻目突帯をめぐらす。
—327 870838	〃	壺	口径 残高	18.8 4.3	口縁部は強く内湾し、口縁部に上面平坦な刻目突帯をめぐらす。
—328 870832	〃	壺	— 残高	— 7.6	胴部上位は屈曲せず内湾気味に立ち上がる。口縁部高と胴部上位にやや高く突出した刻目突帯。
—329 860631	〃	壺	底径 残高	7.2 9.2	底部は小さめで突出。胴部は低くつぶれると思われる。
—330 860630	〃	壺	底径 残高	9.8 4.2	胴部は低くつぶれると思われる。
—331 860628	〃	高環	— 残高	— 4.1	环部と胴部との接合部に刻目の無い突帯1条。
—332 870837	〃	鉢	口径 残高	28.0 3.2	口縁部に断面三角形の突帯をめぐらす。体部は浅い。

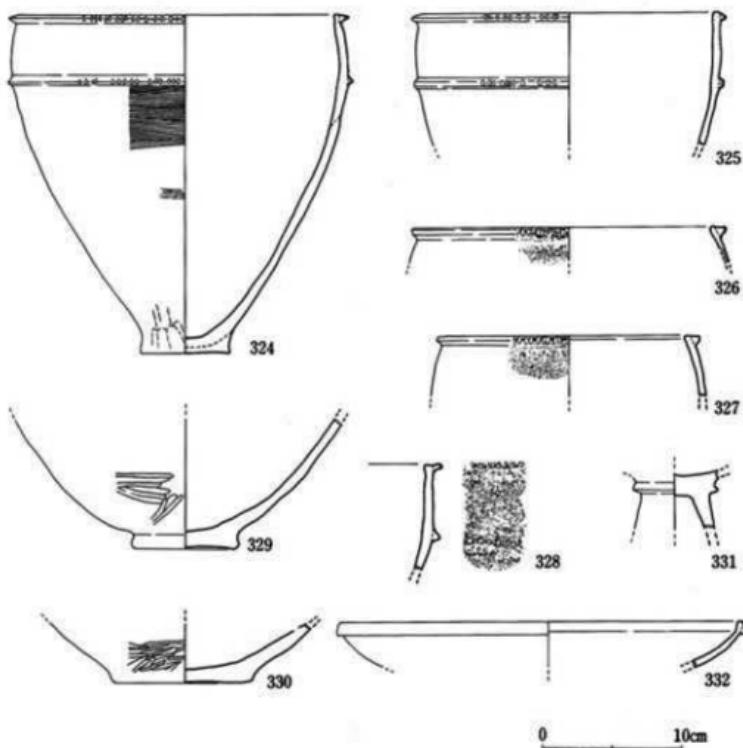


Fig. 123 SK21土壤出土土器 (4)

## d) その他の土器 (Fig. 124・125, PL. 104・105)

古墳盛土中や包含層出土で本来の構造の帰属が明らかでない小破片を一括してとりあげる。全体の出土傾向として、支石墓群周辺では支石墓内部主体が破壊された際の蓋斐片が多く、他に縄文晩期前半に遡る深鉢が混じるのに対し、SK21土壤周辺およびその北側III区包含層ではSK21土壤出土土器と同時期の刻目突帯文系土器でも比較的新しい時期のものに限られる。

器種は深鉢・甕が殆どで、他に鉢・高环・浅鉢が若干ある。

まず縄文晩期前半(黒川式期)では派鉢333～338は338が上位でかるく屈曲する以外は体部が直に開く。333・334は口縁部を突起で飾る。鉢は339の1点のみ。いずれも器面調整の条痕をつ

よく残す。

斐は、縄文晩期後半（山ノ寺式・夜白式期）～弥生前期では340～346がその中でも古相を示す。340～345は胴部が直線的あるいは口縁部でやや外反気味に開き、345は口縁部下に刻目突帯文をもつ。340～343の場合は刻目が口縁部角に直接施され、また344・346の刻目突帯は口縁部からやや下がった位置にある。いずれも刻目は竹管を押しあてたようにつけて丁寧で、調整は条痕をつよく残す。

346～350は胴部上位が屈曲し、口縁部と屈曲部に刻目突帯をめぐらせ定形化している。条痕調整が顕著である。

351～357は刻目突帯文系斐の新しい段階のもので突帯の位置は完全に口縁部の高さと一致して見かけは平坦となり、刻目の付け方もよわく、また器面調整もナデ仕上げにかかる。注意すべきは351・352の如意形口縁斐の存在で、板付式斐との時間的並行関係が問題になるところである。

高环は板付I式期の3601点のみ。

浅鉢361～364は大型と小型の2種がある。

Tab. 15 縄文晩期～弥生前期土器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
124-333 8708394	S K21 埋土中	深鉢		口縁部にリボン状突起。体部はやや開きながら真直ぐ伸びる。	内面ヨコ条痕。外面ヨコ条痕のあとテナ条痕。内面黒褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。
-334 8709465	S T04西南 盛土中	深鉢		口縁部にリボン状突起。	内外面とも条痕。明赤褐色で砂粒を含む。
-335 8709445	S A29 石蓋上	深鉢		体部は開きながら真直ぐ伸びる。口縁部はナデて薄い。	内外面ともヨコ条痕。明赤褐色で砂粒を含む。
-336 8705286	検出面	深鉢		体部はやや開きながら真直ぐ伸びる。	外面ヘラ状工具によるヨコナデ。内面ナデ。内面茶褐色。外面褐色で砂粒を含む。
-337 8709419	S T02 石室埋土中	深鉢		体部は開きながら真直ぐ伸びる。	内外面ともヨコ条痕で外面にスス付着。灰褐色で砂粒を少し含む。
-338 8709418	検出面	深鉢		体部は口縁部下で軽く屈曲する。	内外面ともヨコ条痕。明黄褐色で砂粒を少し含む。

## 礫石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
124-339 8708391	S K21 埋土中	鉢	口径 23.0 残高 8.4	体部は内湾して立ち上がり上半で真直ぐ伸び、口唇部を丸める。	内外面ともヨコ条痕。茶褐色でやや粗い砂粒を含む。
-340 8709963	S T01 石室埋土中	甕		体部は直線的に伸び、口唇部外角に刻目。	内外軽くヨコ条痕。外面ヨコ条痕のあと下部をタテ条痕。明褐色で粗い砂粒を多く含む。
-341 8709964	検出面	甕		体部は直線的に伸び、口唇部やや肥厚させて外角に刻目。	内外とも条痕。褐色で砂粒を含む。
-342 8709965	S T04 盛土中	甕		口唇部外角に刻目。	内外面とも条痕。明褐色で砂粒を含む。
-343 8709459	S T04南側 盛土中	甕		口唇部わずかに外反気味で、口唇部に刻目。	内外面ともヘラ状工具ヨコナゲ。褐色で砂粒を含む。
-344 8708393	S K21 埋土中	甕		体部は直線的に伸び、口縁下に刻目突帯。	内外面ともヨコ条痕。茶褐色で粗い砂粒を含む。
-345 8708400	S K21 埋土中	甕		体部ほぼ直線的に伸びる。胴屈曲部に刻目突帯をもつが、屈曲しない。	内外面ともヨコ条痕。暗褐色でやや粗い砂粒を多く含む。
-346 8606620	Ⅲ区 黒色土層	甕	口径 19.3 残高 5.6	胴部上位がかるく屈曲して内傾し、口縁下に刻目突帯をめぐらす。口唇部は薄く尖る。	内面から口唇部ナデ。外面はタテ条痕で、口縁下突帯までスス付着。赤褐色で砂粒を含む。
-347 8709448	S T04西南 盛土中	甕		胴部上位がかるく屈曲し、刻目突帯をめぐらす。	内面ヨコ条痕。外面は口縁下ヨコ条痕のあと下部タテ条痕。さらに突帯。褐色で砂粒を多く含む。
-348 8709413	Ⅲ区 黒色土	甕		胴部上位がよく屈曲して短く内傾。口縁部やや下と胴屈曲部に刻目突帯。	内面ヨコ条痕。外面は口縁下ヨコ条痕のあと下部タテ条痕。さらに突帯。暗褐色で砂粒を含む。
-349 8504611	S T04西側 盛土中	甕	口径 20.6 残高 11.1	胴部上位が軽く屈曲し、内傾する。口縁部やや下と胴屈曲部に刻目突帯。	内面ヨコ条痕。外面は口縁下ヨコ条痕のあと下部タテ条痕を施してから突帯。全外面にスス。暗褐色で砂粒が多い。
-350 8504610	S T04 盛土中	甕	口径 20.2 残高 7.3	胴部上位が軽く屈曲し、内傾する。口縁部やや下と胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともヨコ条痕。外面は口縁部までスス付着。暗褐色で砂粒が多い。349と同一個体の可能性もあり。
125-351 8504612	S T04 盛土中	甕	口径 23.5 残高 6.8	口縁部は弱く外反し、口唇部外角に刻目。	内面ナデ。外面はヘラ状工具タチナデ。暗褐色で微砂粒を多く含む。

## III. 遺物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
125-352 8600621	田区 黒色土	甕	口径 13.8 残高 4.9	口縁部外反し、口唇部に刻目。	内外面ともヨコナデ。口縁部から外面にスス付着。内面褐色、外面黒褐色で砂粒を多く含む。
—353 8709469	田区 黒色土	甕	口径 16.6 残高 3.1	胴部上位は屈曲して内傾し、口縁高に刻目突帯をもつ。口唇部はナデて平坦。	内外面ともナデ。内面茶褐色、外面黒褐色で砂粒を多く含む。
—354 8600622	田区 黒色土	甕	口径 24.4 残高 4.4	胴部は外に向いて直線的に伸び、口縁高に刻目突帯。口唇部はナデて平坦。	内面ナデ、外側タテナデ。赤褐色で砂粒を少し含む。
—355 8600625	田区 黒色土	甕	口径 18.0 残高 17.2	胴部は外に開きながらほぼ直線的に伸びる。口縁部高に、刻目突帯をめぐらす。	内外面ともナデ。外面にスス付着。黄褐色で砂粒を含む。
—356 8709455	ST04西南 盛土中	甕	底径 9.6 残高 21.5	底部はあまり外に張らず、胴部は直線的に開く。	内面ナデ、外側不定方向条痕。茶褐色で砂粒を含む。
—357 8709412	田区 黒色土	甕		胴部は屈曲せずに伸び、口縁高と胴部上位に刻目突帯。	内外面ともナデ。内面茶褐色、外側褐色で砂粒を含む。
—358 8709465	田区 黒色土	甕	底径 9.4 残高 3.2	底部は外に強く張り出す。	内外面ともナデ。明褐色で粗い砂粒を多く含む。
—359 8600623	田区 黒色土	甕	底径 9.0 残高 5.0	底部は外に強く張り出す。	胴部外側タテハケ、内面ナデ。褐色で砂粒を少し含む。
—360 8709415	ST01西南 黒色土	高坏		筒部に突帯1条。	坏部内面及び筒部外側ナデ、脚部内面ヘラケズリ後ナデ。明褐色で粗い砂粒を多く含む。
—361 851686	ST04西南	鉢		口縁部は屈曲部に沈線をおいて大きく外反する。	坏部は内外面ともナデ。赤褐色で砂粒多く含む。
—362 8600624	田区 黒色土	鉢	口径 35.0 残高 5.2	口縁部は屈曲して短く外反する。	内外両面丹塗磨研。胎土は褐色で砂粒を含む。
—363 8709457	ST04南側	鉢	口径 12.0 残高 3.2	小型鉢。口縁部は屈曲して短くやや外反する。	内外面ともヨコヘラミガキ。外側明褐色。内面黒褐色で砂粒を含む。
—364 8501653	ST04 盛土中	鉢	底径 8.3 残高 8.2	脚部は直線的に外に向く。	体部内外面ともヘラ状工具ナデ。脚部内外面ともタテナデ。暗褐色で砂粒を含む。

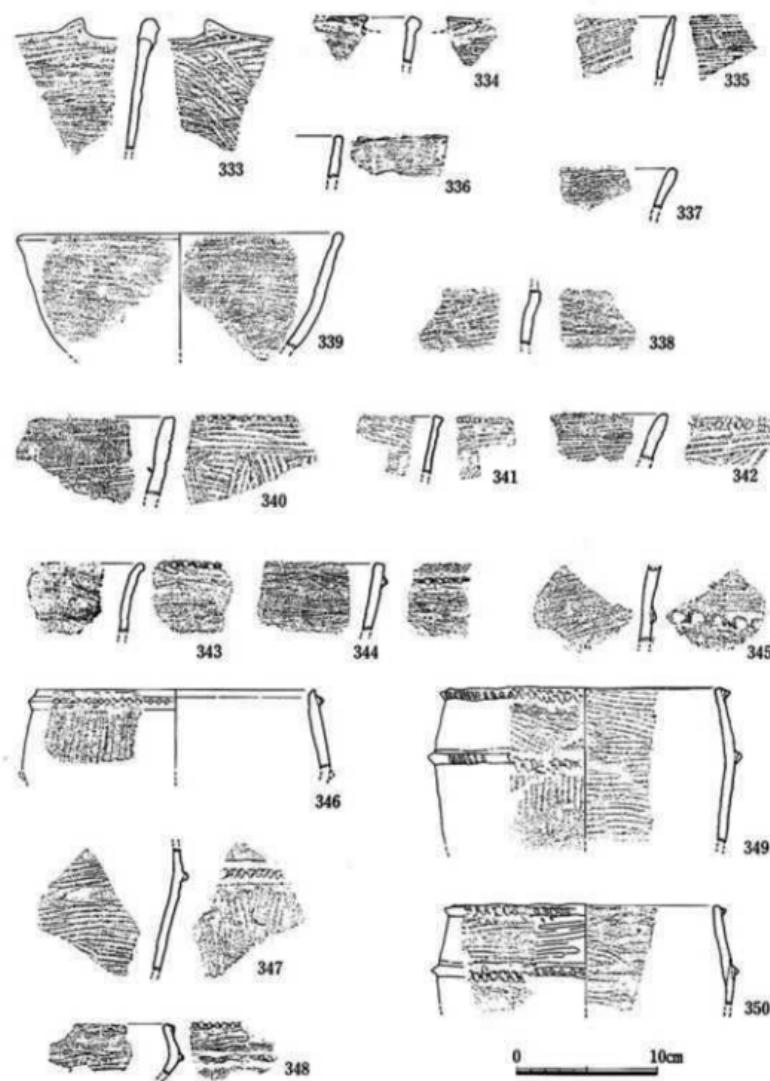


Fig. 124 繩文晩期～弥生前期土器 1 (1/2)

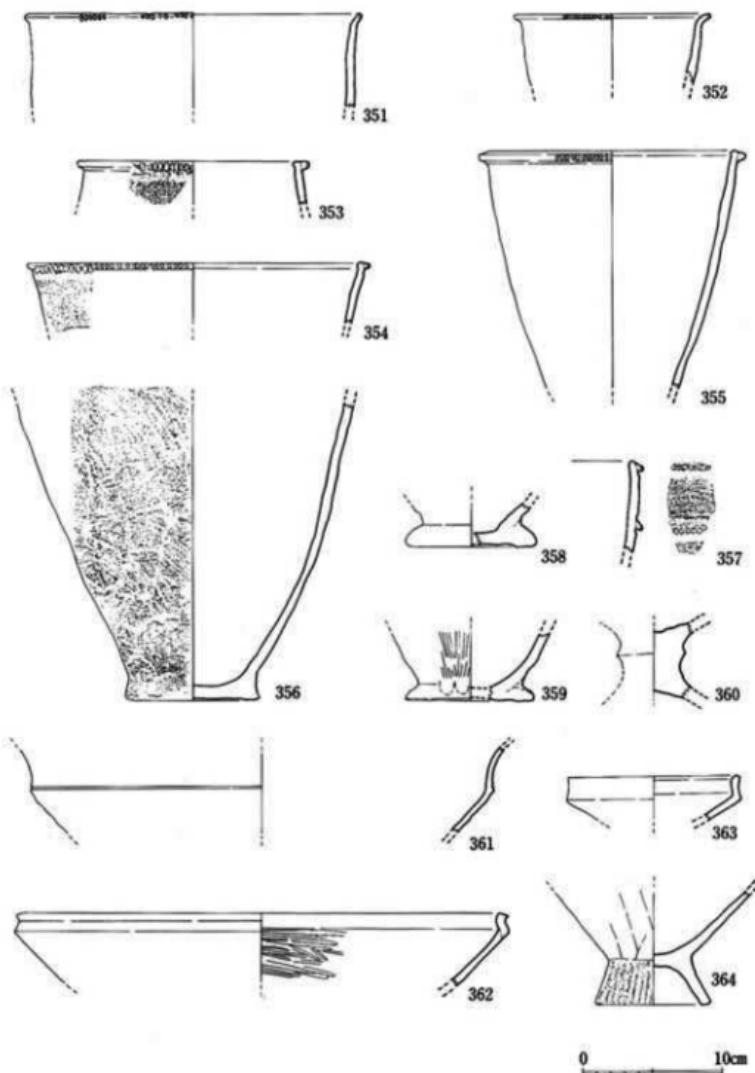


Fig. 125 繩文晚期～弥生前期土器 2 (1/2)

## 石B遺跡

### (2) 中・後期の土器

#### a) 壺棺 (Fig. 126, PL. 107)

##### S J 13壺棺

365の上蓋は破壊により底部を欠失する。胸部は全体に丸味をもって上位径がややしまり、中位からかなり下がった位置と口縁部との間にそれぞれ、断面三角形にちかい突帯を各1条廻らす。口縁部はやや肥厚し、胸部から折れて直線的に外反する。調整は口縁部ナデ、胸部外面はタテ方向ハケ目、胸部内面は上位を不定方向ハケ目、中位以上をナデしている。色調は褐色または黄褐色で外面に黒斑があり、胎土に砂粒を含む。口径は45.4cm、残存高70cm。

366は下蓋。底部は不安定な平底で、胸部は中位に突帯を廻らせて下半が直線にすぼまる。口縁部は内面で同部とかるく段をなすが、外面ではとくに段をみせずに胸部からそのまま曲線的に外反し、その間に突帯を1条廻らす。調整は口縁部ナデ、胸部は外面タテ方向、内面は基本的にヨコ方向のハケ目を施す。色調は褐色で外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。口径は54.4cm、器高は88.2cm。

上・下蓋とも弥生後期前半の三津式にあたる。

##### S J 14壺棺

下蓋は現在、保管上の不注意から他資料と混乱があるため、上蓋のみ掲示する。上面覆土から出土した小型内行花文鏡は本壺棺の副葬品であったと推定される。

367は上蓋・口縁部はなぜか全周を打ち欠き、また底部を破壊により欠失する。胸部は中位に突帯1条を廻らし、上位で内湾する。全体に歪みが大きい。調整は胸部外面をタテまたはヨコ方向ハケ目、内面はハケ目のあと板状工具によるナデ。色調は黄褐色または橙褐色で、外面に黒斑がある。胎土に砂粒を含む。口径45.6cm、残存高73.2cm、胸突帯径51.2cm。

#### b) その他の土器 (Fig. 127, PL. 106)

S C 05石棺墓の供獻品1点、S K 16土壤の出土品一括のほか、S T 04古墳盛土中などから弥生中・後期の土器が若干出土している。

368～370の壺はS T 04古墳盛土中出土であり、支石墓の造営が終わったのちも弥生中期初頭から中期後半までこの遺跡が何らかの形で生活の場に利用されていたことを示すものとして図示しておく。

長頸壺371はS C 05石棺墓の頭位にあたる東側から出土した。完形品で、S C 05石棺墓の棺外供獻品とみてよいであろう。胸部は低くつぶれ、底部は不安定ながらいくぶん平底の名残りをとどめ、頸部がやや外反気味に細長く伸びる。丁寧なヘラミガキを施す薄手の精良土器である。

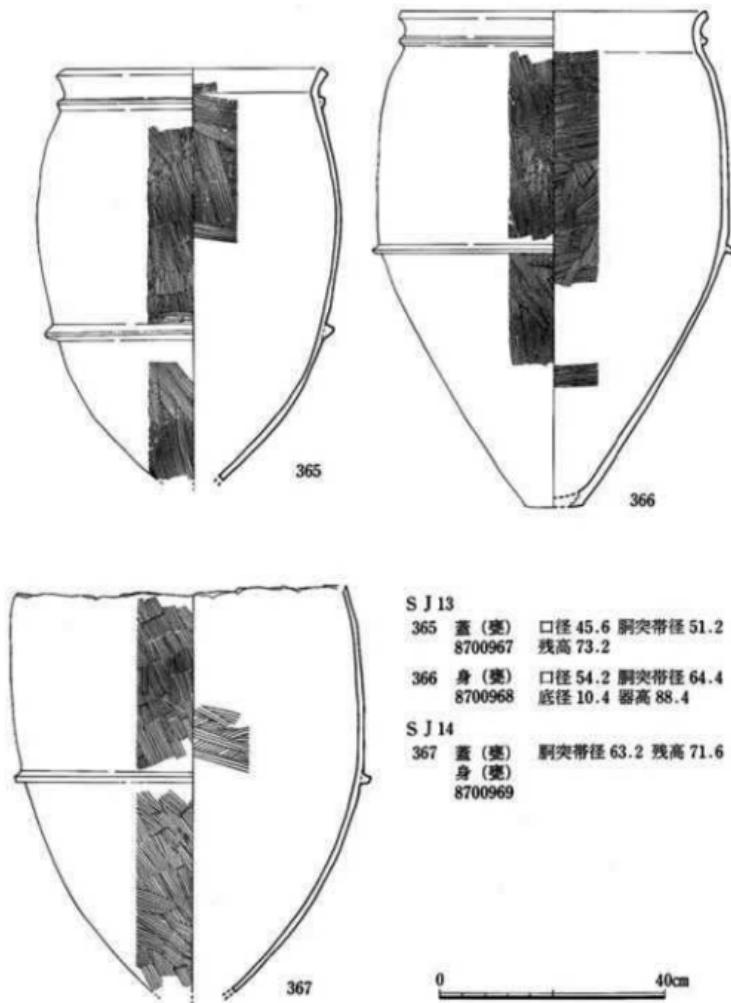


Fig. 126 S J 13 • S J 14 麢棺 ( $\frac{1}{10}$ )

## 縄石B遺跡

372～375はSK16土壙から、他の鉄器類に伴なって壙底にちかい黒色埋土層下位から出土した。完形品ではなく、しかも時期が混じっており、土壙の埋没途中で混入したものであろう。372は袋状口縁壺の胴部、373壺は口縁部が折れて外反し、中期後半である。374・375の壺は「く」字口縁で、底部は丸底気味で374は長胴化する。弥生後期末に位置し、SK16土壙の時期を示すものであろう。

Tab. 16 弥生中・後期土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
127-368	ST04 盛土中	壺	外口径 残高	23.0 2.8	口縁部は強く内湾し、断面三角形の刻目突帯をめぐらす。
-369	ST04西南 盛土中	壺	外口径 残高	22.0 4.5	L字形口縁。
-370	ST04西南 盛土中	壺	口径 残高	25.2 9.1	口縁部は屈曲して外に大きく開く。胴部やや肩が張るか。
-371	SC05 棺外供獻	壺	口径 胴径 器高	7.6 19.9 28.8	細くやや外反気味に伸びる長頸で、胴部は中位で強く外に張り、底部にかすかに平底の名残り。
-372	SK16 暗褐色 砂質土	壺	胴径 底径 器高	18.0 6.0 13.7	長頸袋状口縁か。頸胴間と胴部中位に凹帯。
-373	SK16 8600063 黒色粘質土	鉢	口径 器高	23.4 16.1	上向L字形口縁で端部に丸味をもつ。胴部は上位でやや貼り、平底。
-374	SK16 8600062 黒色粘質土	壺	口径 器高	18.6 19.7	口縁部は明瞭に屈曲して外に開く。
-375	SK16 8600067 黒色粘質土	壺	口径 残高	18.0 31.8	長胴で、口縁部は外反気味に立つ。

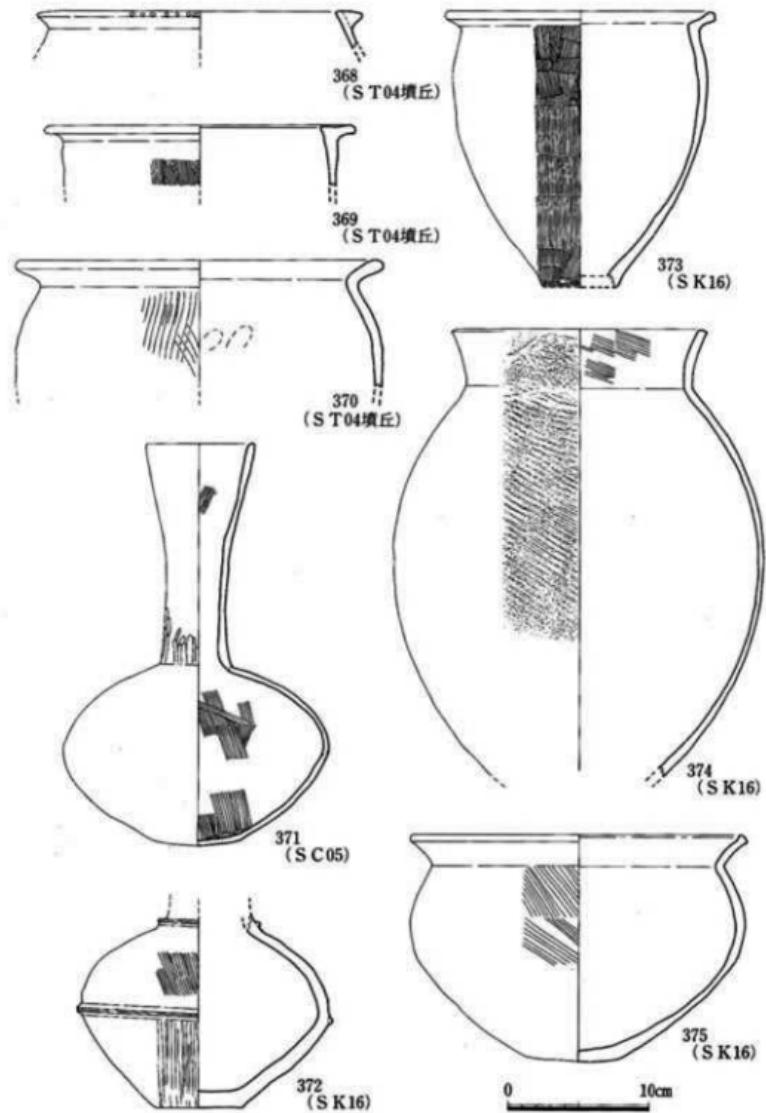


Fig. 127 S T04埴丘内・S C05・S K16出土土器 (1/2)

## (3) 石器 (Fig. 128, PL. 85)

**磨製石斧** 377は玄武岩製で、全面に敲打痕を残して。研磨面はみられず、体部下半は折損している。表採。378は花崗岩系の石材を利用している。全面に研磨が施され、刃部には使用痕もみられる。体部上半は折損している。表採。他に玄武岩製の刃部破片1点と基部破片1点が出土している。なお376は前述のとおり縄文時代に属すると思われるが、便宜上ここに図示する。

**石鎌** 379は大型の石鎌でほぼ完形である。刃部は両面から研磨し内湾気味である。刃部端には微細な凸凹がみられ、使用痕とも考えられる。刃部石端には半月孔が2つあり、いずれも研磨されている。最大長17.4cm、最大幅6.1cm。石材不明、S T 004古墳墳丘中出土。

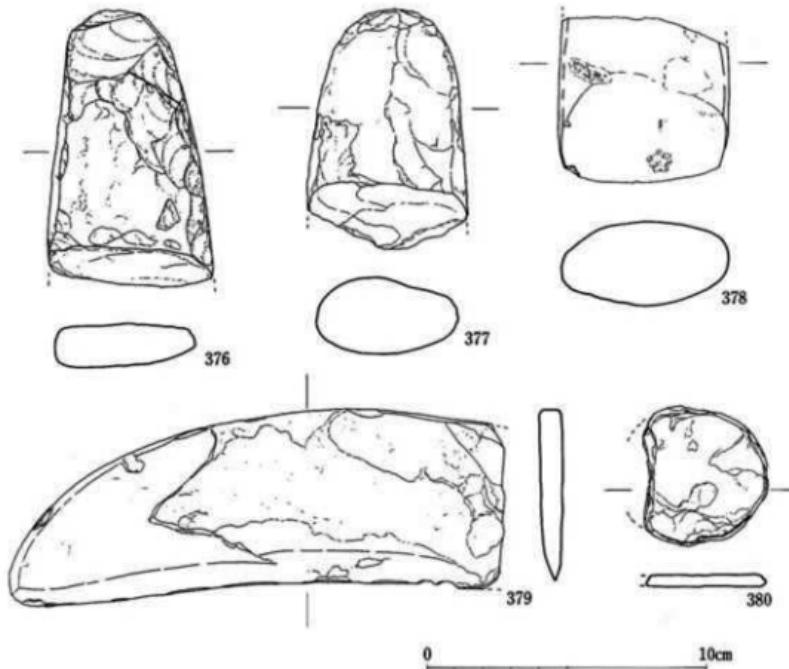


Fig. 128 弥生時代石器 (1/2)

**円盤状石製品** 380は片岩系の石材（黄褐色）を利用している。風化のため製作技法は不明瞭であるが、周縁を打ち欠いて成作したものと考えられる。器表に研磨面はみられない。時期も弥生時代とは限定できない。III区黒土出土。

**磨石** 図示できなかったが、玄武岩系の石材を利用したものが2点（破片）出土している。

#### (4) 鏡 (Fig. 129, PL. 108)

381はS J 14號棺の副葬品と推定される小型内行花文鏡である。耕作時に歯などが当たった際に曲がってしまっているが、実測図では補正している。鏡背の文様は半分が湯冷えのため描出が不鮮明である。鉢は円座にちかく孔をやや雑に穿け、さらに突線で囲む。孔は低くつぶれた感じの4個がやや不規則に置かれ、9弁の内行花文を配してから斜行櫛齒文帯を設け、さらに一段高い素縁でおわっている。面径8.8cm、縁高0.4cm、重量120g。鏡面の反りは全くない。全体が錆で覆われているが、腐蝕は殆どなく堅緻であり、銅質は比較的良いと思われる。

#### (5) 鉄器 (Fig. 129, PL. 108)

S C 05石棺に副葬されていた鐵鏃1点とSK 16土壤出土の農具類として鎌1点および鋸先2点がある。いずれも保存は良好である。

382は平基式の鐵鏃で先端をやや腐蝕して欠失する。大型ながら全体に薄手のつくりで、とくに稜はもたない。復元長4・9cm、基部幅1.9cm、厚さ0.2cm、重さ4.7g。

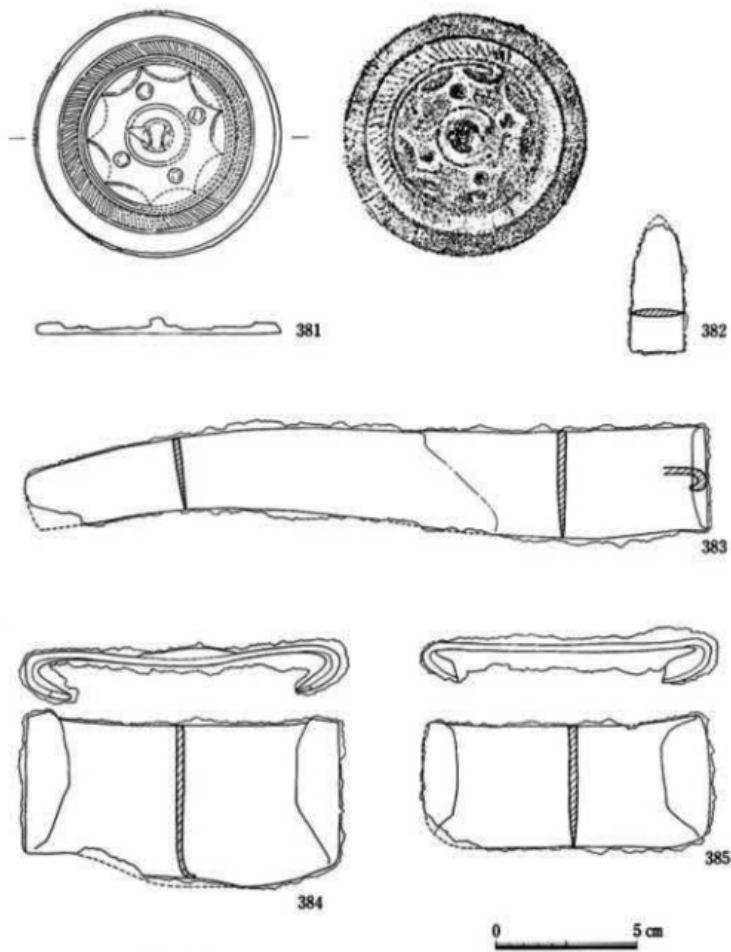
383の鎌は刃先がわずかに内湾し、先端は長方形に切り、基部を折り曲げている。中央から基部寄りで面的にねじれているが、使用により曲がったものであろうか。刃部に研ぎ減りが認められる。長さ24.2cm、厚さ2～3mm。

384の鋸先は両側を折り曲げ、その両隅を切り落としている。実際に使用されたものらしく、刃部は中央が反り返り、また片側が研ぎペリによるものか極端に短くなっている。幅11.1cm、長さ5.8cm。厚みは刃部以外はほぼ一様である。

385の鋸先は370と同工ながらひとまわり小型である。幅10.1cm、長さ4.5cm。刃部に向かって薄く仕上げている。

#### (6) 玉類 (Fig. 130)

支石墓から管玉1点と石棺からガラス小玉2点が出土した (Fig. 127)。



登録番号  
381鏡 (8712032) ..... S J 14出土  
382鐵劍 (8712027) ..... S C 05出土  
383鐵鎌 (8712031), 384鉢先 (8712029), 385鉢先 (8712030) ..... S K 16出土

Fig. 129 鏡及び鐵器類 (1/2)

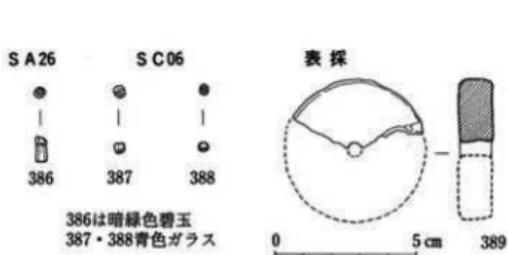


Fig. 130 玉類及び表採紡錘車 (左)

386はS A26支石墓の土壇内出土。暗緑色の碧玉製管玉で一端を欠失している。孔は2方向から穿けている。残存長9mm、外径3.5mm、孔径2.5mm。

387と388はそれぞれSC05石棺墓およびSC06石棺墓のいずれも石蓋上から出土した。したがって明確な帰属は断じえない。いずれも青色のガラス小玉で、外径約3mm、孔径約1.5mm。

#### (7) 紡錘車 (Fig. 130)

389の紡錘車は表採品。約 $\frac{1}{3}$ が残存する。土製で復元径5.0cm、厚さ1.2cm、孔径0.5cm。簡単にナデて仕上げており、色調は茶褐色、胎土に砂粒を含む。

### 3. 古墳時代

須恵器・土師器および鉄器数点がある。出土遺構は土塙墓が1基、他は全て古墳である。ただし点数は全体に少ない。

須恵器・土師器のうちFig. 133の一括資料はST04古墳墳丘下からまとめて出土したものである。またFig. 134の一括資料は調査区外にあたる南方約50mに位置する古墳からの採集品であるが、古式須恵器の好資料であるので合わせて紹介する。

#### (1) 須恵器 (Fig. 131~134, PL. 109~114)

壺類・高壺・瓶・甕・壺・平瓶・碗がある。このうち416・417の2点はSP17土塙墓からセットで、他は全て古墳からの出土である。

壺類は390~417で、壺蓋391は天井部が高く、鋭い稜をなして体部が直に下がる6世紀初の古式須恵器、390はやや径が大きくなり6世紀前半か。392・393は6世紀中頃、402は7世紀前半、396~399は7世紀中頃、400・401は7世紀後半である。

壺身403~415のうち、406は蓋390に対応するものとみて6世紀初、404・405は6世紀前半。

## 標石B遺跡

407・408は6世紀中頃、409・410は6世紀後半、411・412は7世紀前半である。高台が付く413・414は7世紀前、415は7世紀後半に下る。S P17土壤墓出土の2点は7世紀中頃と推定する。403は1点のみ底部が尖り口縁部が内側に折れ、8世紀代に下るか。

高坏蓋394・395は6世紀初~前半に位置しよう。

Tab. 17 古墳および土壤墓出土須恵器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
131-390 8700132	S T04 周溝	坏蓋	口径 12.7 器高 5.0	天井部が高く、体部は天井部と接をなして長く直線的に下がる。	天井部約5%へラケズリ、他ナデ。灰色でやや軟質。砂粒を少し含む。
-391 8709469	S T01 周溝	坏蓋	口径 11.4 器高 3.2	天井部が高く、体部は天井部と弱い接をなして長く直線的に下がり、口縁部で短く外にはねる。	体部ナデ。灰色で砂粒を少し含む。
-392 8709470	S T04 周溝	坏蓋	口径 12.6 器高 3.2	体部は天井部から接をなして外方に開き、口縁端部が外にはねる。	体部ナデ。灰色で砂粒を含まない。
-393 8504618	S T01 周溝	坏蓋	口径 13.1 器高 4.1	天井部は高く、体部、口縁部にかけて内湾する。焼け亞み大。	天井部約5%へラケズリ、他ナデ。暗灰色で砂粒を含まない。ロクロ回転左。
-394 8709471	S T01 周溝	高坏蓋	残径 11.2 残高 2.2	上面のくぼんだ偏平なつまみが付き、天井部は平且。	天井部へラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒を少し含む。ロクロ回転左。
-395 8709472	S T04 周溝	高坏蓋	残径 9.0 残高 2.7	上面のくぼんだ偏平なつまみが付き、天井部は丸柱をもつ。	ナデ仕上げ。天井部に重ね焼成時のものか一部縮縫等があり、以下自然軸。灰色で砂粒を少し含む。
-396 8504670	S T18 玄室	坏蓋	口径 13.6 器高 2.0	ややつぶれた宝珠つまみで、天井部は低く、体部は直線的に伸びて短いかえりが付く。	天井部約5%へラケズリ、他ナデ。焼成不良のため黄灰色でやや軟質。砂粒を少し含む。
-397 8503987	S T02 玄室	坏蓋	口径 12.6 器高 2.4	宝珠つまみで天井部は低い。縁端部がやや長く伸び、短いかえりが付く。	ナデ仕上げ。焼成不良のため灰黄色でやや軟質。砂粒を少し含む。
-398 8503988	S T02 玄室	坏蓋	口径 13.8 器高 3.1	宝珠つまみで天井部は内湾してなだらかに伸び、口縁部で反ねる。短いかえりが付く。	ナデ仕上げ。焼成不良のため灰黄色でやや軟質。砂粒を少し含む。
-399 8503991	S T03 前庭	坏蓋	口径 12.6 器高 2.5	宝珠つまみで天井部は途中やや屈曲して外反気味に縁端部が伸びる。内にごく短いかえりが付く。	天井部約5%へラケズリ、他ナデ。焼成不良のため内面黄褐色、外面褐色で軟質。砂粒を含む。
-400 8504672	S T18 石室	坏蓋	口径 13.7 器高 3.5	宝珠つまみで天井部は途中やや屈折して縁端部が直線的に伸び、短いかえりが付く。	天井部約5%へラケズリ、他ナデ。焼成不良のため黄灰色でやや軟質。砂粒を少し含む。ロクロ回転右。

## III. 遺物

Fig. 回番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
131-401 8504068	S T18 玄室	环蓋	口径 13.2 器高 2.1	天井部は平且で低く、内に短いかえりが付く。	天井部約当ヘラケズリ、他ナデ。焼成不良のため褐色で軟質。砂粒を少し含む。
—402 8504071	S T18 前庭	环蓋	口径 8.5 器高 1.5	天井部は平且で、内に短いかえりが付く。	ナデ仕上げ。暗灰色で砂粒を少し含む。天井部にヘラ記号一部残る。
—403 8504469	S T03 石室	环	口径 18.5 器高 4.7	环か。底部は尖り気味で体部は直接的に開き、口縁部が折れて内傾。	底部から外体部へラケズリ、口縁部から内面ナデ。酸化して赤褐色だが硬い。微砂粒を少し含む。
—404 8701031	S T04 周溝	环身	口径 13.0 残高 3.0	体底部は内湾。たちあがりは薄く、やや外反気味に立つか。	体部は受部ちかくまでヘラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒を少し含む。
—405 8504619	S T01 周溝	环身	口径 13.6 残高 3.2	底部は平且で体部は浅い。たちあがりはやや外反気味に立つか。	外底部へラケズリ、他ナデ。内面黄灰色。外側灰褐色で砂粒をやや多く含む。ロクロ回転右。
—406 4709468	S T01 周溝	环身	口径 10.6 残高 3.2	体部は浅く、受部は水平に伸び。たちあがりはやや内傾して、口縁内側に深い棱をつくる。	体部からたちあがりにかけナデ。灰色で砂粒を少し含む。
—407 8709467	S T01 周溝	环身	口径 11.2 残高 3.7	体底部はゆるやかに内湾。たちあがりは直立気味にやや長く伸び、縫部を丸くおさめる。	体部からたちあがりにかけナデ。灰色で砂粒をやや多く含む。
—408 8504617	S T01 墳丘	环身	口径 13.2 残高 4.2	体底部はゆるやかに内湾。たちあがりはやや長く内傾して伸び、縫部を丸くおさめる。	外底部へラケズリ、他ナデ。暗灰色で粗い砂粒をやや多く含む。
—409 8504614	S T01 周溝	环身	口径 11.8 器高 3.7	体底部はゆるやかに内湾し、たちあがりは短く強く内傾する。	外底部へラケズリ、他ナデ。褐灰色で砂粒を含む。外底部にヘラ記号。ロクロ回転右。
—410 8504616	S T01 周溝	环身	口径 12.6 器高 3.6	底部は平且で体部は直線的に開き、たちあがりが内傾して薄く伸びる。	外底部へラケズリ、他ナデ。紫灰色で砂粒を多く含む。外底部にヘラ記号。ロクロ回転右。
—411 8504615	S T01 周溝	环身	口径 10.7 器高 4.4	尖り気味の底部から体部はゆるやかに内湾気味に開き、たちあがりは内傾して薄く伸びる。	外底部から外体部へラケズリ、他ナデ。暗灰色で内面に焼成時のあばた。微砂粒を含む。
—412 8709466	S T01 周溝	环身	口径 11.3 残高 3.2	体底部はゆるやかに内湾気味に開き、続いたちあがりが短く直立する。	外底部へラケズリ、他ナデ。灰色で微砂粒を含む。ロクロ回転右。
—413 8503986	S T02 玄室	环身	口径 14.6 器高 5.0	体部は平且な底部と明瞭な屈曲をなさず内湾気味に立ちあがり、高台はやや内に入って頗張がり。	内外ともナデ仕上げ。外面暗灰色。内面黄灰色で微砂粒を少し含む。焼け歪み大

## 砾石B遺跡

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
131—414 8503985	S T02 玄室	环身	口径 14.2 器高 5.1	体部は底部と明瞭な屈曲をなさず直線的に開き、口縁部やや外反。高台はやや内に入って弱く張る。	内外ともナデ仕上げ。焼成不良のため黄灰色でやや軟質。微砂粒を少し含む。
—415 8504066	S T18 玄室	环身	口径 14.2 器高 4.5	体部は底部と明瞭な屈曲をなさず、外反気味に開き、薄い。高台はやや内に入ってやや高い。	外底部縁にヘラケズリ痕、他ナデ。焼成不良のため黄灰色でやや軟質。砂粒を含む。ロクロ回転右。
—416 8504094	S P17 埴底頭位	环蓋	口径 12.4 器高 2.4	宝珠つまみで。天井部は丸味をもち、内に短く鋸いかえりをもつ。422と対をなす。	天井部約5ヘラケズリ、他ナデ。灰色でやや粗い砂粒を多く含む。ロクロ回転右。
—417 8504096	S P17 埴底頭位	环身	口径 14.4 器高 4.8	体部は底部と明瞭な屈曲をなさず外反気味に立ち上がる。高台は裾広がり。	外底部縁にハケ目痕。他ナデ。焼成不良のため黄灰色で軟質。体部から脚部に黒斑。砂粒を含む。
132—418 8503980	S T01 埴丘	甕	口径 18.0 脚径 30.3 器高 31.8	腹部は球状にちかく、最大径は中位や上。頭部は外反して開き、口縁部は断面三角形に肥厚。	頭部外面カキ目。腹部は外面タタキのあと軽くヨコハケ目、内面に同心円文模す。褐色で砂粒を含む。
—419 8504632	S T01 周溝	甕	口径 25.0 残高 8.3	頭部は外反し上半3段。下半1段の輪抜波状文。口縁部は断面三角形に肥厚し、端部やや上にはねる。	口頭部内外ともナデ。灰色で砂粒を多く含む。ロクロ回転右。
—420 8504626	S T01 埴丘	尾	口径 15.9 器高 16.8	球状体部は沈線間に輪抜点列文。外反。頭部から沈線をおいて口縁部内凹。口縁2段に斜行縫孔。	体部下半のみ内外とも不定方向ナデ、他ヨコナデ。灰色で砂粒を多く含む。
—421 8504622	S T01 周溝	尾	口径 11.2 器高 13.0	体部やや肩が張り。頭部は直線的に伸び。段をなして口縁部が開く。	体部下半ヘラケズリ。他ナデ。灰色で砂粒を多く含む。ロクロ回転右。
—422 8504629	S T01 埴丘	高坏	脚径 9.0 脚高 6.1	脚部は開きが少なく、裾端部を鋸くして立つ。長方形3方スカシ。	内外ともナデ。灰色で微砂粒を含む。
—423 8504630	S T01 周溝外	高坏	脚径 11.3 脚高 5.1	坏部は開きが大きく、脚部は裾広がりに大きく開いて端部が斜上方に鋸くはねる。	内外ともナデ。灰色で砂粒を含む。
—424 8504629	S T01 埴丘	高坏	口径 8.4 残高 2.5	坏部は底部からゆるやかに内湾して立ち上がる。小形品。	坏部外底にカキ目、他ナデ。灰色で砂粒を多く含む。ロクロ回転右。
—425 8504621	S T01 周溝	高坏	口径 11.2 器高 14.0	坏部は沈線をおいて直線的にやや開く。脚部は筒状に高く、ながらかに裾広がり。歪み大。	坏部は外底カキ目、他ナデ。脚部は内外ともナデ。灰色で砂粒を多く含む。ロクロ回転左。
—426 8504674	S T18 玄室	平瓶	口径 8.7 体径 17.4 器高 16.8	体部は肩があり張らずふくらとし、口頭部は直線的に開く。	体部下半から外底部ヘラケズリ、上半から上面カキ目。口頭部ナデ。酸化して紫灰色。砂粒を少し含む。

## III. 造物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
132—427 8504073	S T18 玄室	平瓶	口径 7.5 体径 16.0 器高 13.7	体部はやや肩が張り、口頭部は直線的に開く。	体部は体部へラケズリ、底部及び上面ナデ仕上げ。口縁部ナデ。明灰色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—428 8503990	S T02 前庭	平瓶	口径 14.4 体高 7.0	体部は肩が張って低くつぶれ、上面に2箇所描点文。	体外底部へラケズリ、他ナデ。暗灰色で砂粒を含む。
—429 8504631	S T01 墳丘	台付壺	台径 13.4 残高 8.6	台部は直線的に開き、裾部でさらにやや外反。4方に台形スカシ。亞みが大きい。	台部外面カキ目、内面ナデ。上位に横描波状文。暗灰色でやや粗い砂粒を多く含む。

Tab. 18 S T04古墳墳丘下出土土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
133—430 8504473	北西盛土下	壺 (土師器)	口径 13.3 器径 6.2	底部やや尖り気味で体部にかけ深く内湾、口縁部で直立する。	口唇部ナデ。底体外面静止へラケズリ後へラミガキ。内面へラミガキ。赤褐色で砂粒を殆ど含まず。
—431 8504475	〃	〃	口径 12.9 器高 5.1	底体部内湾、口縁部でかすかに内傾する。	口唇部ナデ。底体外面静止へラケズリ後へラミガキ。内面へラナデ後軽くへラミガキ。明褐色で砂粒を殆ど含まず。
—432 8504471	〃	〃	口径 14.2 器高 5.2	底体部内湾、口縁部が内に返る。	外底部ハケ目。底体部静止へラケズリ後へラミガキ。内面へラミガキ。明褐色で砂粒を少し含む。
—433 8504476	〃	〃	口径 12.3 器高 4.9	底体部内湾、口縁部が内に返る。	口唇部ナデ。底体外面静止へラケズリ後へラミガキ。内面へラナデ後軽くへラミガキ。明褐色で砂粒を殆ど含まず。
—434 8504474	〃	〃	口径 13.0 器高 4.9	底体部内湾、口縁部が内に返る。	口唇部ナデ。底体外面静止へラケズリ後へラミガキ。内面へラナデ後軽くへラミガキ。明褐色で砂粒を殆ど含まず。
—435 8504472	〃	〃	口径 13.2 器高 4.5	底体部内湾、口縁部が内に返る。	口唇部ナデ底体外面ともへラミガキ後黒塗り。胎土は明褐色で砂粒殆ど含まず。
—436 8504665	〃	壺 (瓦底器)	口径 21.0 周径 26.9 器高 30.9	胴部はやや肩が張る。口頭部は次第に薄く外反気味に開き口縁端肥厚。頸部に沈線をおいて3段の波状文帯。	胴部外面は平行タクティ目。後軽く回転ヨコハケ。内面は同心円文を殆ど完全にナデ消す。灰褐色で砂粒を含む。

## 標石B遺跡

Tab. 19 南外区古墳付近表土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
134-437 8303945	調査区南外 表探	环身	口径 10.5 器高 3.1	底体部はごく浅く、たちあがりは内傾して直線的にやや長く、口縁端部は丸い。やや涙む。	外底部へラケズリ、他ナデ。暗灰色で全体に焼け歪む。砂粒を含む。ロクロ回転。
—438 8400102	調査区南外 表探	甌	口径 9.6 残高 12.2	体部は球状ながらやや肩が張る。頸部はゆるやかな弧を描いて立ち、口縁部は段をなして長く外反。	頸部は底から中位やや上までヘラケズリ、他ナデ。灰色で微砂粒を少し含む。
—439 8303946	調査区南外 表探	甌	口径 10.4 残高 9.0	体部は肩が張る。頸部はゆるやかな弧を描いて外に開き、沈縁をおいて口縁部が立ち上がる。	頸部肩位から口縁部にかけナデ。暗灰色で微砂粒を少し含む。
—440 8400101	調査区南外 表探	把手付甌	口径 10.9 器高 7.5	体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部で薄く直立。下から1沈縁と2段の間に櫛状波状文3帯。	体部下端から外底部にかけ回転を止めヘラケズリ、他ナデ。暗灰色で砂粒を少し含む。
—441 8303950	調査区南外 表探	把手付甌	口径 9.4 器高 6.6	体部は内湾気味に膨んだのち口縁部で短く外反。体部上位に2条の細凸線文帯。	体部下端タテナデ、底部静止ヘラケズリ。他ナデ。構成不良のため灰黄色軟質。砂粒を殆ど含まない。
—442 8303947	調査区南外 表探	甌	口径 10.5 残高 7.5	頸部はゆるやかな弧を描いて外に開き、沈縁を段おいて口縁部が立ち上がる。	口縁部ナデ。灰色で、微砂粒を少し含む。
—443 8303949	調査区南外 表探	甌	体径 24.1 体高 15.3	やや尖底気味で胴最大径は上に上がる。沈縁間に櫛状波文帯。頸部は明瞭に屈曲するか。境に竹管刺突文。	内外面ともクタキ目をていねいにナデ消し。灰色で微砂粒を少し含む。
—444 8304143	調査区南外 表探	甌 (土部器)	口径 9.8 残高 7.8	球状胴部で頸部がくびれ。口縁部は直線的に開いて伸びる。	外面ヨコハケ目のあるナデ、内面は口縁部ナデ。頸部ヨコヘラケズリ。暗褐色で砂粒を含む。
—445 8304141	調査区南外 表探	高坏 (土部器)	口径 18.5 残高 12.2	坏部は底部とかすかに段をなし内湾して伸びる。	坏部内外面ナデのあと軽くヘラミガキ。脚部外面ナデ、内面ヘラケズリ。褐色で砂粒を含む。
—446 8304139	調査区南外 表探	高坏 (土部器)	口径 18.1 器高 14.9	坏部は外面で底部と段をなして底部内湾。脚部は裾が明瞭な屈曲をなさず大きく開く。	坏部外底ハケ目。脚内面ヘラケズリ、他ナデ。全体を軽くヘラミガキ。褐色で砂粒を少し含む。
—447 8304140	調査区南外 表探	高坏 (土部器)	口径 17.5 器高 14.6	坏部は外面で底なしして部体内湾。脚部は裾が明瞭な屈曲をなさず大きく開く。	坏部外底と脚内側ハケ目。脚内面ヘラケズリ。他ナデ。全体を軽くヘラミガキ。褐色で砂粒を少し含む。

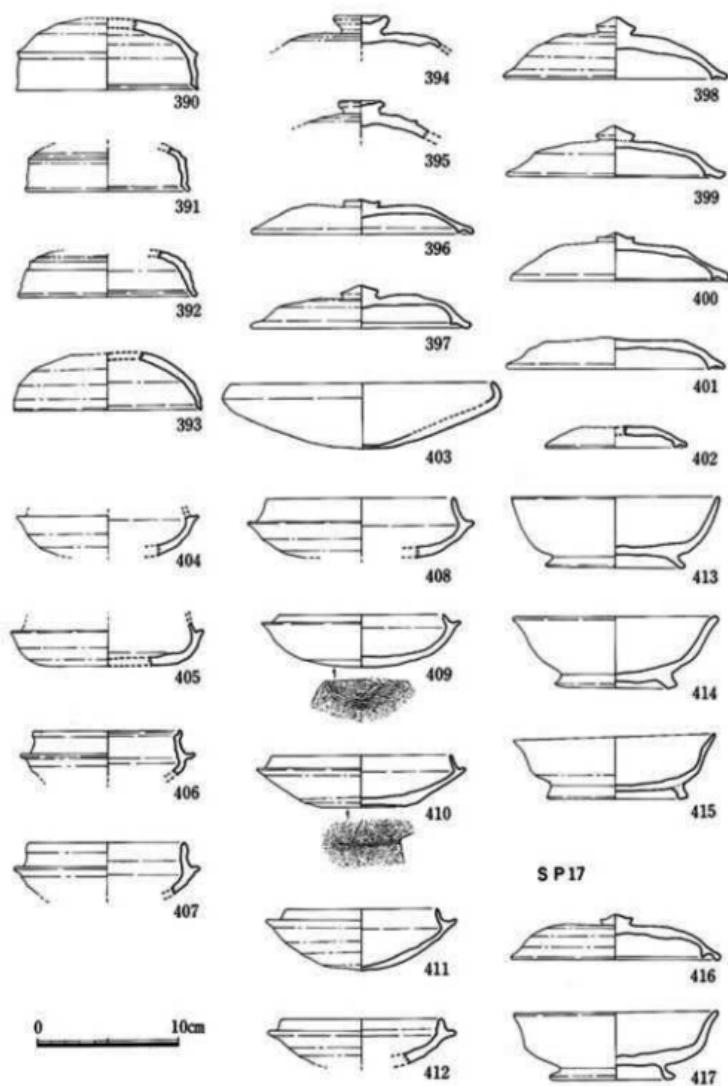


Fig. 131 古墳・土壤墓出土須恵器 1 (1/4)

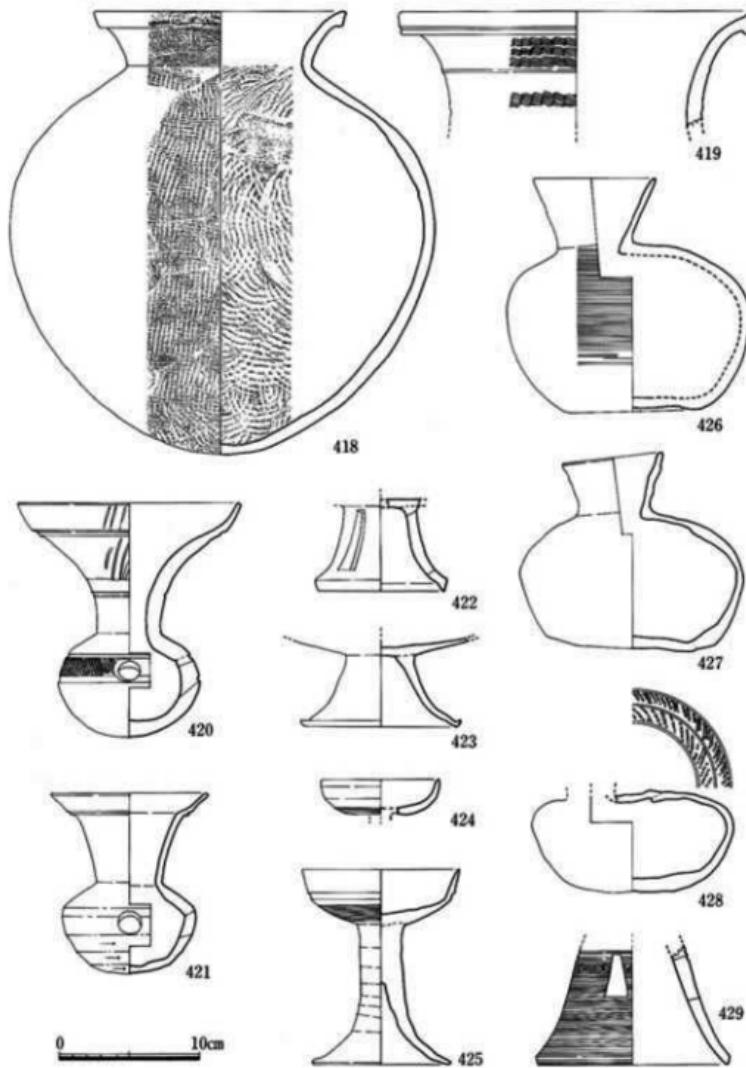


Fig. 132 古墳・土壤墓出土須恵器 2 (4)

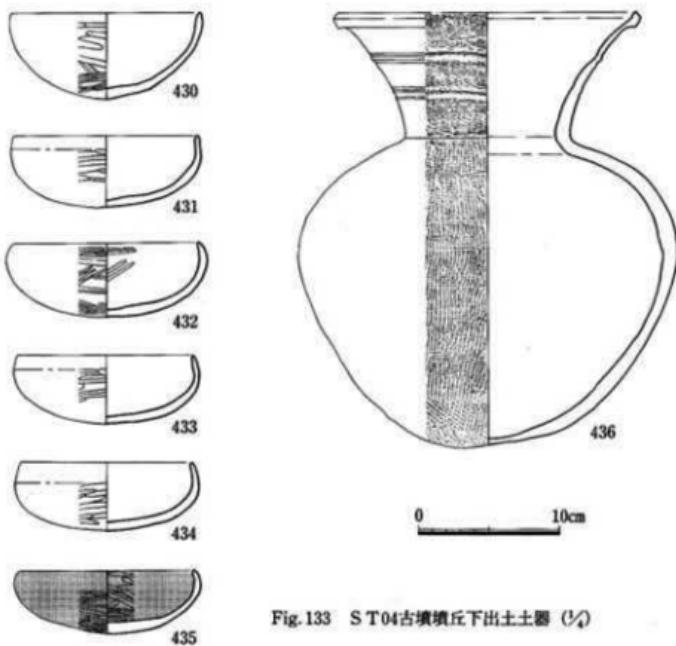


Fig. 133 S T04古墳埴丘下出土土器 (3)

壺は418のみ全体が知られる。やや尖り底気味の球形胴部に、装飾性の少ない短い口縁部が付く。壺419とともに6世紀前半と推定する。

瓶は421が6世紀中頃、420は口縁部が大きく開いて雑なヘラ描きを施し7世紀前半に下る。

高环は422が脚裾端部が鋭く立ち6世紀前半、425は長脚に太い沈線をもつ坏をのせており6世紀後半、他の423・424は7世紀前半である。

平瓶は426・427は胴部が全体にふくらみをもち7世紀前半。428は胴部がやや低く肩位に装飾をもち7世紀後半。429は台付壺の脚部で透しを穿けており、6世紀前半に推定する。以上、遺物一覧表 Tab. 17。

430～436 (Fig. 133) はS T04古墳の狭道北脇盛土下から出土した須恵器壺と土師器坏の一群で、古墳築造時の何らかの儀礼に伴う一括資料として注意される。壺436は胴部はやや肩が張り丸底で内面のタタキ目をきれいにナデ消す。口縁部は大きく開いて端部を玉縁状につくり沈線と波状文で飾る。坏430～435のうち430のみやや深いが、他5点は浅く体部が内湾気味に立ち上がる。435は黒色磨研である。時期は6世紀初であろう。遺物一覧表 Tab. 18

437～447 (Fig. 134) は調査区外でS T04古墳から約50m南に位置する古墳付近から採集し

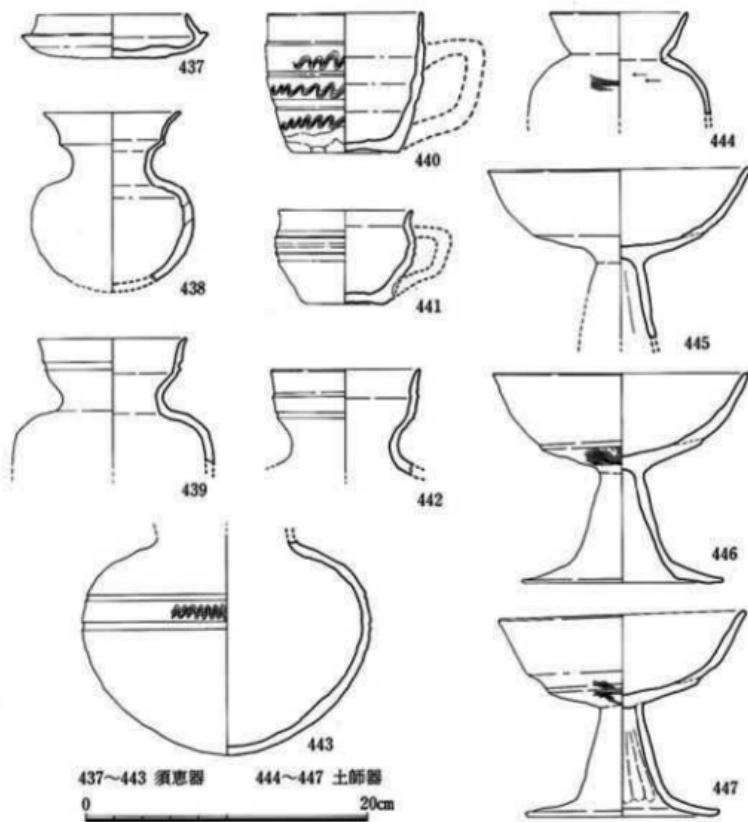


Fig. 134 南外区古墳付近表採土器 (1/4)

た。佐賀平野では最古式の須恵器が土師器と共に伴する好資料であるので、ここで取り挙げておく。須恵器437～443は陶邑TK216の時期に比定でき、5世紀中頃である。壺437は体部が浅く、底は口縁部が2段に立ち上がり小型の438・439と大型の443がある。442は壺としておく。把手付椀440・441はヘラケズリが顯著で装饰性がつよい。土師器は壺444の口縁部や高壺445～447の壺部の段に古式土師器の名残りをとどめている。遺物一覧表 Tab. 19

## (2) 土師器 (Fig. 135, PL. 111~114)

いずれも古墳から出土した。壺・皿・高壺・鉢・壺がある。図示したうちではむしろ8世紀以降のものが多いが、古墳出土品であることから一括して扱うこととする。

皿448~450は450が内面に暗文をもち体部が内湾気味に立ち上がり7世紀中頃、他は体部が外に開くもので11世紀後半~12世紀前半に位置しよう。

Tab. 20 古墳出土土師器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
135~448 8503996	S T03 前庭	皿	口径 20.6 器高 3.3	体部は不安定な底部からかすかに屈曲してやや内湾気味に聞く。	口縁付近ナデ、底部付近は内外とも不定方向ナデ。褐色で砂粒を含む。
—449 8503997	S T03 前庭	皿	口径 21.8 器高 5.1	底部から体部にかけ内湾して聞く。	口縁付近ナデ。底部付近は内外とも不定方向ナデ。褐色で砂粒を含む。
—450 8504462	S T02 石室	皿	口径 21.8 器高 4.7	体部は底部と明瞭な屈曲をなさず内湾して立ち上がる。内面にヘラ焼き暗文。	体部ナデ。底部は内面不定方向ナデ、外側不定方向ヘラケズリ。赤褐色で微砂粒を少し含む。
—451 8504067	S T18 石室	壺	口径 14.1 器高 4.0	体部はやや急に直線的に立ち上がる。	内外ともナデ仕上げ。褐色で砂粒を少し含む。
—452 8503995	S T03 前庭	壺	口径 15.0 器高 4.4	体部は底部と明瞭な屈曲をなさず内湾気味に伸び。口縁部かすかに外反。	外体部から外底部へラケズリ、他ナデ。褐色で微砂粒を含む。
—453 8504069	S T18 石室	壺	口径 17.0 器高 4.0	底部から体部にかけ内湾して伸びる。	体部内外面ナデ。黄灰色で口縁部に黒変一周。砂粒を含む。
—454 8504099	S T02 玄室	壺	口径 11.4 器高 3.7	体部は不安定な底部から続いて直線的に伸びる。	外体部から外底部はヘラケズリのあと軽くミガキ。他ヨコヘラミガキ。赤褐色で微砂粒を含む。
—455 8503994	S T03 石室	壺	底径 6.6 残高 2.6	体部は内湾気味に伸びる。	糸切り底。内底部から体部にかけナデ。黄褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—456 8504092	S T03 玄室北隅	壺	口径 13.0 器高 2.7	体部は内湾気味に短く立つ。	糸切り底。内底部不定方向ナデ。他ナデ。明黄褐色で、微砂粒を少し含む。ロクロ回転右。

## 標石B遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他	
135—457 8503992	S T03 石室	皿	口径 器高	9.2 1.8	不安定な底部から体部は短く屈曲する。	底部へラ切り削し後ナデ。他ナデ。外底部に板目痕。明黄褐色で微砂粒を少し含む。
—458 8504100	S T03 石室	皿	口径 器高	4.5 1.8	体部は湾曲気味に短く立つ。	糸切り底。内底部から体部にかけナデ。褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—459 8504469	S T03 石室	皿	底径 残高	6.6 1.0	体部やや立ち気味。	糸切り底。内底部から体部にかけナデ。明褐色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—460 8504470	S T03 石室	鉢	口径 器高	15.1 7.5	丸底から体部は内湾して伸び、口縁部は比較的境に短く折れて外反する。	底部付近回転へラケズリ。他回転ナデ。赤褐色で微砂粒を少し含む。
—461 8503982	S T01 埴丘表土	鉢	口径 器高	13.3 9.5	丸底に近く、体部は内湾気味に内傾し。口縁部は短く折れて外反する。	口縁部から外体部及び外底部にかけ黒塗りヨコヘラミガキ。他ナデ。胎土は明褐色で微砂粒を少し含む。
—462 8603981	S T01 埴丘表土	高坏	底径 残高	9.5 4.3	脚部は大きく開き、端部はやや肥厚して少し反ね上がる。	黒色磨研土器。脚部は外面黒色ヘラミガキ。内面ナデ。胎土は明褐色で微砂粒を少し含む。
—463 8504463	S T01 周溝	高坏	口径 器高	16.1 9.3	坏部は体部が屈曲して直線的に伸びやや浅い。脚部は段をもたず粗広があり。やや粗製。	坏部から脚部外面丹塗り。坏部へラミガキ。脚部は箇クテヘラナデ。擦及び内面ナデ。赤褐色で砂粒を含む。
—464 8504464	S T01 周溝	高坏	口径 器高	15.3 8.5	坏部は体部が底部から屈曲して直線的に伸びてやや浅い。脚部は明瞭な段をもたず粗広があり。	坏部から脚部外面丹塗り。坏部へラミガキ。脚部は箇クテヘラナデ。擦及び内面ナデ。赤褐色。砂粒を含む。
—465 8503996	S T03 前庭	高坏	口径 器高	15.8 9.9	坏部は浅く内湾して伸び、口縁部や外反。脚部はかすかに段をもって開き視端部が反ね上がる。	坏部内面不定方向へラミガキ。他ナデ。明褐色で口縁部に黒斑。砂粒を含む。
—466 8503984	S T01 周溝	高坏	口径 器高	10.4 10.3	坏部は内湾して立ち上がる。脚部は段をもたず高く開く。	坏部へラミガキ。脚部は箇外面クテヘラナデ。内面ヨコヘラケズリ。擦ナデ。褐色で砂粒を含む。
—467 8504000	S T03 石室	蓋	口径 残高	22.2 7.4	脚部は肩が張り、やや内傾した短い直口縁が付く。	外面ナデ。内面にヨコハケ目を残す。明褐色で砂粒を含む。外面に保付着。

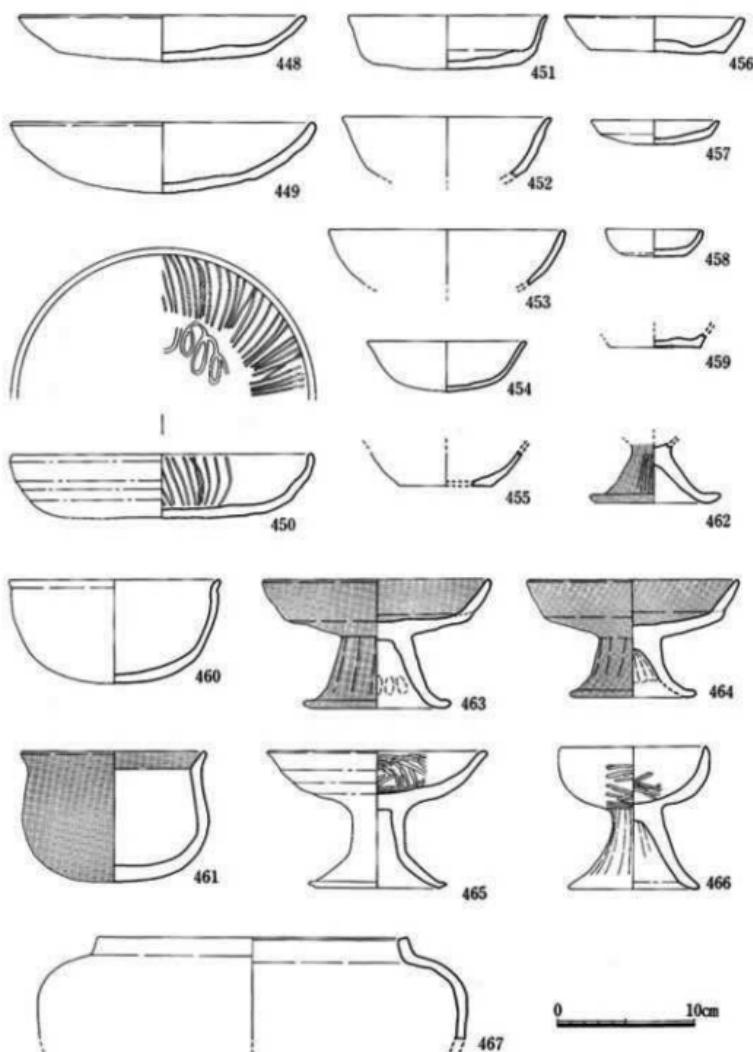


Fig. 135 古墳出土土師器 (3)

## 器石B遺跡

坪451～454のうち453・454の7世紀かと思われるが、451・452は8世紀に下る。455～459は13・14世紀にかかり、もやは追葬期とはいえない古墳再利用の一端を示すものである。

鉢460・461は体部が深く口縁端部が短く外反する。時期は9世紀に推定する。

高坪462～466はヘラケズリを施さず主にヘラミガキで仕上げるが、そのうち463・464は环部に未だ段を残しておらず6世紀前半、465はそれより新しく6世紀後半、462と466は7世紀前半に下ると推定する。

短頭壺467は8世紀に位置づけられようか。遺物一覧表 Tab. 20

### (3) 鉄器 (Fig. 136, PL. 108)

468の刀子はS T02古墳の玄室床  
上から出土した。切先と茎基部をわ  
ずかに欠失する。身はかすかに内溝  
気味で、茎がかなり長い。もともと両  
開式と思われる。残存長11.1cm、刃部  
長7.4cm。

469～472の鉄鏃はS T04古墳の玄  
室埋土中から出土した。いずれも残  
欠で、469が長頭鏃のほかは長茎式で  
ある。469・470には茎の部分に樹皮  
を巻いた柄の木質が遺存する。

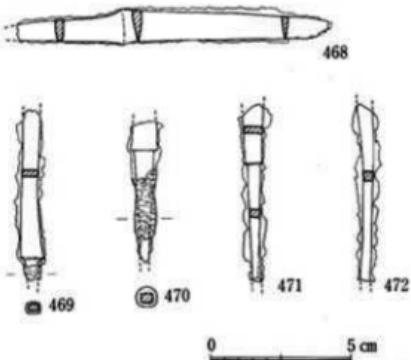


Fig. 136 古墳出土鉄器 (3)

# 久池井C遺跡

遺跡名：久池井C遺跡（略号KTT-C）  
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字野口

# 久 池 井 C 遺 跡

## I. 遺跡の概要

礫石A遺跡西側の台地上に位置する(Fig. 2, PL. 115・116)。標高は26m~29mである。地形的には礫石A遺跡V区から続く台地が西南方向に漸次高度を下げた下方にあたり、礫石A遺跡と一連にみられないこともないが、礫石A遺跡V区における西端の遺構から本遺跡III区までの間約100mには何ら遺構の分布が認められないので、別の遺跡として扱った。西北側には深さ3m~5mの谷があり、遺跡全体からみると、今回の調査区はその谷際の西北縁辺部にあたる。また、谷を挟んで春日遺跡と向かい合う。

調査はまず工事対象地区全体に幅3mの試掘溝を適当な間隔で設け、掘削機による事前の確認調査を行った。土層は全体的に黒色土が30cm~50cmの厚さで覆い、その下の黄褐色砂質土層に至って遺構の切り込みが検出できた。遺構の分布が比較的粗いため、遺構が存在する一帯を中心に面的に拡げ、東から西への順に3ヶ所、I区・II区・III区に分けて調査を進めた。

全体としてみると、I区およびII区は弥生前期の竪穴および平安時代の住居が存在し、いわば生活地区にあたる。III区は石棺墓・甕棺墓・土壙墓等からなる弥生後期の埋葬地区にあたる。いずれの調査区も遺跡全体の縁辺部であって、遺構の分布はまだ南側に拡がるようである。

I区およびII区(Fig. 137・138)の竪穴・住居跡等のうち、SK01とSK14の2基は弥生前期に属し、著しく横長の特徴をもつ長方形土壙である。住居竪穴というよりは、いわゆる貯蔵用の竪穴とすべきものと考える。II区とIII区でそれぞれ1基ずつ単独で検出したが、調査区内の近辺では関連する同時期の遺構は見当たらなかった。いずれも土器を比較的豊富に出土しており、とくに礫石A・B遺跡に続く時期の土器編年上、貴重な資料といえる。

その他II区では平安時代にSB13竪穴住居跡、SB17掘立柱建物跡がつくられている。SK15は弥生時代中期の土壙である。

III区は台地縁辺部に沿って細長く拡げた。遺構の分布状況からみて、その中心はむしろ工事区外にあたる調査区の東南側であろう。検出した遺構は埋葬に限られ、石棺墓4基・甕棺墓1基・土壙墓6基の計11基である。甕棺墓は弥生後期初頭、他の石棺墓と土壙墓も弥生後期に属す可能性がつよい。各遺構は相互の切り合いもなく、ややまばらであり、比較的短期間につくられたと推定される。11基のうち甕棺はその容量からみて小児用にあたる。またSK06土壙墓のみ土壙墓の中では不整円形で、はたして埋葬かどうか確証はないが、一応小児墓としておく。

これらの埋葬遺構は遺跡全体が不明なため群構成を問題にするまでもないが、一群の中では東北側の石棺墓2基SC04・SC09および土壙墓2基SP07・SP10は頭位を南または東南に

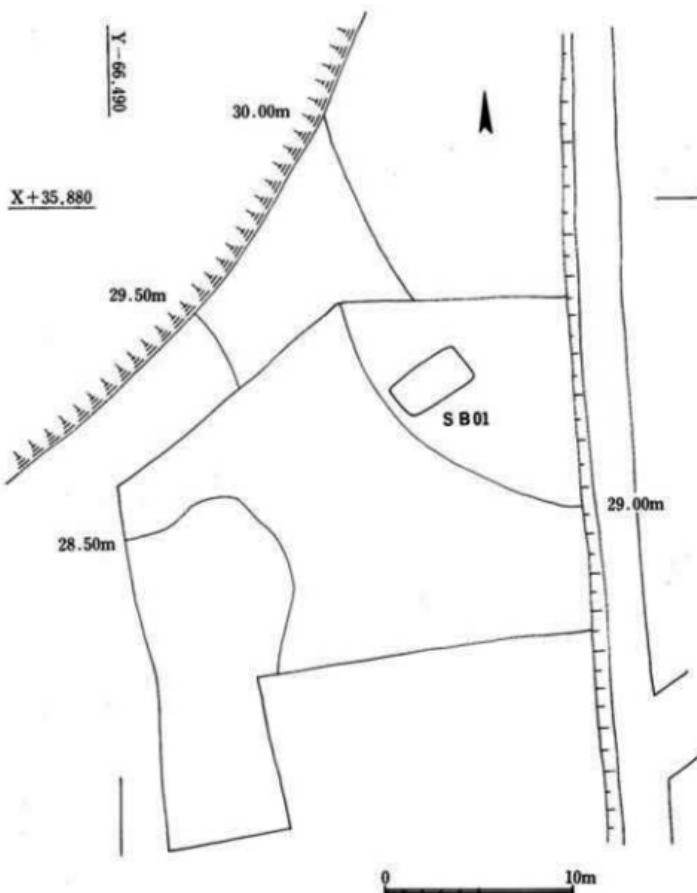


Fig. 137 I区遺構配置図 (Yso)

向いているのに対し、西南側の石棺墓S C04・S C11・S C12、甕棺墓S J03、土壙墓S P02・S P05は頭位が基本的に北である点、後期の中でも時期差等による群の別があるようである。

したがって調査区に関する限りでは、弥生前期にI区・II区が生活の場として利用され、途中中期に一部で遺構をとどめ、弥生後期に入るとIII区で墓地が形成されたことになり、さらに

久池井C遺跡

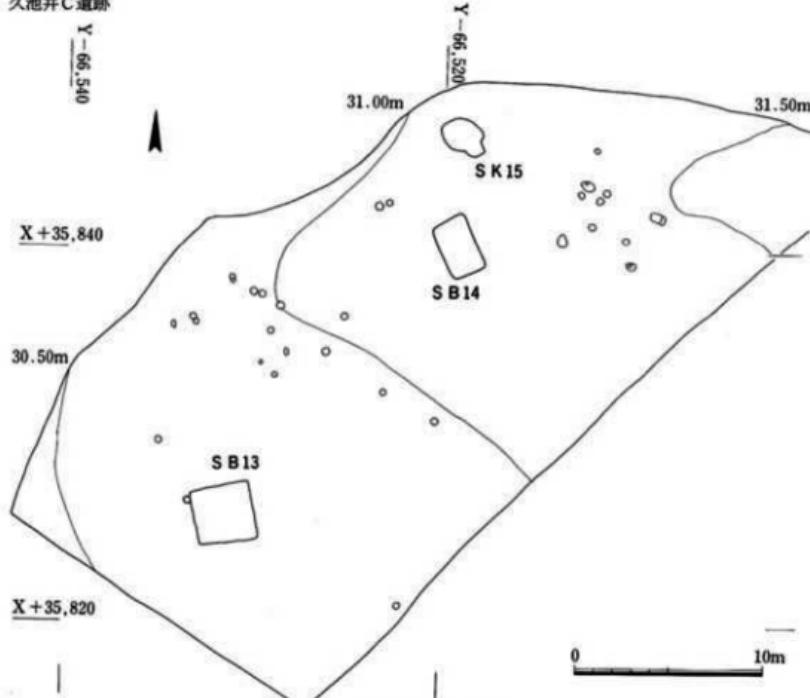


Fig. 138 II区遺構配置図 (1/500)

平安時代に下るとII区が再び生活の場に利用されている。

とくにI区とII区の弥生前期の竪穴はその近辺に同時期の居住域の存在を予想させるとともに、砾石A・B遺跡の弥生前期埋葬に後続する時期であるだけに、この地域の集団の動向を窺ううえで重要である。

出土した遺物は弥生前期竪穴から土器が多く出土したが、それ以外は概して少ない。III区の埋葬構ではS J 03斐棺のほか、S P 07土壤基から副葬品の鉄剣1点が出土したにすぎない。また、I区SK 01竪穴の弥生前期土器群に混じって縄文晩期の土器片も数点出土したが、調査区内ではその時期の遺構は検出されなかった。

なお、ここで久池井C遺跡と大いに関係がある春日遺跡についても若干ふれておく(PL. 116)。

春日遺跡はやはり横断自動車道との関係で昭和57年に調査した遺跡で久池井C遺跡のI区と谷を挟み、約50mの距離で南北に向かい合う。立地は丘陵裾のわずかな面積の緩斜面上を選ん

# I. 遺跡の概要

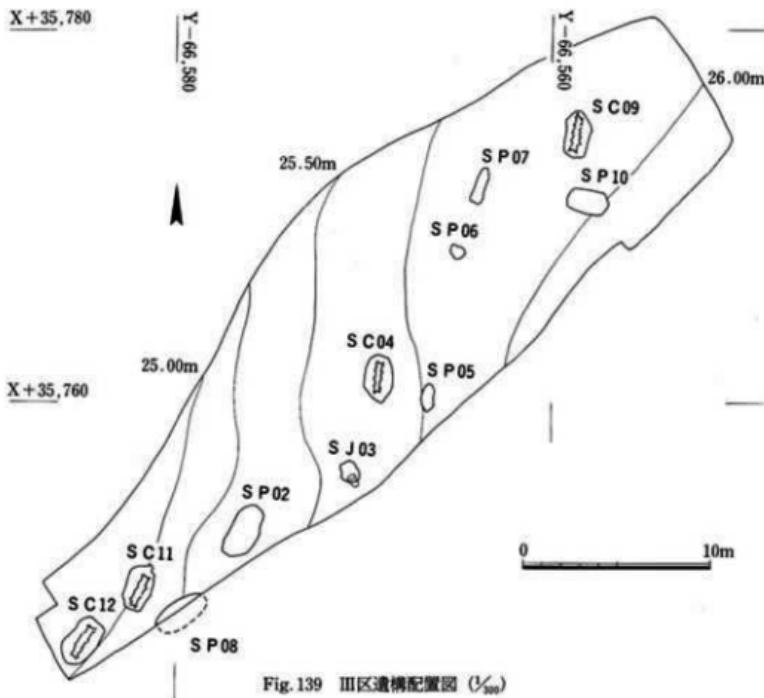


Fig. 139 III区遺構配置図 (Fig. 139)

でいる。調査の結果、弥生時代では夜白式期の方形竪穴住居跡1基、前期後半～中期初頭の円形竪穴住居跡3基ほかがあり、そのあと古墳時代後期～奈良・平安時代にかけて方形竪穴住居跡や大型の掘立柱建物跡が造られている。

このうちとくに夜白式期の竪穴住居跡は県下では他に2例ほどしかなく、櫛石A・B遺跡の前期埋葬と並行する時期の近接した住居遺構として注目される。また前期後半～中期初のS D 09溝からは焼を中心とした多量の土器が出土している。久池井C遺跡のS B01竪穴およびS B 14竪穴出土土器に後述する亀ノ甲式期にあたることから、ほぼ同一地域といえる櫛石A・B遺跡、そして久池井C遺跡に続く突帯文系土器の一連の流れを追ううえで重要な意味をもつものである。

以上、久池井C遺跡では調査面積の狭さと遺跡分布のまばらさにもかかわらず、とくに櫛石A・B遺跡との関係で問題となる内容を多く含んでいる。各遺構および遺物について以下に述べる。遺構一覧表 Tab. 21

Tab. 21 遺構一覧表

遺構番号	種 別	形 細	規 模 (長・幅・深) cm	方 位	時 代	備 考
S B01	堅 穴	長 方 形	416×221×25	N55°W	弥生前期	貯蔵用。甕・壺多数
S P02	土 壤 墓	隅丸長方形	300×152×48	N26°E	弥生後期か	
S J03	甕 棺	甕 単 棺		N21°W	弥生後期前半	木蓋(?)粘土目張。二段掘
S C04	箱 式 石 棺		151×25×20	N 9°E	弥生後期か	
S P05	土 壤 墓	隅丸長方形	152×56×50	N 7°E	#	二段掘
S P06	土 壤 墓	不 整 円 形	80×67×27		#	土壤墓か
S P07	土 壤 墓	長 方 形	200×58×18	S 21°E	#	鉄劍1点副葬
S P08	土 壤 墓	橢 円 形			#	一部のみ調査
S C09	箱 式 石 棺		190×33×20	S 11°W	#	粘土目張。蓋石欠失
S P10	土 壽 墓	隅丸長方形	220×133×35	S 7°E	#	二段掘
S C11	箱 式 石 棺		161×40×26	N 25°E	#	粘土被覆
S C12	箱 式 石 棺		179×34×34	N 32°E	#	蓋石内面赤彩
S B13	住 居 墓	方 形	320×300×10	N 80°E	古墳時代	土器器
S B14	堅 穴	長 方 形	312×192×53	N 25°W	弥生前期	貯蔵用。甕・壺多数
S K15	土 壙	不 整 円 形	220×180×47		弥生	摺鉢状掘込み
S K16	土 壙	#	(100)×(73)×13		弥生中期	S K015より新しい
S K17	掘立柱建物	長 方 形	370×300	N 72°W	平安か	

## II. 遺 構

### 1. 弥生時代

I区・II区で前期の堅穴各1基、II区で中期の土壤2基、III区で後期の石棺墓・甕棺墓・土壤墓を計11基検出した。III区の埋葬は比較的集中しているが、I区・II区の遺構分布はまばらである。

#### (1) 堅穴

##### S B01堅穴 (Fig. 140, PL. 117)

I区で台地の縁に位置する。長方形で長さ4.16m、幅は中央で2.21m、残存深約0.25m、長軸方位は東北—西南にある。床面はほぼ平坦で3ヶ所にわずかな窪みが認められたが、加熱を受

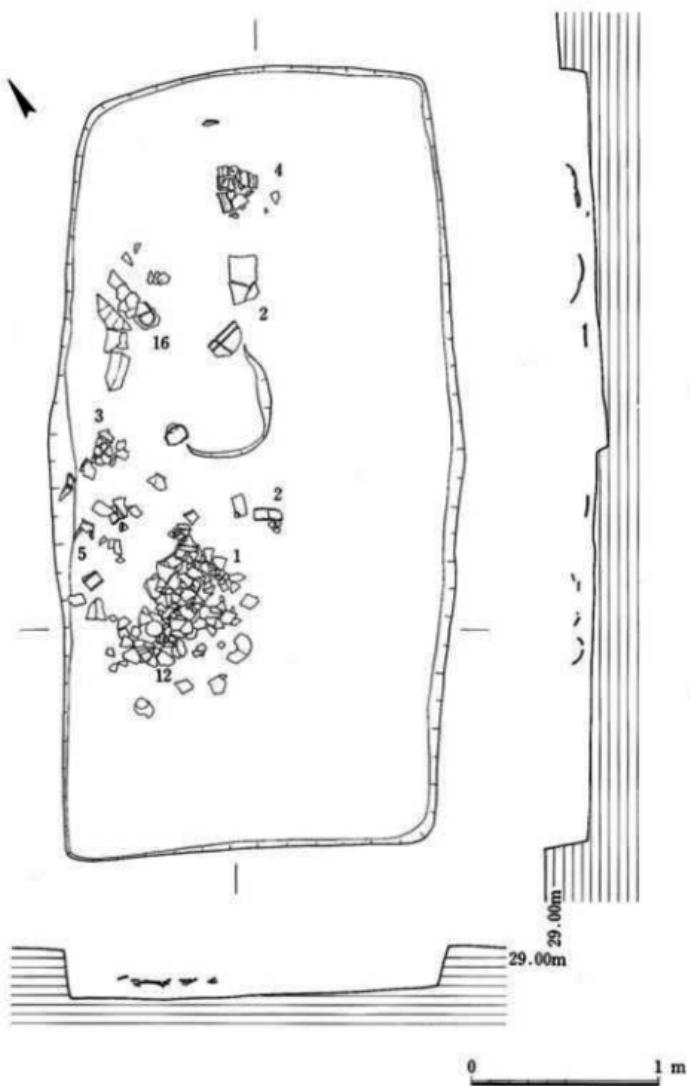


Fig. 140 S B01竖穴 (3'')

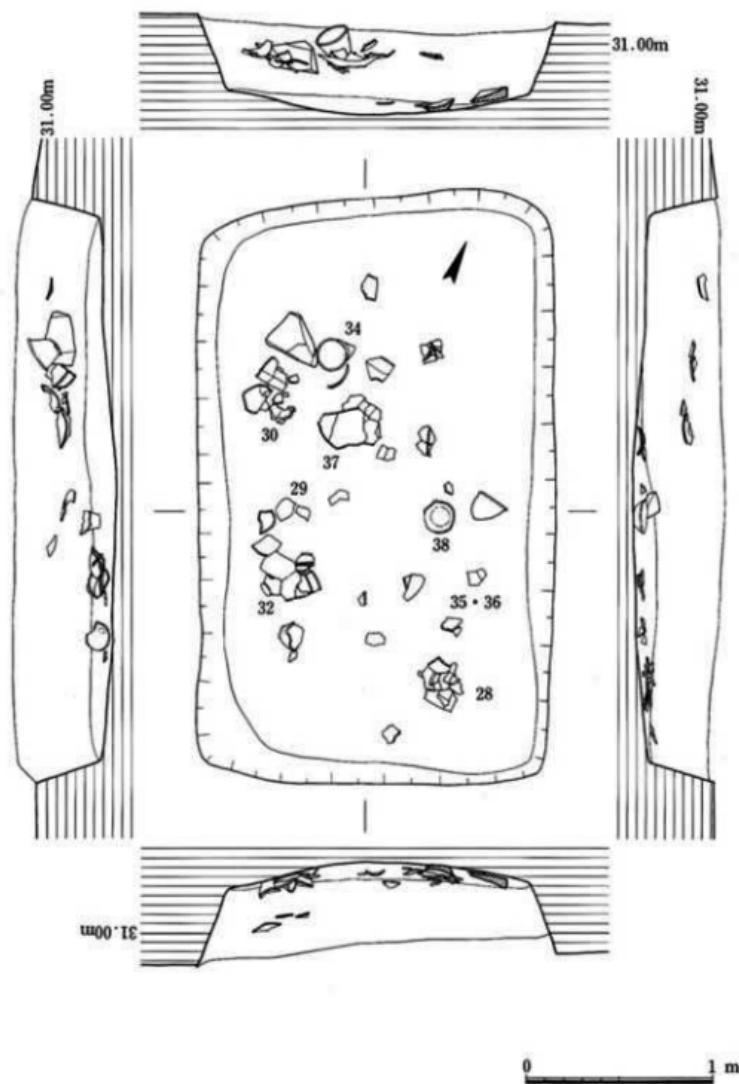


Fig. 141 S B14堅穴 (1/2)

けた形跡はなく、柱穴も検出されなかった。長辺が著しく長いという特徴をもち、住居跡というよりはいわゆる貯蔵庫と考えるべきものであろう。

床面ちかくからは西北側に偏って多量の土器が潰れた状態で出土した。器種は壺が8点以上で主体を占め、他に大型壺4点、小型壺2点、鉢5点、蓋1点のはか土製紡錘車1点がある。

#### S B14竪穴 (Fig. 141, PL. 117)

II区で台地の縁に位置する。長方形で長さ3.12m、幅1.92m、残存深約0.53m。長軸方位は西北—東南にある。床面は中央でやや深くなるがほぼ平坦で、柱穴等は検出されなかった。壁はやや斜めに掘り込まれている。これもS B01同様、住居跡というよりはいわゆる貯蔵庫としての機能を考えた方がよいであろう。

遺物は東南半からは床面真上で、西北半からは床面から約20cm浮いた状態で多量の土器が出土した。西北半の一群は竪穴埋没途中で投げ込まれた可能性もありうるが、埋土の黒色土ではなくて土層位の別は観察できず、仮に同時廃棄ではなかったとしても土器の型式自らには特設の時期差は認められない。器種は壺が主体で7点、他に大型壺2点、小型壺1点、高杯3点を数える。

#### (2) 壺棺墓

##### S J 03壺棺墓 (Fig. 142, PL. 118)

単式の小型壺棺である。墓壙は2段掘りで、上段を径1m前後の不整円形に掘り、さらに南側に奥行約0.9mの横穴を掘り込み壺棺を収めている。

壺棺は主軸方位N21°W、埋置角度30°。口縁部を黄褐色粘土で塞いでおり、当然木製等の有機質の蓋の使用に伴う目張りと推測されるが、粘土が多少落ち込んでいた為、蓋の痕跡は検出できなかった。

壺棺は口径44.5cm、器高63.2cmで、小児用と思われる。弥生後期前半の三津式の新しい時期に属す。

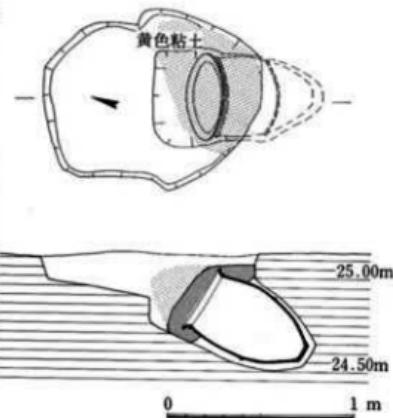


Fig. 142 S J 03壺棺墓 (1/20)

## (3) 石棺墓

S C04石棺墓 (Fig. 143, PL. 120)

箱式石棺である。墓壙は2段掘りで上段は基本的に隅丸方形を呈し、長さ2.34m、幅1.50m、残存深約0.15m。下段は石棺をようやく入れる分だけ細長くさらに約0.1m掘り下げている。

石棺は内法で主軸1.51m、幅は中央で約0.25m、深さ0.2m。頭位は北でN 9°E。足方の南側で幅が狭まる。法量からみて成人用とは考えにくい。石材は全て薄い緑泥片岩を使用している。

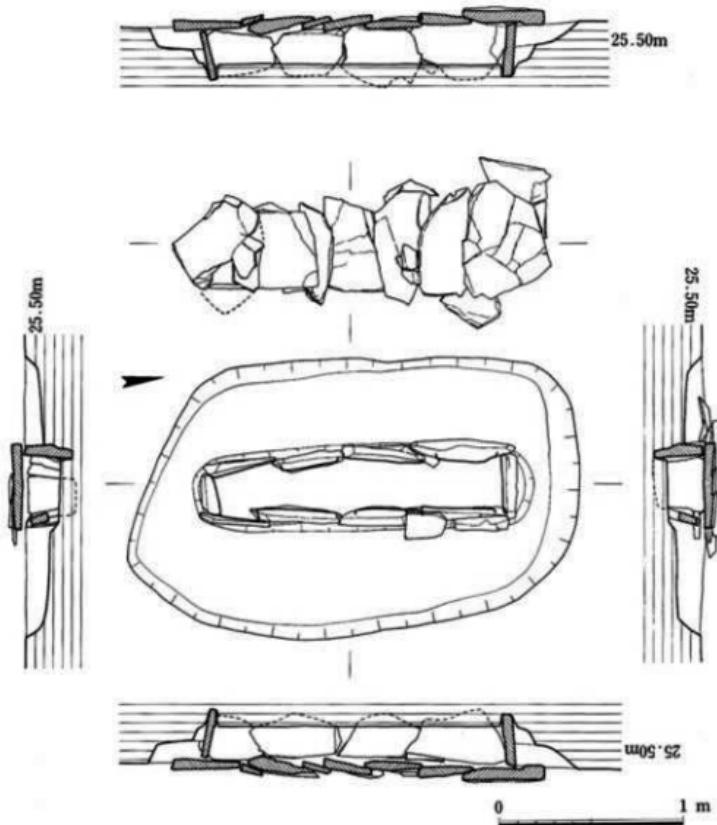


Fig. 143 S C04石棺墓 (1/20)

身は石材基部を埋め込んで立て、南北両小口各1個、東西両側壁各4個を使用、さらに東壁上には小さめの石材を2個置いて高さ調整を行っている。蓋石は7枚を足方から順に被せ、頭位側に比較的大きめの石材を配している。床面は淡褐色砂質土の地山をそのまま利用し、粘土目張り、朱塗布などは認められず、造りとしては比較的簡素である。

#### S C09石棺墓 (Fig. 144, PL. 120)

箱式石棺である。蓋を欠失する。墓壙は2段掘りで、上段は北側が梢円形状になるが、基本的に長方形で、長さ2.45m、幅は中央1.22m、残存深0.08m。下段は石棺を入れる分、隅丸長方形にさらに0.15m掘り下げている。

石棺身は北小口石が動いているが、復元すれば長さ1.90m、幅は中央で約0.33m、深さ約0.2m。頭位は南でS 11°W。石材は比較的角の無い小さめの花崗岩転石を使用し、南北両小口各1個、東西両側壁各6個ずつ並べている。また各石材間は隙間が多い為、黄褐色粘土で目張りを施している。床には黒褐色砂質土を約8cm厚で盛り、内側から棺身を固めている。全体に造りは簡素である。

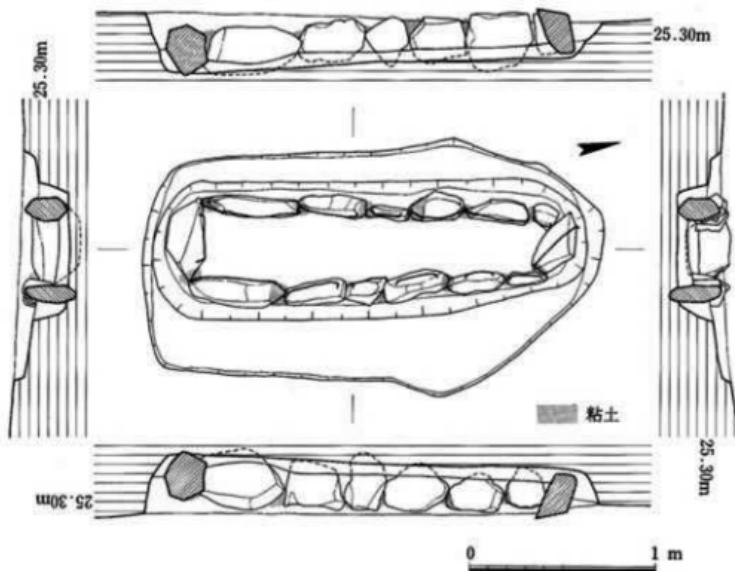


Fig. 144 S C09石棺墓 (1/20)

## 久池井C遺跡

### S C 11石棺墓 (Fig. 145, PL. 121)

箱式石棺である。墓壙は2段掘りで上段はやや変形ながら、基本的に隅丸長方形である。長さ2.64m、幅1.50m、残存深約0.1m。下段は石棺をようやく入れるに足る長方形で、さらに約0.2m掘り込んでいる。

石棺は内法で長さ1.61m、幅は中央で約0.4m、深さ約0.26m。頭位は北でN25°E。石材は身に花崗岩、蓋は足方端の1個が緑泥片岩以外は薄い安山岩を使用している。身は南北両小口各1個、東壁3個、西壁4個の石材を、基部を掘り込んで立て並べ、足方にあたる南側で急に幅を狭くしている。また身の上面から周囲にかけては全周厚く黄褐色粘土を置き、蓋石をのせる為の高さ調整を行っている。

蓋は足方から順に4枚、頭位に向かって次第に大きな平石を並べたうえ、さらに6枚の小平石と黄褐色粘土で全体を手篤く覆い、身を保護している。

黄褐色粘土は棺内にも約3cm厚で盛られて床をつくり、頭位にあたる北小口ちかくで赤く朱の散布が認められた。

### S C 12石棺墓 (Fig. 146, PL. 122)

箱式石棺である。墓壙は2段掘りで、上段は隅丸長方形で長さ2.76m、幅は中央で1.58m、残存深約0.2m。下段は石棺を入れる分やや広めに、隅丸長方形でさらに約0.15m掘り込んでいる。

石棺は内法で長さ1.79m、幅は中央で約0.34m、深さ約0.34m。頭位は北東でN32°E。石材は一部に緑泥片岩と安山岩を用いているが、大部分は花崗岩である。身は足方に向かってやや幅を狭め、両小口各1個、西北側壁には3個、東南側壁には4個の大小平石を立て並べ、さらに隙間を小礫で塞ぐ。東南隅には一部黄褐色粘土も用いて隙間を埋めている。各石材は両小口が墓壙に直接据えているのに対し、側壁は全体に大きめで基部を掘り込んで据え付けている。蓋は平石5枚を並べ、隙間を小礫で塞いでおり、頭位にあたる東北端の1枚のみ裏面に朱が塗布されていた。

棺内は黄褐色砂質土の地山をそのまま床として利用し、中央やや東北寄りにわずかながら赤く朱の散布が認められたが、蓋石裏面に塗布された朱の剥落したものかと思われる。

## (4) 土壙墓

### S P 02土壙墓 (Fig. 149, PL. 118)

梢円形にちかい大型の隅丸長方形土壙墓である。検出面で長さ3.00m、幅は中央で1.52m、深さ0.48m。頭位は付近の石棺に合わせ北とすればN26°Eとなる。壙底は平坦で、各壁は北側

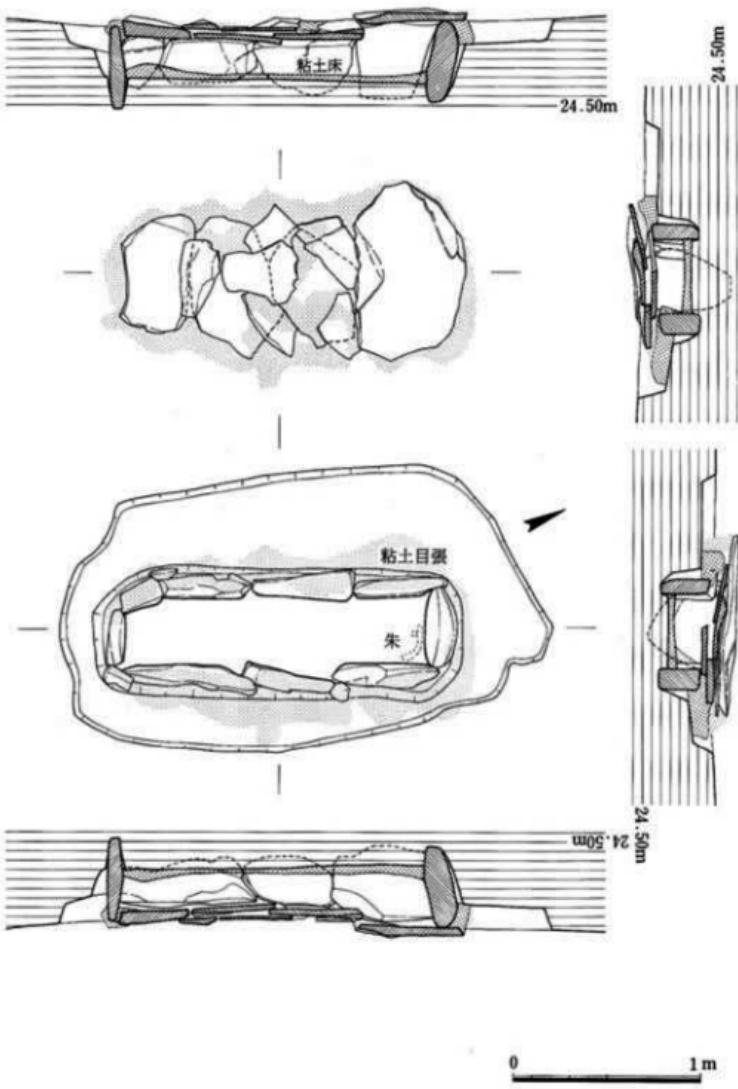


Fig. 145 SC 11石棺基 (上)

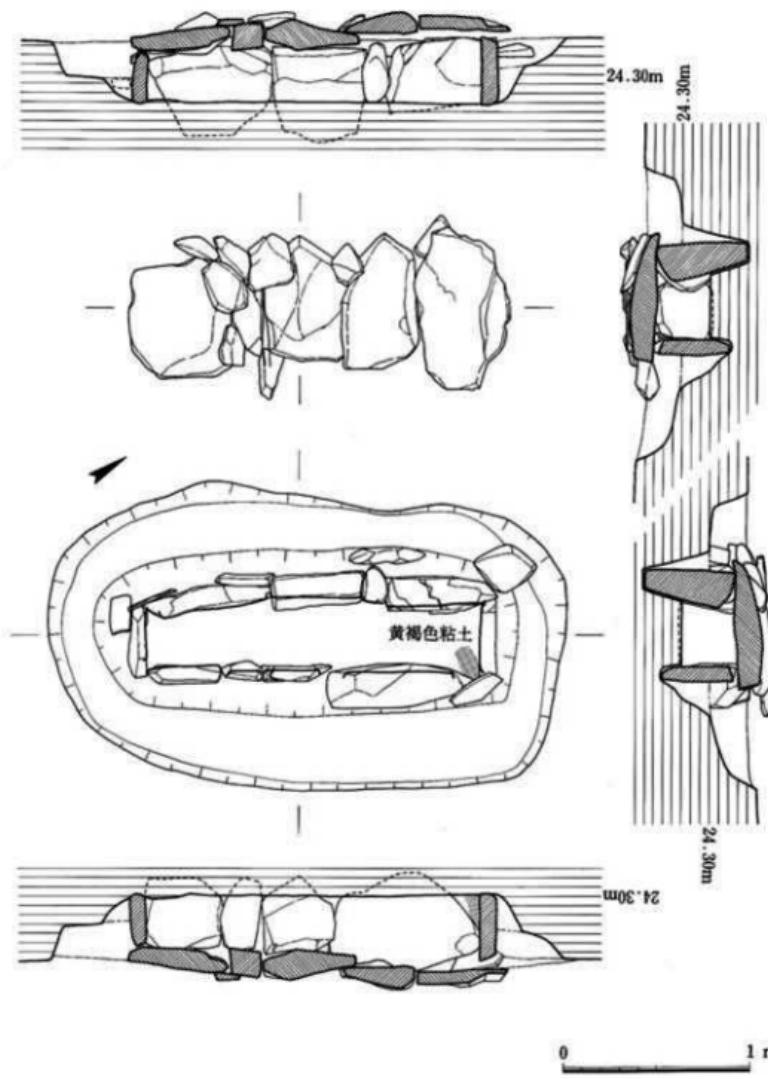


Fig. 146 S C12石棺基 (1/20)

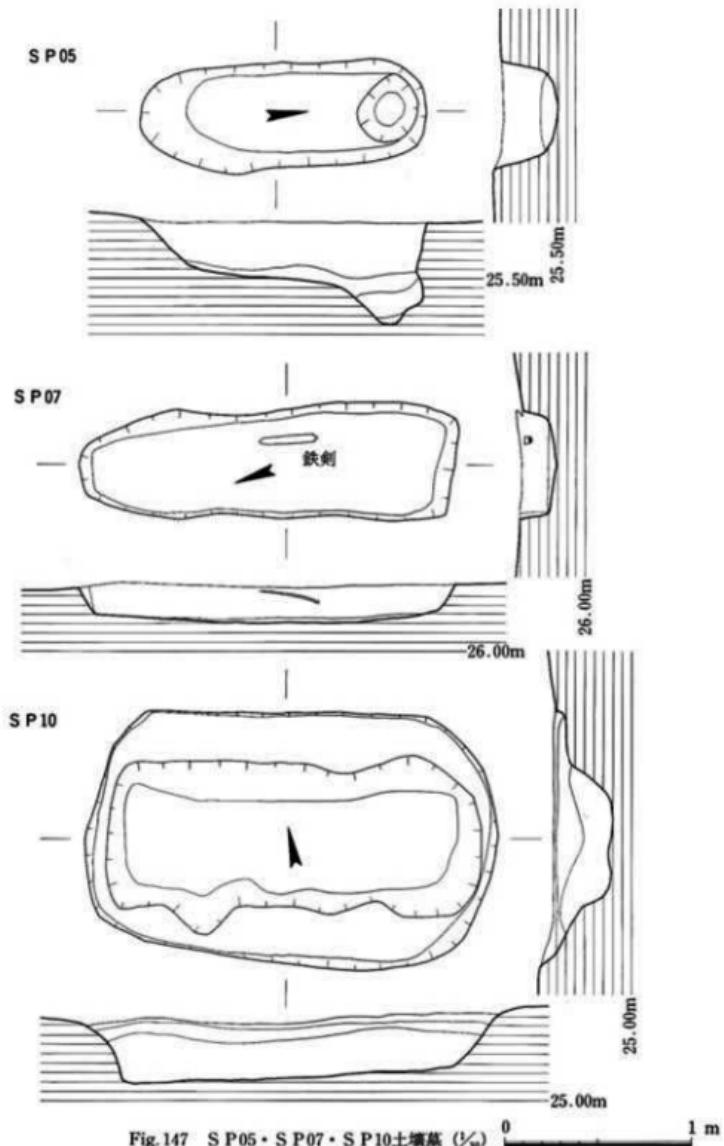


Fig. 147 S P05 · S P07 · S P10 土壇基 (1/50) 0 1 m

### 久池井C遺跡

で下位が斜めに立ち上がるが、全体として直にちかく掘り込まれている。

#### S P 05 土壙墓 (Fig. 144, PL. 119)

2段掘りの隅丸長方形土壙墓である。検出面で長さ1.52m、幅は中央で0.56m、深さは上段約0.3m。さらに墳底北端径約0.35mの円墳をやや斜め方向に、約0.2m掘り下げている。頭位は北とすればN7'Eである。墳底はやや丸味をもち、南壁のみ斜めに掘り込まれている。

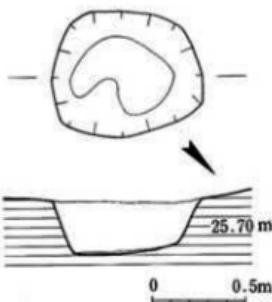


Fig. 148 S P 06 土壙墓 (1/2)

#### S P 06 土壙墓 (Fig. 148)

土壙墓という確認はないが、他の土壙墓同様に黒色土がつまり墓域の一画にあるので、一応土壙墓としておく。不整円形を呈し、検出面で径0.66~0.80m、深さ約0.3m。壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底は平坦である。

#### S P 07 土壙墓 (Fig. 147, PL. 119)

基本的に長方形の土壙墓である。北側で幅が狭まる。上面をやや削平され、検出面で長さ2.00m、幅は中央で0.58m、深さ約0.18m。墳底はほぼ平坦で、約10cm浮いて鉄剣1点が鋒を北に向けた状態で副葬されていた。頭位は土壙の幅と鉄鋒の方向から南と考えてN21'Eである。

#### S P 08 土壙墓 (Fig. 139)

南側の調査区外にかかり、一部しか調査できなかった。橢円形で、推定長約3.0m、頭位は東北と思われる。

#### S P 10 土壙墓 (Fig. 147, PL. 119)

2段掘りの隅丸長方形土壙墓である。上面をやや削平されており、上段は検出面で長さ2.20m、幅は中央で1.33m、深さ約0.1m、下段は長さ1.99m、幅約0.8mの隅丸長方形で、さらに約0.25m掘り込まれている。土壙底はほぼ平坦ながら東側に向かってやや上がる。頭位は墳底の状況から東側とすればS79'Eである。木棺墓の可能性も考えられるが、その痕跡は検出されなかった。

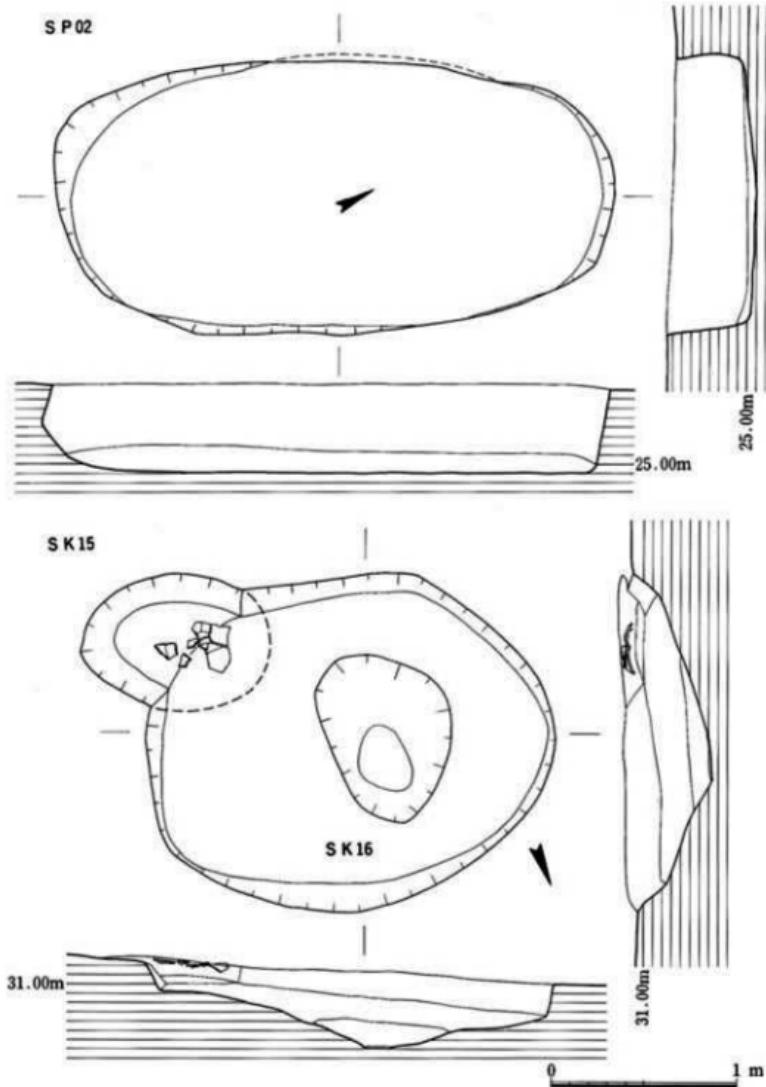


Fig. 149 S P02土壤墓・S K15・S K16土壤 (3/20)

(5) 土壙

S K 15・16土壙 (Fig. 149)

谷に面した台地北縁で検出した。S K 15土壙は径0.9mの円形土壙で弥生中期の甕1点を出土した。北側をS K 16土壙に切られる。

S K 16土壙は径2.2×1.8mの鍋底状の稍円形土壙で、時期は弥生時代と推定する。

## 2. 平安時代

II区でS B 13住居跡とS B 17掘立柱建物跡を検出した。(Fig. 138・150, PL. 116)

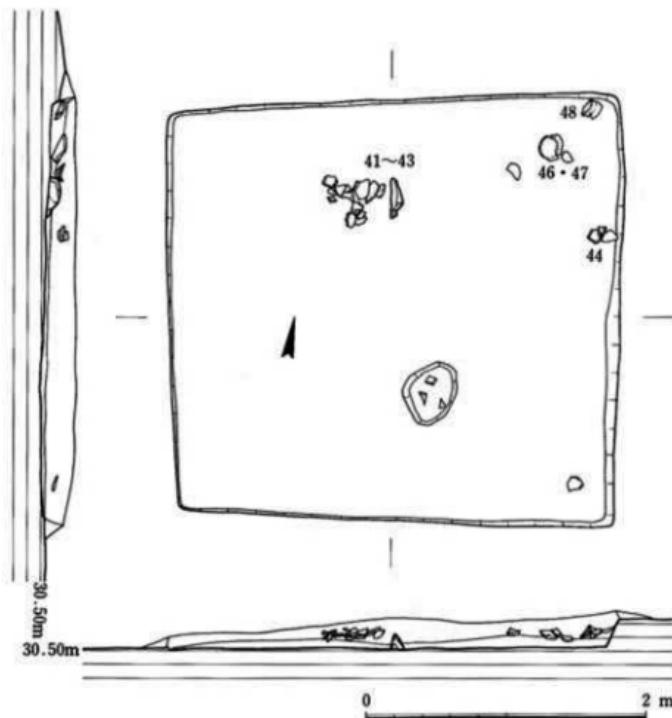


Fig. 150 S B 13住居跡 (ノ)

### III. 遺物

S B13住居跡は3.2m×3.0mの方形で、西辺に対し東辺がやや広い。上面を削平され、壁はわずかに残存する程度である。柱穴は見あたらず、床面上から土器が若干出土した。

S B17掘立柱建物跡はS B13住居跡から東北に約20m離れている。1間×1間(3.7m×3.0m)で、柱掘形は梢円形あるいは隅丸長方形で径または1辺0.4m前後。時期は必ずしも明確ではないが、一応この時期に含めておく。

## III. 遺物

### 1. 弥生時代

S B01竪穴およびS B14竪穴から比較的多量の土器が出土した。その他はS J03壺棺1基、S P07土壤基に副葬されていた鉄剣1点、S K15土壤出土の土器等若干があるにすぎない。

#### (1) 土器

##### 竪穴出土の土器 (Fig. 151~154, PL. 123~125)

S B01竪穴からは甕を主体としながら、他に壺・鉢・蓋・紡錘車が出土している (Fig. 151~152)。埋土中からは繩文晩期前半の甕破片も2, 3点出土しているが、ここではとりあげない。甕は刻目突蒂文系を主体として、板付系が数点混じる。刻目突蒂文系ではおよそ3形式がある。すなわち1・2は胴部上位がゆるやかに内湾あるいはよわく屈曲して口縁部と胴部上位に刻目突蒂を廻らすもの、3~6は胴部上位で内湾するが口縁部のみ刻目突蒂を廻らすもの、7は胴部上位が直線的に開いて口縁部に刻目突蒂を廻らすもの。このうち1は口径が40cmをこえる大型品で胴部突蒂を2条もち異色である。口縁部突蒂は全体として上面をナデて平坦にするものが多く、その突出度が著しいため、単なる突蒂というよりは口縁部の主要な部分といった印象を与える。刻目は細かくかかるい調子でヘラを当てただけである。胴部上位の屈曲は、1は明瞭に屈曲するが、2は内湾とかわらない。調整は内外面とも丁寧なナデ仕上げで、ハケ目はみえない。

注意されるのは8・9の板付I式に該当する如意型口縁甕の存在で、明らかにここでは共存しており、佐賀平野における刻目突蒂文系土器と板付式土器との時間的並行関係が問題となる。10は両者のいわゆる折衷型に含められよう。

壺は夜臼式の系統をおうものに限られ、大型壺12・13・16と小型壺14・15がある。12は底部と胴部上半以上とを図上復元したもので、古式の夜臼式にみられたような副頭部の段差が消え、胴部が極度に外にふくらみ重心が下がる特徴をもつ。小型壺は底部のみの破片である。

Tab. 22 S B01・S B14堅穴出土土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
151—1 8710180	S B01	壺	外口径 42.4 残高 16.4	大型壺。胴部は上位で軽く屈曲し、口縁部は直線的に内傾。口縁高に1条、胴屈曲部に2条刻目突帯。	内外面ともナデ。明褐色で焼成不良のため軟質。砂粒やや多く含む。
—2 8710163	ノ	壺	外口径 20.6 残高 12.3	胴部上半ゆるやかに内凹。口縁高と胴部上位に刻目突帯。	内外面ともナデ。口縁以下外面スス付着。褐色で砂粒やや多く含む。
—3 8712293	ノ	壺	外口径 19.7 残高 20.7	胴部は直線的に立ち上がり、上位でゆるやかに内凹。口縁高に刻目突帯をめぐらす。	内外面ともナデ。胴部外面上半スス付着。褐色で砂粒を含む。
—4 8712295	ノ	壺	外口径 18.0 残高 19.6	胴部はゆるやかに内済気味に立ち上がり、口縁高に刻目突帯をめぐらす。底部は厚い。	内外面ともナデ。胴部外面上部3/5スス付着。明褐色で砂粒を含む。
—5 8712294	ノ	壺	外口径 17.7 残高 19.4	胴部はゆるやかに内済気味に立ち上がり、口縁高に刻目突帯をめぐらす。底部はやや厚い。	内外面ともナデ。胴部外面全体にスス付着。外面明褐色。内面明褐色で砂粒をやや多く含む。
—6 8712290	ノ	壺	外口径 13.0 残高 11.2	小型壺。胴部は内済気味に立ち上がり、口縁高に刻目突帯をめぐらす。	内外面ともナデ。胴部外面全体にスス付着。外面明褐色。内面茶褐色で砂粒を含む。
—7 8712292	ノ	壺	外口径 16.0 残高 14.5	小型壺。胴部は直線的に開いて立ち上がり、口縁高に刻目突帯をめぐらす。底部はやや厚い。	胴部外面クテ、内面ヨコナデ。暗褐色で砂粒を含む。
—8 8712272	ノ	壺	口径 残高 13.2 5.4	小型壺。口縁部は外反し、口唇部に刻目を施す。	口縁部ナデ。胴部内外面ともクテナデ。胴部外面スス付着。暗褐色で微砂粒を少し含む。
—9 8712278	ノ	壺		口縁部は外反し、口唇部に刻目を施す。	内外面ともヨコナデ。胴部外面スス付着。明褐色で砂粒を含む。
—10 8712263	ノ	壺		胴部上位は粘土帶接合部で突起風に段をつけ、刻目を施す。口縁部は短く外反して口唇部に刻目。	口縁部付近ヨコナデ。暗褐色で砂粒を多く含む。
—11 8712261	ノ	壺		口縁部はかすかに短く外反し、口唇部外角に刻目を施す。	口縁部付近ヨコナデ。外面白褐色。内面黒色で砂粒を含む。
152—12 8710181	ノ	壺	口径 14.8 胴径(復) 40.8 残高(復) 38.8	胴部は方が強く張る。頭部は急に内傾してすばまり、口縁部やや肥厚して短く外に開く。頭部に二重沈線3段。	口縁部と頭胴部外面ヨコヘラミガキ。頭胴部内面と外底面ナデ。明黄褐色で外面黒斑。やや軟質。砂粒多。

## III. 遺物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm		形態の特徴	調整の特徴・その他
152-13 8710160	S B01	壺	口径 残高	15.2 4.5	口縁部は大きく外反して外に開く。大 型壺。	口縁部付近内外面ともヨコヘラミガ キ。暗褐色で砂粒をやや多く含む。
-14 8710179	〃	壺	底径 残高	6.2 2.3	底部は外周部に粘土帯をまわしてお り、一見、高台状を呈す。	脚部外面及び底部内面ヨコヘラミガ キ。外底部ヘラナデ。外面褐色、内面 明褐色で砂粒やや多。
-15 8712265	〃	壺	底径 残高	5.6 2.0	底部は厚く立ち上がり、胴部は低く外 に張るか。	外底部及び脚部外面下端へラ状工具 ナデ。胴部内面ナデ。外面褐色、内面 明褐色で砂粒やや多。
-16 8710158	〃	壺	底径 残高	6.5 4.8	底部はやや上げ底気味。大型壺。	脚部外面ヘラミガキ。内面ナデ。外底 部ナデ。暗褐色で脚部外面一部スス付 着。砂粒を含む。
-17 8710159	〃	壺	頂径 残高	5.5 6.0	体部は比較的高く、直線的に開く。	外面ヘラナデのあと指ナデ。内面ナ デ。明茶褐色で砂粒を含む。
-18 8712286	〃	鉢			体部はやや内湾して立ち上がる。口唇 部はナデで突帯状の平旦をつくり外 角に簡単な刻目。	口縁部ナデ。体部内外面とも板小ロヨ コナデのあと指ヨコナデ。暗赤褐色で 砂粒を含む。
-19 8712280	〃	鉢			体部は直線的に開き、口縁部わずかに 外反。体底部に向かって内湾を示す。 跡か。	口縁部ナデ。体部は外面板小ロナナメ ナデ。内面ナデ。外面褐色、内面茶褐色 で口縁部にスス。砂粒少し含む。
-20 8712291	〃	鉢	口径 底径 残高	16.5 6.0 9.0	体部は内湾して立ち上がる。	内外面ともナデ。暗褐色でやや軟質。 砂粒をやや多く含む。
-21 8712279	〃	浅鉢			体部は直線的に開いて立ち上がり、口 縁部はわずかに屈曲して短く立つ。	口縁部から体部上位は内外面ともヨ コヘラミガキ。外面スス付着。暗褐色 で砂粒を殆ど含まない。
-22 8712280	〃	浅鉢			体部は直線的に開いて立ち上がり、口 縁部は短く二段屈曲して口唇部を平 旦につくる。	口縁部から体部上位は内外面ともヨ コヘラミガキ。外面褐色、内面暗褐色 で砂粒を含む。
-23 8712284	〃	浅鉢	底径 残高	6.6 2.7	台部は脚状に高く立ち上がる。	体部内面ナデ。台部外面クテ、内面ヨ コナデ。暗褐色で砂粒を多く含む。
-24 8712288	〃	高壺	残高	7.6	脚筒部は細長く伸び、壺との接合部に 突帯をめぐらす。	脚部外面クテヘラミガキ、内面ナデ。 壺部内外面ともナデ。褐色で砂粒を含 む。
-25 8712276	〃	高壺	残高	3.7	壺脚接合部に突帯2段めぐらす。	壺脚接合部付近の内外面ともナデ。暗 赤褐色で砂粒を含む。

## 久池井C遺跡

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
152-26 8712289	S B01	高壺		小破片。脚部は胎土が厚く、外に開く。壺部下端に刺突文突帯。	壺部下端は内面ヘラナデ。外面ナデ。褐色で砂粒を多く含む。
-27	リ	訪顕車	径 厚 突出高 5.3 1.4 0.6	片面で中央が突出し、その面に放射状のヘラ描き文様を深く刻む。	やや粗製のナデ仕上げ。中心孔径0.4mm。茶褐色で砂粒を含まない。
153-28 8710185	リ	壺	外口径 残高 23.2 15.2	口縁部や内傾し、口縁高と胴部上位に刻目突帯をめぐらす。	内外面ともヨコナデ。口縁下外面スス付着。暗褐色で砂粒を含む。
-29 8710186	リ	壺	外口径 残高 22.5 18.2	胴部は上位で軽く屈曲し、口縁部にかけて直線的に内傾。口縁高と胴屈曲部に刻目突帯。	内外面ともヨコナデ。口縁下外面スス付着。褐色で砂粒を含む。
-30 8710170	S B14	壺	外口径 残高 17.6 15.3	胴部は上位で軽く屈曲し、口縁部にかけて直線的にやや内傾。口縁高と胴屈曲部に刻目突帯を施す。	内外面ともナデ。外面口縁下上部分スス付着。暗褐色で砂粒を多く含む。
-31 8710178	リ	壺	外口径 残高 16.4 22.8	胴部は長胴気味に内溝。口縁高と胴部上位に簡単なヘラ刻目を施した突帯をめぐらす。	口縁と胴突帯の間ヨコナデ。胴突帯下と内面タテナデ。外面口縁下と胴内面下位スス。暗褐色で砂粒やや多。
-32 8710188	リ	壺	口径 器高 26.0 27.0	口縁部外反。胴上位の粘土帶接合部は突帯状に仕上げ、口唇部とともに刻目を施す。	内外面ともヨコナデ。口縁下外面上位スス及び胴内面下位スス付着。明茶褐色で砂粒を多く含む。
-33 8710168	リ	壺	底径 残高 7.4 9.8	平底。端部はナデで少し外に張り出す。	胴部は外面タテナデ。内面板小口ナデのあと指ナデ。胴外面上位にスス。外面暗褐色。内面茶褐色で砂粒含む。
-34 8710171	リ	壺	口径 器高 16.5 19.4	胴部は直線的に開いて伸び、口唇部はナデでやや玉縁状。底部は厚く、端部が外に張り出す。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも板小口タテナデ。外底部ナデ。褐色で砂粒を多く含む。
154-35 8710173	リ	壺	口径 残高 17.4 3.8	大型壺。口縁部外反。	口縁部は内外面ともヨコヘラミガキ。外面褐色。内面赤褐色で砂粒を含む。
-36 8710172	リ	壺	口径 残高 6.4 4.4	頸部はやや内傾して伸び。口縁部外反。	口縁部と頸部外面ヨコヘラミガキ。頸部内面ナデ。赤褐色で内面に黒斑。砂粒を含む。
-37 8710165	リ	壺	底径 残高 9.5 10.2	大型壺。底部は円板貼付け。胴部は球状に丸味をもって立ち上がる。	胴部外ヨコヘラミガキ。胴部内面及び外底部ナデ。外面茶褐色・内面黒褐色で砂粒を多く含む。
-38 8710164	リ	壺	胴径 底径 残高 39.8 9.8 26.0	大型壺。胴部は丸味をもちながらも、やや肩が張るか。	胴部と底部外ヨコヘラミガキ。胴部内面ナデ。胴外スス付着。外面茶褐色。内面明褐色で砂粒を含む。

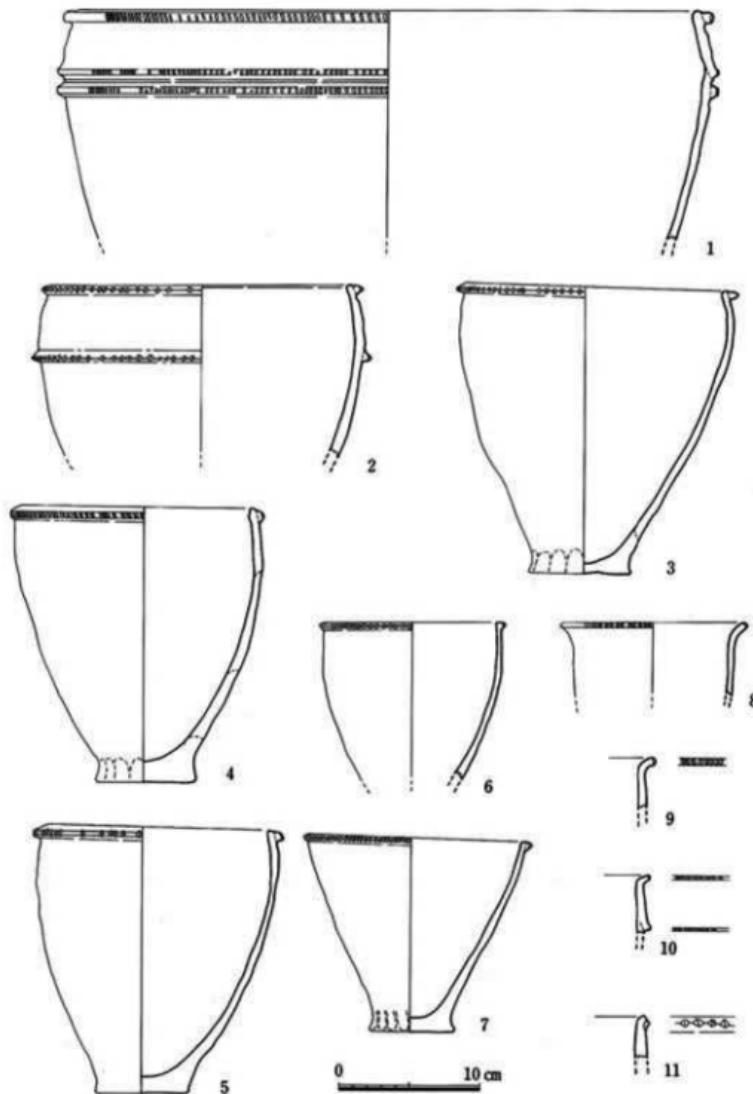


Fig. 151 S B01竖穴出土土器 1 (1/4)

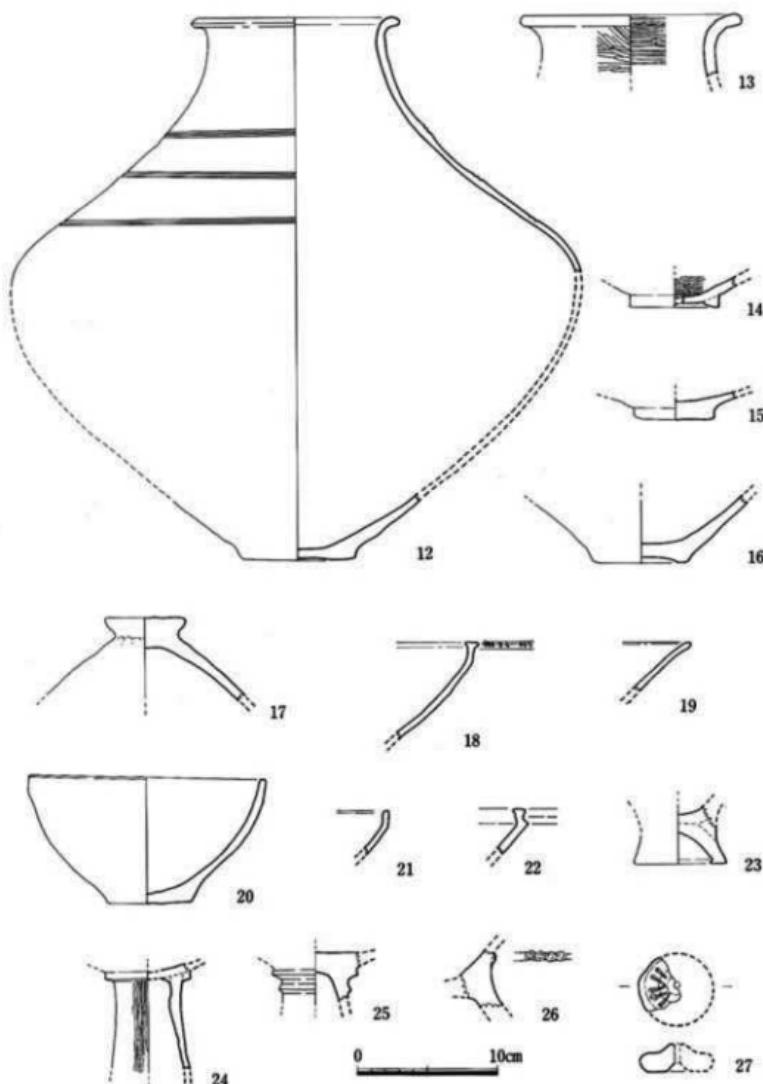


Fig. 152 S-B01整穴出土土器 2 (1/4)

III. 造 物

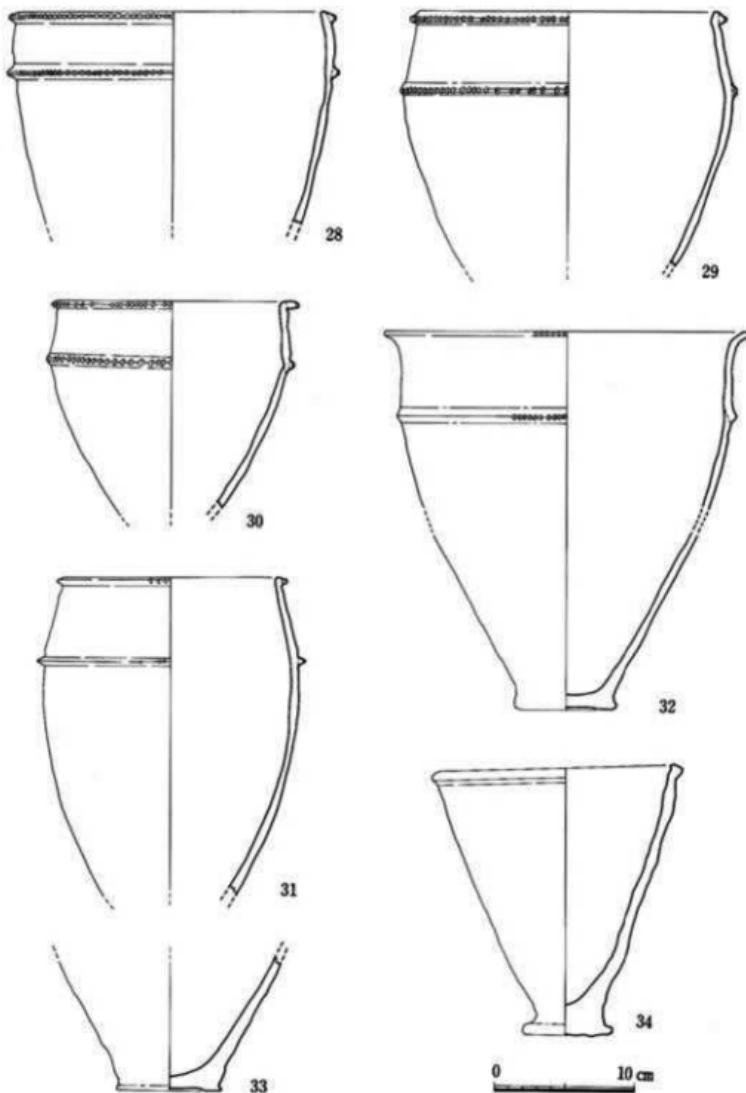


Fig. 153 S B14竖穴出土土器 1 (1/2)

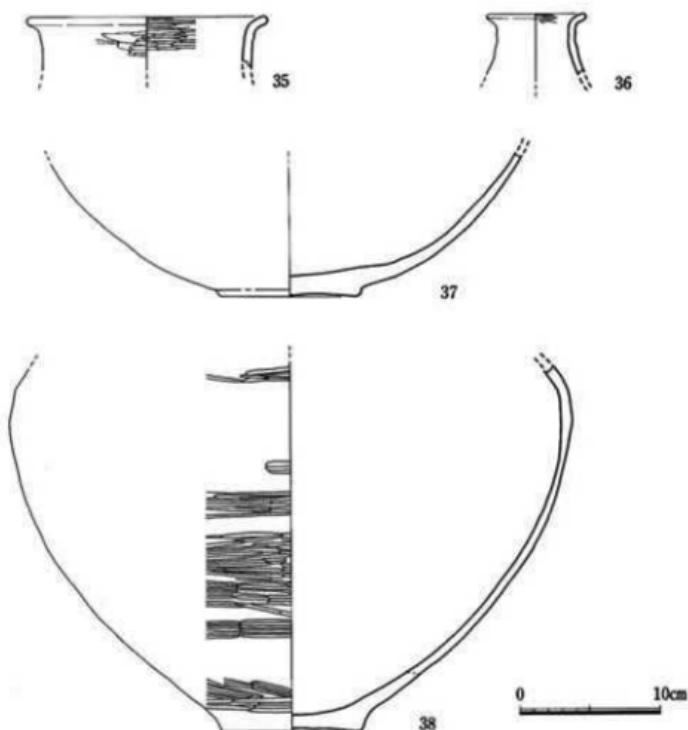


Fig. 154 S B14竪穴出土土器 2 (1/2)

鉢はやや多彩で、18は口唇部を平坦にナデて刻目突帯を施し、19は口縁部がかすかに外反気味に開く。20は体部が内湾しながら立ち上がり、中期に一般化するこの種の鉢としては最も早い時期のものといえよう。なお21～23の浅鉢は古手の夜臼式で混入と思われるが、参考資料として挙げた。

高环24・25は脚部が細長く伸び、杯部との境に刻目をもたない突帯をめぐらす。26も混入とみられる古手の夜臼式で、脚部と脚部との境に竹管状工具刺突による突帯をめぐらす。

蓋は17の1点のみ出土した。つまみ部は平坦である。

その他の27纺錐車は夜臼式期～弥生前期にみられるつまみ形のやや退化したものであるが、片面中央が窪む特徴をもつ。

S B14竪穴からも S B01竪穴と同時期の甕と壺が出土している (Fig. 153+154)。

壺は刻目突帯文系では、およそ2型式がある。28~31は胸部上位がかるく内湾して口縁部と胸部上位に刻目突帯を廻らすもの、34は体部が直線的に開いて立ち上がり口縁部に突帯をめぐらすもの、ただし刻目を欠く。これらの突帯・刻目・口縁部の特徴・器面調整等については基本的にSB01堅穴出土の刻目突帯文系壺と同様である。

32は刻目突帯文系壺に如意形口縁が加わった、いわゆる板付式との折衷式壺であり、ここでも両系統の時間的並行関係が問題になる。

壺は大型壺35・36・37のみ知られる。SB01堅穴の壺12に比べると胸部下半は全体にふっくらしている。

以上のように、SB01・SB14両堅穴出土の土器群は同時期とみられる共通する組成・形式をもち、さらにはとくに壺において板付式との時間的並行関係を示すものを含む点で重要である。これについては総括で再度述べることにする。各説明はTab. 22によられたい。

#### 壺棺 (Fig. 155, PL. 126)

SJ03壺棺1基のみ出土した。小型で口径40.7cm、器高63.6cm。小児棺の部類に入れられよう。口縁部は屈曲して外反し、胸部はあまり肩が張らずに比較的細身で、底部は平坦さを失いはじめている。突帯は口縁下と胸部やや下位に各1条ずつ廻らす。調整は内外面とも不定方向

ハケ目のあと口縁部ナデ、外底部付近ヘラナデ。明褐色で砂粒を含む。

時期はとくに胸部下位から底部の特徴をみるとかぎり弥生後期前半の三津式ででも新らしい段階に比定されよう。

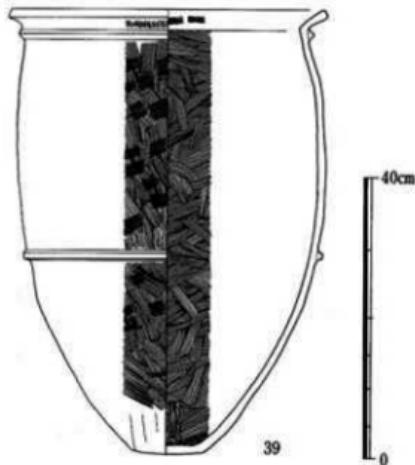


Fig. 155 SJ03壺棺 (1/2)

## (2) 鉄器 (Fig. 156, PL. 126)

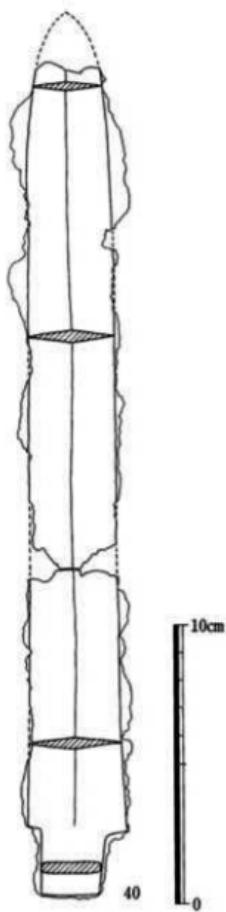


Fig. 156 S P07土壤墓出土鉄剣(42) 壇は図示した2点のうち、41は胸部が下膨れで丸底と思われ、口縁部が大きくめくれて外に開く。42は丸底気味ながらわずかに平底を残し、口縁部は41同様に大きく開くと思われる。

43は破片で、体部が直立気味に伸びて口縁部がやや外反する。調整はタタキ目を残し粗い。

S P07土壤墓から鉄剣156が1点のみ出土した。遺存状態はあまり良くなく、途中で折損し、また先端は腐蝕して若干欠失する。ほぼ完形にちかいものとして復元すれば全長31.6cm、身は長さ29.1cm、幅が中央付近で3.1cm、厚さ0.5cmである。身は断面菱形で鎬をつくり、研ぎ出しの結果によるものであろうか、基部でやや幅が広くなるが、全体としてはほぼ一定で伸びる。茎は短く2.5cm長、目釘孔の有無は錯のため確認できない。

県下の弥生時代における鉄器の副葬は比較的豊富であるが、その中で鉄剣に限ってみれば、本例のほかに上峰村二塚山17号墳(中期前半)、東脊振村横田遺跡の壇棺あるいは石棺、同じく東脊振村山古賀遺跡S C019石棺墓(弥生後期末か)、神崎町志波屋六本松乙遺跡S J 073壇棺などの例が挙げられる。このうち二塚山遺跡例と横田遺跡例はそれぞれ51.2cm、46.5cmと長く、弥生時代では長剣の部類に入るが、山古賀遺跡例は約35cm長で、本例にちかい。

鉄剣のみにかぎらず、弥生時代の副葬鉄器例は從来、どちらかというと神崎町・上峰村・東脊振村を中心とする佐賀平野東部に偏ってみられたきらいがあるが、今回、礫石B遺跡S C05石棺墓の鉄鐵とともに佐賀平野中部において新たな鉄器副葬例を加えたことになる。

## 2. 平安時代

S B13堅穴住居跡から土師器の一括資料が若干ある。他に検出面から探集した須恵器片が二、三ある(Fig. 157, PL. 126)。

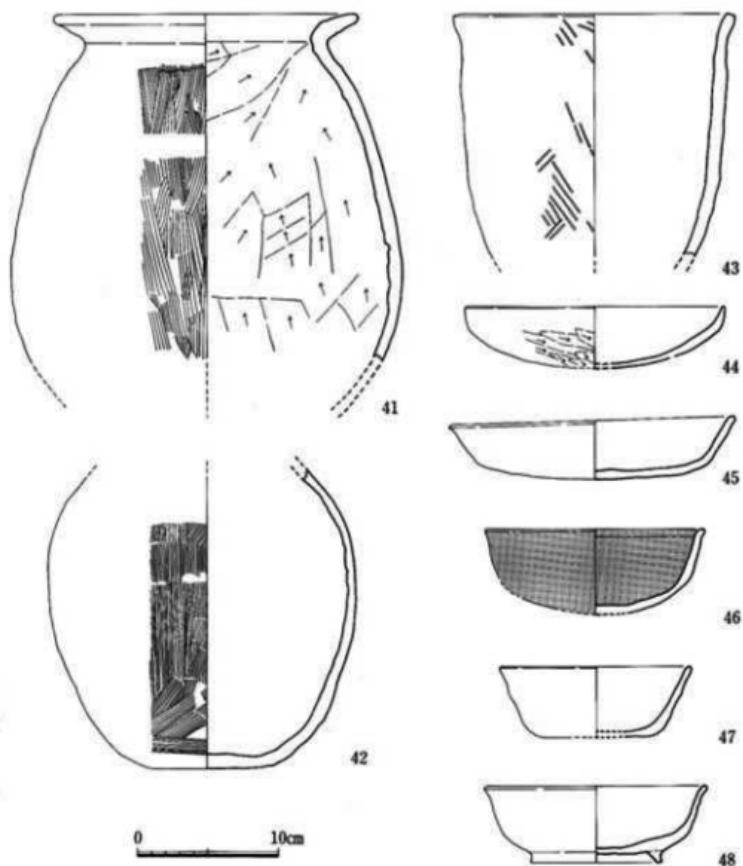


Fig. 157 S B13住跡出土土器 (少)

瓶であろう。

盤44・45はやや深めで、丸底と平底にちかいものとがある。

杯46～48のうち、46は丸底から体部がゆるやかに立ち上がり口縁部が外にめくれる。47は平底で深い。48はやや底部の内に入って高台がつき、体部は浅く、ゆるやかに立ち上がって口縁部が外反する。

時期は10世紀に下るかと推定する。

## 久池井C遺跡

Tab. 23 S B13住居跡出土土器一覧表

Fig. 回番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
157—41 8712249	S B13	甕	口径 21.4 残高 24.9	口縁部は屈曲して大きく外反。胴部はやや長胴で下膨らみの丸底か。全体に厚手。	口縁部ヨコナデ。胴部は外面タテハケ目、内面タテヘラケズリ。明褐色で砂粒を多く含む。
—42 8712246	ノ	甕	口径 11.6 残高 21.4	胴部はなだらかな曲線を描き最大径は中位やや上。底部は丸底気味の平底。	胴部外面タテハケ目、内面タテヘラケズリ。外底部ナデ。外面明褐色。内面暗灰色で砂粒を含む。
—43 8712253	ノ	瓶	口径 20.0 器高 17.4	胴部は中位からほぼ直に立ち上がり、口縁部やや外反。全体に厚手。把手欠失。	口縁部ナデ。胴部は外面タキ目のあるナデ、内面板小口ヨコナデ。褐色で砂粒を少し含む。
—44 8712251	ノ	瓶	口径 18.0 器高 4.6	底体部は丸く、口縁部はかすかに屈曲して短く立つ。	口縁部及び内面ナデ、底体部外面不定方向ヘラケズリ。明褐色で外面底体部に黒斑。砂粒を含む。
—45 8712250	ノ	瓶	口径 20.2 器高 4.5	底部は不安定な平底で体部は明瞭な屈曲をなさず直線的に開いて立ち上がる。全体に歪む。	体部ヨコナデ。底部は外面不定方向ヘラケズリ。内面ナデ。明茶褐色で微砂粒を少し含む。
—46 8712248	ノ	甕	口径 15.5 器高 6.0	丸底で体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁部やや外反。底部はやや内めぐれる。	内外面ともナデ。内面とも丹塗りの痕跡あり。胎土は明褐色で微砂粒を含む。焼成があまくやや軟質。
—47 8712252	ノ	甕	口径 13.5 器高 5.0	平底で、体部は屈曲して直線的に開いて高く立ち上がる。器面全体が波打ち。ロクロ整形かどうか不明。	内外面ともナデ。明灰色で砂粒を多く含む。焼成があまく軟質。
—48 8712247	ノ	甕	口径 15.7 器高 5.4	体部は不明瞭に屈曲して立ち上がり、口縁部で短くやや外反。高台はやや内に入って短く立つ。	内外面ともナデ。黄灰色で砂粒を少し含む。

くちいいつばんまつ  
久池井一本松遺跡

遺跡名：久池井一本松遺跡（略号KIP）  
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字野口

## 久池井一本松遺跡

### I. 遺跡の概要

疊石B遺跡とは幅約25mの小さな谷を隔ててその東側の山麓部緩斜面上に位置する(Fig. 2)。本遺跡のさらに東方まで緩斜面は横に続くが、確認調査の結果、計画路線内では佐賀市西原遺跡までの約500mの間、遺跡は確認されなかった。したがって本遺跡は単位としては一つの独立した遺跡とみなしえるが、巨視的には久池井遺跡から疊石遺跡に続く嘉瀬川東岸の山麓部遺跡群のほぼ東端にあたるものといえよう。

また、立地的には疊石遺跡に似て山麓部の緩傾斜段丘上にあるとはいえるが、本遺跡の場合は北側で古墳群を含む丘陵が急に高くせまり、南側緩斜面上の遺構の拡がりが丘陵裾回りの狭い範囲に限られる点、疊石遺跡とは立地条件をやや異にする。

近年、蜜柑園に造成された際、全体に削平され、またI区とII区との間が農道で削られるなど、とくに古墳の破壊が著しい。土層は黒色表土(耕作土)が20cm~50cm、そのすぐ下が黄褐色粘質土の地山となる。

調査は、用地買収時期の関係で、農道から南側のI区を58年度、北側II区を59年度に分けて実施した。もちろん一連の遺跡であるが、I区は緩斜面で古墳のほか土壤墓・住居跡等が分布するのに対し、II区は丘陵斜面で古墳のみに限られる(Fig. 158, PL. 127・128)。

I区・II区合わせて検出した遺構の種別・数は古墳時代後期の古墳9基・土壤墓1基、奈良・平安時代の土壤墓および木棺墓26基・竪穴1基・土塙3基、その他溝・小穴等多数である。ほかに旧石器時代のナイフ型石器1点、縄文時代前期の土器片1点、縄文時代後期～弥生時代前期の土器片等が若干あり、遺跡としては旧石器時代から弥生時代前期まで断続的に擊がるようであるが、遺構は検出されなかった。

まず古墳時代では全体に削平時の破壊が著しい中で、西端に位置するS T01古墳のみ比較的よく遺存していたが、他は殆ど石室基部を残す程度である。周溝の明らかな7基は円墳、主体部構造は全て横穴式石室である。また築造時期はS T01古墳が6世紀前半で比較的初期の横穴式石室の部類に含まれられるのに対し、他はやや時間をおいて7世紀代の古墳時代終末期に位置する一群であり、墳丘は小規模で、石室は小型かつ雑な造りのものが多くなる。一部では9世紀初まで追葬が行われている。なおS P 43木棺墓は古墳群の中にあって円形周溝を廻らし、いかにも古墳のようにみえるが、後述するように平安時代に下る特殊な木棺墓である。

木棺墓ではS P 38木棺墓のみ出土した須恵器から明らかに7世紀後半に遡り、古墳時代に含めておく。

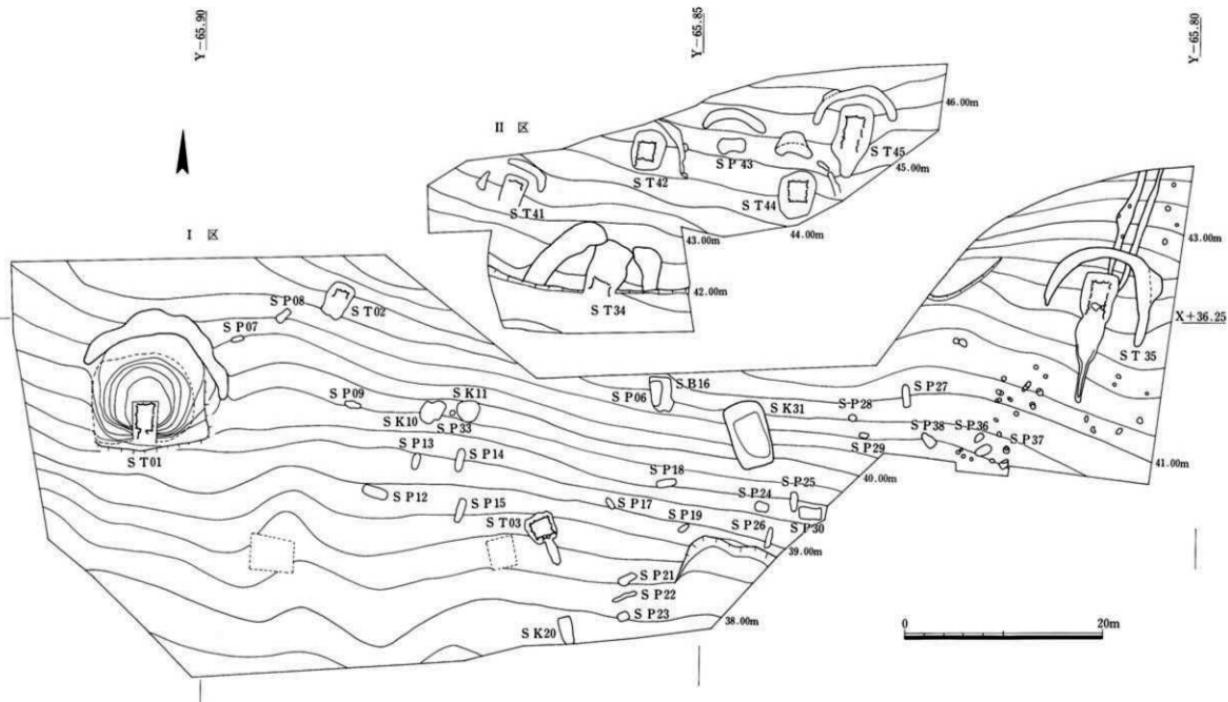


Fig.158 遺構配置図 (Y69)

奈良・平安時代では、この時期にあてた土塙墓23基および木棺墓3基の計26基のうち、出土した土器から時期がわかるのは実は5基で、それ以外はS P38木棺墓のように7世紀に遡るものと含む可能性もあるが、ここでは一応奈良・平安期として扱っておく。これらはとくに明確な群をなさないが、敢えて分ければa群（S P07・08）、b群（S P09・12～15・33）、c群（S P17～21・23～26・30）、d群（S P27～29・37）のおよそ4群に分けられよう。I区東南部外区は蜜柑ハウス撤去後に確認調査したが、土塙墓群の拡がりは認められなかった。したがってI区北側の農道になり削平されたものが若干あったとしても、これら全体でほぼ完結した土塙墓群・木棺墓群と考えてよいであろう。

既に疎石A遺跡でもみられたように、ここでもこれら土塙墓等と古墳との時間的・系譜的関係が問題になる。出土品から時期の明らかなものは9世紀中頃から10世紀中頃にかけてであるが、先のS P38土塙墓（7世紀後半）の存在からみて、一部では既に古墳の築造と並行して土塙墓の造営が始まっており、古墳への追葬期にも多くが造られたことが推定される。注意されるのはS P43木棺墓で、円形周溝をもち木棺を主体部とし、しかも古墳群の中に在る。埴丘まで備えていたかどうかは不明であるが外観は古墳に類似している。時期は9世紀中頃であり、土塙墓・木棺墓群が営まれる一方、併行して古墳への追葬が続いていることを暗示するかのようである。

各遺構の特徴は、S P33以外は土塙墓・木棺墓とも基本的に長方形または隅丸長方形で成人墓が多く、規模は大小様々である。木棺墓3基は鉄釘の使用からそれと知られ、S P43は特殊ながら、S P15とS P25の場合は土師器の副葬および供獻の在り方に疎石A遺跡と類似する点が少なくない。なお、土塙墓のうちS P33土塙墓のみ円形で、遺物の出土状況等からみて火葬に關係する遺構の可能性がつよい。

竪穴はS B16の1基のみである。ただしS P06遺構の一部にあたる可能性も残る。時期は土塙墓等と併行する9世紀である。

その他S K31の大型土塙ほか、2基の土塙がある。なお、ST03古墳西脇とS P12土塙墓の西南側に住居跡らしい方形の堀形を検出したが、床・壁とも不明瞭で住居等に使用された形跡が窺われないなどの点から最近の堀り込みの可能性がつよいものとみて、ここでは遺構として扱わないことにする。

以上のように久池井一本松遺跡は、旧石器時代から弥生時代にかけては遺物が知られるが少なくとも調査区内においては遺構は検出されず、主たる遺構は古墳時代後期から平安時代にかけての古墳群および土塙墓・木棺墓群で占められる。とくに古墳群から土塙墓・木棺墓群への変化の様相が同一遺跡内で具体的に見取れる遺跡はそう多くはなく、疎石A遺跡II・III区の場合と同様、それを営んだ集団の系譜および変容の時代背景を探るうえ重要な資料といえる。

## II. 遺構

## 1. 古墳時代

古墳9基と土壙墓1基を調査した。古墳9基は調査区内にあっては丘陵裾部を中心としながら、土壙墓が分布する南側緩斜面にも3基が弦がって分布する。また調査外ではS T01古墳の東北側約20mに破壊された横穴式石室が1基、その他丘陵上に古墳の可能性がある高まりが数ヶ所認められる。したがって、古墳群全体としてはもともと十数基が丘陵南斜面を中心に一群をなしていたと推定される。

蜜柑園造成による破壊のため、S T01古墳のみ盛土を残すが、他は殆ど石室基部しか残存していない。また副葬品も盗掘により遺存するものは少ない。遺構一覧表 Tab. 24

土壙墓は1基のみ、S P38土壙墓がI区の東南部に位置する。もっとも、これは須恵器の副葬から古墳時代と知られるものであって、実際には他にも古墳時代に遡るものはあろうが、その他についてはここでは奈良・平安時代に含めて扱うこととする。

Tab. 24 古墳一覧表

( ) は推定

遺構番号	墳丘		外部施設	内部施設			出土遺物	備考
	形態	規模 m		形態	方位	石室全長m	玄室幅(共+縮)m	
S T01	円墳	13	周溝・埴輪	横穴式石室	N3°E	3.5	2.45×1.65	須恵器・土師器・鉄器
S T02	(円墳)			#	N38°E		2.3×1.2	須恵器・土師器
S T03	円墳	約6	周溝	#	N23°W		1.52×1.9	須恵器・土師器
S T34	#	約10	#	#	N24°W		1.8以上×1.8	須恵器・土師器
S T35	#	約8	#	#	N11°E	3.5	2.2×1.58	須恵器・土師器
S T41	#	約7	#	#	N19°E		1.6×1.5	須恵器・土師器
S T42	#	約6	#	#	N10°E	2.5	1.6×1.6	須恵器・土師器
S T44	#	約5	#	#	N0°E		1.92×1.74	須恵器・土師器
S T45	#	約7	#	#	N10°E	3.3	2.26×1.65	須恵器・土師器

## (1) 古墳

## S T01古墳 (Fig. 159~161, PL. 129・130)

調査区の最も東はずれに位置する。墳頂部に近世の祠がまつられてあった為、蜜柑園造成の際にも1基のみ削平をまぬがれ残存したらしい。墳頂部には祠が倒壊し、付近に灯明皿が多数

散在していた。

長方形の玄室に付設する短かい羨道が外に開く比較的古式の横穴式石室を内部主体とする円墳である。今回調査した他の8基が7世紀後半を中心とするのに対し、本墳のみ6世紀前半に通り、時間的に大きな隔たりがある。

ちかくにはS P07土塚墓が近接するが、全体の遺構分布の中では7世紀以降の古墳および土塚墓・木棺墓の一群から離れている。

墳丘は周囲、とくに南側から削平を受け現状では径約10mであるが、周溝等から復元すればもともと径約13m、高さ約1.8mである(Fig. 159)。周溝は幅約2.5mで浅く残存しており、不

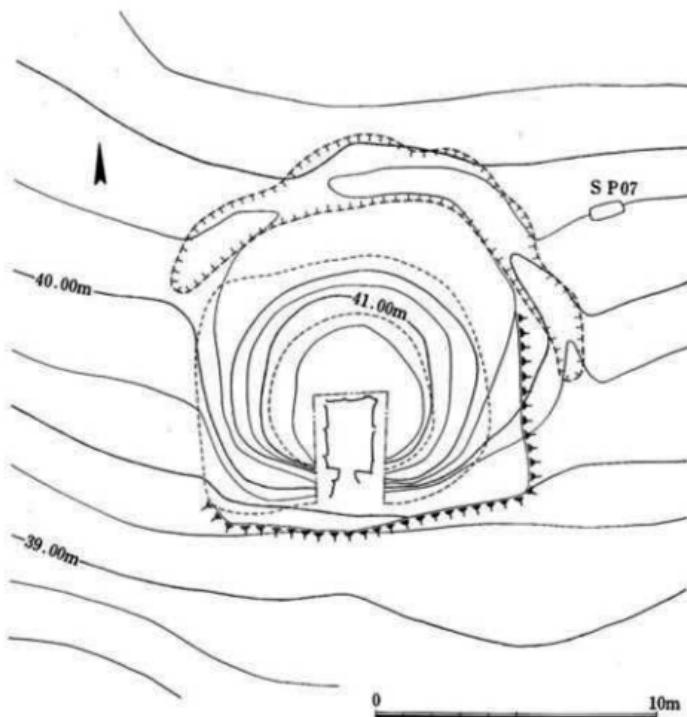


Fig. 159 S T01古墳墳丘 (O<sub>200</sub>)

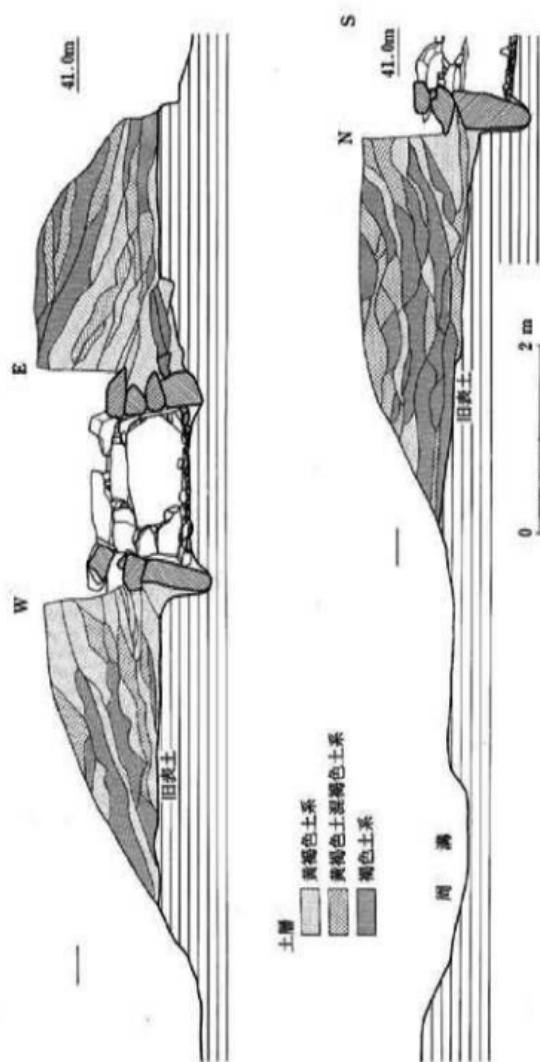


Fig. 160 ST 01古跡堆丘断面図 (Y.)

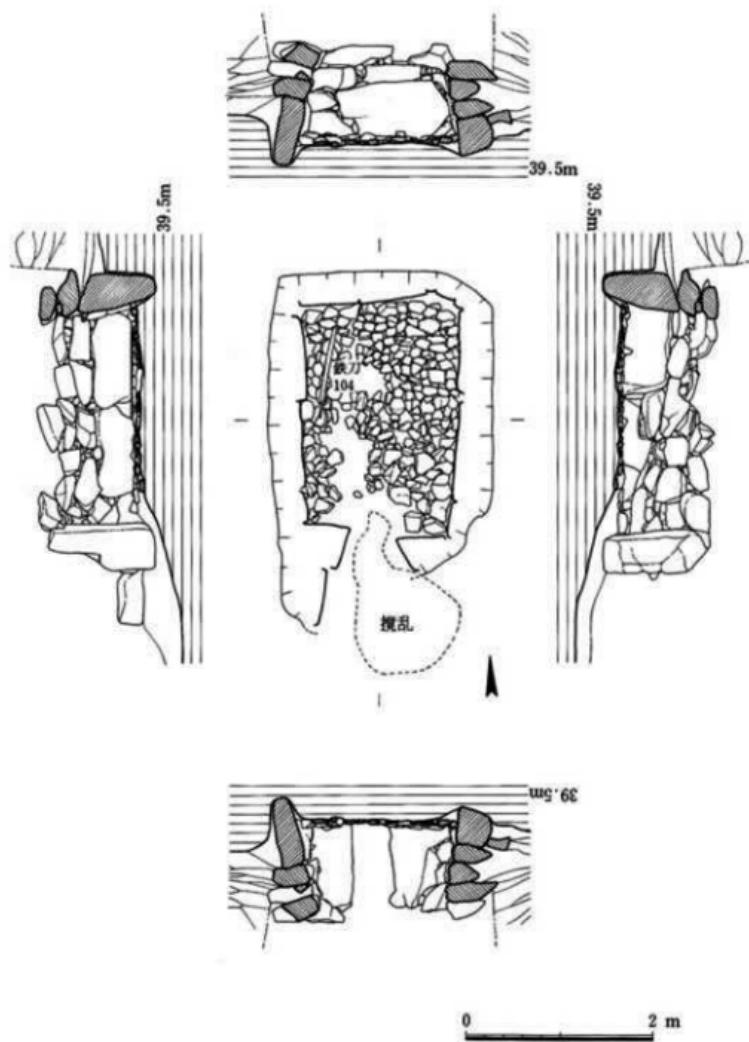


Fig. 161 S T01古墳石室 (ノ)

## 久池井一本松遺跡

整形な弧を描いて北側に $\frac{1}{2}$ 周ちかく残る。墳丘盛土は基本的に黄褐色粘質土・黒褐色土および両者の混合土から成り、石室の構築と並行して作業が進められたことがその断面から観察される(Fig. 160)。断面でみると地山掘削土である黄褐色粘質土は石室の壁体を積み上げてゆくに従い、その控え積みとして石室の補強に用いられているのに対し、黒褐色および混合土は単に墳丘形成に用いられた傾向が明瞭である。すなわち黄褐色土控え積みの多用は東西および北側盛土のいずれでも石室天井石の高さまで一貫おわる。おそらく石室が完成した時点ではそれを覆う黄褐色土主体の盛土がいわゆる第1次小墳丘の観を呈していたであろう。あとは黒褐色土等を主に墳丘の盛土仕上げ作業が続けられることになる。また断面でみると盛土状況は、東西では各単位層が石室中心から裾に向かって緩やかに長く下るのに対し、北側では全体として各単位層が短かく水平に積まれているという違いがあるが、これは北側が丘陵傾斜上方にあたることと関係するものであろう。

石室は墳丘の南側に寄った位置にあり、疊石B遺跡のS T04古墳同様おそらく平面形で奥壁が墳丘の中心となるよう設計されたものではないかと推定する(Fig. 161)。両袖式で長方形の玄室に「ハ」字形に開いた開口部が付く。天井石は玄門付近で半ば落ち込んで残っていたが、調査の際危険な為、除去した。石室前面はかなり荒らされ、棺石も取り去られていた。開口部では西側のみ基段の石材1個が残っていたが、門口幅の拡張方等からみて狭道にあたる構造ではなく、これが元の長さにちかいと考えられる。南側はさらに墓道が続いていると推測する。

石室の規模は全長3.5m、玄室で高さ1m以上、長さ2.45m、幅は奥壁に向かってやや開き、中央で1.65m。玄門は最小幅0.5mと狭く、開口幅は復元推定1.2m。主軸方位はN 3°Eである。

石室の構築は奥壁では基段に比較的大きめの石材を横長にして西側の隙間は別の石材で補い、その上に2段を積む。両側壁は基段で奥壁側に比較的大きめの石材2個を横長にして、玄門側を他1個で補充、さらに上に2段~3段を積む。玄門部は両側に天井石の高さにちかい袖石を立てる。玄室床面には小砾が敷かれているが、盗掘等により西側がとくに荒らされていた。墓壙は石室がようやく収まる程度に狭く長方形に掘られ、壁体基段の各石材は墳底をさらに掘り込んで据え付けられていた。

出土遺物は墳丘外表および周溝埋土中などから埴輪が出土したが、原位置を保つものはない。玄室内では西北部床で長大な鉄刀1点と鉄鎌1点が出土。その他石室開口部の攪乱中から多量の須恵器片、その他土師器片と鉄鎌が若干採集されている。

築造時期は6世紀前半で、7世紀前半まで追葬が行われている。

## S T02古墳 (Fig. 162, PL. 131)

小型の横穴式石室を内部主体とする。盛土削平のため墳丘の形状・規模は不明であるが、小規模の円墳と推定される。

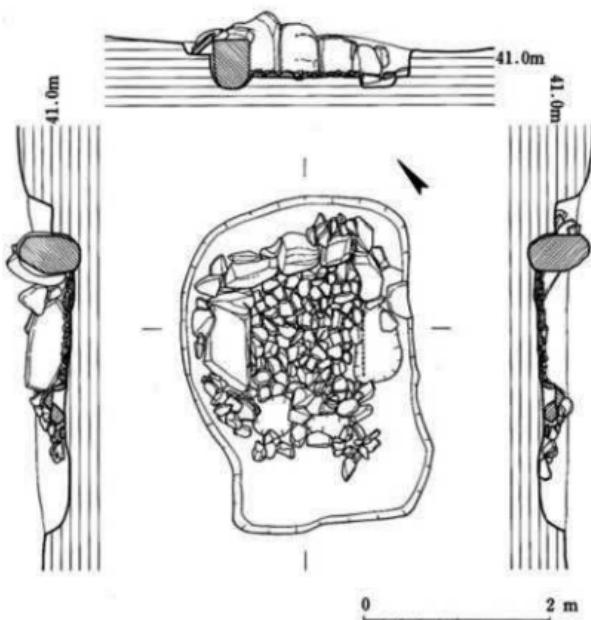


Fig. 162 ST02古墳石室 (引)

石室は玄室のみで、狭道にあたる構造はもたないと考えられる。玄室の羅床と北側半分の壁体基段のみ残在しており、西南隅の石材抜跡が開口部袖石とすれば、片袖式となる。ただし玄室形態は奥壁が主軸対し斜交変形している。

石室規模は玄室で主軸長2.3m、幅1.2m。主軸方位はN38°Eである。

石室構築は雑で、壁体、羅床とも花崗岩の自然石を用いている。奥壁の場合は3個を縦長に立て、側壁基段は西北側で1個を横長に平置き、東南側は抜跡のほか開口部にもう1個あったとみれば基本的に2個を並べていたと推定する。南隅の抜跡は框石であろう。

墓壇は基本的に長方形で、奥壁側と西北側では石室が收まる分だけ2段に掘り下げ各壁体の石材基部はさらに浅く掘り込んで据え付けられている。墓壇内で石室前面にあたる部分は狭く、せいぜい閉塞に用をなす程度である。

出土品は須恵器片が数点にすぎず、築造時期は不明であるが、石室の型態から7世紀後半と推定する。

S T 03古墳 (Fig. 163, PL. 131)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。削平により盛土を欠失し、周溝と石室基部のみ残存する。

周溝は西側から北側にかけ約半周、幅約0.5mで浅く残る。周溝から推定して墳丘径約6mである。

石室は方形の玄室に直接墓道が付く。墳丘との関係では玄室中心がほぼ墳丘中心と重なる位置にある。

玄室の規模は長さ1.52m、中央幅1.9mで、奥壁側がやや広くなる。主軸方位N23°W。これに長さ2.6m、幅約0.8mの浅い墓道が付く。

石室構築は壁体基段に花崗岩自然石を使用、疊床は数個の緑泥片岩を混じえるが殆ど花崗岩小礫を敷きつめている。基段の場合、奥壁から両側壁にかけて2、3個を継長あるいは横長に立てており、方法が一定しない。開口部は両側に袖石を立て、疊2個を並べて框としている。墓壇は石室がようやく収まる大きさの方形である。

副葬品は玄室東南隅床上から須恵器高坏1点、その他石室および墓道埋土中から須恵器片・土師器片が若干出土した。築造時期は7世紀後半である。

S T 34古墳 (Fig. 164, PL. 132)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。盛土は削平され、石室も南側前半部を欠く。周溝は幅約2mで浅く北側に約 $\frac{1}{3}$ 周残っており(Fig. 158)。これから復元推定して墳丘径約10mである。周溝は検出面では途中浅くなつて切れてみえる。また石室西壁が後方に倒れかけ、疊床が荒らされているなど破壊が著しい。

石室は比較的大きめの花崗岩を用いている。残存部で測って玄室は長さ1.8m以上、幅1.8m。高さは1.6m以上で、壁体持送り等の関係からみて元々の高さは奥壁にもう1個載せた程度と推定する。主軸方位はN24°Wである。

石室構築は最もよく残る奥壁で3段まで残存する。石材の積み方は継長に用いた部分もあるが、基本的には横長に使用し、隙間を小礫で埋めている。基段は墓壇をわずかに掘り込んで据え付けている。墓壇はとくに奥壁側で丘陵裾部を深く掘り込んでいるが、石室との関係では必要に広い。もともとの自然地形を埋めたか、あるいは工程上の手違いであるか理由は不明である。

副葬品は石室内埋土中から須恵器片・土師器片が若干と鉄錆残欠が数点出土した。

出土品の時期は7世紀後半であるが、築造時期は石室の形態からみて7世紀前半に遡るものと推定する。

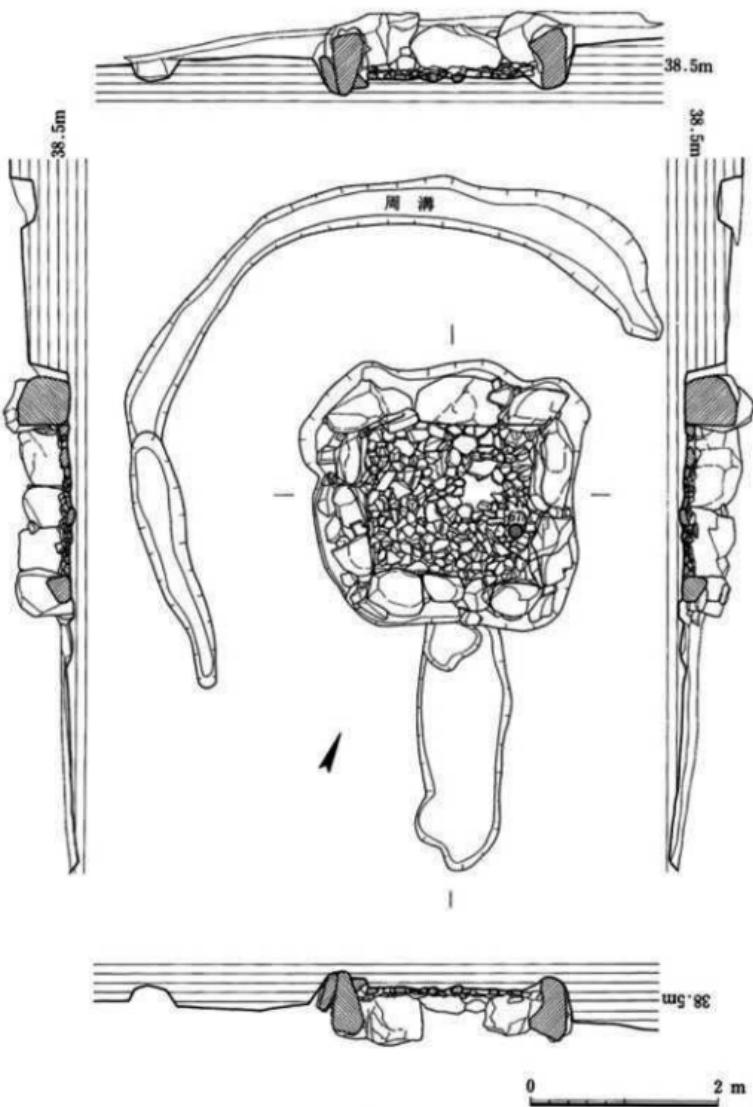


Fig. 163 S T03古墳石室 (1/10)

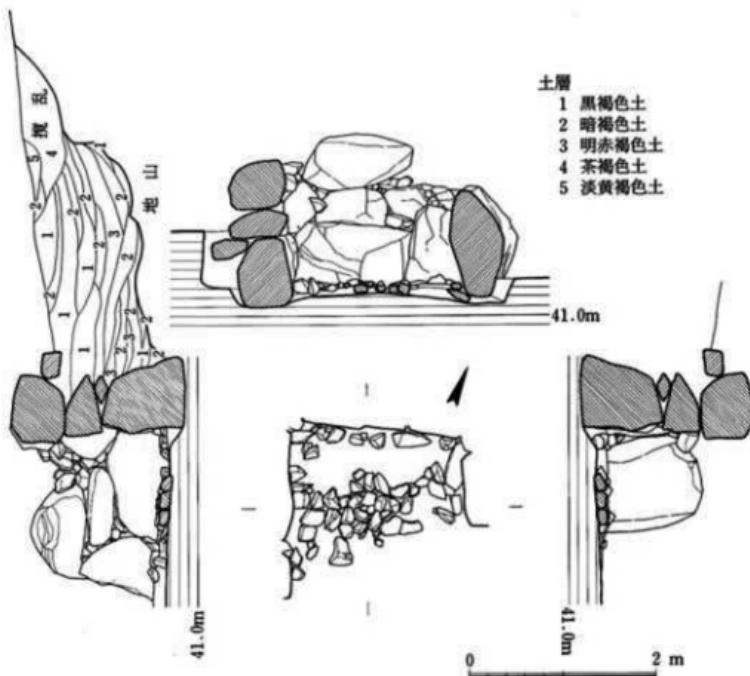


Fig. 164 ST34古墳石室 (1/5)

## S T35古墳 (Fig. 165, PL. 133)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は削平されているが、北側で幅約1m、深さ約0.5mの周溝が約 $\frac{1}{2}$ 周残っており (Fig. 155)，推定径8mである。石室も削平が著しく、壁体基部の1、2段程度か残っていない。

石室は無袖式で、玄室幅がそのまま開口部に続き、玄門位置に框石にあたる石材を1個置いて外と仕切っているが、壁体の石積みで見る限り区別はつけにくい。玄室内には小砾を敷いている。石材は全て花崗岩自然石である。規模は全長3.5m、玄室は長さ2.2m、幅1.58m。主軸方位N11°E

石室構築は奥壁基段で2個を縦長に立て、両側壁では玄室から開口部まで6個づつ比較的小な石材をやや雜に並べている。墓壙は石室壙と前底・墓道を一体に掘り込んでおり、幅は玄室付近で3.5m、長さは石室壙から前底壙まで約9m、これに幅約0.5m、長さ4mの墓道が付く。壁体基段は、各石材を墓壙底に直接据え付け、石室内は約10cm厚に土を入れた上に砾床を

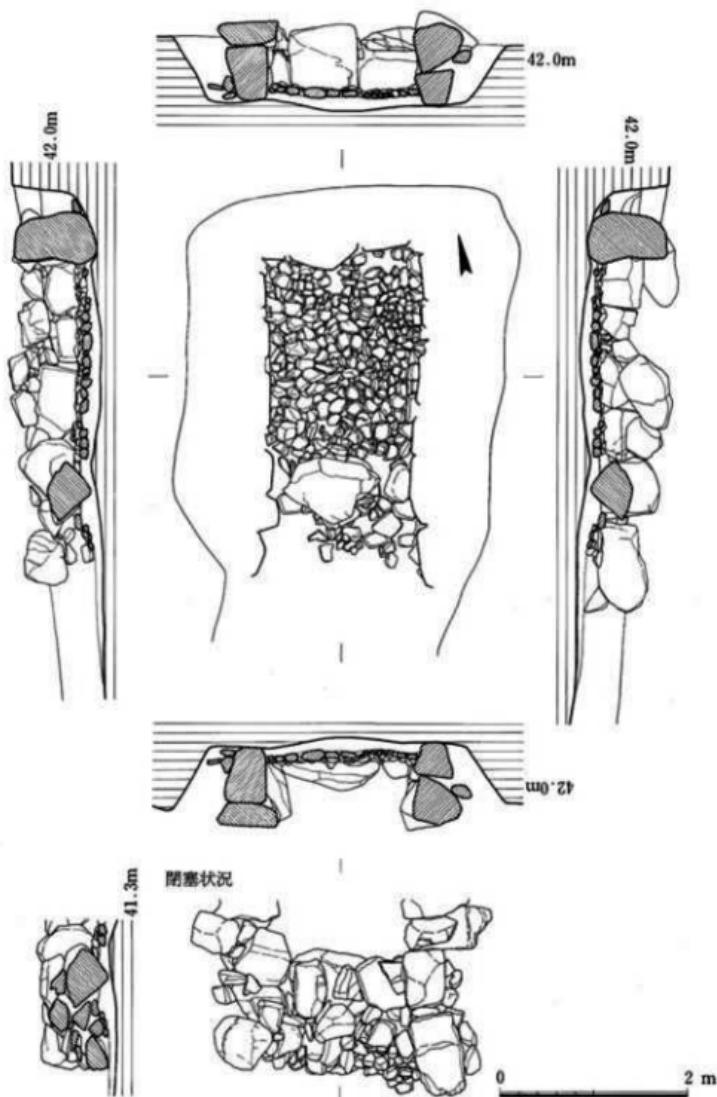


Fig. 165 S T35古墳 (上)

つくっている。

開口部には閉塞基部が残っていた。樋石を兼ねた雑石の上に疊を積み上げたもので、石室南端いっぱいまで塞いでいた。

副葬品等で原位置を保つものはなく、石室内および石室前面の埋土中から須恵器片、土師器片が若干ほか、玄室南東隅から鐵鎌片が数点出土したにすぎない。

築造時期は6世紀後半である。

#### S T41古墳 (Fig. 166, PL. 134)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。削平により盛土を欠失するが、丘陵上方の北側に幅約0.8mの浅い周溝が一部残る。復元径約7mである。

石室も破壊が著しく、玄室の一部しか残っていない。壁体基部の抜き跡から推定して、玄室は開口部中央に樋石を置く両袖式の方形で長さ1.6m、幅1.5m。主軸方位N19°E。石材は全て花崗岩である。

石室構築は基段で奥壁に2個、両側壁には3、4個を横長に並べる。墓壙は幅2.4m、長さは2.7mまで残存する。

壁体基部は墓壙底を若干掘り込んで据え付け、玄室内には約10cm厚で土を入れた上に疊を敷いて床をつくっている。

出土遺物は玄室内埋土中から須恵器片が数点出土した程度である。

須恵器は7世紀末であるが、築造時期は石室の形態から7世紀中頃まで遡ると推定する。

#### S T42古墳 (Fig. 167, PL. 134)

小型の横穴式石室を主体部とする円墳である。墳丘は削平されているが、東北側に幅約0.5mの浅い周溝が約 $\frac{1}{4}$ 周残っており、これから復元される墳丘径は約6mである。

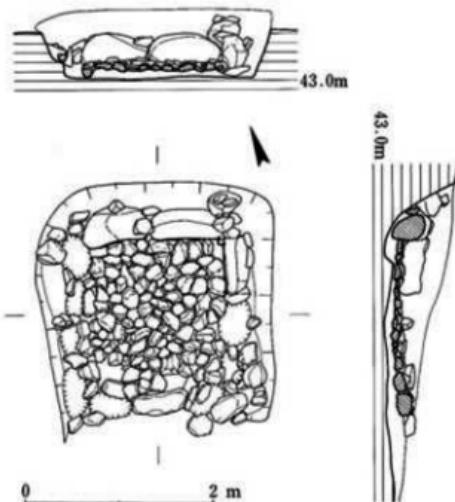


Fig. 166 S T41古墳石室 (左)

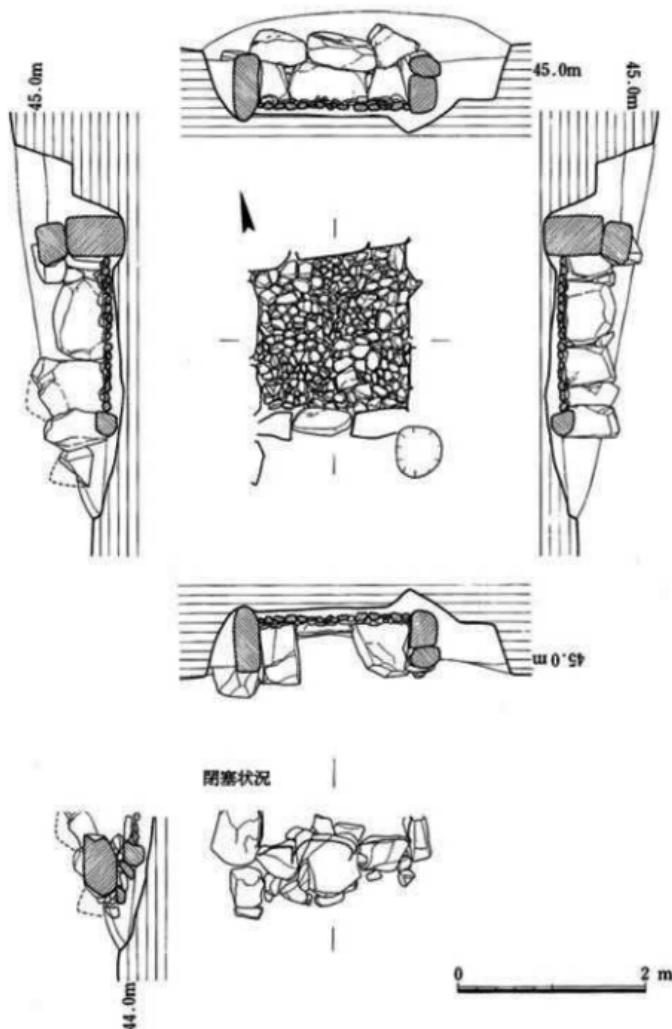


Fig. 167 S T 42 古墳石室 ( $\frac{1}{50}$ )

## 久池井一本松遺跡

石室は壁体基部が奥壁で2段、側壁で1段しか残っておらず、また開口部東側の石材が1個抜かれている。石材は全て花崗岩である。平面形は両袖式ながら、玄室の幅がそのまま開口部まで続く。奥壁から開口部までの全長2.5m。主軸方位N10°E。そのうち玄室は長さ1.6m、幅1.6m、玄門幅0.66mで、やや奥壁が斜行した方形を呈す。

石室構築は基段でみると奥壁3個、東側壁3個、西側壁2個の石材を形状に合わせ縦長または横長に立てて使用している。玄門部袖石は両側から縦長に立てて框石を挟む、基壇は丘陵斜面を長方形に掘り込み、長さ4.0m、幅3.2m。石室との関係では北側および東側に若干の余地がある。壁体基段は基壇底を若干掘り込んで石材を据え付け、玄室内部に約10cm厚で土を入れた上に小砾を敷いて床をつくっている。

開口部には閉塞の基部が若干遺存していた。閉塞の疊積みは玄室側に面を揃えている。

出土遺物は玄室襖床がよく残っていたわりに原位置を保つものではなく、石室埋土中から須恵器片、土師器片と青磁片1点が数点出土した程度である。

築造時期は7世紀後半である。

## S T 44古墳 (Fig. 168, PL. 135)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は削平されているが、東北側の丘陵上方に幅約1mの浅い周溝が約 $\frac{1}{4}$ 周残っており、復元径約5mである。

石室も削平により殆ど基部しか残っていない。前面部分はかなり破壊されているが、両袖式でおそらく玄室だけからなるものであろう。玄室は長さ1.92m、幅1.74m、玄門幅約0.7m。主軸方位はほぼ真北を向く。石材は全て花崗岩である。

石室構築は基段で奥壁3個、両側壁各3個を基本的に縦長にして、一部に残存する2段目以上は比較的小さめの石材を横積みしている。袖石は両側に立てた抜き跡が残り、框石を挟む。床面には小砾を敷いている。基壇は石室よりかなり広めに丘陵斜面を長方形に掘り、基段の石材は西側壁以外では壇底をさらに掘り込んで据え付けている。また、開口部には閉塞石積みの痕跡がわずかに残る。

副葬品等で厚位置を保つものではなく、石室内埋土中から土師器片が数点出土した程度である。築造時期は不明であるが、石室の形態から7世紀後半と推定する。

## S T 45古墳 (Fig. 169, PL. 135)

横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は削平されているが、北側の丘陵上方に幅約0.8mの浅い周溝が約 $\frac{1}{3}$ 周しており、復元径約7mである。

石室も削平により奥壁2段まで、両側壁は基段しか残っていない。石材は全て花崗岩である。開口部で東側から幅がやや狭まるが、玄室幅とあまりかわる程ではない。ただし玄室基段が基

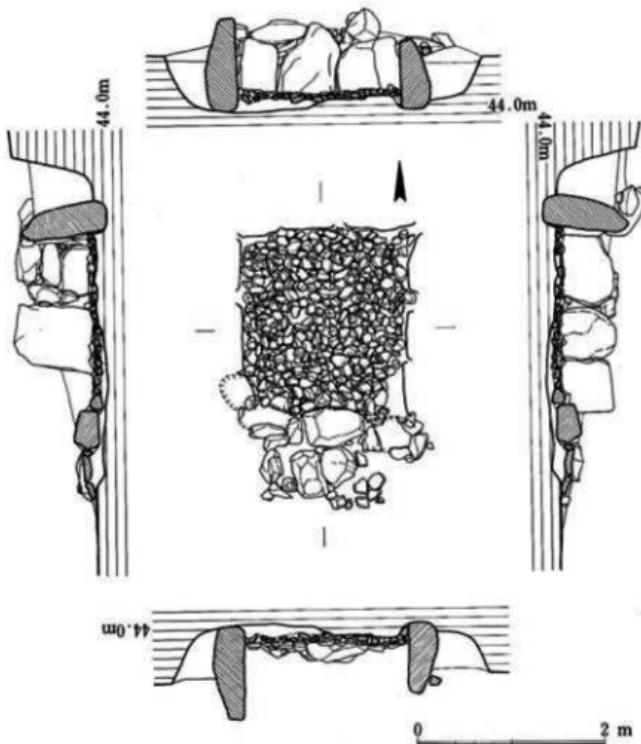


Fig. 168 ST 44古墳石室 (上)

本的に石材を各辺2個づつ横長に立てているのに対し、玄門部分に側壁を縦長に立てており、袖石としての意識が看守される。奥壁から開口部まで長さ3.3m、玄室は長さ2.26m、幅1.65m、開口部は幅1.4m。主軸方位はN10°Eである。

開口部は両側壁に各1個づつ石材を置く。玄門部には框石にあたる石材を3個並べ、一応玄室を仕切っているが、実際は閉塞基部を兼ねた処置であろう。閉塞石積みは下部が若干残っており、開口部を埋めていた。

墓壙は丘陵斜面を長方形に掘り、壁体基段の石材は奥壁の1個以外は壙底に直接据え並べてある。また玄室部では不揃いな小砾を壙底に直接敷いて床をつくっている。

副葬品は玄室東壁際に須恵器壙1点が残っていた以外、石室埋土中から須恵器片が数点ある。

出土遺物は7世紀後半であるが、築造時期は石室の形態から7世紀前半に遡ると推定する。

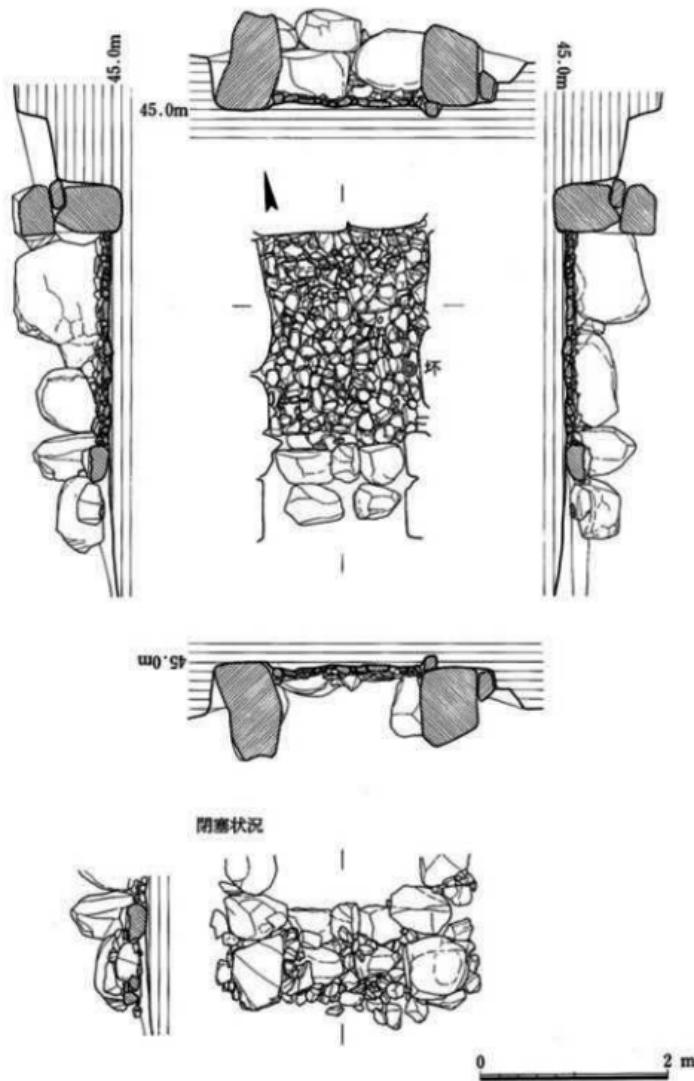


Fig. 169 S T 45古墳石室 ( $\frac{1}{40}$ )

## (2) 土塙墓

S P 38土塙墓 (Fig. 170, PL. 142)

西北側でやや幅が狭まり稍円形状となるが、基本的に長方形の土塙墓である。長さ1.70m、幅は中央で0.92m、深さ0.4m。四壁は全体として直にちかく掘り込まれ、墳底は西北側に向かってやや上がる。頭位は西北側とみてN47°Wである。

副葬品は墳底中央からやや東北寄りで、須恵器壺の蓋と身がセットで出土した。もともと蓋が被さっていたと思われるが、検出状況では蓋がはずれていた。副葬品としてよいであろう。

## 2. 奈良・平安時代

緩斜面一帯から一部丘陵裾にかけ土塙

墓23基・木棺墓3基・竪穴1基・土塙3

基を検出した。多数を占める土塙墓・木棺墓は全体としてよく遺存していた。遺構一覧表 Tab. 25

Tab. 25 土塙墓・木棺墓一覧表

遺構番号	種別	土塙形態	規模(長×幅×深)cm	方位	出土遺物	備考
S P 06	土塙墓	圓丸長方形	243×110×60	N 1°W	土師器(环3)・刀子1・鉢輪車1	
07	#	長方形	126×53×80	N75°E		
08	#	#	163×73×40	N47°W		
09	#	圓丸長方形	160×70×50	S72°W		
12	#	長方形	254×97×80	S72°E		
13	#	圓丸長方形	160×67×12	N20°E	土師器(変1)	
14	#	長方形	230×78×80	N13°E		
15	木棺墓	#	226×76×60	N14°E	土師器(环9, 变2)・ 棺釘約20	木棺法量(推定) 180×45×35

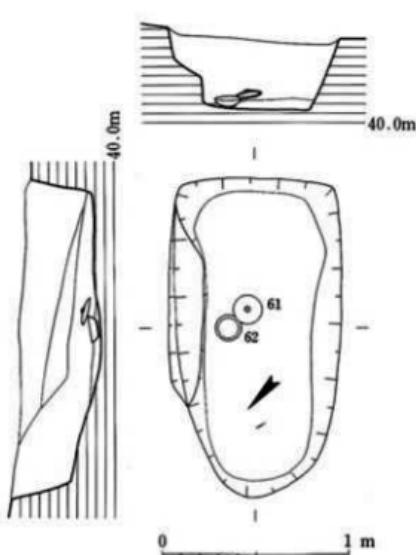


Fig. 170 S P 38土塙墓 (V18)

## 久池井一本松遺跡

遺構番号	種別	土壤形態	規模(長・幅・深)cm	方位	出土遺物	備考
S P17	土壤墓	長方形	121×56×90	N53°W		
18	#	#	200×75×50	N82°E		
19	#	隅丸長方形	118×51×15	N38°W		
20	#	長方形	222×124×10	N12°E		
21	#	#	198×62×30	N65°E		
23	#	#	118×85×15	N21°W		
24	#	#	137×94×34	N75°W		木棺法量(推定) 156×45×30
25	木棺墓	#	186×67×43	N1°E	土師器(环2)・棺釘12	
26	土壤墓	#	200×49×23	N13°E		
27	#	#	230×80×55	N6°W		
28	#	不整円形	長径85、深20	—		小児用
29	#	隅丸長方形	89×54×42	N72°E		小児用
30	#	長方形	226×113×40	S87°W	土師器(环8)	
33	#	円形	径56、深30	—	水晶製垂飾2・銅片・骨	火葬骨埋納か
36	#	長椭円形	120×59×20	N54°E		
37	#	長方形	173×79×50	N68°E		
38	#	#	170×92×40	N47°W	須恵器(环身・蓋各1)	古墳時代
43	木棺墓	#	288×130×70	N0°E	土師器(环6)、刀子2	円形周溝

## (1) 土壤墓・木棺墓

## S P06土壤墓 (Fig. 171, PL. 137)

S K16と切り合う。S K16は全体の掘形が不明瞭であるが、一応別の竪穴と考える。S P06と東壁を共有するかどうか確かではないが、共有するとすれば同一遺構の可能性もある。S K16はS P06を掘り下げる際確認できたもので、共に埋土が同質で当初その存在に気付かず、切り合いの先後関係は不明である。

S P06は隅丸気味で南側短辺がやや狭くなるが、基本的に長方形土壤墓である。長さ2.43m,

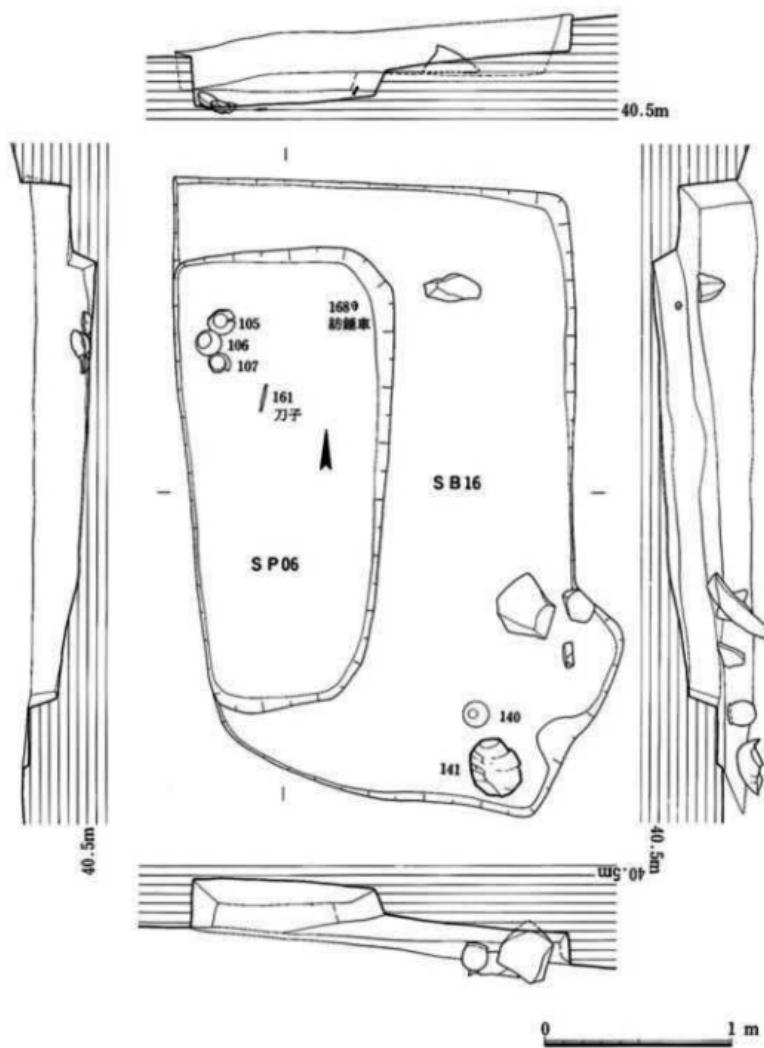


Fig. 171 S P06土壤墓・S B16堅穴 (1/50)

## 久池井一本松遺跡

幅は中央で1.10m、検出面からの深さ0.6m。墳底は南側に向かってやや上がるが、頭位は幅が広く地形の傾斜上方にあたる北を優位とみてN 1°W。副葬品は北側墳底から石製鉗車1点・刀子1点・土師器環2点(105・107)・内黒陶1点(106)が出土した。刀子は鋒を北に向けていた。

### S P 07土壤墓 (Fig. 172, PL. 137)

S P 08土壤墓とともにS P 02古墳の西南側に位置する。西側でやや幅が広くかつ隅丸となるが、基本的に長方形土壤墓である。長さ1.26m、幅0.53m、深さは東壁際0.8m。頭位は西を優位とみてN 75°E。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底は西側に向かって約0.1m上がる。

### S P 08土壤墓 (Fig. 172, PL. 137)

長方形土壤墓である。平面形は東南側短辺がやや狭くなる。地形の傾斜下方にあたる西北側がかなり削平されている。長さ1.63m、幅0.73m、残石最深部0.4m。頭位は傾斜上方を優位とみてS 47°W。四壁は直にちかく掘られ、墳底はほぼ平坦である。

### S P 09土壤墓 (Fig. 172, PL. 137)

隅丸長方形土壤墓である。北側長辺が張り出してみえるが、攪乱等により壁の原形が不明確なため掘りすぎた可能性がつよい。上面は削平され、残りが浅い。長さ1.60m、復元幅0.7m、検出面からの深さ0.5m。頭位は明確でないが、やや幅の広くなる東とみればS 72°W。四壁は全体としてやや斜めに掘り込まれ、墳底は平坦である。

### S P 12土壤墓 (Fig. 172, PL. 138)

今回調査した土壤墓の中では最も大型の長方形土壤墓である。上面はある程度削平されていると思われる。長さ2.54m、幅0.97m、検出面では深さ0.8m。頭位は幅のやや広い東側とみてS 72°E。四壁は直にちかく掘り込まれ、墳底は平坦である。

### S P 13土壤墓 (Fig. 173, PL. 138)

隅丸長方形土壤墓である。削平により残りが浅い。長さ1.60m、幅0.67m。墳底は北側に向かって上がる。頭位は北とみてN 20°Eである。中心部からやや北側で墳底から約10cm浮いた状態で土師器壺片が出土した。削平面にもちかいのでやや問題はあるが、S P 15土壤墓からも壺片の出土がみられることから、一応供獻品としておく。

### S P 14土壤墓 (Fig. 173, PL. 138)

四隅とも隅丸状にちかいが、基本的に長方形土壤墓としてよいであろう。長さ2.30m、幅0.78

II. 遺構

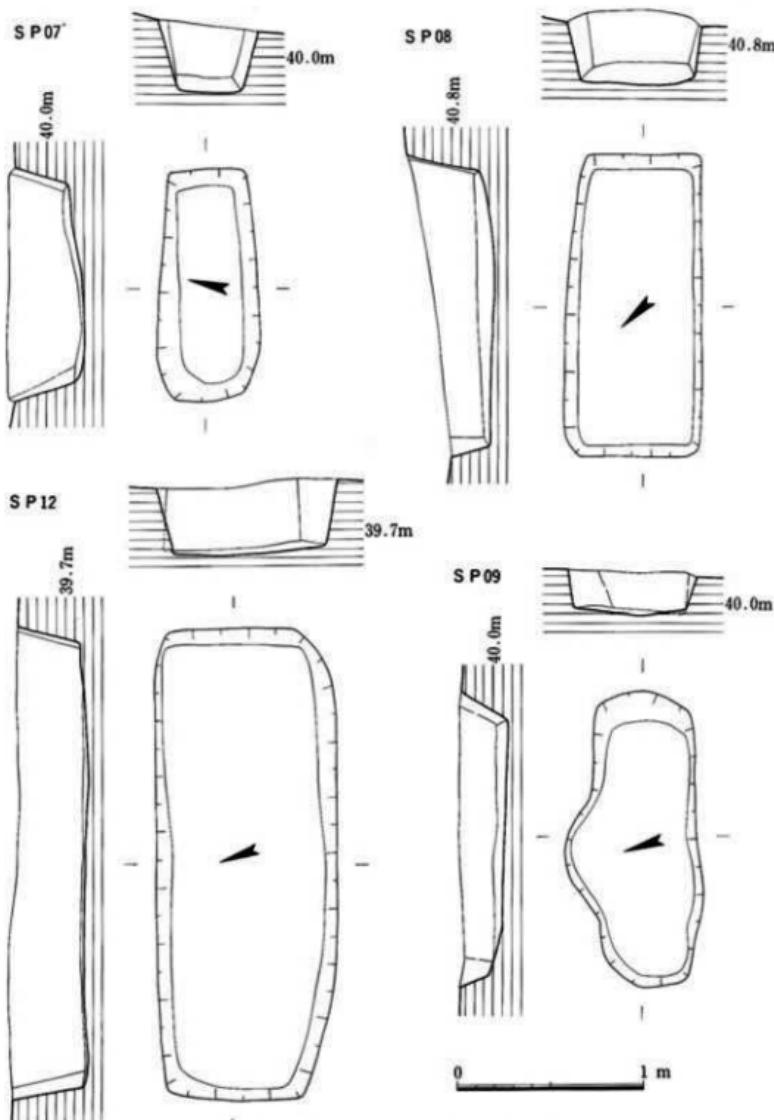


Fig. 172 SP07 • SP08 • SP09 • SP12 土壙基 ( $\frac{1}{10}$ )

### 久池井一本松遺跡

m, 檜出面での深さ0.8m。頭位は地形の傾斜上方にあたる北とみてN13°E。四壁は両短辺がやや斜めに、両長辺は直に掘り込まれている。墳底はほぼ平坦である。

#### S P 15木棺墓 (Fig. 174, PL. 138)

墓壙は長方形に掘られ、釘及び供獻土器の出土状況から明らかに木棺が認められていたことがわかる。墓壙は長さ2.26m, 幅0.76m, 深さ0.6m。上面はやや削平されている。四壁は両短辺が直に、両長辺がやや斜めに掘り込まれ、墳底は地形の傾斜上方にあたる北側に向かって上がる。頭位は北とみてN14°Eである。

埋土中から出土した釘は約20点を数えるが、墳底ちかくからやや浮いた状態で出土したものより墓壙中位以上からのものが多少多い。また、その平面位置が棺の四隅以外に四辺中央位からも出土している。したがってこれらの釘は、全てとは言えないまでも、棺の蓋を打ち付けるのに用いられたものを含んでいると推定される。同様な例は躰石A遺跡でも見られたところである。また、埋土中から出土した土師器は全て墓壙の両側壁に寄り、木棺と墓壙との隙間に投げ込まれた状態にちかい。中央からやや南側にみられる若干の破片は木棺の腐朽後に西側から崩れ落ちたものであろう。しかもこれらの土器群中には、同一個体の破片が離れて別々に出土するものがかなりみられ、しかも大部分は墓壙中位以上からの出土である。したがってこれらの土器は副葬品ではなく、いわゆる供獻品に当たるものであろうが、木棺を据え付け、ある程度基部を土で固めながら西側の隙間に投げ入れたと考えられるかかる状況からは、いかにも埋葬の際に他所で送葬儀礼に使用された土器を処理したという観がつよい。なお、土器の器種は壺9点・甕2点である。

また、これら釘および土師器の出土状況から推定される木棺の外法量は長さ約1.8m, 幅0.45m, 深さ0.35m以上である。法量では成人を容れるに十分足りる。

#### S P 17土壤墓 (Fig. 173, PL. 139)

基本的に長方形土壤墓であるが、東北隅以外は隅丸で、しかも西南側半分は幅が狭くなり、かつ梢円形にちかい。上面はとくに西南側がかなり削平されている。長さ1.21m, 幅は中央で0.56m, 深さ0.9m。頭位は東北側とみてN53°W。四壁は東北辺がほぼ直に、他はやや斜めに掘り込まれ、墳底は平坦である。

#### S P 18土壤墓 (Fig. 173)

長方形土壤墓である。上面はある程度削平されている。長さ2.00m, 幅0.75m, 残存最深0.5m。四壁は直にちかく掘り込まれ、墳底はほぼ平坦ながら東側に向かってわずかに上がる。頭位は東側とみてN82°Eである。

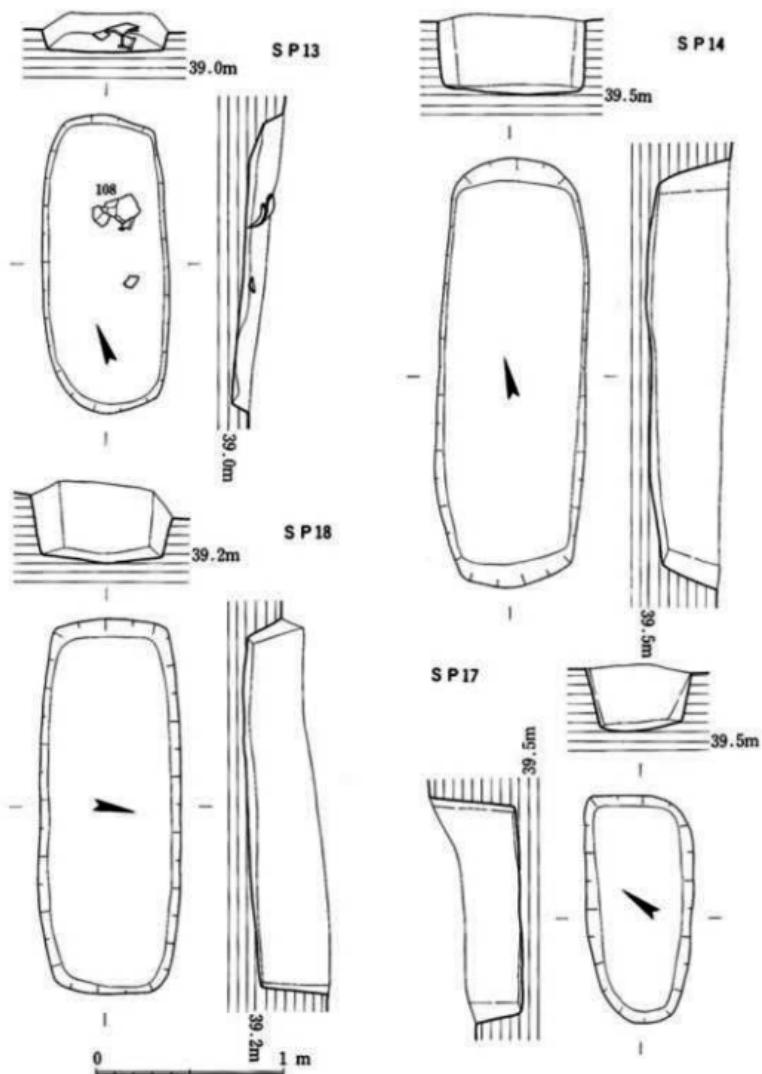


Fig.173 S P 13•S P 14•S P 17•S P 18 土 壤 基 (3/4)

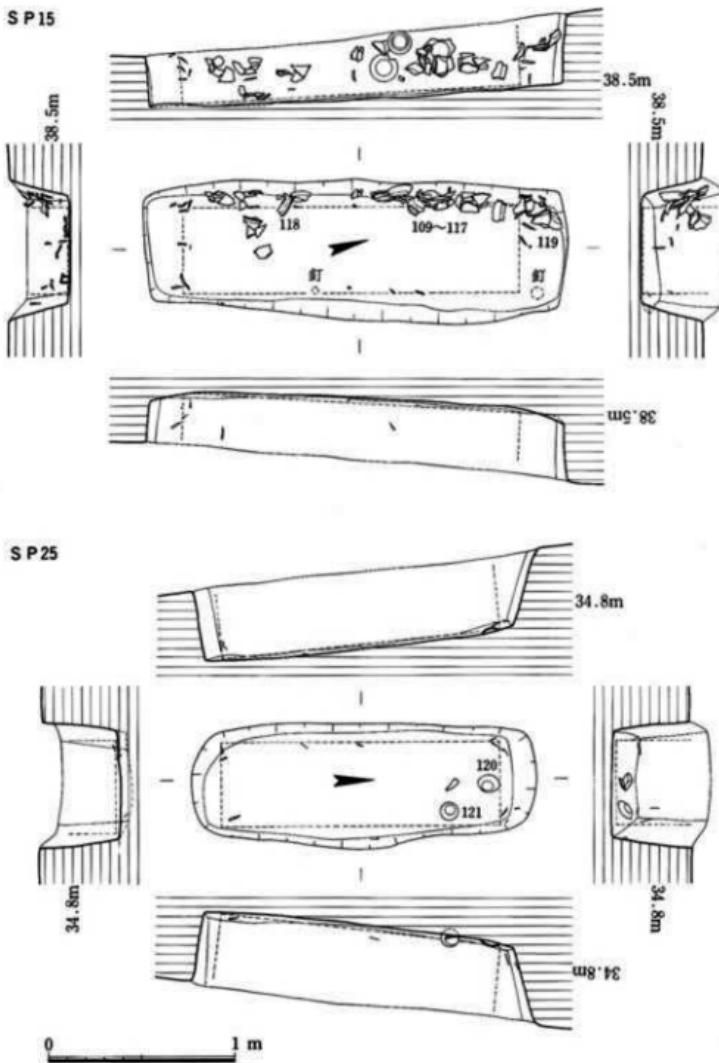


Fig.174 S P 15・S P 25土壤墓 (1/20)

## S P 19土壙墓 (Fig. 175, PL. 139)

小型の隅丸長方形土壙墓である。上面は削平されて残りが浅い。長さ1.18m, 幅0.51m。墳底はほぼ平坦ながら東南側に向かってやや上がる。頭位は地形の傾斜上方にあたる西北側を優位とすればN38°Wとなる。

## S P 20土壙墓 (Fig. 176, PL. 139)

南側で幅が狭まるが、基本的に長方形の大型土壙墓である。削平が著しく、壁高は10cmほどしか残っておらず、黒色土がつまっていた。規模は長さ2.72m, 幅は中央で1.24m, 頭位は北とみてN12°Eである。

## S P 21土壙墓 (Fig. 175, PL. 139)

基本的に長方形の土壙墓である。西側がやや狭まり、全体にいくぶん不整形である。上面はとくに西側がかなり削平され、また南辺西側を荒らされている。長さ1.98m, 幅は中央で0.62m, 残存深0.3m。頭位は東側とみてN65°Eである。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底は平坦である。

## S P 23土壙墓 (Fig. 175, PL. 140)

S P 24土壙墓とともに矩形にちかい長方形土壙墓である。上面は削平されて残りが浅い。墳底はほぼ平坦である。長さ1.18m, 幅0.85m。頭位は地形の傾斜上方にあたる北とすればN21°Wである。

## S P 24土壙墓 (Fig. 175, PL. 140)

矩形にちかい隅丸気味の長方形土壙墓である。長さ1.37m, 幅0.94m, 残存深0.34m。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦である。頭位は仮に東側とすればS75°Wである。

## S P 25木棺墓 (Fig. 174, PL. 140)

S P 15木棺墓とともに木棺の使用が明らかな例である。墓壙は隅丸気味の長方形で、長さ1.86m, 幅0.67m, 深さ0.43m。頭位は北でN1°E。四壁は直に近く掘り込まれ、墳底は北側に向かってかなり上がる。

木棺の使用を証する釘は墓壙の四隅および両長辺の中央付近で墳底ちかくから検出された。これから推定される木棺の法量は長さ約1.5m, 幅約0.45m, 深さ約0.3mである。釘がS P 15木棺墓と違って墳底付近で検出されているが、東南隅以外は2, 3点かたまっており、木棺の腐朽に伴って落ち込んだものもある。また長辺中央付近からも出土しており、棺の底板を打ち

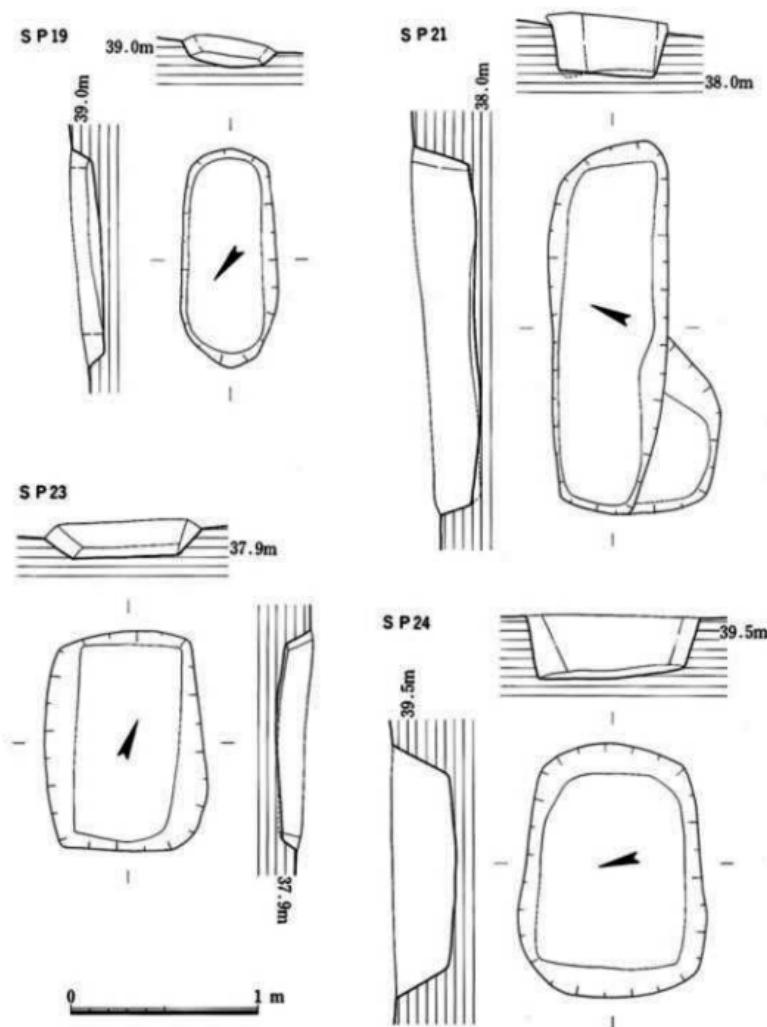
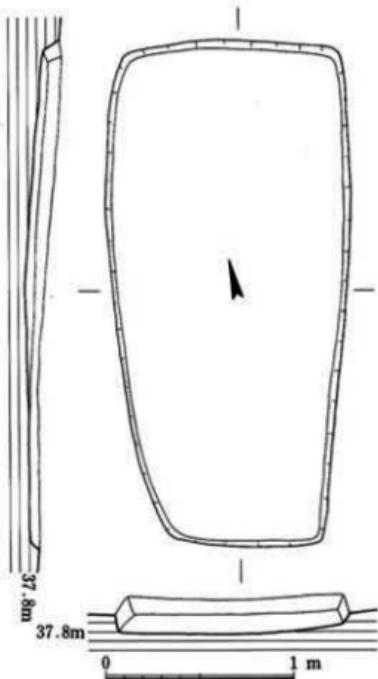


Fig. 175 S P19 • S P21 • S P23 • S P24 土壇墓 (36)

Fig. 176 SP 20 土塙墓 ( $\frac{1}{50}$ )

面がやや削平されている。長さ2.30m、幅0.80m、深さは残りのよい北短辺で0.55m。頭位は地形の傾斜上方にあたる北側とみてN 6°Wである。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦である。

## SP 28 土塙墓 (Fig. 177, PL. 141)

不整円形で、墓であるという確証はないが、土塙墓群のうちの一つとして数えておく。上面削平により残りが浅い。墳底は丸底気味に掘られている。長さ0.85m、頭位不明。

## SP 29 土塙墓 (Fig. 177, PL. 141)

東側短辺が隅丸気味であるが、基本的に長方形の小型土塙墓である。上面西側がやや削平されている。長さ0.89m、幅0.54m、深さは東側短辺際で0.42m。頭位は仮に東とすればS 72°Eで

付けるのにも使われたことが推定できる。木棺の法量からすれば成人を葬るに足る容量といえよう。頭位はほぼ直北である。

出土遺物は頭位にあたる北側短辺寄りの墳底で完形の土師器壺2点を検出した。ただし、うち1点は破片が多少動いており、またいずれも倒伏した状態にあることから、棺内副葬というよりは棺上に供獻されてあったものが棺の腐朽後に落下した可能性の方がつよいと考える。

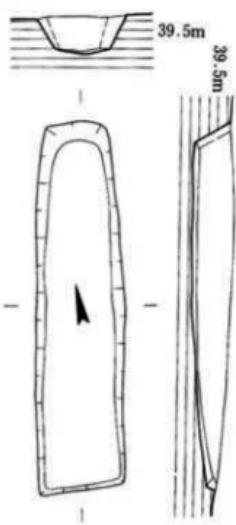
## SP 26 土塙墓 (Fig. 177, PL. 140)

極端に細長い長方形土塙墓である。上面、とくに南側が削られ残りが浅い。長さ2.00m、幅は中央で0.49m、北側でやや狭まる。四壁は斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦ながら南側がやや上がる。頭位は地形の傾斜上方にあたる北側を優位とすればW13°Eである。

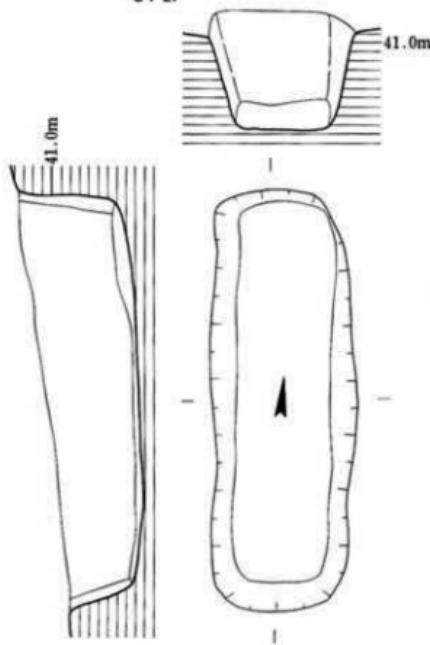
## SP 27 土塙墓 (Fig. 177, PL. 141)

隅丸気味の長方形土塙墓である。南側上面がやや削平されている。長さ2.30m、幅0.80m、深さは残りのよい北短辺で0.55m。頭位は地形の傾斜上方にあたる北側とみてN 6°Wである。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底はほぼ平坦である。

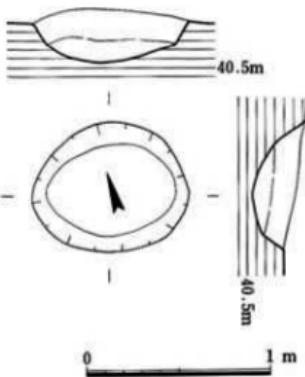
S P 26



S P 27



S P 28



S P 29

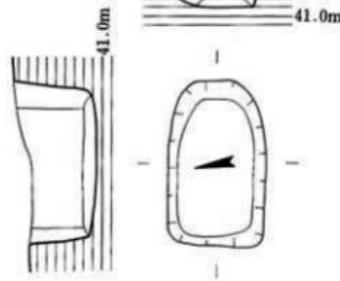
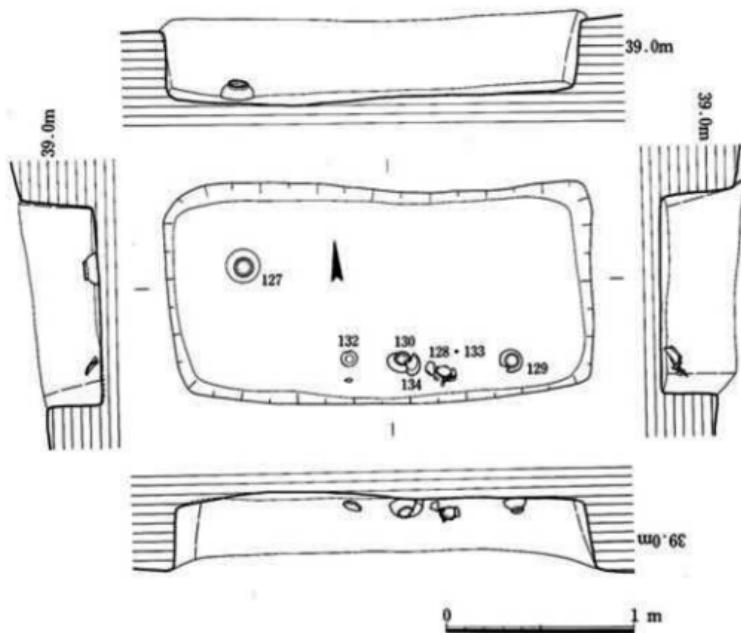


Fig. 177 S P 26 • S P 27 • S P 28 • S P 29 土壙基 (1/20)

Fig. 178 S P 30 土塙墓 ( $\frac{1}{30}$ )

ある。四壁は直にちかく掘り込まれ、塙底は平坦である。

#### S P 30 土塙墓 (Fig. 178, PL. 141)

幅の広い大型の長方形土塙墓である。上面は南側がやや削平されている。長さ2.26m、幅1.13m、深さは北側で0.40m。四壁は直に掘り込まれ、塙底はほぼ平坦である。頭位は東西いずれか決めがたいが、他の多くの例に合わせ仮に東とすればS 87°Wである。

塙底あるいは側壁寄りから2群に分かれて土師器が出土している。南側長辺壁寄りの一群は壊6点からなるが、1点を除いて完形のままの状態で出土せず、S P 15木棺墓等でみたように、単なる供獻というよりは埋葬時に他所で儀礼に用いた土器を処分したという印象がつよい。また、南壁側に寄っているという出土状況からは木棺の使用も十分考えられ、これら土器は墓塙との間の棺外に投げ込まれたものである可能性がありうる。ただし釘は出土していない。

久池井一本松遺跡

土師器はもう1点完形の壺127が西北隅ちかく伏せられた状態で出土した。木棺の使用を想定すれば棺内副葬品、あるいは木棺腐朽後に棺上から落下したものと考えられる。

S P 33 土壙墓 (Fig. 179)

S K10土壙とS K11土壙に挟まれた位置にある。径約0.56mの円形で、壙底は丸底である。上面はある程度削平されており残存深0.3m。埋土下層には黒色土がつまり、上層に薄く堆積した褐色土に混じって骨粉のほか銅の融解した小片が数点とひびの多く入った水晶製の流滴形垂飾2点が出土した。これらの状況からみて火葬骨の直接埋納あるいは火葬に関係する何らかの処理壙と考えられ。垂飾および銅片は遺体と一緒に焼かれた葬具や身の回り品と推定する。

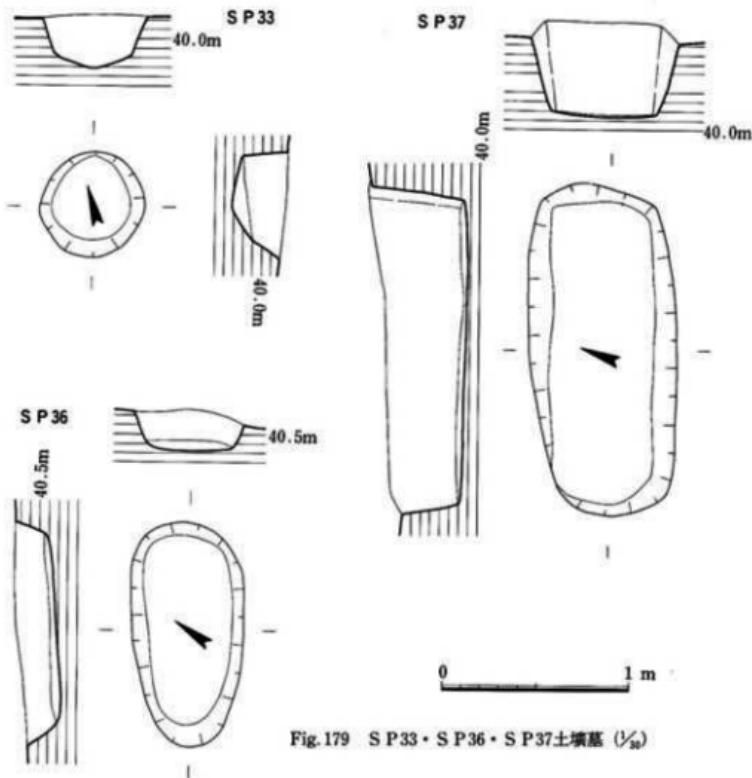


Fig. 179 S P 33・S P 36・S P 37 土壙墓 (Jō)

## S P 36土壙墓 (Fig. 179, PL. 142)

長梢円形の小型土壙墓である。上面がかなり削平され残りが浅い。長さ1.20m、幅0.59m。四壁はやや斜めに掘り込まれ、墳底は東北側でやや上がる。頭位は東北側とみてN54°Eである。

## S P 37土壙墓 (Fig. 179, PL. 142)

隅丸気味の長方形土壙墓である。西側上面がやや削平されている。長さ1.73m、幅0.79m、深さは東側で0.50m。頭位は地形の傾斜上方にあたる東とすればN68°Eである。四壁は直にちかく掘り込まれ、墳底は平坦である。鉄釘が1点出土しており、木棺の可能性もある。

## S P 43木棺墓 (Fig. 180, PL. 136)

S T 42古墳とS T 44古墳とに挟まれ、丘陵裾の古墳群の中に位置している。円形の周溝を廻らす特殊な木棺墓である。周溝は丘陵斜面上方の北側に弧状に残り幅約1mで径約6mの円を約 $\frac{1}{5}$ 周する。ただし一周するかどうかは不明である。また外観は古墳に類するが、墳丘にあたるものはもともと無かったと推定する。

主体部は長方形の墓拵底に花崗岩の小砾を並べ、これに木棺を置く。墓壙は長さ2.88m、幅1.3

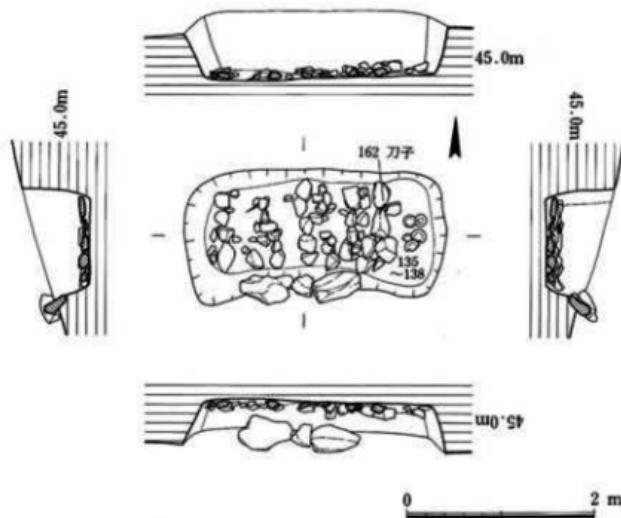


Fig. 180 S P 43木棺墓 (1/20)

## 久池井一本松遺跡

m、深さは残存最深0.7m。頭位は副葬品が置かれた東とすればほぼ真東である。墳底には東側で約0.5mあけ、その西側に適当な間隔で南北方向に5列小蹠を並べている。棺座にあたるものであろう。さらに墓壇南壁には比較的大きめの花崗岩蹠を3個並べて棺を押えている。北壁外にも同様な蹠が2、3あるが、地山の石かあるいは動かされたものか判然としない。蹠敷中に釘1点が残存しており木棺と推定できる。釘の出土状況等からその法量をわり出すことはできないが、東側の副葬空間を差し引いて敢えて推定すれば長さは約1.8m、幅0.8m以下となる。

副葬品は東側墳底に土師器坏5点が並べられてあったほか、やはり東側で墳底からやや浮いた状態で坏1点が出土している。木棺が西側に寄せて置かれたとすれば、これらはいずれも棺外副葬であろう。その他中央蹠敷中から、棺内副葬品とみられる刀子1点が出土している。

時期は9世紀中頃である。

## (2) 土壙および竪穴

### S K 10土壙 (Fig. 181)

径1m前後、深さ約0.5mの不整円形土壙を2回にわたって掘り込んでいるが、埋土の状況からみて同一時期である。埋土は主に黒褐色土が自然なレンズ状堆積をなす。埋土中より須恵器片および土師器が若干出土した。

### S K 11土壙 (Fig. 181)

径約1.1m、深さ0.55mの不整円形土壙である。埋土は主に黒褐色土が自然な堆積をなし、埋土中から土師器片が多く出土した。

### S K 31土壙 (Fig. 158)

性格不明の大型長方形土壙である。長さ6.7m、幅は中央で3.9m、深さは中心部で約1.2m。埋土は主に黒色土および褐色土が自然な堆積をなし、埋土中から須恵器片・土師器片が出土したが量は少ない。

### S B 16竪穴 (Fig. 171, PL. 137)

S P 06土壙墓と切り合う。先後関係は不明で形状が不明確であり、同一遺構の可能性もあるが、一応別の竪穴としておく。竪穴とすれば住居跡の可能性がつよいが柱穴は検出されず、壁面もありはっきりしない。基本的に長方形とみられ、長さ3.14m、幅は中央で2.03m、深さは上面が削平され0.2mしか残っていない。東壁寄りに花崗岩蹠が投げ込まれ、東南隅から大小各1点の甕が出土した。

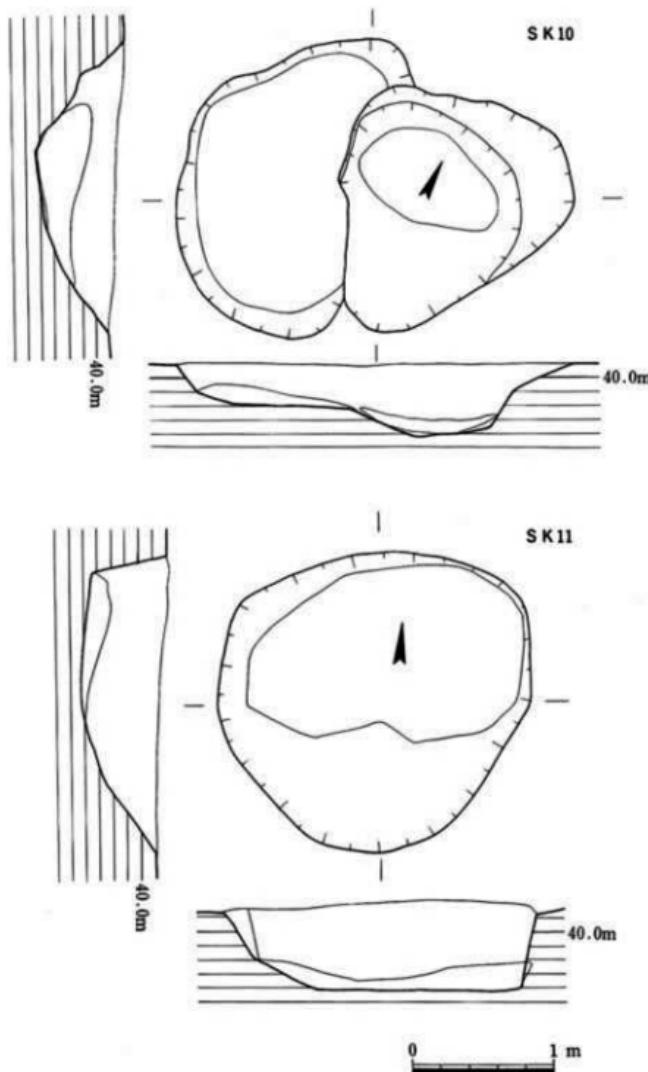


Fig. 181 SK10・SK11土壤(%)

### III. 遺 物

遺構に伴うものは古墳出土の須恵器・土師器・鉄器・埴輪、土塙墓および木棺墓出土の須恵器・玉類・鉄器、竪穴出土の土師器・鉄器・紡錘車等、古墳時代後期から奈良・平安時代に限られる。その他、旧石器～弥生時代の遺物は若干あるが、遺構に伴うものではない。旧石器ではナイフ型石器 1 点、縄文時代では前期の塞ノ神式土器片 1 点と晚期の土器片が若干、石器が数点出土した。弥生時代では石器数点と前期の土器片若干がある。

#### 1. 旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺物はナイフ型石器 1 点のみ。

縄文時代では削器・石鎌・石ノミ、扁平打製石斧・磨石が数点のほか、塞ノ神式土器 1 点、晚期の土器片若干がある。このうち晚期土器は次の弥生前期の土器とあわせて述べる。

以下、縄文時代の石器について紹介する。

##### (1) 石器 (Fig. 182・183, PL. 144)

削器 1 はサヌカイトの剥片を利用している。基部は調整打面を残し、先端部は尖らせている。刃部は、先端部分の両側縁に細部調整を施し形成している。最大長 7.4cm、最大幅 4.6cm、II 区表探。2 はサヌカイトの横長剝片を利用し、打面は除去されている。左側縁下位は繰り返し加熱され潰れている。刃部は右側縁と考えられるが、調整剝離は施されていない。最大長 9.2cm、最大幅 4.3cm。S T34 古墳掘り込み埋土出土。3 は端部に細部調整を施している。サヌカイト製、S K11 土塙出土。4 は右側縁に調整打面を残し、比較的大きな剝離を表面に施している。刃部は左側縁と考えられる。S T01 古墳墳丘中出土。5 はいわゆる横型の石匙である。つまみ部は細かい剝離であるが、刃部は粗い剝離をおわっている。つまみ部上面は平坦面、両側縁は折損している。S T01 古墳墳丘内出土。

石鎌 6 はサヌカイト製で、石鎌の未製品と考えられる。表面は粗い剝離を施し自然面も残っている。裏面は主要剝離面で、右側縁には調整打面を残している。S T01 古墳墳丘中出土。7～9 はサヌカイト製の石鎌で、いずれも両面に細かい剝離を施している。7 は五角形を呈し、短い脚をもつ。S T01 古墳墳丘上出土。8 は直線的に開く脚をもち、脚端部はコの字形を呈す。S P14 土塙墓埋土中出土。9 は二等辺三角形を呈す。III 区遺構検出時出土。

石ノミ 10 は片岩系の石材を利用したもので、全面に研磨を施している。基部は尖らせてい

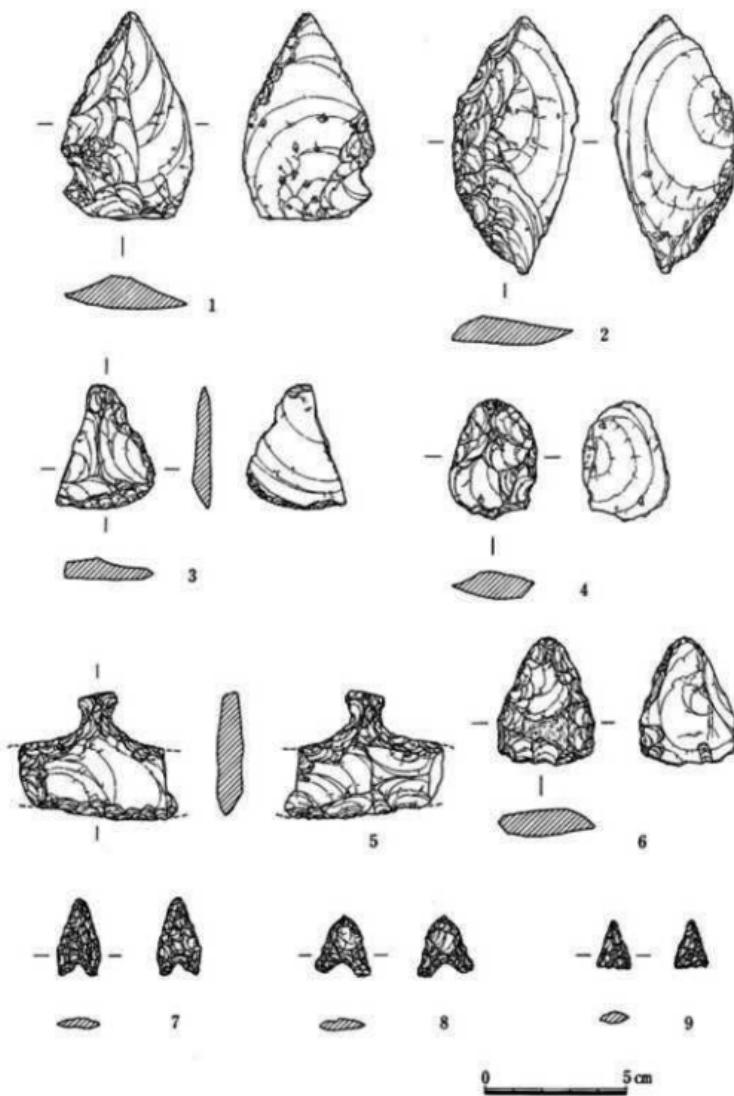


Fig. 182 縄文時代石器 1 (上)

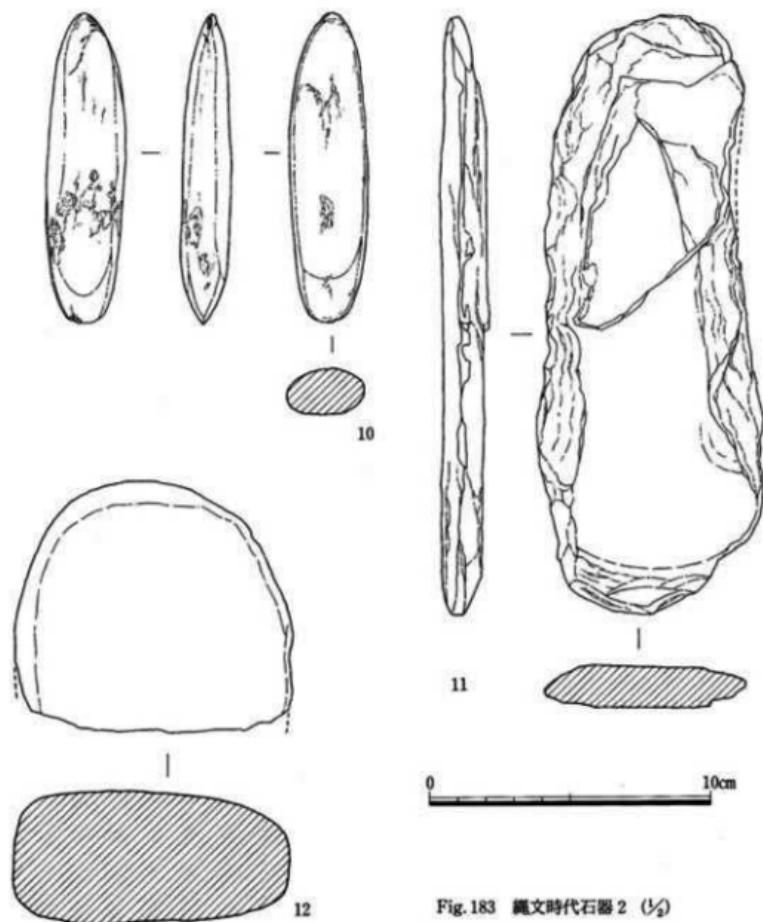


Fig. 183 繩文時代石器 2 (少)

る。刃部は両面から研磨し、刃部端には使用痕もみられる。最大長11.1cm、最大幅2.7cm。S T 01古墳墳丘内出土。

**扁平打製石斧** 11は緑色片岩の扁平な素材を利用している。両側縁から粗い剝離を施し成形している。最大長21.3cm、最大幅8.0cm。表採。

**磨石** 12は閃綠岩製。両面に平端面を形成している。器表の風化がひどく他の点は不明。S K11土壤出土。

## 2. 弥生時代

前期の土器片若干と太形蛤刃石斧片2点がある。ここでは土器についてのみ、継続性との関係で便宜上、縄文晩期の土器とあわせて取り上げることにする。

### (1) 縄文晩期～弥生前期の土器 (Fig. 184, PL. 143)

縄文晩期前半では深鉢・鉢・浅鉢がみられる。

鉢13～22のうち、13は口縁部が明瞭な段をもって立ち上がり三万田式に属す。14は口縁部がやや外に膨らんだのち内湾し、外面に2条の沈線を施す御陵式である。それぞれ1点ずつ知られる。15～22は黒川式に属す。口縁部の形態にバラエティーがあり、15は屈曲して外反、16は折れずにゆるやかに外反、17はやや外反したのち肥厚して立ち上がる。18～20は体部から口縁部まで直線的あるいは内湾気味に立ち上がり、また21・22は胸部上位で屈曲をみせる。調整は条痕や板小口ナデが目立つ。

鉢23・24は体部がゆるやかに内湾して立ち上がり、外面に条痕を施す。浅鉢25～27はいずれも黒川式で、体部の屈曲、口縁の段それぞれに個性がある。

縄文晩期後半～弥生前期では刻目突帯文系土器を主体として壺・壺・浅鉢・高环がみられる。壺31～41のうち、31・32・41・42は胸部上位が屈曲するとみられ夜白式の古相を示すが、他は同系統の新しい段階に位置する。浅鉢28～30は夜白式に属し、口縁部が2段に折れて外反する28・29と、段をなして短く立ち上がる30とがある。高环は45が环部との境に刻目突帯、46は脚部裾に突帯を廻らし、ともに板付式の中にみられる特徴をもつ。壺47は夜白式の大形壺肩部にあたる。遺物一覧表 Tab. 26

Tab. 26 摺文晚期～弥生前期土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
184-13 8714082	S K04 埋土中	深鉢		口縁部は段をなして直立し、口唇部や外にめくれる。	口縁部は内外面ともヨコヘラミガキ。褐色で砂粒を含む。
-14 8712878	S T01 周溝埋土中	深鉢		口縁部は不明瞭な段をなして立ち上がり、外面に細沈線2条を走らす。	体部外面ヨコ条痕。他ナデ。黄褐色で砂粒を多く含む。
-15 8712880	S K11 埋土中	深鉢		口縁部は屈曲外反。屈曲部はヘラでナデて沈線状の段をつくる。	口縁部ナデ、体部は外面ナデ、内面板ヨコナデ。茶褐色で砂粒を多く含む。
-16 8712884	検出面	深鉢		口縁部は体部からゆるやかに外反。	体部は内外面ともヨコ条痕。黄褐色で砂粒を多く含む。
-17 8714053	検出面	深鉢		口縁部は肥厚してやや内湾気味に立ち上がり、口唇部を薄くつくる。	口縁部は内面ナデ、外面は板ヨコナデ。明褐色で砂粒を含む。
-18 8605667	検出面	深鉢		体部から口縁部まで直線的に開き、口唇部を薄くつくる。	内外面とも条痕のあと内面をていねいなナデ。暗褐色で砂粒を含む。
-19 8714052	検出面	深鉢		体部から口縁部にかけわずかに内湾気味に立ち上がる。	内面ナデ。外面ヨコヘラミガキ。明褐色で砂粒を多く含む。
-20 8712899	検出面	深鉢		口縁部は直線的に開く。	口縁部は内外面ともヨコ条痕。
-21 8712882	検出面	甌		胸部は上位で外反ののち、口縁部が屈曲して内傾。屈曲部下に沈線を1条走らす。	体部上位は内外面とも板ヨコナデ。屈曲部に接合痕。褐色で砂粒を多く含む。
-22 8714060	S T01 周溝埋土中	甌		胸部は上位で屈曲し、口唇部はやや外反気味に内傾。屈曲部には刻目なし。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒を含む。
-23 8712900	検出面	鉢		体部から口縁部にかけやや内湾気味に開く。	内面ナデ。外面ヨコ条痕。褐色で砂粒を含む。

## III. 遺物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
184—24 8714051	検出面	鉢		体部から口縁部にかけわずかに内湾気味に開く。	内面ナデ。外面ヨコ条痕。明褐色で砂粒を含む。
—25 8714055	表揮	浅鉢		体部は大きく外反して開き、玉縁状の口縁部をのせる。	内外面ともヨコヘラミガキ。黒褐色で砂粒を含む。
—26 8714083	S K04 埋土中	浅鉢		口縁部はわずかに屈曲して立ち上がり、内面にも段をなして玉縁状の端部をつくる。	内外面ともヨコナデ。明褐色で砂粒を含む。
—27 8712893	検出面	浅鉢		体部は大きく外反して開き、口縁は端部で蛇線1条をおいて短く薄く折れて立つ。	内外面ともヨコナデ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
—28 8712877	S T01 周溝埋土中	浅鉢		体部は2段に屈曲し、口縁部は大きく外反して開く。	内外面ともナデ。黄褐色で砂粒を含む。
—29 8712895	検出面	浅鉢		体部は2段に屈曲し、口縁部は大きく外反して開く。	内外面ともヨコヘラミガキ。褐灰色で砂粒を含む。
—30 8712864	S T01 盛土中	浅鉢		口縁部は体部からかすかに屈曲して伸び、外面で突唇状の段をつくる。	内外面ともナデ。茶褐色で微砂粒を含む。
—31 8712888	検出面	甕		胸部上位がつよく屈曲してやや外反気味に内傾し、口縁下に刻目突帯を廻らす。	内外面ともナデ。
—32 8712866	S T01 盛土中	甕		胸部上位が屈曲し、口縁下に低い刻目突帯を廻らす。	内外面ともナデ。暗褐色で微砂粒を含む。
—33 8712862	S T01 盛土中	甕		胸部は屈曲せずやや内湾気味に立ち上がり。口縁高に刻目突帯を廻らす。	内外面ともナデ。内面褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。
—34 8712866	検出面	甕		胸部上位がかるく屈曲し、口縁高と胴屈曲部に刻目突帯を廻らす。	内外面ともナデ。茶褐色で砂粒を含む。
—35 8712889	検出面	甕		胸部は屈曲せずに立ち上がり、口縁高に刻目突帯を廻らす。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を含む。

## 久池井一本松遺跡

Fig. 回番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
184—36 8712896	検出面	甕		脚部は屈曲せず、立ち上がり、上位に刻目突帯を残す。	内面ナデ、外面板ヨコナデ。褐色で砂粒を含む。外面脚突帯下にスス付着。
—37 8714659	S T01 周溝埋土中	甕		脚部は上位でかすかに屈曲し、屈曲部に刻目突帯を残す。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を含む。
—38 8712873	S T01 周溝埋土中	甕		脚部は上位でかすかに屈曲し、屈曲部に刻目突帯を残す。	内外面ともナデ。茶褐色で砂粒を含む。
—39 8712868	S T01 盛土中	甕		口縁部は内傾し、刻目をもたず上面のやや広い突帯を残す。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を含む。
—40 8712867	S T01 盛土中	鉢		口縁部ははかすかに外反気味に開き、刻目をもたない突帯を残らし口唇部を平坦にナデる。	内外面ともナデ。黒褐色で砂粒を含む。
—41 8712869	S T01 周溝埋土中	甕	底径 8.1	底部は平坦で外側に張り出す。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒を含む。
—42 8714657	S T01 周溝埋土中	甕	底径 7.8	底部はやや上げ底で、厚く外側につよく張り出す。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を多く含む。
—43 8712871	S T01 周溝埋土中	甕	底径 8.0	底部は脚状に高く外側につよく張り出しや上げ底。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒を含む。
—44 8712870	S T01 周溝埋土中	甕	底径 7.8	底部は外側に張らず、ほぼ平坦。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を多く含む。
—45 8712897	検出面	高环		脚部は直線的に開くか。体部はと脚部との間に刺突文突帯を残す。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒を含む。
—46 8712876	S T01 周溝埋土中	高环		脚部はやや幅開きで端部ちかくに突帯を残す。	内外面ともナデ。明褐色で微砂粒を含む。
—47 8714656	S T01 周溝埋土中	甕		大型甕の破片。頭胴回はヘラミガキによる段をつけ区分。	内面ナデ。外面ヨコヘラミガキ。内面明褐色。外面茶褐色で砂粒を含む。

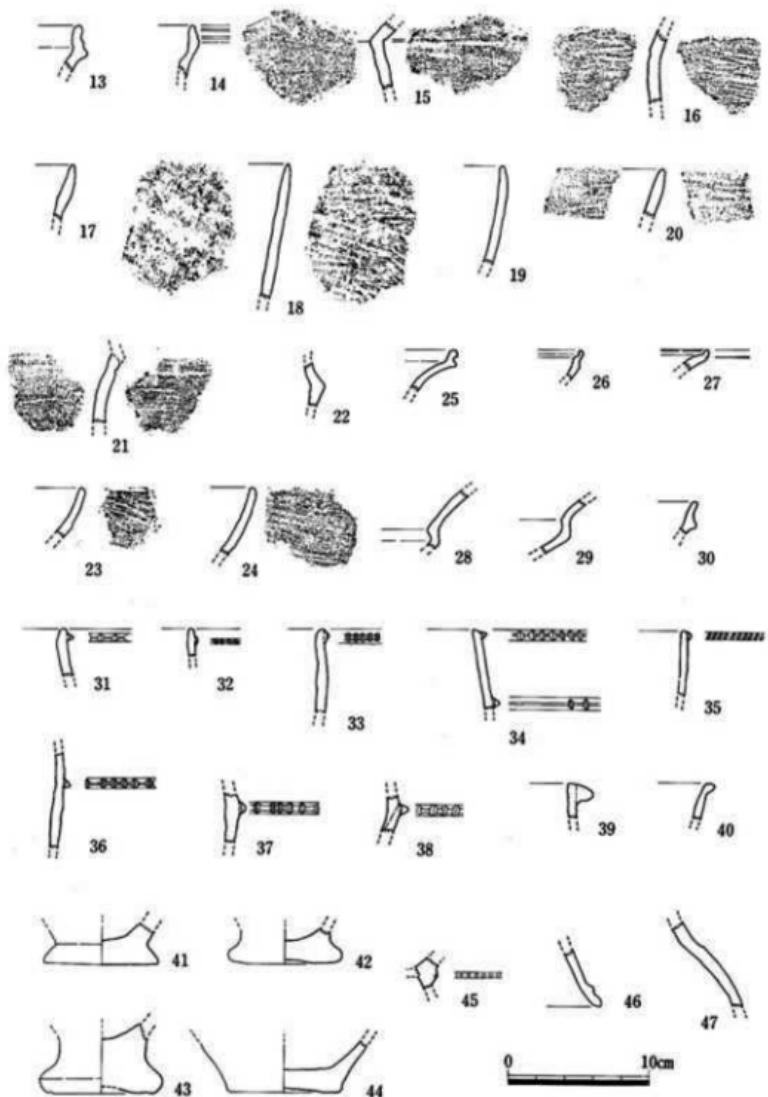


Fig. 184 繩文晚期～弥生前期土器 (1/2)

## 3. 古墳時代

古墳9基と土塙墓1基から出土した須恵器・土師器・埴輪および鉄器がある。削平等のため点数は少ない。

## (1) 須恵器 (Fig. 185, PL. 146)

ST01古墳出土の48・49・55~60・65・66・68が6世紀初~6世紀後半、他は7世紀代である。器種には壺類・高壺・壺・甕・蓋がある。

土塙墓出土は壺61・62の2点のみで、S P38土塙墓からセットで出土した。時期は7世紀後半である。遺物一覧表 Tab. 27

Tab. 27 古墳および土塙墓出土須恵器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
185~48 8714074	S T01 墳丘上	壺蓋	口径 13.9 器高 3.3	天井部が高く、口唇部は内側に棱をもつ。歪みあり。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。灰褐色で砂粒を多く含む。ロクロ回転右。
—49 8714070	S T01 墳丘裾	壺蓋	口径 11.8 器高 4.2	天井部は丸味をもち、体部は段をなさずにつり、端部を丸くおさめる。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。明黄色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—50 8605660	S T35 玄室床面	壺蓋	口径 11.2 器高 2.8	宝珠つまみ。天井部は狭く、体部はなだらかに開き短く鋸いかえりが付く。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。褐灰色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—51 8606508	S T45 石室前面	壺蓋	口径 13.0 器高 2.2	宝珠つまみ。天井部は低く平坦で体部は直線的に開き短いかえりが付く。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。明黄色で砂粒を少し含む。
—52 8605661	S T44 石室前面	壺蓋	口径 12.6 器高 2.6	つぶれた宝珠つまみ。平坦な天井部から段をなさずにつて体部が下り、短く鋸いかえりが付く。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。灰色で砂粒を含む。
—53 8606207	S T44 石室埋土	壺蓋	口径 12.4 器高 2.0	つぶれた宝珠つまみ。天井部は低く平坦で、体部は端部が外に反ね、短いかえりが付く。	天井部はハラケズリ、体部から内面ナデ。明灰色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—54 8606119	S T35 玄室床面	壺蓋	口径 10.8 器高 1.8	つぶれた宝珠つまみ。天井部は低く平坦で体部は端部が丸味をもち短いかえりが付く。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。全体に調整はなし。明赤褐色で砂粒を少し含む。
—55 8714075	S T01 墳丘表土	壺蓋	口径 9.6 器高 3.7	天井部は丸味をもち、体部は比較的直に下がり口唇部内側に棱をもつ。	天井部へラケズリ、体部から内面ナデ。灰色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
—56 8714067	S T01 墳丘表土	壺身	口径 11.6 器高 4.3	底部は丸味をもち、立ち上がりはやや高く直線的に伸びる。	外底部へラケズリ、他ナデ。明灰色で砂粒を少し含む。ロクロ回転左。

## III. 遺物

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
185-57 8714069	S T01 埴丘表土	环身	口径 11.8 器高 4.0	底部は比較的平坦で、立ち上がりはやや反気味に急に立つ。外底部にヘラ記号。	外底部から外体部分にかけへラケズリ。他ナデ。全体に薄手。暗灰色で砂粒を含む。ロクロ回転左。
-58 8714072	S T01 埴丘表土	环身	口径 14.3 器高 4.5	比較的大型。底部から体部にかけて丸味をもち、立ち上がりは短く外反気味に内傾する。	外底体部分へラケズリ、他ナデ。茶灰色で砂粒を含む。ロクロ回転右。
-59 8714068	S T01 埴丘表土	环身	口径 11.4 器高 3.7	底部は狭く平坦で、体部は受部まで直線的に開き、立ち上がりは短く内傾する。	外底部へラケズリ、他ナデ。内面明灰色。外底灰色で砂粒を含む。ロクロ回転左。
-60 8714080	S T01 埴丘表土	高环	口径 15.2 环高 5.4	脚部欠失。底部は底体部が丸味をもち、口縁部が段をなして外反。体部に櫛状波状文。	底部の外底体部分へラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒を少し含む。
-61 86005662	S P38 埴底	环盖	口径 13.0 器高 2.6	宝珠つまみ。天井部から体部にかけてだらかに下がり、短く窪いかえりが付く。	天井部付近へラケズリのあとナデ、他ナデ。明褐色で砂粒を含む。
-62 86005656	S P38 埴底	环身	口径 14.0 器高 4.6	体部は底部と不明瞭な段をなして立ち上がり、口縁部でやや外反。高台は内側に入り短く聞く。	外底部にヘラ切り離し痕。内外面ともナデ仕上げ。内面茶褐色、外底灰色で微砂粒を含む。
-63 86005655	S T35 宝室床面	环	口径 8.9 器高 4.6	小型高台付き。体部は深く、口縁部で薄くやや外反する。	内外面ともナデ、外底部にヘラケズリが残る。内面灰褐色。外底茶褐色で砂粒を含む。
-64 8714064	S T35 周溝理土中	通		脚部は口縁部に向かって大きく外反。	内外面ともナデ。黄灰色で砂粒を殆ど含まない。
-65 8714077	S T01 埴丘表土	短颈壺	口径 9.4	脚部は肩が張り、口縁部は短く内傾。	内外面ともナデ。明灰色で砂粒を含む。
-66 8714078	S T01 埴丘表土	短颈壺	口径 12.7	脚部は低く肩が張る。	脚部外面は底部付近へラケズリ、他カキ目。内面ナデ。暗灰色で砂粒を多く含む。
-67 8606223	S T03 石室床面	高环	口径 16.7 器高 7.0	底部は平坦な底部から体部が内湾気味に立ち上がり、脚部は低く大きく張が開く。	底部外底部へラケズリ、他ナデ。内面明灰色。外底暗灰色で微砂粒を多く含む。
-68 8714081	S T01 埴丘表土	高环	底径 10.0	脚部欠失。脚部は4方通じで底部が段をなして立つ。	脚部は外面上位カキ目、他ナデ。明灰色で砂粒を殆ど含まない。
-69 8714066	S T01 埴丘表土	壺	口径 22.9	口縁部は脚部から屈曲して外反し、口縁部を玉縁状に厚くつくる。	脚部は内外面ともタクキ目。口縁部は外底タクキ目のあとナデ。内面ナデ。明灰色で砂粒少し含む。
-70 8603983	S T35 墓溝理土中	長颈壺	口径 17.6 器高 20.5	脚部はあまり肩が張らず、口縁部は外反気味に長く伸び口縁部下に沈線1条を残す。	脚部外面は底部から体部下位へラケズリ、他カキ目。脚部内面と口縁部内外面ナデ。明灰褐色で砂粒含む。
-71 8714065	S T35 石室理土中	平瓶	口径 20.7 残高 20.5	脚部は肩が張り、肩位に櫛状波状文を施す。頭部は外反して伸びる。	脚部外面は底部から体部部分にかけへラケズリ、肩位カキ目。脚部内面と頸内外面ナデ。灰色で砂粒少。

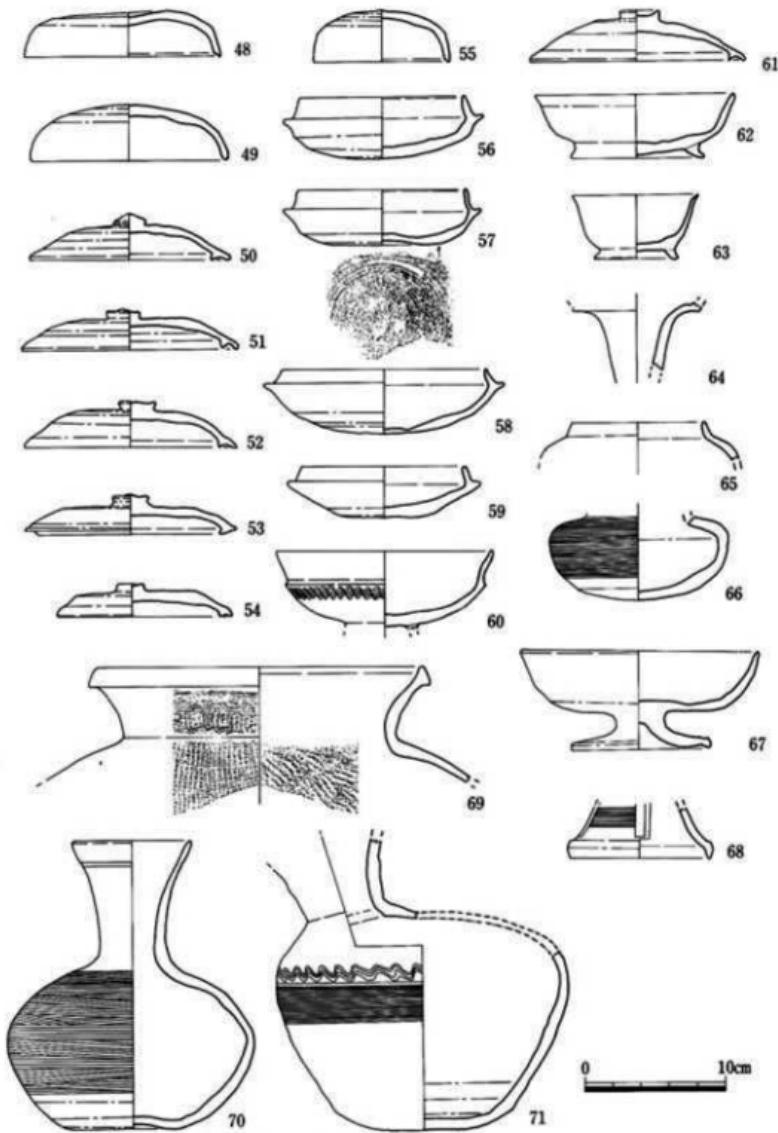


Fig. 185 古墳・土壤墓出土須恵器 (1/4)

## (2) 土師器 (Fig. 186, PL. 147)

壺・皿・高环・鉢がみられる。72は7世紀中頃に位置し古墳時代に含めうるが、他は7世紀末～9世紀初で、全体として奈良～平安時代初のものが多い。追葬期にあたるものであろう。77・78は11世紀に下り、古墳の再利用時期の一端を示している。遺物一覧表 Tab. 28

Tab. 28 古墳出土土師器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
186-72 866225	S T35 玄室床面	鉢	口径 14.2 器高 5.4	体部は底部から不明瞭に折れて直線的に開き、やや底部内側に入って掘開きの高台が付く。	外底部ヘラ切り離し後ナデ、板目痕あり。他ナデ。褐色で砂粒を含む。
—73 866204	S T35 玄室床面	环	口径 15.5 器高 5.9	体部は底部と明瞭な縦をなぎさやや内湾気味に立ち上がり、高台が外につよく張り出す。	内外面ともナデ仕上げ。白褐色で微砂粒を少し含む。
—74 866120	S T35 玄室床面	环	口径 14.7 器高 7.4	体部は深く平坦な底部と明瞭な縦をなして直線的に開き、やや底部内側に入つて、高台が付く。	外底部ヘラ切り離し後ナデ、他ナデ。明茶色で砂粒を少し含む。
—75 864392	S T34 玄室床面	碗	底径 7.4 残高 3.5	体部は底部と明瞭な縦をなさずにして立ち上がり、比較的直に高台が立つ。	内外面ともナデ仕上げ。明茶色。
—76 866202	S T34 周溝埋土中	环	口径 12.9 器高 3.8	体部はやや深く、直線的に立ち上がる。	外底部ヘラ切り離し後ナデ。明赤褐色で微砂粒を少し含む。
—77 865658	S T34 玄室床面	皿	口径 9.3 器高 1.5	小盤品。体部は底部と明瞭な縦をなさず粗く立ち上がる。	外底部ヘラ切り離し。他ナデ。白褐色で砂粒を含む。
—78 865659	S T34 玄室床面	皿	口径 8.9 器高 1.8	同上	同上
—79 866203	S T35 石室埋土中	环	口径 11.5 器高 3.3	体部は底部と不明瞭な縦をなして直線的に立ち上がる。	外底部ヘラ切り離し後ナデ。
—80 866117	S T35 石室床面	环	口径 12.1 器高 3.4	同上	同上
—81 863982	S T35 石室埋土中	环	残高 3.3	体部は底部と縦をなさずやかに内湾して立ち上がる。体部内面にヘラ書き端文。	外底部から外体部下位ヘラケズリ、他ナデ。茶褐色で砂粒を含む。
—82 866121	S T35 玄室床面	环	口径 18.2 器高 2.9	体部は底部がつづいてゆるやかに立ち上がり口縁部で外反する。	外底部から外体部下位ヘラケズリ、他ナデ。明茶褐色で微砂粒を含む。
—83 865663	S T35 周溝埋土中	高环	口径 17.5 器高 4.0	脚部欠失。环部は浅く内湾して立ち上がる。上位でやや外反し、口唇部をナデして平底につくる。	环部は内外面ともナデ。赤褐色で微砂粒を含む。
—84 864389	S T35 玄室床面	鉢	口径 26.6 器高 12.0	底部は平底。体部内湾して急に立ち上がり上位でやや外反し、口唇部をナデして平底につくる。	体部は内面から外面上位方にかけヘラミガキ。外底部から外体部下位ヘラケズリ。褐色で砂粒少し含む。

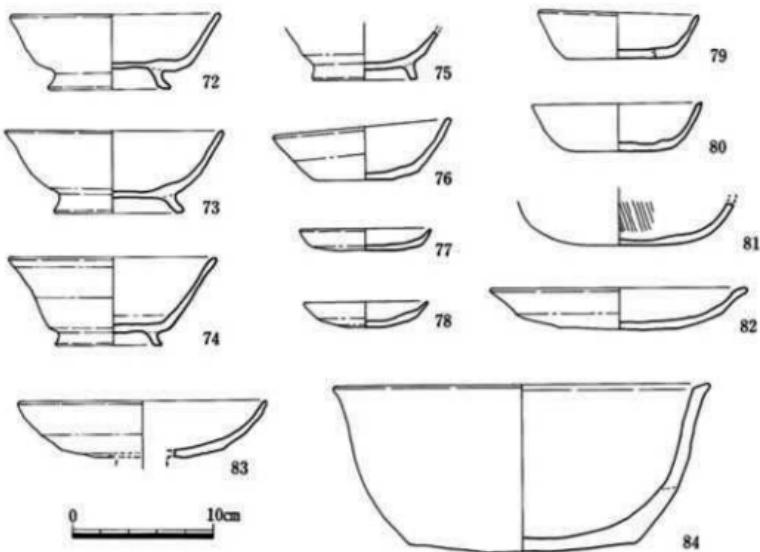


Fig. 186 古墳出土土師器 (1/4)

## (3) 墓輪 (Fig. 187, PL. 148)

ST01古墳の周溝埋土中等から出土した。原位置を保つものはなく、また削平によりその数も不明であるが、量的には5本分くらい採集した。図示した資料には基部と上部とが同一個体のものを含むかもしれない。

すべて円筒埴輪である。基部は平均径17cm前後、器高は40cm前後であろう。体部は上位に向かって直線的に開く86~89と開き方の少ない90・91がある。口縁部は85をみる限り外反して開く。完形品はないが、タガは3段で、86にみると2段目と3段目に直交する方向で、ハケ目のあとそれぞれ2個の円形透しを穿いている。外面調整は基段と最上段にタテ方向ハケ目、2段目と3段目は一部にタテ方向ハケ目もみられるが、原則的にヨコ方向ハケ目である。86と87は「X」形のヘラ描きをもつ。内面は粗いナデ。黄褐色や明茶褐色で砂粒はあまり含まない。焼成は良好である。

上半が開く特徴に新しい様相は認められるが、タガは比較的高く、ヨコ方向ハケ目を丁寧に施すなど古墳時代中期の特色を残しており、佐賀平野では類例の少ない比較的早い時期の埴輪

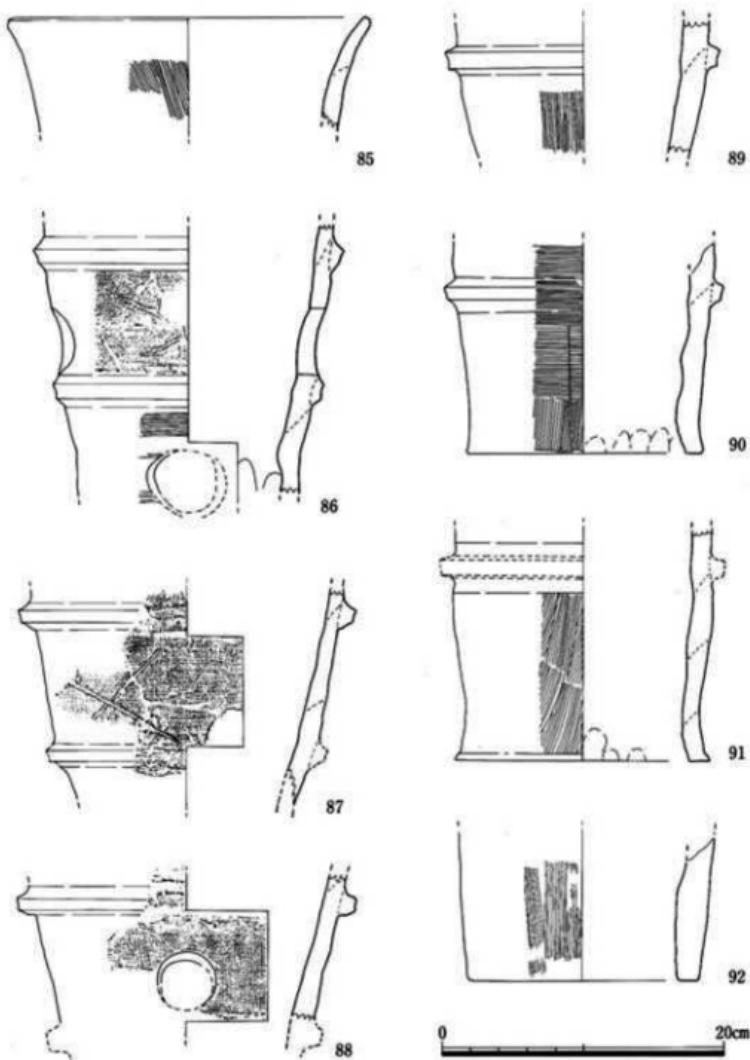
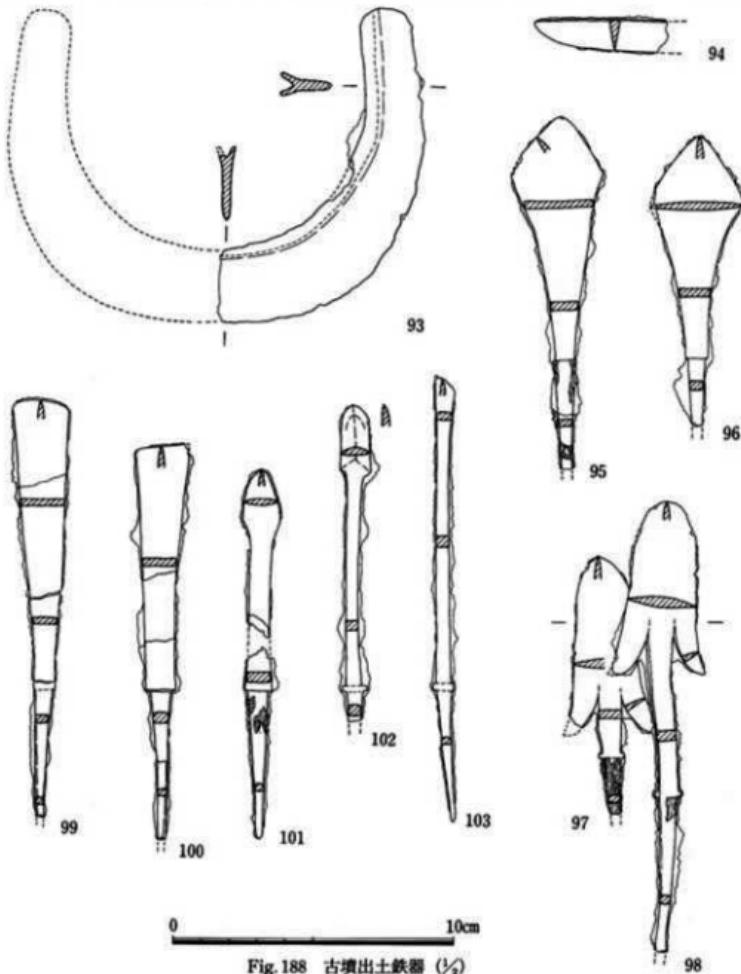


Fig. 187 S T01古墳出土埴輪 (少)

である。川西編年のIV期にあたる。

(4) 鉄器 (Fig. 188・189, PL. 152・153)

S T01古墳から鋸先1点、刀子1点、鉄鎌11点以上が比較的まとまって出土したにすぎない。



他の古墳の場合、土師器・須恵器同様に鉄器までも徹底的に持ち去られているが、ST01古墳では天井石が落ち込んでいて幸い盗掘をまぬがれた遺物として鉄器がある。ただしそのうちでも原位置を保つのは玄室床出土の鉄刀のみで、他は玄室埋土あるいは石室前面の攪乱中からの出土である。

93動先は半分を欠失し、復元刃幅14.7cm。内側に木部本体を嵌め込む溝をもつ。94刀子は先端のみ。95~103鉄鎌は多彩で、95~98の長頭広身式と99~103の長頭細身式とに一応分けられるが、広身式では逆刺をもつもの・菱形・のみ頭形の3種、細身式でも柳葉形と刀子形の2種がみられる。104鉄刀(Fig. 186)は全長100.4cmとかなり長い直刀である。身は長さ82.3cm、幅約3.7cm。茎に目釘孔を2個穿ける。茎と切峰部分に木質が一部残存する。保存状態は極めて良い。

#### 4. 奈良・平安時代

土塙墓・木棺墓の副葬・供献品のほか竪穴・土塙等から出土した土師器が多い。他には木棺に使用された鉄釘、副葬品の刀子・玉類・石製紡錘車がある。

土師器の副葬あるいは供獻は木棺墓・土塙墓26基のうち5基に限られるが、そのうち3基は木棺であり、木棺を使用する手篤い埋葬に伴う傾向がつよい。

##### (1) 土師器 (Fig. 190~192, PL. 149~151)

S P06・S P13・S P15・S P25・S P30・S P43の各土塙墓および木棺墓から比較的まとまって出土した。いずれも副葬あるいは供獻土器である。それ以外の土塙墓等でも埋土中から破片は出土しているが、正確に伴うものではない。

器種は全体として壺を主体とするが、実際煮沸に利用したこと示す煤の付いた壺を混じえる場合もある。組み合わせ・数についてみると、S P06(壺3)・S P13(壺1)・S P15(壺9・壺2)・S P25(壺2)・S P30(壺8)・S P43(壺6)となっている。数のうえではS P15木棺墓とS P30木棺墓、とくに前者の壺の多さが目立つが、これは棺外供獻品が多く含むためである。



Fig. 189 S T01古墳  
出土鉄刀(1/6)

Tab.29 土壙墓・木棺墓出土土器一覧表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
190-105 86006231	S P06 塙底	环	口径 15.3 器高 4.8	环体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を薄く仕上げる。高台はやや内側に入る。	底部ヘラ切り離し。环部内外面ともナデ。茶褐色で砂粒を殆ど含まない。
—106 86006205	S P06 塙底	环	口径 13.3 器高 6.7	环体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反。高台は高く開く。	外面ナデ仕上げ。内面は黒色磨研の「内黒」。外面褐色で砂粒を殆ど含まない。
—107 86004390	S P06 塙底	环	口径 13.6 器高 6.3	环体部は直線的に立ち上がり、高台が高く開く。	内外面ともナデ仕上げ。明茶色で砂粒を少し含む。
—108 86004388	S P13 埋土中	甕	口径 26.9 器高 20.5	体部は浅く丸底で、口縁部は肥厚して不明瞭に屈曲し、大きく外反。	底部は外面ハケ目のあと外底部ナデ。内面ヘラケズリ。茶褐色で砂粒を多く含む。外面スス付着。
—109 86006106	S P15 西壁際	环	口径 14.0 器高 3.1	体部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。暗灰色で微砂粒を少し含む。
—110 86006112	S P15 西壁際	环	口径 13.7 器高 3.9	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で微砂粒を少し含む。
—111 86006220	S P15 西壁際	环	口径 13.2 器高 3.9	体部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。薄茶色で微砂粒を少し含む。
—112 86006114	S P15 西壁際	环	口径 13.9 器高 3.5	#	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で微砂粒を少し含む。
—113 86006113	S P15 西壁際	环	口径 13.2 器高 3.7	#	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。薄茶色で微砂粒を少し含む。
—114 86004386	S P15 西壁際	环	口径 12.9 器高 3.6	#	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。茶褐色で微砂粒を少し含む。
—115 86006221	S P15 西壁際	环	口径 13.2 器高 3.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部わずかに外反。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。茶褐色で微砂粒を少し含む。
—116 86006111	S P15 西壁際	环	口径 12.9 器高 6.6	体部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明褐色で微砂粒を少し含む。
—117 86004385	S P15 西壁際	环	口径 12.6 器高 3.3	#	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明赤褐色で微砂粒を少し含む。

## III. 遺物

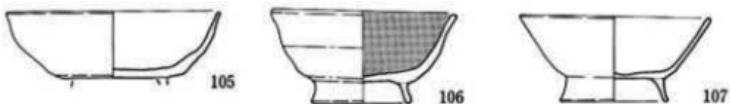
Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
190-118 86006215	S P15 西壁際	甕	口径 17.6 器高 13.7	体部は丸底、口縁部は厚く不明瞭に屈曲して外反。	底部ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。明褐色で微砂粒を少し含む。外間にスス付着。
191-119 86006216	S P15 西壁際	甕	口径 17.9 器高 13.1	#	#
—120 86006213	S P25 西壁際	甕	口径 11.3 器高 2.8	体部は直線的に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ。外底部に板目痕。明赤褐色で微砂粒を含む。
—121 86006215	S P25 西壁際	甕	口径 11.5 器高 3.2	#	#
—122 86004384	S K31 埋土中	甕	口径 16.5 器高 4.7	外底部は丸味をもち、体部は内湾気味に立ち上がる。	外底部は静止ヘラケズリ、他ナデ。
—123 86006229	S K31 埋土中	甕	口径 13.0 器高 2.8	体部がやや内湾気味に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ナデ仕上げ。
—124 86006210	S K31 埋土中	甕	口径 12.5 器高 3.3	体部は底部と不明瞭な接をなしてや内湾気味に立ち上がる。	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。板目痕あり。薄茶色で微砂粒を含む。
—125 86006222	S K31 埋土中	甕	口径 12.6 器高 3.3	#	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。薄茶色で微砂粒を少し含む。
—126 86006226	S K31 埋土中	甕	底径 8.1	高台部は内側にあまりはいらず、直線的に開く。	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。暗茶褐色で砂粒を少し含む。
—127 86006216	S K30 埴底	甕	口径 16.51 器高 6.7	体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反。高台が短く開く。	甕部内面および外体部上位部分ヘラミガキ。他ナデ。薄茶色で砂粒を殆ど含まない。
—128 86006109	S P30 埴底	甕	口径 14.0 器高 5.8	体部は内湾気味に立ち上がり、高台が短く開く。	内面黒色磨研の「内黒」。底部ヘラ切り離しのあと外面ナデ。外面明褐色で微砂粒を含む。
—129 86006217	S P30 埴底	甕	口径 11.6 器高 5.5	体部は内湾して立ち上がり、高台は短く直線的に開く。	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。明褐色で微砂粒を含む。
—130 86006211	S P30 埴底	甕	口径 9.3 器高 3.5	体部は内湾して立ち上がり、高台は短く開く。	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。白褐色で微砂粒を含む。

## 久池井一本松遺跡

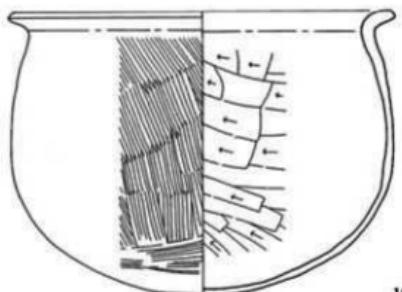
Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
191-131 86006212	S P30 埴底	环	口径 9.5 器高 3.4	体部は内湾して立ち上がり、高台は短く聞く。	底部ヘラ切り離し。内外面ともナデ仕上げ。白褐色で微砂粒を含む。
-132 86006209	S P30 埴底	环	口径 12.3 器高 4.6	体部は底部から急に屈曲して直線的に立ち上がり、高台は内側に入らずに聞く。	底部ヘラ切り離しで板目痕。内外面ともナデ仕上げ。白褐色で微砂粒を含む。
-133 86006214	S P30 埴底	环	口径 11.1 器高 2.5	体部は底部と不明瞭な接をなして内湾気味に立ち上がる。	底部ヘラ切り離しのあと内外面ともナデ仕上げ。外底部に板目痕。明赤褐色で微砂粒を少し含む。
-134 86006210	S P30 埴底	环	口径 11.6 器高 2.1	#	#
-135 86006110	S T43 墓壙床面	碗	口径 14.7 器高 7.7	体部は深く、底部と接をなさずに内湾気味に立ち上がり。口縁部外反。高台はやや直に立つ。	黒色磨研の「内風」。外体部ナデ。外明褐色で微砂粒を少し含む。
-136 866101	S T43 墓壙床面	环	口径 12.9 器高 3.4	平坦な底部から体部が屈曲して直線的に伸びる。	外底部ヘラ切り離し後ナデ。他ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
-137 866104	S T43 墓壙床面	环	口径 13.0 器高 2.9	#	外底部ヘラ切り離し後ナデ。淡褐色で微砂粒を多く含む。
-138 866103	S T43 墓壙床面	环	口径 12.9 器高 3.6	#	外底部ヘラ切り離し後ナデ。他ナデ。明赤褐色で微砂粒を多く含む。
192-139 86006123	S K04 埋土中	甕	口径 22.2 残高 10.7	口縁部は体部と接をなさずに短くよく外反。胴部は殆ど膨らまない。	胴部外面ハケ目のあとナデ内面ヘラケズリ。あと口縁部ナデ。黄褐色で微砂粒を少し含む。
-140 86004393	S K16 埴底	甕	口径 13.1 器高 13.5	口縁部は屈曲して短く薄く外反。体部はあまり張らず、底部は平底気味。	体部外面ハケ目のあとナデ。内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。茶褐色で砂粒を多く含む。
-141 86005668	S K16 埴底	甕	口径 18.0 器高 33.7	底部は平底気味で上位がすぼまり、口縁部が屈曲して大きく外反。	胴底部は内面ヘラケズリ。外面ハケ目のあと下位から底部ナデ。口縁部ナデ。褐色で砂粒を多く含む。
-142 86005666	S P33 埋土中	甕	残高 13.1	球状の胴底部のみ残存。	胴底部は外面で底部タタキ目のあと体部ハケ目。内面ヘラケズリ。明褐色で砂粒を含む。

III. 遺物

SP 06

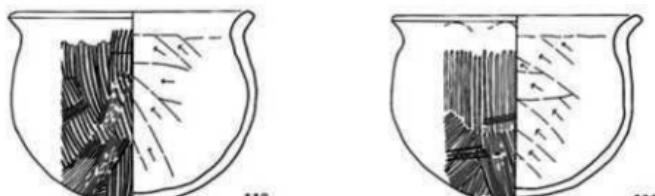
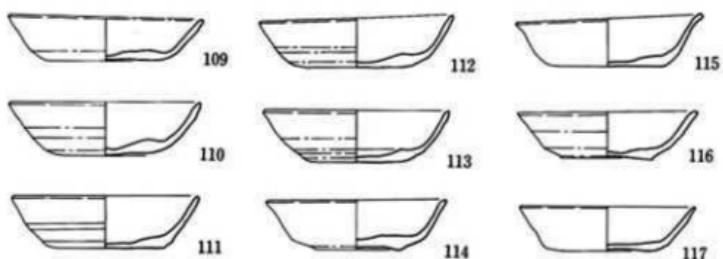


SP 13



108

SP 15



118

119



Fig. 190 土塙墓・木棺墓出土土器 1 (1/4)

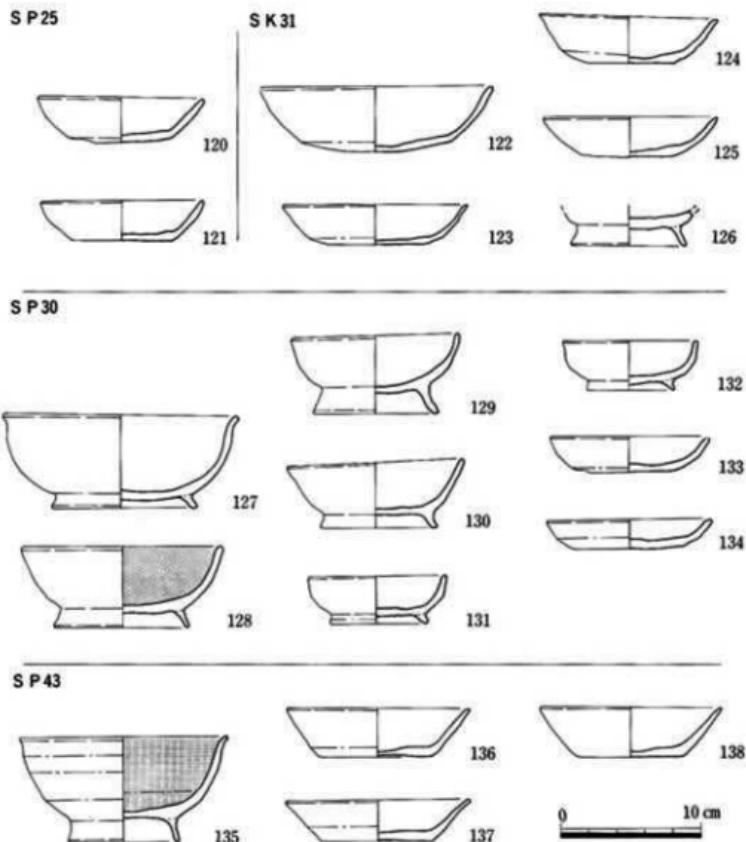


Fig. 191 土壙墓・木棺墓出土土器 2 (1/4)

時期は S P15・S P43が9世紀中頃、S P06・S P25が9世紀末～10世紀前半、S P30が10世紀中頃で、明らかなものは全て平安時代に入る。

その他SK31土壙からも9世紀中頃の環122～126が若干出土したほか、SK16竪穴等から9世紀に位置するであろう甕139～142が出土している。142はSP33埋土中からの破片出土で、供獻品ではない。遺物一覧表 Tab. 29

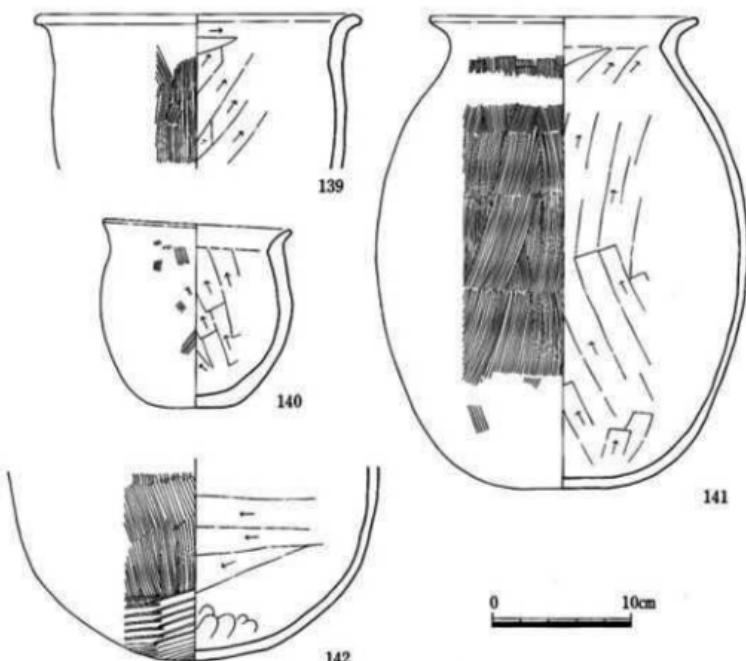


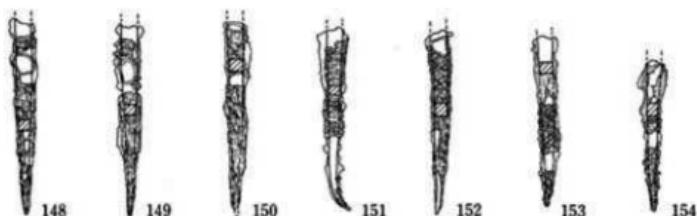
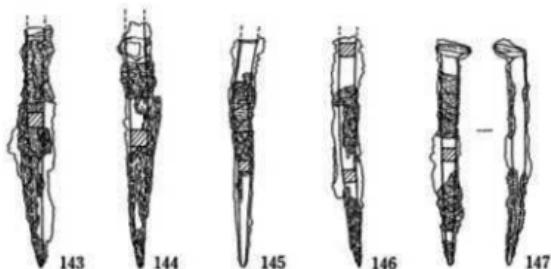
Fig. 192 土壙・堅穴出土土師器 (1/2)

## (2) 鉄器

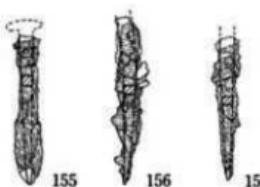
木棺墓 4 基から棺に使用された棺釘が出土したほか、土壙墓・木棺墓から副葬品の刀子 3 点が出土した (Fig. 193, PL. 153・154)。

まず釘は、S P 15 木棺墓から約20点出土している。143～154のうち唯一完形の152は長さ8.0 cmであるが、大型のものは9 cmをややこえる。断面方形で頭部は折り曲げてつくる。木質遺存部の木目方向からみて、2枚の板を打ち合わせた際の上板の厚みがわかるものでは約3 cm。ただし下板にあたる木目はタテ方向とヨコ方向と半々みられ、出土状況とあわせて考えると棺蓋の打ちつけとともに棺身の組立てにもこれらの釘が使用された可能性がつよい。S P 25 木棺墓からは約10点出土した。155～158は長いもので6 cmをややこえる。木質遺存部にみる下板木目はここでもタテ方向とヨコ方向とがある。S P 37 木棺墓出土の164は下半部のみ残る。S P 43 木

S P 15



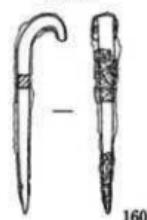
S P 25



S P 37



S P 43



0 5 cm

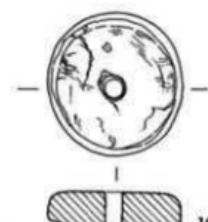


Fig. 193 土塙基・木棺墓出土鉄器および紡錘車 (1/2)

### III. 遺物

棺墓出土の166は長さ7.2cm。頭部は粗略に折り曲げてつくっている。下板木目方向はヨコである。

刀子はS P43木棺墓から161・163の2点、S P06土壙墓から162が出土した。161は鋒をわずかに欠失し、残存長18.2cm、刃部長はもともと11.5cm程度と推定する。両関式で刃部は研ぎ減りによりやや幅が狭くなっている。茎に柄の木質が一部遺存する。162は長さ14.4cm刃部長8.4cmの両関式。研ぎ減りが著しく、刃幅が極めて狭くなっている。茎に柄の木質が遺存する。163は刃部を殆ど欠失する。両関式で刃部の研ぎ減りが著しい。茎に柄の木質がわずかに遺存する。

#### (3) 紡錘車 (Fig. 193, PL. 149)

S P06土壙墓出土の紡錘車1点167がある。全体を研磨して仕上げているが、片面はやや雜で打割りの痕を残す。石材は濃緑色の蛇紋岩。径4.9cm、厚さ0.7cm、芯孔径0.7cm、重さ55g。

#### (4) 玉類 (Fig. 194)

S P33土壙墓から一对の水晶製垂飾165・166が出土した。いわゆる流滴形で、長さは1.2cm、上端に両側から径1mmの孔を穿いている。透明であるが、火熱を受けた為か、2点ともひび割れが進んでいる。

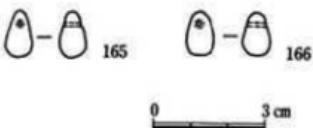


Fig. 194 S P33土壙墓出土垂飾 (3)



## 第4章 総 括

# 1.まとめ

本書で報告した4遺跡はそれぞれ多くの問題を抱えるものであるが、さらに相互に関連して佐賀平野における弥生文化の成立や古墳文化の変質等々について重要な問題を多く提起した。ここではまず今回の調査成果の要点のみ簡単にまとめ、さらに全体を通じて特に問題となる二、三について若干述べ、総括にかえたい。

**礎石A遺跡** 繩文晩期から弥生・古墳・奈良・平安時代にかかる。繩文晩期～弥生前期ではIV区で、支石墓系統の埋葬と甕棺墓等あわせて28基が重複して墓地を形成する。支石墓系統のそれは基本的に成人と小児が墓域を分け、血縁の紐帯のつよい小集団の存在を思わせる。同時期に礎石B遺跡でも同様な支石墓群があり、後述するように同一地域において支石墓群形成の比較検討が可能である。また小児墓に用いられた壺・甕は全て夜臼式で、礎石B遺跡と合わせてみると、同一地域からまとまって出土した例としてはこれまでで最も多く、従来あまり明らかでなかった佐賀平野の弥生前期土器の編年上、貴重な資料を提供したといえよう。副葬品は遺跡全体がかなり削平されていることもあって、土器と玉類が若干あるにすぎない。

古墳時代ではIV区で6世紀の大型円墳2基、I・II区で7世紀の終末期古墳7基ほかを調査した。古墳群全体としては一部であるが、7世紀になっていきおい古墳の築造数が増加する傾向が窺われ、古墳文化の変質とその背景にある集団の動向が問題となるところである。

出土品は多くないが、S T04古墳出土の土師器高坏にヘラ描きされた文字があり、もし「甲作」を意味するものであれば、集団の性格にも関わる興味ある事例といえよう。

奈良・平安時代ではII・III区を中心に古墳時代から一部古墳と並行して造営が始まる土壙墓・木棺墓群17基が存在する。古墳群と土壙墓・木棺墓群とが同一遺跡にあって関連をもつ例はあまり多くなく、その変化の様相から古墳時代～奈良・平安時代にかかる墓制の変質と時代背景を探るうえでは格好の資料といえるものである。同じ例は久池井一本松遺跡でもあり、その問題は合わせて後で述べる。

**礎石B遺跡** 繩文・弥生・古墳の各時代にわたり、調査面積の狭さにもかかわらず重要な資料を豊富に得た。繩文時代では早・前期の土器が比較的良好にまとまって出土したほか、晩期の土器が若干ある。ただし遺構は明確でない。

繩文晩期～弥生前期ではS T04古墳下から23基の支石墓を、ほぼ完結した一群として検出した。先の礎石A遺跡IV区の前期埋葬のうち前半期の一群とほぼ並行する時期にあたり、全体として似たような性格をもつ。ここでも成人と小児は基本的に墓域を分けていた。ただしA遺跡に比べるとS T04古墳墳丘に保護された形で、支石墓の上部構造まである程度残存する例が多い。構造の点では、本来A遺跡も同様であったと推定するが、原則的に小児墓は甕蓋をかぶせ

た壺棺を下部構造とし上部構造は支石に上石を載せるようである。一方、成人墓は佐賀平野の支石墓に特徴的な石蓋土壙を下部構造とし、上部構造は支石に上石を載せるが、S A29・S A33等のように上石に数枚の板石を載せた特殊なものも存在する。

副葬・供獻品には帰属が明らかでないものまで含めると小壺類が約30点、他に管玉が数点ある。小壺類は小児墓の壺棺とともに夜白式土器の編年上、礫石A遺跡例とあわせて極めて有力な一括資料といえる。

弥生後期になると東南隅に2基の壺棺が造られ、うち1基から壺棺の副葬品としては珍しく小型内行花文鏡が出土した。さらに終末頃、石棺9基が集中して造られるが、その中にはSC07石棺墓のように、石蓋上に疊を積み上げた例があり、これが地上標識にあたるものであるとすれば、注目すべき事実である。

古墳時代では6世紀初の古墳2基と7世紀の古墳3基を調査した。また調査区外ではあったが、近接する1基から佐賀平野では最古期の須恵器を採集し、共伴する土師器とともに紹介した。ことに興味深いのはS T04古墳下で検出した古墳設計溝である。最近、千葉県市原市人形塚古墳でも類例が知られており、墳丘・周溝・石室を一体的に設計する最も確かな根拠資料として今後類例の増加に注目したい。また同じくS T04古墳下で検出した須恵器・土師器の一括資料は石室造営に直接関わる儀礼として、5世紀後半～6世紀前半頃の古墳に稀に認められるものであり、今後、儀礼の実態を明らかにするうえで、一つの重要な資料となるものであろう。

**久池井C遺跡** 弥生前期の堅穴2基のほか、弥生後期の壺棺墓・石棺墓・土壙墓の計11基、平安時代の住居跡等を検出した。遺構の密度はうすいが、その中で弥生前期の堅穴から出土した土器群は礫石A・B遺跡の支石墓に用いられた土器との関係で、同一地域にあって編年上重要な位置を占める。

**久池井一本松遺跡** 旧石器から弥生時代の遺物は若干あるが、主に古墳とそれに続く奈良・平安時代の土壙墓・木棺墓等を調査した。

古墳はS T01が1基だけ6世紀に位置する以外、他8基の多くは小墳丘に小型の横穴式石室をもつ7世紀の古墳である。この点は礫石A遺跡同様、7世紀の終末になってむしろ古墳の造営が盛んであることを窺わせるものである。また8基のうち丘陵部の5基は狭い範囲に密集して造られ、いわゆる密集型群集にちかく、古墳文化の変質とその時代背景が問題となるところである。

奈良・平安時代では、一部で既に古墳に並行して造られていた土壙墓・木棺墓が一群の墓地を形成する。同一遺跡で、大勢として古墳から土壙墓・木棺墓に変わる例は礫石A遺跡でもみられたところであり、共通する関連をはらんでいる。なお、1基だけS T43木棺墓は木棺を内部主体としながらも古墳群の中に古墳同様の体裁をもって造られており、8世紀以降の埋葬にまだ不明な点が多いことを感じさせる。

## 2. 磯石遺跡の弥生前期土器

磯石A・B両遺跡の埋葬遺構および磯石B遺跡のS K21土壤等、さらには久池井C遺跡のS B01・S B14堅穴から縄文晩期～弥生前期の土器が豊富に出土した。これらの土器は夜白式土器にはじまり、板付式併行期を経て、前期末に至るまでの期間にわたっており、これまで不明な部分の多い佐賀平野の土器編年上、とくに問題の多い時期のものである。

佐賀平野のこの時期の土器の様相については佐賀市久保泉丸山遺跡<sup>(1)</sup>のほか、佐賀市・黒土原遺跡<sup>(2)</sup>、大門西遺跡<sup>(3)</sup>、三日月町佐織遺跡<sup>(4)</sup>、神埼町四本黒木遺跡<sup>(5)</sup>、中原町香田遺跡<sup>(6)</sup>・町南遺跡<sup>(7)</sup>、上峰村一本谷遺跡<sup>(8)</sup>、鳥栖市村田遺跡<sup>(9)</sup>等でも、分散的ではあるが比較的良好な資料が集積されつつあり、次第に明らかになってきている。現段階でいえるその様相は、佐賀平野の場合、夜白式期から弥生前期まで通じて刻目突帯文系土器が優勢であり、板付系土器は直接的な形ではなく、刻目突帯文系土器の中に、前期のある時期その影響をみせるにすぎない。藤尾慎一郎氏は佐賀・筑後平野の刻目突帯文系土器を論じ<sup>(10)</sup>、かかる様相を明らかにした際、「このような現象は本地域（（註）有明海北岸部）に限ったものではなく、肥後・薩摩など有明海・島原湾・八代海東岸部と五島列島でも存在し、下城式の分布域を別にすれば、板付系土器が主体となるのは玄界灘沿岸部に限定される。地域海の詳細な検討は必要だが、今まで言われてきた板付系土器の画一的な波及・分布は再検討されるべきである。」と述べている。

佐賀平野の前期土器は基本的に縄文晩期土器に系譜を引く刻目突帯文系土器の変化の様相として、しかも板付系土器をあくまで二義的な存在としてみなしうるだけに、比較的純粹な形で把えることが可能である。

以下、今回の調査で検出した夜白式系の弥生前期を中心とする土器について、まとめて編年を試みるが、まず磯石A・B遺跡の支石墓等埋葬遺構から出土した大形壺と甕とを対象とし、I期～IV期に分けて説明する。さらに磯石B遺跡のS K21土壤と久池井C遺跡のS B01・S B14堅穴出土品を補足資料として用い、次いで磯石B遺跡の甕棺について述べる。また支石墓等から出土した小壺等の副葬品については個々の個性がつよく、ただちにこれらの時期区分にあてはめることができるので、別に論じる。

なお個々の資料の表示については図の遺物番号で示すが、混乱をさけるため磯石A遺跡=A、磯石B遺跡=B、久池井C遺跡=Cとして、アルファベットをそれぞれの番号に冠し区別する。

### 1 大型壺

I期からV期までに分けて説明する (Fig. 195)。全体を通じていえる形式変化の特徴は、期を追うにしたいがい、頸部の発達に合わせて胴部が低くつぶれ、頸部と胴部が一体化する方向

を示す点にある。その他、丸底から平底への変化、口縁部の発達等、Tab. 30に示したような各時期の諸特徴があげられる。

また、これらの壺は一連の頸部の発達等に沿うものではありながら、I期の段階から、あえて名称を分ければ長胴系と短胴系の2系統が存在しており、IV期に至るまで、並行関係にある別々の系統のものとして分けて考えた方が、実際の理解が容易である。のちに述べるb指数=胴径/胴高でいえば1.09以下が長胴系、以上が短胴系にあたる。

#### I期

頸部が未発達で胴肩部から段をなして比較的急に立ち上がるものが多い。長胴系では胴幅が狭く全体にスリムで、一方、短胴系は胴肩がつよく張る。長胴系A40はこの中にあって特異で、頸胴間の区分が不明瞭かつやや雑なつくりであるが、全体的な特徴から判断してやはりこの時期におく。

底部は丸底、もしくは平底であっても胴部器壁と一樣の薄いつくりで丸底の名残をとどめる。口縁部は玉縁状か、あるいは短く外反する場合でも端部に丸味をもたせめくれさせたように仕上げている。このうち、平底化と玉縁にかわる短口縁化については、I期の中でも新しい要素を示すものとして、将来、時期を分けうる可能性がある。ヘラミガキは基本的に頸部はヨコ方向、胸部は肩位ヨコ方向、中位以下は基本的にタテ方向でありながら、ナナメまたはヨコ方向も多い。

丹塗りはI期～III期にみられるが、実はこのうちにA・B2種が認められ、両者の違いは外観でも歴然としている。すなわちA種はややくすんだ赤ではあるが鮮やかに発色し、厚塗りで剥落しやすい。これに対しB種は赤褐色にちかく、器面へのかかり方がうすいために丹塗りを施さない土器との識別が困難な場合が多いが、決して剥落しない。I期の壺にみられる丹塗りは全てこのうちA種である。両者の違いは丹塗りと焼成の時期関係等、技法上の違いに帰因するものと思われるが、ここではI期の重要な指標の一つとして指摘しておく。

#### II期

頸部は裾が開き気味となって発達をみせるが、ただし頸上位の立ち上がりが急で胴部との区分は未だ明瞭である。頸胴間はヘラミガキの際、意図的に段をつけるものに加え、沈線で明分するものが出現する。胸部は短胴系ではI期と目立った変化はないが、長胴系では頸部の発達にあわせて膨らみが顕著となる。底部は安定した平底にかわり、口縁部は長胴系A20・A30のように外反して伸びるのがみられる。A20は全体のプロポーションではI期にちかいが、口縁部・底部等の特徴からII期において。ヘラミガキは判明するものは少ないが、胸部は肩位ヨコ方向、中位以下は基本的にタテ方向とみられる一方、頸部にはその肥大化に対応して次期以降主流となるタテ方向が基本になりつつあるかと考える。丹塗りは長胴系A20は器面が荒れて不明、A30・A16はI期に類したA種、他はかかり方がうすい赤褐色のB種丹塗りである。

### III期

頸部は発達して高く裾が大きく開き、胴部の曲線と比較的スムーズにつながるようになる一方、胴部は低くつぶれる傾向を明らかにし、外に膨らむ。頸胴間はヘラミガキの際に段をつけるか、あるいは沈線により区分を明瞭にしている。短胴系の中に大型のものが出現し、長胴系にかわって短胴系が主体を占める。B288のみは頸部の発達だけをみればII期に相当するものであるが、格別大型化し、頸胴間の沈線・段を消失しているなどの点に新しい要素を認め、III期においていた。いずれも底部は平底で、口縁部はB280のみ直口気味であるが、他は大きく外反して伸びる。ヘラミガキは判明するかぎりでは、頸部は全てタテ方向となり、胴部は肩位ヨコ方向、中位以下も全てタテ方向となって手法が一定する。丹塗りはA種は無くなり、B種に限ってみられるが、省略するものも現われ、数のうえでは半々である。

なお、この時期には小壺B298が大型壺B274に伴う。

### IV期

頸部は高く、大きく裾が開いて極度に発達し、胴部とほぼ一体化する一方、とくに短胴系では胴部が低くつぶれて外につよく張る。頸胴間の区分はヘラミガキの際にかすかに段をつける程度で、沈線はみられなくなる。長胴系ではB284のみ1点、頭襟が胴幅に等しく拡がった末期的な型態となり、III期同様に主体は短胴系で、大型のものが含まれる。いずれも底部は平底で、口縁部は長胴系B284の場合、あまり極端に開かないが、短胴系では大きく外反して伸びると思われる。ヘラミガキは稀にB272のみ頸部ともヨコ方向である以外、他は全てタテ方向、胴部は肩位ヨコ方向、中位以下はタテ方向で、III期以来の手法が一定する。丹はB種に限られ、一方で省略するものが半ばする。

ところで、これまでI期～III期のこれら壺棺には必ず蓋が蓋に使用されていたが、このIV期では長胴系B284のみ裏蓋で、他は鉢や壺の胴部下半を打ち欠いて被せている。これもIV区の大いな特徴である。短胴系が主体となって壺が全般に大型化したため、転用蓋が蓋にそぐわなくなったことも一因であろう。

なお、この時期には小壺B300が大型壺B286に伴う。

以上、大型壺のI期～IV期の変化を長胴系と短胴系とに分けてTab.30にまとめた。部分的な形態・技法等の特徴は既に述べたとおり長胴系・短胴系とも並行して各期ごとで、口縁部・底部・丹塗・ヘラミガキ等の諸要素に一定の新古傾向が比較的明瞭によみとれる。ただし、これら下型壺の形態変化は、はじめにも述べたように基本的には一環した頸部の発達と、それに応じ胴部が低くつぶれて頸胴部が一体化する傾向にあるものとして把えるべきと考える。したがって次に、そのような傾向を法量および指標で示し、先の形態変化と重ねて検討してみるとする。

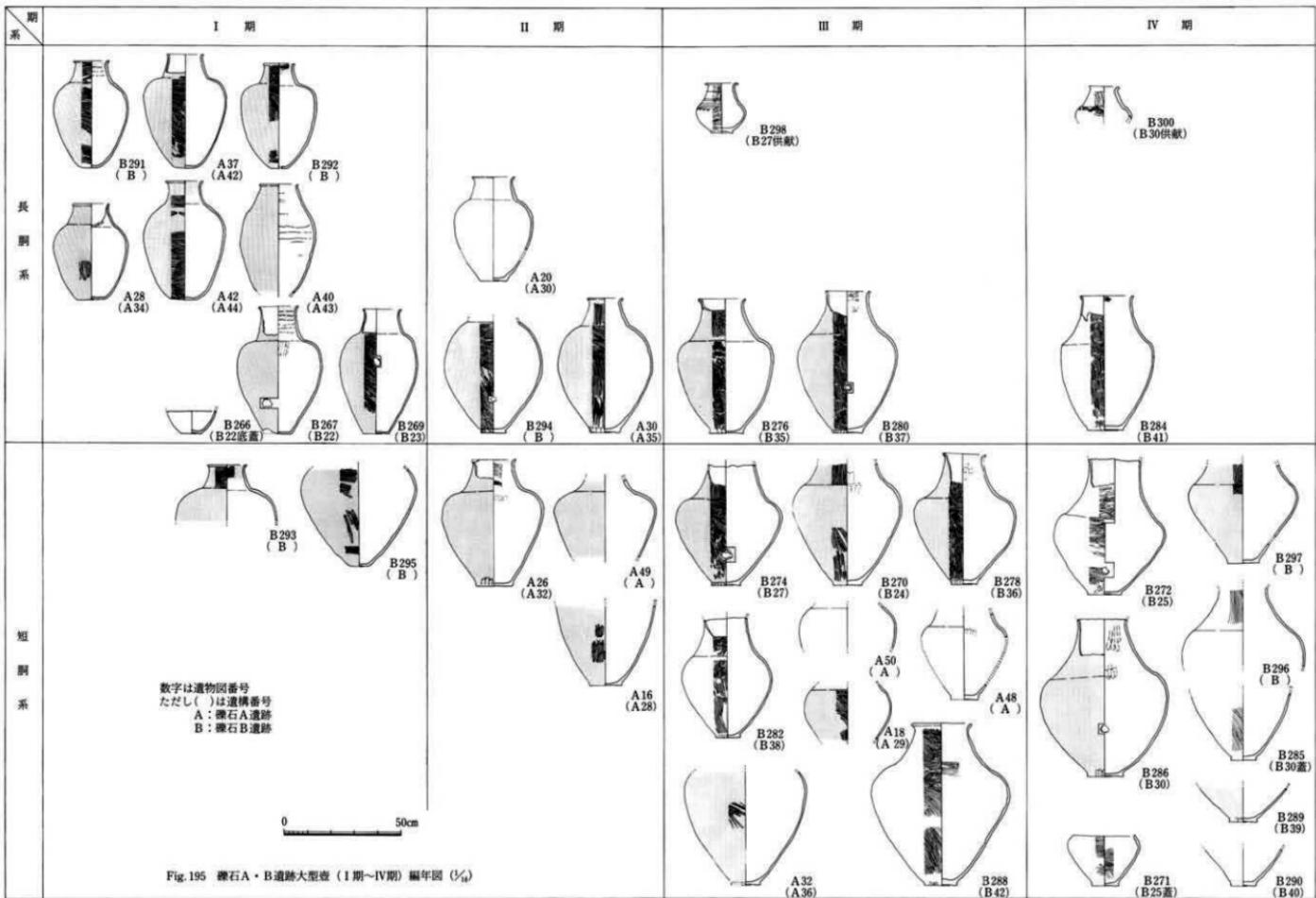
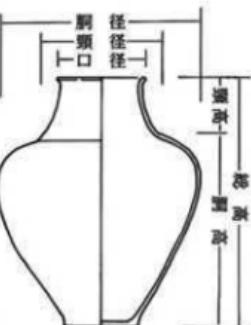
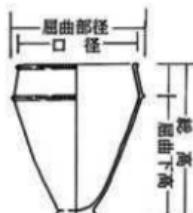


Fig. 195 磨石A・B遺跡大型壺(I期~IV期)編年図(少)

まず法量のうち各部位の高さについてみると、総高は、短胴系ではI・II期の資料が1点しかなく不詳であるが、長胴系ではIII期以降にすべて55cmを越え、明確に大きくなる。口頭高は長胴系でI・II期はあまり変わらないが、III期・IV期と順に高くなり、短胴系ではI期11cm台、II期13cm台、III期18cm台、IV期



大型童及瘦計測部位



26~28cmと順次高くなっている様相が明瞭に読みとれる。胴高は長胴系・短胴系とも全期を通じて決定的な差違がみられないとはいえるが、期が新しくなるにしたがい、全体として高いものが多くなることは事実である。

したがって各部位の高さの点では、とくに長胴系にみられるように、III期以後総高が高くなるのは胴高よりも口頭高の伸長が大きな要因であったといえる。

一方、各部位の径についてみると、口径は長胴系でI・II期あまり変わらず、径19cmをこえるIII・IV期で順次大きくなる。短胴系はI・II期の資料は少ないと云はれ、径20cmをこえるIII・IV期のものとははっきり違う。頸径の場合は各期の発達の様相が一層明瞭で、長胴系ではII期でやや大きくなる傾向を示しながらも、I・II期は径24cm以内に収まるのに対し、資料は少ないが、III期に径30cm、IV期に径37cmをそれぞれこえる。また短胴系では、I・II期の資料は少ないが、I期20cm台、II期25~27cm、III期28~40cm、IV期40cm台と確実に径が大きくなっている。最後に胴径は、長胴系ではI期で径30cm台にとどまるのに対し、II期で径40cmのものが加わり、III期はすべて径40cmをこえる。ただし1点のみ知られるIV期ではわずかに径40cmを下回る。一方短胴系では全期を通じて各時期の決定的な差はみいだせないが、それでもIII・IV期になって径50cmをこえるものが加わるところをみると、III期以降に全体として径が大きくなっている傾向は明らかである。

したがって各部位の径の点では、口径および胴径が全体としてほぼIII期を境に大きくなるが、I・II期の間あるいはIII・IV期の間はあまり目立った変化がないのに対し、頸径だけは長胴系・短胴系とともに各期を追って順調に大きくなっているといえる。このことは例えばIV期でいえば、胴径はIII期すでに最大に膨らんでおり、頸径だけがIV期になお発達して胸部と一体化するほどになった、ということを意味するものである。

次に、これらをプロポーションの比率として、各指標に置き替えて表わしてみる。各指標は  
 $a \text{ 指数} = \frac{\text{頭高}}{\text{総高}} \cdot b \text{ 指数} = \frac{\text{胴径}}{\text{頭高}} \cdot c \text{ 指数} = \frac{\text{頸径}}{\text{頭高}} \cdot d \text{ 指数} = \frac{\text{口径}}{\text{頭径}}$  である。先の各部位法量の説明と

Tab. 30 踊石A・B遺跡の大型壺（I期～IV期）計測表

分類	時期	計測値・指標 遺物図番号 (遺構番号)	法 量 cm					
			高			径		
			総 高	頸 高	胴 高	口 径	頸 径	胴 径
長 胴 系	I	A28 <A34>	40.4	8.8	31.6	15.6	20.4	31.7
		A37 <A42>	48.3	10.8	37.5	15.3	20.5	35.1
		A40 <A43>	(48.0)	11.0	(37.0)	16.4	23.1	31.6
		A42 <A44>	50.4	9.8	40.6	15.8	16.8	34.5
		B267 <B22-1>	53.8	14.5	39.3	17.0	20.3	36.0
		B266 <B22-2>						
		B269 <B23>	52.5	10.0	42.5	16.4	18.2	32.8
		B292 <B04墳>	43.7	9.2	24.5	13.2	16.8	31.9
		B291 <〃>	45.0	9.1	35.9	15.1	18.3	31.8
短 胴 系	II	A20 <A30>	44.2	9.8	34.4	18.0	20.2	33.5
		A30 <A35>	56.8	11.8	45.0	15.0	21.5	40.3
		B294 <B04墳>			46.6		22.6	42.0
	III	B276 <B35>	56.6	17.5	39.1	20.0	30.8	40.7
		B280 <B37>	59.8	18.1	41.7	19.1	31.6	42.6
	IV	B284 <B41>	56.5	20.2	36.3	22.8	37.5	39.7
	I	B293 <B04墳>		11.2		16.4	20.7	42.8
		B295 <〃>						48.6
	II	A16 <A28>						
		A26 <A32>	53.2	13.2	40.0	18.8	27.5	43.5
		A49 <A41西>					25.8	43.2
IV	III	A18 <A29>					31.0	37.4
		A32 <A36>						52.3
		A50 <A49満>					31.7	41.3
		A48 <〃>			30.2		31.2	37.2
		B270 <B24>			42.2		39.4	47.4
		B274 <B27>	(54.0)	(18.3)	36.2	(22.5)	33.7	45.3
		B278 <B26>	54.8	18.6	36.2	18.8	35.0	43.9
		B282 <B38>	(52.5)	(18.4)	34.1	(19.4)	28.4	38.0
		B288 <B42>	68.5	18.2	50.3	25.9	39.3	59.8
IV	IV	B272 <B25>	(59.4)	(27.6)	31.8	(26.0)	40.4	47.7
		B286 <B30-1>	(68.3)	(26.1)	42.2	(24.0)	45.8	54.6
		B285 <B30-2>						
		B289 <B39>					41.6	52.4
		B290 <B40>						
		B296 <B04墳>					41.8	46.7
		B297 <〃>			33.7			

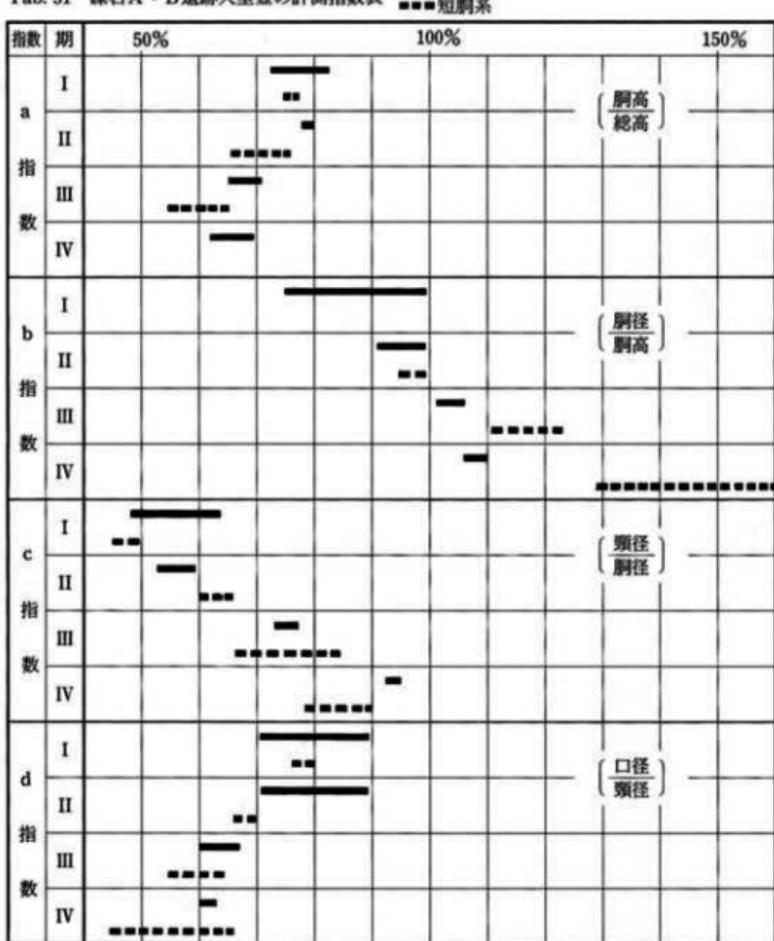
遺物・遺構番号—A: 踊石A遺跡 B: 踊石B遺跡 ( ) は推定値

指 数 %				形態・技法上の特徴												
a 胴高 総高	b 胴径 胴高	c 頸径 胴径	d 口径 頸径	口縁部			底部			丹 塗			頸研磨			
				玉	短	長	丸	平	明	暗	無	縦	横	縦	斜	横
78	100	64	76		○		○		○		○	○	○	○	○	
78	94	58	75	○	○		○		○		○	○	○	○	○	○
(77)	(85)	73	71		○		○		○		○					
81	85	49	94		○		○		○		○					
73	92	56	84		○		○		○		○	○	○	○	○	○
81	77	55	90	○			○		○		○		○	○	○	
79		53	79	○			○		○		○		○	○	○	
80	89	58	83	○			○		○		○		○	○	○	
78	97	60	89		○		○		○		○					
79	90	53	70	○			○		○		○		○	○	○	
90		54		○			○		○		○		○	○	○	
69	104	76	65		○		○		○		○		○	○	○	
70	102	74	60	○			○		○		○		○	○	○	
64	109	94	61		○		○		○		○	○	○	○	○	
		48	79	○			○		○		○		○	○	○	
							○		○		○					
75	109	63	68	○			○		○		○		○	○	○	
		60					○		○		○		○	○	○	
		83					○		○		○		○	○	○	
		77					○		○		○		○	○	○	
	123	84					○		○		○		○	○	○	
	112	83					○		○		○		○	○	○	
(67)	125	74	(67)				○		○		○		○	○	○	
66	121	80	54	○			○		○		○		○	○	○	
65	111	75	68	○			○		○		○		○	○	○	
73	119	66	66	○			○		○		○		○	○	○	
(54)	150	85	(64)				○		○		○		○	○	○	
(62)	129	(84)	(52)				○		○		○		○	○	○	
		79					○		○		○		○	○	○	
		90					○		○		○		○	○	○	

は直接的に対応するものではないが、aは胴部のつぶれ方と頸部の発達の度合に関する指数、bは胴部のつぶれ方を示す指数、c・dは胴径・口径それぞれに対する頸部の発達に関する指数であり、胴部・頸部等の変化で相互に関連性はある。

Tab. 30に示したとおり、まず長胴系ではa～d各指数ともI期とII期の間に目立った変動はなく、分けにくいく。しかしIII期では2点ある資料のいずれの指数も同時に大小どちらかの方向

Tab. 31 磐石A・B遺跡大型壺の計測指数表



に群数値が動いており、さらにIV期では1点だけの資料であるが、a・b・c各指數において、それぞれIII期に統く一定方向への群数値の変化が認められる。

一方、短胸型ではI・II期の資料がやや不足するものの、a・d各指數で一部は期をまたがるが、全体としてみるとI～IV期のそれぞれの段階でa・b・c・d各指數がほぼ同時にそれぞれのもつ一定方向に変化していることがわかる。この様相を簡便に示すとTab. 31のようになり、各指數ともI期からIV期に向かってそれぞれ一定方向に変化し、しかもそれは相互に連動し合っての変化であったと考えられるのである。

この結果は、はじめに説明した各時期の形式変化が壺の口頸部と胴部が相互に関係し合って発達する度合として基本に把えうることを数値のうえで証明するものであり、今後、同種の資料の時期をはかる際の目安となろう。また、I期からIV期の中では、長胸系・短胸系ともII期からIII期にかわる際の変化が総体的にみて大きいことを指摘しておきたい。

## 2 壺 (Fig. 196)

まず砾石A・B遺跡の縄文晩期～弥生前期埋葬から、先の大型壺の蓋に使用されていた壺をとりあげる。蓋であるから両者の時間的な同時性が確実であることに大きな利点があり、むしろここでは先の大型壺の編年時期に合わせ、例えばI期の大型壺の蓋壺は同時にI期の壺として位置づける。したがって、純粹に壺自体の各形式から組み立てられた分類・編年ではない。しかし大型壺に依った各時期の壺の形態上の特徴と変化をみていくことにも、それなりの意味はあるし、実際、指摘しうることも少なくない。刻目突帯文系壺の編年で一般的に目安となる口縁部突帯位置や胴部屈曲の度合、刻目の特徴等からも種々検討はしてみたが、これらの資料に関する限り、それらの基準をそのまま編年に適用することは極めて困難であった<sup>(13)</sup>。

まず各資料を3類に分ける。

**A類** 胴部が上位で屈曲するもの、その中で下記のように細分したA c類以外は口縁部と胴部曲部とに刻目突帯をもつ。

**B類** 胴部が屈曲せず、口縁部に刻目突帯あるいは単に刻目をもつもの。

**C類** 胴部は屈曲しないが、口縁部と胴部上位に刻目突帯をもつもの。

さらにA類は胴屈曲部以下が比較的低い、いわば短胸系A a類と、逆に高い長胸系A b類、胴部上位で屈曲はするが刻目突帯をもたず刻目突帯文系の中でも特殊なA c類に分ける。台状底部等を含むため、A a類とA b類を大型壺のように指數で分けるのは困難であるが、目安でいえば、のちに述べるc指數 =  $\frac{\text{屈曲部}}{\text{屈曲下高}}$  でおよそ1.15以上がA a類、以下がA b類にあたる。また、B類は口縁部が胴部からそのまま伸びるB a類と、やや外反をみせるB b類とに分ける。

全体の中ではA類が主体を占め、B類は3点、C類は1点にすぎない。以下、Tab. 32を参照しながらFig. 196によって説明する。

### I期

A a類・A b類・B a類・B b類がある。

**A a類** あえて細分しないが、4点の資料はそれぞれ個性的で、胸部上位はA38以外はつよく屈曲する。またA36・A38は屈曲上位が外反しながら内傾する。A39屈曲上高は屈曲部突帯が平行しているため一部低くみえるが、全体としてみれば高い部類に入る。底部はB268のように胸底間に突帯を廻らす脚状底部か、A38・A39のように上げ底気味を含む台形状である。口縁部突帯の位置はA36・A38が口縁よりやや下、A39・B268は口縁部と同高にあってしかも上面をナデるため、端部が反ね上がるものを含め平坦口縁にみえる。なお、Tab.32では後者の特徴を「平」と表示し、やはり口縁部と同高ではあるが突帯上面の下向する「上」タイプとは区別した。刻目はA36のみ先の鈍いヘラによるものか、丸味をもって丹念につけられている。他は先の鋭いヘラによる。外面調整はA36が条痕のあとナデ、他はナデ仕上げである。

**A b類** 胸部屈曲上高が高く、底部は上げ底の台形状底部で、口縁部突帯位置は高縁部と同高。刻目は鈍く丸味をもち、外面調整は板状工具によるナデ仕上げである。A41の1点のみ。

**B a類** 底部は厚く突出し、口縁部突帯位置は口縁部と同高。刻目は鋭く、外面調整はナデおよび細かいハケ目である。B265の1点のみ。

**B b類** 口縁部は体部上端がわずかに外反して如意形口縁をおもわせる。内面で口縁部に幅約1.7cmのハケ目を1周させ、屈曲が比較的明瞭である。口縁部の刻目は突帯でなく、口唇部外角に直接先の鋭いヘラで刻んでいる。底部は外観は単純な平底ながら内面で丸い。器面調整は細かいハケ目である。A27の1点のみ。

### II期

A b類・A c類・B a類がある。

**A b類** 胸部屈曲上高は広く、底部は台形状で、口縁部突帯位置は口縁部と同高にある。刻目は鈍く丸味をもつ。外面調整は条痕およびナデである。A25とA29がある。

**A c類** A15は刻目突帯部文系に含めるにしても特異な存在である。胸屈曲部はこの1点のみ粘土帯が外付けで、しかも接合部をそのまま屈曲に見せ、刻目を施さない。口縁部は口唇部が丸味をもって外にややめくれたままにおわる。屈曲部上位の外面調整はヘラミガキで精良につくられている。

**B a類** 胸部は全体に丸味をもって立ち上がる。平底で、口縁部突帯位置は口縁部と同高で上面は平坦。刻目は先の鋭いヘラでつける。外面調整は一部に条痕を残し、細かなハケ目とナデで仕上げている。

### III期

A a類・A b類・C類がある。

**A a類** 胸部上位はつよく屈曲し、屈曲上高がやや狭くなる。底部は平底でB279のみやや外

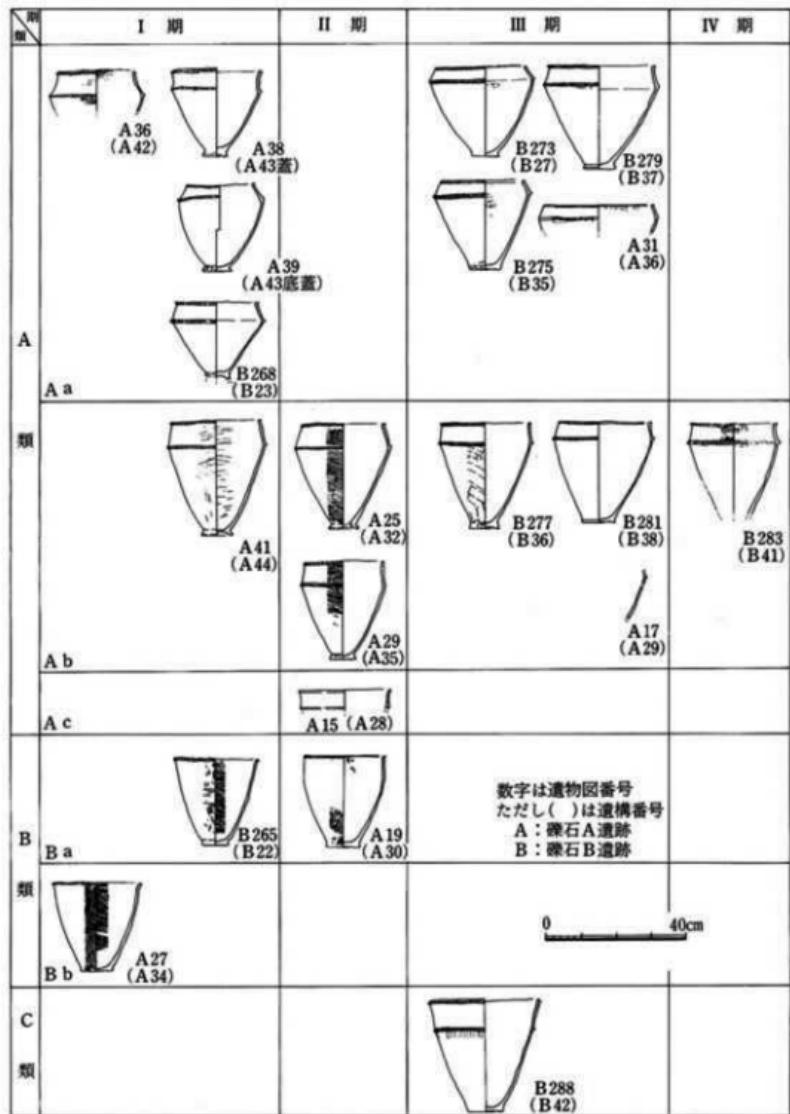


Fig. 196 踞石 A・B 遺跡図 (I 期～IV 期) 年表図 (1/16)

に張り出しが、ただし台状底部とは異なる。口縁部突帯位置は口縁部と同高で上面は平坦につくり、B275の場合は突帯が反ね上がって口唇部はむしろ内傾している。刻目は先の鋭いヘラで切り刻まれたように荒くつけられたものがみられる。外面調整はナデである。

**A b 類** 脊部は屈曲上高がI・II期に比べて低くなる。底部は平底で、B277は上げ底気味に高いが台形状とは違い、むしろ次期につながる脚台状底部にちかいものである。口縁部突帯位置は口縁部と同高で上面は平坦、刻目は鋭く、外面調整はナデ仕上げである。

**C 類** B288はA類とB類のいわば折衷形式にあたる。平底で、口縁部突帯位置は口縁部と同

Tab. 32 踵石A・B遺跡の甕 (I期~IV期) 計測表

分類	時期	計測・指標 特徴 遺物回番号 (遺構番号)	法 量 cm						指 數	
			高			径		a 屈曲下高 總 高	b 口 径 屈曲部径	
			總 高	屈曲上高	屈曲下高	口 径	屈曲部径			
Aa	I	B268 <B23>	(22.4)	5.5	(17.6)	23.6	27.0	(79)	87	
		A38 <A43-1>	25.3	5.7	19.6	25.7	25.6	77	100	
		A39 <A43-2>	25.1	4.3	20.8	19.3	24.2	83	80	
		A36 <A42>		7.1		22.4	27.2		82	
	III	A31 <A36>		4.0		31.7	34.0		93	
		B273 <B27>	25.5	3.9	21.6	26.1	30.2	85	86	
		B275 <B35>	25.6	4.2	21.4	23.2	28.0	84	83	
		B279 <B37>	29.5	5.6	23.9	30.6	33.0	81	93	
Ab	I	A41 <A44>	32.8	7.6	25.2	25.8	28.1	77	92	
	II	A25 <A32>	29.9	6.9	23.0	24.0	27.5	77	87	
		A29 <A35>	27.9	6.7	21.0	22.8	24.4	75	93	
	III	A17 <A29>								
		B277 <B36>	30.0	4.0		25.8	27.2		95	
Ac	III	B281 <B38>	28.6	4.6	24.0	26.0	28.8	84	76	
	IV	B283 <B41>	(28.6)	5.7	(22.9)	(24.3)	26.3	80	92	
		B324 <B21>	24.3	4.6	19.7	24.3	24.7	81	98	
	II	A15 <A28>		4.9		26.0	25.6		102	
Ba	I	B265 <B22>	24.6			24.3				
	II	A19 <A30>	25.9			23.1				
Bb	I	A27 <A34>	25.1			25.2				
C	III	B288 <B42>	32.2			31.8				

高、刻目は先の鋭いヘラで切りつけるように刻む。外面調整はナデである。

## IV期

A b類の1点のみ知られる。B283は脣部屈曲上高が低く、注意すべきは口縁部がやや外反する気配をみせる点にある。口縁部突堤位置は口縁部と同高で上面は平坦、刻目は先の鋭いヘラで粗く刻む。外面調整は、B類ではI・II期すでに細かなハケ目にちかい手法が用いられていて、A類ではこのIV期になってハケ目が認められる。

遺物・遺構番号—A：疊石A遺跡 B：疊石B遺跡 ( ) は推定値

(%)	形態・技法等の特徴															
	脣部屈曲上位				底 部				口縁突堤位				刻目		外面調整	
屈曲部径	直立	折反	折傾	外反	脚	台	低	下	上	平	鈍	鋭	条痕	ナデ	ハケ	
屈曲下高		》	》	《	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
(153)		○			○					○	○	○	○	○	○	
131	○				○			○		○	○	○	○	○	○	
116	○				○			○		○	○	○	○	○	○	
140		○				○			○	○	○	○	○	○	○	
131	○					○			○	○	○	○	○	○	○	
138	○					○			○	○	○	○	○	○	○	
112		○			○			○		○	○	○			○	
120		○			○			○		○	○	○	○	○		
116	○				○			○		○	○	○	○	○		
142		○				○			○	○	○	○	○	○	○	
115			○						○	○	○	○	○	○	○	
125						○			○	○	○	○	○	○	○	
		○														
	○						○	○	○		○	○	○	○		
	○						○		○		○	○	○	○		
	○						○		○		○	○	○	○		
	○						○		○		○	○	○	○		

以上、I期～IV期の壺をみてきたが、全体を通じた形式等の変化としてみた場合、どのようなことがいえるか次に検討する。まずA類における屈曲上高はI・II期に比べIII・IV期では明らかに低くなり、ことにAa類の場合、III期に一層屈曲がつくなるため、垂直間隔でみるとその差が歴然としている。胴部屈曲については、一概に屈曲度だけで新古を論じることはできず、基本的にむしろそれはA類における短胴系Aaと長胴系Abとの違いによるところが大きいと考える。ただし、子細にみた場合には一定の傾向があってAa類で胴部の屈曲上位が外反内傾するのとAb類ではI類では明瞭に屈曲するもののII期以降になるとややあいまいな屈曲を示すものが加わること、などが指摘できる。

底部はA類ではI・II期には脚状あるいは上げ底を含む台形状底部に限られ、B類は一般的にいう平底、といった違いがはっきりしている。しかしIII期になるとA類では脚状や台形状底部は姿を消し、単純な平底にかわる。一部脚台状の底部もみられるが、それはむしろ次の亀ノ甲式の壺底部の祖形にあたるものとみた方がよい。

口縁部の突帯については、口唇部よりやや下がる位置にあって古い要素を示すものがI期のA類の一部に認められるだけで、他は、口縁部と同じ高さにある。ただしAb類でみるとかぎりではI・II期と同じ口縁高にあっても、III期になると上面は全て平坦になり、中には突帯が反ね上がって口唇部が内傾するものもみられる。したがって傾向としては、口縁部やや下から同高へ、さらには突帯上面平坦への変化がたどれる。また刻目は、I・II期の間は先の鈍いヘラや細竹管等で丹念に刻んだものも半数ちかくみられるが、III期以降はすべて先の鋭いヘラにかかり、しかも切りつけるように手荒く施したもののが幾例がある。

外面調整についてみると、繩文晩期以来の古い手法である条痕はA類・B類ともII期までは少なくとも痕跡程度をとどめる。しかしハケ目は、B類ではI・II期すでに現われているのに対し、A類ではIV期になってようやく存在を認めうるのであり、他の形態的特徴をあわせてみて、A類とB類とでは製作技法そのものに何らかの大きな違いがあったとしか考えられない。

ところで、これらの変化のうち全体のプロポーションについて、大型壺同様に法量および指數で検討を試みた(Tab. 32)。しかし、結果的にはa指數 =  $\frac{\text{屈曲下高}}{\text{総高}}$ 以外は明瞭な数値で形式の変化を裏づけることが困難であった。a指數は総高に対する屈曲下高の割合(=屈曲上高の割合)を示すものであり、これでみるとA類の場合、短胴系・長胴系とも確かにI・II期からIII・IV期になって屈曲上高の占める割合が減る傾向を示している。

以上、I期～IV期の壺の形態変化をみると、とくに大部分を占めるA類の場合、全体としてその中の大きな変化はIII期にある。これは大型壺III期における大きな変化を指摘した大型壺の変化と期を一にするものである。

### 3 土壌および竪穴出土の土器 (Fig. 197)

次に先の編年を補足し、爾後の土器形式とのつながりを探るため、礫石B遺跡S K21土壌等および久池井C遺跡S B01・S B14竪穴から出土した土器をとりあげる。支石墓でみてきたIV期に続く時期の新しい段階を示す土器群である。Fig. 197では出土地点別に器種を分けて図示した。S B01竪穴では大型壺・小型壺・甕・高坏・鉢・蓋、S B14竪穴では大型壺・小型壺・甕、S K21土壌等では大型壺・甕・高坏がみられ、弥生の生活用土器を構成する一とおりの器種が揃っている。

まず壺をみると、大型壺では全体が推定できるC12の場合、胴頸部が完全に一体化して胴部が低くつぶれ、胴頸間のほか頸部に装飾的に沈線が加わる。IV期の大型壺に直接つなげるには問題はあるが、試みに先の大型壺の各指標でみるとa指標=62, b指標=169, c指標=82, d指標=44であり、一定傾向を示す指標変化の中ではさらに発達が著しい。その他の大型壺は胴部下位が丸味をもち、むしろこの時期の大型壺ではその方が一般的であろう。類例に町南遺跡の土壌出土例、七ヶ瀬遺跡S J 21壺棺等がある。

小型壺は全体のわかるものはなく破片3点のみ図示するが、C36は頸部がやや急に立ち上がりて口縁部が短くつよく外反。底部はC14が丸底状の周囲に粘土帯をまわして平底を意図し、C15は厚い小さな平底で、いずれも胴部が低く外つよく張り出す型態を思わせる。

甕は支石墓に用いられたA～C類との関係を示す必要から、D～F類のおよそ3類にまず大別する。

D類 A類に続くもので、胴部上位の屈曲は不明瞭となり、口縁部は突帯の上面をナデて平坦口縁にちかいものが多く、刻目は丁寧ではあるが、先の鈍いヘラをかるく当てただけに変わる。調整は基本的にナデ仕上げである。細分すればD a類とD b類とがあるが、胴部二重突帯で大型のD a類はあくまで特殊である。

E類 基本的にB類に続くものである。細分すれば、同じく口縁部のみ刻目突帯を廻らせながらも、胴部上位が内湾気味のE a類と直線的に開くE b類、それにE b類に類するが突帯に刻目をもたないE c類とがあり、さらにE a類・E b類は大小によりI類・II類に分けられる。調整はナデ仕上げである。

F類 注意されるのは如意形口縁をもち板付式との親縁性が指摘されるF類の存在である。細分すれば口縁部が外反して口唇部に刻目をもつF a類と、胴部上位にも刻目突帯を加えたF b類とがあり、さらにF a類は大小によりI類・II類に分けられる。調整はナデ仕上げである。F a類は胴部が殆ど張らず、とくにB351は開きが少なく、いずれも口唇部全面に刻目を施しており、このような特徴は板付I式の範疇に含められるものであろう。F b類は板付式と刻目突帯文系とのいわゆる折衷型にあたり、C32は口縁部が大きく開いて胴部はやや張るが、C10の口縁部は短くわずかに折れる程度である。ともに口唇部刻目は全面に施す。

壺においてこのように板付式と刻目突帯文系との共存あるいは影響が明瞭になるのは、佐賀平野では他に宝満谷遺跡<sup>(12)</sup> S B002・S B007住居跡や一本谷遺跡 S B091住居跡などでもみられるように、このD～F類の段階である。ただし、それ以前においても、支石墓に用いられた壺の中でIV期に位置する砾石B遺跡 S A41支石墓の蓋壺B283に、口縁部の特徴から板付式との親縁関係が認められることは既に述べたとおりである。土器形式からみてB283は、胴部屈曲、刻目突帯、器面調整等いずれにおいても、このF類より古い要素をもつことは明らかである。

高坏は板付式にあたるもので、脚部は坏部との間に突帯を廻らせ、筒状に高いC24と裾開きのC25・B331、低く大きく開くB360がある。突帯の特徴はC25が2条、他2点は1条で、坏部と脚部の接合部というよりは坏部下端の上がった位置にあり段をなす。このような特徴は板付式の中でもII式とされる高坏にみられるところである。

鉢類C18・C20のうち、椀形をなす鉢C20は佐賀平野では最も早い時期の例で、福岡平野で板付式の新しい段階に出現する。鉢C18は刻目突帯文系の特徴を合わせもつ。最後に蓋C17はつまみが稜をもって笠部に付く特色がある。これも佐賀平野では最も早い時期に位置し、福岡平野および筑後平野で板付式の新しい段階に出現するものである。

以上のように、ここに示したS B01竪穴ほかの一群の土器は佐賀平野で伝統的な刻目突帯文系土器群に板付式が一部共存し、あるいは影響を現わし、両者の時間的並行関係が明瞭になる段階のものである。そしてその時期は、板付式との関係でいえば、とくに壺に板付I式の古い手法を残すとはい、高坏等に板付II式とされる特徴がみられるとなれば、総体として板付II式の古い時期に並行させざるをえないであろう。板付I式の影響を窺わせる資料はIV期以前の土器にもみられたが、各器種の型態変化、技法、および新たな型態の加入等々の特色はここに至って画期的である。よって刻目突帯文系土器群がその新たな展開をみせはじめたものとしてこれらをV期に位置づけ、先の支石墓のIV期に続くものと考える。

#### 4 壺 棺 (Fig. 198)

砾石A遺跡の壺棺6基をVI期として把える。同遺跡の墓域の中ではI期～III期の壺棺を一部こわし、しかも4基は壺棺群とは頭位を離れて営まれており、I期～III期の埋葬とはその間に一定の時間的空白が想定される。あるいは集団の系譜を別にするものかもしれない。

6基のうちA22は小児棺、A34とA43は壺棺としてはやや小型で小児棺にちかいが、A35・A23・A14は十分成人を葬るに足る容量をもち、専用壺棺と呼ぶに何ら遜色はない。しかしこの時期の大きな特徴は、専用棺にしてもなお、いずれもが未だ壺の名残りをとどめている点にある。A43はそのうち最も壺の形態にちかく、頸胸間と口頸間にあたる位置にそれぞれ3条の沈線をおいて口・頸・胸を区分している。A22は上半を打ち欠いているが、A43にちかいものであろう。A35・A23・A14も大型化しているとはいえ、プロポーションのみならず沈線によ

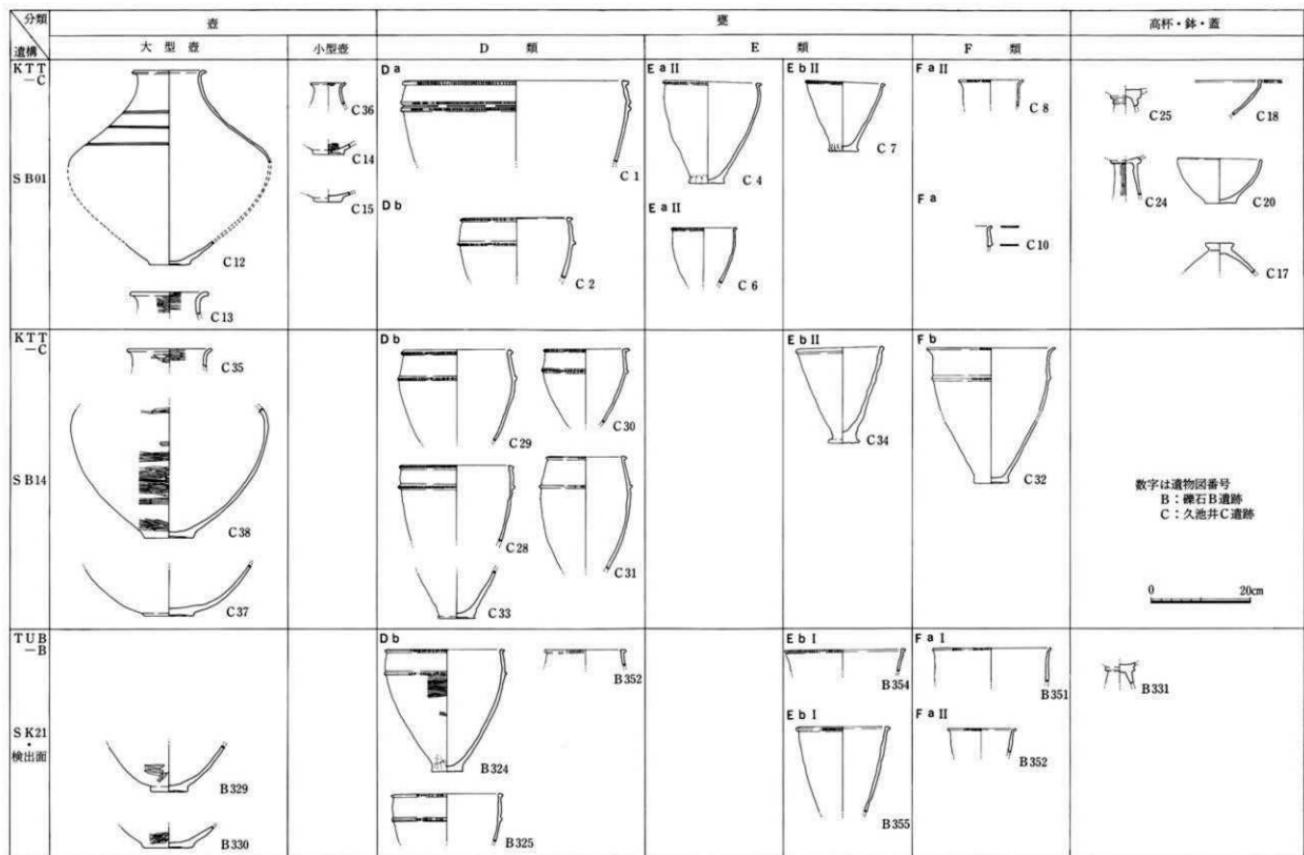


Fig. 197 磚石B遺跡・久池井C遺跡出土土器（V期）分類図（ $\frac{1}{4}$ ）

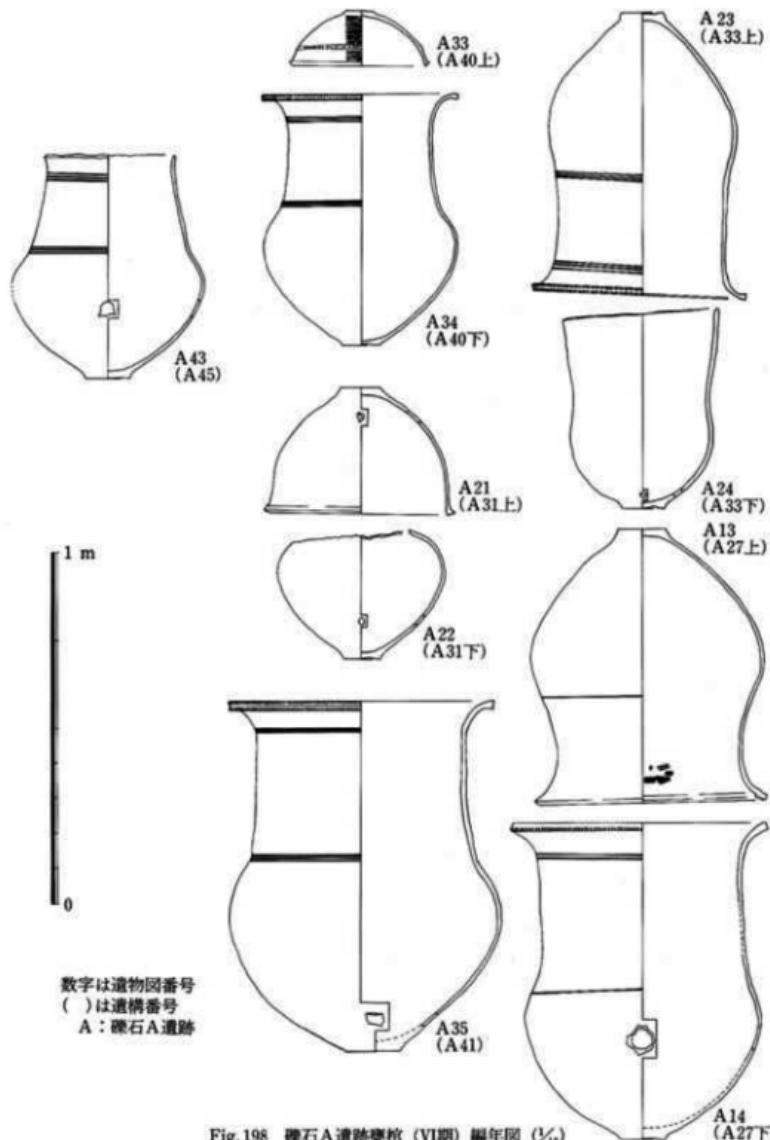


Fig. 198 碑石A遺跡要棺 (VI期) 編年図 (3/16)

るものとの口・頸・胴区分は明瞭である。その他、A13は胴部に沈線1条をもつ。A24のみ沈線をもたないが、胴部の曲線は壺の名残りを完全に失ってはいない。

これらの壺棺は壺を埋葬容器に用いる概念を踏襲する点において夜臼式的である。しかし壺棺自体は夜臼式の大型壺から直接的に発達したものとは考えられず、おそらく板付式の広口大型壺を母体として発達するものであろう。すなわち夜臼式系のIV期あるいはV期の大型壺は全体に大型化するとはいっても胴部の張りに比べて口径がしまる方向にあり、口頭部打ち欠きの必要を限界とする以上、成人棺としての発達の可能性をもたないからである。板付式との対応でいえば、最も古式を示すA43は伯玄社式に含められ、板付II式期にあたる。またA33とA21の蓋に用いられた鉢は断面三角形の突帯を廻らせ、前者は比較的小さな突帯に刻目を施していくぶん古式をとどめるが、後者の突帯は刻目を省きしかも太く、刻目突帯文土器の終末的様相を示しており、亀ノ甲式の新しい段階に相当する。

したがってこれら壺棺の時期は、一部でV期と並行する可能性は残るが、大勢としてはV期に後続し、未だ壺の形態を脱しきれない初期壺棺の一群としてVI期に一括し、板付II式期に並行するものと考える。基本的な見方としては、さらにその中で小型棺から大型棺への発達が想定されるが、その点について今のところは小児棺と成人棺の機能の別によるところが大きいとも考えられるので、あえて分けないでおく。

## 5 小型壺 (Fig. 199)

いづれの資料も個性がつよく、分類とその位置づけがなかなか困難である。ここではまずA～Fの6類に大別したのちさらにその中をa・b…等に細分し、丸山遺跡ほか他の資料を参考にしながらFig. 199のとおり、これまで述べてきたI期～V期に比定を試みた。その際、重要な指標となるのは礫石B遺跡のSA27およびSA30の壺棺に伴う小壺で、既に設定した壺棺の時期に従い必然的に供獻小壺の時期もそれに合わせる。また同じく礫石B遺跡のSA29およびSA33からそれぞれ複数出土した小壺等をもって、各類の同時性を確かめることができる。

これらの小型壺等は基本的に夜臼式の系統にあるもので、板付式の影響ないしは時間的並行関係を窺わせるものは含むが、少なくとも明確に板付I式といえる資料は見当たらない。全体の形式変化としては丸底から平底への流れ、口縁部の発達、胴頸接合部の変化、重弧文の出現などが一定の目安となるが、途中、板付式の影響が複雑な変化をもたらすようであり、先の大壺の編年をそのまま援用することは不可能である。

### 〈A類〉

頸部は直立気味に伸び、胴部は外につよく張って低く安定した觀を与える。Aa類Ab類とがある。

Aa類 1点のみ、B303は長頸広口で、口縁部は玉縁状、底部は厚い円板状の平底をつく

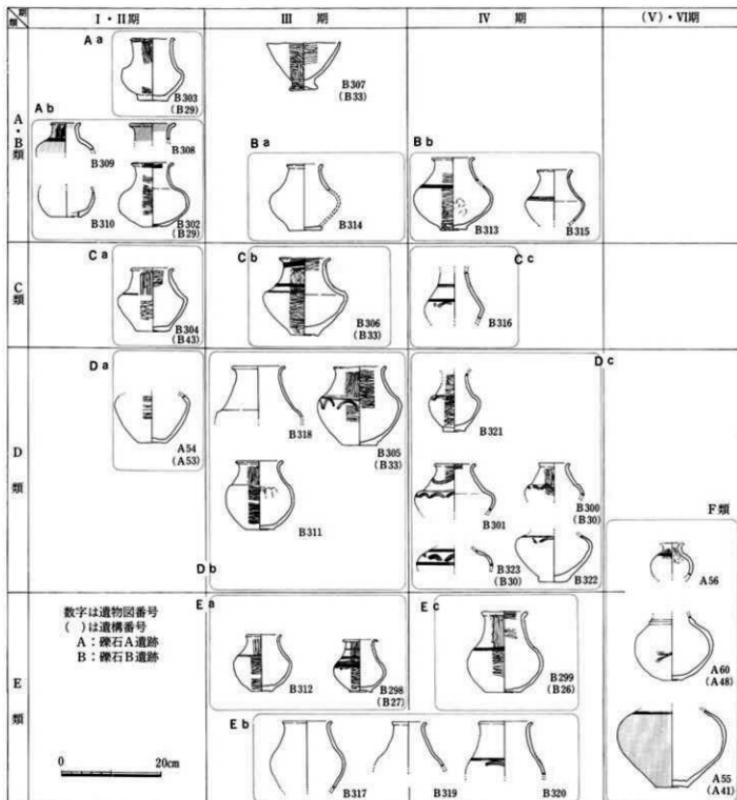


Fig. 199 磨石 A・B 遺跡出土供獻小器等編年図 (b)

る。他の小壺とは異質とも思える外観をもつ。

**A b類 B302・B308・B309**、それに胴部のみ残存するB310を含めておく。口縁部は短く外反するか、あるいはやや伸びて開く場合でも端部に玉縁の名残りをとどめ、底部は丸底気味の平底である。

このうちA a類のB303とA b類のB302は共に礫石B遺跡S A29支石墓の供獻品である。B303は夜臼式特有の古拙な形態をもつものであるが、他にみられる口縁部の特徴や直立気味の頸部、丸底の名残りをもつ底部の特徴は、様式的には大型壺のI期～II期に対比すべきものと考えてよいであろう。点数が少ないうえそれぞれ個性がつよく、相互の関係が不明なので、I期・II期の別は分けないで一括しておく。

#### 〈B類〉

頸部は胴部と一体してゆるやかな曲線を描きながらつよく内傾し、口縁部で外反する。胴部は低くつぶれ、中位やや上あるいは肩位がつよく張り、安定した平底をつくる。B a類とB b類とがある。

**B a類 B314**は口縁部は短く外反して端部をまるめ、底部は薄い。

**B b類 頸胸間を3条の沈線で区分する。B313**は厚い平底で、口縁部が水平にちかく短く外反するのに対し、B315は小型で口縁部がやや肥厚して大きく外反するといった違いがある。

このB類はA類から発達する形式であろう。時期は、B b類のB313にちかい類例が七ヶ瀬遺跡S D001溝から、後で述べるIV期のD e類と併出しておき、IV期に位置づける。B a類はこれに先行するものとしてIII期に比定しておきたい。

#### 〈C類〉

胴部は口頸高とほぼ同高で低く、頸部が胴部から「L」字形に折れて急に反転するように立ち上がり、口縁部で外反する。頸胸間の特徴は胴部の最大径位に直接頸部を接合する為である。3点あり、それぞれC a類・C b類・C c類とする。

**C a類 B304**は口縁部で短く開き、頸胸間に沈線1条を廻らす。C b類のB306は口縁部が大きく外反し、口頸間と頸部下位に2,3条の沈線をおいて口・頸・胸を区分しようとする意図が認められ、また底部が厚い。C c類のB316は他に比べると頸部の反転の度合がよわく、頸胸間と頸部上位に2,3条の沈線、胴部肩位に重弧文を描く。B304は礫石B遺跡S A43支石墓、B306は礫石B遺跡S A33支石墓から小型壺D c類のB305および鉢307と共に出土した供獻品である。

相互の関係および時期の比定はなかなか困難であるが、B304は五反田支石墓出土<sup>(13)</sup>の小型壺にちかく、夜臼式の特徴をつよく残すものとしあえてII期におきたい。少なくともIII期を降ることはないであろう。B306は板付I式の中にこれと親縁関係にある形態をみるところであり、板付I式のつよい影響を思わせる。口縁部および底部の発達からいえばIII期またはIV期に

あたることは間違いないが、共伴したB305を後述するようにIII期に比定するとすれば、あえてIV期に下げるまでもなく、特殊に板付式の影響のつよい土器としてIII期に位置づけておく。B316は装飾が加わり胴頸部の屈曲があくなる点に新しい要素を示す。III期に上る可能性を残しながら、IV期にあてておきたい。

#### 〈D類〉

胸部は肩が張り、頸部は胸部と明瞭な段あるいは稜をなして立ち上がり、口縁部でそのまま外反する。D a類・D b類・D c類・D d類に分ける。

D a類 A54をあげておく。胸部は直線的に立ち上がって肩が張り、底部が胸部と一緒に薄くつくる点に特徴がある。頸部は不明であるが、胸部と稜をなして比較的急に立ち上がると思われる。疎石A遺跡S P53土壤墓から出土した。

D b類 胸部は肩が張りながらもふくらとした丸味をもち、胴頸接合部にやや不明瞭な稜をつけて頸部が立ち上がる。3点あげたうち、B305は頸間に沈線をおいて胸肩位を重弧文で飾り、口縁部が外反したままおわるのに対し、B318はさらに口縁端部を玉縁状にまるめる違いがある。またB311は胸部が球状にちかくやや異質であるが、頸部の特徴等からここに含めておく。B305は疎石B遺跡S A33支石墓から小型壺C b類のB306と鉢B307を伴って出土した。

D c類 とくに胸部肩がつよく張る点に特徴がある。5点あげたうち、B321のみ胸高が比較的高く胸部がやや急に立ち上がって特異であるが、他は胸部が低くつぶれて厚い平底をもち、頸部は直線的に内傾して伸びたあとつよく外反して口縁部をつくるようである。頸胸間には接合の段をそのまま残すか、あるいは2、3条の沈線を廻らせて稜を明瞭にする。いずれも胸部肩位に重弧文を飾る点で齊一性がつよい。このうちB300とB323は疎石B遺跡S A30支石墓のIV期の壺棺に伴って出土した供獻品である。

各時期については、D c類が壺棺との共伴関係からIV期におかれ。七ヶ瀬遺跡でも小型壺B b類と共に、疎石遺跡でいうIV期にあたる時期の壺棺に並行すると考えられるものである。D b類は胸部から頸部にかけて全体にふくらとした形態を示し、D c類に先行するものとしてIII期にあてておきたい。D a類は丸山遺跡や黒土原遺跡に類例があり、丸山遺跡の編年でIII a期の小型壺D<sub>3</sub>類としたタイプに該当する。とくに不安定な平底の特徴ともあわせ、ここではII期に対比させておくのが適当であろう。

#### 〈E類〉

胸部は肩が殆ど張らずにふくらみ、頸部は胸部と不明瞭な稜をなして立ち上がり、口縁部で外反する。E a類・E b類・E c類に分ける。

E a類 胸部が丸味をもち、E a類に比べて低い。B312は頸胸間に沈線をおき、底部は厚い。胸部は外観上丸味をもつが、断面でみると「く」字形に接合したC類にちかいものであることがわかる。またB298は頸胸間から胸肩位に3条の沈線と重弧文、さらに頸部にも1条+2

条の沈線を装飾的に配し、口縁部が水平に短く折れるなど、一見、一群の小壺の中でも新しい様相を示すかのようである。ところが実際は、B298は砾石B遺跡S A27支石墓の典型的なIII期の壺棺に伴う供献品である。古式の要素としては、底部が高台状の平底をなすのは丸底の周縁に粘土帯を貼り付けてナデた為であり、また、口縁部も薄くめぐれたように仕上げたもので、大きく外反するタイプとは違う。

E b類 B299は胴部が丸味を保ちながら低くつぶれ、頭部は沈線2条をおいてやや急に長く立ち上がり、口縁部は屈曲気味に外反する。底部は薄い。砾石B遺跡S A26支石墓出土の供献品である。

これらの時期については、E b類のB298が壺棺との共伴関係からIII期におかれるとして、E a類もE b類およびD b類の時期に対比しうるものであろう。E c類の場合、B299に類似若干頸の短いタイプの小型壺が大門西遺跡S K16土壤でV期の壺と共伴しており、週ってもIV期と考える。

E c類 胴部が高く、肩はかすかに張る程度で、口縁部は短く外反する。B320のみ胸肩間に沈線2条で区分し、胸肩位に重弧文を描く。

#### 〈その他〉

最後に、仮にF類として一括するが、砾石A遺跡出土でVI期の壺棺の時期を中心とするとみられる壺3点をあげておく。A56は球状胴部にS字状の小さな口頭部が付き、胸肩間に沈線2条、胸肩位に羽状文を配す。前期末～中期初にみられる小型壺である。A60はS P48石蓋土壤基の供献品で、胴部は扁円形にちかく小さな平底をもち、胸肩間に突帯を廻らせ、頭部は細くしまって立つ。A55はS J41壺棺に伴って出土した。大型の壺で、胴部は最大径位が高く、頭部は胴部と不明瞭な稜をのこしながら沈線2条をおいてつよく内傾する。

小壺類について全体的な傾向をいえば、III期以降、夜白式系のとくにB類と、板付I式の影響を受けたD類の2つの流れがあるようと思われる。E類はその中間的な存在といえよう。文様はI期・II期の夜白式にみられる沈線に加え、III期に重弧文が出現する。また、個々の資料については問題あるが、口頭部の発達と底部の平底化は小壺類においても一般的傾向として認められ、とくにIII期以降、それが顕著である。

## 6 結語

以上、支石墓系埋葬に用いられた大型壺と、それに伴う壺および小型壺類、さらには壺棺およびその他竪穴出土土器等をもって、全体をI期～VI期に分けて説明してきた。最後に、これら各時期が他の遺跡あるいは従来の編年観との対比でどのように位置づけられるか、試案として述べておく。

全体にI期～VI期は連続する時間の中で、それぞれ土器の様相に現われた分期である。基盤

として縄文晩期以来の伝統が根づよく、壺棺を別にすれば、各時期を通じて夜臼式系の土器群が主流的な位置を占める。ここでの編年は大型壺を中心にまず時期を設定し、それとの共伴関係を手掛かりに他の器種についても時期比定を行ったもので、壺・小型壺等についてはそれぞれの中での形式変化をかならずしも十分おさえたとはいえないが、基本的にはとりあげた全ての器種にわたって共通するⅠ期～Ⅳ期の区分が可能であると考えている。

まず問題となるのが板付式土器との関係である。従来、板付式土器の出現は弥生文化の成立を告げる重要な指標とされ、各地域にそれがいつ、どのように伝播するかが常に注視されてきた。しかしづく各地域で弥生前期の調査が進むにつれ、板付式土器は九州では玄界灘沿岸部に限定される、いわば一地域で特殊に発達した土器様式であって、むしろ九州の広範な地域には縄文晩期土器を母体に発展した夜臼式系土器が前期を通して主体的な展開をみせる様相が次第に明らかになりつつある。そもそも板付式土器の編年自体、佐賀平野の方からはるか福岡平野を眺めやると、未だかすみの中にⅠ式もⅡ式も混然とした状況にあるようである。

佐賀平野においても板付式土器はあくまで客体であって、前期土器の主体となるのは縄文晩期の系譜を負う夜臼式系土器である。つまり、極端な言い方をすれば、一元的に夜臼式系である。したがって福岡平野や唐津平野でしばしば問題となる夜臼式単純期の設定は、佐賀平野ではとくに重要な問題とはならない。問題となるのは、板付式とどのような時間的並行関係あるいは影響関係にあるか、という点についてである。ただし板付式の「影響」が認められるという場合でも、第一義的には両様式土器に時間的並行関係と、その背後の人的・物的交流を裏づけるにすぎず、板付式の「影響」がすなわち佐賀平野における弥生文化の発生に重大な変革を促したかのごとき考え方には排されるべきである。この点は板付式系土器の画一的な波及・分布に対する再検討の必要を説いた藤尾慎一郎氏にても、如意形口縁甕が出現する氏のいう佐賀平野Ⅲ期（礫石遺跡Ⅴ期）をもって佐賀平野における弥生文化の伝播期と述べているような、なかなか容認できない解釈がしばしばみられるところである。

さて、礫石遺跡Ⅰ期～Ⅳ期の中で、板付式土器が明瞭な形で共存あるいはつよい影響をみせるのはⅤ期の段階になってである。壺はやや不明ながら、とくに壺において如意形口縁や刻目突帯文系との折衷形式が現れ、高坏・鉢・蓋などにも板付式の新たな器形、器種を加える。その時期は、既にふれたように、一部板付Ⅰ式にあたるものも含むが、総じて板付Ⅱ式の古い段階に並行するといえよう。

それ以前については今のところ明瞭に板付式といえるものはない。しかしながら、Ⅲ期・Ⅳ期の中には板付Ⅰ式と親縁関係あるいは板付Ⅰ式の影響をみのがせない資料が含まれることは確かで、例えばⅣ期の支石墓壺棺の蓋壺にみられた如意形にちかい口縁の特徴や、Ⅲ期・Ⅳ期の小壺類の形態および文様等に現れた板付Ⅰ式との親縁性は、このⅢ期・Ⅳ期が板付Ⅰ式期に並行することを推定せしめる。丸山遺跡でも報告の中で、丸山遺跡Ⅲb期の小型壺に板付Ⅰ式

の影響が看取されるとしており、時間的並行関係が推測できる。

I期・II期については、板付式とどのような関係にあるか微妙である。とくに問題になるのは甕B類で、そのうちI期のBb類の場合、わずかに外反する口縁部の特徴を板付式の範疇に含めるとすれば、I期の段階で既に板付I式甕が成立していたことになるが、それとは別に、これを板付I式甕の祖型にあたるものとみることもできる。曲田遺跡ではこれを、夜臼式をさらに遡とした曲田(新)式におき、板付I式甕の祖型としている<sup>(14)</sup>。また板付遺跡編年でも甕形土器II類と呼ぶタイプのうち、口縁部がかすかに外反傾向を示す甕で板付式成立以前の夜臼単期におくものがあり、やはり刻目突帯文系甕の中に板付I式甕の出自を求めるようである<sup>(15)</sup>。また口縁部がそのまま直立する甕Bb類の原型は刻目突帯文系甕の最古期の段階からあって、板付式期にひき繼がれるものである。板付遺跡編年との対比でいうとII期としたA27は擬似ハケ目を施し板付遺跡編年夜臼IIb式(板付I式並行)にあたる可能性もあるが、未だ条痕を一部に残す点でその夜臼IIa式(夜臼単期)に対比させてもさしつかえないであろう。したがって礫石遺跡I期・II期は、そのうちII期が板付I式古段階に対置できる可能性を残すが、甕A類も含め総体的にみて、玄界灘沿岸部でまだ板付I式が成立していない時期にあたるものとしておく。当然、甕Ba類は板付I式甕の祖形ということになる。

なお、ここでI期の土器群は突帯文系土器の中でいえば、むろんその最古期のものではない。礫石A・B遺跡の支石墓系埋葬に直接関係する土器は確かにI期から始まるが、それ以前の土器は山ノ寺式期に遡って両遺跡でも破片資料の中にみられるところである。丸山遺跡でいえばそのI期～IIa期にあたる段階、すなわち甕は直口短頸傾向、甕は口縁突帯位置が下がって太い刻目をもつなどの特徴ある土器群が、礫石遺跡I期の直前にくると考えている。

V期・VI期は、とりあげた資料がそれまで支石墓関係土器と帰属遭構の性格が違うので一連に扱うにはやや危険はあるが、ほぼ板付II式期に並行すると考える。既にふれたように、V期は礫石遺跡で板付式土器が明瞭に夜臼式系土器の中に混在する段階で、板付I式に一部並行する可能性もあるが、ほぼ板付II式の古段階に対置させる。またVI期の甕棺の時期にあたる生活用土器としては甕の口縁部突帯断面が太い三角形となる、藤尾氏のいう亀ノ甲(新)式期の段階を想定しており、久池井C遺跡に近接する春日遺跡の報告でいずれ補足するつもりである。

これまで佐賀平野の繩文晩期～弥生前期土器編年は丸山遺跡で東中川忠美氏<sup>(16)</sup>が、その後、藤尾慎一郎氏<sup>(17)</sup>が筑後平野と合わせて試みている。両氏の編年と比較するのは、分類の観点の相違、あるいは器種ごとの細部の見方の相違からいえばなおさら一概にはいえないが、あえて対照されればおよそ次のとおりとなろう。

礫石遺跡	-----  I   II   III   IV   V   VI   -----
丸山遺跡	I   II b - II c - III a   III b   IV   -----
藤尾編年	I     II     III - IV - V   -----

すなわち、礫石A・B遺跡の支石墓の時期I期～IV期でいえば、丸山遺跡編年のIIb期～IV期の一部がこれにあたり、藤尾編年のII期を4分期したことになる。

最後に、このI期～VI期を時代区分の中に位置づけようとした場合、縄文晩期と弥生前期をどこで分けるか、といった困難な問題に若干立ち入らざるをえない。

そもそも夜臼式土器は本来、玄界灘沿岸部を中心に板付I式土器に伴う縄文系土器として設定されたが、今日、夜臼式単純期の存在がいわれたことにより、その位置づけは未だに揺れ動いている現状にある。弥生文化の主要な構成要員である稻作をはじめ紡織・金属器・大陸系磨製石器等は既に先進地域ではいわゆる夜臼単純期に一定の生活体系を成していた観があり、そこから、前期の板付I式期を通じて弥生時代早期を設定する考え方も提起されている<sup>(14)</sup>。極端には刻目突蒂文土器の出現そのものを弥生時代開始の画期とする考え方もある<sup>(15)</sup>。

たしかに弥生時代の開始をいつに置くかといった問題は弥生文化の内質的観点から見直す必要はある。生活および社会構造全般に関わる大きな変革がどの段階で大勢となるかという評価によっては将来、例えば夜臼式単純期を含めて弥生前期とすることもありうると考えている。しかしながら今のところこの問題はなお整理・検討すべき点が多くあるので将来の課題として残し、ここでは板付式土器の成立をもって弥生時代の開始とする学史的な観点から、I期・II期を未だ縄文晩期末に含められるものとし、さらにIII期・IV期を弥生前期前半、V期を前期中頃、VI期を前期後半に位置づけておきたい。

## 註

1. 東中川忠美他「久保泉丸山遺跡」佐賀県教育委員会1986
2. 福田義彦「黒土原遺跡」佐賀市教育委員会1986
3. 森田孝志他「大門西遺跡」(『大門西遺跡』) 佐賀県教育委員会1980
4. 高島忠平「三日月町佐織の夜臼式土器」(『新郷土』319号) 1975
5. 八尋実「四本黒木遺跡」神埼町教育委員会1980
6. 高瀬哲郎「香田遺跡」(『香田遺跡』) 佐賀県教育委員会1981
7. 天本洋一「町南遺跡」佐賀県教育委員会1983
8. 七田忠昭「一本谷遺跡」上峰村教育委員会1983
9. 藤瀬寅博「村田・三本松遺跡」鳥栖市教育委員会1983
10. 藤尾慎一郎「弥生時代前期の刻目突蒂文系土器—亀ノ甲タイプの再検討」(『九州考古学』第59号) 1984
11. 次の二、三を参考とした。  
西健一郎「下江津湖底遺跡出土刻目突蒂文土器の検討(一)・(二)」(『九州文化史研究所紀要』第28号・第3号) 1983, 1985  
山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』) 1982ほか
12. 註1に同じ 東中川忠美「宝満谷遺跡」北茂安町教育委員会1980
13. 松尾楳作「北九州支石墓の研究」1957
14. 橋口達也「曲田遺跡III」福岡県教育委員会1985
15. 小林達雄「縄文文化の終焉」(『日本史の黎明』八幡一郎先生頌寿記念考古学論集) 1985

### 3. 磯石遺跡における弥生前期墓地の形成と支石墓の特徴

磯石A遺跡V区および磯石B遺跡で検出された、縄文晩期末に始まり弥生前期を中心とする時期の埋葬遺構について、前項の土器編年を基にその形成過程を述べ、特徴を検討する。なお、B遺跡の遺構は基本的に支石墓の範疇に入るものとして扱い、A遺跡のそれについては削平により上部構造は殆ど不明であるため壺棺墓、土壙墓等としておくが、もともと支石墓系統の遺構であったと考え、B遺跡と同等に扱うべきものと考える。

#### (1) 磯石A・B遺跡の墓地形成過程

まず遺跡ごとに各時期の遺構数並びに分布傾向をみる。

A遺跡の場合はTab. 33およびFig. 200に示したとおりである。周囲の確認調査および地形等から判断し、今回検出した遺構をもって、一応完結した姿にちかい一群の墓地と考えている。全体の分布は東側の小児墓域の中にVI期の壺棺6基と成人を葬るに足る石蓋土壙墓2基が存在し、一方、西側の成人墓域の中にも壺棺墓1基が含まれているが、基本的には以下述べるよう、成人と小児は墓域を別にして葬られているとみられる。時期については、壺棺墓・壺棺墓は編年に依るが、西側成人墓域の土壙墓は副葬土器が知られないため、詳細な時期は不明である。

埋葬頭位はI期～III期では成人墓・小児墓とも基本的に東西方向で、とくに西頭位が卓越する(Fig. 201)。壺棺墓等VI期の遺構は基本的に南北頭位である。なお埋置角度は、次のB遺跡についてもいえることであるが、I期～IV期の壺棺の場合20°～30°が一般的である。これは大多数の墓壙底が平坦につくられ、壺棺は胸部を直接壙底に当てる横たわることから必然的に生じる角度であって、とくに意味は感じられない。ただしVI期の壺棺の場合、小児棺は50°前後、大型の成人棺になると12°前後で水平にちかくなる。

小児墓域でみると、I期には壺棺4基が南北に並んで営まれる。1基だけS P46石蓋土壙墓もこの時期の可能性がつよい。II期ではこの小児墓域の南側に偏って壺棺4基が存在し、S J 59もこの時期と推定する。さらにIII期になるとそれが西側に拡がる傾向をみせ、壺棺2基のうちS J 36は成人墓域と重複するようになる。また、S T49古墳の周溝埋土中から出土した壺棺4点分もII・III期に属するものであって、周溝はこの南側にあったII・III期の壺棺墓群を切って掘られたと考えられる。したがって、小児墓域におけるこれら壺棺等は、全体の傾向として北から南へ、さらには西へ墓域を拡げていったことがわかる。S J 36が成人墓域に混入するのはここでの壺棺墓の最後にあたるIII期であって、少なくともI・II期の成人墓域・小児墓域の区分は明確である。

しかし、IV期に相当する壺棺はこの砾石A遺跡では遺構不明の破片も含め、見つかっていない。先の土器の編年からいえばV期についても空白である。

VII期になると小児墓域の中に甕棺6基が出現する。その際SJ45甕棺墓はI期のSJ44甕棺墓を一部切って造られており、この段階では既右の埋葬に対する配慮は既に希薄なようである。SP48石蓋土壤墓もI期の甕棺2基を一部毀し、しかも南北頭位であり、供獻土器からは同じくVII期に属す。この時期には、もはや成人小児の墓域区分はない。

一方、成人墓域ではSP38・SP51~56土壤墓7基は方位を東西に合わせており、I期~III期のうちに営まれたものと推定する。しかしSP57土壤墓のみは南北頭位で、しかも先の7基の一群とはやや離れており、おそらくVII期に入るものではないかと考える。ただし全体としてみるとI期~III期に関するかぎり、小児墓域が拡大傾向を示すのに対し、成人墓域は比較的まとまっている。

こうしてみるとA遺跡では時期のわかる甕棺に限っていえば、I期~III期までの間は契機的に埋葬が認められるが、IV期までは継続しないことが明らかになった。このことは成人用土壤墓についても推定されることで、仮に成人墓が小児墓と併行して営まれたものであるとすれば、墓地全体としてみてもIV期の埋葬は欠落することになる。そしてVII期には甕棺墓等、別様式の埋葬に変わっている。次に述べるB遺跡ではIV期におよび造墓が確かに続いているところからみて、A遺跡でIII期からただちにVII期の甕棺墓等に変わるということは考えられない。はじめにも述べたように今日検出した遺構群をもって完結した姿にちかい一群の墓地とみれば、おそらく、A遺跡におけるIV埋葬の欠落は、実際、一時は墓地の移動あるいは「集団」そのものの系譜が異なる等、何らかの理由による空白期間とみてよいであろう。VII期に再び営まれた甕棺等

Tab. 33 砾石A遺跡IV区の埋葬遺構時期区分

構造	甕棺墓・甕棺墓	土壤墓・石蓋土壤墓	備考
I期	甕棺墓 SJ34・SJ42・SJ43 SJ44	土壤墓 SP53 土壤墓 SP37・SP38	
II期	甕棺墓 SJ28・SJ30・SJ32 SJ35・SJ58	SP46・SP51 SP52・SP54 SP55・SP56	その他 ST49古墳周溝により 破壊された甕棺あり
III期	甕棺墓 SJ29・SJ36		
IV期 V			該当なし
VII期	甕棺墓 SJ27・SJ31・SJ33 SJ40・SJ41・SJ44	土壤墓 SP57 石蓋土壤墓 SC48	

の埋葬がⅠ期の壺棺を破壊して小児墓域と重複しているのも、この間の断絶によるものとみるのが適当である。

なお、B遺跡等との比較で「集団」の規模がいずれ問題になるが、A遺跡のⅠ期～Ⅲ期までの遺構についてみれば、成人墓と小児墓との比率は9：11で小児墓が55%とやや多い。また各時期ごとに、ST49古墳周溝で破壊された壺棺も含め、小児墓が1期当たり平均で3～4基、成人墓では3基前後と推定する。

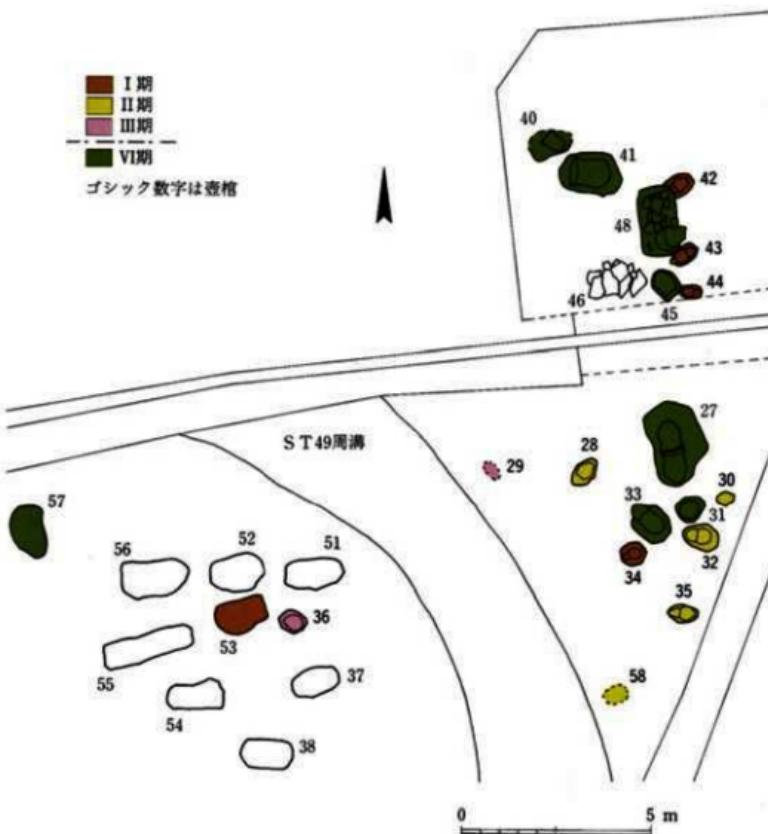


Fig. 200 蒜石A遺跡IV区墓地の形成過程

次にB遺跡についてみると、各時期の遺構数および分布傾向は、Tab. 34およびFig. 201に示したとおりである。

B遺跡でST04古墳下から検出した遺構は23基、他に盛土中から出土した壺棺の破片4個体分を加えると27基となる。破片はSJ24支石墓等の破壊が著しいものとはいずれも時期の違う別個体であるから、27基がそのまま実態にちかい埋葬数とみてよい。墓域についても、A遺跡よりは一層明瞭に完結した墓地の姿をとどめている。埋葬頭位は成人墓・小児墓とも基本的に東西方向である(Fig. 202)。

成人墓と小児墓はここでも基本的に墓域を分けており、すなわち土壙を内部構造とする成人墓は北側に、壺棺を内部構造とする小児墓は南側にそれぞれ偏って分布する。ただし西側では両墓域が一部重複する。またSA43支石墓は完全に小児墓域の中にあるが、実は下部土壙の容量が他の成人墓より一回り小さい。壺棺が小児用といつても実際は幼児用であるのに対し、SA43はある程度長じた小児を葬った可能性も考えられ、その場合は一定の墓域区分とさほど矛盾しない。ただしここでは下部構造の違いから、一応成人墓に含めておく。全体にA遺跡に比べると、両墓域はかなり近接した関係にある。

時期については、小児用壺棺墓は先の編年による。成人墓は小児用壺棺墓と並行して営まれたと考えてさしつかえないであろうが、そのうち4基は副葬小壺等の出土によって時期が推定できる。

時期のわかる壺棺墓を中心にみていくと、まず、I期では墓域の南端に2基が残存するが、II期の壺棺小児墓については遺構そのものは検出していない。ただしST04古墳盛土中からはI期でさらに2個体分、II期でも2個体分の壺棺破片が出土しており、II期に相当する壺棺小

Tab. 34 磨石B遺跡の支石墓時期区分

下部構造		壺 棺		石 蓋 土 墓		備 考
上部構造	残 存	不 明	残 存	不 明		
I期	SA23	SA22				その他ST04古墳 石室により破壊さ れた壺棺あり
			SA29			
II期			SA43		SA34	その他ST04古墳 石室により破壊さ れた壺棺あり
				SA31	SA44	
III期	SA27・SA35 SA36・SA37	SA24・SA38 SA42			SA45	その他ST04古墳 石室により破壊さ れた壺棺あり
	SA25・SA30	SA39・SA40 SA41	SA26	SA32		

児墓が存在したことは確実である。おそらく、これらの壺棺の破片はST04古墳石室の構築によって破壊されたものであろう。したがって、I期の壺棺小児墓はST04古墳石室の位置にまで一部拡がり、II期にはI期のさらに北側へ拡がる傾向をもちながら、石室墓壙の範囲内に造られていたものと推定する。一方、成人墓ではSA29・SA43が、副葬土器からI期～II期に置かれる。

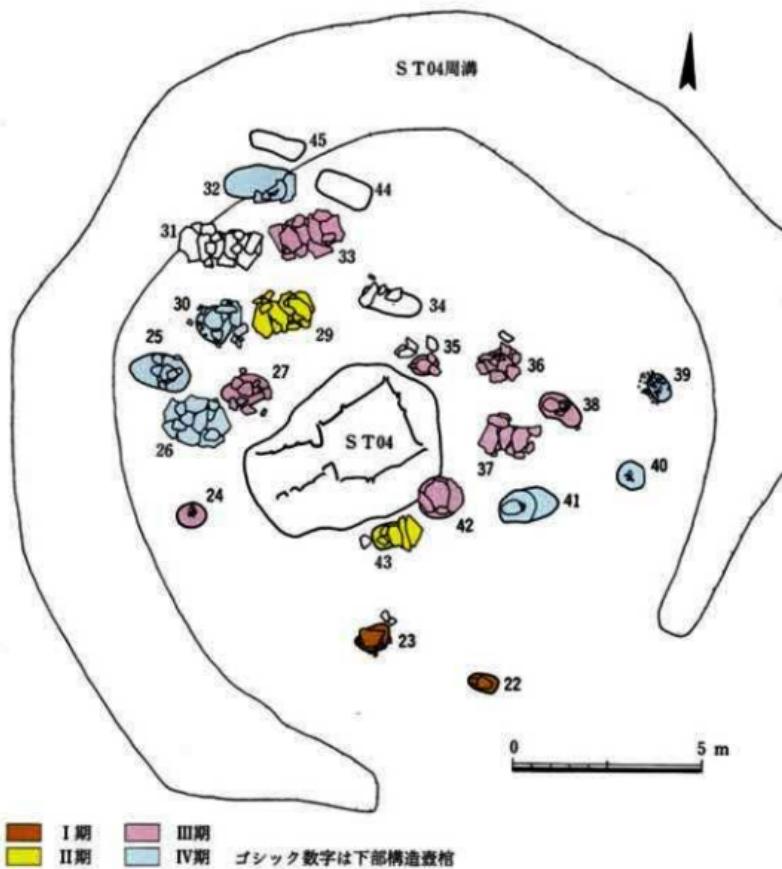


Fig. 201 諸石B遺跡支石墓群の形成過程

III期になると小児墓域はII期の東西両外側に拡がるらしく、ST04は古墳石室の位置を挟んで東側に2基、西側に5基が在る。成人墓ではSA33が、副葬土器からこの時期に相当する。そしてIV期になると、小児墓域はさらにIII期の東西外側に拡大し、東側に2基、西側に3基が造られる。成人墓ではSA26・SA32の2基が、やはり副葬土器から、この時期に推定する。

以上をまとめると、B遺跡では小児墓域はI期の南端からII期にはややその北に拡がり、さらにIII期、IV期には暫次、II期の東西両外側に拡大していった過程が窺われる。一方成人墓は、A遺跡でもそうであったように、小児墓域の拡大化傾向に比べると、なぜかまとまりがつよく密集して造られており、資料的制約もあるが、とくに形成過程は問題にならない。両墓域が重複するのはIII期・IV期であって、A遺跡同様、少なくとも墓地形式の初期の段階では、成人墓域と小児墓域は厳然と分かれていたことになる。また南端に始まる小児墓域の形成がIII期以降は東西両外側に方向を変えるのは、あまりに北側の成人墓域と近接していたための必然的な結

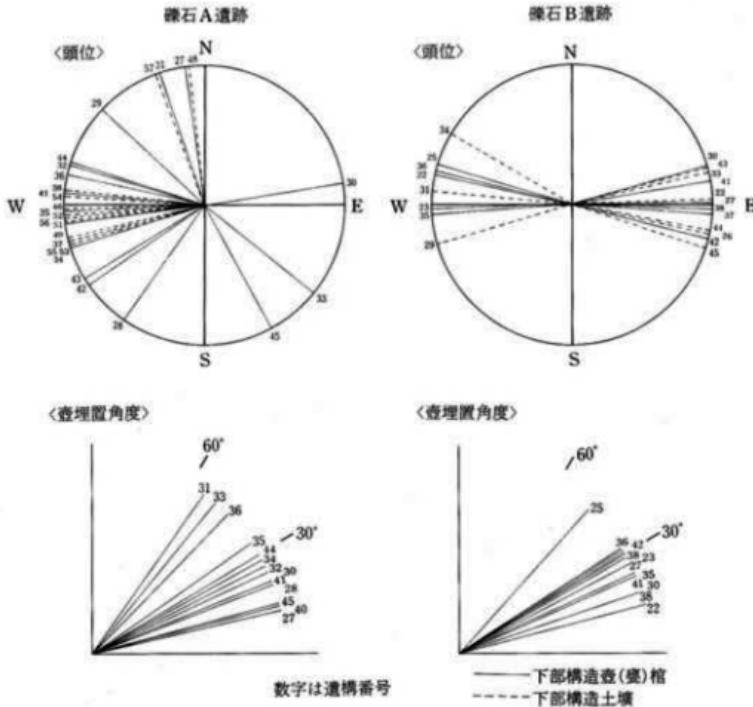


Fig. 202 I期～IV期埋葬遺構の頭位および壙棺埋置角度

果であったと解したい。当然、既存の埋葬の地上標識は確認できたであろう。

成人墓と小児墓との遺構の比率は、S A43を成人墓に含め、14:9となり、小児墓が60%であるから、礫石A遺跡の小児墓比率55%にはほぼ等しい。時期別には、帰属遺構不明の破片も含めると、小児墓の場合、I期4基、II期1基、III期7基、IV期5基とバラつきは大きいが、平均すれば1期当たり4~5基、成人墓の場合には残存する遺構で平均2基余である。

これまでA遺跡とB遺跡における前期墓地の形成について別々に述べてきた。両遺跡の墓地形成は一見類似し、実際、共通する要素は少なくない。しかし時期別等つぶさに検討すると、若干の違いが存在することも明らかになった。とくにI期~IV期を中心両者を比較してまとめる次のとおりである。

- 1 A・B遺跡とも一定面積の200m<sup>2</sup>前後の墓域をもち、さらにその中で土壤を下部構造とする成人墓群と主に壇棺を下部構造とする小児墓群が基本的に墓域を別にする。ただし範囲を制約される為か、III期になると一部成人の小児墓域が重複するようになる。
- 2 墓地形成期間はA遺跡ではI期~III期まで一度断絶があり、VI期になって再び壇棺墓等別様式の埋葬が営まれるのに対し、B遺跡ではI期~IV期まで継続し、そのまま終わっている。
- 3 A遺跡のI期~III期、B遺跡のI期~IV期の間は、各埋葬は互いに切り合うことなく営まれており、A遺跡のVI期は別として、地上標識の存在と、それぞれの被葬「集団」の一系性を感じさせる。
- 4 A・B遺跡とも成人墓は時期に関係なく比較的まとまった墓域をつくるのに対し、小児墓は時期を追って墓域を拡大する傾向がつよい。
- 5 A・B遺跡とも小児墓が成人墓よりやや多く55~60%で比較的類似する。また各時期別には、B遺跡の方がA遺跡より成人墓、小児墓とも若干多いが、両遺跡を統じていえば、1期当たり成人2~3人、小児3~5人程度である。

このような様相を同時期の他の遺跡と比べようとしても、全容が明らかでなかったり、あるいは成人墓・小児墓の区別が明らかでないなど、今ただちに比較しうる遺跡は殆どない。丸山遺跡<sup>(1)</sup>だけがこれまで全容の明らかになった殆ど唯一の支石墓群である。ところが丸山遺跡の場合、わずか2,000m<sup>2</sup>余の範囲に総数118基の支石墓がつくられている(Fig. 203)。形成開始は礫石A・B遺跡より早く、終止時期はあまりかわらない頃とみられる。比較のため、報告者のいう7期を、仮に礫石I~IV期とそれに先行する時期と合わせた5期に置きかえて単純に割った場合、1期当たり約24基となり相当多く、礫石A・B遺跡が小児墓・成人墓合わせて1期当たり5~8人であるから、その3~5倍の規模となる。礫石A・B遺跡のそれぞれが血縁的紐帯の極めてつよい、おそらく最小単位の家族墓として考えれば、丸山遺跡はその複合体にあた



Fig. 203 久保泉丸山遺跡支石墓群（『久保泉丸山遺跡』より）

る親族集団、いわゆる世帯共同体規模にあたるものと考えたい<sup>(2)</sup>。

もちろん、これを地縁的関係からなるいわゆる共同墓地とする考え方もあるが、一般に、前期では未だ共同墓地の成立を明証する例がなく、慎重を期すべきであろう。ただし群として分化することをもってただちに地縁的関係の集団を想定するのは慎むべきである。報告者はこれら118基の分布を近接する5グループに分け、造営当初から少なくとも3グループが存在していたことを想定している。なお、丸山遺跡では壺棺を下部構造とするものが6基しかなく、当然、下部構造を土壙とするものの中に小児墓が含まれているであろうが、実態は明分し難いという。また墓域区分も、小児墓として明らかかな6基が各グループの比較的周縁に造られているとしかわからない。ただ言えることは、丸山遺跡では小児といえども伝統的に土壙を内部構造として葬られており、礫石A・B遺跡とは小児の埋葬方法に大きな違いがあるということである。また、丸山遺跡では成人と小児の墓域区分はあまり明瞭でない。

その他、丸山遺跡以外で比較参考になるのが黒土原遺跡<sup>(3)</sup>である。この遺跡は丸山遺跡に近く、その西方約1km、礫石A・B遺跡からは約1.5km離れた、丘陵端の低台地上にある。墓域の全容が調査されたわけではないが、支石墓系の埋葬がA地区で2基、B地区で13基検出されている。B地区的場合、実際の墓域はもう少し周間に拡がるであろうが、群としての規模は礫石

A・B遺跡と同等あるいはやや小さい程度でよく似ている。埋葬の構造は削平により上部構造を欠いて不明ながらも下部構造は成人墓が一部石蓋を残す土壇、小児墓が壺棺と分かれ、この点でも疎石A・B遺跡と同じ。時期は疎石III・IV期にあたる。したがって造営期間の短さを考慮すると、単位「集団」の規模は疎石A・B遺跡と似たようなものであろう。ただし、ここでは成人と小児の墓域は分かれていないのである。

## (2) 支石墓の特徴

疎石B遺跡の前期埋葬には、支石墓の最主要な特色の上石を完存するものが1例も無い。しかし、壺棺あるいは石蓋土壇等の下部構造以外に、地上標識の一部にあたる支石が数基で認められ、丸山遺跡の例に比較して、これらは少なくとも支石墓系統の埋葬であり、支石墓に含めて扱うことは許されよう。A遺跡の場合も、I期～III期の埋葬を壺棺墓あるいは土壇墓等と分けて呼んだが、実際はB遺跡同様、支石墓の下部構造の違いと考える。ただB遺跡以上に上部構造の削平が著しい為、一見、支石墓とは全く別様の印象を与えるだけのことである。したがって、ここではA遺跡のI期～III期、B遺跡のI期～IV期の埋葬を基本的に支石墓として扱え、構造、系譜について検討する。

上部構造と下部構造の特徴および組合せの概略はTab. 34に示したとおりである。

A遺跡の場合、まず小児用壺棺墓はいずれも上部構造が不明であり、また、墓壇内で壺棺を支える為の配石等の施設は無い。壺棺はほとんどが口頭部を打ち欠いた壺を本体とし、生活に実用されたことを示すススの付いた壺を蓋に被せる。そのうちS J 43のみが、壺棺底部も打ち欠き壺で塞いでいる。容量の点からいえば、これら壺を使用する埋葬は小児墓といつても、実

際は1、2歳以下の乳幼児であって、それはB遺跡でもかわらないであろう。

成人墓も全て上部構造は不明であるが、掘形はいずれも基本的に長方形もしくは隅丸長方形でS P 46のみ土壇上面に石蓋6枚をもつ。ただし石蓋とはいっても、土壇の両側端に架すように置かれたものではなく、むしろ土壇の上面を覆った状態にちかく、B遺跡の支石蓋の多くと共に通する。それ故、このS P 46石蓋土壇墓の形態が、A遺跡における成人墓の本来の下部構造であって、他の土壇墓は石蓋を含め下部構造の上位がかなり削平され

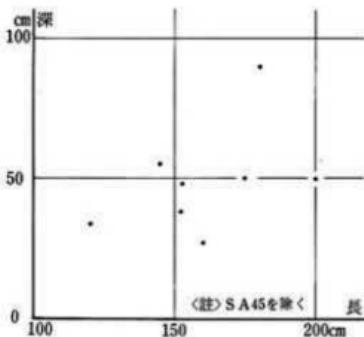


Fig. 204 疎石B遺跡支石墓（成人土壇）法量図

てしまった姿と考える。実際 S C 46が深さ65cmであるのに対し、他の土壙墓はせいぜい深さ40cm程度しか残っていない。

また、成人墓では土壙内に配石をもつものがあり、VI期のS P 57を除く10基のうち、半数の4基に何らかの形でそれが認められる。内訳は壙底に敷石を置くもの3基、側壁際に立石を置くもの2基である。ただし個々の配石は様々で敷石の場合、S P 46のみ四方に4個であるが、S P 55では1隅を欠く3個、S P 53では片方の小口寄りに1個、また立石の場合はS P 52で両小口に各1個ずつ平石を立てている。実はこれらの配石はB遺跡の成人墓にはみられず、A遺跡独自のものである。

次にB遺跡の場合、A遺跡に比べると、遺構の残存はやや良好である。

まず、小児墓は基本的にA遺跡同様、壺を本体とし、生活用土器を転用したススの付いた壺に蓋に用いているが、例外的にS A 22は壺本体の底部を打ち欠いて別の壺底部で塞ぎ、またIV期のS A 25・S A 30に限っては鉢または壺胴部下半を蓋に被せている。

上部構造は上石は全く残存しないが、支石は14基中の7基（S A 25・S A 27・S A 30・S A 35・S A 36・S A 37・S A 38）に部分的にもせよ残存しており、S A 36支石墓が典型であるよう、もともと墓壙上縁に円礎を並べて支石としていたものであろう。下部構造はS A 37が支石と組合わせて石蓋をもつほか、S A 42が石蓋のみ残す。実はこのS A 37・S A 42の2基はIII期に属するものであるから、壺棺小児墓が石蓋をもつ例はやや遅れて出現するようであるが、一般的に小児墓では下部構造に石蓋をもたない傾向がつよい。また、14基のうち3基には墓壙内に礎を置いて壺棺の支えあるいは固いとしている。供獻はS A 27とS A 30が小壺を伴っており、その位置は上石下にあたる墓壙上面に置かれてあったと推定する。2基以外にも小壺類が供獻されていた可能性はあるが、削平のため明らかではない。

成人墓では、削平がとくに著しいS A 45以外は全て石蓋をもっており、基本的に下部構造は石蓋土壙と推定する。ただし石蓋とはいえ、その架工方法はA遺跡でみたように、土壙の縁に渡すというよりは、土壙上面を板石で覆うといった状態にちかい。土壙は長方形または隅丸長方形である。石蓋をもち深さがわかるものについて、長さと深さから法量を示すとFig. 204のようになる。幅は60cm前後が一般的でとくに大きな変化はない。このうちS A 33は格別深く、またS A 32は検出時の長さにやや不明な点があることからいえば、あるいは長さ180cm程度におさまるかもしれない。S A 43のみ長さ・深さとも他と一回わり小さく、小児墓の可能性があることも先に述べておいた。したがって、一般的な下部土壙の法量は長さ145～180cm、深さ30～55cm程度で、S A 33のみB遺跡の中では異例に大きいといえる。なお、B遺跡の成人墓では土壙内に配石をもつものはみあたらず、この点はA遺跡と違う。

上部構造については大いに問題のあるところである。石蓋を残す8基のうち、S A 26・S A 29・S A 31・S A 33の4基は石蓋上に円礎の支石が4個以上が残存し、さらにそのうちS A 29・

S A31・S A33では支石の上に上石一部が残っていた。これら3基にみられる上石は石蓋とあまりかわらない構造のもので、平石数枚を支石の上に渡していたようである。このような構造の上石は巨石を用いる一般の支石墓に対する概念から大きく外れたもので、今のところB遺跡以外に例をみない。もちろん、本来は巨石が使われ、残存する上石一部はあくまで補助的なものであった可能性はあるし、また他のS A26等についても全て同様の上石構造とはいいきれないのであろう。しかし少なくとも、上石を巨石1個とする通例にはこだわらない支石墓が出現していることは事実であって、丸山遺跡の報告でも注意しているように、今後、とくに上部構造が不詳な支石墓について、このような構造の存在も念頭におく必要がある。それではこの上石と石蓋との間の空間は何か、ということになると、S A26・S A29・S A33では小壺等が石蓋上に供獻されたまま残っていた。丸山遺跡でみられるように、支石墓の上石の下はもともと土器等の供獻が行われる場所であり、このB遺跡の場合には、それをより積極的に副葬空間として利用をはかろうとした意図が窺われる。

さて、A・B遺跡における支石墓系統の埋葬の構造および特徴についてみてきたところで、両遺跡の共通点、相違点をまとめると次のとおりである。

- 1 A・B遺跡とも頭位は地形の傾斜に直交する東または西を基本とする。この点はちかくの丸山遺跡・黒土原遺跡も同じであり、埋葬頭位概念とは別に、横長が多い上石を載せる支石墓の構造上、傾斜地形にあっては上石の下傾を嫌ったための処置であったとも解されよう。
- 2 下部構造はA・B遺跡とも、小児墓は基本的に壺を本体とし、甕を蓋に被せる。ただしB遺跡ではIV期になると変則的に壺または鉢の蓋が現われる。また成人墓はB遺跡では石蓋土壤が基本である。この点はA遺跡も同様と推定する。
- 3 成人墓土壤内の配石はA遺跡に多く、一部に「棺」の使用を推定させるものがある。しかしB遺跡の成人墓は配石をもたない。
- 4 上部構造は、B遺跡で確認できる限りでは、石蓋上に支石を置いて上石を載せるか、上石が数枚からなる特異な構造のものが存在する。
- 5 供獻は小壺類を主体とし、B遺跡で確認できる限りでは上石の下がその供獻空間にあたる。
- 6 副葬品には管玉と勾玉がみられるが、A・B遺跡とも成人墓の一部に限られ、しかも数量は少なく貧弱である。

以上のとおり、A遺跡の削平が著しいという点を考慮すれば、若干の相違はあるものの両遺跡の埋葬は統じて共通性がつよいといえる。時期ごとの変化は(2)のとおり、B遺跡の小児墓でいくらか認められるが他は明らかでなく、それよりも全体的にみれば、I期～IV期まで基本的には大きな構造上の変化は無かったと推測する。

ところで、このような特徴をもつ支石墓の系統についてであるが、従来、下部構造の点で地域差が存在することがいわれている。森貞次郎氏は、朝鮮半島からの支石墓の伝播が、まず玄界灘沿岸部で土壙を内部主体として始まり、後にその後背地域に拡がった際、内部主体に石棺が取り入れられたとする<sup>1)</sup>。岩崎二郎氏はその後の豊富な資料をとりあげながら<sup>2)</sup>、夜臼～板付期には唐津・糸島平野の玄界灘沿岸地域では成人墓の内部主体は土壙を主とし、長崎北部・南部地域では石棺が主であり、小児用カメ棺（壺棺）は両地域を通じてみられる実態を明らかにしている。岩崎氏もその間の内部主体の変化は土壙から石棺へ、と考えているようである。丸山遺跡の調査はその後に行われ、下部構造に石蓋土壙をもつ支石墓の存在がはじめて確認された。そして砾石A・B遺跡、黒土原遺跡でも同様な例があいつぎ、今日ではそれが佐賀平野のとくに西北部における主要な支石墓の構造であると認識されるに至っている。石蓋土壙を下部構造とする支石墓の系譜については今後に慎重を期すべきであろうが、ただ、石蓋土壙そのものを本来的に土壙の一種とする考え方にしてば、これらの支石墓は玄界灘沿岸地域のそれと関連がつよい、ということはいえよう。

最後に被葬「集団」についてであるが、岩崎二郎氏は「…支石墓は夜臼式と結びつく傾向が非常につよく、それは板付Iが分布する玄界灘沿岸でも変わらない」<sup>3)</sup>と述べ、また最近、新町遺跡<sup>4)</sup>の支石墓から出土した人骨は縄文形質をつよく残す西北九州型であることが明らかになるなど、支石墓と夜臼式土器あるいは在来人との結びつきが次第に確められつつある。佐賀平野の場合は土器について述べたように、弥生前期を通じて夜臼式すなわち突蒂文系土器の伝統を色濃く残す地域であり、また甕棺出現以前の縄文晩期末～前期の埋葬といえば支石墓系統が殆ど全てであるから、当然、支石墓と夜臼式土器とは直接関係する。

今日の状況からいえば、支石墓は大局的には半島文化の影響を示すものではあっても、その造形主体は大部分が縄文以来の系統に連なる夜臼式土器をもつ弥生人であり、弥生社会の中に根づき発展した墓制といえる。砾石A・B遺跡のこれら支石墓を営んだ人々は、縄文以来の系統に連なる在地の集団であって、それぞれが初期稻作の最小経営単位となった單一家庭に相当するものと考えたい。

#### 註

1. 東中川忠美他『久保泉丸山遺跡』佐賀県教育委員会1986
2. 著者はかつて丸山遺跡の支石墓群を営んだ集団の性格について地縁的関係を含むものと解釈したが、本文のとおり改めたい。田平徳栄「弥生時代開始期の佐賀平野」（『日本史の黎明』八幡一郎先生頌寿記念考古学論集）1985
3. 福田義彦『黒土原遺跡』佐賀市教育委員会1967
4. 森貞次郎「弥生文化形成期の支石墓」（『金載元博士回甲記念論集』）1969
5. 岩崎二郎「北部九州における支石墓の出現と展開」（『鏡山猛先生古稀記念古文化論致』）1980
6. 註5と同じ
7. 橋口達也他『新町遺跡』志摩町教育委員会1987

## 4. 古墳群から土壙墓・木棺墓群への変容

礫石A遺跡および久池井一本松遺跡の古墳は多くが7世紀代の築造になるものであり、一部時期を重複しながら、古墳群の一画ないしは隣接して多数の土壙墓・木棺墓が古墳に引き続き造られている。同様な様相は礫石B遺跡にも若干覗われるところである。

古墳群と土壙墓群がこのように同一遺跡内に密接な関係をもって存在する例はそう多くない。佐賀平野における古墳終焉の様相とその歴史的意味を考える場合、これらの遺跡をどのように解釈するかは重要な意味をもつと思われる。そこで、まず土壙墓・木棺墓の特徴と、これら3遺跡および周辺遺跡における古墳群から土壙墓・木棺墓への展開を改めてここで整理し、その歴史的意味について若干触れることにする。

### 1 土壙墓・木棺墓の特徴

土壙墓・木棺墓とも掘形は基本的に長方形もしくは隅丸長方形であって、形態上とくに大きな違いはない。頭位は原則として東西方向または南北方向で、群や時期による一定の傾向は認めがたい (Fig. 205)。

礫石A遺跡および久池井一本松遺跡について、これらの掘形法量を表で示せば Fig. 206のとおりである。全体に掘形が長くなれば、それに応じ幅も広くなる傾向があり、礫石A遺跡に比べると久池井一本松遺跡の方が規模の振幅が大きく、長さ250cmをこえる大型のものが数基みら

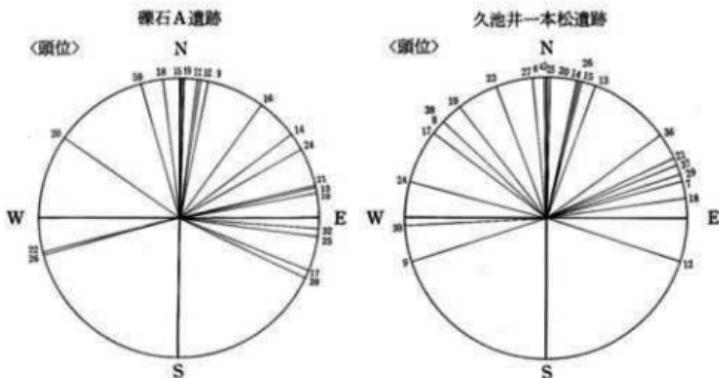


Fig. 205 土壙墓・木棺墓頭位

れる。成人墓と小規模とを区分しようすれば、長さ130cmあたりに一線が引かれるようである。仮に長さ130cm以下を小児墓とすると、礫石A遺跡では成人墓と小児墓の比率は16:4、同様に久池井一本松遺跡では18:7であるから、割合でいうといずれも小児墓が2~3割を占めることになる。ただしこれはあくまで掘形だけからみた目安であって、実際は木棺の使用等を考慮すれば、130cm長さをこえるものの中にも小児墓とすべきものが含まれるかもしれない。

埋葬の形態については、釘の出土から明らかに木棺の使用が認められるものが少なく、礫石A遺跡では20基中1基、久池井一本松遺跡で27基中4基である。他は木棺の明証がないので全て土壙墓としておくが、木棺が必ずしも釘を用いるとは限らないので、実際の木棺の割合はこれより増えるであろう。例えば礫石A遺跡のS P26、久池井一本松遺跡のS P30は副葬土器の出土状況から木棺の使用がつよく推定されるものである。

明らかな木棺墓とその他の土壙墓を比べた場合、そこには埋葬方法に若干の違いが認められる。まず土壙掘形の点で、木棺墓は整った長方形もしくは隅丸長方形の深い掘形をもつてに対し、土壙墓の中には掘形のやや雑なものが多い。また供獻・副葬土器の点で、木棺墓は必ずこれらを伴うのに対し、土壙墓の場合は久池井一本松遺跡で約1割、久池井A遺跡で約3割すぎない。したがって、木棺を用いること自体がそうであるように、木棺墓は土壙墓に比べ、一般的にみてより丁重な埋葬であるといえる。

形態の点でとくに問題になるのは久池井一本松遺跡のS P43木棺墓である。S P43は久池井一本松遺跡で完全に古墳群の造営が終焉したのち、9世紀になって、他の土壙墓群からやや離れて古墳群の密集域にあえて造られ、しかも一周すれば径6mと推定される円形周溝を廻らせた一定の墓域をもっており、盛土の存否は不明であるが、一見、古墳と見まちがうほどである。土壙掘形は長さ、幅とも最大で、唯一墳底に棺台用の礫列をもつ。このような特徴はS P43の被葬者が他の土壙墓・木棺墓の被葬者と区別されるべき特別な人物であることを示すものといえよう。

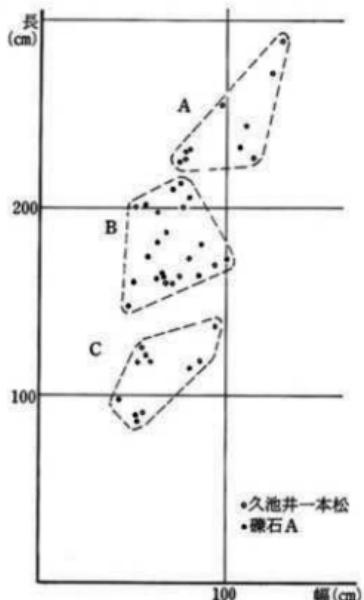


Fig. 206 磯石A遺跡および久池井一本松遺跡の土壙墓・木棺墓法量図

供獻・副葬の在り方についてみると、まず用いられる器種は、7世紀代の土壙墓では須恵器壺または壺に限られ、8世紀以降は土師器壺が大部分となり、稀に土師器の甕・鉢のほか刀子・紡錘車がみられる。土器副葬の場合、その位置は頭位または足位が原則であるが、点数はあまり多くない。ところが供獻となると、木棺の棺上に置かれていたことを窺わせるものもある一方、礫石A遺跡S P15や久池井一本松遺跡のS P15・S P30のように、棺と土壙との隙間にいかにも投げ込まれたかのような状態で土師器が出土する場合がある。稀にはそれが大量であって、明らかに副葬品とは別個に取扱われた形跡を示す。本文でも述べたように、それらはおそらく埋葬に伴う何らかの儀礼に用いられた容器であって、最後に死者を葬る際、儀礼後の「処理」も兼ねて同時に埋め込んでしまったものと推測する。

## 2 古墳群および土壙墓・木棺墓群の形成過程

礫石A・B遺跡および久池井一本松遺跡における古墳・土壙墓・木棺墓の時期を、出土遺物あるいは補足的に石室の形式等から示せば、全体としてTab. 35のようになる。土壙墓・木棺墓については時期のわかる例のみあげておく。ただし時期不明な他の大多数の遺構についても一応の時期的傾向は示していよう。

まず、礫石A遺跡では古墳9基と土壙墓・木棺墓20基を調査した(Fig. 207)。

古墳はIV区でS T49・S T50の大型円墳2基が6世紀に造られるが、最も盛んなのは7世紀であって、I・II区で7世紀前半～後半の7基が存在する。追葬はS T03・S T04・S T06では8世紀まで続き、とくにS T04古墳では9世紀初の土師器が出土しており、古墳が何らかの形で長く使用されたようである。もっとも、S T01～S T03・S T05・S T06では10世紀以降の土師器あるいは中世に下る青磁等が出土しているが、これらは他の古墳でもしばしばみられるように、追葬というよりは、後世に石室が再利用されたと表現した方が適切であろう。

一方、土壙墓・木棺墓はII区・III区では計20基が一定の墓域を形成し、あえて群を分ければa群(5基)・b群(4基)・c群(9基)のおよそ3群となる。そのうちa・c群はそれぞれ北と南の調査区外にまだ若干分布が続くかもしれない。IV区では2基のみ、しかも互いにやや離れて存在する。各埋葬頭位は東西または南北方向を原則とするが、群・時期等によって一定の傾向を示すような状況ではない。

時期の判明する限りで、最も早いものは7世紀後半にS T10・S P12・S P15が造られ、その他S P18・S P59が8世紀末～9世紀前半、S P15・S P26が10世紀中頃に位置する。すなわち、少なくともこれら7基は、7世紀後半から10世紀中頃にかけて造られたもので、時期の明らかでない他13基についても、ほぼこの時期に該当するものと推定する。7世紀後半といえば、まだ古墳の築造期であり、一部で古墳の造営が続けられながら、並行する時期に土壙墓が出現していたことになる。

Tab. 35 古墳・土壤墓・木棺墓編年表

築造・追葬 推定 再利用

遺構	年	500	600	700	800	900	1,000	1,100	1,200	1,300
		築石A遺跡								
S T01				---						-
02				---						-
03				---						-
04				---						-
05				---						-
06				---						-
07				---						-
49				---						-
50				---						-
S P10				---						
12				---						
14				---						
15				---						
18				---						
26				---						
59				---						
築石B遺跡										
S T01				---						-
02				---						-
03				---						-
04				---						-
18				---						-
S P17				---						
久池井一本松遺跡										
S T01				---						-
02				---						-
03				---						-
34				---						-
35				---						-
41				---						-
42				---						-
44				---						-
45				---						-
S P06				---						
15				---						
25				---						
30				---						
38				---						
43				---						

S T : 古墳

S P : 土壇墓・木棺墓

各群の形式過程についてはあまり明らかでないが、II・III区の3群についてみると、まず7世紀後半の3基はa群とb群に登場する。ところが、それぞれの群に隣接する古墳2基は7世紀代のものであって、土塙墓の造営が始まった時期はまだ少なくとも追葬は続いているとみられる。したがってa群とST07、b群とST06とはそれぞれ何らかの密接な関係をもっていたと推定することができ、この点はとくに注意を要する。またb群とc群では10世紀初までは、造墓活動が続いている。

なお、1基だけ木棺であることが明らかなSP15はb群に、また小児墓とした4基はa群とc群に所在する。

次に礫石B遺跡では、古墳5基と土塙墓1基とを調査した。

古墳はST01・ST04が6世紀前半、調査区外南には5世紀後半の古式須恵器を出土する古墳が

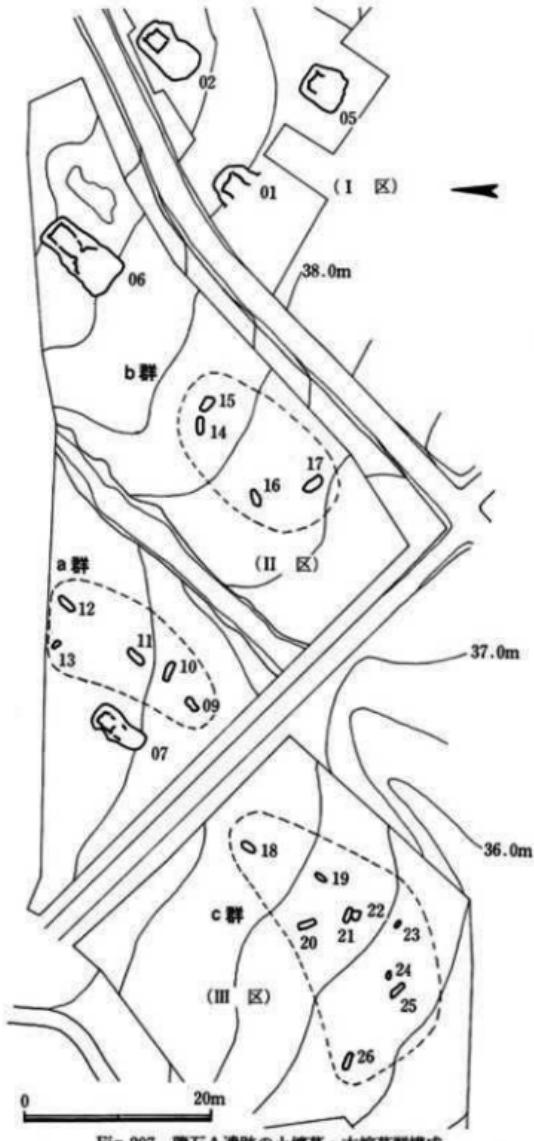


Fig. 207 磯石A遺跡の土塙基・木棺墓群構成

あり、群集墳としては形成時期の早いものである。ここでは7世紀前半から後半にかけてST02・ST03が、既に在るST01とST04の間の狭い範囲に扇層な形で相接して造られ、また台地東北端にはST18が営まれる。これら3基は周溝をもたず、石室・墳丘とも小規模である。なおST03で8世紀前半まで追葬が行われ、さらに10世紀以降も長い期間にわたり何らかの形で古墳が再使用されたようである。

土塙墓はSP17が1基のみ、ST18の前面墓道西脇に単独で存在する。時期は7世紀中頃である。ST18の築造時期が7世紀前半であるから、A遺跡同様、ここでも古墳が造られてまもなく、その追葬期に土塙墓が並存して造られたことになり、両者の密接な関係が推定できる。

久池井一本松遺跡では古墳9基と、火葬墓1基を含む土塙墓・木棺墓27基を調査した(Fig. 208)。

古墳は調査区北側丘陵になお数基の残存が認められ、全体では十数基が一群をなすものと推定する。9基のうち、最も時期の遅いST01は6世紀前半、他の8基は全て7世紀前半から後半にかけて築造されたもので、とくにII区の5基は著しく密集している。ST34・ST35では8世紀に入てもなお追葬が続いている、土師器は9世紀初のものまで出土するが、これは期間としてはあまりに長く、追葬を示すかどうかは不明である。

一方、土塙墓・木棺墓は全体としてはほぼ完結した一定の墓域をもつが、その中をあえて群で分ければ、SP06とSP43がいずれも他とやや離れている以外、a群(2基)・b群(6基)・c群(10基)・d群(6基)のおよそ4群に分けられる。各遺構の頭位は東西または南北方向を原則とするが、群や時期によってとくに一定しているわけではない。

これらの時期は、供獻・副葬土器をもつ6基に関する限りではSP38が最も早く7世紀後半、他5基は9世紀中頃から10世紀中頃の間にあり、時期の明らかでない残り21基についても、およそ7世紀後半から10世紀中頃のこの時期に造られたと推定する。各群の形式過程は時期のわかるものが少ないため、あまり明らかでないが、7世紀後半のSP38はまず同時期の古墳から離れたd群に出現し、少なくともb群では9世紀中頃、c群では10世紀前半まで造墓活動が続いている。また、明らかな木棺墓は、SP43は別として、b群とc群に各1基存在し、小児墓はa群1基、c群3基、d群3基が分布、b群には火葬墓としたSP33が1基含まれる。

こうしてみると久池井一本松遺跡の場合も、全体としてみると砾石A遺跡同様、7世紀代には未だ古墳の造営が盛んで、しかも調査区内に限っては最盛期にあたる。土塙墓・木棺墓は並行して7世紀後半から一部で造られ始めて10世紀前半まで続いている、古墳と何らかの形で密接な関係をもっていたことは容易に推察できる。

ただ異質なのはSP43木棺墓である。SP43は丘陵部にかかるII区の密集した古墳群中にあえて造られ、しかも円形状の周溝を廻らせており、盛土の存否は不明であるが、一見、古墳と見まちがうような構造をもつ。副葬土器から9世紀中頃と知れるものの、仮に副葬品がなかっ

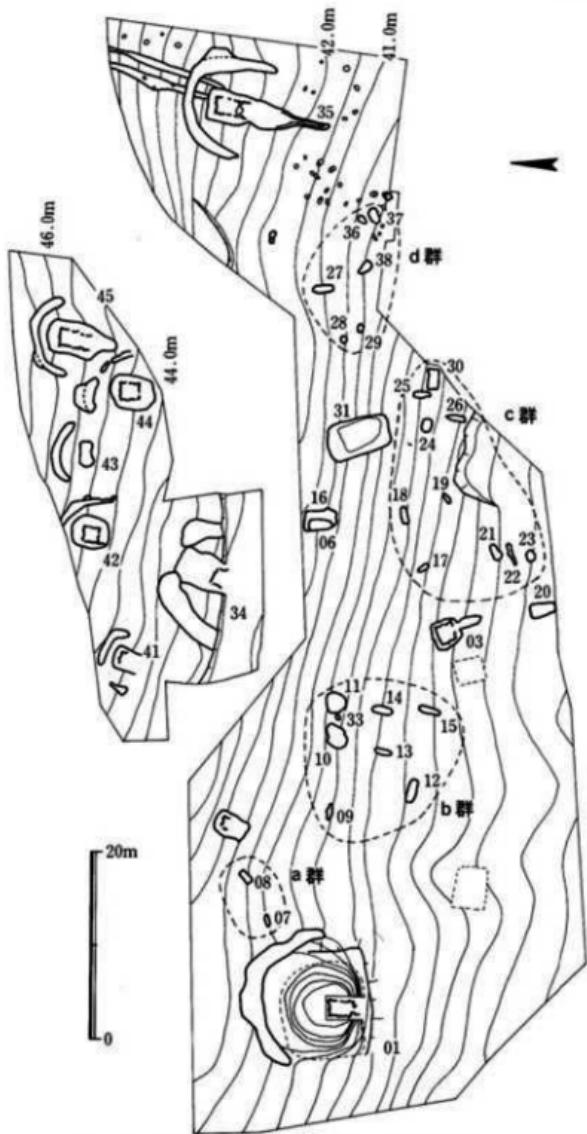


Fig. 208 久池井一本松遺跡の土塙基・木棺墓群構成

た場合、おそらく7世紀の古墳のうちに含めてしまったかもしれない。S P43が古墳同然に一定の墓域をもち、同時期の他の埋葬と離れて存在することは、その被葬者が他の土壙墓・木棺墓の被葬者とは別に扱うべき特別な人物であることを示すとともに、かつての古墳群を営んだ有力家族の系譜につながる者であることをつよく推定させる。

以上、3遺跡を通じてみると、遅くとも7世紀中頃には一部で古墳群中に土壙墓あるいは木棺墓が出現している。しかしいずれの遺跡においても7世紀は、少なくとも調査区においては未だ古墳の造営および追葬が盛んであり、むしろ数のうえでは最盛期といった状況にちかい。したがって土壙墓・木棺墓は7世紀代に古墳と並行して始まり、中には両者の密接な関係を窺わせる例もある。そして8世紀以降、古墳にとって替わる。この古墳から土壙墓・木棺墓への変容は総体的な図式としてみればおそらく一定の集団の系譜関係を示すものであろう。だが一つ注意すべきは、それは必ずしも個々の古墳すべてが同一地域で土壙墓・木棺墓群に分解していくことを意味するものではないということであって、この点はあとで述べる。

ここで周辺遺跡の土壙墓・木棺墓についても若干ふれておく。

この時期の土壙墓・木棺墓の調査は九州全体でも比較的例が少ない。しかも殆どの場合は大規模な群を形成することなく、せいぜい、久池井一本松遺跡の27基が今のところ最大である。また、調査例の少なさもあるが、古墳群の資料となるとごく限られ、本3遺跡以外では次に述べる金立開拓遺跡<sup>(1)</sup>くらいのものである。

佐賀平野の場合、この時期の土壙墓・木棺墓は今のところ、本3遺跡のほか金立開拓遺跡・久池井B遺跡<sup>(2)</sup>で比較的まとまってみつかっている。分布としては佐賀市・大和町の佐賀平野北部丘陵端の一部特定地域に集中している観があり、他地域で今後類例は増えると予測するが、今のところは稀にみつかることはあっても、群としてまとまりをもつものはない。

金立開拓遺跡は久池井一本松遺跡の東方約2kmにある。この古墳群では本3遺跡同様、数のうえでは7世紀が最盛期で、多くは簡略な石室をもつ小規模墳が密集して造られている。土壙墓は古墳群北側の一画に、時期の明らかなものでは7世紀前半から8世紀前半にかかる11基(I群)が一群をなして造られている(Fig. 209)。11基のうち素掘りの土壙構造は7基、他は疊床疊囲いの小石室墓3基、それと久池井一本松遺跡S P43同様の疊列棺台をもつ1基である。この遺跡の場合、土壙墓I群の東西両側で7世紀の同時期には周溝をもたない小石室古墳が多数造られている。報告者は、かつて近藤義郎氏が古墳群中におけるこのような土壙墓の被葬者を「石室内に葬られることのなかった家族体の成員」を述べた<sup>(3)</sup>ことをとりあげ、I群の被葬者にも同様な評価を与えている。

また久池井B遺跡は久池井C遺跡の西南方約1.5kmにあり、ここでは8~9世紀の肥前国府関連建物群の南前面に墓地が同時期営まれたとは考えにくく、建物群が存在した8~9世紀の一期には、墓地の造営は一定期間の空白があったようである。なお久池井B遺跡の場合、ちか

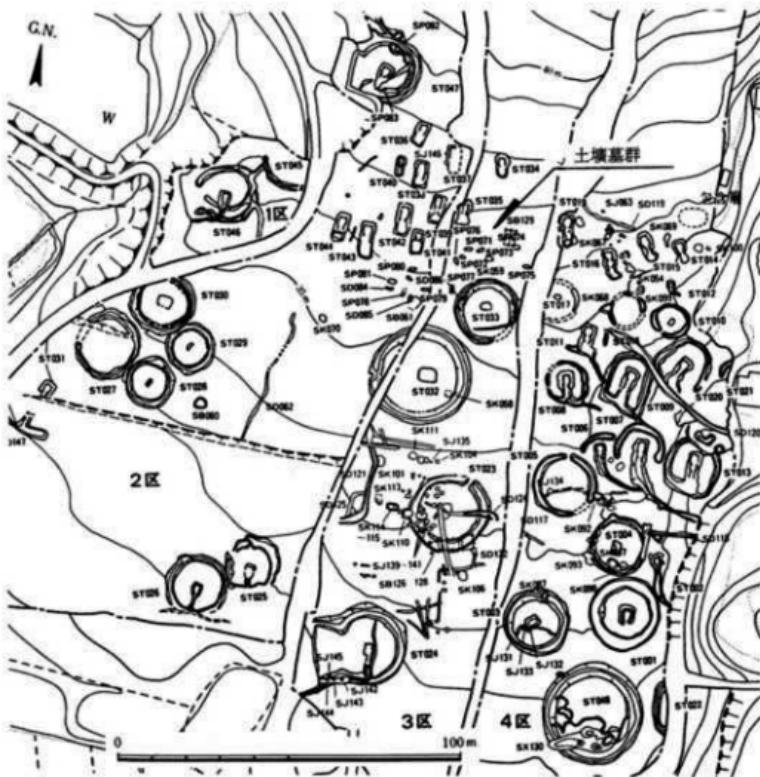


Fig. 209 金立開拓遺跡遺構分布（「金立開拓遺跡」より）

くに古墳は存在しない。

その他、近県で比較的数多く調査された二、三の例をみると、福岡県太宰府市君ヶ畠遺跡<sup>4)</sup>では8世紀末から12世紀にかけて25基の木棺墓・土壙墓が造られている。形態や供獻・副葬方法等は久池井一本松遺跡等によく似ているが、注意すべきは同一地区に存在する2基の古墳で、1号墳では木棺墓・土壙墓が営まれた全期間の土師器を出土しており、並行して何らかの利用がはかられた形跡が窺われる。

福岡県小郡市津古内畠遺跡<sup>(8)</sup>では7世紀前半以降の土塙墓7基・小型石積石棺墓7基が一群をなしており、同遺跡で6世紀のうちに築造が終わる古墳に引き続いて造営されたものとみられる。また小郡市干瀬遺跡<sup>(9)</sup>では、7世紀後半を中心とする土塙墓18基のほか、10世紀中頃の円

形周溝墓・火葬墓等が検出されている。

### 3 被葬者の系譜

古墳にかかる土壙墓・木棺墓は、早い地域では7世紀前半に出現し、奈良・平安時代に引き継がれる。重要なことは、たまたまそれが終末期の古墳群と同一地域に群をなす場合、当然そこには相互の系譜的関係が推定されるのであり、横穴式石室墳とはちがい單一埋葬の集合体である土壙墓・木棺墓群において初めて顕在化した一定の集団成員の実態、さらには逆に何らかの系譜をもつそれ以前の古墳の被葬者とは誰であったのか、これらのことについて検証の糸口がつかめるのではないかという点にある。

結論からいうと、礫石A遺跡ほか3遺跡で最も古墳の造営が盛んであった7世紀には、その造営単位は前代における血縁集団の長とその特定家族、すなわちいわゆる家父長家族の墓という枠をこえ、後の戸戸にあたる単位にまで範囲が拡大し、礫石A遺跡および久池井一本松遺跡では8世紀以降になってその中の特定戸戸が墓地を継承して土壙墓・木棺墓群を造営したと考える。

3遺跡でみてきた7世紀の古墳の特徴は、極めて限られた狭い範囲に密集して占地し周溝をもたない例が多くなり、石室は矮小化し、その壁体構造は基段配石さえ縱長立置の弱体構造のものが主流に変わる。しかも前面に広く前庭が掘り込まれていることからみて、墳丘はようやく石室を覆う程度の小規模なものにすぎない。このような古墳はもはや墳丘に対する特別な意識は殆ど喪失し、まさに家族墓として簡素化かつ機能化している点で、それまでの古墳とはおのずと質的に異なるものである。

3遺跡でむしろ7世紀になって古墳造営盛んとなり、しかも著しく密集する傾向がつよい点については、いわゆる密集型群集墳の評価にも大いに関係がある。密集度としてはやや薄いが、とくに久池井一本松古墳群でも周辺に余地があるにもかかわらずST41・ST42・ST44・ST45が一定範囲に相接して集中し、また同様な傾向は礫石B遺跡のST02・ST03にもみられる。さらに周辺で典型的には金立開拓遺跡、先の土壙墓群（I群）の東側および西北側にも小古墳11基が集中して7世紀に造営されている（Fig. 209）。

辰巳和弘氏<sup>(7)</sup>は静岡県下において6世紀後葉から8世紀前半に出現するこのような密集型群集墳について、畿内政権が地域支配を從来の群集墳の被葬者よりさらに下位のレベルまで拡大、貫徹するため、6世紀後半の各地に台頭しつつあった中小首長層にまで一定の墓域を与え、造墓を認めた結果と述べている。要するに、一定の身分標識としての古墳造営がこの時期あらたに、從来の群集墳の被葬者より下位のクラスにまで拡大され、しかも一元的に貫徹されたと理解するようである。

辰巳氏のいう下位のクラスがどの階層を指すのか明らかでないが、たしかに7世紀になって

急に造墓数が増す状況をみれば、それは被葬者層の拡大を意味するとみるのが当然であろう。そして群集墳のそれぞれが本来、一定の血縁集団の長の死を契機として造られた特定家族の墓であったという理解に立てば、この時期の被葬者層の拡大とは実質、のちの戸籍、計帳にあらわれる房戸の単位にまで古墳造営の風習が広まったということにはほかならない。この点では金立開拓遺跡で密集型群集墳に象徴される7世紀の古墳激増について蒲原宏行氏が示した理解<sup>40</sup>に賛同するものである。

だが、辰巳氏と違うのはその意義に対する解釈である。すなわち古墳の造営が単位が拡大し、おそらくのちの房戸単位にまで広範に拡がったであろうということは、逆にもはや古墳が身分標識としては何ら特別な意味をもたなくなってしまった、ということであり、そのことは既に述べたような墳丘をはじめとする古墳の内容の貧弱化にも象徴的に現れているように思われる。つまり6世紀の古墳築造の論理をそのまま7世紀以降に敷衍することには無理があるということである。古墳にみられるかかる社会的状況は少なくとも礫石遺跡周辺についていえば7世紀前半から始まっていたので、土塙墓・木棺墓は、当初は古墳に葬られない集団の成员の墓として採用されたかもしれないが、そのような古墳における身分秩序の空洞化という時代の動勢の中で、急速に古墳にとって替わっていったと考える。

古墳群から土塙墓・木棺墓群への移行によって、6世紀段階までの個々の古墳に包括されていた集団成员の一部がその姿をあらわにしあげた。8世紀になんでも一部で古墳への追葬は続いているが、もはや古墳と土塙墓等との違いが身分によって決定的に区別される時代ではない。また、久池井一本松遺跡のS P 43木棺墓のように他の成员と区別される被葬者も稀に存在するが、大勢として埋葬の違いが再び格式にまで高められることはなかった。

しかしここで問題なのは墓地繼承の実態である。数のうえでみると、土塙墓・木棺墓は礫石A遺跡で総計20基、久池井一本松遺跡で27基にすぎない。この数はほぼ2世紀半のそれぞれの造墓数であるから、とうてい、郷戸にあたる規模の全集団成员をまかなうような数ではない。せいぜい1房戸にあたる程度である。このことは先に7世紀において後の房戸単位にまで古墳造営の範囲が拡がったという説明からすると、一見、奇異に映る現象である。つまり7世紀に一旦、集団成员全体のものとなった墓地が、そのままでは土塙墓・木棺墓群として繼承されず、再び特定家族の墓地に遷ってしまうかのように見えるからである。一つの解釈として、7世紀における古墳被葬層の拡大は、実は房戸規模の単位ではなく、あくまでそれは有力家族の範囲にとどまるものであって、集団の長に最も親しい者達がそれぞれ個別に営んだ古墳であったという考え方もありえようが、ただし礫石A遺跡等の集団の規模程度では、それは実質房戸単位というのと殆ど大差ないと思われる。したがってこの点は結局、8世紀以降に墓地を繼承したのは一部の、おそらく伝統的な墓地を正当に受け継ぐに足る有力房戸であって、他の房戸は改めて他に墓地を求めざるを得なくなつたと考えておかざるをえないであろう。

以上のとおり、これら3遺跡における土壙墓・木棺墓群の被葬者は7世紀代に拡大した古墳の被葬者の系譜につながる全ての集団員とは考えられず、はじめに期待した終末期古墳の被葬者層の検証はこれ以上不可能である。金立開拓古墳群の場合、土壙墓群は終末期古墳群とほぼ並行する時期にあるので、疊石A遺跡等とはおのづから性格が異なる。なお土壙墓・木棺墓群の中にみられる小グループの存在はあまり過大に解釈すべきではなく、房戸の中の個々人の関係によって生じたものにすぎないであろう。もちろんそれぞれのグループを各房戸に対応させるのは数・時間幅からみて不可能であることは言うまでもない。

8世紀に墓地が縮小するのはどのような意味をもつか。各房戸の自立性が増した、あるいは血縁集団の結束が緩んだ、といったような律令制に対応するいわば先進的な一面を墓制のうえに反映させたものであろうか。この点は集団の性格・規模等によって違うであろうし、なによりも類例が極めて限られる現段階では一概に決めがたく、今後の資料の増加をまって検討すべきであろう。

ところで、7世紀といえば北部九州が半島との国際的抗争に巻き込まれた激動の時代であり、佐賀平野の場合も647年に基跡城が築かれ、あるいは帶嶺山神龍石等もこの頃に築かれた可能性がある<sup>(1)</sup>。8世紀には疊石遺跡等のすぐ近くに国府が置かれ、肥前國の中核地域として発展する。このような時代背景の中では、佐賀平野の在地勢力といえども決して時代の動向に無縁な存在であったとは考えられない。7世紀の国際的動乱が佐賀平野の在地勢力にどのような影響を与えたかは決して明確でないが、これまでみてきた古墳から土壙墓・木棺墓への変容には律令制期の個人支配の下地となる社会的状況が既に7世紀段階で一定程度まで熟成していたことを思わせるものがある。ただ、それが佐賀平野でいえば、国府が置かれた本地域周辺に限られる、いわば先進地的状況であるのか、あるいは一般的な状況であるのかは今後の重要な課題とすべきところである。

#### 註

1. 蒲原宏行他「金立開拓遺跡」佐賀県教育委員会1984
2. 松尾法博・田平徳栄「久池井B遺跡」(「九州横断道関係埋蔵文化財発掘調査概報第6集」) 佐賀県教育委員会1983
3. 神原英明「岩田古墳群」1976
4. 前川威洋他「君ヶ畑遺跡」福岡県教育委員会1977
5. 柳田康雄他「津古内畠遺跡—第1次～第5次」福岡県教育委員会1970～1974
6. 福岡県教育委員会「干潟遺跡I」1980
7. 長巳和弘「密集型群集墳の特質とその背景—後期古墳論(1)」(『古代学研究』第100号) 1983
8. 註1と同じ
9. 田平徳栄「基跡城考」(『太宰府古文化論叢』九州歴史資料館編) 1983

# 図 版

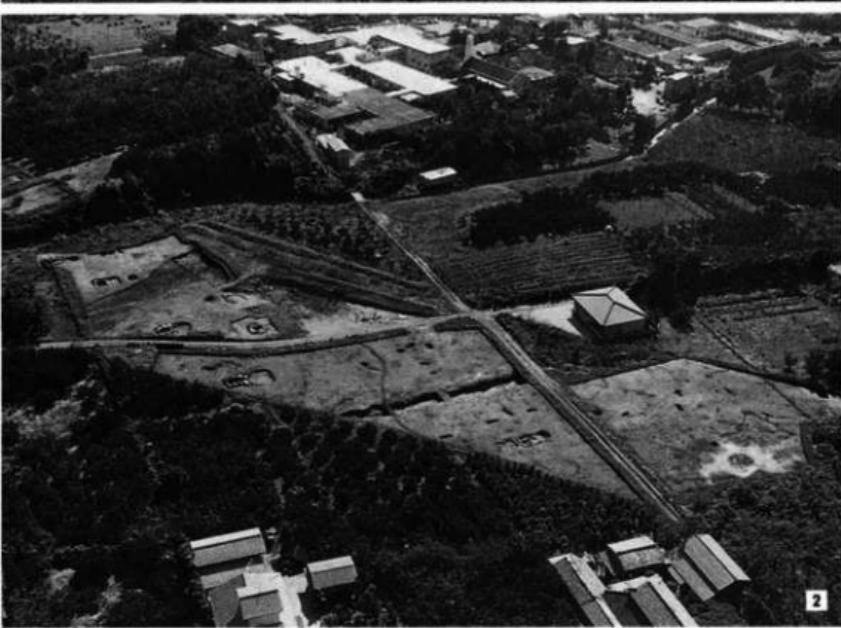
# 礫 石 A 遺 跡



裸石遺跡周辺（航空写真）



1



2

裸石A遺跡 1. I・II・III区全景〈西から〉

2. 同上 〈西北から〉



1



2

櫛石A遺跡 1. IV・V区全景〈南から〉

2. 同上 〈東から〉



1



2



3

## 躑躅A遺跡

1. I + II区〈西から〉
2. II区〈東から〉
3. III区〈東から〉



1

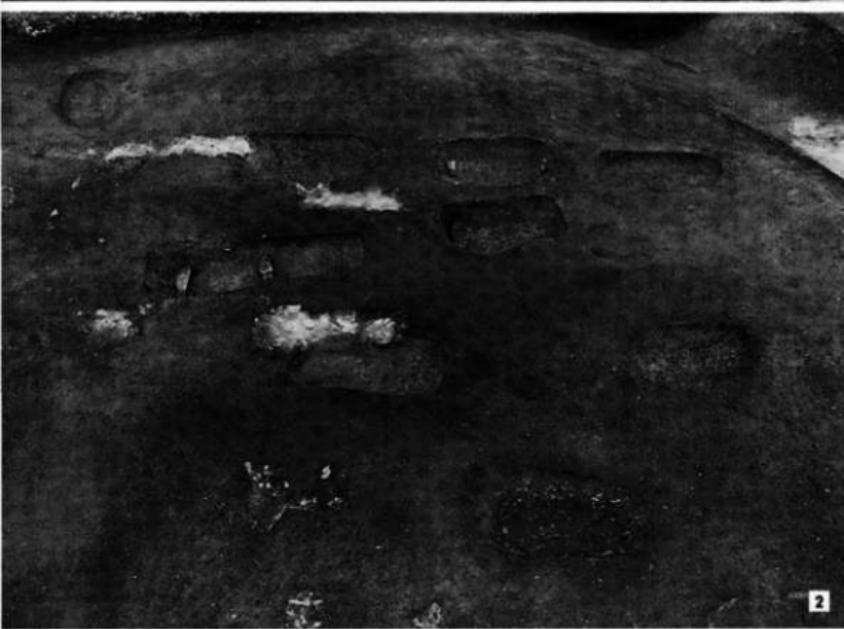


2

砾石A遺跡 1. IV区弥生埋葬遺構群〈北から〉  
2. 同上 〈南から〉



1



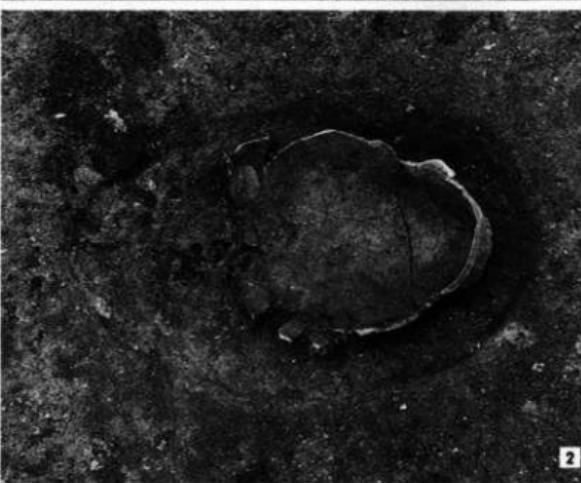
2

砾石A遺跡 1. IV区弥生埋葬遺構群北側〈北から〉

2. IV区土壤墓群西側〈南から〉



1



2



3

#### 砾石A遺跡

1. S J 27壺棺墓〈西から〉
2. S J 28壺棺墓〈東南から〉
3. S J 30壺棺墓〈北から〉



1



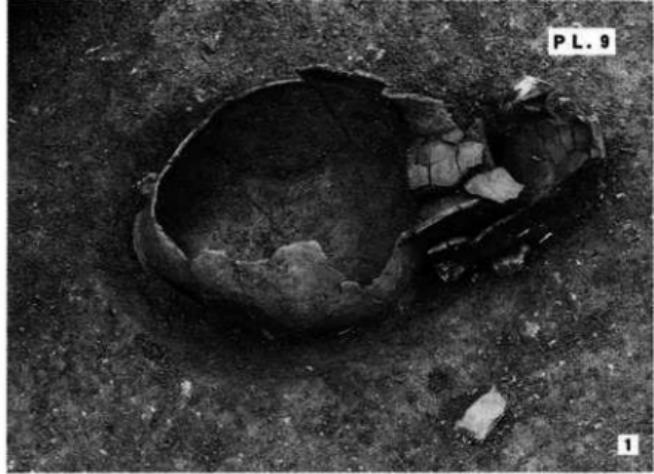
2



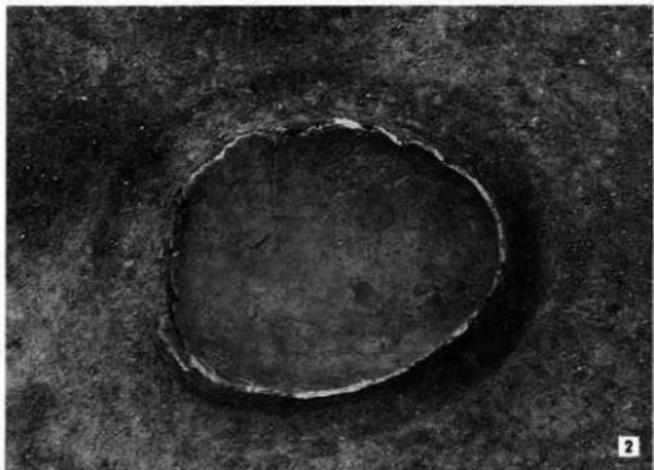
3

礫石 A 遺跡

1. S J31壺棺墓  
S J32壺棺墓〈西南から〉
2. S J33壺棺墓〈南から〉
3. S J34壺棺墓〈南から〉



1



2



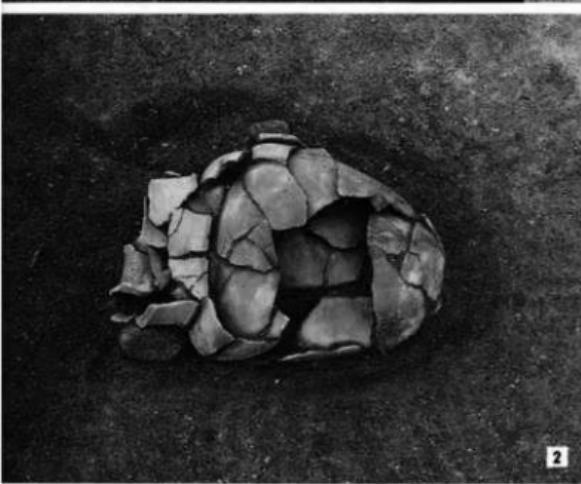
3

#### 砾石A遺跡

1. S J 35壺棺墓〈北から〉
2. S J 36壺棺墓〈南から〉
3. S J 40壺棺墓〈北東から〉



1



2



3

砾石 A 遺跡

1. S J 41壺棺基〈南から〉
2. S J 42壺棺基〈東南から〉
3. S J 43・S J 44壺棺基  
S J 45壺棺基〈東から〉



1



2

砾石A遺跡  
1. S P46石蓋土壤墓〈北から〉  
2. S P46石蓋下部〈北から〉

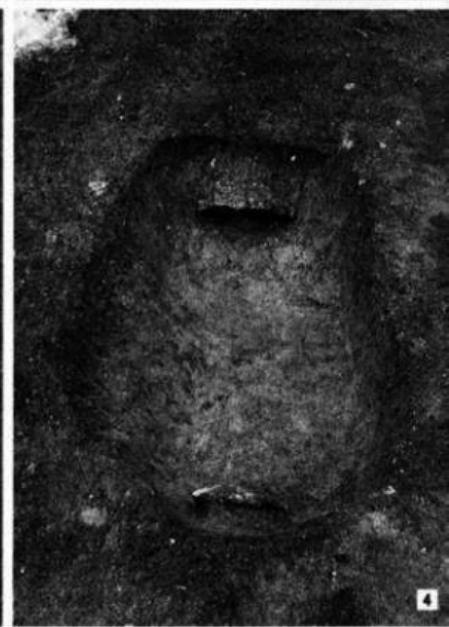
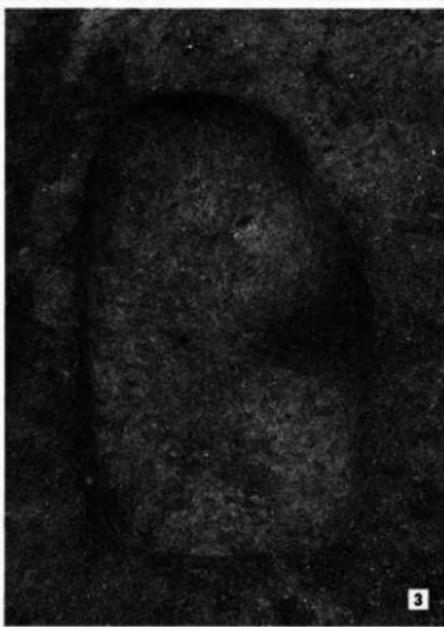
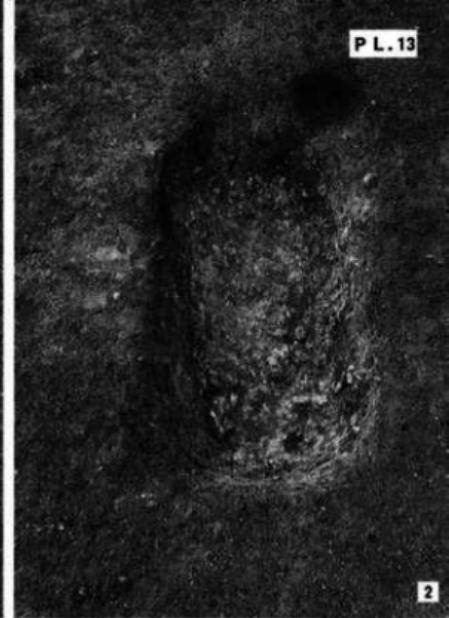


1

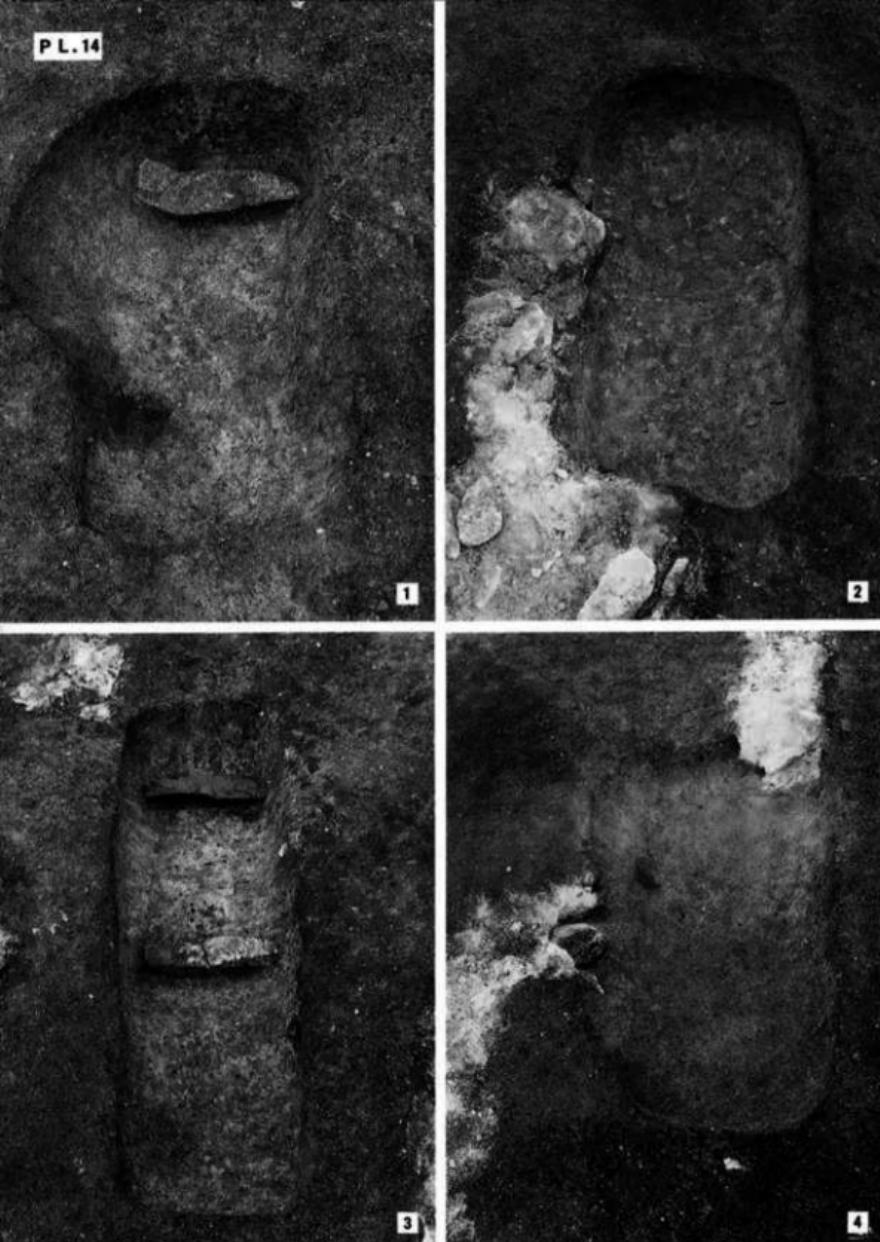


2

躑石 A 遺跡 1. S P 48 石蓋土壙基〈東から〉  
2. S P 48 石蓋下部〈東から〉



雑石A遺跡 1. S P37土壤墓〈東から〉 2. S P38土壤墓〈東から〉  
3. S P51土壤墓〈西から〉 4. S P52土壤墓〈東から〉



砾石A遺跡

1. S P53土壤墓〈東から〉    2. S P54土壤墓〈西から〉  
2. S P55土壤墓〈東から〉    4. S P56土壤墓〈東から〉



1



2

### 碑石A遺跡

1. ST01古墳石室〈南から〉

2. ST02古墳石室〈北から〉

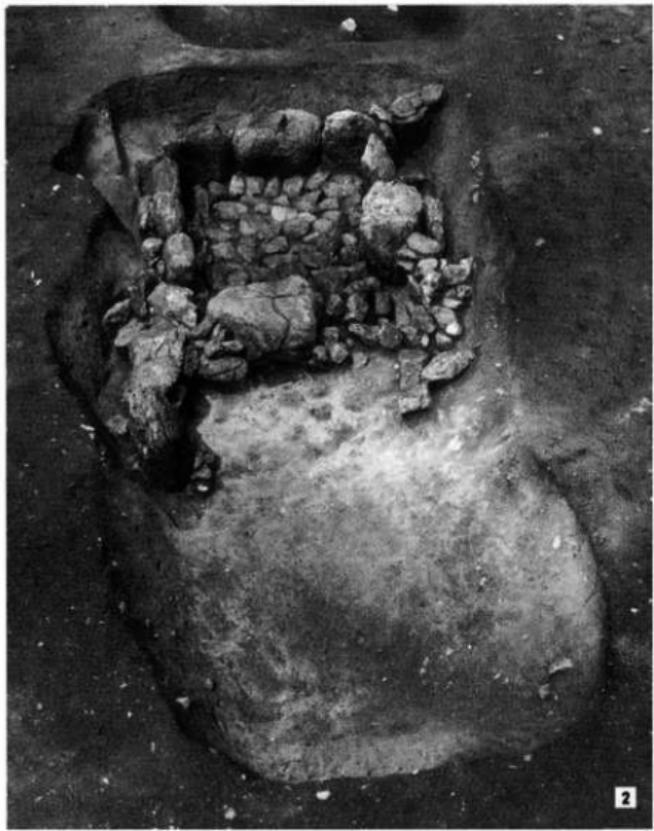


石A遺跡

1. ST03古墳石室〈南から〉
2. ST04古墳石室〈南から〉



1



2

#### 礫石 A 遺跡

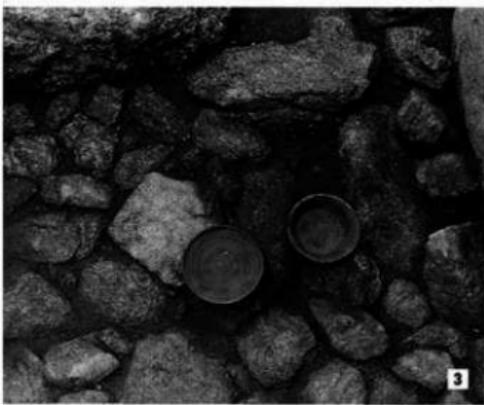
1. ST05古墳石室〈南から〉
2. ST07古墳石室〈南から〉



1



2



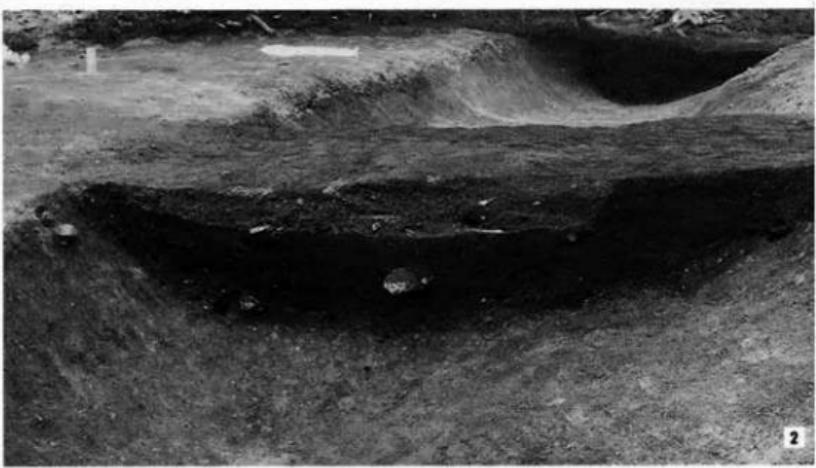
3

### 礫石 A 遺跡

1. S T06古墳石室〈南から〉
2. 玄室遺物出土状況〈東南隅〉
3. 玄室遺物出土状況〈西南隅〉



1



2



3

### 砾石A遺跡

1. ST 49古墳全景〈南から〉
2. 同古墳周溝北東部〈北西から〉
3. 同古墳周溝南西部砾群〈北西から〉



1



2



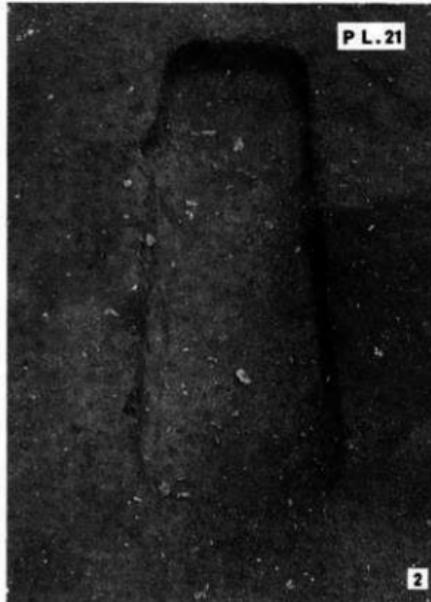
3

#### 森石 A 遺跡

1. S T50古墳石室〈西から〉
2. S T50古墳石室〈北から〉
3. S T50古墳周溝北部〈東から〉



1



2

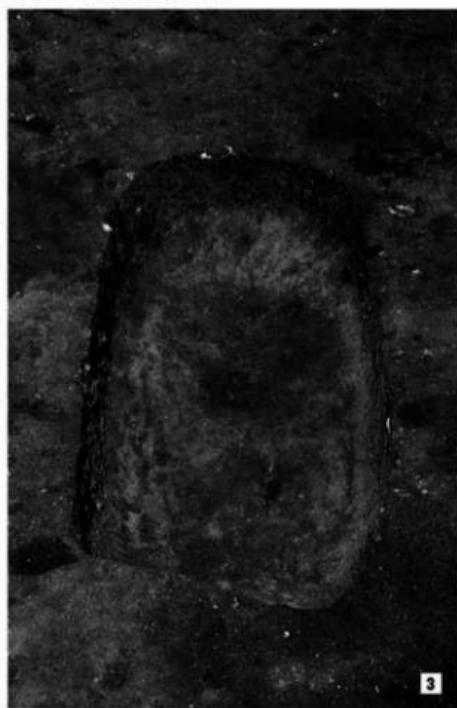
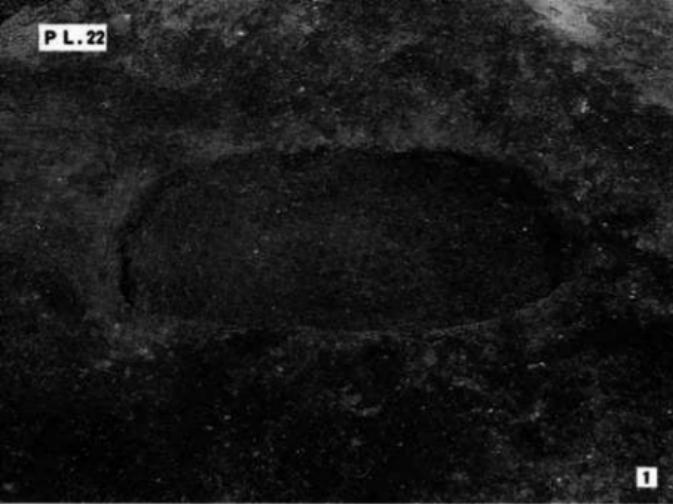


3



4

砾石A遺跡 1. SP09土壤墓〈北から〉 2. SP10土壤墓〈西から〉  
3. SP11土壤墓〈北から〉 4. SP12土壤墓〈北から〉



砾石A遺跡 1. S P13土壤墓〈南から〉  
2. S P14土壤墓〈西南から〉  
3. S P16土壤墓〈西南から〉



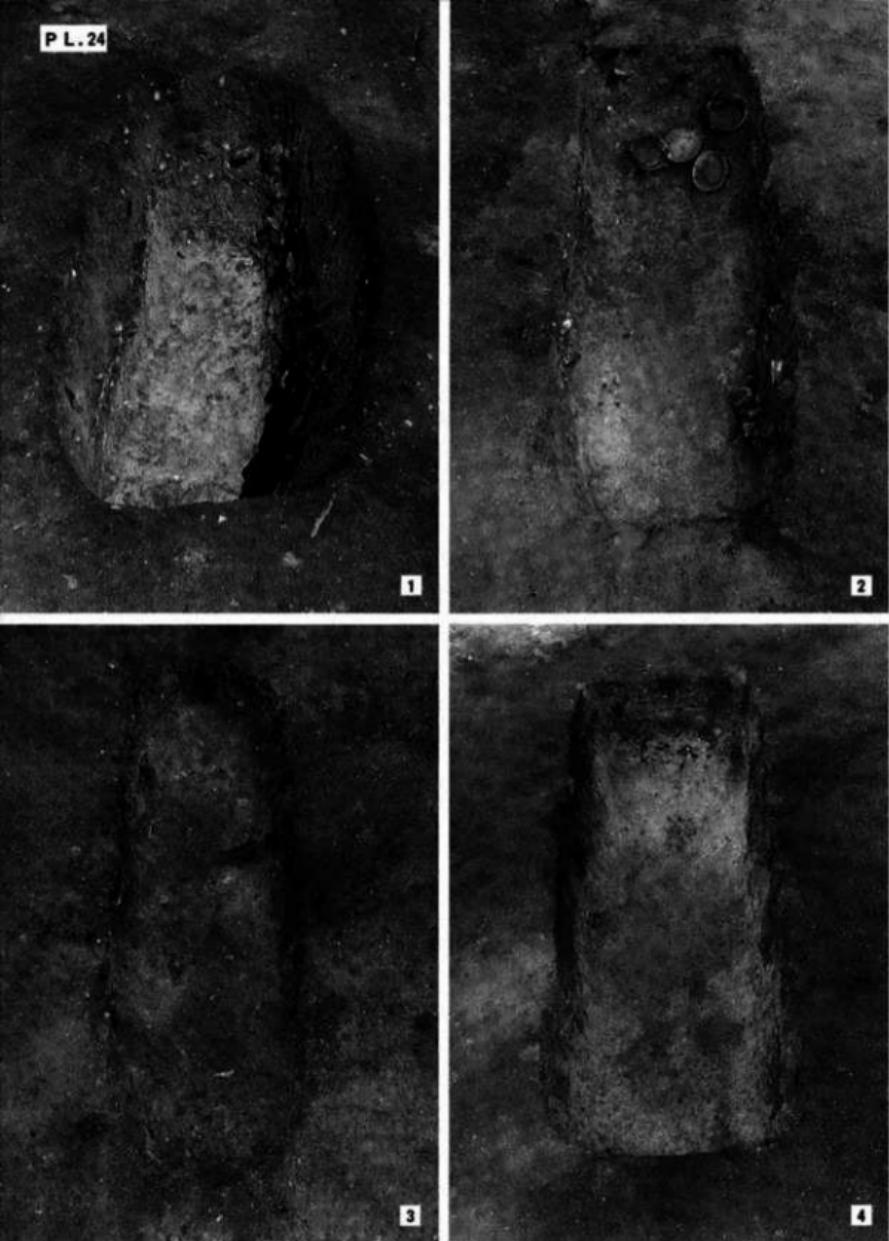
1



2

## 砾石A遺跡

1. SP15土壤墓〈北から〉
2. SP15土壤墓〈東から〉



礫石A遺跡 1. S P17土壤墓〈西から〉 2. S P18土壤墓〈南から〉  
3. S P19土壤墓〈南から〉 4. S P20土壤墓〈東南から〉



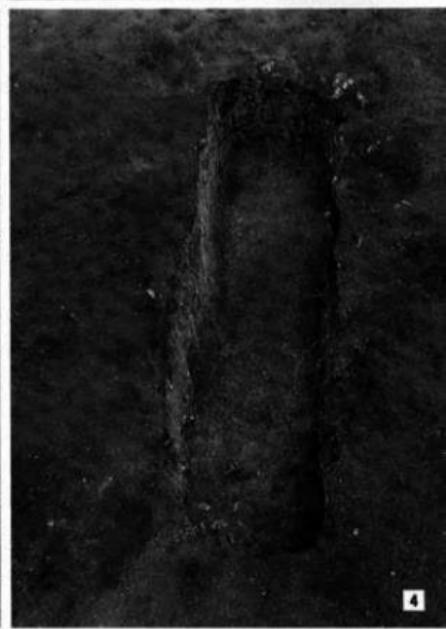
1



2



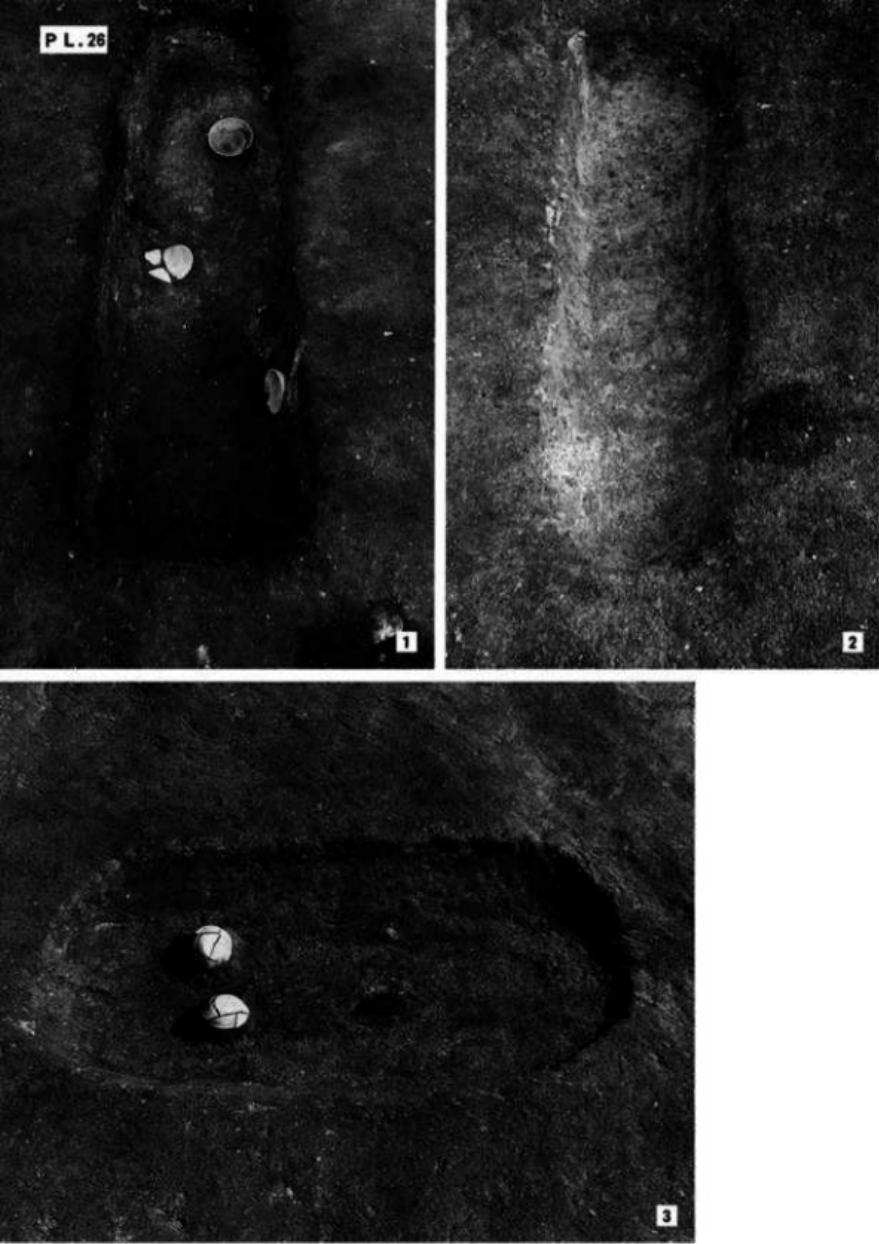
3



4

砾石A遺跡

1. S P21土壤墓〈東から〉  
2. S P23土壤墓〈東から〉  
3. S P24土壤墓〈北東から〉  
4. S P25土壤墓〈西から〉



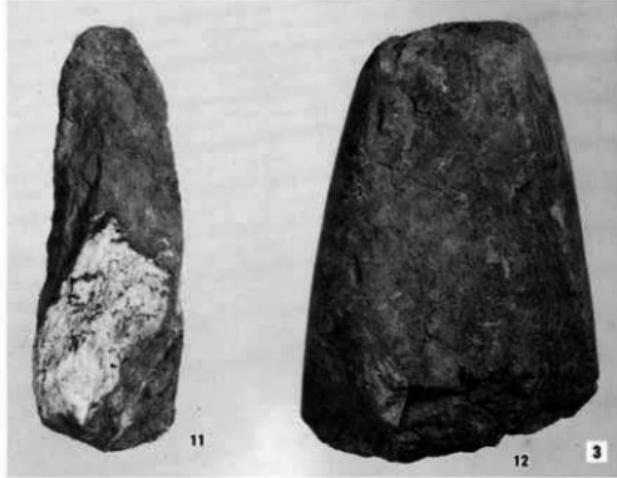
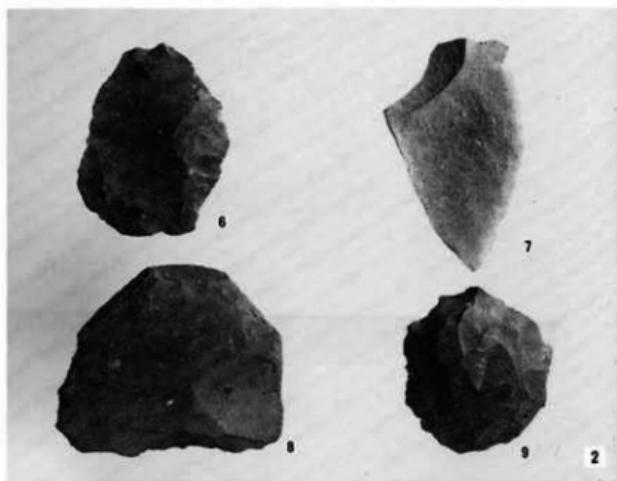
標石A遺跡

1. S P26土壤基〈西から〉

2. S P39土壤基〈北西から〉

3. S P59土壤基〈南から〉

## 砾石 A 遺跡



## 绳文時代石器

S J 28壺棺 (1/4)

15 蓋壺

16 身壺



15



16

S J 29壺棺 (1/4)

17 蓋壺

18 身壺



17



18

S J 30壺棺 (1/4)

19 蓋壺

20 身壺



19



20

S J32壺棺 (1/2)

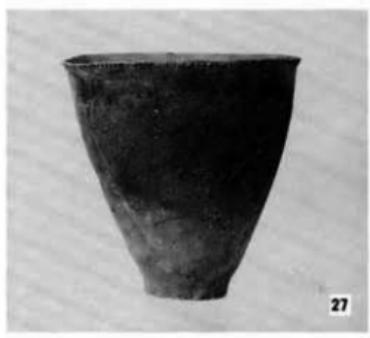
25 蓋甕

26 身甕



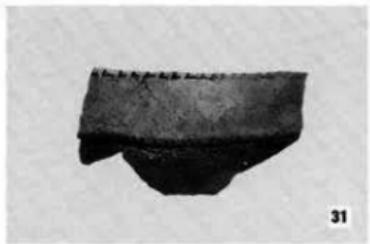
S J34壺棺 (1/2) 27 蓋甕

28 身甕



S J36壺棺 (1/2) 31 蓋甕

32 身甕



S J 35壺棺 (少)

29 蓋壺

30 身壺



29



30

S J 43壺棺 (少)

38 蓋壺

39 底蓋

40 身壺



38



39



40

S J 42壺棺 (1/2)

36 蓋壺

37 身壺



36



37

S J 44壺棺 (1/2) 41 蓋壺

42 身壺



41



42

S T 49周溝埋土

出土壺棺 (1/2)



49



13



14



23



24

S J 27 瓦棺 13 上甕, 14 下甕

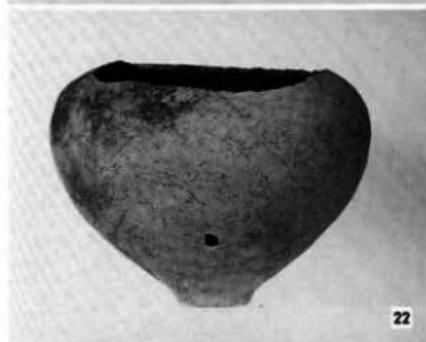
S J 33 瓦棺 23 上甕, 24 下甕



43



21



22

S J31壺棺 (上)

21 蓋, 22 身

S J40壺棺 (上)

33 蓋, 34 身

S J41壺棺 (上)

35 單棺

S J45壺棺 (上)

43 單棺



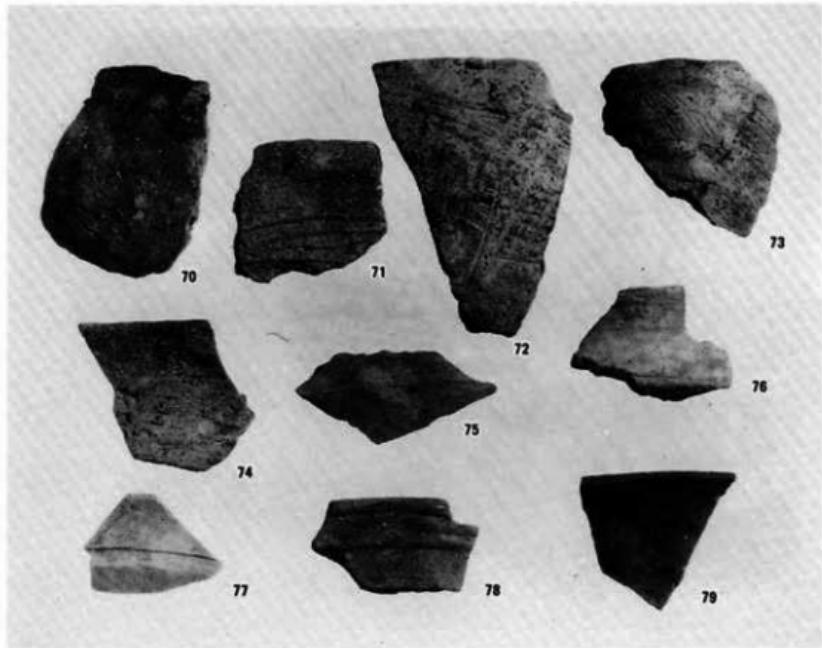
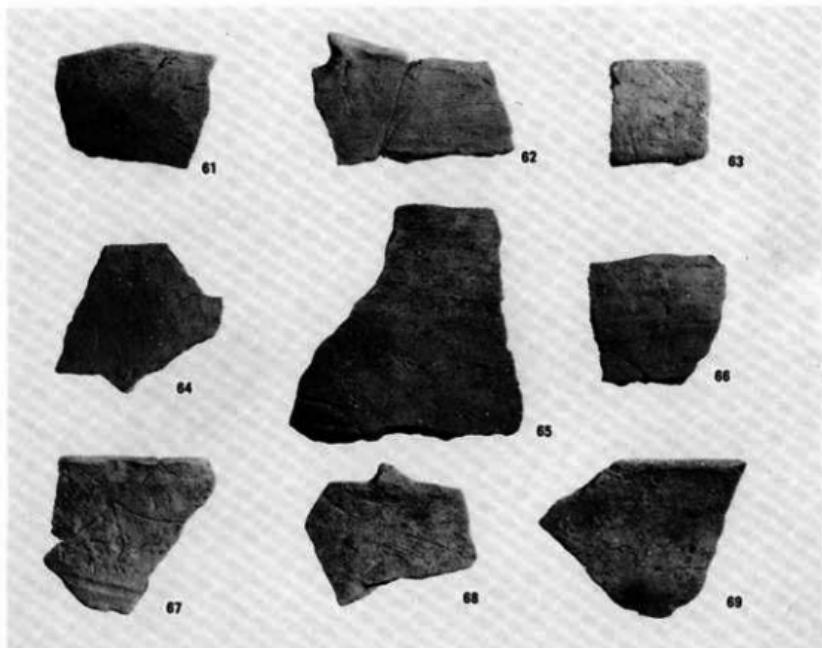
33

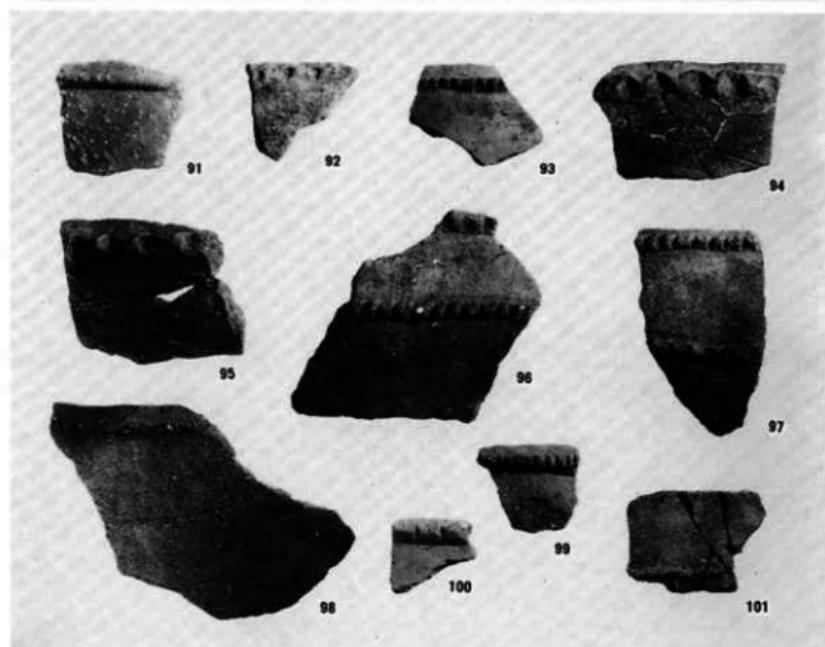
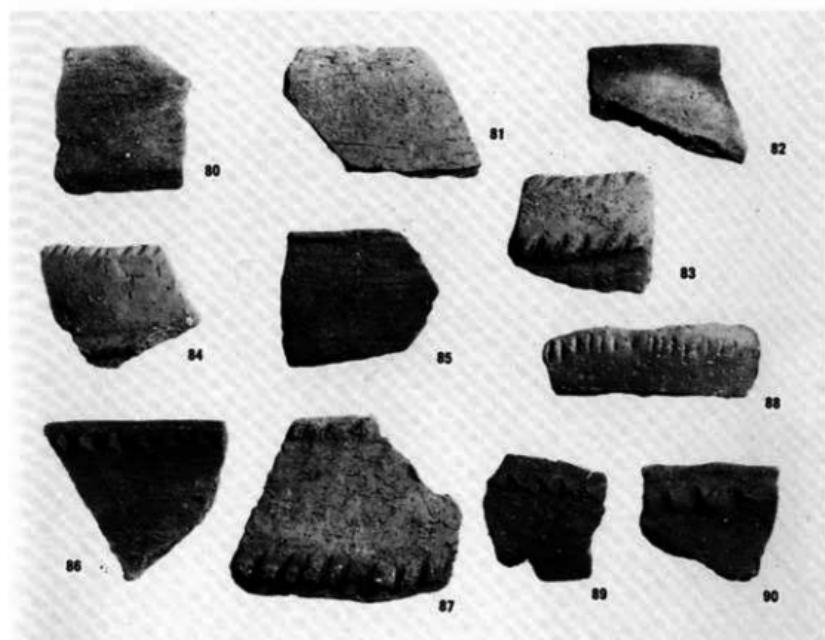


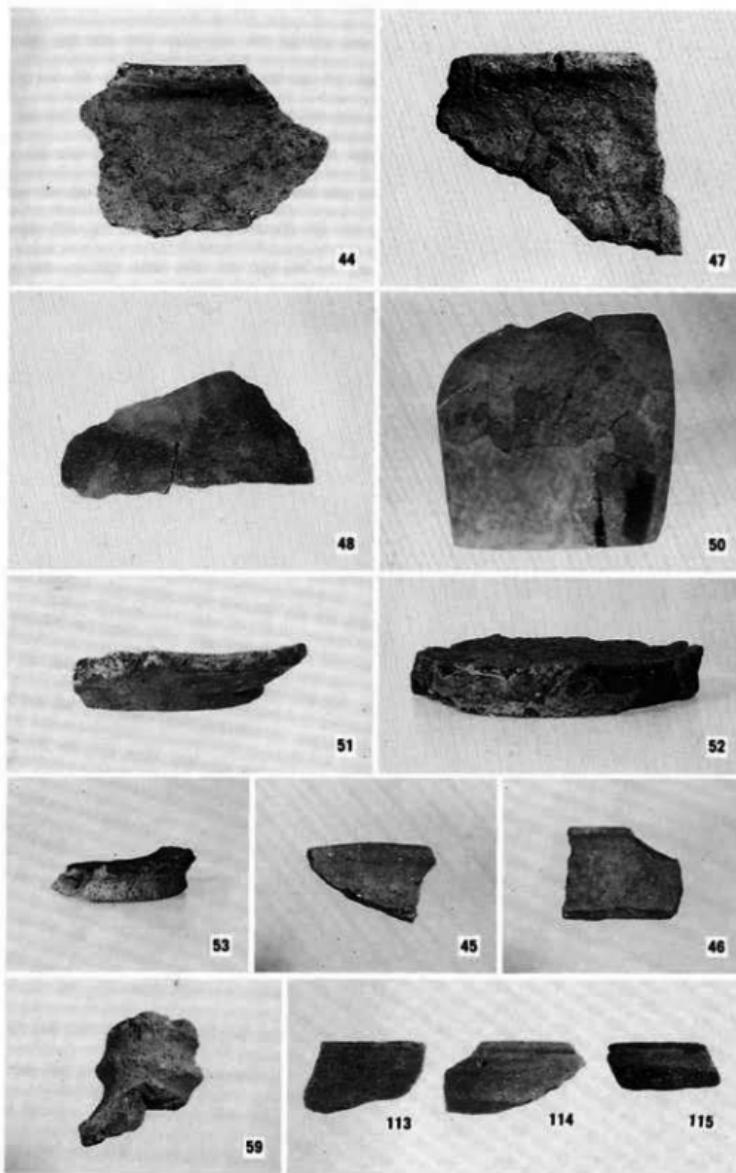
34



35







繩文晩期～弥生前期土器 3

44・47～53 大型壺 48・50 (×), 他 (×)

45・46 大型壺口縁部 (×)

59 高壺脚部 (×)

113～115 浅鉢 (×)



102



103



104



105



107



106



109



108



111



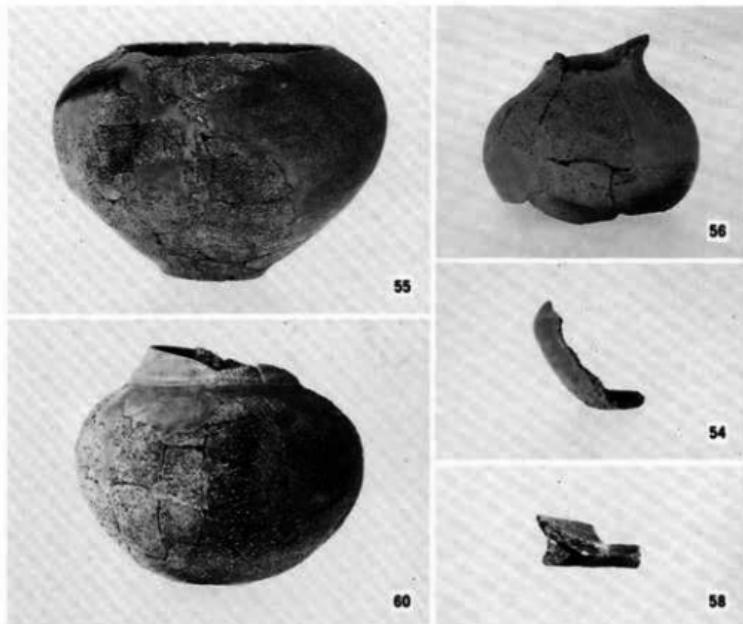
110



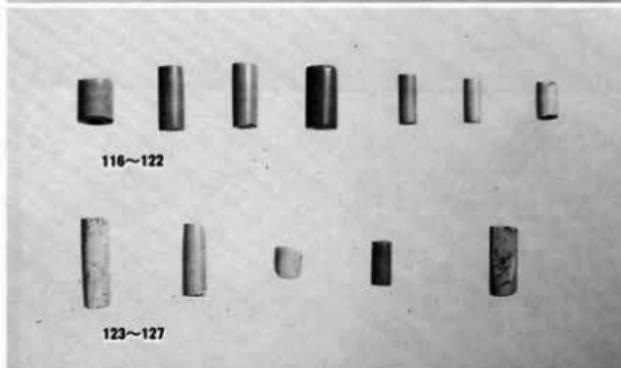
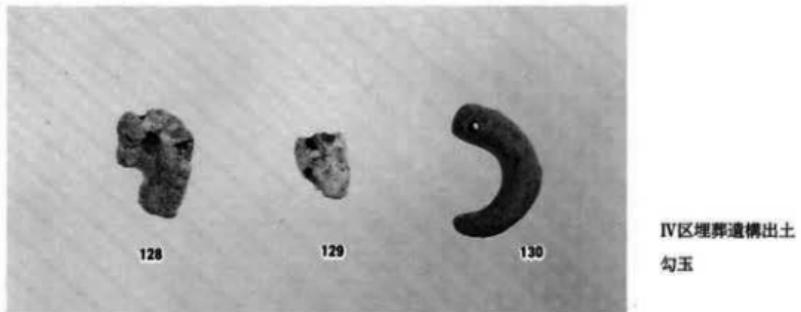
112

## 縄文晚期～弥生前期土器 4

102 鉢底部 (1/2), 103～112 壺底部 (1/2)

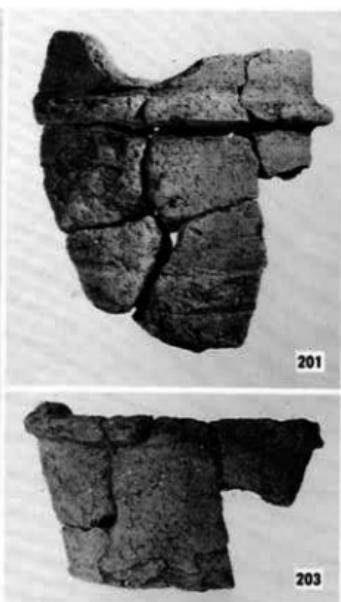


IV区埋葬遺構出土供獻土器 (55~59, 他~60)





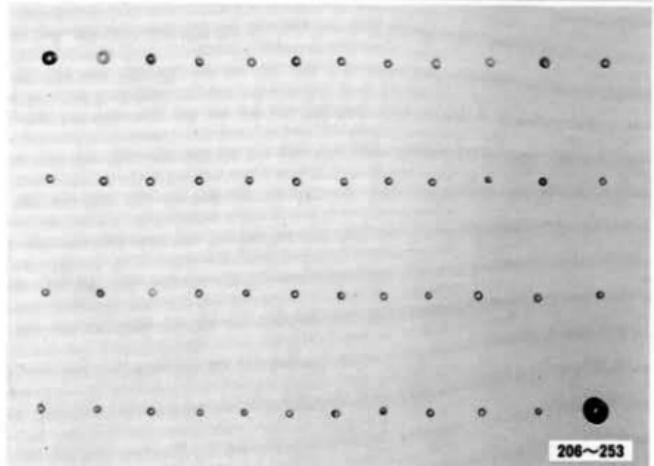
197



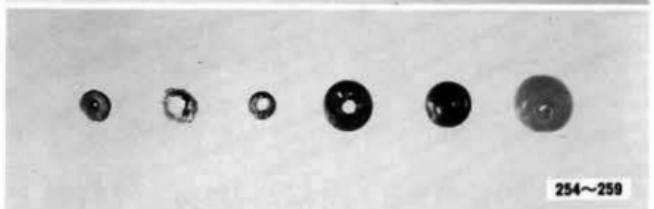
201



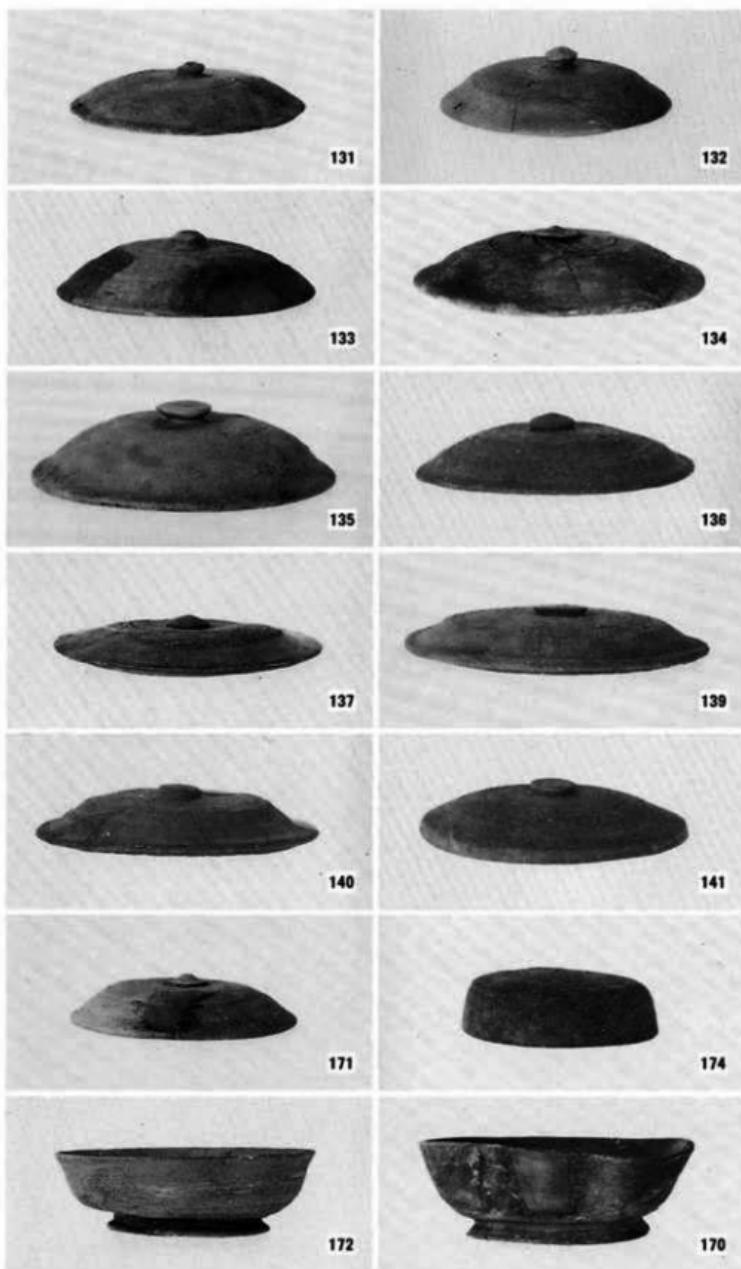
203



206~253



254~259



古墳出土須恵器 1 壺 (少)

131~141—古墳, 171·172—S P 12

174—S P 14, 170—S P 10



144



145



146



147



148



149



151



152



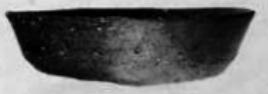
153



154



157



158

## 古墳出土須恵器 2

坏 (1/2)



159



167



168



164



173



161



165



163



166



176



177



180



187



181



182



186



184



190



191



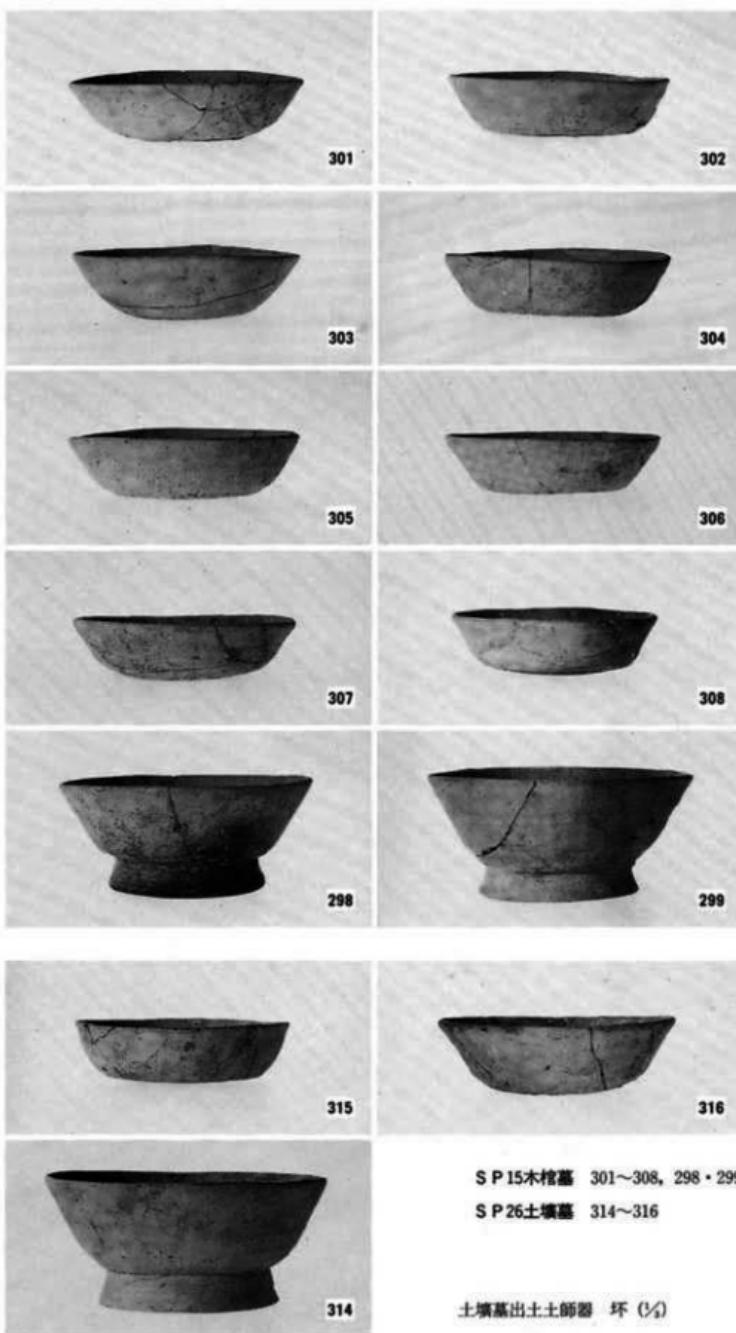
196



192

195高坏の  
ヘラ描文字

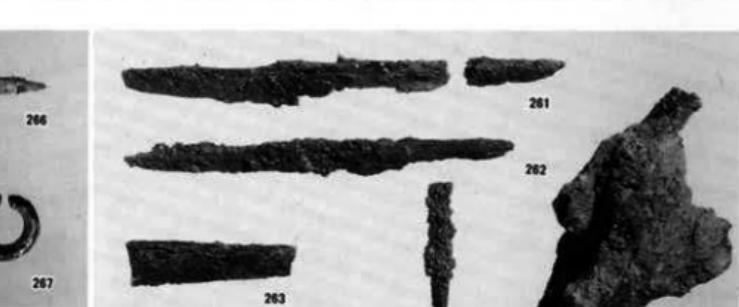
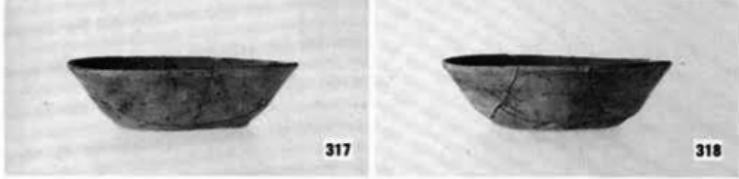
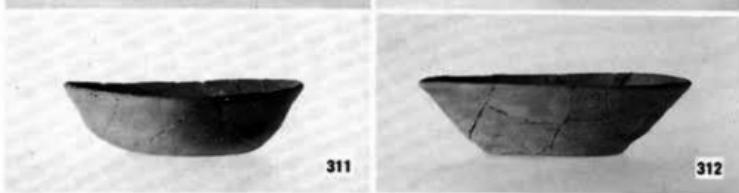
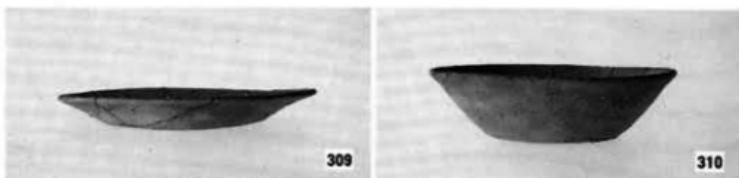
195



S P 15木棺墓 301~308, 298・299

S P 26土壤墓 314~316

土壤墓出土土器 坯 (%)



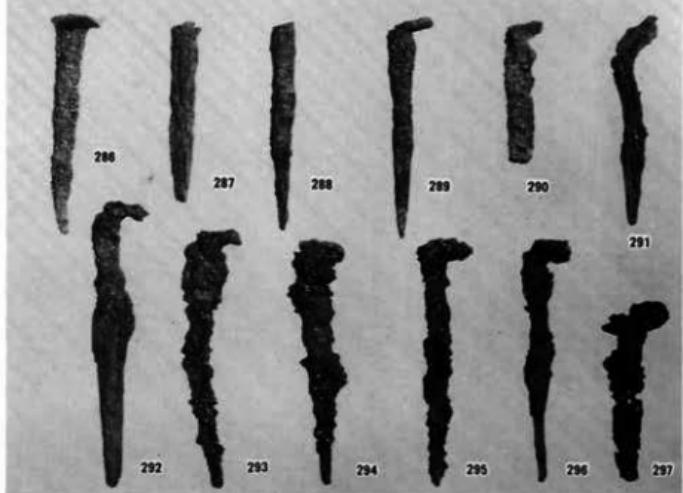
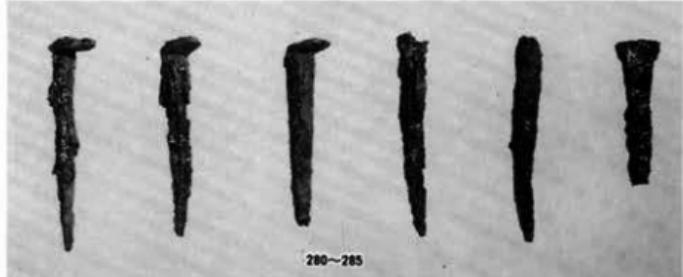
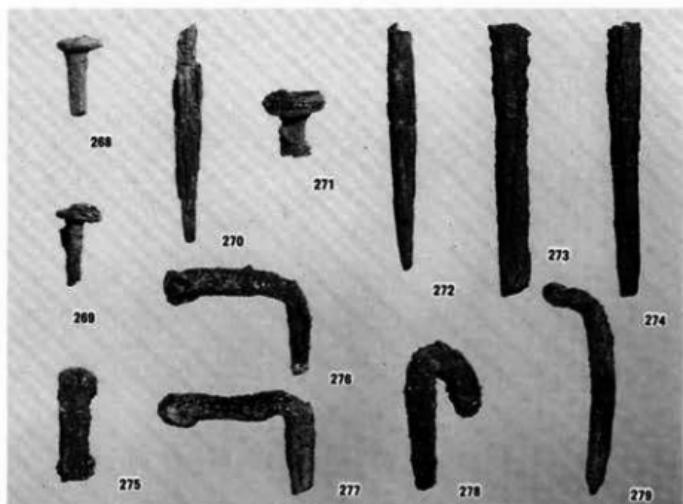
266 管状青銅器

267 耳環

261~263 刀子

264 錄

265 馬具



# 礫 石 B 遺 跡



禮石B遺跡 1 遺跡原景〈西から〉

2 遺跡全景〈西上空から〉



1



2

擧石B遺跡 1 ST04古墳下支石墓群 <北西から>

2 ST04古墳下支石墓群 <北東から>



1



2



3

### 礫石B遺跡

- 1 S A22支石基〈南から〉
- 2 S A23支石墓上石〈南から〉
- 3 S A23支石墓下部〈北から〉



1



2



3

砾石B遺跡

- 1 SA24支石墓〈西から〉
- 2 SA25支石墓〈北から〉
- 3 SA27支石墓〈南から〉



1



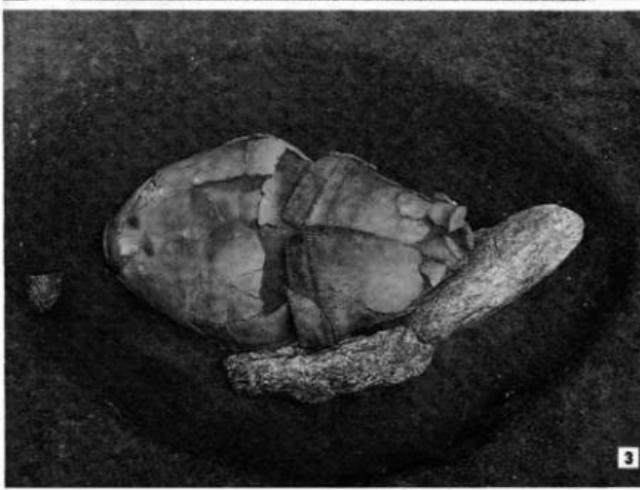
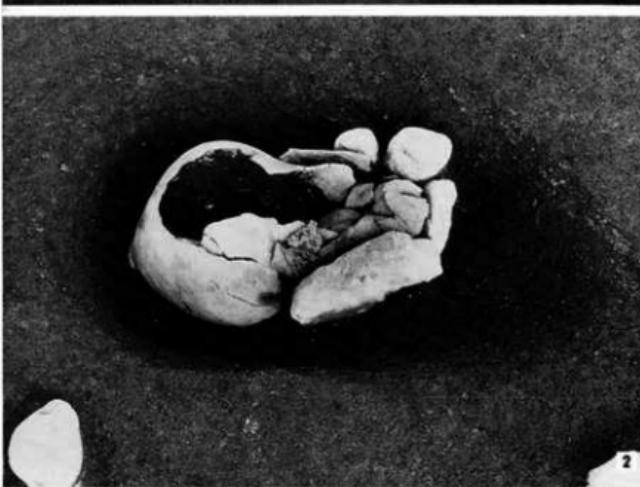
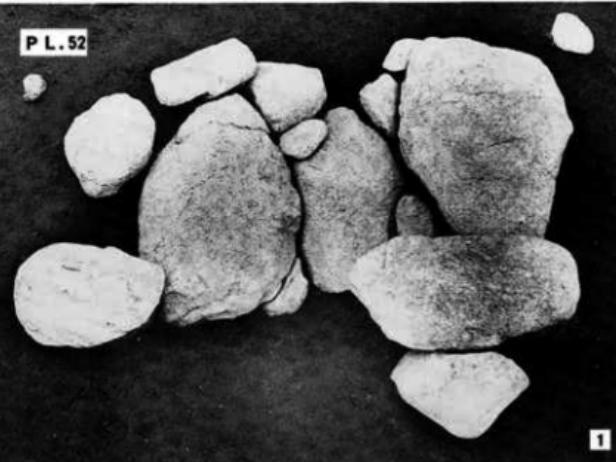
2



3

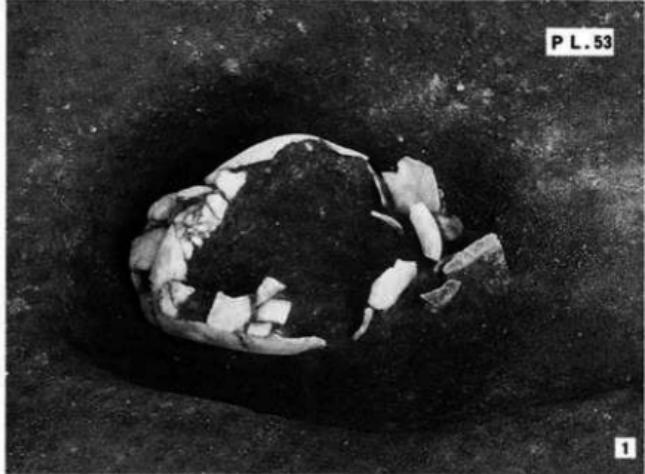
### 標石B遺跡

- 1 S A30支石墓〈南から〉
- 2 S A35支石墓〈北から〉
- 3 S A36支石墓〈南から〉



砾石B遺跡

- 1 SA37支石墓石蓋〈北から〉
- 2 SA37支石墓下部〈南から〉
- 3 SA38支石墓〈南から〉



1



2



3

**磚石B遺跡**

- 1 S A41支石墓〈南から〉
- 2 S A42支石墓石蓋〈北から〉
- 3 S A42支石墓下部〈北から〉



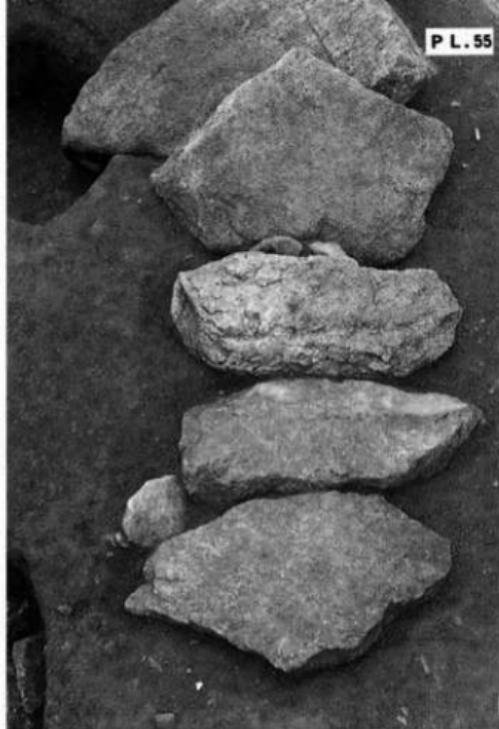
1



2

標石B遺跡

- 1 SA26支石墓上石〈南から〉
- 2 SA26支石墓下部〈西から〉



躰石B遺跡

- 1 SA26支石墓石蓋〈西から〉
- 2 SA26支石墓下部〈西から〉



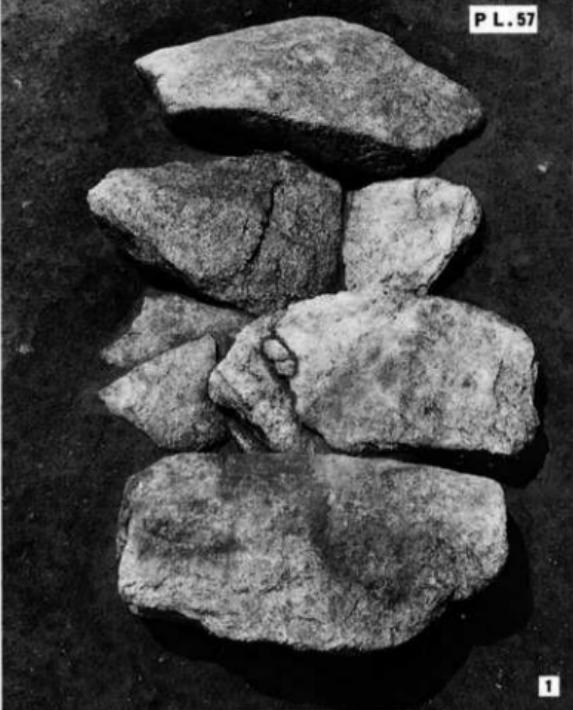
1



2

碑石B遺跡

- 1 S A29支石墓上石〈南から〉
- 2 S A29支石墓上石〈西から〉



1



2

砾石B遺跡

- 1 S A29支石墓石蓋〈東から〉
- 2 S A29支石墓下部〈東から〉



礎石B遺跡

1 S A31支石墓上石〈北から〉

2 S A31支石墓上石〈西から〉



1



2

**砾石B遺跡**

- 1 SA31支石墓石蓋〈北から〉
- 2 SA31支石墓下部〈東から〉



1



裸石B遺跡

1 SA33支石墓上石〈南から〉

2 SA33支石墓上石〈東から〉

2



1



2

砾石B遺跡

- 1 S A32支石墓石蓋〈北から〉
- 2 S A32支石墓下部〈西から〉



砾石B遺跡

- 1 S A33支石墓石蓋〈西から〉
- 2 S A33支石墓下部〈西から〉



1



2

躰石B遺跡 1 S A34支石墓上石〈南東から〉

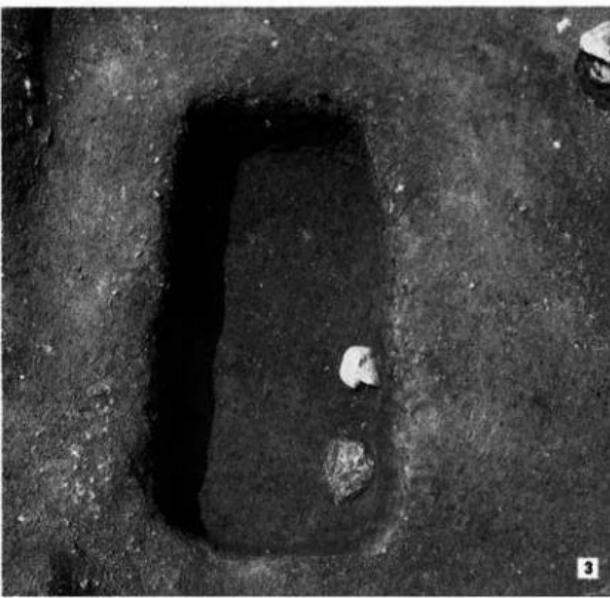
2 S A34支石墓下部〈北から〉



1



2



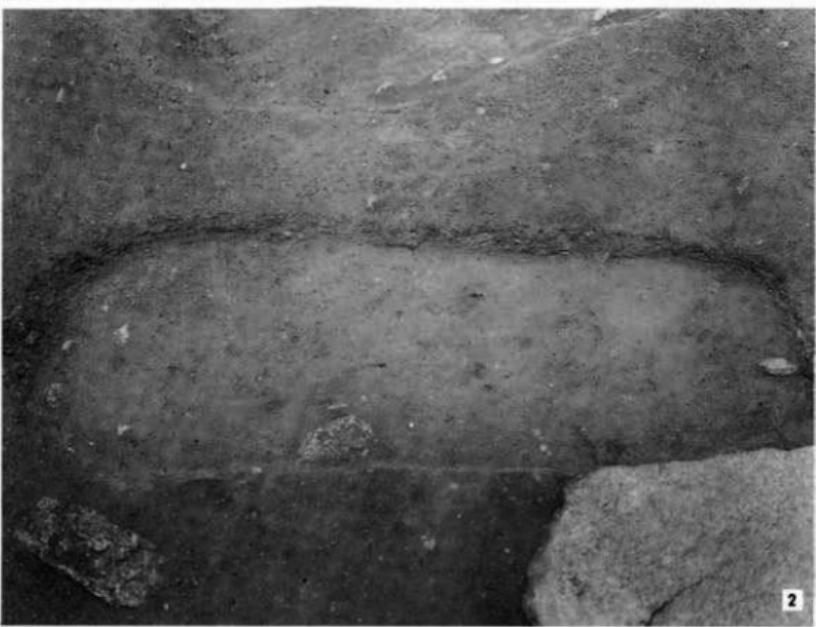
3

## 碑石B遺跡

- 1 SA43支石墓石蓋〈南から〉
- 2 SA43支石墓石蓋上土器出土  
状況〈南西から〉
- 3 SA43支石墓下部〈西から〉



1



2

砾石B遺跡 1 SA44支石墓下部〈北から〉  
2 SA45支石墓下部〈北から〉



標石B遺跡

- 1 南東部石棺群全景〈北から〉
- 2 S K15土壤〈東から〉
- 3 S J 13, S J 14斐棺墓およびS K15土壤〈南から〉



1



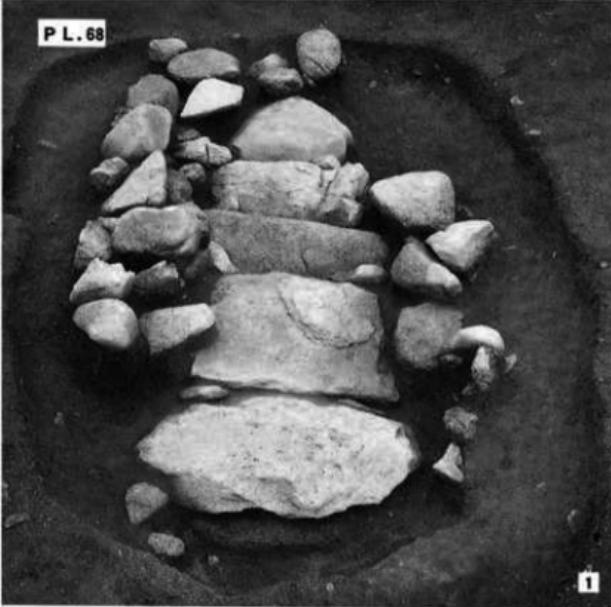
2



3

### 砾石B遺跡

- 1 SC05石棺墓の壺副葬状況  
(西北から)
- 2 SC05石棺墓—蓋石〈南から〉
- 3 SC05石棺墓一身〈南から〉



1



2

擗石遺跡

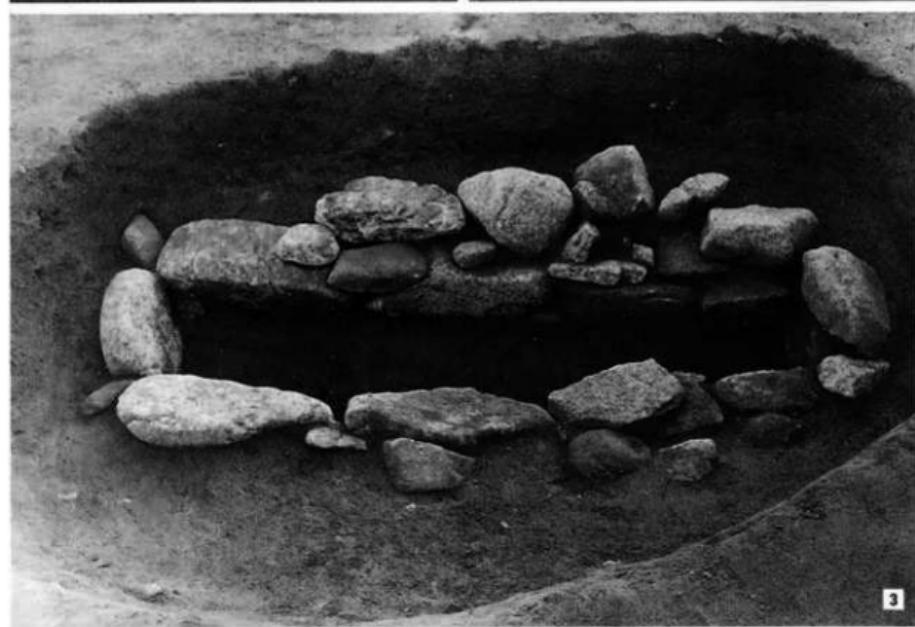
- 1 SC06石棺墓一蓋石〈西から〉
- 2 SC06石棺墓一身〈西から〉



1



2



3

礎石B遺跡 1 S C07石棺墓一上石〈西から〉  
2 S C07石棺墓一蓋石〈西から〉  
3 S C07石棺墓一身〈北から〉



砾石B遺跡 1 SC08石棺基一蓋石〈西から〉 2 同石棺基一身〈西から〉

3 SC09石棺基一蓋石〈西から〉 4 同石棺基一身〈西から〉



1



2



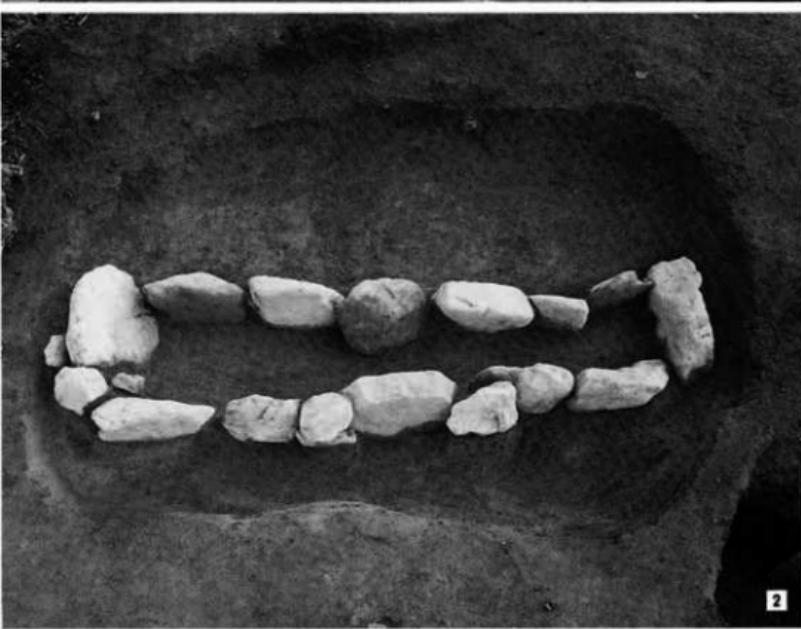
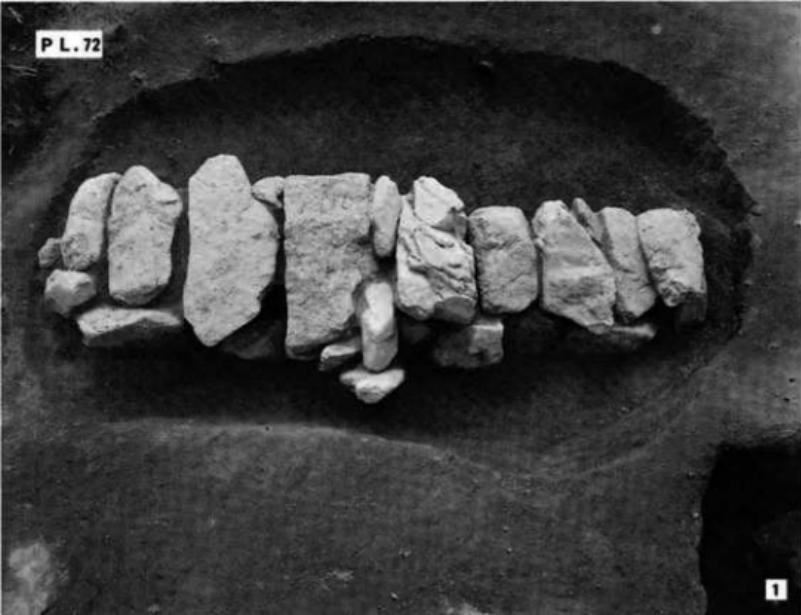
3



4

砾石B遺跡 1 SC10石棺墓一蓋石〈西から〉 2 同石棺墓一身〈東から〉

3 SC11石棺墓一蓋石〈南から〉 4 同石棺墓一身〈南から〉



疊石B遺跡 1. S C12石棺墓一蓋石 <北から>

2. 同 石棺墓一身 <北から>



裸石B遺跡

1. SK21土壤〈北から〉
2. SK22・SK23土壤〈北から〉

1



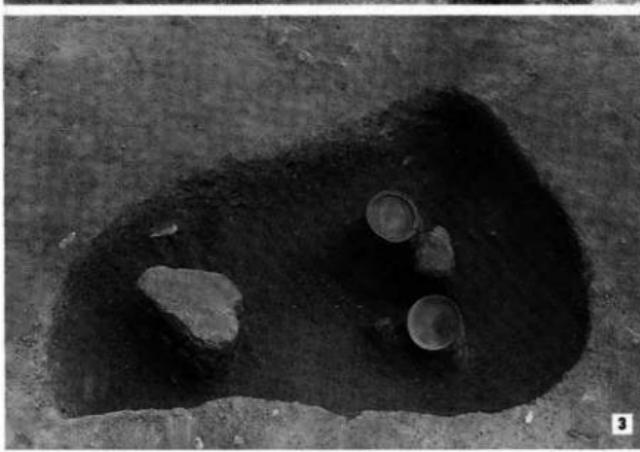
2



1



2



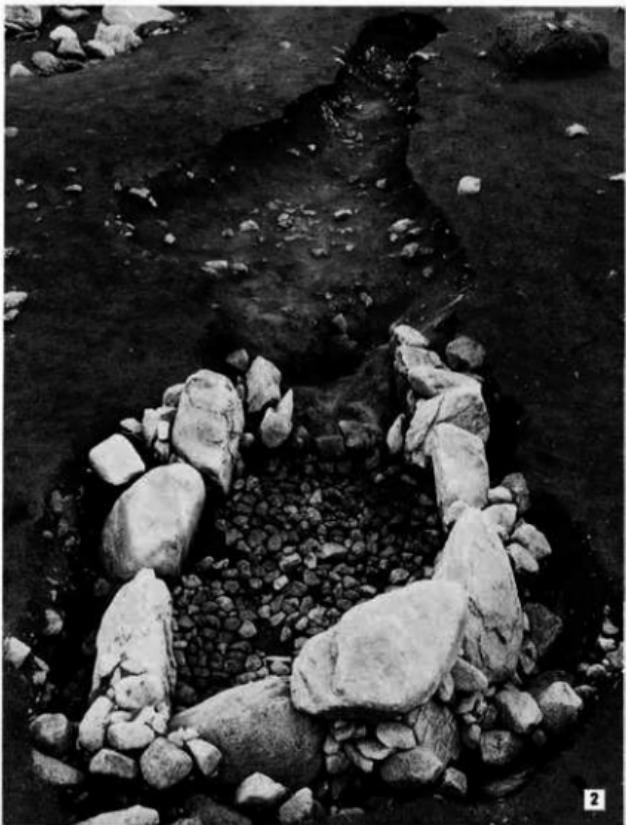
3

## 礫石B遺跡

1. SK16土壤〈北から〉
2. 同遺構遺物出土状況〈北東から〉
3. SP17土壤墓〈西から〉



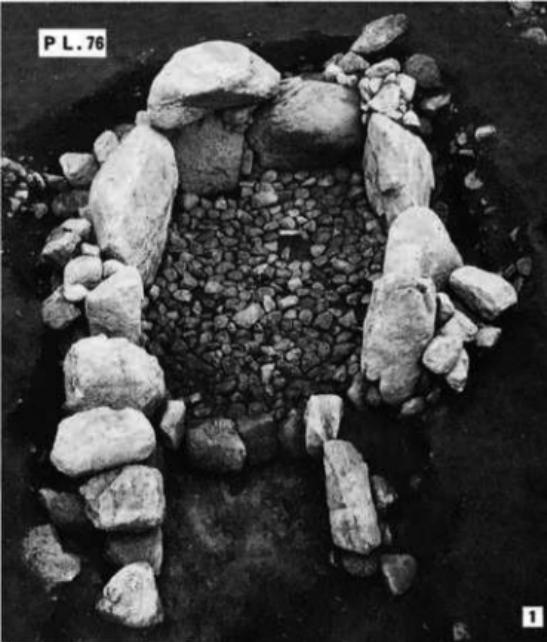
1



2

**裸石B遺跡**

1. S T01・S T02・  
S T03古墳〈南から〉
2. S T02古墳石室〈北から〉



砾石 B 遺跡

1. ST02古墳石室〈南から〉
2. 同古墳閉塞状況〈南から〉
3. 同古墳玄室内遺物出土状況  
〈西南隅〉



1



2

**砾石B遺跡**

1. S T 03古墳石室  
閉塞状況〈南から〉
2. 同古墳石室〈南から〉



礫石B遺跡

1. S T18古墳石室〈南から〉
2. 同 古墳石室〈西から〉

1



2



1



2



3

### 疊石B遺跡

1. ST04古墳原景  
〈西南から〉
2. 同古墳全景〈西から〉
3. 同古墳石室〈西から〉



1



2



3

#### 縄石B遺跡

1. ST04古墳閉塞状況〈西から〉
2. 同古墳石室奥壁〈西から〉
3. 同古墳石室狭道部〈東から〉



1



2

砾石B遺跡 1. ST04古墳南北両側盛土状況  
〈西から〉  
2. 同古墳東側盛土状況 〈南から〉



1



2



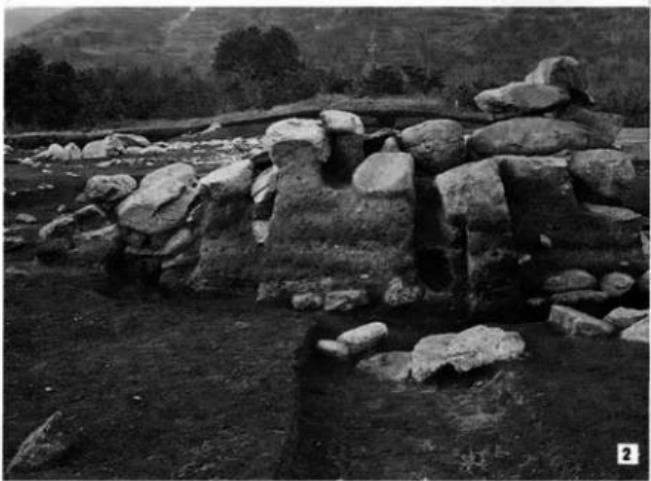
3

#### 砾石B遺跡

1. S T04古墳西北区  
盛土下遺物出土状況〈西から〉
2. 同古墳盛土下 S A36支石墓〈東南から〉
3. 同古墳盛土下 S A29支石墓〈西南から〉



1



2



3

### 櫛石B遺跡

1. ST04古墳石室奥壁  
裏側〈北東から〉
2. 同古墳石室東南側壁  
裏側〈東南から〉
3. 同古墳石室北西側壁  
裏側〈北西から〉



235 236 241 242 247



239 237 248 238 253



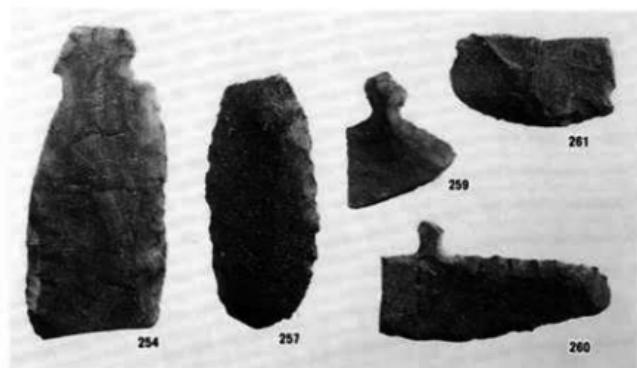
244 250 249 252 251



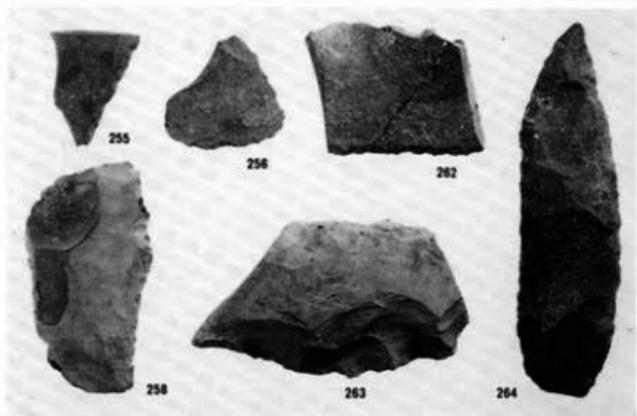
243 245 246 240

繩文時代石器 1

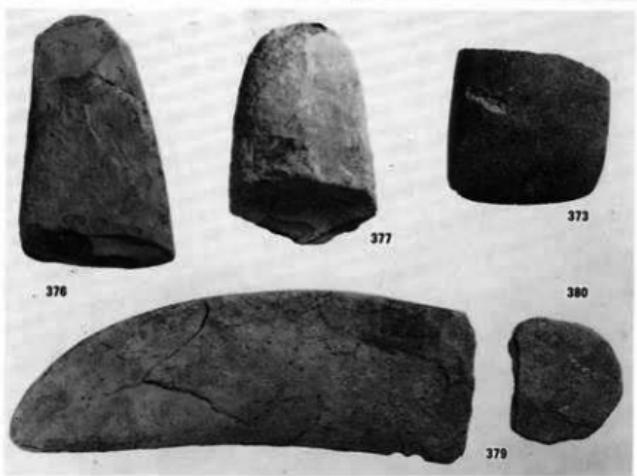
石鏃

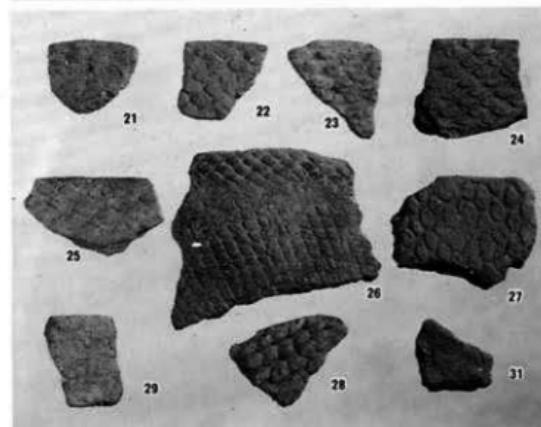
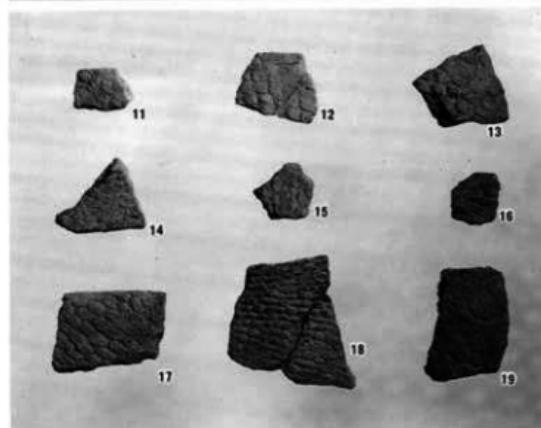
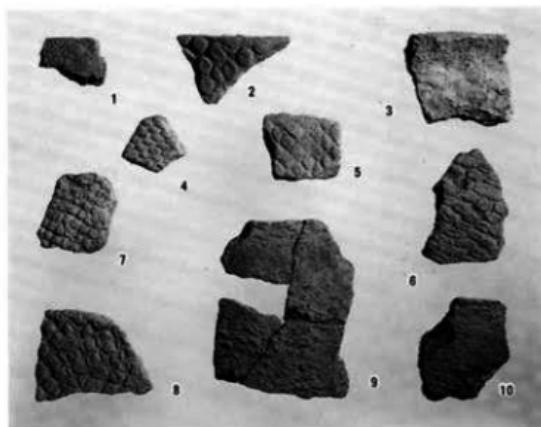


縄文時代  
石器 2

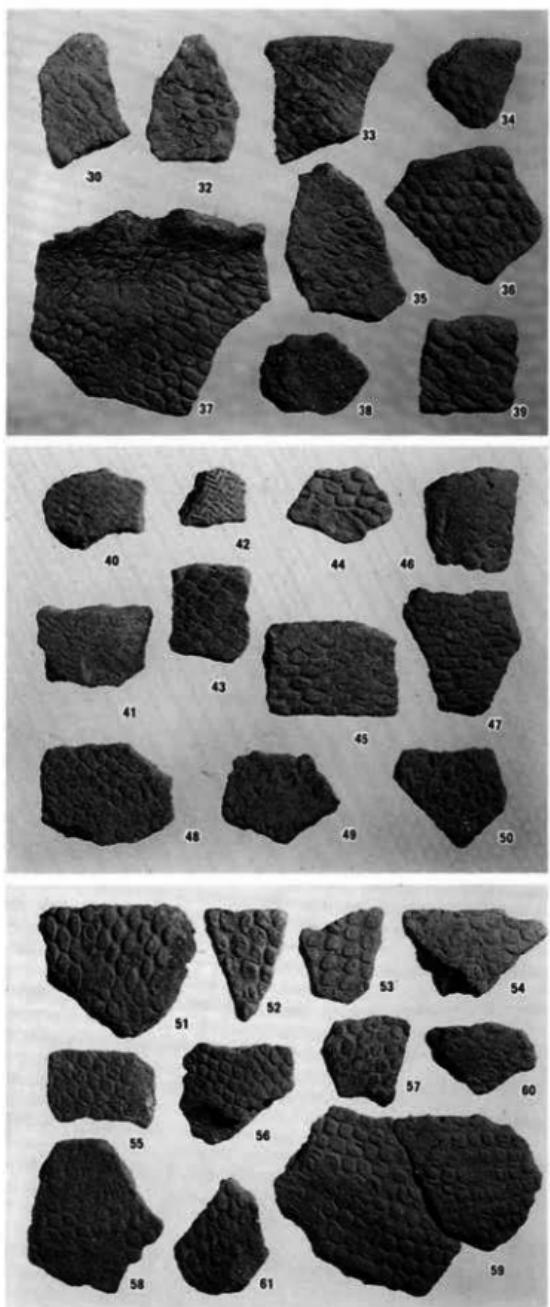


弥生時代  
石器

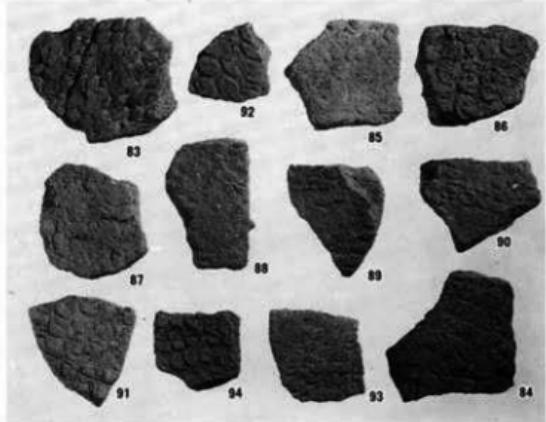
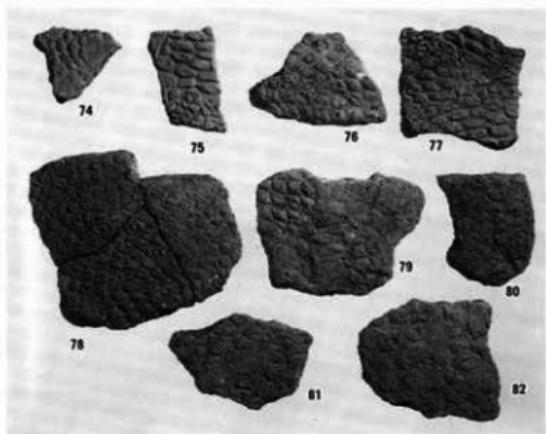
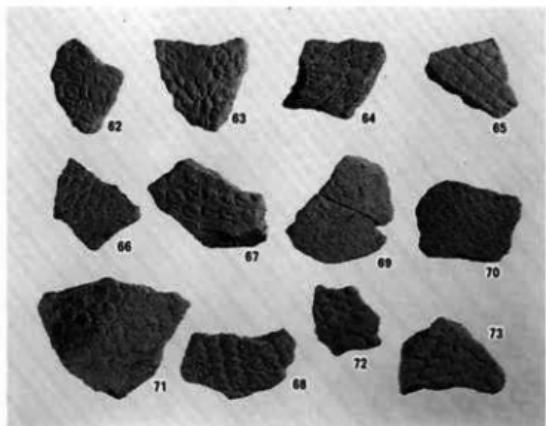




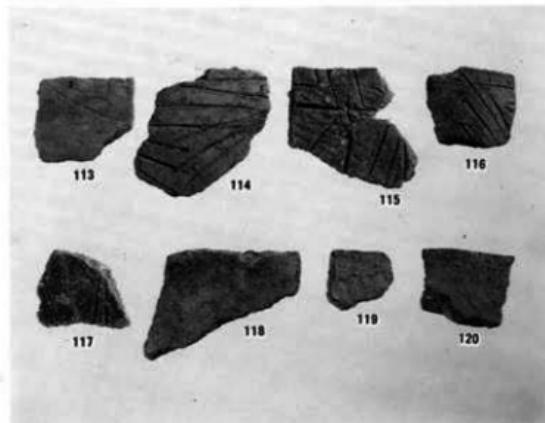
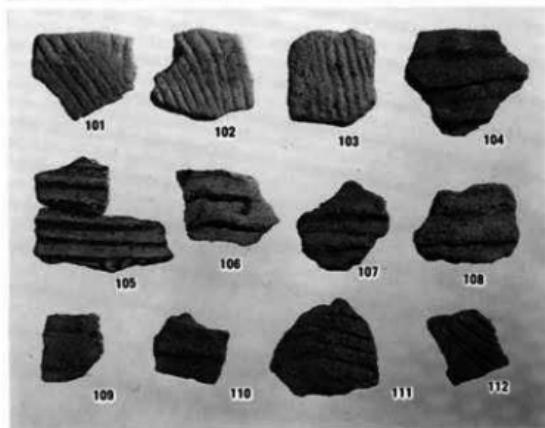
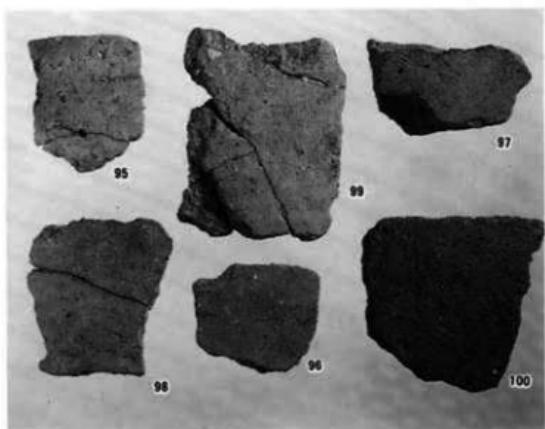
網文早・前期  
土器 1



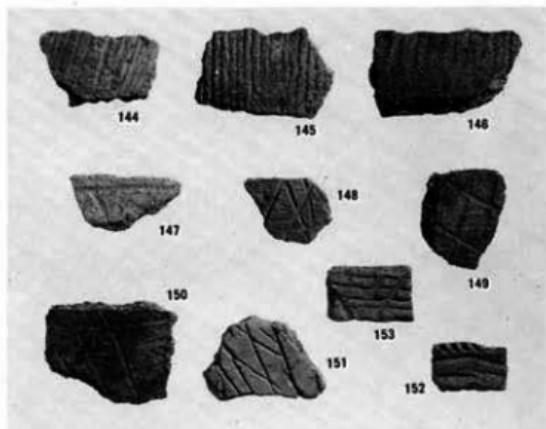
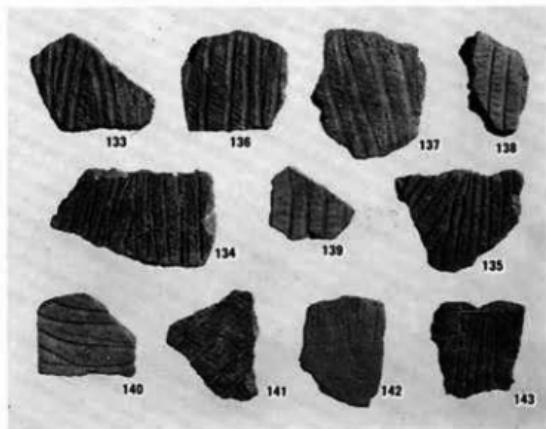
繩文早・前期  
土器 2



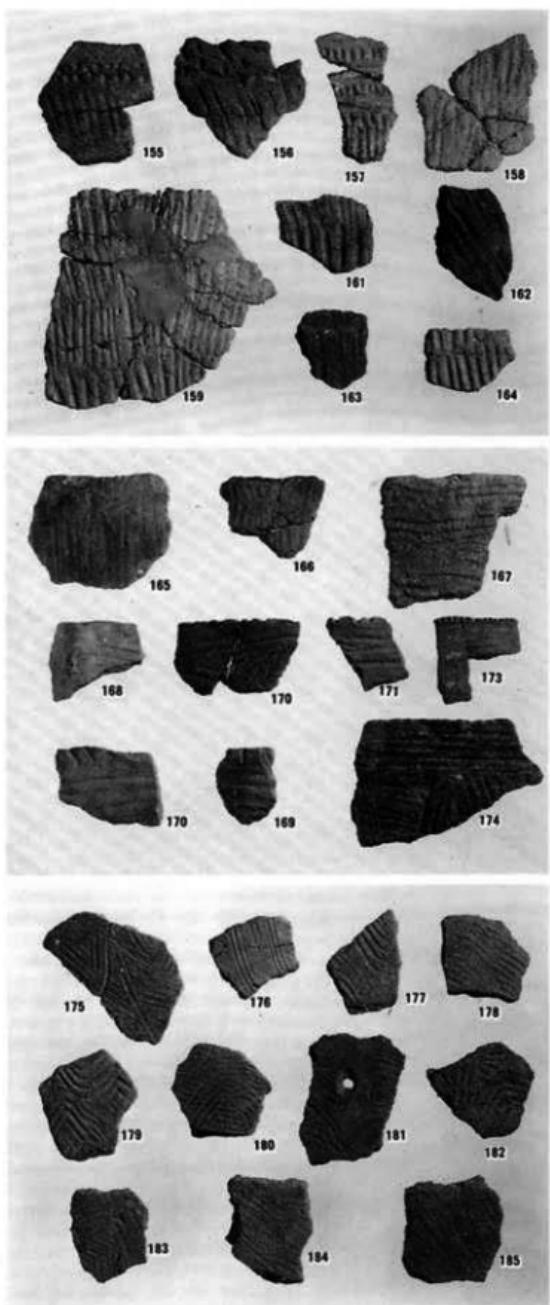
繩文早・前期  
土器 3



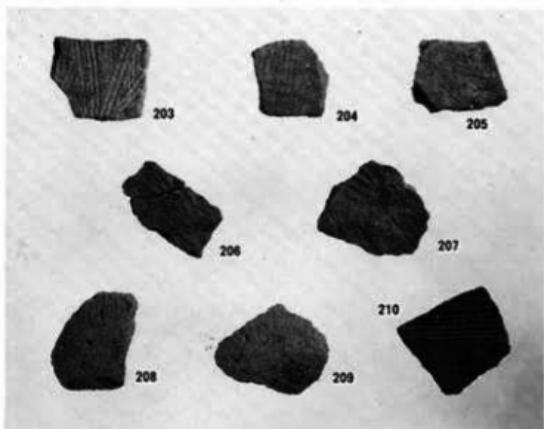
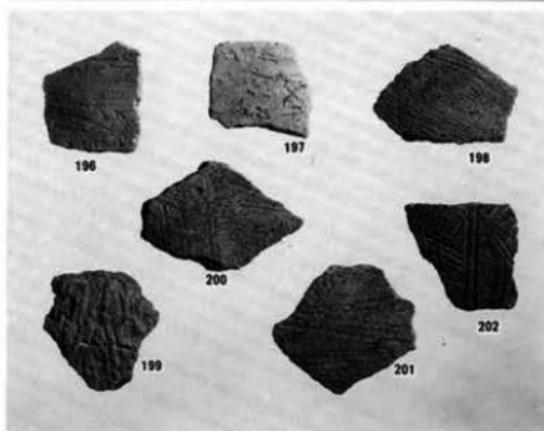
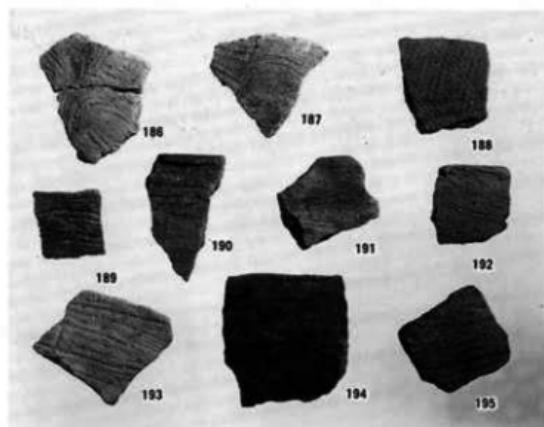
縄文早・前期  
土器 4



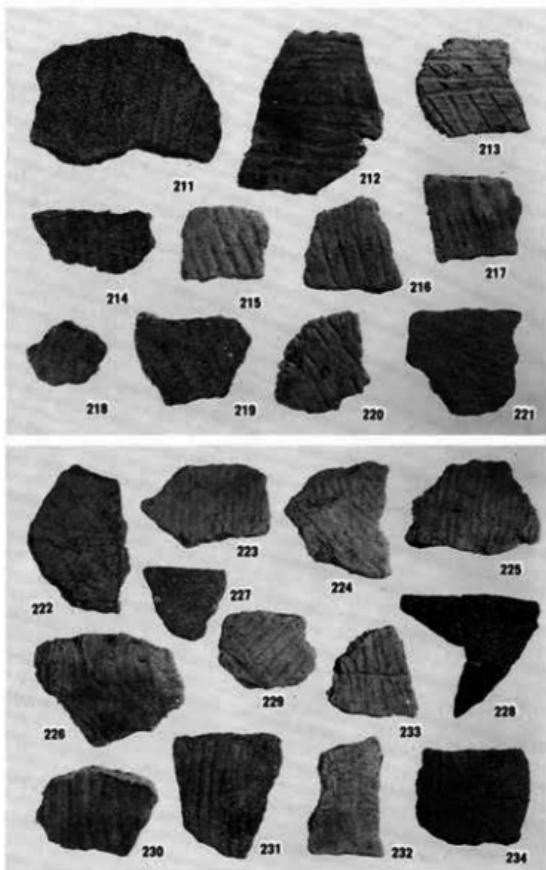
繩文早・前期  
土器 5



繩文早・前期  
土器 6



繩文早・前期  
土器 7



網文早・前期土器 8

154 (1/4)



154



265



266



267

## S A 22支石墓 (少)

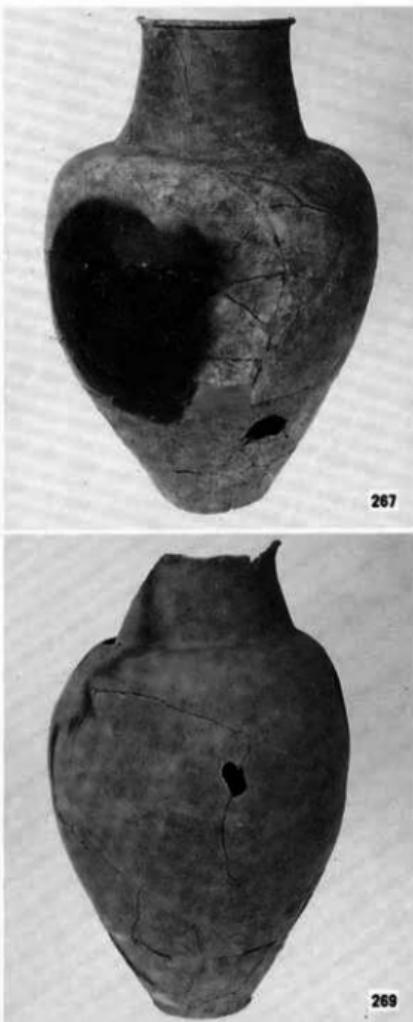
265 蓋甕

266 底蓋

267 身壺



268



269

## S A 23支石墓 (少)

268 蓋甕

269 身壺



270

## S A 24支石墓 (少)

270 身壺

S A 25 支石墓 (少)

271 蓋鉢

272 身壺



271



272

S A 27 支石墓 (少)

273 蓋鉢

274 身壺



273



274

S A 30支石墓 (1/4)

285 蓋壺

286 身壺



285



286

S A 35支石墓 (1/4)

275 蓋壺

276 身壺



275



276

S A36支石墓 (1/4)

277 蓋壺

278 身壺



277



278

S A37支石墓 (1/4)

279 蓋壺

280 身壺



279



280

S A38支石墓 (1/4)

281 蓋壺

282 身壺



281



282

S A41支石墓 (1/4)

283 蓋壺

284 身壺



283



284

S A39支石墓 (1/4)

289 身壺



289

S A 42支石墓

287 蓋甕 (1/4)

288 身壺 (1/4)



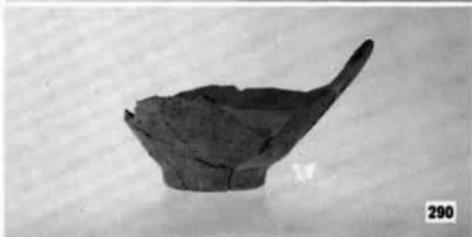
287



288

S A 40支石墓

290 身壺 (1/4)



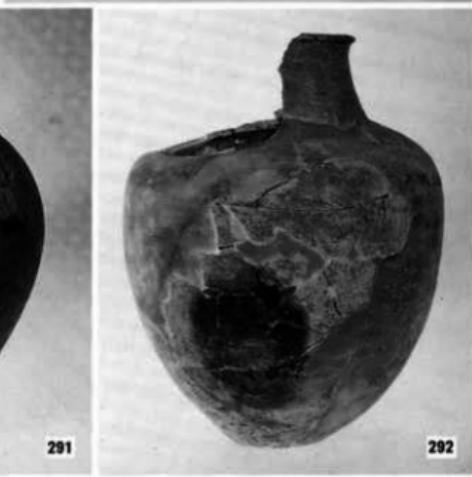
290

S T04古墳墳丘内

出土壺棺 291・292 (1/4)



291



292

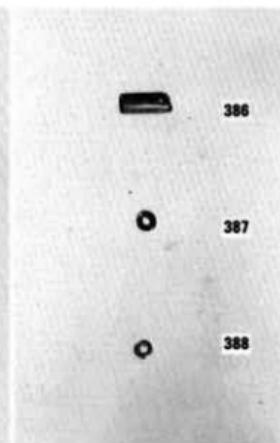


S T04古墳墳丘内出土壺棺 (少)

支石墓および石棺墓出土玉類

S A26 386 碧玉製管玉

S C06 387・388 ガラス小玉

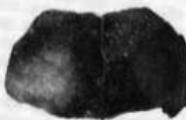




309



308



310



302



306



303



305



307



313



314



304



299



311



312



298



118



317



321



320



319



315



300



301

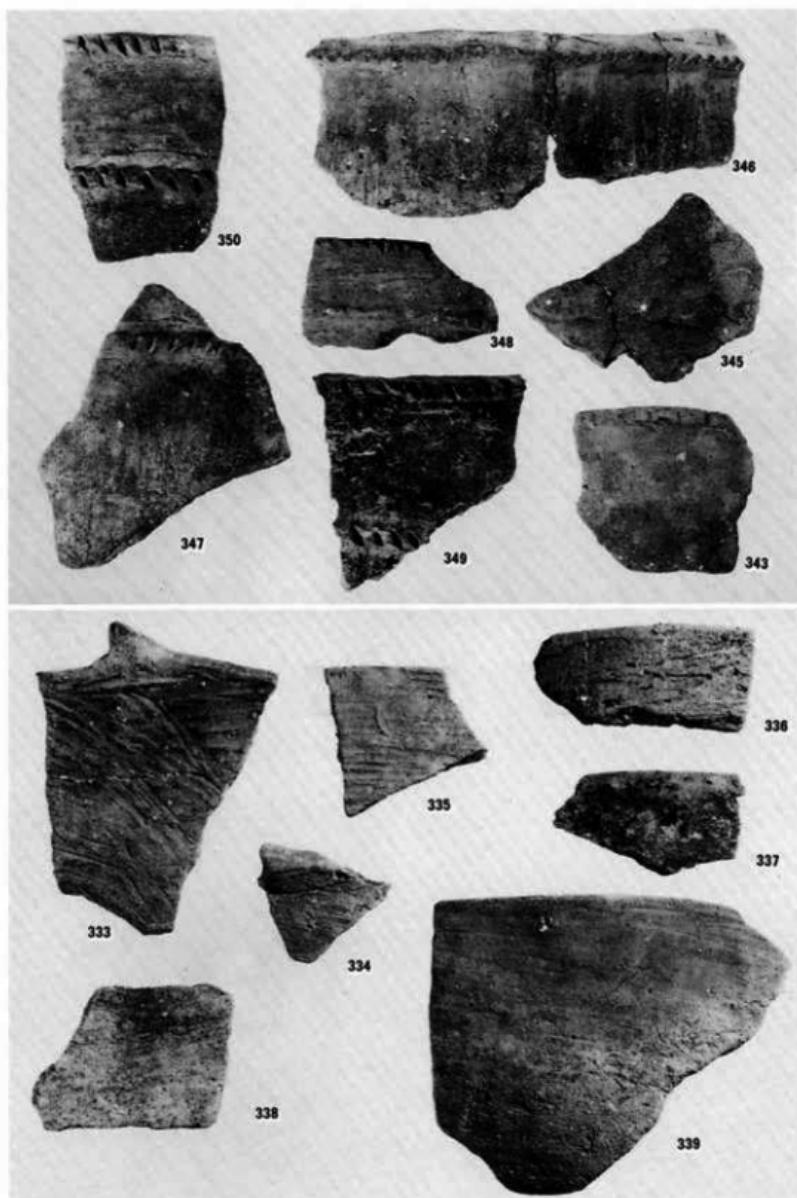


323

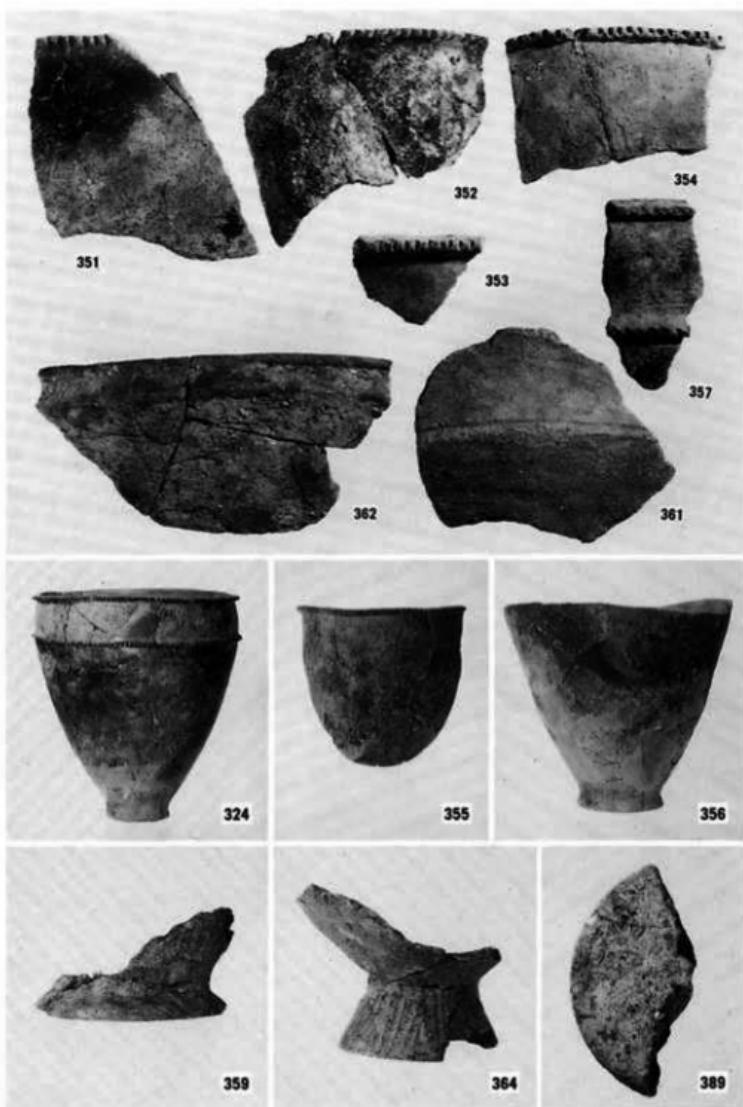


322

支石墓供獻土器 3 (少)



繩文晚期～弥生前期土器 1



網文晚期～弥生前期土器 2

324 S K21土壤、他S T04墳丘中ほか出土

(389 紡錘車)



371



373



372



374



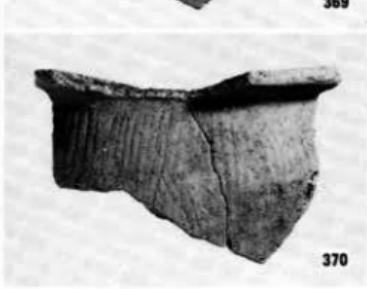
375



369



368



370

その他の弥生土器 371・372 (レ), 373~375 (レ), 368~370 (レ)

371—S C05, 372~375—S K16, 368~370—S T04塙丘

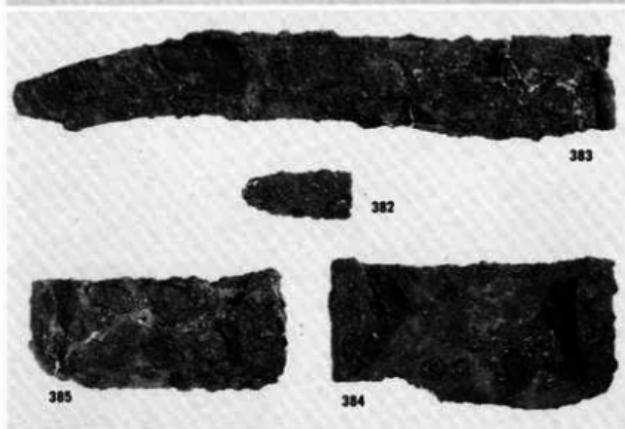


S J 13壺棺 (上) 365 上壺, 366 下壺

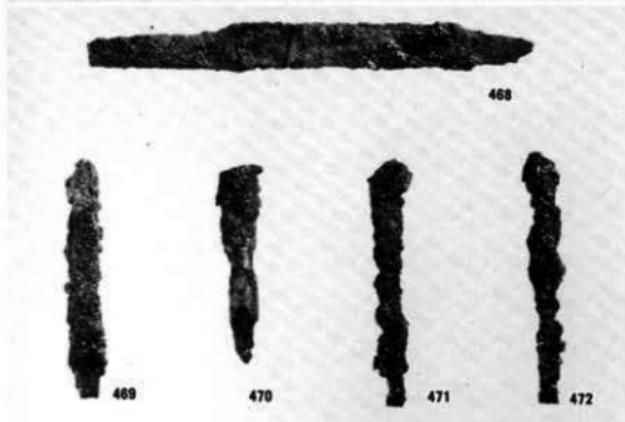




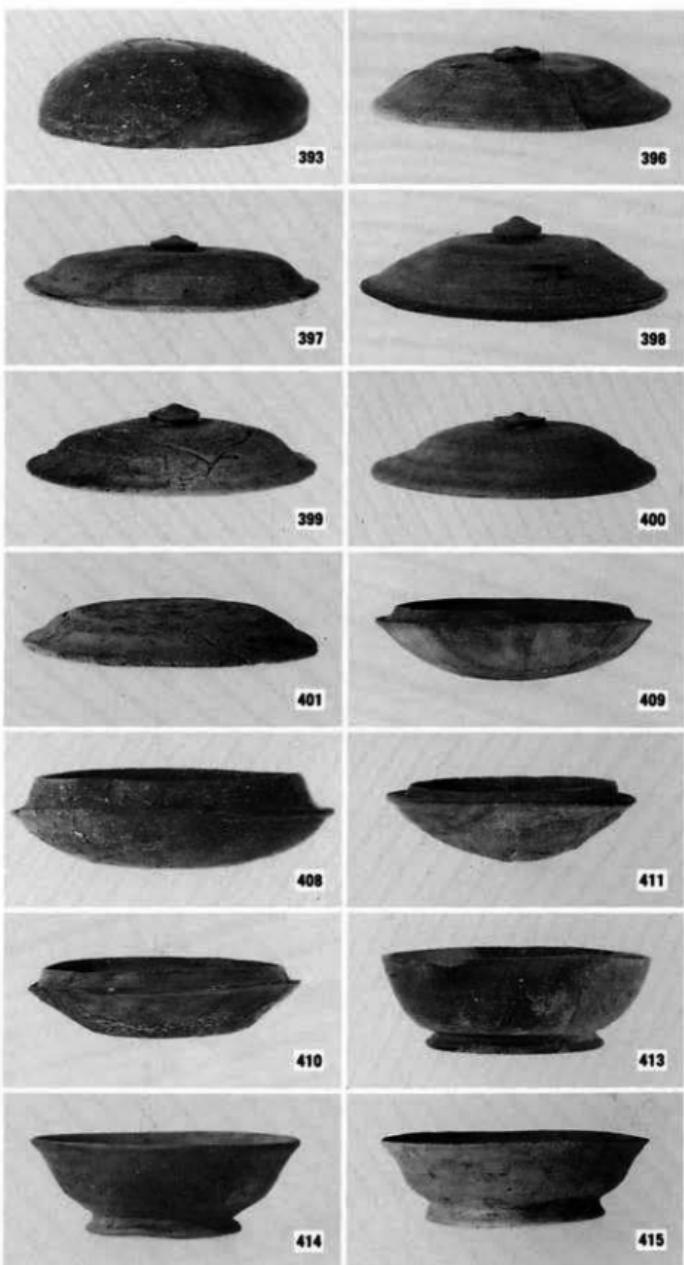
S J 14號棺墓出土  
小型內行花文鏡 (3分)



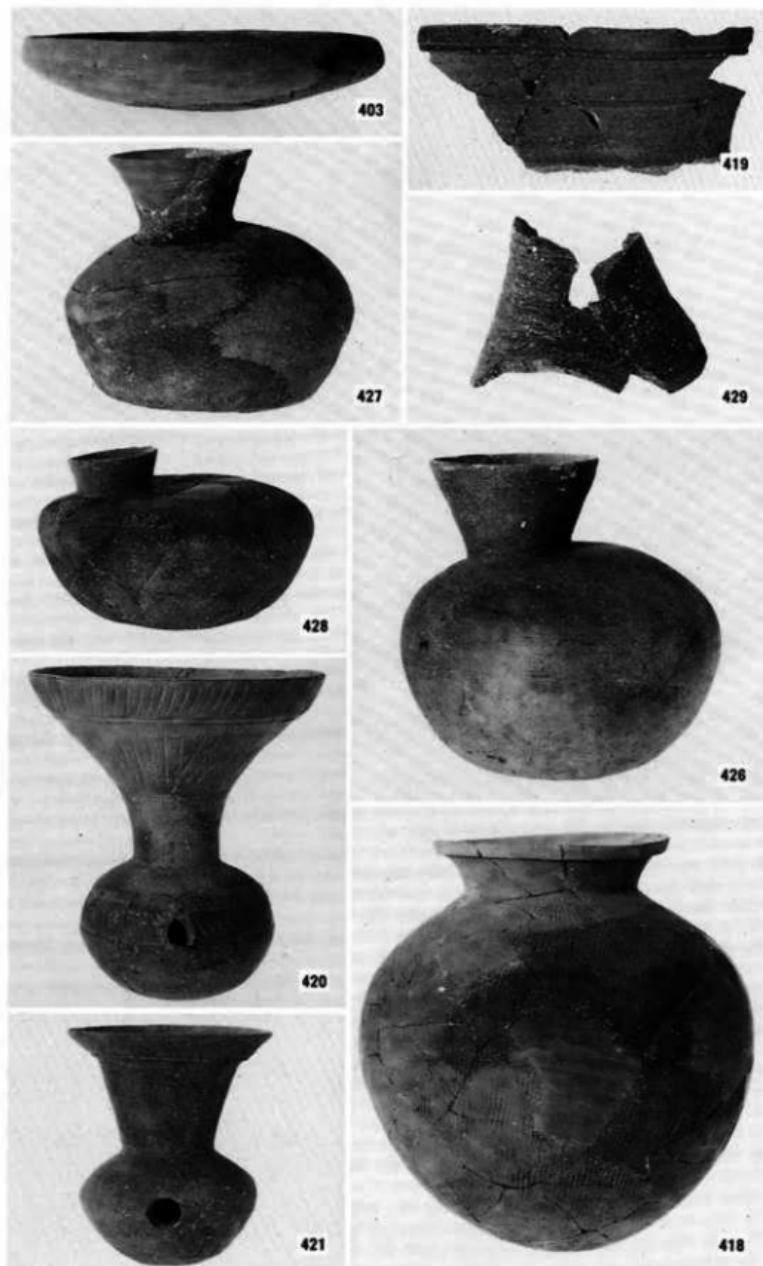
S K16土壤出土  
鐵器 (1分)



古墳出土  
鐵器 (1分)



古墳出土須恵器 1 坯 (少)



古墳出土須恵器 2 418 壺 (1/2), 他 (1/2)



422



423



424



425



463



464



465



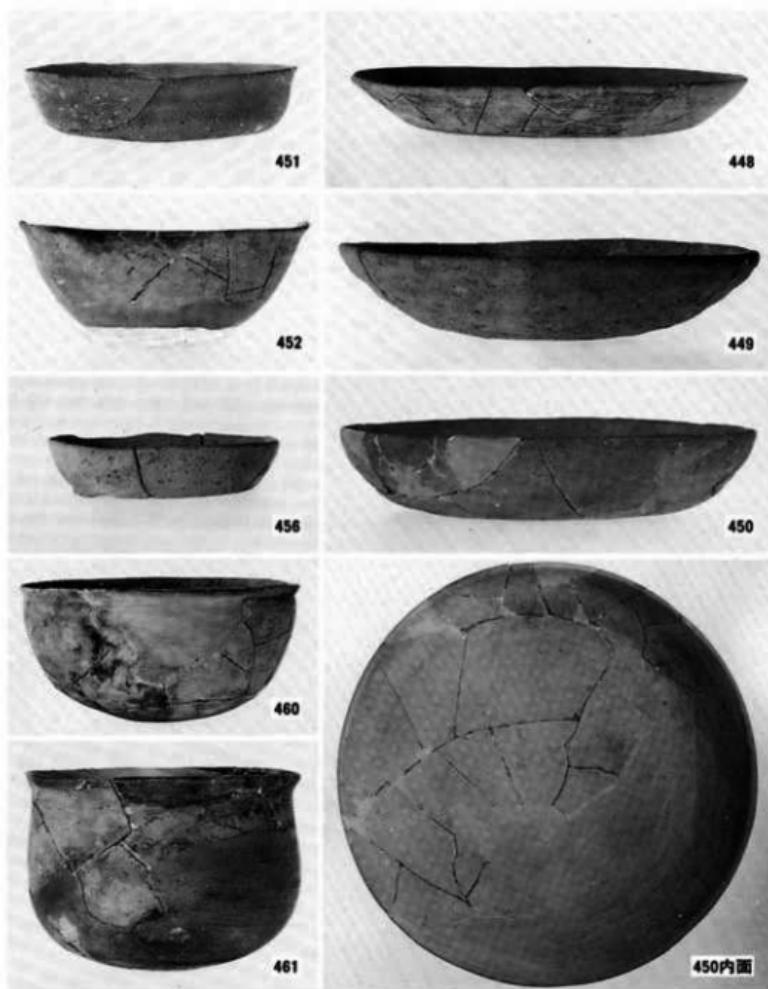
466

古墳出土須恵器 3

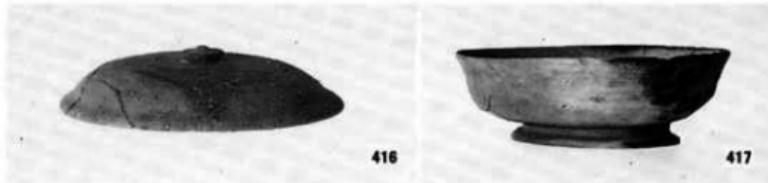
422～425 高環 (1/2)



462



古墳出土土師器 2 443~461 环・皿・盤・鉢 (少)



S P17土壤墓出土須恵器 (少)



S T04古墳墳丘下出土祭祀土器

430~435 土師器壺 (1/2)

436 須恵器壺 (1/2)



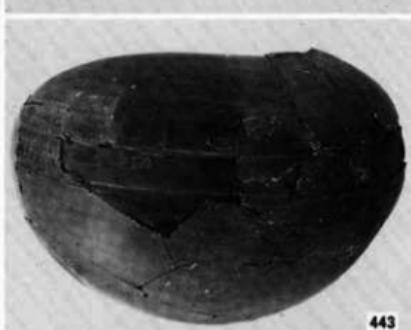
438



437



439



443



442



446



440



447

南外区古墳表採土器

437~443 須恵器

446・447 土師器

# 久 池 井 C 遺 跡



1



2

久池井C遺跡 1. I区全景〈東から〉

2. II区全景〈東から〉



1



2

久池井C遺跡

1. 久池井C遺跡と北向かいの春日遺跡

2. S-B13住居跡〈東南から〉

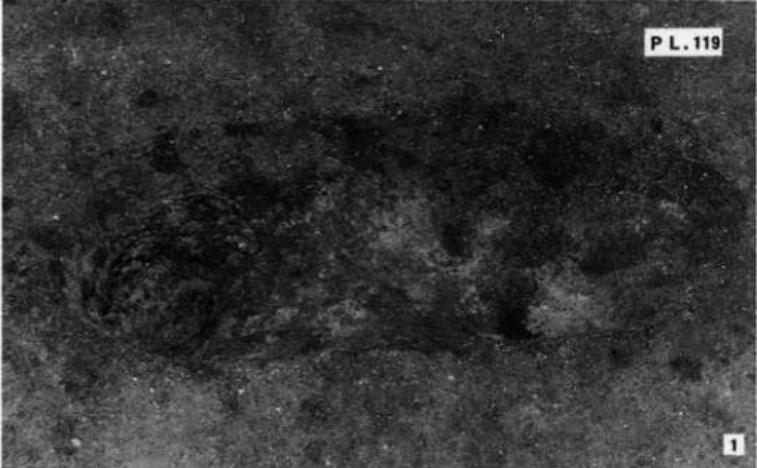


久池井C遺跡  
1. S B01住居跡〈東から〉  
2. S B14竪穴〈北東から〉



久池井C遺跡

1. S J 03塗棺墓〈西から〉
2. S P 02土壙墓〈東北から〉



1



2



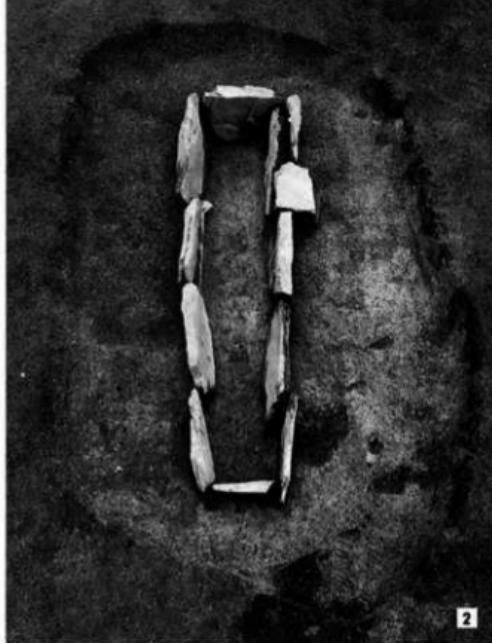
3

### 久池井C遺跡

1. S P05土壙墓  
〈東から〉
2. S P07土壙墓  
〈西から〉
3. S P10土壙墓  
〈北から〉



1



2

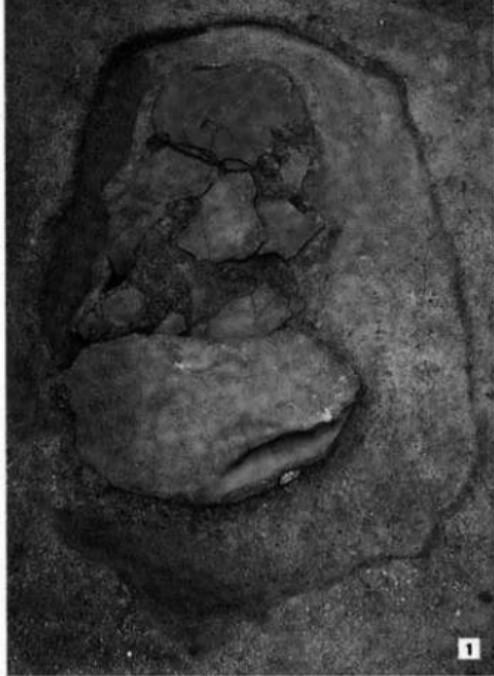


3

久池井C遺跡 1. S C04石棺墓一蓋〈南から〉

2. 同 石棺墓一身〈南から〉

3. S C09石棺墓



久池井C遺跡

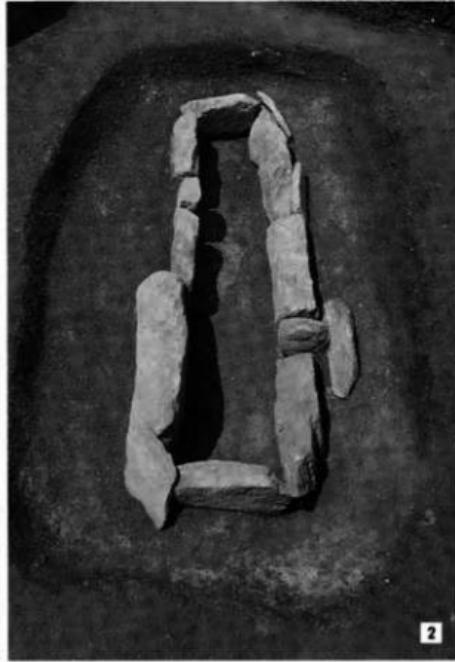
1. S C11石棺墓—粘土被覆状況〈北東から〉

2. 同 石棺墓—蓋〈北東から〉

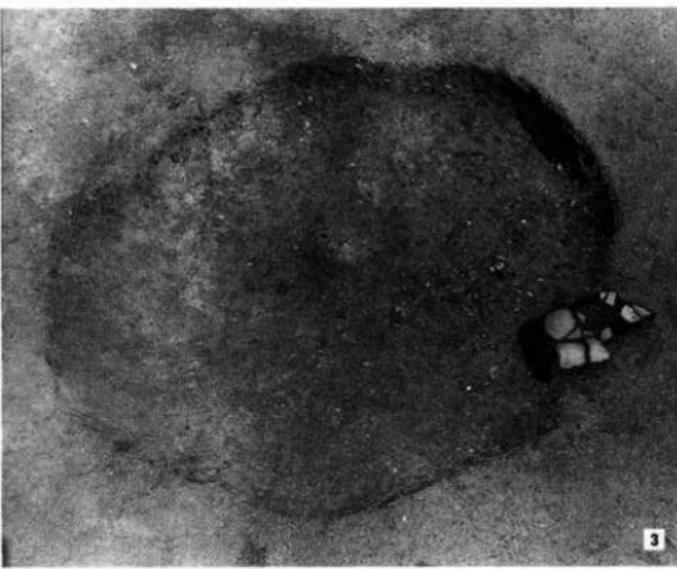
3. 同 石棺墓一身〈西北から〉



1



2



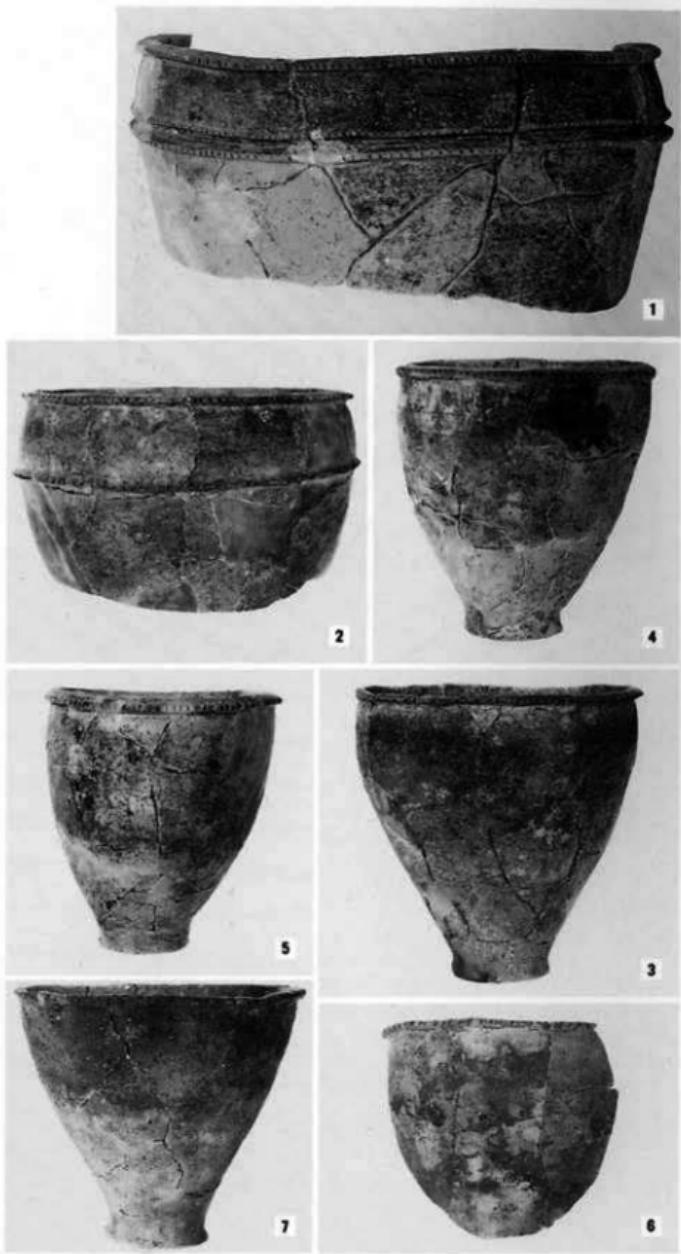
3

久池井C遺跡

1. SC12石棺墓一蓋〈北東から〉

2. 同 石棺墓一身〈北東から〉

3. SK15土壤〈西南から〉



S B01窪穴出土土器 1 甕 (1), 2~7 甕 (2)



S B01堅穴出土土器 2

12 壺 (1/4)

13~16 盖 (1/2)

17 蓋 (1/2)

20 鉢 (1/2)

24・25 高坏 (1/2)

27 紡錘車 (1/2)

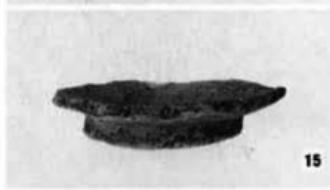
12



13



14



15



16



20



17

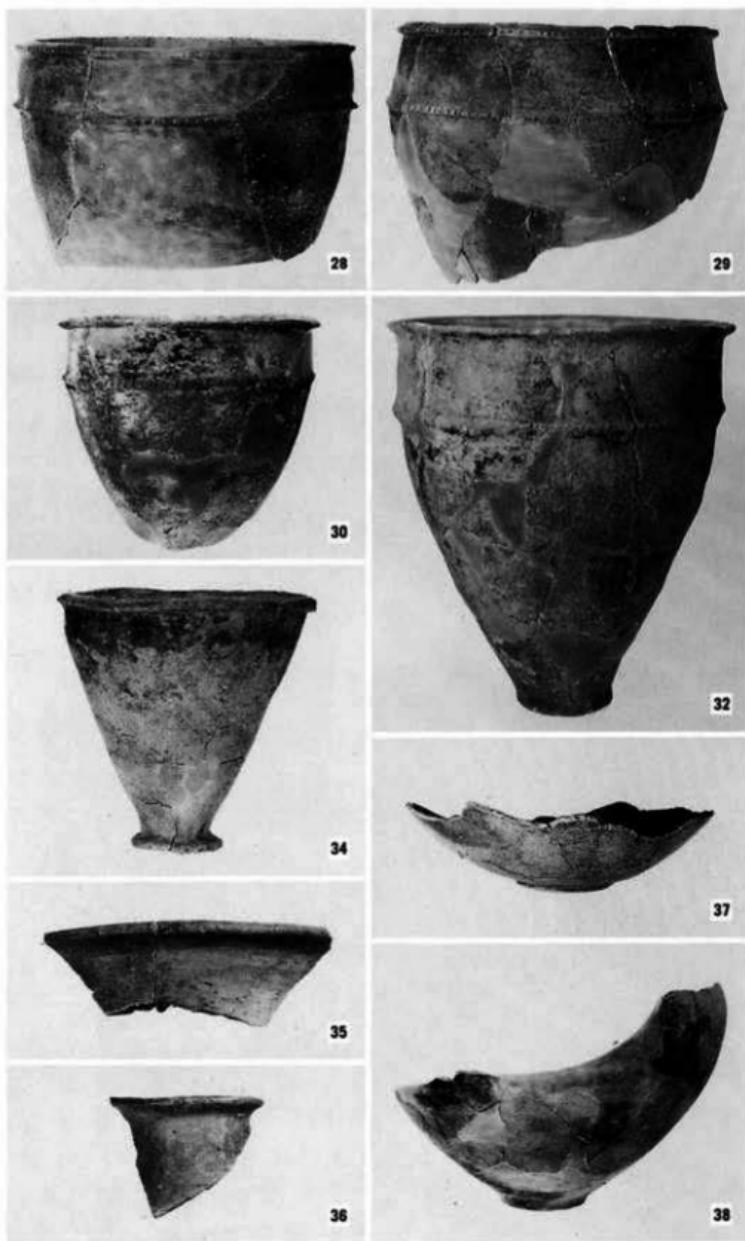


24



25

27



S B14竖穴出土土器 28~34 壺 (◎) 37・38 壺 (◎)



39



40

S J 03壺棺 (1/2)

S P 07土壤墓出土鉄劍 (1/2)



41



43



46



44



48

S B 13住居跡出土土器 41 壺 (1/2), 43~48 壺・坏 (1/2)

# 久池井一本松遺跡



久池井一本松遺跡 1 遺跡全景〈北から〉航空写真

2 遺跡全景〈西から〉航空写真



1



2

久池井一本松遺跡 1 II区全景〈西から〉

2 II区全景〈東から〉

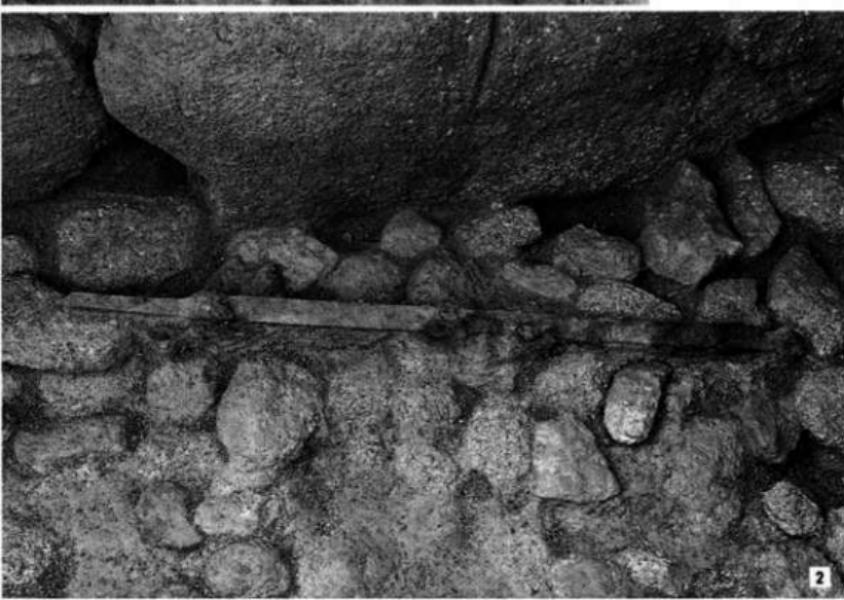


久池井一本松遺跡 1 S T01古墳全景〈南から〉  
2 S T01古墳側壁側盛土〈南から〉  
3 S T01古墳奥壁側盛土〈西から〉



久池井一本松遺跡

- 1 ST01古墳石室〈南から〉
- 2 ST01古墳石室内  
鉄劍出土状況〈北西隅〉





久池井一本松遺跡

- 1 ST02古墳石室〈南から〉
- 2 ST03古墳石室〈南から〉



1

2



1



2

久池井一本松遺跡

- 1 ST34古墳全景〈南から〉
- 2 ST34古墳石室〈南から〉



久池井一本松遺跡 1 ST35古墳全景〈南から〉

2 ST35古墳石室〈南から〉



1



久池井一本松遺跡

- 1 ST 41古墳石室〈南から〉
- 2 ST 42古墳石室〈南から〉

2



久池井一本松遺跡 1 ST 44古墳石室〈南から〉

2 ST 45古墳石室〈南から〉



久池井一本松遺跡

- 1 S P 43木棺墓  
〈西から〉
- 2 S P 43木棺墓副葬品  
出土状況〈西から〉

1



2



1



2



3



4

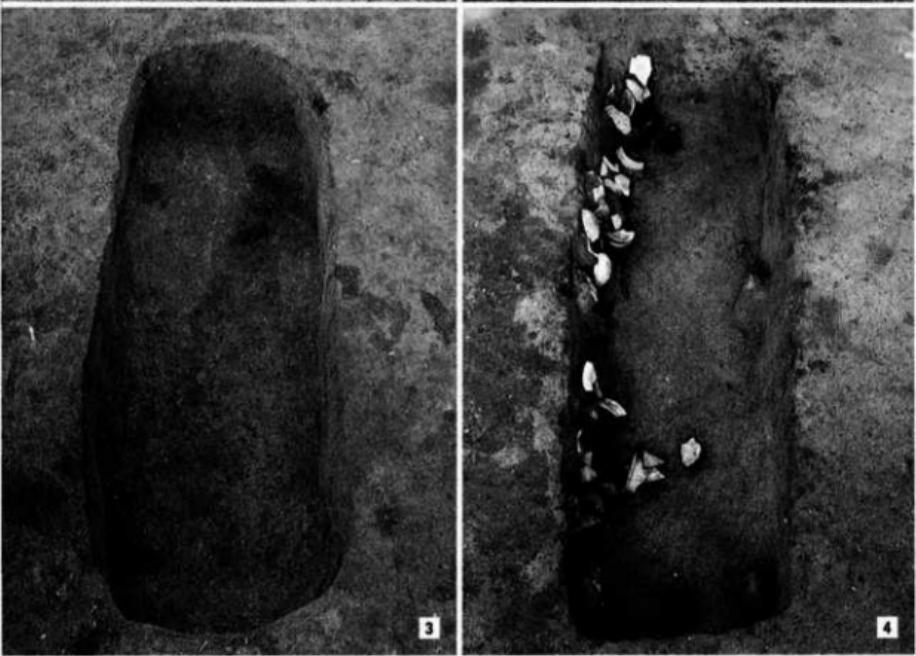
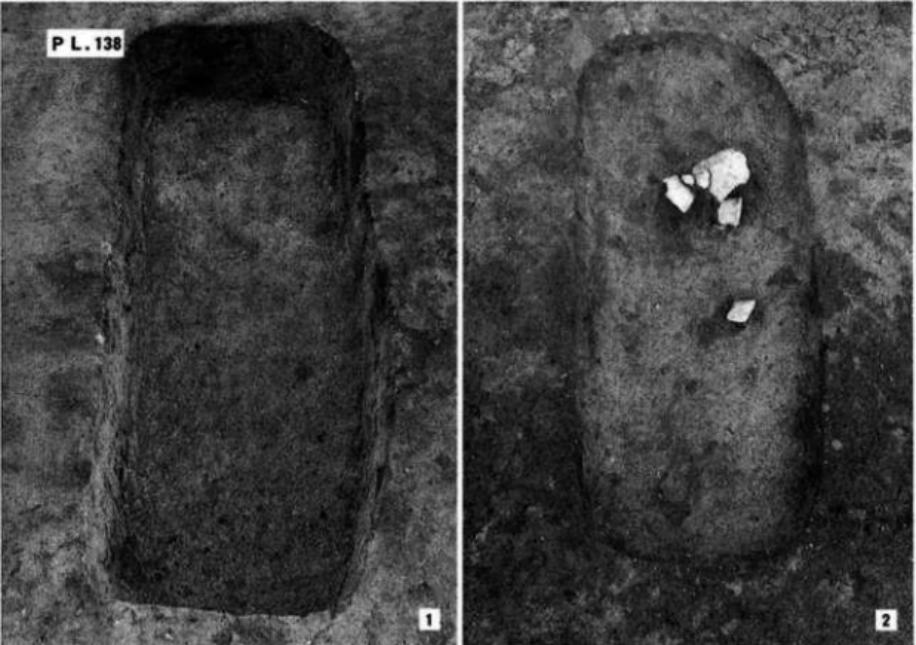
## 久池井一本松遺跡

1 S P06土壤墓・S B16堅穴〈北から〉

3 S P08土壤墓〈南西から〉

2 S P07土壤墓〈東から〉

4 S P09土壤墓〈西から〉



久池井一本松遺跡

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1 S P12土壤墓〈西から〉   | 2 S P13土壤墓〈南南西から〉 |
| 3 S P14土壤墓〈南南西から〉 | 4 S P15土壤墓〈南から〉   |



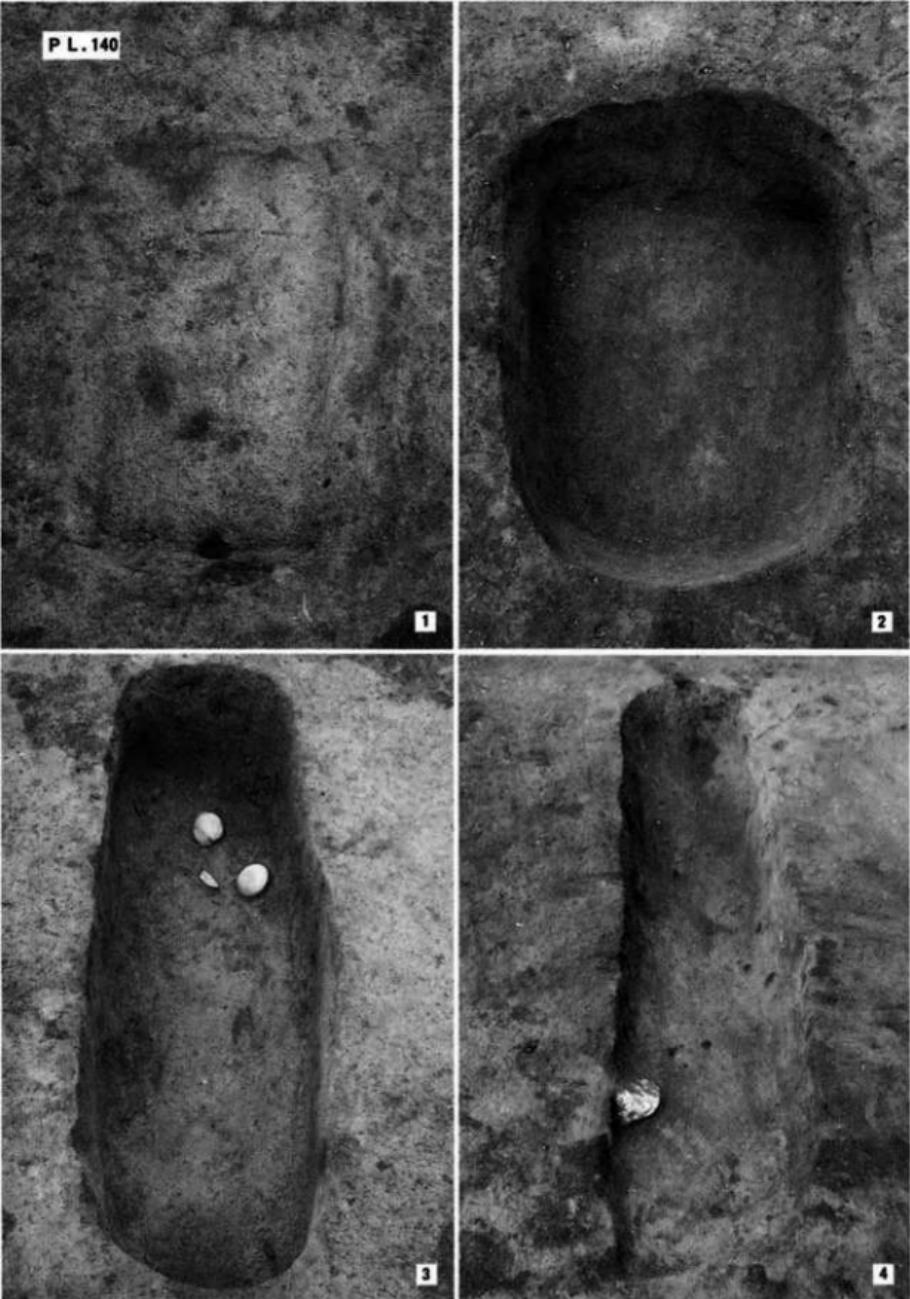
久池井一本松遺跡

1 SP17土壤墓〈西南から〉

3 SK19土壤〈北西から〉

2 SK20土壤〈南から〉

4 SK21土壤〈西から〉



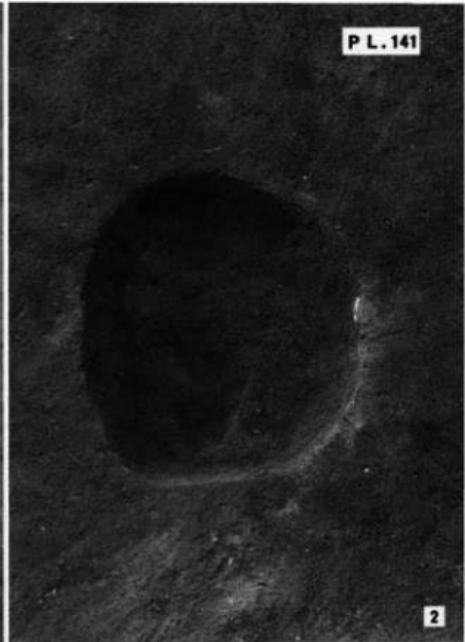
久池井一本松遺跡

1 SK23土壤〈北から〉  
3 SK25土壤墓〈南から〉

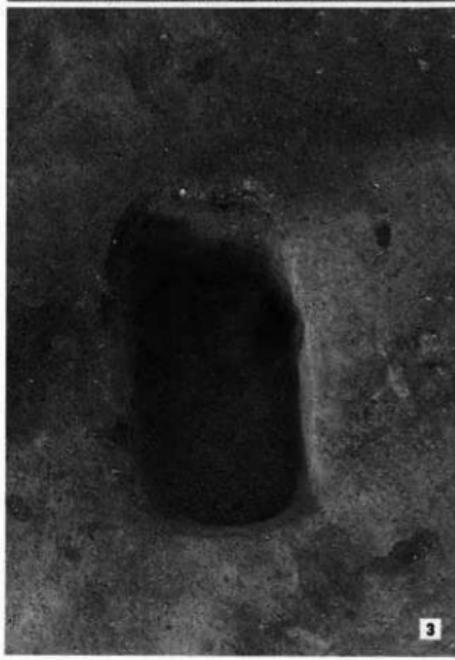
2 SK24土壤〈東から〉  
4 SP26土壤墓〈南から〉



1



2



3



4

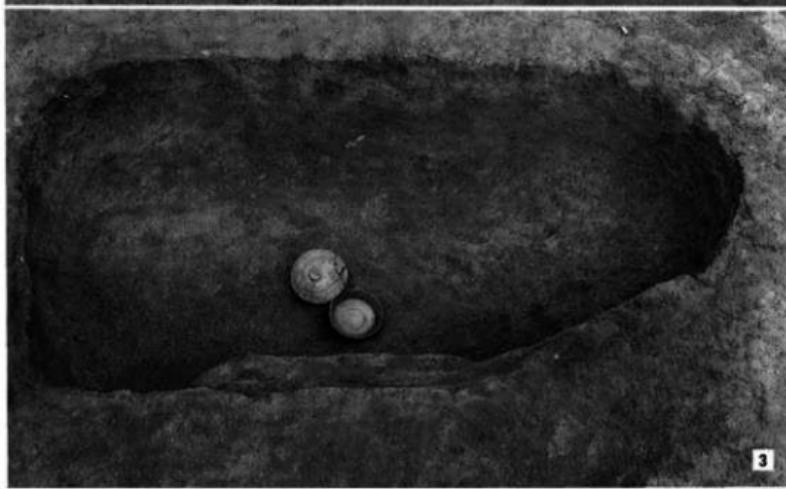
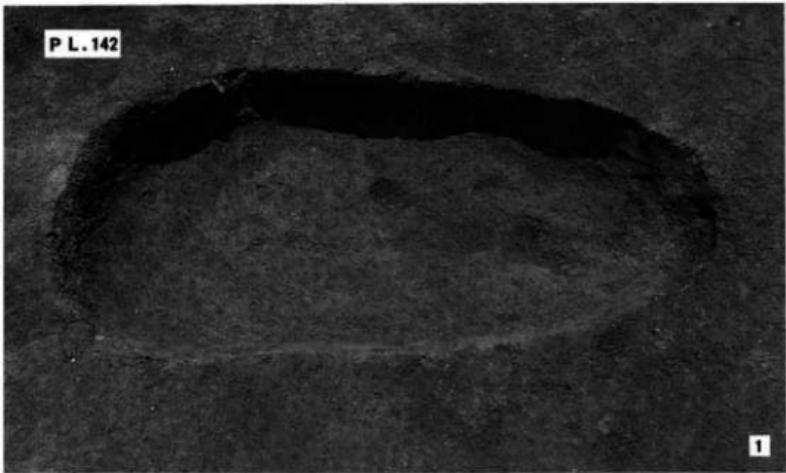
## 久池井一本松遺跡

1 S P27土壤墓〈南から〉

3 S P29土壤墓〈南から〉

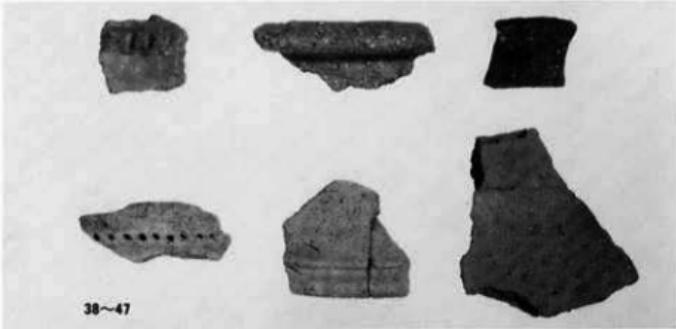
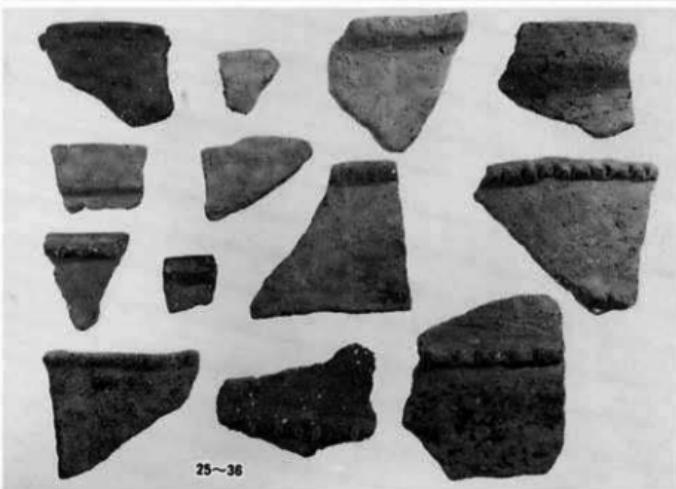
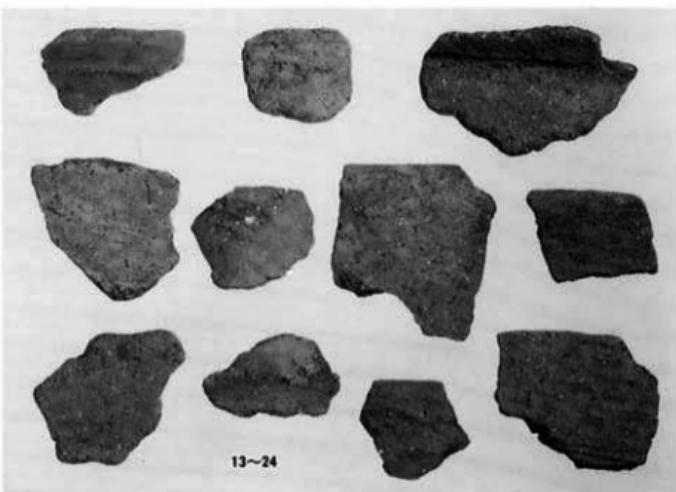
2 S P28土壤墓〈東から〉

4 S P30土壤墓〈東から〉

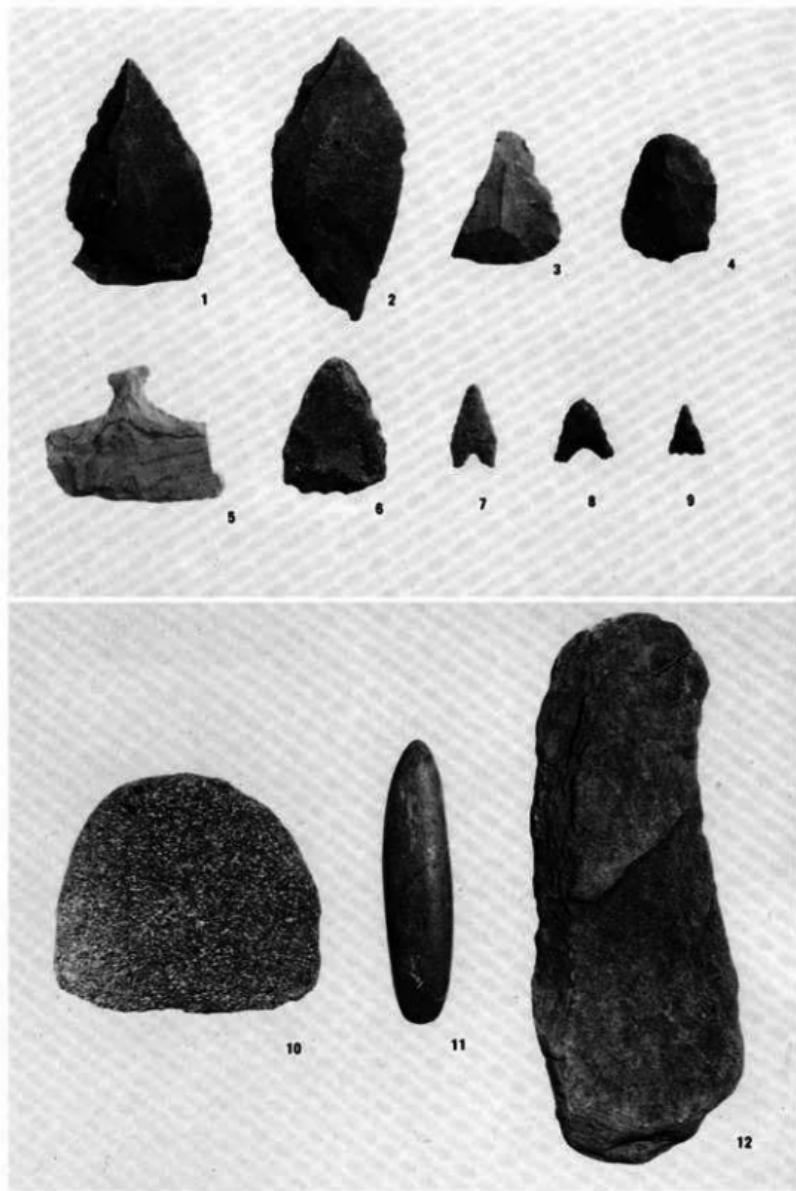


久池井一本松遺跡

- 1 SP36土壤墓  
〈北から〉
- 2 SP37土壤墓  
〈北から〉
- 3 SP38土壤墓  
〈東から〉



圓文晚期～  
弥生前期土器



繩文時代石器



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



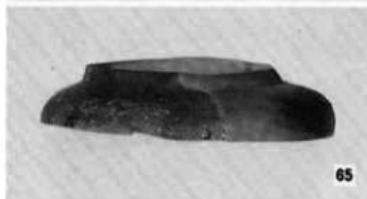
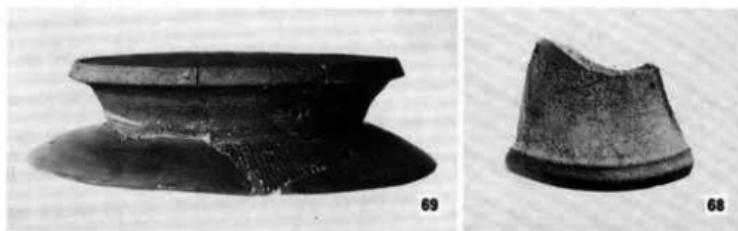
59



63

古墳出土須恵器 1

坏 (少)



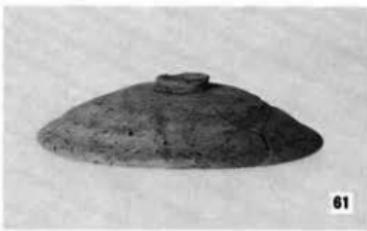
古墳出土須恵器 2

69 瓢 (1/4)

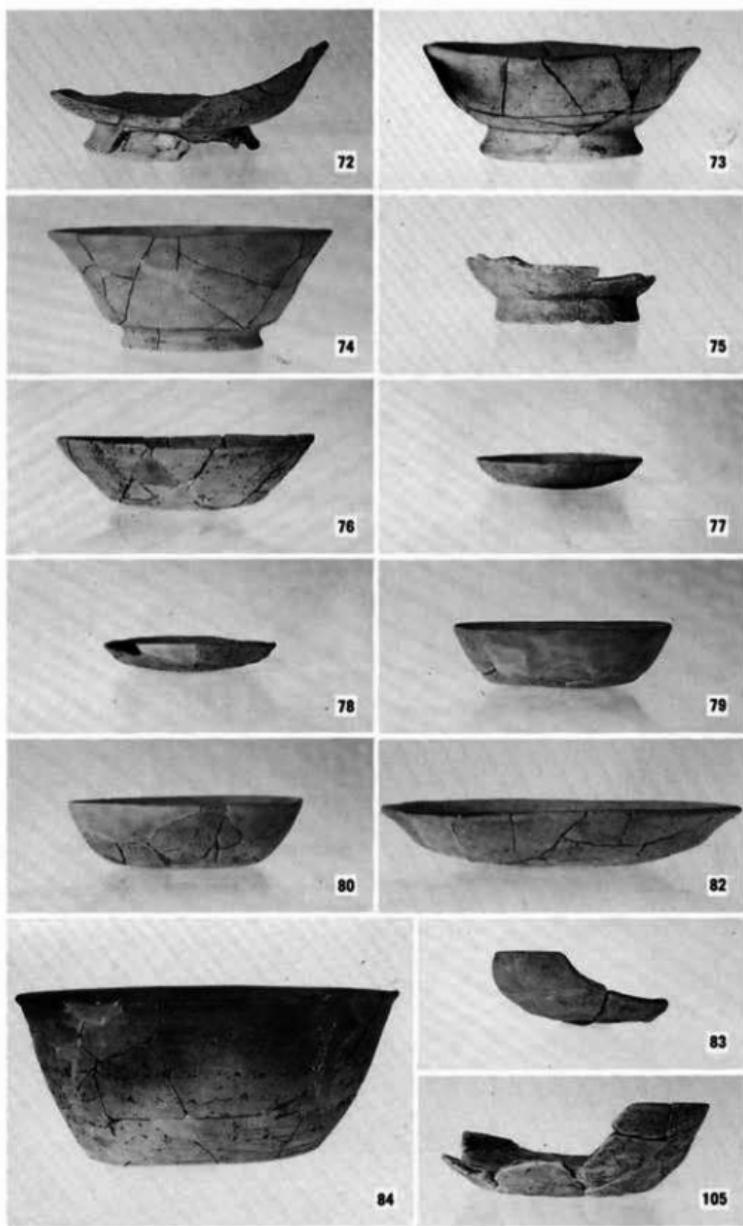
68 高環脚 (1/2)

65・70 瓢 (1/2)

60 高環 (1/2)



S P 38土壤墓出土須恵器 坯 (1/2)



古墳出土土師器 84 鉢 (1/2), 他坏 (1/2)



87



88



89



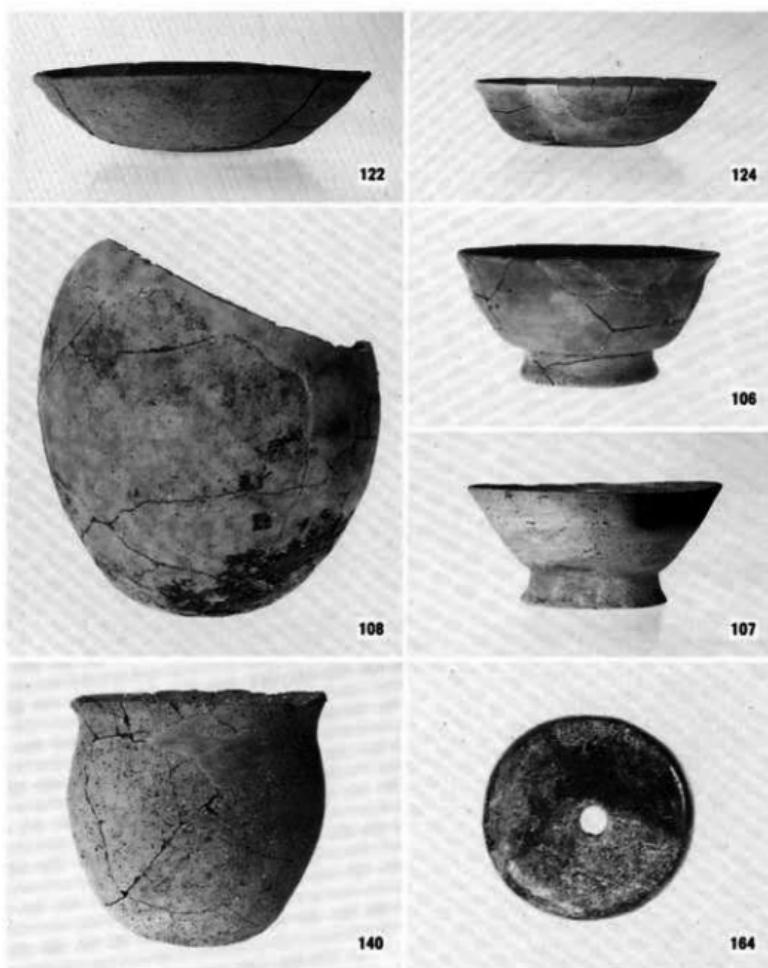
90



91



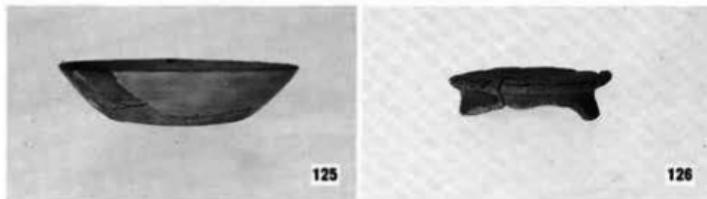
92



S P06土壤墓およびS B16竪穴出土遺物

S P06 106・107・122・124 坯 (引)

S B16 108・140 織



S K31土壤出土土器 坯 (引)



109



110



111



112



113



114



115



116

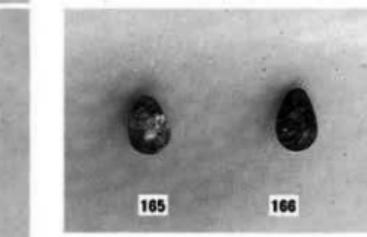


118

S P 15木棺墓出土土器

109~117 壺 (乙)

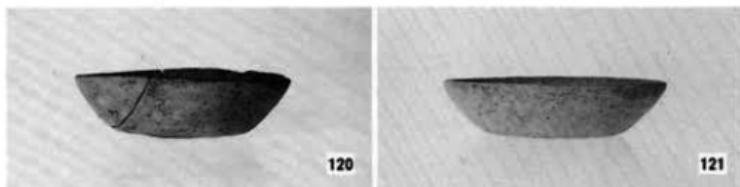
118・119 壺 (乙)



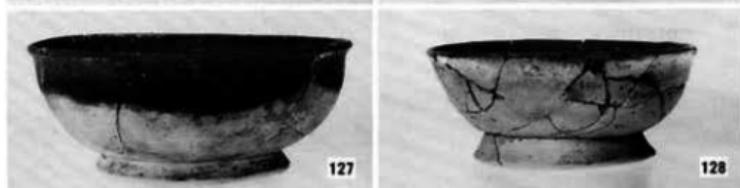
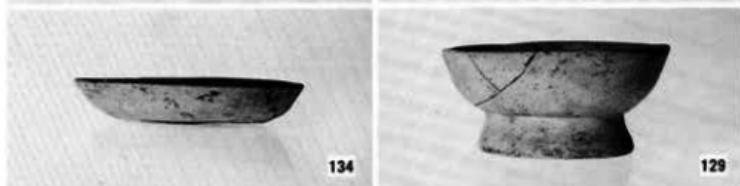
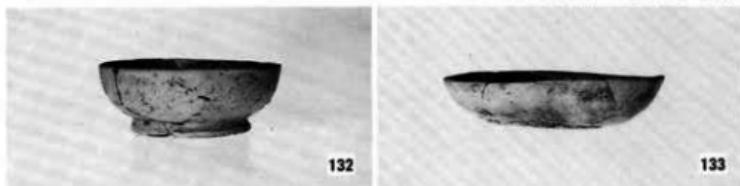
S P 33土壤墓出土垂飾

165

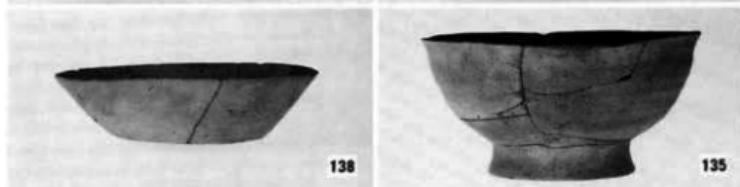
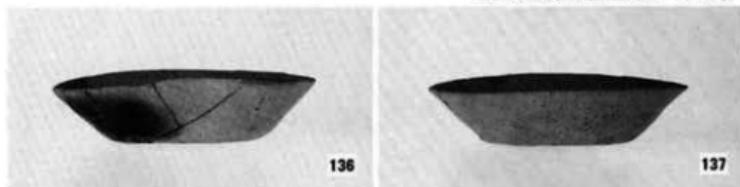
166



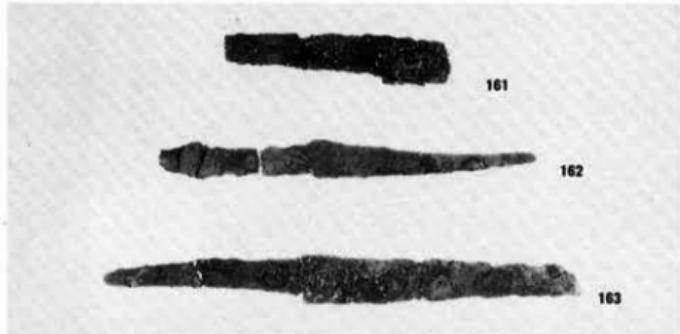
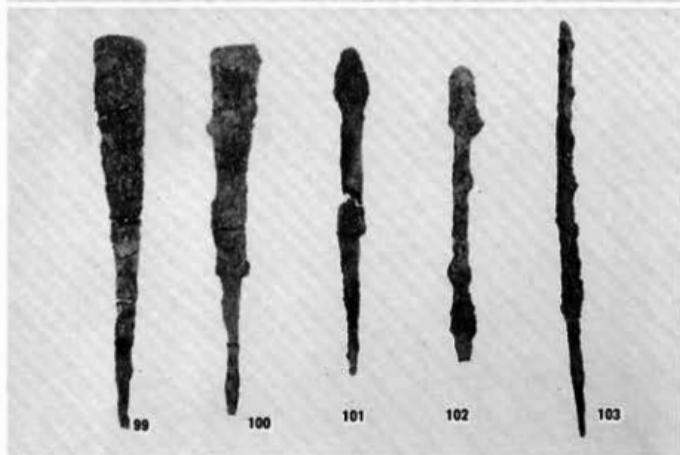
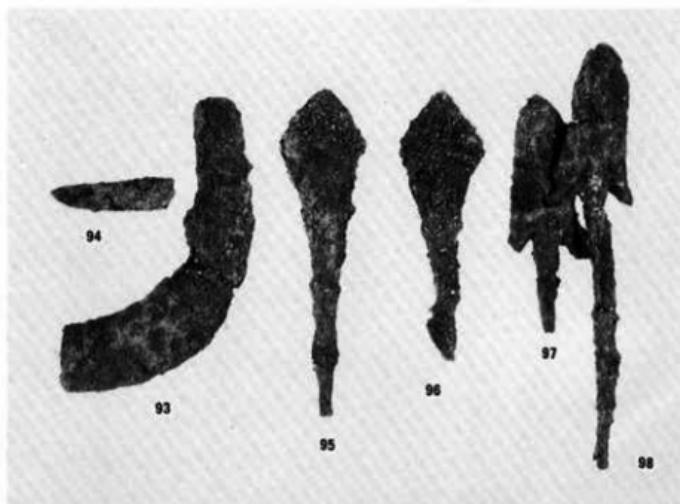
S P 25 土塼墓出土土師器 壺 (1/2)



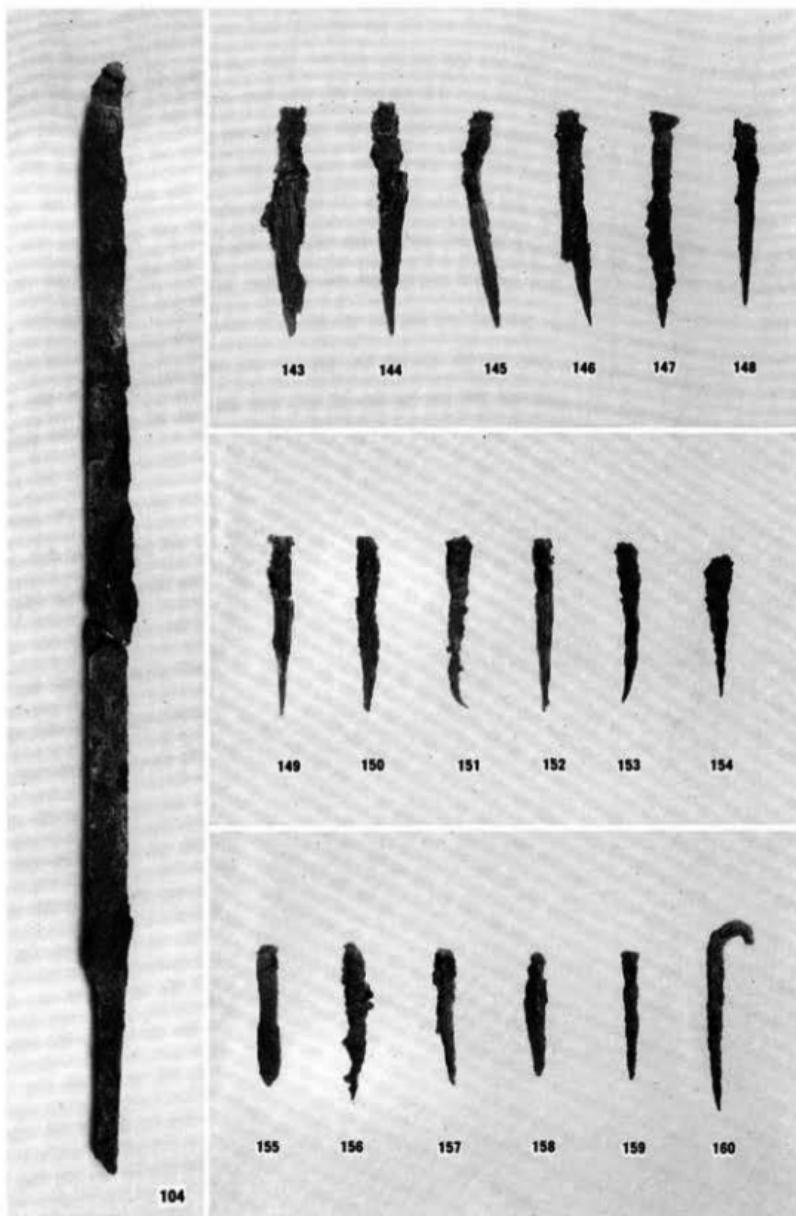
S P 30 土塼墓出土土師器 壺 (1/2)



S P 43 木棺墓出土土師器 壺 (1/2)



古墳および土壤墓出土鉄器 1 (少)



古墳および土壤基・木棺墓出土鉄器 2

104 鉄刀 ( $\frac{1}{2}$ ) — S T01棺釘 ( $\frac{1}{2}$ ) 143~154—S P 15, 155~158—S P 25

159—S P 38, 160—S P 43

佐賀県文化財調査報告書 第91集

## 礫石遺跡

九州横断自動車道関係(9)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月30日 印刷  
平成元年3月31日 発行

編集 佐賀県教育庁文化課  
発行 佐賀市城内1丁目1-42

印刷 有限会社 大同印刷  
佐賀市天神1丁目1番32号

